

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第11集

矢加部町屋敷遺跡Ⅲ

福岡県柳川市矢加部所在遺跡の調査

2011

福岡県教育委員会

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第11集

や か べ まち や し き
矢加部町屋敷遺跡Ⅲ

福岡県柳川市矢加部所在遺跡の調査

序

ここに報告する矢加部町屋敷遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴って発掘調査された遺跡です。

本書は平成18年度と19年度に発掘調査を実施した、福岡県柳川市大字矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡の記録で、矢加部町屋敷遺跡調査報告の3冊目に当たります。

本遺跡は江戸時代の街道である「久留米柳川往還道」沿いに位置しており、本書に報告した調査区では久留米柳川街道の東側溝が発見されました。このほかにも、町屋跡の遺構や鑄造関係遺物が発見され、町矢加部集落の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財保護思想の普及の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成23年3月31日

福岡県教育委員会教育長
杉光 誠

例言

1. 本書は平成18(2006)・19(2007)年度に有明海沿岸道路建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県柳川市矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡の記録で、有明海沿岸道路建設関係埋蔵文化財調査報告では第11集、矢加部町屋敷遺跡調査報告書としては3冊目に当たる。
2. 本書では4次調査西区の遺物と東区の遺構・遺物、5次調査の遺構を報告し、来年度5次調査の遺物と、1次調査を報告する予定である。
3. 本遺跡の発掘調査・整理報告は国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。
4. 本書に掲載した遺構写真は秦 憲二が撮影した。なお、空中写真は九州航空株式会社に委託した。
5. 本書に掲載した遺構図は秦 憲二が作成し、荒卷静美・古賀富士子・原秀美が補助した。なお、掲載した遺構図の方位は全て日本座標の座標北(G.N.)である。
6. 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館に保管している。
7. 本書は、秦が執筆・編集を行った。

本文目次

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

I. はじめに	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査の組織	4
II. 位置と環境	5
III. 調査の内容	7
1. 調査の概要	7
2. 4次調査西区の出土遺物	7
3. 4次調査東区の調査	129
1) 遺構	129
a) 土坑	129
b) 溝状遺構	134
2) 遺物	135
4. 5次調査	177
1) 遺構	177
a) 土坑・大土坑	177
b) 溝状遺構	187
IV. まとめ	188

図版目次

図版 1	4次調査西区出土土器・陶磁器1
図版 2	4次調査西区出土土器・陶磁器2
図版 3	4次調査西区出土土器・陶磁器3
図版 4	4次調査西区出土土器・陶磁器4
図版 5	4次調査西区出土土器・陶磁器5
図版 6	4次調査西区出土土器・陶磁器6

図版 7	4次調査西区出土瓦・土製品・ガラス製品	
図版 8	4次調査西区出土土製品	
図版 9	4次調査西区出土金属製品	
図版10	4次調査西区出土砥石	
図版11	4次調査西区出土石・木製品	
図版12	4次調査西区出土木・ガラス・プラスチック製品	
図版13	1. 矢加部町屋敷遺跡4次東区全景（上空から）	2. 同上西部（上空から）
図版14	1. 94号土坑（南から）	2. 94号土坑土層断面（南から）
	3. 95号土坑（南から）	4. 95号土坑土層断面（南から）
	5. 96号土坑（西から）	6. 96号土坑土層断面（西から）
	7. 97号土坑（南から）	8. 同上土層断面（南から）
	9. 98号土坑（南西から）	10. 同上土層断面（南から）
	図版15	1. 99号土坑（東から）
3. 101号土坑土層断面（南から）		
図版16	1. 101号土坑竹柵出土状況（西から）	2. 同左（北から）
	3. 101号土坑（北西から）	4. 10号溝状遺構土層断面（北から）
図版17	4次調査東区出土土器・陶磁器・瓦	
図版18	4次調査東区出土木・土・金属製品	
図版19	4次調査東区出土土製品・磁器	
図版20	4次調査西区出土陶磁器・土製品・ガラス製品	
図版21	1. 矢加部町屋敷遺跡5次調査北半全景（上空から）	
	2. 同上南半全景（上空から）	3. 同上西部（上空から）
図版22	1. 1号土坑（上空から）	2. 2号土坑（東から）
	3. 3号土坑（北東から）	4. 5号土坑（北西から）
	5. 7号土坑（上空から）	6. 7号土坑土層断面（東から）
図版23	1. 8号土坑（南西から）	2. 9号土坑（西から）
	3. 10号土坑（南西から）	4. 11号土坑（南東から）
	5. 12号土坑北東部（西から）	6. 12号土坑土層断面（北東から）
	7. 13号土坑（北西から）	
図版24	1. 14号土坑（南東から）	2. 14号土坑土層断面（南東から）
	3. 15号土坑（南東から）	4. 16号土坑北西部（北東から）
	5. 16号土坑土層断面（北東から）	6. 17号土坑（南から）
	7. 17号土坑土層断面（南から）	8. 18号土坑（北西から）
図版25	1. 20号土坑（北から）	2. 21号土坑（北から）
	3. 22号土坑（北から）	4. 23号土坑（北東から）
	5. 24号土坑（東から）	6. 24号土坑土層断面（北から）
	7. 25号土坑（南東から）	8. 1号溝状遺構土層断面（北西から）
図版26	1. 1号大土坑（上空から）	2. 同上（北西から）

挿図目次

第1図	矢加部町屋敷遺跡調査範囲図(1/4,000)	1
第2図	有明海沿岸道路調査地点図(1/50,000)	2
第3図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	6
第4図	1～4号土坑出土土器・陶磁器実測図(7・10・12・13・15～17は1/4、他は1/3)	8
第5図	5～8B号土坑出土土器・陶磁器実測図(21は1/4、他は1/3)	10
第6図	8B～12号土坑出土土器・陶磁器実測図(1は1/12、5は1/4、他は1/3)	12
第7図	12・13・16・17号土坑出土土器・陶磁器実測図(1・17は1/4、他は1/3)	14
第8図	18～21・24号土坑出土土器・陶磁器実測図(3・5は1/4、他は1/3)	15
第9図	25～27・30号土坑出土土器・陶磁器実測図(他は1/3)	16
第10図	33号土坑出土土器・陶磁器実測図1(1/3)	18
第11図	33号土坑出土土器・陶磁器実測図2(1/3)	19
第12図	33号土坑出土土器・陶磁器実測図3(5・10～12は1/4、13は1/6、他は1/3)	20
第13図	35～37・39号土坑出土土器・陶磁器実測図(4は1/4、9・10は1/12、他は1/3)	22
第14図	40・42～48号土坑出土土器・陶磁器実測図(3・17は1/4、他は1/3)	24
第15図	49～51号土坑出土土器・陶磁器実測図(4・12～14は1/4、他は1/3)	26
第16図	52号土坑出土土器・陶磁器実測図1(1/3)	28
第17図	52号土坑出土土器・陶磁器実測図2(8・9・11～14は1/4、他は1/3)	30
第18図	53号土坑出土土器・陶磁器実測図(13は1/4、他は1/3)	32
第19図	54～56号土坑出土土器・陶磁器実測図(6・7・12・13は1/4、他は1/3)	34
第20図	57・58・60～62号土坑出土土器・陶磁器実測図(16～18は1/4、他は1/3)	36
第21図	64号土坑出土土器・陶磁器実測図1(14・15は1/4、他は1/3)	38
第22図	64号土坑出土土器・陶磁器実測図2(3・5・6は1/4、他は1/3)	40
第23図	66・67号土坑出土土器・陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3)	41
第24図	67～69号土坑出土土器・陶磁器実測図(1・15・17・18は1/4、他は1/3)	42
第25図	70・71号土坑出土土器・陶磁器実測図(7・11～14は1/4、他は1/3)	44
第26図	73・75・76号土坑出土土器・陶磁器実測図(8・12・13・15は1/4、他は1/3)	46
第27図	77・79・80号土坑出土土器・陶磁器実測図(3・8・9・11は1/4、他は1/3)	47
第28図	81・82・84号土坑出土土器・陶磁器実測図(3～5・14・15は1/4、他は1/3)	48
第29図	84号土坑出土土器・陶磁器実測図(7～9は1/4、他は1/3)	50
第30図	86～88号土坑出土土器・陶磁器実測図(3・6は1/4、他は1/3)	52
第31図	88号土坑出土土器・陶磁器実測図(5・9～11は1/4、他は1/3)	54
第32図	89～91号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/4、他は1/3)	58
第33図	2号大土坑出土磁器実測図(1/3)	60
第34図	2号大土坑出土土器・陶磁器実測図(3～6・8は1/4、他は1/3)	62
第35図	2・3号大土坑出土土器・陶磁器実測図(15・17は1/4、他は1/3)	64
第36図	4・4B号大土坑出土土器・陶磁器実測図(16・18は1/4、他は1/3)	66

第37図	4B・5・6号大土坑・2号焼土坑出土土器・陶磁器実測図(1・8・10は1/4、他は1/3) …	68
第38図	1・2・4号埋甕出土土器・陶磁器実測図(1は1/4、4・10は1/8、他は1/3) ……………	69
第39図	5・6・8・9号埋甕出土土器・陶磁器実測図(1・2・7・8は1/6、他は1/3) ……………	71
第40図	10号埋甕出土土器・陶磁器実測図(7・8は1/4、9は1/12、他は1/3) ……………	72
第41図	4号井戸出土土器・陶磁器実測図(4～6は1/4、他は1/3) ……………	73
第42図	1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(12は1/4、他は1/3) ……………	76
第43図	1・2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1～3・8は1/4、4は1/6、他は1/3) …	78
第44図	4・5・7・9・10号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(8・16は1/4、10・12は1/12、他は1/3) …	79
第45図	ピット出土土器・陶磁器実測図1(1/3) ……………	82
第46図	ピット出土土器・陶磁器実測図2(4・6は1/4、5は1/6、他は1/3) ……………	84
第47図	遺構検出面出土土器・陶磁器実測図(10～13は1/4、他は1/3) ……………	85
第48図	上層整地層出土胞衣壺使用土瓶・急須実測図(1/3) ……………	86
第49図	上層整地層・上層包含層・客土層出土土器・陶磁器実測図(1/3) ……………	88
第50図	黒色土包含層出土陶磁器実測図(1/3) ……………	90
第51図	黄灰色土・灰褐色土包含層出土土器・陶磁器実測図(10・11は1/4、他は1/3) ……………	92
第52図	出土地不明・攪乱出土陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3) ……………	94
第53図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土土師質瓦実測図(1/6) ……………	96
第54図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土瓦実測図(8・9・10-1は1/3、他は1/6) ……	97
第55図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土土製品実測図(16・17は1/4、他は1/3) ……………	98
第56図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土土製品・ガラス製品実測図(1/3) ……………	100
第57図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土鑄造関係土製品実測図(24～29は1/4、他は1/3) …	102
第58図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土窯道具実測図(1/3) ……………	104
第59図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土金属器・骨角器実測図(1/3) ……………	106
第60図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土銭実測図(1/2) ……………	108
第61図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土石製品実測図1(1/3) ……………	110
第62図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土石製品実測図2(1/3) ……………	112
第63図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土石製品実測図3(1/3) ……………	113
第64図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土石製品実測図4(1/6) ……………	114
第65図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図1(1/3) ……………	115
第66図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図2(1/3) ……………	116
第67図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図3(1/4) ……………	118
第68図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図4(1/6) ……………	120
第69図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図5(11は1/2、他は1/6) ……………	121
第70図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図6(1/4) ……………	122
第71図	46号土坑出土貫材・柱実測図(3・4は1/12、他は1/6) ……………	124
第72図	46号土坑出土貫材・建築材、64号土坑出土建築材実測図(1/6) ……………	125
第73図	矢加部町屋敷遺跡4次調査西区遺構略配置図(1/200) ……………	128
第74図	矢加部町屋敷遺跡4次調査東区遺構配置図(1/200) ……………	130

第75図	93～98号土坑実測図(1/60)	131
第76図	99号土坑実測図(1/60)	132
第77図	100・101号土坑実測図(1/60)	133
第78図	10号溝状遺構土層断面実測図(1/60)	134
第79図	93～95号土坑出土陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3)	136
第80図	97・98号土坑出土陶磁器実測図(4～7は1/4、他は1/3)	138
第81図	99号土坑出土磁器実測図(1/3)	139
第82図	99号土坑出土土器・陶磁器実測図(7・13は1/4、他は1/3)	141
第83図	100号土坑出土陶磁器実測図(1/3)	143
第84図	100号土坑出土土器・陶磁器実測図1(7～10は1/4、他は1/3)	144
第85図	100号土坑出土土器・陶器実測図(2は1/4、3・4は1/8、他は1/3)	145
第86図	100号土坑出土土器・陶磁器実測図2(1・2は1/4、他は1/3)	147
第87図	100号土坑東竹柵出土土器・陶磁器実測図(6は1/4、他は1/3)	148
第88図	101号土坑出土土器・陶磁器実測図1(19は1/4、他は1/3)	149
第89図	101号土坑出土土器・陶磁器実測図2(2～6・9は1/4、他は1/3)	151
第90図	101号土坑出土土器・陶磁器実測図3(1・2は1/4、5は1/8、他は1/3)	153
第91図	100・101号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)	154
第92図	10号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(20・21は1/4、他は1/3)	155
第93図	ピット出土土器・陶磁器実測図(5・13は1/4、他は1/3)	157
第94図	上・中層包含層出土土器・陶磁器実測図(19は1/4、他は1/3)	159
第95図	中・下層包含層出土土器・陶磁器実測図(1/3)	161
第96図	攪乱溝出土陶磁器実測図(5は1/4、他は1/3)	162
第97図	矢加部町屋敷遺跡4次調査東区出土瓦実測図(1/4)	164
第98図	矢加部町屋敷遺跡4次調査東区出土石・角・金属製品実測図(1/3)	165
第99図	矢加部町屋敷遺跡4次調査東区出土銅銭・土製品・ミニチュア製品実測図(1～26は1/2、他は1/3) ..	167
第100図	矢加部町屋敷遺跡4次調査東区出土木製品実測図1(8～12は1/4、15は1/8、他は1/3) ..	169
第101図	矢加部町屋敷遺跡4次調査東区出土木製品実測図2(1/6)	171
第102図	矢加部町屋敷遺跡5次調査遺構配置図(1/200)	176
第103図	1号土坑実測図(1/60)	177
第104図	2～9号土坑実測図(1/60)	178
第105図	10～16号土坑実測図(1/60)	179
第106図	17～25号土坑実測図(1/60)	181
第107図	1号大土坑実測図(1/60)	183
第108図	1・3号溝状遺構土層断面実測図(1/90)	187
第109図	矢加部町屋敷遺跡4次調査東区・5次調査遺構変遷図(1/400)	189
第110図	棒状土製品関係資料(14は1/20、17は1/80、他は1/6)	190
第111図	筑後地域の土師質土器窯分布図(1/100,000)	192

表目次

表 1	有明海沿岸道路關係埋藏文化財概要	3
表 2	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 1	9
表 3	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 2	11
表 4	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 3	13
表 5	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 4	17
表 6	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 5	21
表 7	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 6	23
表 8	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 7	27
表 9	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 8	29
表 10	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 9	31
表 11	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 10	33
表 12	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 11	35
表 13	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 12	37
表 14	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 13	39
表 15	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 14	43
表 16	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 15	45
表 17	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 16	49
表 18	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 17	51
表 19	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 18	53
表 20	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 19	55
表 21	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 20	56
表 22	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 21	57
表 23	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 22	59
表 24	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 23	61
表 25	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 24	63
表 26	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 25	65
表 27	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 26	67
表 28	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 27	70
表 29	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 28	75
表 30	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 29	77
表 31	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 30	80
表 32	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 31	81
表 33	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 32	83
表 34	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 33	87
表 35	4 次調査西区出土土器・陶磁器観察表 34	89

表36	4次調査西区出土土器・陶磁器観察表35	91
表37	4次調査西区出土土器・陶磁器観察表36	93
表38	4次調査西区出土瓦観察表	95
表39	4次調査西区出土土製品観察表1	99
表40	4次調査西区出土土製品観察表2	101
表41	4次調査西区出土土製品観察表3	103
表42	4次調査西区出土窯道具観察表	105
表43	4次調査西区出土金属製品・ガラス・鹿角製品観察表	107
表44	4次調査西区出土銭観察表1	109
表45	4次調査西区出土銭観察表2	111
表46	4次調査西区出土石・木製品観察表	117
表47	4次調査西区出土木製品観察表1	119
表48	4次調査西区出土木製品観察表2	123
表49	4次調査西区出土木製品観察表3	127
表50	4次調査西区出土ガラス製品観察表	127
表51	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表1	137
表52	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表2	140
表53	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表3	142
表54	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表4	146
表55	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表4	150
表56	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表5	152
表57	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表6	154
表58	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表7	156
表59	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表8	158
表60	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表9	160
表61	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表10	161
表62	4次調査東区出土土器・陶磁器観察表11	163
表63	4次調査東区出土瓦観察表	164
表64	4次調査東区出土石器・鹿角製品・金属器観察表	166
表65	4次調査東区出土銅銭観察表	168
表66	4次調査東区出土土製品観察表	168
表67	4次調査東区出土土製品・ミニチュア製品観察表	170
表68	4次調査東区出土木製品観察表	170
表69	4次調査東区出土攪乱溝出土遺物観察表	172
表70	4次調査東区出土攪乱溝出土遺物観察表	173

写真目次

写真1 4次調査西区出土土製品

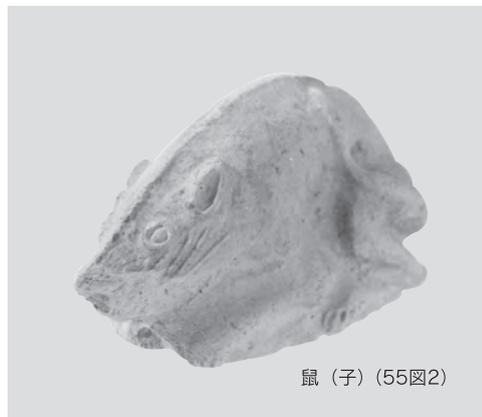


写真1 4次調査西区出土土製品

I. はじめに

1. 調査の経緯

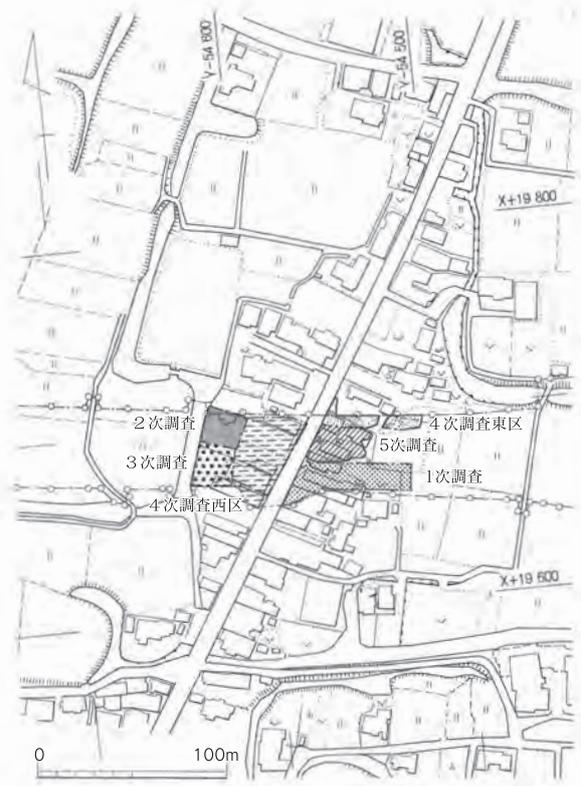
ここに報告する遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設工事に伴って発掘調査されたものである。有明海沿岸道路は福岡県大牟田市から柳川市・大川市を經由して、佐賀県鹿島市に至る概略延長55kmの国道208号のバイパス路線であり、高規格道路として整備され、渋滞解消とともに佐賀空港や三池港などの交通拠点と連結するもので、地域間流通の活性化のため早期建設が望まれていた。

平成6(1994)年12月16日計画路線として指定され、路線は大牟田高田道路・高田大和バイパス・大川バイパスに区分されている。大川バイパスは柳川市三橋町徳益から大川市大野島までの延長10.0km区間であり、平成10(1998)年12月18日に柳川市三橋町徳益から柳川市西蒲池までが整備区間が指定された。

平成12(2000)年10月28日に建設工事が起工された。このうち大牟田市から大川市にいたる区間は暫定供用区間とされ、平成20(2008)年3月29日に、大牟田ICから大川中央IC(23.8km)の内、高田ICから大和南ICを除く21.8kmが暫定開通。平成21(2009)年3月14日には全区間が暫定供用されている。

平成12(2000)年11月16日付で、国土交通省九州地方建設局福岡国道事務所から福岡県教育庁文化財保護課に対し、この区間に係る埋蔵文化財の有無確認の依頼があり、これを受けて同課が柳川市矢加部地区について平成15(2003)年10月6から8日に試掘調査を実施した。その結果、江戸時代の溝や土坑などが確認され、本調査が必要と判断された。

まず、県道側の用地取得が終了した範囲について、平成16(2004)年6月15日から10月4日に矢加部町屋敷遺跡1次調査として本調査を実施し、県道西側のクリークの高架工事を行う必要が生じたことから、2次調査を平成16(2004)年6月15日から10月4日に、3次調査を平成17(2005)年3月17日から4月24日に実施した。4次調査については、県道東側で柳川農林事務所が工事用地内のクリークの付け替え工事を先行して行うため、県道東側の用地内に工事用道路を設置することから西側を調査することとなり、平成18(2006)年5月9日から平成19(2007)年1月30日に実施した。引き続いて、平成19年2月5日に東側の北端に着手した。さらに、5次調査は平成19年6月15日から着手し、9月25日に埋め戻しを完了し、これにより本遺跡の調査は完了した。



第1図 矢加部町屋敷遺跡調査範囲図(1/4,000)



第2図 有明海沿岸道路調査地点図 (1/50,000)

地点	市町名	大字名 (区間)	遺跡名	H19.4.1現在 対象面積 (㎡)	試掘確認調査		発掘調査		報告書作成		遺跡の概要	
					試掘年度	未試掘面積 (㎡)	調査年度	面積 (㎡)	作成年度	面積 (㎡)	主な時代	特記事項
1	大川市	津(終点～ 県道新田 榎津線間)		12,900	H18	0						試掘済み、遺跡無し
2	大川市	津(県道新 田榎津線 ～大字境)		25,700	H14・15・18	0						試掘済み、遺跡無し
3	大川市	幡保		15,400	H15・18	0						試掘済み、遺跡無し
4	大川市	坂井	坂井長永	3,820	H17・18	0	H17 H18	1,820 1,200	H19	3,020	鎌倉時代	・条里の区画溝
5	柳川市	西蒲池	西蒲池古塚	14,200	H16	0	H16 H17 H18	4,390 9,460 350	H19	14,200	平安時代 鎌倉時代 室町時代	・条里の区画溝 ・墨書土器
6	柳川市	西蒲池	西蒲池将監坊	4,400	H16	0	H17	3,400	H19	3,400	古墳時代 奈良時代	・条里の区画溝
7	柳川市	西蒲池	西蒲池古溝	4,530	H16	0	H17	4,530	H19	4,530	平安時代	・条里の区画溝と畑跡
8	柳川市	西蒲池	西蒲池下里	2,800	H16	0	H17	2,800	H19	2,800	平安時代	・条里の区画溝
9	柳川市	東蒲池	東蒲池榎町	5,700	H14	0					弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	・中世の集落遺跡
10	柳川市	東蒲池	東蒲池 大内曲り	1,200	H16	0	H17	1,200	H18	1,200	古墳時代 平安時代 鎌倉時代	・中世の集落遺跡
11	柳川市	矢加部	矢加部町屋敷	4,855	H15・16	0	H16 H17 H18 H19	2,040 430 1,820 565(860)	H17整理 H18 H21 (H22～23)	1,500 880 860 560	江戸時代 明治時代 鉄湯釜の鋳型とるつば 街道側溝らしい大溝	・江戸時代の町屋跡 ・水田焼の銘入り土器 ・鉄湯釜の鋳型とるつば ・街道側溝らしい大溝
12	柳川市	矢加部	矢加部五反田	4,000	H17	0	H18	4,000	H20	4,000	戦国時代 江戸時代	・戦国時代の集落遺跡
13	柳川市	矢加部	矢加部南屋敷	10,470	H16	0	H17 H18	6,000 4,470	H20	10,470	戦国時代 江戸時代	・戦国時代の集落遺跡
14	柳川市	三橋町 柳河		4,700	H18	0						試掘済み、遺跡無し
15	柳川市	三橋町 蒲船津	蒲船津江頭	9,700	H16	0	H17 H18 H19	4,700 3,300 1,700	H20 H21 (H22)	4,800 3,300 (1,600)	弥生時代 古墳時代 古代・中世	・弥生～中世の複合集落遺跡 ・弥生時代後期の 礎板(掘立柱建物の柱の基礎)多数
16	柳川市	三橋町 蒲船津	蒲船津水町	4,500	H17	0	H19	(1,400) 4,500	(H22)	4,500	弥生時代 鎌倉時代	・弥生～中世の複合集落遺跡
17	柳川市	三橋町 蒲船津	蒲船津西ノ内	2,280	H16～18	0	H18	2,280	(H22)	2,280	戦国時代	・戦国時代の集落遺跡
18	柳川市	大和町 徳益		4,500	H17・18	0						試掘済み、遺跡無し
19	柳川市	大和町 豊原		25,000	H17・18	0			(H22)			試掘済み、遺跡無し
20	柳川市	大和町 塩塚	塩塚地蔵面	22,740	H17～19	0	H19	0(750)			江戸時代	一部本調査必要(塩塚地蔵面遺跡) 一部試掘済み、遺跡無し
21	柳川市	大和町栄	慶長本土居跡	64,500	H16～18	0			H20		江戸時代	・柳川市指定史跡慶長本土居跡 一部試掘済み、遺跡無し
22	高田町	黒崎開	新開村 旧礎記碑	—		0	H14 H19		H20	—	江戸時代	・数組梁工法(葦など植物を敷く工法) 移設作業
23	高田町	黒崎開	黒崎堤防	300		0	H16	160	H20	300	江戸時代	・福岡県指定史跡旧柳河藩干拓遺跡

表1 有明海岸沿道路関係埋蔵文化財概要

調査成果については、平成18年度調査のうち西区の遺物と東区、平成19年度の5次調査の遺構について報告書作成業務を行うことで協議が整った。

2. 調査の組織

遺跡の発掘調査・整理報告に関わる平成16～19・21・22年度の関係者は次のとおりである。

国土交通省九州地方整備局国道事務所

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成21年度	平成22年度
所 長	増田 博行	増田 博行(～H17. 8. 1) 小口 浩(H17. 8. 2～)	小口 浩	小口 浩	森山 誠二	山本 悟司
副 所 長	後田 徹 徳留 忠	後田 徹 佐々木 英明	春田 義信 佐々木 英明	春田 義信 佐々木 英明(～H19. 6. 30) 桑林 正純(H19. 7. 1～)	白川 逸喜	白川 逸喜 柳田 誠二
建 設 監 督 官	松尾 淳一郎	松尾 淳一郎 今村 隆浩	今村 隆浩 鶴林 保彦	今村 隆浩 鶴林 保彦	山北 賢二 鶴林 保彦	山北 賢二 柴尾 照雄
調 査 第 二 課 長	小椎尾 優	鈴木 昭人	鈴木 昭人	鈴木 昭人	今里 英美	今里 英美
調 査 課 長	長友 浩信	松木 厚廣	松木 厚廣(～H18. 9) 川原 一哲(H18. 10～)	川原 一哲	矢野 幸樹	藤木 厚志
専 門 員	相島 伸行	相島 伸行	伊東 良二	伊東 良二	田中 博明	田中 博明
国 土 交 通 技 官	柳瀬 純矢	柳瀬 純矢	谷川 勝	谷川 勝	猿澤 宗一郎	猿澤 宗一郎
工 務 課 長	田中 秀之進	堀 泰雄	堀 泰雄	堀 泰雄(～H19. 6)	今田 一典	山口 隆

福岡県教育委員会

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成21年度	平成22年度
総 括	(発掘調査)	(発掘調査)	(発掘調査・整理)	(発掘調査・整理)	(整理報告)	(整理報告)
教 育 長	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一	杉光 誠
教 育 次 長	三瓶 寧夫	清水 圭輔	清水 圭輔	橋崎 洋二郎		
総 務 部 長	清水 圭輔	中原 一憲	大島 和寛	大島 和寛		
総務部副理事兼文化財保護課長			磯村 幸男	磯村 幸男		
文化財保護課長	井上 祐弘	井上 祐弘	井上 祐弘		平川 昌弘	平川 昌弘
副 課 長			佐々木 隆彦	佐々木 隆彦	池邊 元明	伊崎 俊秋
参事兼課長技術補佐	川述 昭人 木下 修		池邊 元明	池邊 元明	小池 史哲	小池 史哲
参 事			小池 史哲	小池 史哲		
参事兼課長補佐	久芳 昭文		新原 正典	新原 正典		
課 長 補 佐		安川 正郷	安川 正郷	中蘭 宏		前原 俊史

庶 務

参事補佐兼管理係長	古賀 敏生					
管 理 係 長		稲尾 茂	井手 優二	井手 優二	富永 育夫	富永 育夫
事 務 主 査	宮崎 志行	宮崎 志行	野中 顯		藤木 豊	藤木 豊
主 任 主 事	末竹 元	石橋 伸二	湖上 大輔	湖上 大輔	近藤 一崇	近藤 一崇
	秦 俊二	末竹 元	柏村 正央	柏村 正央	野田 雅	内山 礼衣
	小宮 辰之	小宮 辰之				仲野 洋輔
	野田 雅					

調査・整理・報告

参事補佐兼調査第二係長	中間 研志	中間 研志	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
参 事 補 佐			濱田 信也	濱田 信也	新原 正典	新原 正典
					池邊 元明	池邊 元明
主 査				秦 憲二	秦 憲二	秦 憲二
主 任 技 師	秦 憲二	秦 憲二	秦 憲二			

なお、発掘調査及び整理期間中には、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所・有明海沿岸道路出張所・柳川市教育委員会をはじめとする関係各位の御理解・御協力を得ることができた。

特に、発掘作業員として参加された地元を中心とする多数の方々には、悪天候、悪条件の中、御協力いただいた。また、地元の方々にはひとかたならぬ御理解をいただき、無事に発掘調査を終了することができた。ここに深甚の謝意を表します。

Ⅱ．位置と環境

地理的環境

遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部の有明海沿岸部に位置しており、平成17年2月5日付けで柳川市・三橋町・大和町と合併し、現柳川市となった。柳川市域は矢部川の支流である沖端川・塩塚川によって形成された有明粘土を基盤とする沖積地であり、標高10m以下の低平な平地である。

本遺跡の所在する矢加部地区は柳川市の北東端の微高地上に展開する村矢加部集落の南西にあり、調査地点の町矢加部は県道23号線沿いに所在する。

歴史的環境

柳川市域に集落が進出したのは弥生時代中期からで、市北部では蒲池遺跡群(注1)を拠点的な集落として、微高地上に小集落が点在していたようだ。西蒲池扇ノ内遺跡(注2)では支石墓の上石と見られる巨石が発見されており、三島神社楼門前の石橋に使用された1枚石もこの巨石の1つといわれている。このほかに発掘調査の行われた弥生時代の遺跡としては、中期の磯鳥フケ遺跡(注3)や、掘立柱建物跡の礎板が大量に検出された後期の蒲船津江頭遺跡(注4)がある。

古墳時代・古代の遺跡はほとんど見られず、遺跡が増加するのは中世になってからである。柳川市北部地域に勢力を持った蒲池氏の居城である蒲池城跡があり、城跡の西には東蒲池門前・西門前遺跡(注5)、南には中世前期の東蒲池大内曲り遺跡(注6)・東蒲池榎町遺跡(注7)が確認されており、その他にも西鉄天神大牟田線の東側でも中世後期の矢加部南屋敷遺跡(注8)などの中世遺跡が確認されている。

戦国時代末期に、蒲池氏が滅亡し、天正15(1587)年に立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三潞・下妻・山門の三郡を支配した。立花氏はその後関ヶ原の戦いで西軍に与して改易となり、替って田中吉政が筑後国主となり、慶長6(1601)年に入国した。

田中吉正は「慶長本土居」の建設、掘割の掘削、街道整備などの多くの土木事業を行い、領国整備に努めた。慶長本土居は、慶長7年(1602)に柳川市大和町鷹尾から大川市酒見に及ぶ堤防を補強した総延長32キロメートルに及ぶ干拓堤防で、この「慶長本土居」を起点として、その後の干拓が行われることになる。掘割は、飲用、農業用、舟運や戦時の防衛の目的で整備しており、市内の水路の総延長は、実に470キロメートルものぼる。この掘割が現在の「水郷柳川」の景観を形成している。

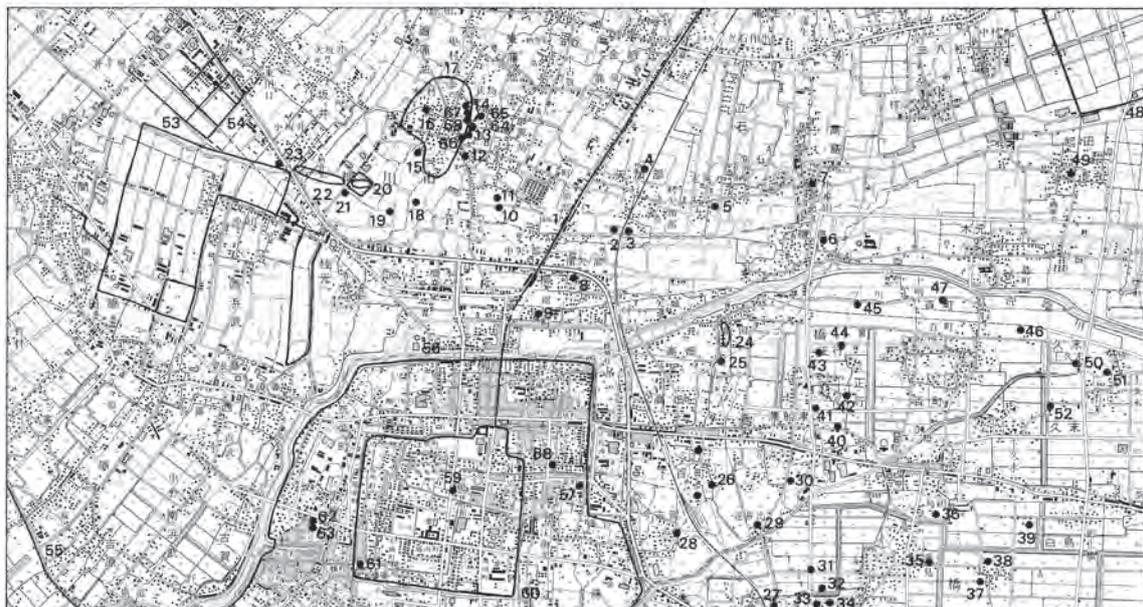
街道整備については、藩内に一里石を築いたとある。現在するもので、瀬高街道の一里石(三橋町下久末)、福島街道(矢部往還)の三里石(瀬高町壇の池)、三池街道の一里石(大和町豊原)・二里石(高田町渡瀬)、南関街道の三里石(山川町野町中村病院角)が残っている。ほかに伝馬の駅が作られ、旅行者に

交通の便を与えた。本遺跡の中央を走る県道23号線は、「久留米柳川往還」と呼ばれる街道であり、田中吉正が整備したことから「田中道」とも呼ばれる。三橋町の柳河地区では、道路の両側に大きな溝を伴う、旧状が残された部分を見ることができる。

田中氏改易後、筑後国は柳川藩と久留米藩に分断され、柳川藩は立花氏が、久留米藩は有馬氏が領有した。本遺跡の所在する矢加部地区は藩境となり、街道上に関所と藩境木が設置された。現在も藩境木跡の石碑が残されている。

注

1. 福岡県教育委員会1978『福岡県遺跡等分布地図』(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編)
2. 前掲注1
3. 柳川市教育委員会2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第1集
4. 福岡県教育委員会2009『蒲船津江頭遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集
5. 福岡県教育委員会で整理中
6. 福岡県教育委員会2007『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集
7. 福岡県教育委員会2005『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集
8. 福岡県教育委員会2009『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集



- | | | | | |
|--------------|-------------|-------------|---------------|---------------|
| 1 矢加部町屋敷遺跡 | 15 蒲池焼窯跡 | 29 逆井出遺跡 | 43 一本松遺跡 | 57 新町遺跡 |
| 2 矢加部五反田遺跡 | 16 三島神社貝塚 | 30 浮島天神遺跡 | 44 赤太郎遺跡 | 58 細工町遺跡 |
| 3 矢加部南屋敷遺跡 | 17 蒲池遺跡群 | 31 内新開遺跡 | 45 松の木三十六遺跡 | 59 坂本町遺跡 |
| 4 玉垂命神社遺跡 | 18 西蒲池下里遺跡 | 32 西馬場遺跡 | 46 サヤモト遺跡 | 60 柳川城跡 |
| 5 阿弥陀屋舗遺跡 | 19 扇ノ内遺跡 | 33 江崎城跡 | 47 中村遺跡 | 61 国指定名勝松濤園 |
| 6 磯鳥フケ遺跡 | 20 西蒲池古溝遺跡 | 34 垂見古墳 | 48 大藪糸理遺跡 | 62 県指定建造物戸島邸 |
| 7 東小路遺跡 | 21 西蒲池特監坊遺跡 | 35 垂見遺跡 | 49 天満宮遺跡 | 63 国指定名勝戸島氏庭園 |
| 8 南矢ヶ部遺跡Ⅰ | 22 西蒲池古塚遺跡 | 36 垂水城跡 | 50 江鶴遺跡 | 64 東蒲池西門前遺跡 |
| 9 南矢ヶ部遺跡Ⅱ | 23 坂井長永遺跡 | 37 大坪城跡 | 51 上久末城跡 | 65 東蒲池島中遺跡 |
| 10 東蒲池榎町遺跡 | 24 蒲船津江頭遺跡 | 38 白鳥城跡 | 52 場口遺跡 | 66 浦田遺跡 |
| 11 東蒲池大内曲り遺跡 | 25 蒲船津水町遺跡 | 39 東中道遺跡 | 53 田脇昭代地区条里遺跡 | 67 池田遺跡 |
| 12 東蒲池蓮池遺跡 | 26 蒲船津西ノ内遺跡 | 40 地蔵堂遺跡 | 54 条里跡 | 68 池淵遺跡 |
| 13 東蒲池門前遺跡 | 27 徳益八ツ枝遺跡 | 41 ヘータカサン遺跡 | 55 慶長堤防 | 69 蒲船津西古賀遺跡 |
| 14 蒲池城跡 | 28 今古賀城跡 | 42 日渡遺跡 | 56 柳川城郭 | 70 下百町児童遺跡 |

第3図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

Ⅲ. 調査の内容

1. 調査の概要

矢加部町屋敷遺跡は、県道23号久留米柳川線沿いに南北に細長く展開しており、有明海沿岸道路はその北部を横断して建設されるため、調査対象範囲は県道の東西に分かれている。

用地取得状況と工事工程に応じて、調査対象範囲内を1～5次調査まで5分割して調査を実施することになった。2・3次調査区を『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』で報告し、『矢加部町屋敷遺跡Ⅱ』では4次調査西区の遺構のみを報告した。今回は、引き続き4次調査西区出土遺物を報告し、4次調査東区については遺構と遺物の双方を、5次調査は県道東側部分の北半にあたり、遺構のみを掲載する。

2. 4次調査西区の出土遺物

出土遺物については、観察表に掲載しているもので、付記するべき事項についてのみ記述する。

5図2はコバルト染付碗で、欠損部が丸く割れているが、積み上げ痕で剥離したもので、意図的に打ち搔いたものではない。こうした例はいくつか見られたが、底部転用円盤とは明らかに異なっており、円形ではなく一部に突出部をもつ涙形になるのが特徴である。5図10は染付小皿で口縁部の一部に打ち欠き部があり、そこが黒化しているのが、灯明皿として使用されたものである。5図23は片口鉢と思われる鉢の胴下半部で、外縁を打ち搔き、丸く調整しているのが、皿として再利用した可能性を指摘したい。

6図4は陶器の碗で、透明釉がかかっているのが、類例から欠損側に鉄絵か色絵があった可能性がある。6図7は染付碗で、胎が青灰色であることから長与窯か。6図11は火入れと思われる鉢で、欠損部が黒変していることから灯明皿に再利用したものだろう。6図12～15は焼き塩壺で、12号土坑からはほかにも破片が出土しており、集中的に廃棄されたものと思われる。

7図2は染付碗で、2号埋甕出土の38図7に近似するが、別個体である。7図12は染付の蓋で裾部全周に煤が付着しているのが、灯明皿として再利用されたものである。

8図3は陶器の甕で、肥前産の類例から胎土は本来暗紫色であるが、焼成不良で灰色を呈している。8図15と16は同じモチーフの別個体であり、24号土坑と一緒に廃棄されたものである。

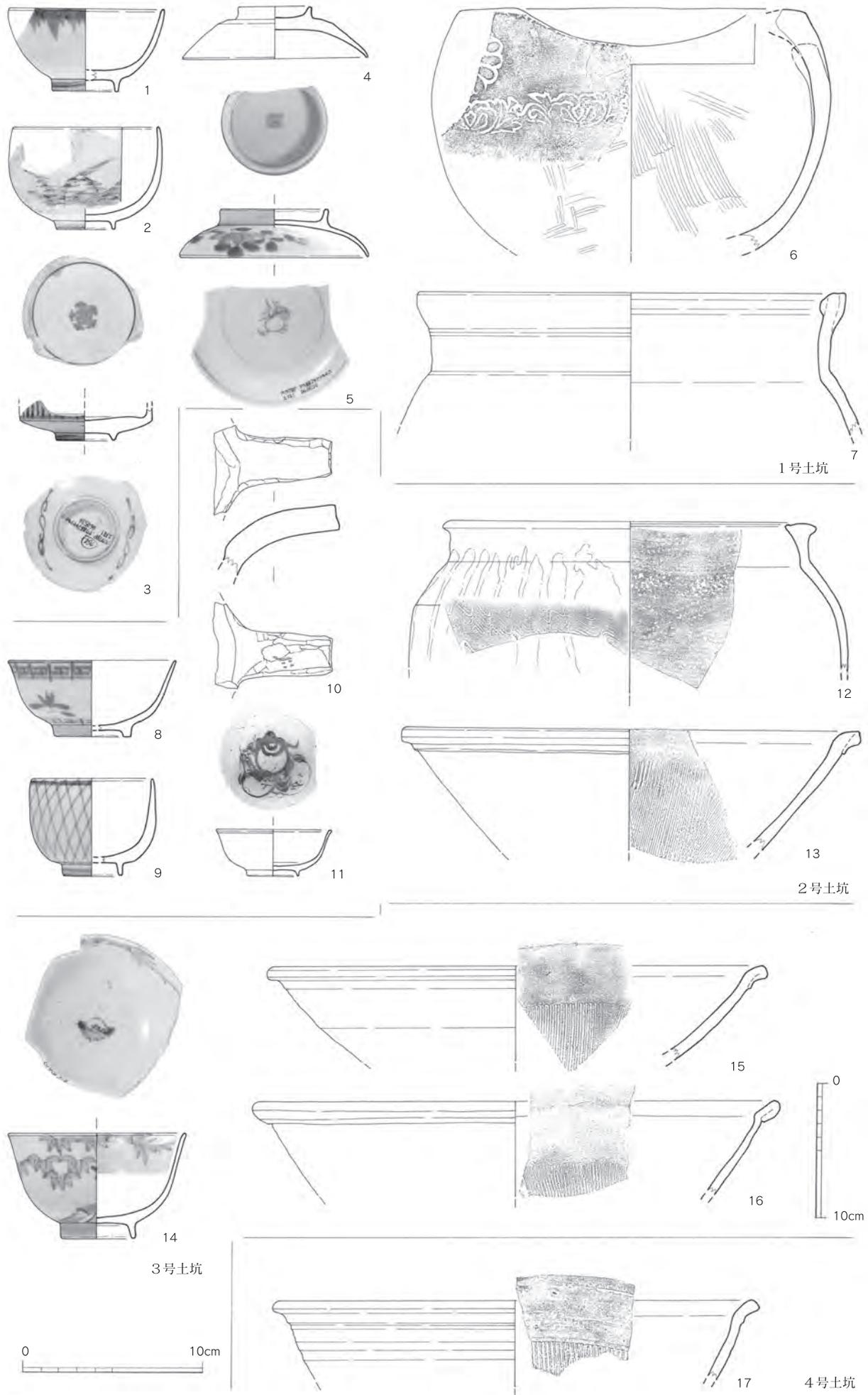
9図3の釉調は小石原焼の拳骨形碗に見られるものだが、残存度から側面の窪みはないとわかる。

11図9は染付碗で、裏銘はわずかしが残っていないが、類例から「大明年製」とわかる。

12図5は瓦質土器の火鉢で、本来は外面の黒灰色だが、内面は使用による変色で、胴部はにぶい黄灰色、見込みは淡黒灰色を呈する。12図10は陶器の摺鉢で、胎がマーブル状だが、焼成がやや弱いだけで、肥前産であろう。

13図4は土師質土器の甕で、36号土坑の出土破片と黄灰色土包含層の出土破片が接合した。黄灰色土包含層の方に多くの破片があるのは、36号土坑の上面に黄灰色土包含層が被っていたためであろう。13図9は陶器の大甕で、胎が肥前のものではなく、内面の花文状のタタキ当て具痕が独特である。胎の特徴から小石原焼と推定したが、タタキ当て具痕の類例は知見にない。

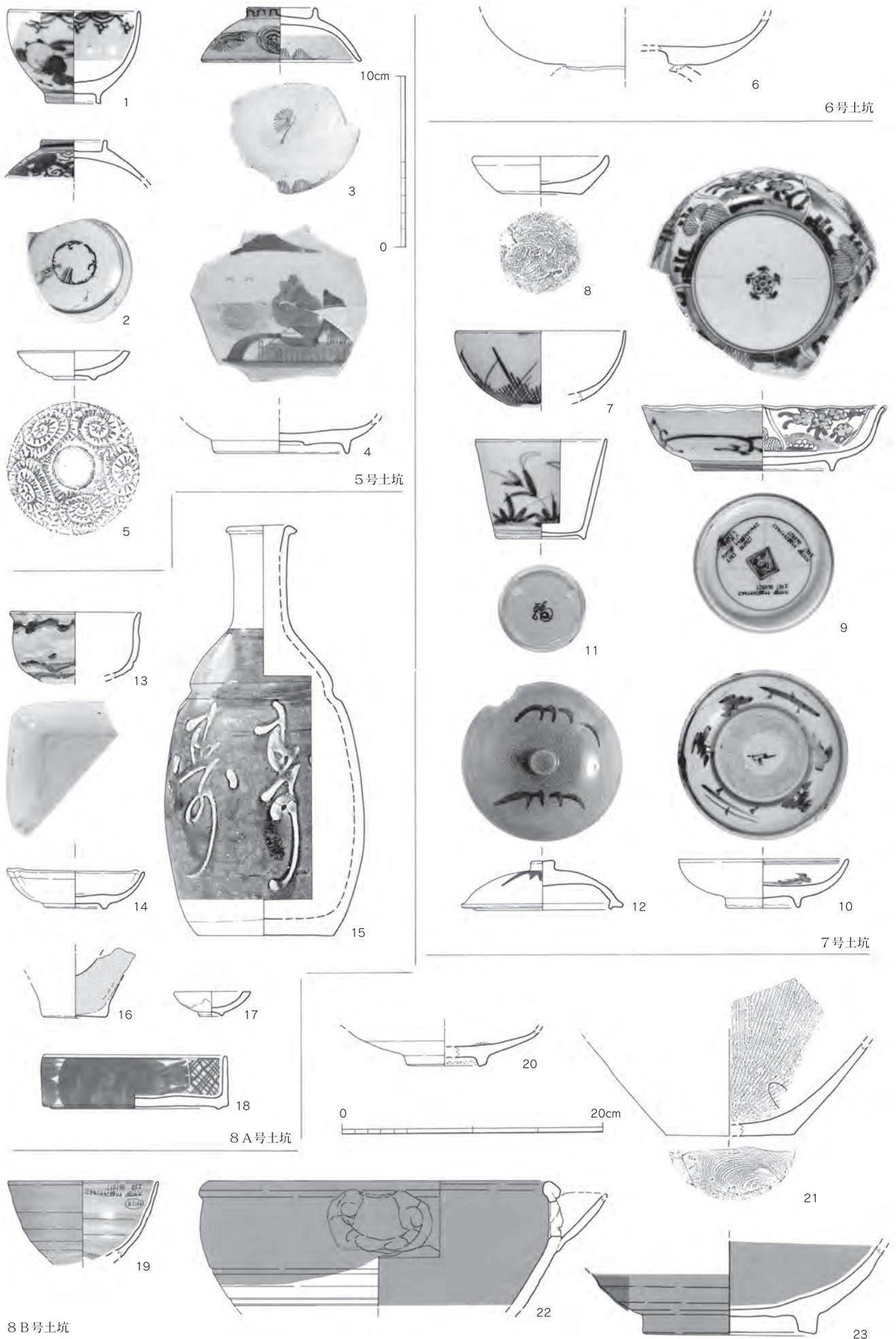
14図7は土師質土器の小皿で、完形の口縁の一部に煤が付着しているのが、灯明皿として使用していたことがわかる。



第4図 1～4号土坑出土土器・陶磁器実測図(7・10・12・13・15～17は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑1 4図1	碗	口径(8.6) 高台径(3.6) 器高4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に雨降り文を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付		肥前	18世紀後半
土坑1 4図2	碗 浅半球形	口径(8.2) 高台径(3.2) 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉 全面 発色不良で白濁 貫入あり	外面に樹文を染付	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	1780) 1810
土坑1 4図3	碗 筒形	高台径(3.2) 最大径(7.2)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に縦線文、胴下位に崩れた寿文、見込みにコンニャク印判による5弁花文を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付		肥前	18世紀後半
土坑1 4図4	蓋	裾径10.2 つまみ径4.1 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	つまみ上端釉剥ぎ	5割残存	肥前	18世紀中葉
土坑1 4図5	蓋	裾径(10.4) つまみ径6.0 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉 全面 発色不良で白濁	外面に樹文、天井部に□内に雷の銘、内面天井部に菱形宝珠文を染付	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	1780) 1810
土坑1 4図6	焜炉	口径(19.0) 最大径(22.0)	瓦質土器 黒灰色	—	外面に牡丹花文と菊花文のスタンプ 外面キガキ、内面ハケ	不明	外面は黒色化	在地	不明
土坑1 4図7	中甕	口径(24.0)	陶器 暗赤紫色	内外鉄釉で、自然灰釉を被っている		—	タタキ当て具痕などなし	肥前	不明
土坑2 4図8	小碗	口径9.2 高台径4.2 器高4.2	磁器 灰色	透明釉 全面発色不良で暗青白色を呈す 釉垂れあり	外面口縁部に雨降文、胴下位に界線を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付	7割残存	波佐見	1750) 1770
土坑2 4図9	小碗 湯飲み	口径6.5 高台径2.9 器高5.4	磁器 灰白色	青みがかかった透明釉	外面はコバルトによる雷文帯崩れと花文の染付	畳付釉剥ぎ	5割残存	肥前	19世紀後半
土坑2 4図10	十能把手	長さ9.8 把手幅3.2 把手厚さ1.8	土師質土器 橙褐色 金雲母を含む	—	裏面に刺突と沈線で記号を描いている 内外ナデ 小口部は粗く削っている	—	変色なし	在地	不明
土坑2 4図11	杯	口径6.1 高台径2.8 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	見込みにコバルトの吹絵で「寿老人」を描く	畳付釉剥ぎ	8割残存	肥前	19世紀後半
土坑2 4図12	中甕	口径(27.6)	陶器 暗紫灰色	外面鉄釉を掛け、その上に鉄釉を流し掛けし、薬灰釉を流し掛け 内面露胎	外面肩部は櫛書波状文 内面に格子目タタキあて具痕	口唇部の内面側半分を釉剥ぎ		肥前	不明
土坑2 4図13	摺鉢	口径(34.0)	陶器 暗灰色	内外鉄釉	内面摺り目の23本単位	不明		肥前	18世紀後半) 19世紀後半
土坑3 4図14	碗 端反形	口径(9.6) 高台径3.8 器高5.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	手描き染付 外面と内面口縁部に竹文 見込みのモチーフ不明	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑3 4図15	摺鉢	口径(37.0)	陶器 橙褐色	内外鉄釉	内面摺り目の単位不明	不明		肥前	1750) 1860
土坑3 4図16	摺鉢	口径(39.0)	陶器 暗紫灰色	内外鉄釉	内面摺り目の単位不明	不明		肥前	18世紀後半) 19世紀中葉
土坑4 4図17	摺鉢	口径(36.0)	陶器 橙褐色	内外鉄釉	内面摺り目の単位不明	不明		肥前	1750) 1860
土坑5 5図1	小碗	口径(7.4) 底径3.0 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	手描き呉須染付 外面唐子文、内面口縁部に瓔珞文	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑5 5図2	碗	高台径3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	手描きコバルト染付 外面モチーフ不明、見込みに環状松竹梅文	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑5 5図3	蓋	裾径(9.1) つまみ径3.8 器高3.2	磁器 灰白色	発色不良で白濁した透明釉 全面 貫入あり	外面に松葉文・丸文、高台に凹凸文、内面口縁部・内面天井部に松葉文の呉須染付	つまみ部上端釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑5 5図4	小皿 5寸皿 菊花形	高台径7.6	磁器 灰白色	透明釉 高台内以外に掛ける	蛇ノ目高台 見込み山水文のコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡2つあり		肥前	19世紀中葉
土坑5 5図5 図版1	紅猪口 紅皿	口径6.5 高台径2.2 器高2.0	磁器 完形のため不明	透明釉 内面から外面口縁部	型押し成型で、外面蛸唐草文	底部露胎	完形	肥前	不明
土坑6 5図6	高台付皿	—	陶器 にぶい暗黄灰色 半磁器状	暗緑灰色の灰釉を内外掛	皿部の上底と高台部が接合している			肥前	不明

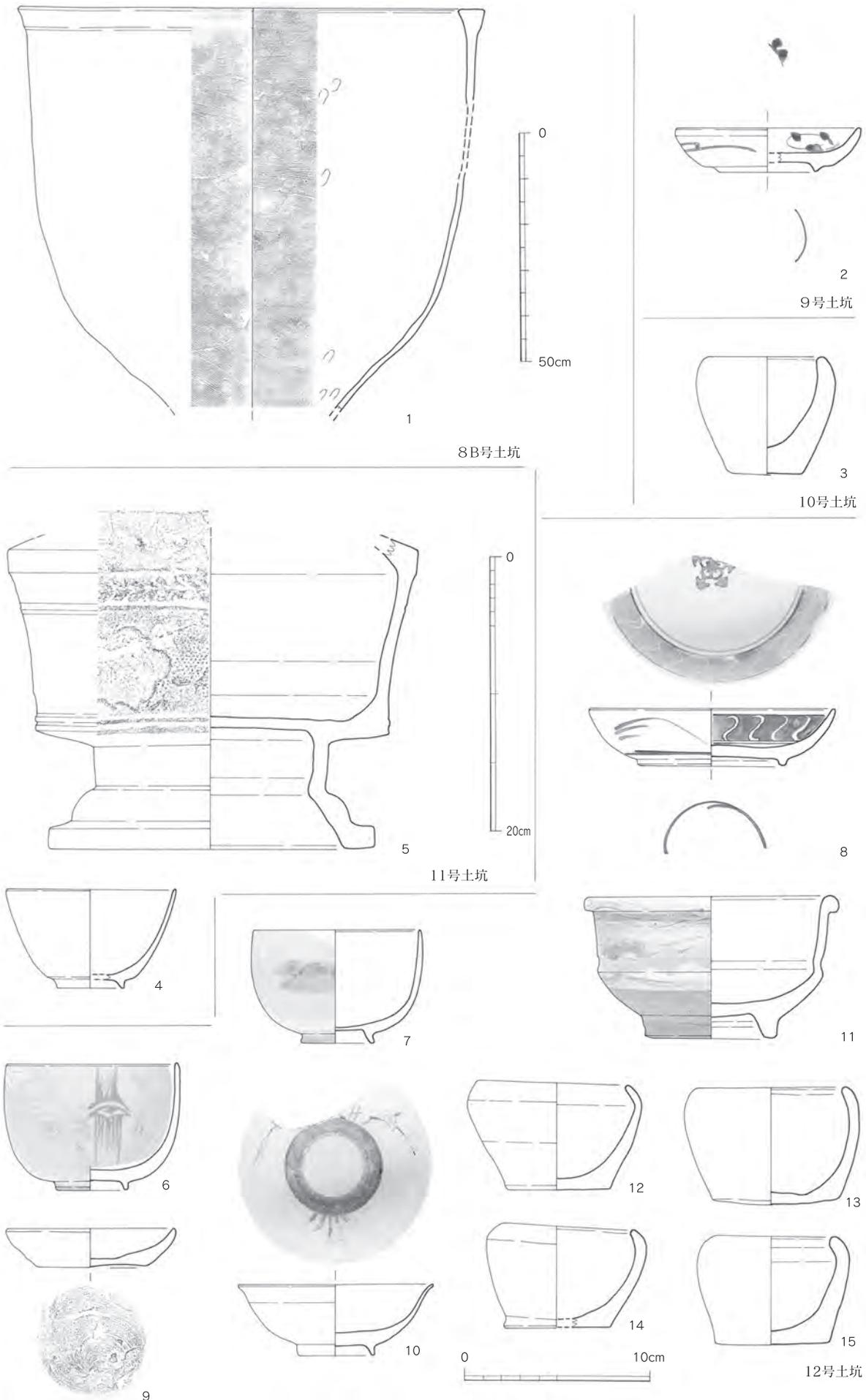
表2 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表1



第5図 5～8B号土坑出土土器・陶磁器実測図(21は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							挿図番号	形状	()は復元値
図版番号	通称名								
土坑7 5図7	碗	口径(9.7)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に格子状の草文	不明		肥前	不明
土坑7 5図8 図版1	小皿	口径7.6 底径4.6 器高2.2	土師質土器 黄灰色	—	外底糸切り	不明	9割残存 変色なし	在地	不明
土坑7+土坑3 5図9	小皿 花卉口縁 5寸皿	口径(14.0) 高台径7.7 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面区画内に梅樹文と山水文が交互に入る。見込みは5弁花文、裏銘は角福の呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ 目跡2つあり	土坑7の破片 が大きいので 7で報告	肥前	19世紀中葉
土坑7 5図10 図版1	小皿 5寸皿	口径9.6 高台径3.9 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	見込み山水文の呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込 み蛇ノ目釉剥ぎと ハリ目跡2つあり	ほぼ完形 口縁部 の一部の打ち欠き が黒化している	肥前	19世紀中葉
土坑7 5図11	猪口	口径7.5 高台径5.0 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面草・ススキ文の呉須染付 裏銘に渦福	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ 目跡2つあり		肥前	19世紀中葉
土坑7 5図12 図版1	蓋	裾径9.4 つまみ径1.4 器高2.9	陶器 にぶい茶灰色	上面に竹笹文の鉄絵を施したのち、透明釉掛け 貫入あり		下面釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
土坑8 A 5図13	小碗 ピラ掛碗	口径(7.4)	陶器 黒灰～黄橙色	長石釉を内面全面、外面は長石釉と黒釉をイッチン掛け		—		萩焼	19世紀中葉
土坑8 A 5図14	変形小皿 方形皿	口径7.8 高台径3.6 器高2.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型で、内面に山文、見込みに菊文の陽刻	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀中葉
土坑8 A 5図15	瓶	口径4.1 底径7.8 器高23.9	陶器 黄灰色	イッチンでデザイン化した寿を胴部にめぐらせ、鉛釉を掛け、胴下位は釉剥ぎ、最後に肩部に薫灰釉上掛け		底部露胎でアル ミナナ付	完形	小石原	不明
土坑10 5図16	焼塩壺	底径(3.6)	土師質土器 黄灰色 混入物なし	—	外底切り離し不明 器面摩擦のため調整不明	不明	内面から断面 は赤片	在地	不明
土坑8 A 5図17 図版1	紅猪口 紅皿	口径4.4 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉 内面から 外面口縁部	型押し成型で、外面蜻唐草文	底部露胎	完形	肥前	不明
土坑8 A 5図18	鉢 段重	口径(10.4) 高台径9.4 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	コバルトで花文染付	口縁部内面と 畳付と底部外 縁部は釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑8 B 5図19	碗	口径(8.6)	磁器 黄灰白色	灰白褐色の灰釉 全面	内外面に白化粧土のハケ掛け		不明	肥前か	不明
土坑8 B 5図20	小皿	高台径(4.6)	陶器 灰白色	外面緑灰白色の灰 釉を高台内以外全 面に掛ける		畳付釉剥ぎ 砂目 付 見込みに胎土 目跡3箇所付		肥前	1750 } 1770
土坑8 B 5図21	摺鉢	底径(9.8)	陶器 暗紫灰色	—	内面摺り目11本単位 底部糸切り	見込みに重ね 焼きの痕跡あ り	口縁のみ施釉 するものだろ う	肥前	17世紀前葉 } 17世紀末
土坑8 B 5図22	片口鉢	口径(19.6) 最大径(10.6)	陶器 淡赤黄橙色	内面と胴上半に鉄 釉掛け	外面下位はケズリの工具端がカキ目状に残る	口唇部釉剥ぎ 取り		肥前	17世紀後半
土坑8 B 5図23	片口鉢か	高台径10.0	陶器 橙褐色	高台内以外に鉄釉 掛け		底部露胎	皿として再利用 か	肥前	17世紀後半
土坑8 B 6図1 図版1	大甕	口径(110.0)	土師質土器 にぶい黄灰～灰 白色	無釉	内外面・底面にもハケが丁寧に入り、タタキの当て具痕を消して凹凸のみ残る	不明	摩擦・変色なし 底部が抜けた ような欠損	在地	不明
土坑9 6図2	小皿	口径(10.0) 高台径(5.4) 器高2.4	磁器 灰色	透明釉を全面に掛ける	外面界線、内面雪ノ輪文、見込み5弁花文の呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ 目跡2つあり		波佐見	18世紀後半 } 19世紀中葉
土坑10 6図3 図版1	焼塩壺	口径6.2 最大径7.5 器高6.4	土師質土器 黄灰色 混入物なし	—	外底糸切り 器面摩擦のため調整不明	不明	内外変色なし 断面も変色な し	在地	不明
土坑11 6図4	碗	口径(9.0) 高台径(3.6) 器高5.3	陶器 灰白色 硬質	透明釉を高台以外 に全面に掛ける 貫入あり	無文	底部釉剥ぎ		肥前か	不明
土坑11 6図5 図版1	火鉢	最大径(22.0) 裾径27.4	瓦質土器 灰白色に黒灰色 が挟まれる	—	外面型押しで楓文陽刻 内面ナデ	不明	器面摩擦でミ ガギの有無不 明	在地	不明
土坑12 6図6	碗	口径(9.2) 高台径(3.6) 器高6.8	陶器 灰白色でガラス 質	透明釉を高台以外に全面に掛けた上に、竹文を青緑彩で描く 貫入あり		底部釉剥ぎ		京焼か	不明

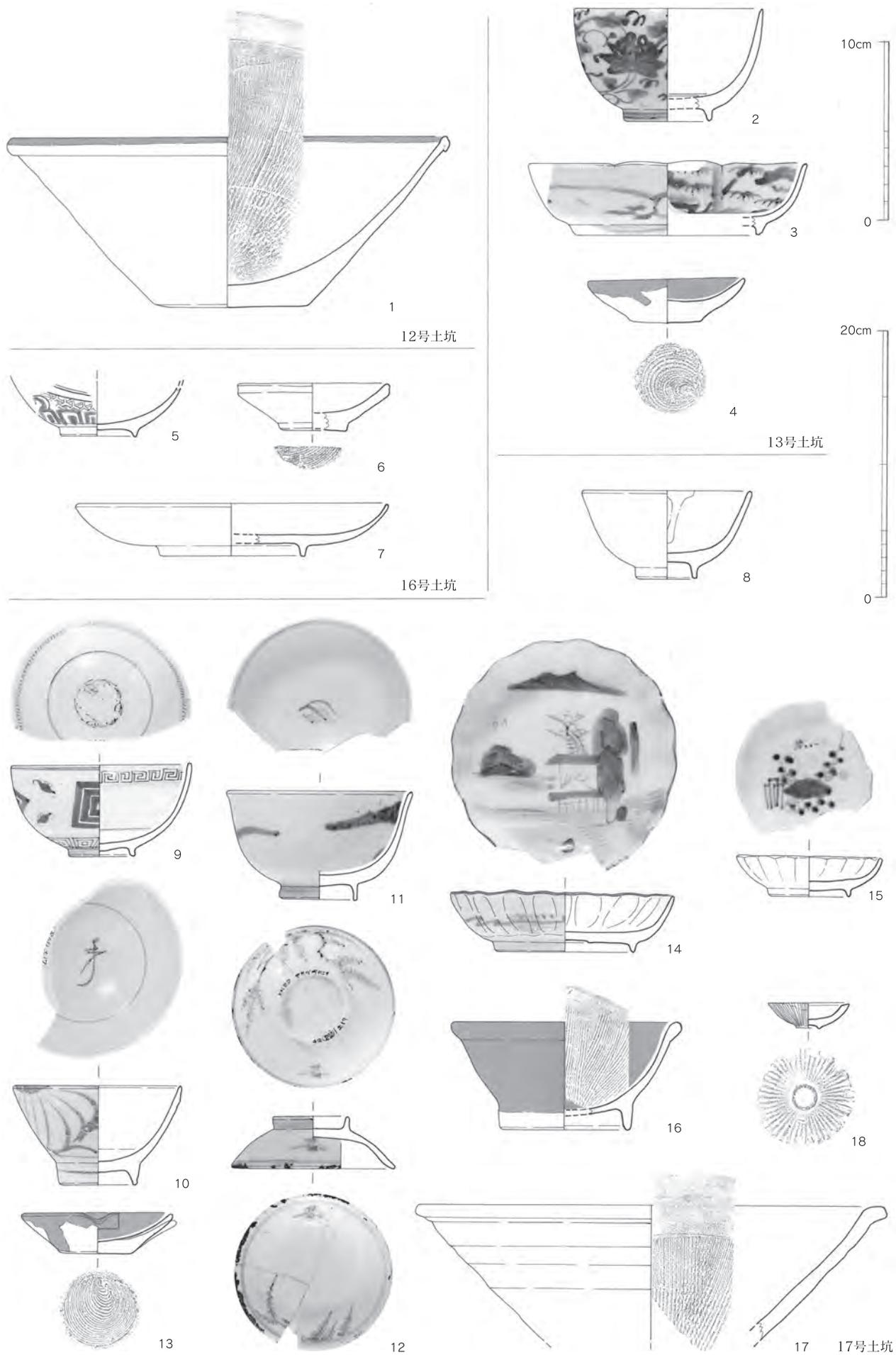
表3 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表2



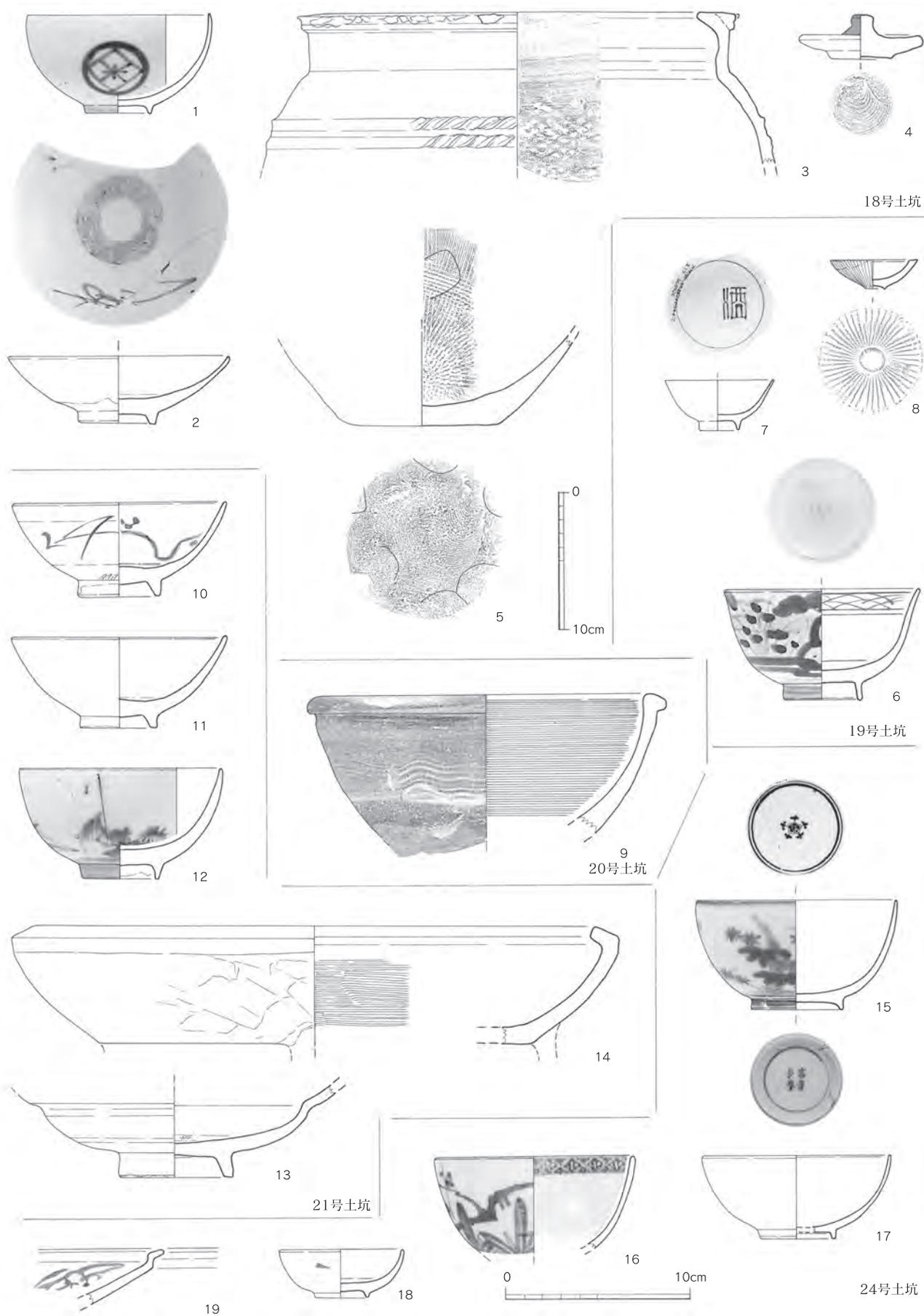
第6図 8B～12号土坑出土土器・陶磁器実測図(1は1/12、5は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑12 6 図7	碗	口径(9.0)	磁器 青灰色	透明釉全面 貫入あり	外面に山水文	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ 目跡2つあり		長与窯か	不明
土坑12 6 図8	小皿 5寸皿	口径(13.2) 高台径(8.0) 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面は唐草文、高台内は界線を手描きで、 内面は墨弾きで連続逆S字文を入れ、見込 みは5弁花文のスタンプの具須染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ 目跡2つあり		波佐見	1680) 1740
土坑12 6 図9 図版1	小皿	口径9.2 底径5.7 器高2.2	土師質土器 黄灰色	—	外底糸切り	不明	9割残存 変色なし	在地	不明
土坑12 6 図10	皿	口径10.4 高台径4.0 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	内面緑・赤彩で花文、釉剥ぎ部は黒彩と緑彩 で鋸歯文を透明釉の上に描く 見込みに蛇 ノ目釉剥ぎ	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ 目跡2つあり		肥前	不明
土坑12 6 図11	鉢 火入れ	口径13.6 高台径7.1 器高7.1	陶器 橙褐色	口縁部から外面胴上半に白化粧土掛け、ハケ状釉剥ぎ		胴下半露胎	内面変色なし 欠損部が黒変	肥前	不明
土坑12 6 図12 図版1	焼塩壺	口径8.0 最大径9.4 器高5.8	土師質土器 橙灰色 混入物なし	—	外底静止ヘラ削り 内外ナデ	不明	口縁部の一部 のみ赤変あり 9割残存	在地	不明
土坑12 6 図13	焼塩壺	口径8.0 最大径9.3 器高6.3	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外底静止ヘラ削り 器面摩滅のため調整不明	不明	6割残存	在地	不明
土坑12 6 図14 図版1	焼塩壺	口径6.9 最大径8.5 器高5.6	土師質土器 黄灰色 混入物なし	—	外底静止ヘラ削り 内外ナデ	不明	口縁部の一部 のみ黒斑あり ほぼ完形	在地	不明
土坑12 6 図15 図版1	焼塩壺	口径6.3 最大径8.2 器高6.0	土師質土器 橙灰色 混入物なし	—	外底静止ヘラ削り 器面摩滅のため調整不明	不明	口縁部の一部 のみ赤変あり 6割残存	在地	不明
土坑12 7 図1	摺鉢	口径32.8 底径11.4 器高12.7	陶器 暗紫灰色	—	内面摺り目15本単位 底部糸切りと思われ るが摩滅している 口縁のみ鉄釉施釉	見込みに重ね 焼きの痕跡あ り		肥前	1650) 1690
土坑13 7 図2	碗	口径10.1 高台径4.7 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に花文、胴下位に界線、外底にわずかに 残る角福を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付	6割残存	肥前	1700) 1750
土坑13 7 図3	皿	口径(15.8) 高台径(10.4) 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に唐草文、内面に竹文を染付 見込み は欠損のため不明	畳付釉剥ぎ 砂目付		肥前	1730) 1740
土坑13 7 図4	小皿	口径8.6 底径3.9 器高2.5	陶器 にぶい橙褐色	鉄釉を内面から外 面口縁部まで 発 色不良	外底は糸切り	底部露胎	口縁部全周に 煤付着 完形	肥前	不明
土坑16 7 図5	碗	高台径(4.2)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に染付で区画文を描き、透明釉を上 に赤絵を施す	畳付釉剥ぎ 砂目付	2割残存	肥前	不明
土坑16 7 図6	小皿	口径(8.4) 底径(3.8) 器高2.6	陶器 にぶい橙褐色	鉄釉を内面から外 面口縁部まで 発 色不良	外底は糸切り	底部露胎	口縁部全周に 煤付着	肥前	不明
土坑16 7 図7	皿	口径(17.4) 高台径(8.1) 器高2.8	陶器 硬質	透明釉を全面に掛 ける 貫入あり	見込みに鉄絵入るがモチーフ不明	畳付釉剥ぎ 砂目付		肥前	不明
土坑17 7 図8	碗 端反形	口径(9.4) 高台径(3.5) 器高4.9	陶器 黄灰白色 軟質	黄灰色の灰釉 全面	内面口縁部に銅緑釉流し掛け	畳付釉剥ぎ 砂目付	5割残存	肥前	19世紀前葉
土坑17 7 図9	碗	口径9.8 高台径3.6 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に三升文と蝙蝠文、胴下位に雷文、内 面口縁部に雷文、見込みに崩れた環状松竹 梅文を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付	5割残存	肥前	19世紀前葉
土坑17 7 図10	小碗 広東形	口径(9.3) 高台径(2.3) 器高5.5	磁器 明紫白色	透明釉 全面 釉が 沸騰している	外面に半菊花文、内面に界線、見込みに寿 文を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付	5割残存	波佐見	1820) 1860
土坑17 7 図11	碗 端反形	口径10.3 高台径4.2 器高6.1	磁器 灰色	透明釉 全面 発色 不良	外面に帆掛文と山水文、内面口縁部に界線、 見込みに崩れた波濤文を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付	5割残存	肥前	19世紀前葉
土坑17 7 図12	蓋	裾径9.1 つまみ径4.3 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	内外同じモチーフで樹と鳥の具須染付	つまみ部上端 釉剥ぎ	裾部全周に煤 付着 9割残存	肥前	19世紀前葉
土坑17 7 図13	小皿	口径(8.4～8.6) 底径(3.8) 器高2.3	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外 面口縁部まで 発 色不良	外底は糸切り 片口がつく	底部露胎		肥前	不明
土坑17 7 図14	小皿 5寸皿 菊花形	口径12.6 高台径7.7 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面崩れた唐草文、見込みは山水文 蛇ノ 目高台 口鏝	畳付から蛇ノ 目高台内釉剥 ぎ		肥前	19世紀中葉

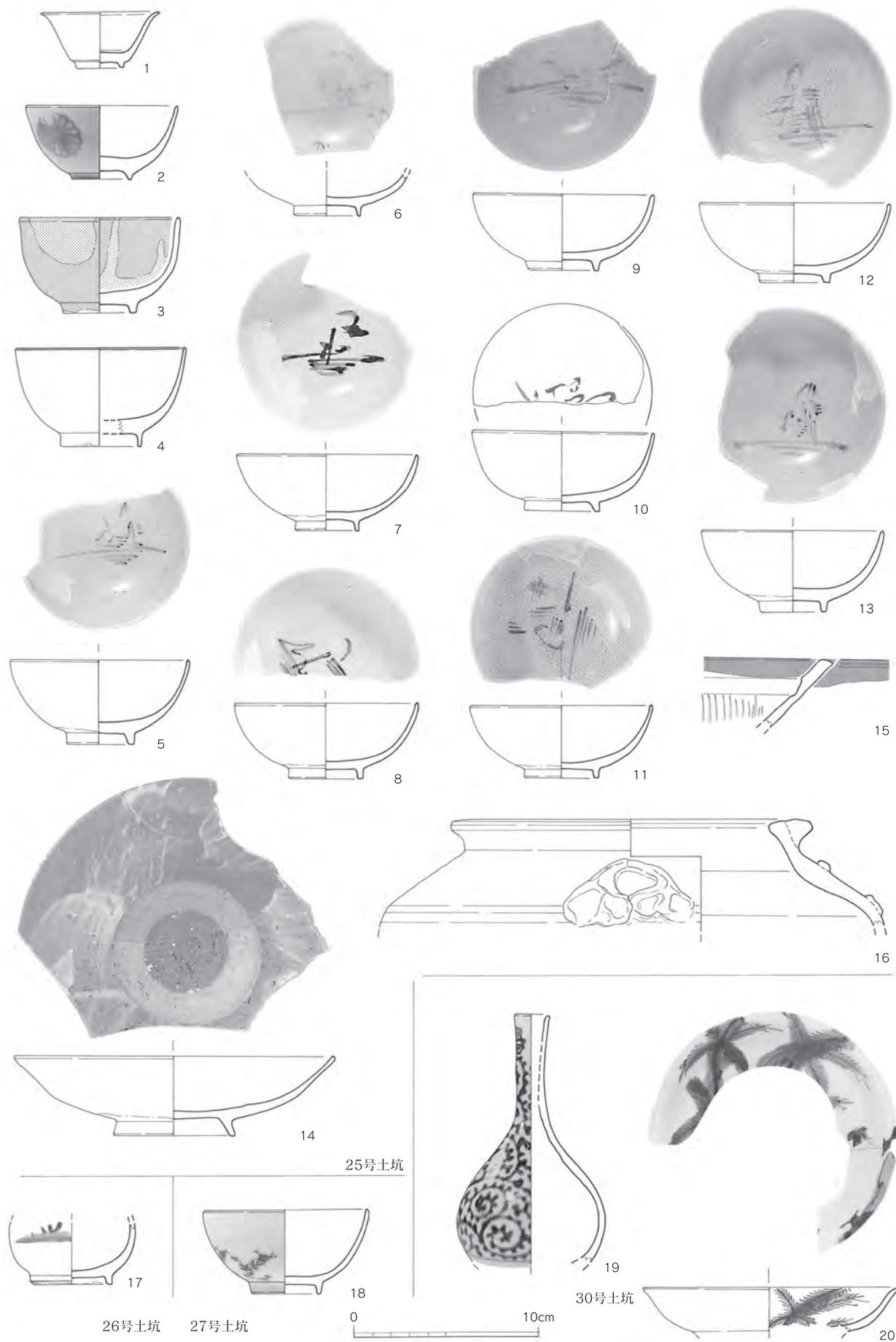
表4 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表3



第7图 12・13・16・17号土坑出土土器・陶磁器実測図(1・17は1/4、他は1/3)



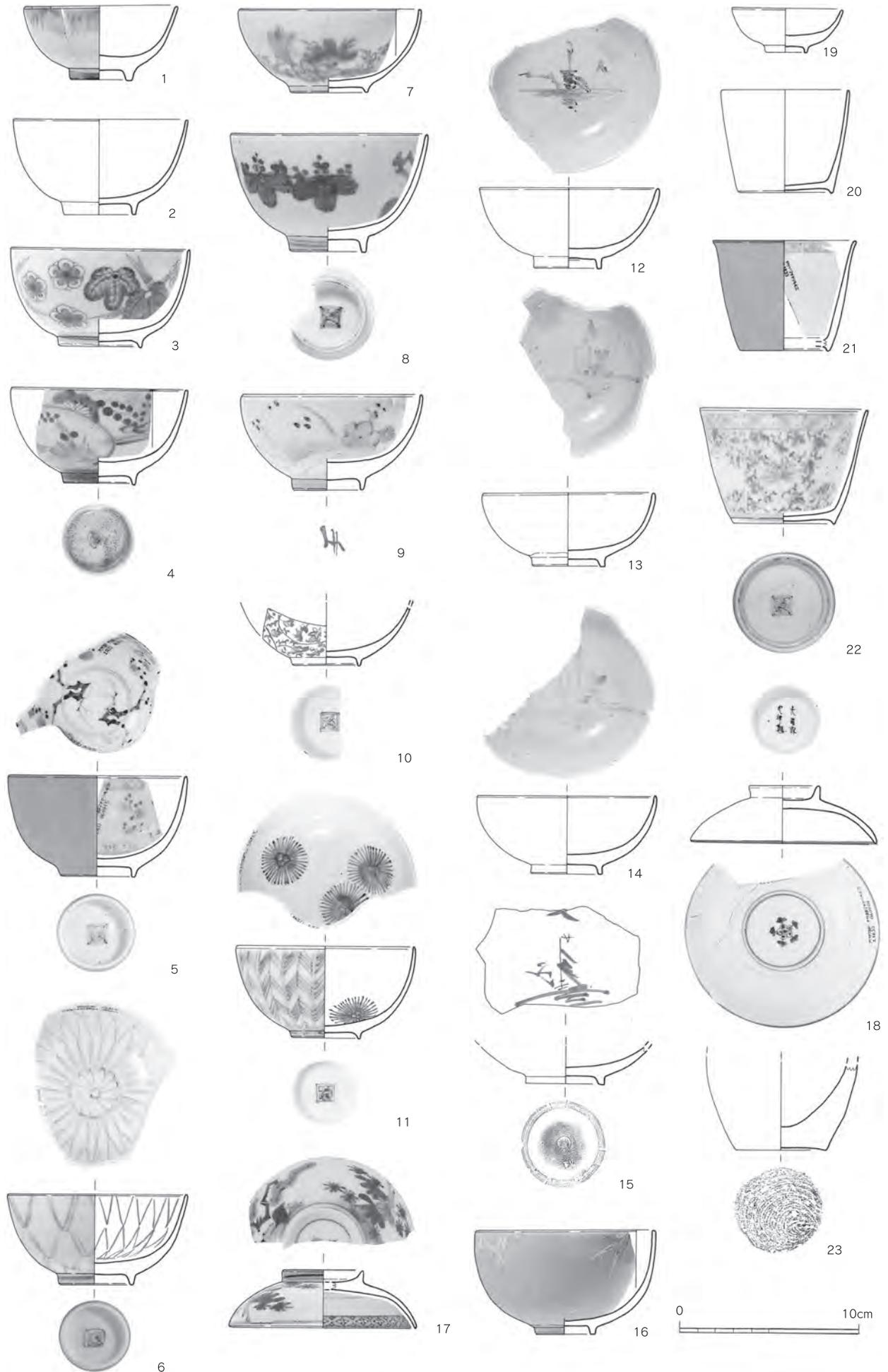
第8图 18～21・24号土坑出土土器・陶磁器实测图(3・5は1/4、他は1/3)



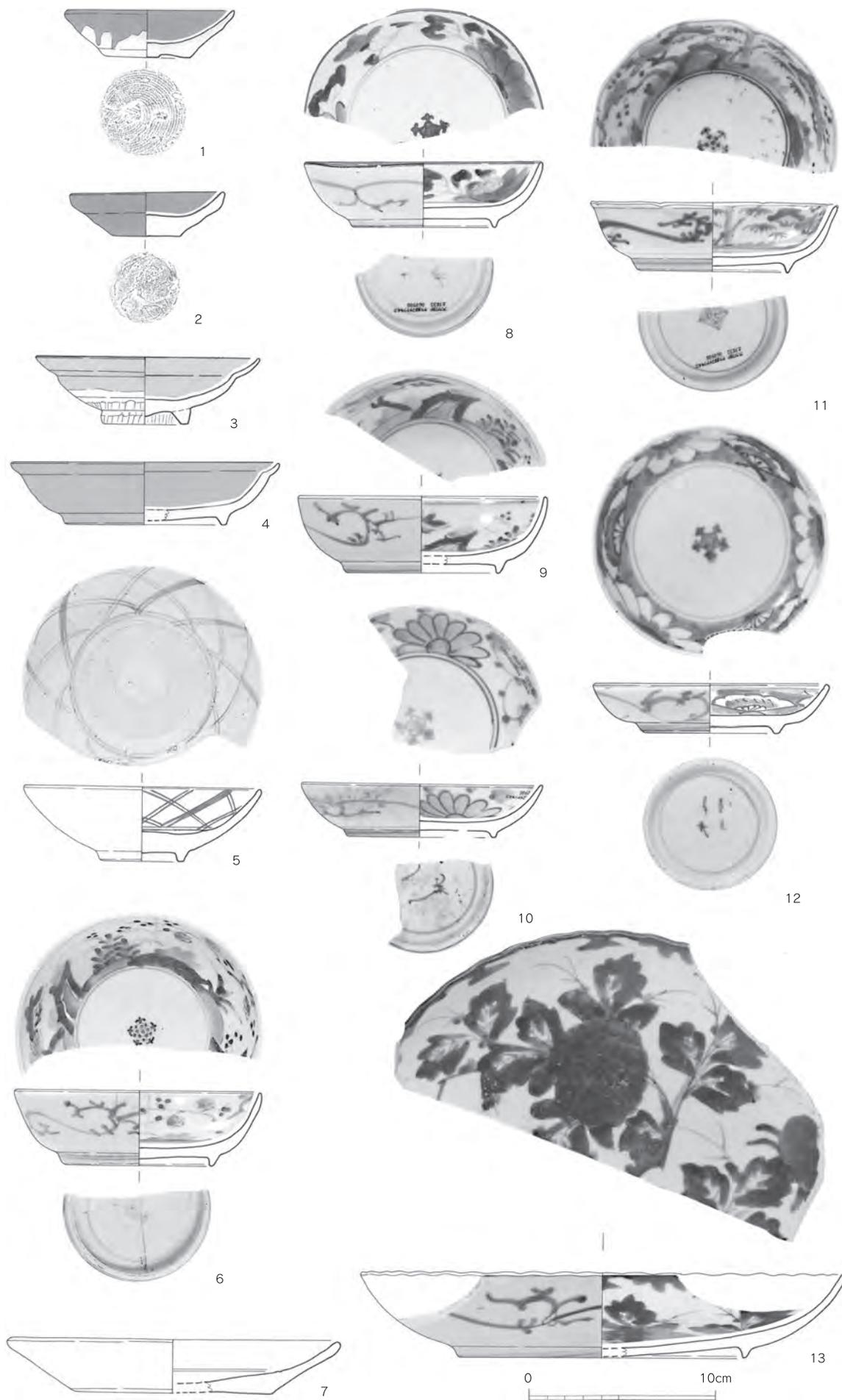
第9图 25~27·30号土坑出土土器·陶磁器实测图(1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑17 7 図15	小皿 5寸皿 菊花形	口径(8.2) 底径4.6 器高2.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型押し成型 見込み花文と源氏香文の染付	豊付釉剥ぎ 見込みにハリ 目跡2つあり		肥前	19世紀前葉
土坑17 7 図16	小型摺鉢	口径(12.8) 高台径(7.4) 器高5.9	陶器 暗灰～灰色	内面口縁から外面胴部は 灰褐から茶灰色の光沢の ある鉄釉 内面は鉄漿	内面摺り目12本単位	見込みに重ね 焼きの痕跡あり	鉄釉に光沢が あり、胎も肥 前ではない	不明	不明
土坑17 7 図17	摺鉢	口径(35.0)	陶器 赤茶灰色	発色不良の鉄釉を 全面	内面摺り目単位不明			肥前	1750) 1860
土坑17 7 図18 図版1	紅猪口 紅皿	口径4.4 高台径1.2 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉 内面から 外面口縁部	型押し成型で、外面蛸唐草文	底部露胎	完形	肥前	不明
土坑18 8 図1	碗	口径9.8 高台径3.6 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉 全面に掛 ける	外面に家紋文染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	5割残存	肥前	1710) 1750
土坑18 8 図2	小皿 5寸皿	口径12.0 高台径4.3 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉 全面に掛 ける 発色悪く白 濁	内面寿文の染付	底部露胎 見込 みの蛇ノ目釉剥ぎに 重ね焼き痕あり		波佐見	1680) 1740
土坑18 8 図3	甕	口径(8.4～ 8.6)	陶器 灰色	内外鉄釉で発色不 良	外面肩部に縄目文帯が貼り付け 内面肩部は格子目タタキ当て具痕	口唇部は釉剥 ぎ その上に 貝目跡あり		肥前	17世紀前半
土坑18 8 図4	蓋	裾径9.0 つまみ径1.5 器高3.2	陶器 橙褐色	鉄釉を上のみ	外底は糸切り	底部露胎 胎土目が付着	7割残存	肥前	不明
土坑18 8 図5	摺鉢	底径11.4 器高12.7	陶器 暗紫灰色	—	内面摺り目15本単位 底部糸切りと思われるが摩滅している	見込みに重ね 焼きの痕跡あり	口縁のみ鉄釉 施釉と思われる	肥前	1650) 1690
土坑19 8 図6	碗 端反形	口径10.6 高台径4.1 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に山水文、内面に網目文、見込みに崩 れた波濤文を染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	7割残存	波佐見	19世紀中葉
土坑19 8 図7	杯	口径5.9 高台径2.2 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	見込みにコバルトの吹絵で「酒」、その横に 赤彩の手描きで「百葉之長也」と銘が描かれ るが痕跡のみ残る	豊付釉剥ぎ	9割残存	肥前	19世紀後半
土坑19 8 図8 図版1	紅猪口 紅皿	口径4.8 高台径1.2 器高1.6	磁器 完形のため不明	透明釉 内面から 外面口縁部	型押し成型で、外面菊花文	底部露胎	完形	肥前	不明
土坑20 8 図9	片口鉢	口径(18.3)	陶器 暗紫灰色	外面は胴上半に白化粧土を柳描き状に掻き取りし、内面はカキ目 の後白化粧土をハケ掛けた後、黄緑灰色の灰釉掛け		口唇部釉拭き 取り		肥前	17世紀後半
土坑21 8 図10	碗	口径11.3 高台径4.2 器高5.1	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉 高台以外 全面	外面赤彩で折れ松葉、内面は黒彩、緑彩で 茎・花、赤彩で花を描く花文 見込みの蛇ノ 目釉剥ぎ部は緑彩	見込みの蛇ノ目 釉剥ぎ部に胎土 目跡 底部露胎	6割残存	肥前	不明
土坑21 8 図11	碗	口径(11.6) 高台径4.2 器高4.9	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉全面 貫入あり	無文	見込みの蛇ノ目 釉剥ぎ部に胎土 目跡 豊付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑21 8 図12	碗	口径11.0 高台径4.2 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉 全面 釉切 れあり	外面に帆掛舟など山水文染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	6割残存	肥前	1680) 1700
土坑21 8 図13	皿	高台径(6.2)	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外 に掛ける 貫入あり	無文	見込みの蛇ノ目 釉剥ぎ部と豊付 釉剥ぎ後に胎土 目跡		肥前	1690) 1780
土坑21 8 図14	火鉢	口径(30.2) 底径(23.2)	瓦質土器 にぶい灰色	—	外面ナデで、ミガキなし 内面ハケ	不明	脚がつく	在地	不明
土坑24 8 図15	碗	口径11.0 高台径5.0 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に梅松樹文、内面袈裟襷文帯、見込み は5弁花文、裏銘は富貴長春染付	—		肥前	18世紀中葉
土坑24 8 図16	碗	口径(10.8)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に梅松樹文、内面袈裟襷文帯染付	—		肥前	18世紀中葉
土坑24 8 図17	碗	口径(10.1) 高台径(4.0) 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文	豊付釉剥ぎ 砂目付		肥前	1710) 1750
土坑24 8 図18	小皿	口径(6.6) 高台径(2.8) 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面染付だがモチーフ不明	豊付釉剥ぎ 砂目付		不明	不明

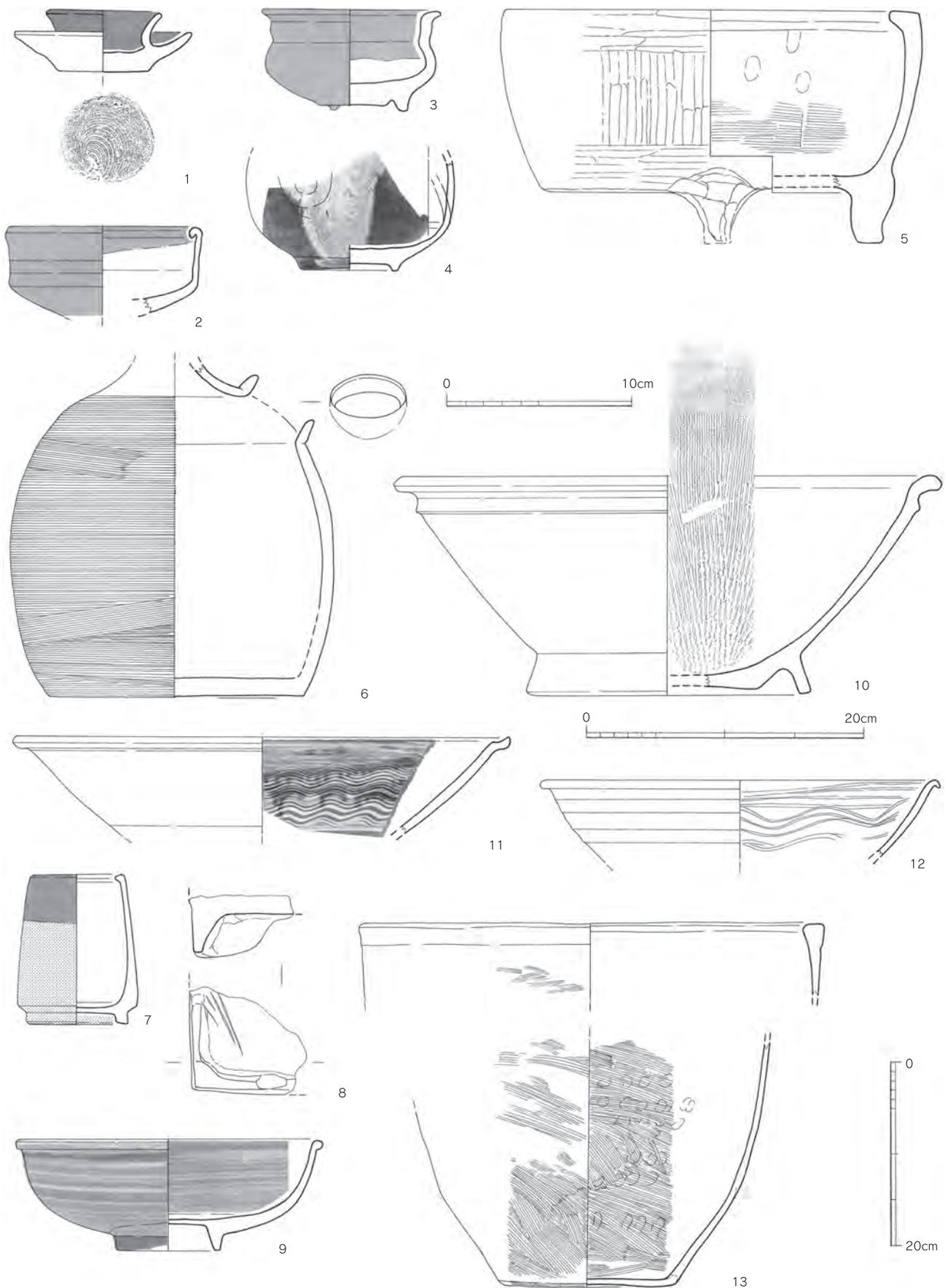
表5 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表4



第10图 33号土坑出土土器·陶磁器实测图1(1/3)



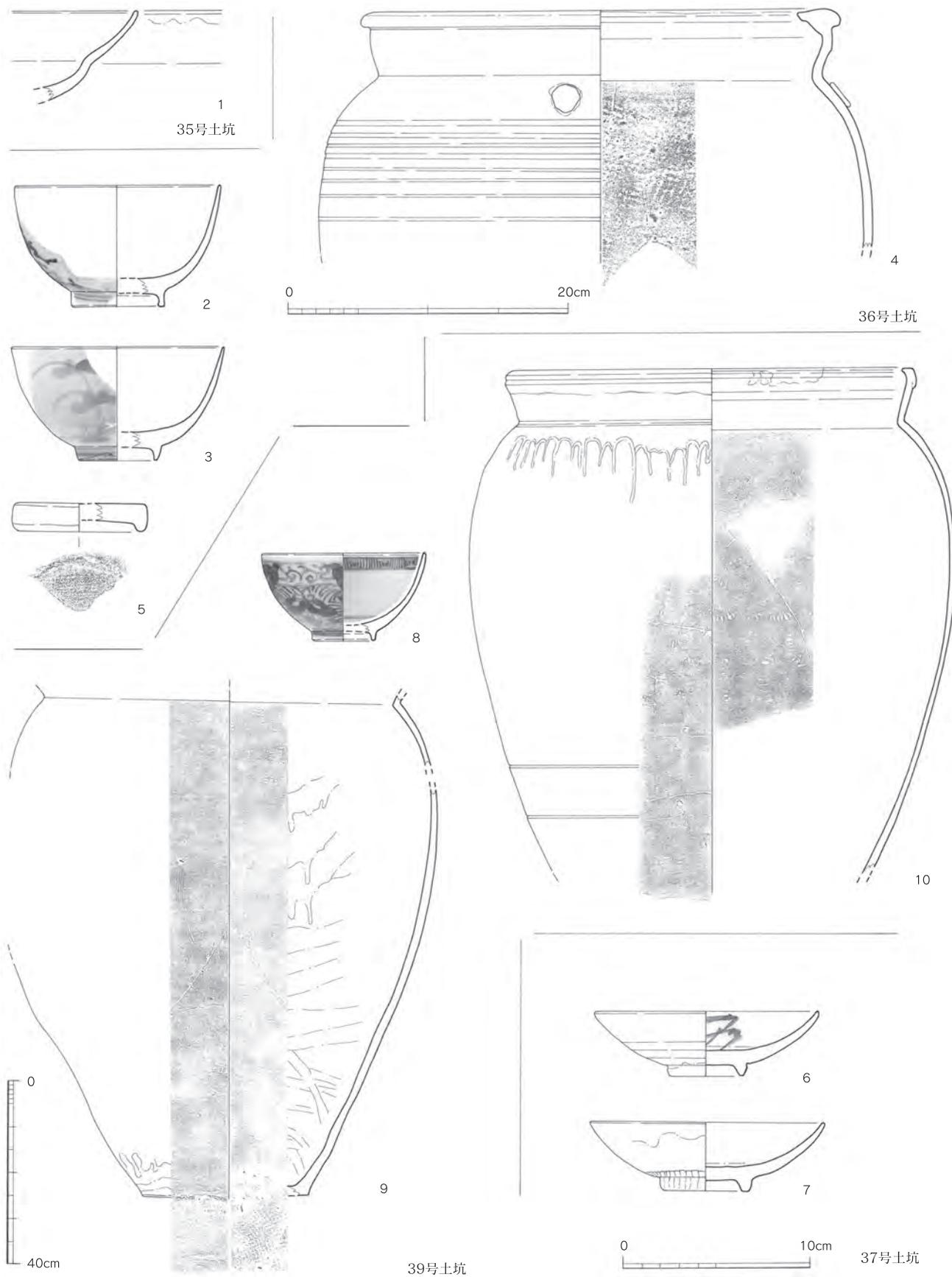
第 11 图 33 号土坑出土土器·陶磁器实测图 2 (1/3)



第12図 33号土坑出土土器・陶磁器実測図(5・10～12は1/4、13は1/6、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑24 8図19	皿	—	陶器 にぶい黄灰白色 軟質	透明釉 全面 貫入著しい	内面染付だがモチーフ不明	—	陶胎染付	波佐見	不明
土坑25 9図1	杯 端反形	口径6.4 高台径2.4 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1680 } 1740
土坑25 9図2	小碗	口径8.2 高台径3.3 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良	外面に菊花文のコンニャク印染付	高台露胎		肥前	1700 } 1740
土坑25 9図3	碗	口径8.5 高台径3.8 器高5.2	陶器 灰色	鉛釉を全面に掛けた上に、外面口縁部と内面に暗灰色の薬灰釉を流し掛け		畳付釉剥ぎ		小石原	不明
土坑25 9図4	碗	口径(9.1) 高台径(4.2) 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文 口鏝	畳付釉剥ぎ 砂目付		肥前	1700 } 1750
土坑25 9図5	碗	口径(9.7) 高台径(3.8) 器高4.5	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑25 9図6	碗	高台径3.6	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑25 9図7	碗	口径9.8 高台径3.4 器高4.1	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑25 9図8	碗	口径9.8 高台径4.0 器高4.1	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑25 9図9 図版1	碗	口径9.8 高台径3.8 器高4.1	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑25 9図10	碗	口径(9.7) 高台径(4.0) 器高4.3	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑25 9図11	碗	口径9.8 高台径4.0 器高3.9	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑25 9図12	碗	口径10.2 高台径3.8 器高4.3	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑25 9図13	碗	口径9.8 高台径3.6 器高4.5	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑25 9図14	皿	口径(17.2) 高台径6.5 器高4.3	陶器 暗紫灰白色	内面白化粘土の打ちハケ目後、黄褐色の灰釉を高台を除いて掛け		見込み蛇ノ目 釉剥ぎ 高台露胎		肥前	不明
土坑25 9図15	摺鉢	—	陶器 暗紫灰色	鉛釉を口縁部だけに掛ける	内面摺り目単位不明 口縁肥厚、内面口縁部下に凹線	—	—	肥前	1650 } 1690
土坑25 9図16	甕	口径(19.2)	陶器 暗紫灰白色	鉄釉を全面に掛ける	輪状の浮文を肩部に貼り付け	—	—	肥前	不明
土坑26 9図17	瓶	高台径(4.0)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文染付	畳付釉剥ぎ 砂目付		肥前	1780 } 1860
土坑27 9図18	小碗	口径(8.8) 高台径3.6 器高4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に草花文の染付	高台露胎		肥前	1700 } 1740
土坑30 9図19	瓶	口径1.7 最大径7.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に蛸唐草文の染付	—	—	肥前	1780 } 1860
土坑30 9図20	皿	口径13.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に芭蕉文の染付	—	—	肥前	不明
土坑33 10図1	小碗	口径8.5 高台径3.4 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面口縁部に雨降文、胴下位に界線を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付	5割残存 歪みあり	波佐見	1700 } 1750
土坑33 10図2	碗	口径9.8 高台径4.0 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ 砂目付	7割残存	肥前	1700 } 1750
土坑33 10図3	碗	口径10.1 高台径4.7 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文、胴下位に界線、外底に角福を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付	6割残存	肥前	1700 } 1750
土坑33 10図4	碗	口径(9.9) 高台径4.1 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文、裏銘に渦福を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付	底部が焼成時の煤付き	波佐見	1680 } 1740

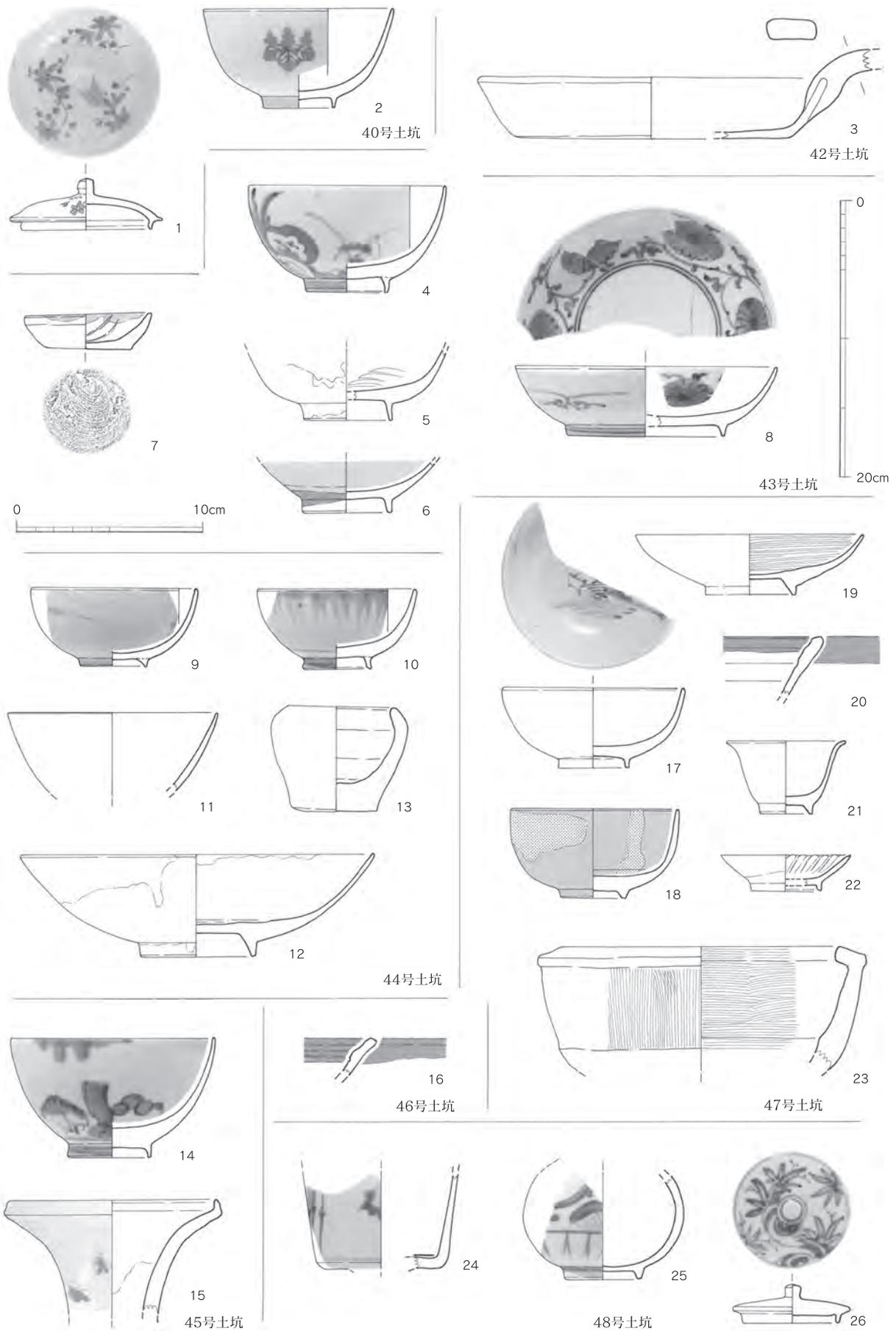
表6 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表5



第13図 35～37・39号土坑出土土器・陶磁器実測図(4は1/4、9・10は1/12、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑33 10図5	碗	口径(10.0) 高台径4.2 器高5.6	磁器 灰白色	外面胴部は青磁釉、 外底と内面は透明 釉	内面に梅樹文と崩れた袈裟襷文帯、裏銘に 角福染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	7割残存	肥前	1750) 1780
土坑33 10図6	碗	口径(10.1) 高台径4.2 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面2重、内面1重の網目文、見込みに菊花 文、裏銘に崩れた渦福染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	6割残存	波佐見	1750) 1770
土坑33 10図7	碗 浅半球形	口径10.2 高台径4.4 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に花と帆掛舟文を染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	6割残存	肥前	1710) 1750
土坑33 10図8	碗	口径11.0 高台径4.2 器高6.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に桐文・円文・琴柱文 裏銘に角福染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	5割残存	肥前	1700) 1750
土坑33 10図9	碗 くらわんか手	口径10.0 高台径4.0 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉 全面 発色不良	外面に草花文・雪ノ輪文、裏銘に崩れた「大明」染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	7割残存	波佐見	1750) 1770
土坑33 10図10	碗 浅半球形	高台径3.8 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に花唐草文、裏銘に角福を染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	2割残存	肥前	1710) 1750
土坑33 10図11	碗 浅半球形	口径10.0 高台径3.9 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に矢羽文、裏銘に角福、見込みに雪輪 文を染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	6割残存	肥前	1710) 1750
土坑33 10図12	碗	口径(10.0) 高台径3.8 器高4.5	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外 に掛ける	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑33 10図13	碗	口径(9.7) 高台径4.1 器高4.1	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外 に掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文 外底に円文の刻印あり	高台露胎	4割残存 京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑33 10図14	碗	口径(10.0) 高台径4.0 器高4.6	陶器 暗黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外 に掛ける 貫入あり	外底に円文の刻印	高台露胎	5割残存 京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑33 10図15	碗	高台径6.4	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外 に掛ける 貫入顕著	見込みに鉄絵の山水文 外底に「小口」の刻印あり 「小柳」か	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑33 10図16	碗	口径(10.0) 高台径3.4 器高5.8	陶器 暗黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外 に掛ける 貫入あり 焼成不良	外面に青・緑彩の葉文	高台露胎	3割残存 京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑33 10図17	蓋	裾径10.4 つまみ径4.5 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉 全面 内面釉切れ	外面楓、松樹文、天井部は「富貴」か 内面口 縁部に袈裟襷文帯、内面天井部に5弁花文を 染付	つまみ上端釉 剥ぎ	4割残存	肥前	18世紀中葉
土坑33 10図18	蓋	裾径10.4 つまみ径4.9 器高3.2	磁器 灰白色	外面胴部は青磁釉、 外面天井部と内面 は透明釉	外面天井部は「大明成化年製」か 内面天井 部に2重界線内に5弁花文を染付 口鏝	つまみ上端釉 剥ぎ	8割残存	肥前	1750) 1780
土坑33 10図19	杯	口径6.2 高台径2.3 器高2.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文	豊付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
土坑33 10図20	猪口	口径(7.2) 高台径5.4 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文	豊付釉剥ぎ	3割残存	肥前	18世紀中葉
土坑33 10図21	猪口	口径(8.0) 高台径(5.0) 器高6.2	磁器 灰白色	外面胴部は青磁釉、 外底と内面は透明 釉	内面口縁部に崩れた袈裟襷文帯	豊付釉剥ぎ	1割残存	肥前	1780) 1820
土坑33 10図22 図版1	猪口	口径9.4～9.7 高台径5.2 器高6.4	磁器 完形のため 不明	透明釉を全面に掛 ける 釉切れあり	外面口縁部に崩れた袈裟襷文帯、花唐草と 雲状の花文が交互に入る 裏銘に角福を染 付	豊付釉剥ぎ	完形	肥前	17世紀末) 18世紀前葉
土坑33 10図23	焼塩壺	底径5.0 最大径8.4	土師質土器 にぶい黄灰色～明 橙色 混入物なし	—	外底糸切り 内外ナデ	不明		在地	不明
土坑33 11図1 図版1	小皿	口径9.4～9.7 底径4.8 器高2.7	陶器 暗紫褐色	鉄釉内面から外面 口縁部だけに掛か る	外底糸切り 口唇部の一部に肥厚があるが、 そこが欠損している 肩口だったかも	不明	内面灰被り	肥前	不明
土坑33 11図2	小皿	口径8.6 底径4.0 器高2.5	陶器 橙褐色	鉄釉を全面に掛 ける	外底糸切り	胎土目付着	内面灰被り 9割残存	肥前	不明
土坑33 11図3	小皿 5寸皿	口径12.4 高台径4.7 器高3.7	陶器 灰白色 軟質	黒釉を内面から外 面中位まで掛ける	外面下位はカンナ痕	見込みを蛇ノ目 に釉剥ぎし、胎 土目跡2箇所あり		肥前	1690) 1780

表7 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表6



第14図 40・42～48号土坑出土土器・陶磁器実測図(3・17は1/4、他は1/3)

15図4は陶器の摺鉢の底部だが、平底で、胎は肥前のものなので、口縁部に鉄釉を掛けるタイプと考えられる。

16図15は染付碗で、小さな丸文の充填を地文としており、氷烈文が退化したものではないだろうか。

17図5は陶器の瓶で、底部が小さく自立しないことから、壁掛けの花入れと見られる。胴部の屈曲は意図的なものである。17図7は陶器の半胴甕で、高台の畳付には重ね焼き時に接触した面とそうでない面の色調差がある。17図9は陶器の摺鉢で、外面の重ね焼きした部分のみ焼成が不十分になり、色調異なる。17図16は磁器の蓋で、裾の一部に煤が付着しているので、灯明皿として使用していたことがわかる。

19図2は染付碗で、畳付が尖っていたり、外面に網目の上に界線を入れるなど、器形やモチーフに特徴があり、外面と内面で発色が違うことから焼成方法も独特である。見込みの菊花文の類例から平戸焼の可能性がある。19図13は陶器の摺鉢の底部で、欠損部を打ち搔いて再利用した可能性がある。口縁部が残っていないが、平底の摺鉢であることから、鉄釉が口縁部のみに掛かるタイプだろう。

21図4は土師質土器の小皿で、色調は淡赤橙～暗黄灰色で、ほかのものと同色調がやや異なるが、焼成が強すぎて赤く変色したものであり、器形・調整は同じなので、搬入品ではない。21図5は土師質土器の小皿で、ほぼ完形の口縁の一部に煤が付着しているので、灯明皿として使用していたことがわかる。21図8は土師質土器の小皿で、他の蒲池焼と思われる胎と同じ黄白色であるが、器形が異なっている。同様の粘土を使用する別地域の産かもしれない。

22図5は瓦質土器の火鉢で、脚は3つのうち1つが接合部で欠損しており、その接合面には格子刻みが施される。

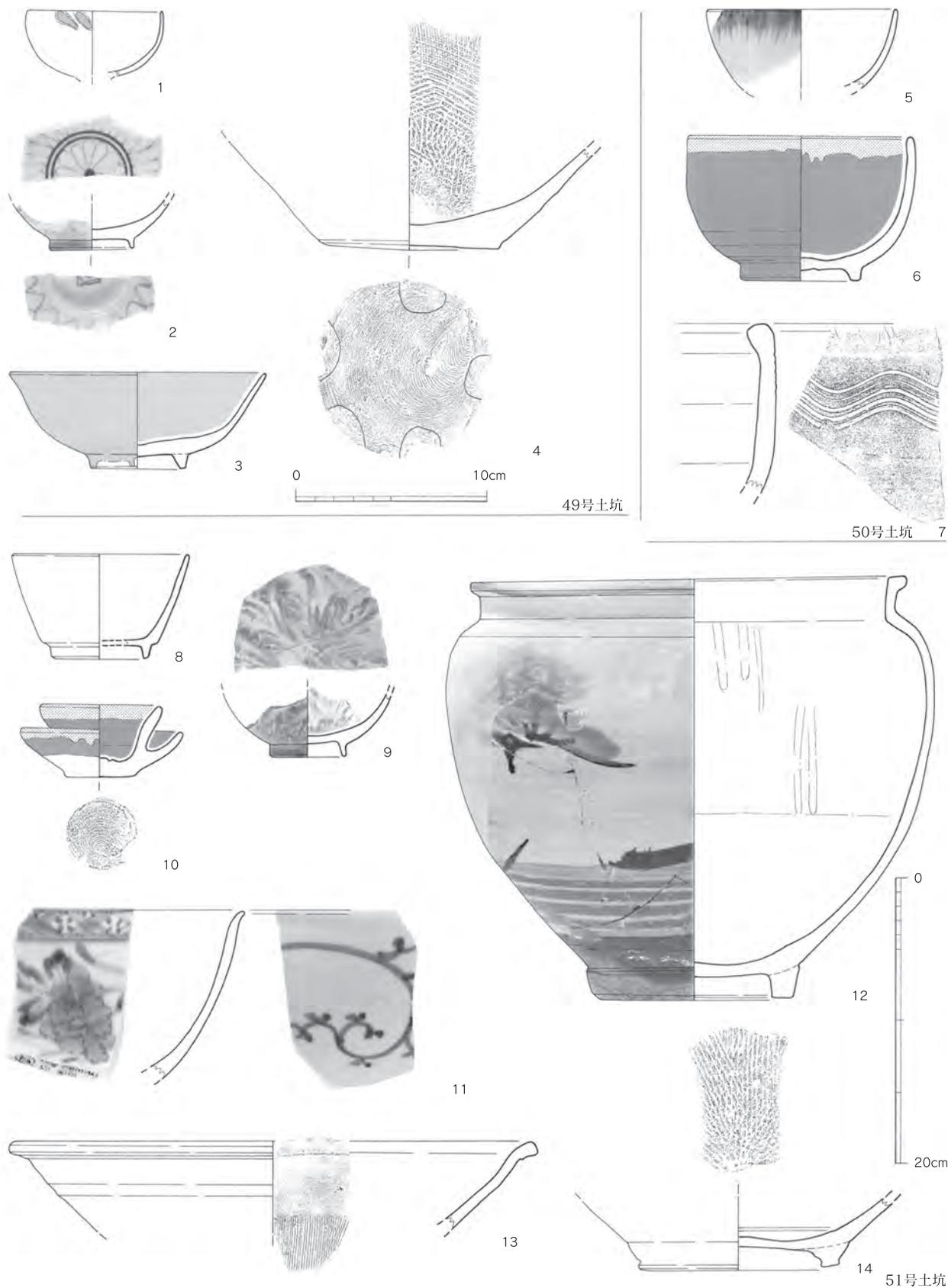
23図2は染付の皿で、口縁部の残りが悪くはっきりしないが、花卉状であった可能性がある。23図12は陶器の碗で、高台内に製作時の粘土塊が付着している。23図17は磁器の瓶で、染付に上絵付けしたものである。赤彩が褪色しているが、本来は良品であっただろう。

24図1は陶器の鉢で、外面胴中位に鉄釉を施す際に付着した指の跡が指紋つきで残っている。鉄絵と緑彩の文様は弓野焼の半胴甕によくみられるものに近い。24図2は瓦質土器の火鉢の脚で、型押し成型による獣面文を貼り付けている。裏側に穿孔があるが、焼成を良くするためのものであろう。24図10は土師質土器の小皿で、内面が部分的に黒色しているので灯明皿として使用している。24図12は陶器の小皿で、見込みに釉が剥がれた部分があるが、これは重ね焼きした別個体を外した際に剥がれたものだろう。

25図8は染付碗で、高台が低く、見込みに砂目を塗布する珍しい例で、モチーフはやや変わっている。肥前系ではあるが産地が異なるのではないだろうか。25図14は土師質土器の焙烙で、使用により外面は煤が付着しているが、内面には変色がなく、口縁部で明瞭に別れる。

26図6は染付の小皿で、55号土坑出土の19図11、58号土坑出土の20図5とはモチーフが酷似している。別個体だが同一窯の産であろう。

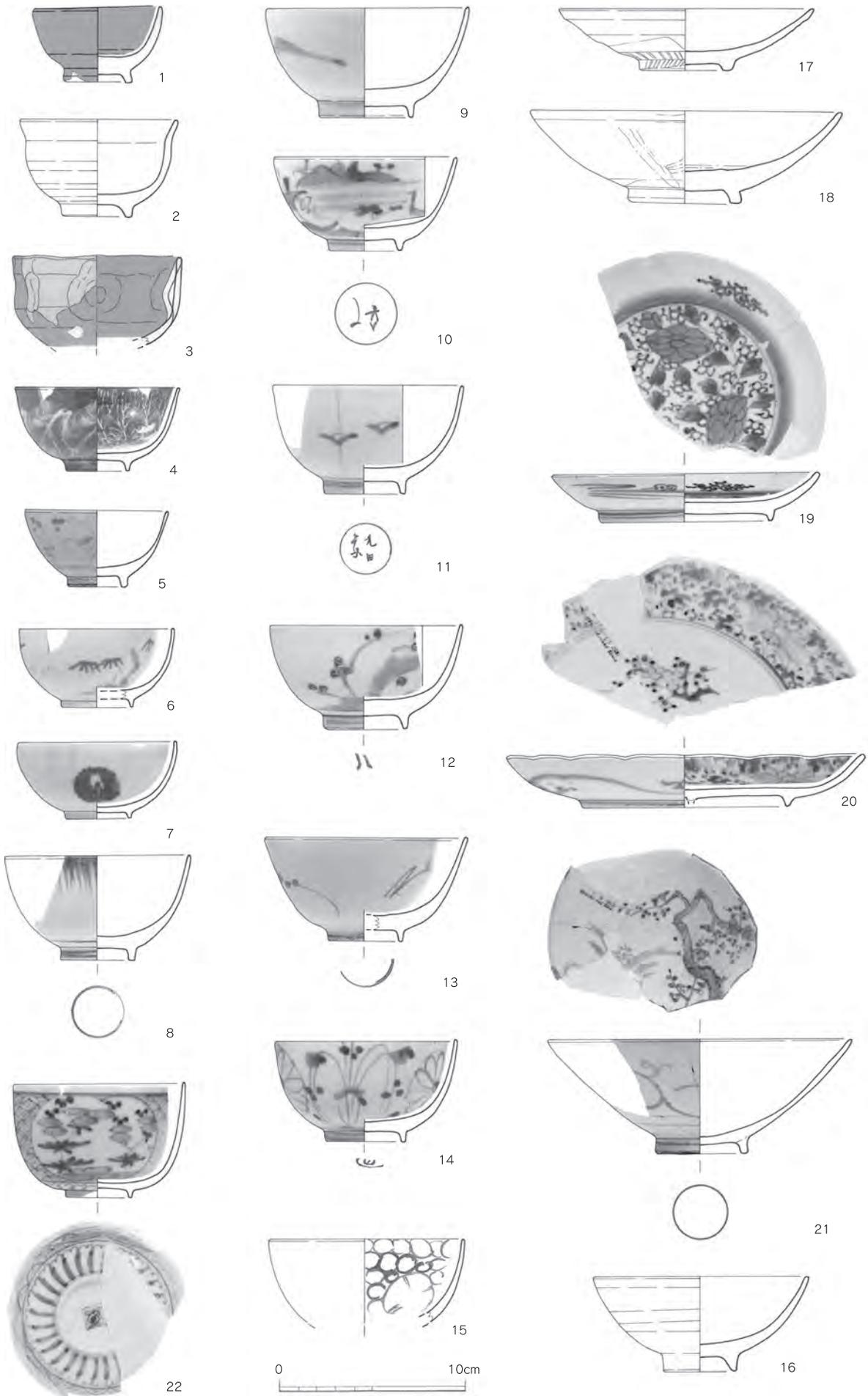
27図2は陶器の瓶の口縁部である。口縁部のみだが、陶器の皿にしては扁平すぎるので、口がほぼ水平に大きく開く仏花瓶を想定した。27図11は土師質土器の焜炉で、口唇部が灰白色化して



第15図 49～51号土坑出土土器・陶磁器実測図(4・12～14は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑33 11図4	小皿 5寸皿	口径15.0 高台径9.0 器高3.5	磁器 灰白色	青磁釉 全面 釉切れあり	無文	畳付釉剥ぎ 砂目付	4割残存	肥前	不明
土坑33 11図5	小皿 5寸皿	口径13.2 高台径4.7 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面は二重網目文の染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡2つ、蛇ノ目釉剥ぎにアルミナ塗布	6割残存	波佐見	1750 } 1810
土坑33 11図6	皿	口径13.6 高台径8.6 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面菊樹文・草花文、見込みに5弁花文の染付 裏銘は崩れた渦福	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡2つあり		肥前	1700 } 1740
土坑33 11図7	皿	口径(18.4) 高台径(10.8) 器高3.0	土師質土器 にぶい黄灰色 混入物なし	—	内外ナデ、外底ケズリ	不明	4割残存	在地	不明
土坑33 11図8	皿	口径(13.2) 高台径8.4 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉全面貫入あり	外面唐草文、内面花文、見込みに5弁花文の染付 裏銘は「大明年製」 口鏝	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡2つあり	4割残存	波佐見	1680 } 1740
土坑33 11図9	皿	口径(13.8) 高台径(8.5) 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面松樹文・草花文、見込みに5弁花文の染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡2つあり	3割残存	波佐見	1680 } 1740
土坑33 11図10	皿	口径(13.4) 高台径(8.1) 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面半菊文・雪ノ輪文、見込みに5弁花文の染付 裏銘は「大明年製」	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡2つあり	2割残存	波佐見	1680 } 1740
土坑33 11図11	皿	口径13.8 高台径8.3 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面松文・竹文、見込みに5弁花文の染付 裏銘は角福	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡2つあり	5割残存	肥前	1730 } 1740
土坑33 11図12	皿	口径13.0 高台径7.6 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面半菊文・扇文、見込みに5弁花文の染付 裏銘は大明年製	畳付釉剥ぎ砂目付 見込みにハリ目跡2つ	9割残存	波佐見	1680 } 1740
土坑33 11図13	皿	口径(27.0) 高台径(16.1) 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面・見込みに菊文の染付 口鏝状の染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡2つあり	3割残存	肥前	不明
土坑33 12図1	灯明受皿	受け部口径6.2 底径5.0 器高3.4	陶器 にぶい橙茶灰色	光沢のない鉄釉を上面に掛け	外底糸切り 粘土粒跡1つあり	底部露胎	8割残存	肥前	不明
土坑33 12図2	香炉	口径(10.6)	陶器 暗黄灰白色	内面口縁部から外面胴部中位まで銅緑釉	内外ナデ	—	内外変色しているが、廃棄時のものか	肥前	18世紀後半
土坑33 12図3	香炉	口径(9.6) 底径3.6 器高5.4	磁器 灰白色	青磁釉内外底部以外は全面	脚貼り付け	底部露胎	3割残存	肥前	不明
土坑33 12図4	瓶 ペコカン壺	最大径11.0 高台径5.4	陶器 暗黄灰白色	外面胎釉の上に薬灰釉を流し掛け焼成不良		畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ部に胎土目付着	5割残存	小石原	不明
土坑33 12図5	火鉢	口径(29.8) 底径(28.4) 器高16.8	瓦質土器 金ウンモ入る	—	外面は口縁部と胴下位を横方向、その間を縦方向にミガキ、縦方向のミガキは暗文状に意匠している 内面は上半がハケのナデ消し、下半はハケ 脚部横の沈線は接合面の調整痕	不明		在地	不明
土坑33 12図6 図版1	尿瓶	最大径17.5	陶器 灰黑色	鉄釉を外面に掛ける	外面カキ目	底部露胎	内面はカルキ付着	肥前	不明
土坑33 12図7 図版2	瓶 線香立て	口径5.2 高台径5.5 器高8.2	陶器 にぶい暗黄灰色 半磁器状	下半分に柿釉を掛けた後、上半分にオリーブ色の灰釉掛け		畳付釉剥ぎ	9割残存	肥前	不明
土坑33 12図8	方形鉢	長軸5.2 短軸6.2 高さ3.4	土師質土器 黄灰色	無釉	三角形の隅の脚がのこる 上面は水平に剥がれているので、接合部であろう	不明	裏面の沈線は接合面の調整痕	在地	不明
土坑33 12図9	鉢	口径(16.6) 高台径(5.6) 器高6.1	陶器 にぶい暗黄灰色	内面から外面胴部に白化粧土を掛け、ハケ状掻き取り後、灰褐色の灰釉を掛ける		底部露胎	4割残存	肥前	不明
土坑33 12図10	摺鉢	口径(39.6) 高台径(20.4) 器高15.9	陶器 にぶい橙褐色	鉄釉を外内外に掛ける	摺り目は15本単位 高台接合部には沈線が入る	畳付釉剥ぎ	見込みに重ね焼き痕なし	肥前か	1750 } 1860
土坑33 12図11	鉢	口径(36.0)	陶器 暗赤紫色	内面口縁部は白化粧土をハケ掛け、胴部は塗布した後脚状掻き取り後、内外に緑灰褐色の灰釉を掛ける 最後に内面に胎釉を2条流し掛け		—		肥前	1690 } 1750
土坑33 12図12	鉢	口径(21.5)	陶器 黄灰色	内面に白化粧土を脚状釉剥ぎした後、内外黄緑灰色の灰釉掛け		—		肥前	1690 } 1780
土坑33 12図13 図版2	大甕	口径(110.0) 底径43.6	土師質土器 にぶい黄灰～灰白色	無釉	内外面・底面にもハケが丁寧に入り、タタキの当て具痕を消して凹凸のみ残る	不明	摩滅・変色なし	在地	不明

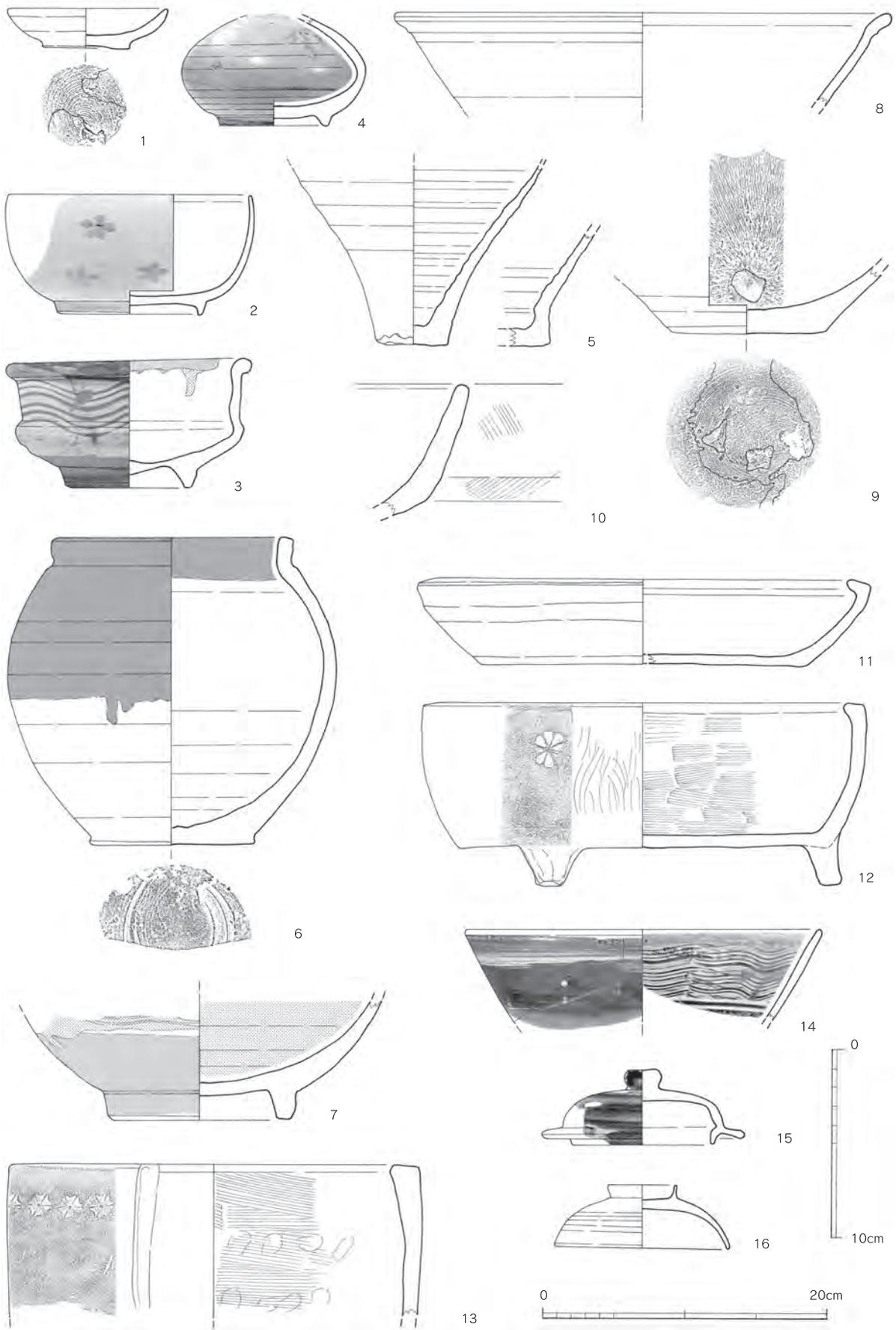
表8 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表7



第16图 52号土坑出土土器・陶磁器实测图1(1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							挿図番号	形状	()は復元値
図版番号	通称名								
土坑35 13図1	小皿 5寸皿	—	陶器 黄灰色	外面に緑灰白色の灰釉を施した後、内面から外面口縁部は鉛釉		—		肥前	1690) 1780
土坑36 13図2	碗	口径(11.0) 高台径(4.9) 器高6.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に梅樹文、胴下位に界線を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付		肥前	1700) 1740
土坑36 13図3	碗	口径(11.4) 高台径(4.2) 器高6.2	磁器 灰色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面に草花文、胴下位に界線を染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680) 1740
土坑36+黄 灰色土包含 層 13図4	甕	口径(34.2)	陶器 黒紫色	外面鉄釉薄掛け	内外格子タタキ当て具痕 内底はハケ 外面片部に円形浮文	口唇部の内面 側半分釉剥ぎ	図上接合	肥前	17世紀後半
土坑36 13図5	焼塩壺蓋	径(6.6) 器高1.5	土師質土器 橙褐色	無釉	内面に布目圧痕	不明		不明	不明
土坑37 13図6	小皿 5寸皿	高台径(4.0) 器高3.5	磁器 灰白色	白濁した透明釉	内面寿文の染付	底部露胎 見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、胎土目付着		波佐見	1680) 1740
土坑37 13図7	小皿 5寸皿	口径(12.6) 高台径(4.9) 器高3.6	陶器 灰白色	外面に緑灰白色の灰釉を施した後、内面から外面口縁部は銅緑釉		底部露胎 見込みを蛇ノ目釉剥ぎし、重ね焼き痕あり		肥前	1690) 1780
土坑39 13図8	碗	口径(8.8) 高台径(3.4) 器高4.7	磁器 灰白色 暗紫灰色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文、胴下位に界線、内面口縁部に崩れた雷文帯を染付	骨付釉剥ぎ 砂目付	4割残存	肥前	1820) 1860
土坑39+土 坑33+溝4 上層+黄灰 色土包含層 13図9 図版2	大甕	口径(87.8) 最大径(63.2)	陶器 黄橙色 混入物あり	内外鉄釉 頸部が帯状に露胎	タタキ当て具痕はナデ消しているが、外面は格子目、内面は花文状の当て具痕が残る	不明		小石原	不明
土坑39+土 坑30+溝1 表込め 13図10	大甕	最大径(90.0) 底径72.0	陶器 暗紫灰色	外面鉄釉 内面鉄 釉ハケ掛け	内面は格子目タタキ当て具痕あり 外面はナデ消し	不明	頸部と胴部は 接合しない	肥前	不明
土坑40 14図1 図版2	蓋	裾径7.0 つまみ径0.9 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	上面楓文染付	受け部釉剥ぎ	完形	肥前	不明
土坑40 14図2 図版2	碗 半球碗	口径10.2 底径3.8 器高5.4	磁器	透明釉を全面に掛ける	外面桐文コンニャク印判染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1700) 1740
土坑42 14図3	焙烙	杯部口径(25.0) 杯部底径(19.4) 杯部器高4.4	瓦質 灰白色の中に黒色 雲母片目立つ	無釉	把手部は杯部口縁を挟む 底部ハケ	不明	底面以外は煤 付着	在地	不明
土坑43 14図4	碗	口径(10.6) 高台径(4.6) 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面草文染付	受け部釉剥ぎ		肥前	1680) 1740
土坑43 14図5	碗	高台径(4.6)	陶器 暗灰色	白化粧土を内外ハケ掛けし、暗緑灰色の灰釉全面掛け 貫入あり		畳付釉剥ぎ 砂目付		現川焼	1690) 1740
土坑43 14図6	碗	高台径(4.8)	陶器 黄灰色	緑灰色の灰釉を内面と外面体部に掛け、体部下位は鉄釉 貫入あり		底部露胎		現川焼	1690) 1740
土坑43 14図7 図版2	小皿	口径10.0 高台径3.8 器高1.7	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	無釉	外底糸切り	外底に粘土粒 痕2つ	ほぼ完形 口縁の一部に煤付着	在地	不明
土坑43 14図8	小皿 5寸皿	口径(14.0) 高台径(8.4) 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉 外面から内面口縁部に掛ける	外面に唐草文、内面唐草文と菊花文染付			肥前	18世紀代
土坑44 14図9	碗 半球碗	口径(9.0) 高台径3.6 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉 外面から内面口縁部に掛ける	外面に草文染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710) 1750
土坑44 14図10	小碗	口径(8.6) 高台径3.6 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉 外面から内面口縁部に掛ける	外面に雨降り文染付	畳付釉剥ぎ 砂目付		波佐見	不明

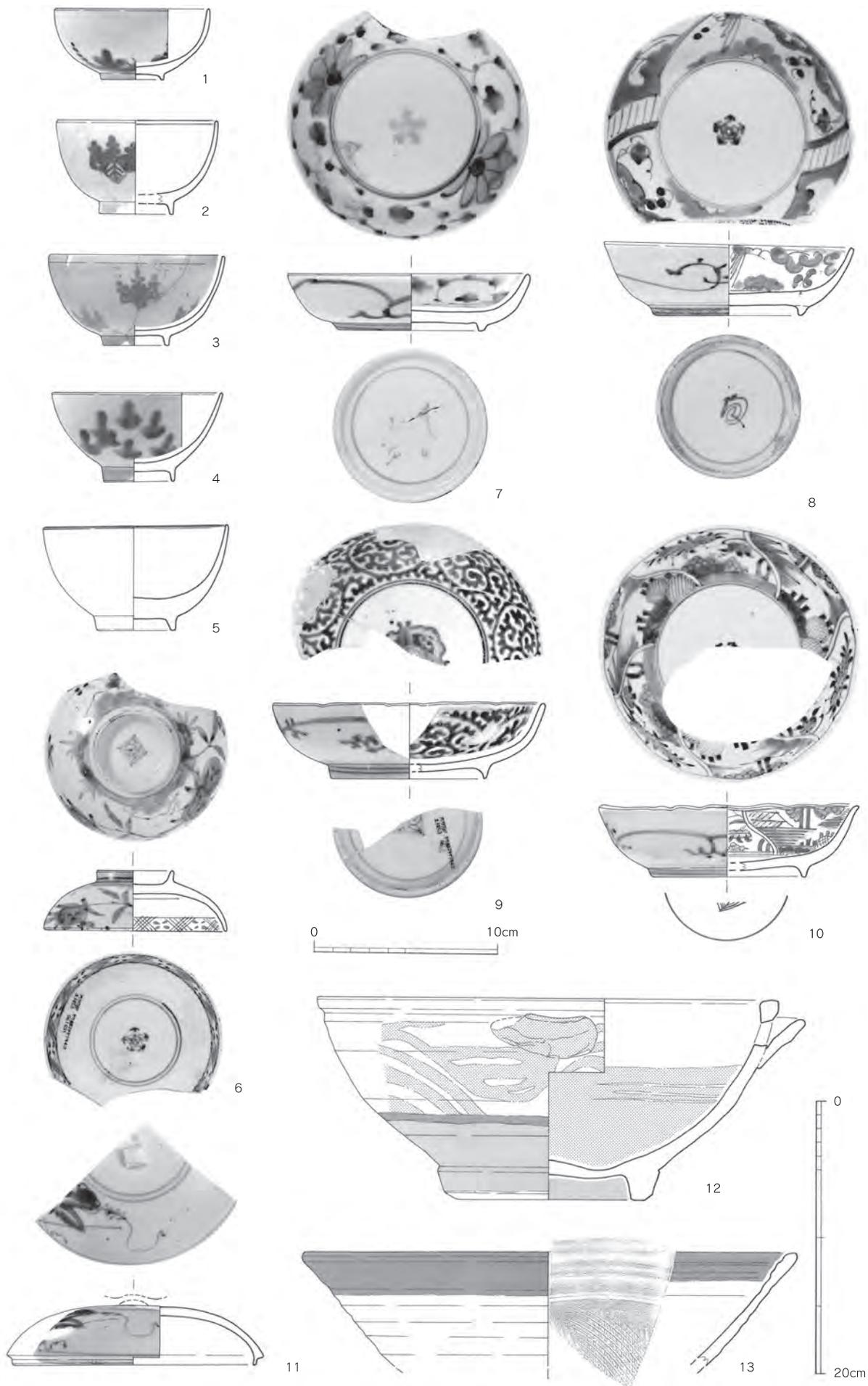
表9 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表8



第17図 52号土坑出土土器・陶磁器実測図2(8・9・11~14は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑44 14図11	碗	口径(11.4)	磁器 灰白色	外面青磁釉 内面透明釉	口籍	—		肥前	1780) 1810
土坑44 14図12	小皿	口径(19.2) 高台径6.2 器高5.5	陶器 黄橙色 軟質	緑灰褐色の灰釉を内面と外面体部に掛け、内面は薄い薬灰釉上掛け		底部露胎 見込みを蛇ノ目に釉剥ぎし、胎土目付着		肥前	1690) 1780
土坑44 14図13 図版2	焼塩壺	口径(5.6) 最大径7.3 器高5.7	土師質土器 黄白色 混入物なし	無釉	外底静止ヘラ切り	—	赤変少ない	在地	不明
土坑45 14図14 図版2	碗	口径11.0 高台径4.3 器高6.5	磁器 灰白色	透明釉 外面から内面口縁部に掛ける	外面に、山と樹文染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1680) 1740
土坑45 14図15	瓶	口径(11.6)	磁器 灰白色	白濁した透明釉 外面から内面口縁部	外面に、蝶文染付	—		波佐見	不明
土坑46 14図16	摺鉢	—	陶器 灰紫色	口縁部のみ鉄釉	摺り目単位不明	—		肥前	1650) 1690
土坑47 14図17	碗	口径(9.8) 高台径(3.8) 器高4.3	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛け、見込みに鉄絵の山水文		高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑47 14図18 図版2	碗	口径9.0 高台径3.6 器高4.8	陶器 暗灰色	鉛釉を全面に掛けた上に、外面口縁部と内面に暗緑灰色の灰釉を流し掛け		畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	小石原	不明
土坑47 14図19	小皿 5寸皿	口径(12.2) 高台径(4.9) 器高3.3	陶器 完形のため不明	内面白化粧土のハケ掛けの後、緑灰色の灰釉を全面掛け		見込み蛇ノ目釉剥ぎに目跡 畳付に目跡	完形	肥前	1690) 1780
土坑47 14図20	摺鉢	—	陶器 灰紫色	口縁部のみ鉄釉	摺り目単位不明	—		肥前	1650) 1690
土坑47 14図21	杯	口径(6.4) 高台径3.0 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ 砂目付		肥前	17世紀後半) 18世紀代
土坑47 14図22	変形小皿 菊花皿	口径(7.0) 高台径(3.8) 器高1.9	磁器 灰白色	透明釉外面胴上半から内面 発色不良	型打ち成型	高台露胎		肥前	不明
土坑47 14図23	火鉢	口径(17.6)	瓦質土器 雲母片入る におい黄灰白色に灰色が挟まれる	—	外面は口縁部と胴下位を横方向、その間を縦方向にハケ、縦方向のハケは意匠している 内面はハケ 脚部横の沈線は接合面の調整痕	不明		在地	不明
土坑48 14図24	碗 筒形	最大径4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文、胴下位に界線、外底に角福を染付	畳付釉剥ぎ 砂目付	9割残存	肥前	1700) 1750
土坑48 14図25	瓶	高台径(4.2) 最大胴径(88.6)	磁器 灰白色	透明釉 外面から内面口縁部	外面に松葉文の染付	—		肥前	18世紀後半
土坑48 14図26 図版2	蓋	裾径6.3 つまみ径0.9 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	上面楓文染付	受け部釉剥ぎ	9割残存	肥前	不明
土坑49 15図1	碗	口径(9.3)	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を内面と外面体部下位まで掛け、その上に外面に緑彩の葉を描く		—	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑49 15図2	碗	高台径(4.5)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に二重網目文、内面に網目文、見込みに菊花文、裏銘に角福が染付けられている	畳付け釉剥ぎ		肥前	1710) 1740
土坑49 15図3 図版2	小皿 5寸皿	口径13.4 高台径5.0 器高5.0	陶器 黄灰白色	暗緑灰色の灰釉を内面と外面胴部に掛け、内面には暗緑灰色の灰釉を流し掛け		見込み蛇ノ目釉剥ぎに目跡 高台露胎 砂目付	9割残存	肥前	1690) 1780
土坑49 15図4	摺鉢	底径12.5	陶器 暗灰紫色	無釉	摺り目17本単位 外底糸切り	胎土目痕あり		肥前	1650) 1690
土坑50 15図5	小碗	口径(10.0)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面口縁部やや崩れた雨降り文			肥前	1700) 1740
土坑50 15図6	碗	口径11.6 高台径6.2 器高7.8	陶器 暗黄灰色	鉛釉を内面と外面体部下位まで掛け、その上に口縁部に薬灰釉掛けだが、発色が悪く一部しか、本来の色調になっていない		底部露胎		小石原	不明
土坑50 15図7	鉢 火入れ	—	土師質土器 茶橙色	—	外面ナデの上に櫛目文	—	変色なし	在地	不明

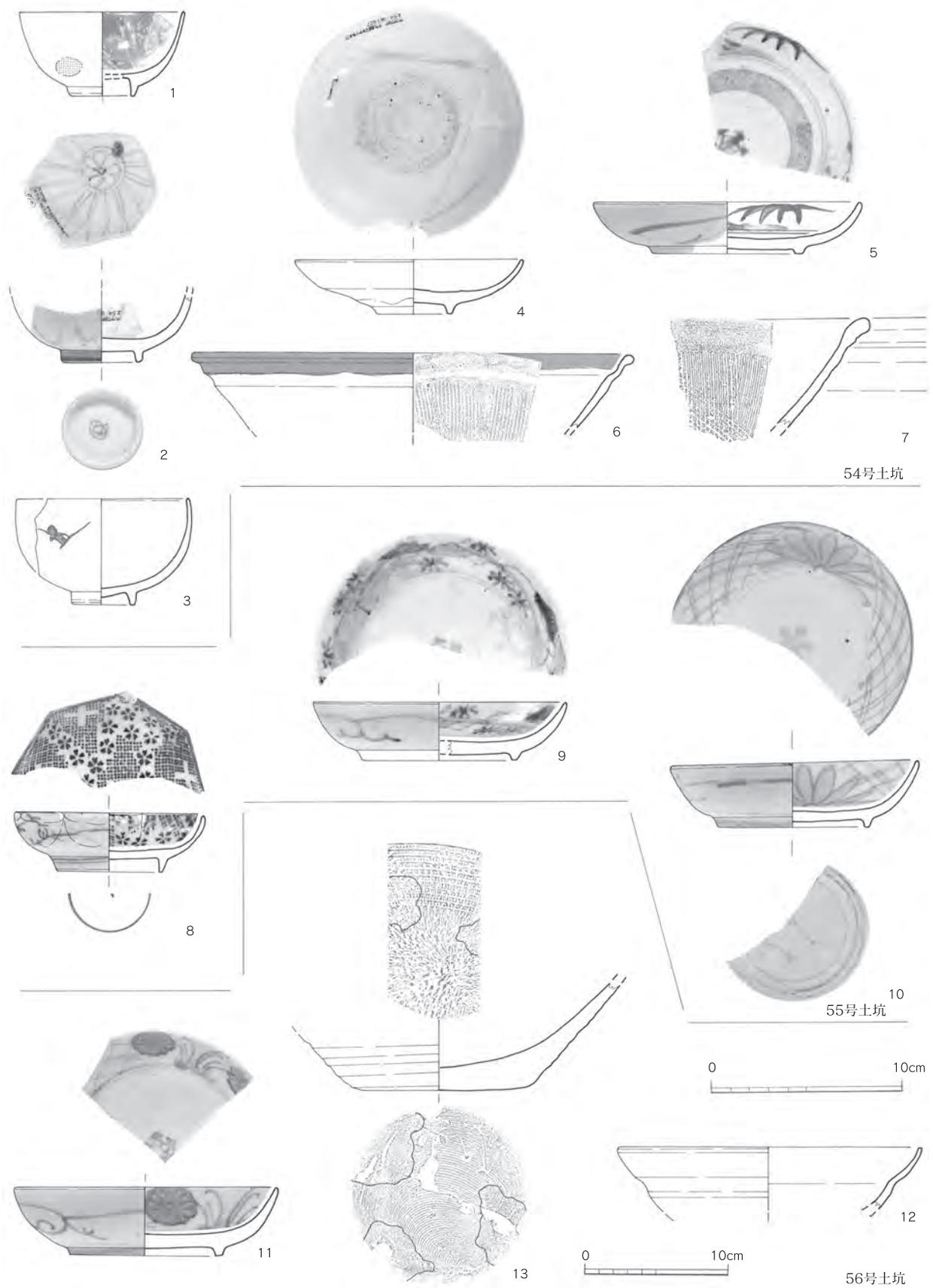
表10 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表9



第18図 53号土坑出土土器・陶磁器実測図(13は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							挿図番号	形状	() は復元値
図版番号	通称名								
土坑51 15図8	小碗 杉形	口径(9.2) 高台径(4.8) 器高5.5	陶器 黄灰色 軟質	発色不良で青緑色に変色した透明釉を全面掛け 貫入あり		豊付釉剥ぎ 砂目付		肥前	1750 } 1780
土坑51 15図9	小碗	高台径(4.0)	陶器 暗灰色	白化粧土を内外ハケ掛け、外面胴下位は打ちハケ目、透明釉全面掛け		豊付釉剥ぎ 砂目付		現川焼	1690 } 1740
土坑51 15図10 図版2	灯明受皿	受け部口径6.1 底径3.6 器高3.7	陶器 にぶい橙茶灰色	光沢のない鉄釉を 上面に掛け	外底糸切り 粘土粒跡1つあり	底部露胎 口縁部アルミ ナ掛け	8割残存	肥前	不明
土坑51 15図11	鉢	—	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面に唐草文、内面口縁部に四方禪文帯、 内面に牡丹文	—		肥前	1700 } 1750
土坑51 15図12	鉢 半胴甕	口径(30.3) 底径(14.0) 器高29.5	陶器 灰～暗灰紫色 白色粒子入る	外面から内面口縁部まで白化粧土を掛け、外面胴下位は櫛状釉掻 き取りし、その上に鉄絵で樹、緑色の灰釉で松葉を描く また、 底部は内外面とも鉄釉をかける		見込み蛇ノ目釉剥 ぎ 高台と豊付に アルミナ付着	5割残存	肥前か	19世紀中葉
土坑51 15図13	摺鉢	口径(37.0)	陶器 暗紫色	内外鉄釉	摺り目単位不明	—		肥前	1750 } 1860
土坑51 15図14	摺鉢	高台径(14.0)	陶器 橙茶褐色 やや軟質	内外鉄釉	摺り目21本単位 豊付に一箇所窪みあり	見込みに重ね 焼き痕 豊付 釉剥ぎ	内面摩滅	肥前	1750 } 1860
土坑52 16図1	小碗	口径(6.8) 高台径(3.5) 器高4.2	陶器 灰白色 軟質	胎釉を高台以外全 面掛け		高台部露胎		肥前	1690 } 1780
土坑52 16図2	小碗 甕形	口径(8.3) 高台径3.7 器高5.2	陶器 灰白色 軟質	黄緑色の灰釉を全 面掛け 貫入あり		豊付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑52 16図3	碗 拳骨形	口径(8.8)	陶器 灰色 軟質	内外胎釉掛けの上に口縁部に薬灰釉を流し掛け		豊付釉剥ぎ 砂目付		小石原	不明
土坑52 16図4	小碗	高台径(3.8)	陶器 紫灰色 陶器	内外透明釉全面掛けの後、白化粧土を外面は円形、内面は打ちハ ケ目を施す		豊付釉剥ぎ 砂目付	5割残存	現川焼	不明
土坑52 16図5	小碗	口径(7.4) 高台径3.1 器高4.5	磁器 灰白色	暗い透明釉を全 面に掛ける	外面に雪ノ輪文と花文の染付	豊付釉剥ぎ	釉垂れあり	波佐見	1680 } 1740
土坑52 16図6	小碗	口径(8.9) 高台径(3.4) 器高4.5	磁器 灰白色 軟質	透明釉を全面に掛 ける 貫入あり	外面に梅樹文と樹文の染付	豊付釉剥ぎ		波佐見	1680 } 1740
土坑52 16図7	小碗 浅半球形	口径8.6 高台径3.4 器高4.1	磁器 灰白色 軟質	透明釉を全面に掛 ける 貫入あり	外面に家紋文の藤文をコンニャク印判染付	豊付釉剥ぎ		波佐見	1750 } 1770
土坑52 16図8	碗	口径(10.0) 高台径4.6 器高5.6	磁器 灰白色 軟質	透明釉を全面に掛 ける	雨降り文染付	豊付釉剥ぎ 砂目付		肥前	1700 } 1740
土坑52 16図9	碗	口径(10.8) 高台径5.0 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に山と草樹文の染付 外面体部下位に鈍痕	豊付け釉剥ぎ		波佐見	1680 } 1740
土坑52 16図10	碗	口径9.8 高台径3.8 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に山と帆掛船の染付 裏銘は崩れた大明年製	豊付け釉剥ぎ 砂目付		波佐見	1680 } 1740
土坑52 16図11	碗	口径(10.4) 高台径4.2 器高5.9	磁器 灰白色 軟質	透明釉を全面に掛 ける	外面花文らしいものと鳥文、裏銘は大明年 製を染付	豊付釉剥ぎ 見込みにハリ 目跡2つ		波佐見	1680 } 1740
土坑52 16図12	碗	口径(10.4) 高台径4.2 器高5.6	磁器 灰白色 軟質	暗い透明釉を全 面に掛ける	外面雪ノ輪文、裏銘は大明年製が崩れて2本 線のみになったものを染付	豊付釉剥ぎ 砂目付		波佐見	1680 } 1740
土坑52 16図13	碗	口径(11.0) 高台径4.0 器高5.6	磁器 灰白色	暗い透明釉を全 面に掛ける	外面雪ノ輪文と折れ松葉文の染付	豊付釉剥ぎ 見込 み蛇ノ目釉剥ぎ後 アルミナ塗布		波佐見	1680 } 1740
土坑52 16図14	碗	口径(9.8) 高台径4.2 器高5.4	磁器 灰白色 軟質	暗い透明釉を全 面に掛ける 貫入あ り	外面雪ノ輪文と菊花文、裏銘は渦福を染付	豊付釉剥ぎ 砂目付		波佐見	1680 } 1740
土坑52 16図15	碗	口径10.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に丸文と花文の染付	—		波佐見	1680 } 1740
土坑52 16図16	小皿 5寸皿	口径11.5 高台径3.9 器高5.2	陶器 灰白色	黄灰白色の灰釉を 掛ける		豊付釉剥ぎ		肥前	1690 } 1780
土坑52 16図17	小皿 5寸皿	口径(13.6) 高台径5.1 器高3.9	陶器 黄灰白色	黄灰白色の灰釉を掛けた後、内面のみ銅緑釉掛け 外面体部下 位以下露胎		見込み蛇ノ目 釉剥ぎに重ね 焼き痕		肥前	1690 } 1780
土坑52 16図18	小皿 5寸皿	口径(16.7) 高台径5.8 器高5.0	陶器 黄灰白色	黄灰白色の灰釉 外面体部下位以下 露胎		見込み蛇ノ目 釉剥ぎに重ね 焼き痕	釉垂れあり	肥前	1690 } 1780

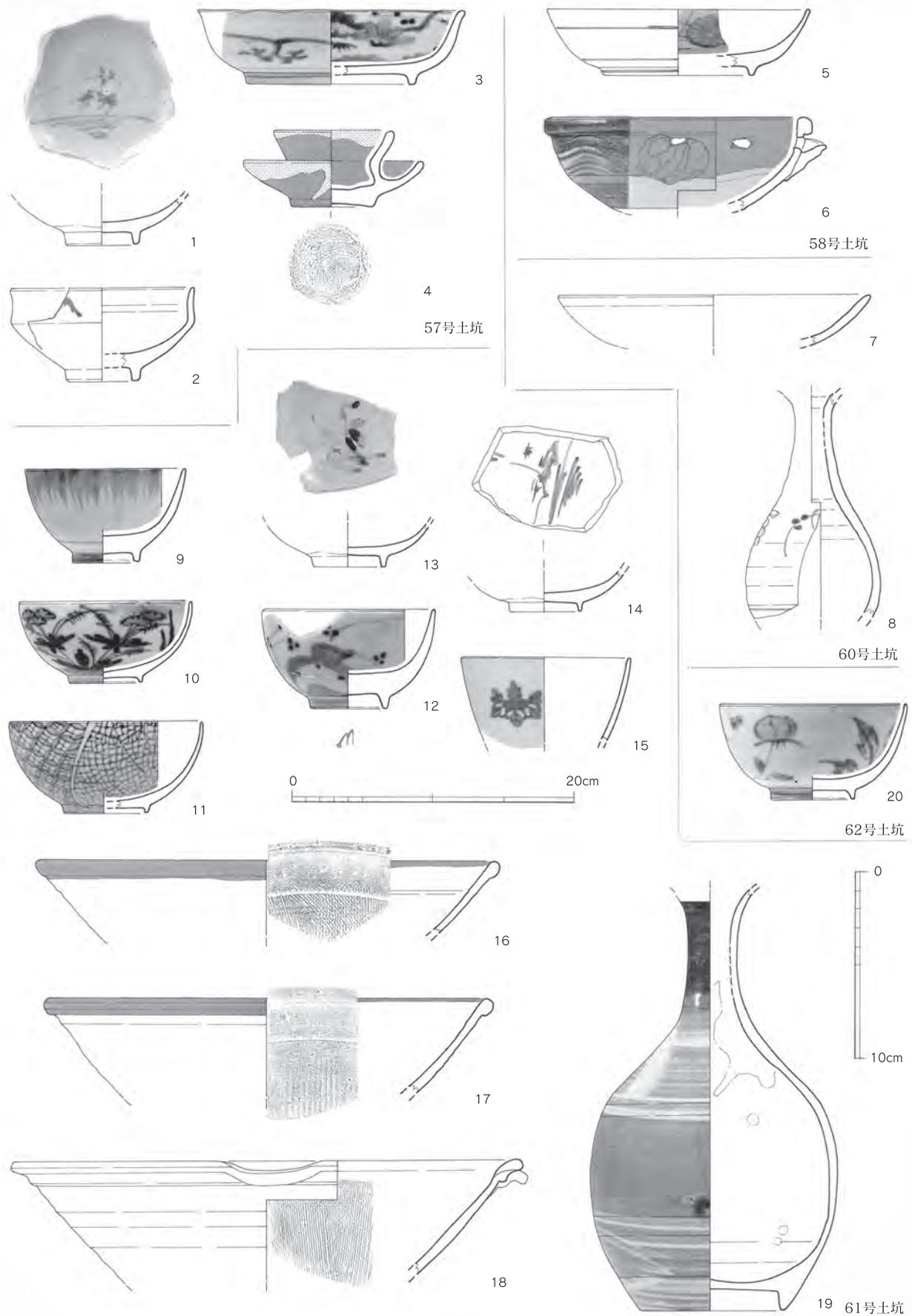
表 11 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 10



第19图 54~56号土坑出土土器・陶磁器实测图(6・7・12・13は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	量目(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							挿図番号	形状	()は復元値
図版番号	通称名								
土坑52 16図19	小皿	口径(14.4) 高台径(9.2) 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に菖蒲文、内面に唐草文、見込みに牡丹文、外底に界線の染付	畳付け釉剥ぎ		肥前	17世紀後半
土坑52 16図20	皿	口径(19.2) 高台径(11.10) 器高2.8	磁器 暗灰白色	透明釉 全面貫入あり 発色不良	外面に唐草文、内面に花唐草文、見込みに梅樹文の染付	畳付け釉剥ぎ 外底にハリ目跡1つ		肥前	1680 } 1700
土坑52 16図21	大碗	口径(16.3) 高台径4.9 器高6.1	陶器 黒灰色 陶胎染付	白濁した透明釉 全面貫入あり	外面唐草文、内面花樹文と花文の染付	畳付け釉剥ぎ		波佐見	1680 } 1740
土坑52 16図22	碗	口径(9.2) 高台径(3.4) 器高6.1	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面七宝繫ぎ文と窓内に花文、下位は変形歯文 裏銘は角福を染付	畳付け釉剥ぎ 砂目付		肥前	1740 } 1780
土坑52 17図1	小皿	口径8.3 底径4.4 器高2.2	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外底糸切り 内外ナデ	外底に粘土粒痕2つ	8割残存 変色なし	蒲池焼か	不明
土坑52 17図2	鉢	口径(12.7) 底部径(7.8) 器高6.3	磁器 灰白色 焼成不良で軟質	透明釉 全面発色不良で白濁	外面に花文が染付けられている	畳付けと内面口縁部釉剥ぎ		肥前	不明
土坑52 17図3	鉢	口径(13.0) 高台径(6.8) 器高6.5	陶器 橙褐色	口縁部から外面胴上半に白化粧土掛け後ハケ状釉剥ぎし、外面口縁部に銅緑釉流し掛け	胴下半露胎	口唇部が黒変		肥前	不明
土坑52 17図4	瓶	高台径(5.6)	磁器 灰色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面に赤彩で松葉文と界線、緑と黒彩で葉文が描かれている	畳付け釉剥ぎ		肥前	17世紀後半 } 18世紀前半
土坑52 17図5	瓶	底径3.7 花入れ	陶器 暗灰紫色 白色粒子入る	外面の底部以外鉄釉	外面ケズリ後未調整 外底糸切り後、胎土目圧痕あり	底部露胎		肥前	不明
土坑52 17図6	小型甕	口径(11.4) 底径(8.6) 器高16.2	陶器 暗灰色	外面上半から内面口縁部に光沢のある鉄釉	底部糸切り	底部露胎		小石原か	不明
土坑52 17図7	鉢	高台径9.6	陶器 茶褐色	外面下位は鉄釉ハケ掛けし、その後白化粧土を掛けてハケ状掻き取り、内面は白化粧土のハケ掛け				肥前	18世紀後半 } 19世紀中葉
土坑52 17図8	摺鉢	—	陶器 橙褐色	内外鉄釉	摺り目20本単位	—		肥前	18世紀中葉 } 19世紀中葉
土坑52 17図9	摺鉢	底径10.8	陶器 暗灰紫色 白色粒子入る	内外鉄釉	摺り目11本単位	外底・見込みに胎土目痕あり		肥前	17世紀後半
土坑52 17図10	焙烙	—	瓦質土器 灰白色	—	外面口縁部はオサエ後ナデ、内面は丁寧なハケ	不明	内面は変色なし、外面は黒灰色	在地	不明
土坑52 17図11	火鉢	口径(29.0) 底部径(23.0) 器高6.0	瓦質土器 灰白～淡暗黄橙色	—	外面ナデ 内面ナデ、内底ハケ、外底未調整で1部ハケ	不明	ミガキ 光沢なし	在地	不明
土坑52 17図12	火鉢	口径(28.4) 底部径(26.0) 器高12.9	瓦質土器 灰白が黒灰色を挟む	—	外面口縁部と下位がヨコナデで、その間はミガキ、内面ハケ後ナデ 外面に菊花文スタンプ	不明	ミガキ 光沢なし	在地	不明
土坑52 17図13	焜炉	口径(29.0)	土師質土器 断面が黒変しており色調不明	—	外面に六角形のスタンプ 内面ハケとオサエ 窓の部分の破片	不明	外面以外は欠損も含めて黒色化、内面のみ煤付着	在地	不明
土坑52 17図14	鉢	口径(25.0)	陶器 暗灰紫色 白色粒子入る	外面は胴下位に鉄釉ハケ掛けし、口縁部に白化粧土ハケ掛け後、上半に暗緑灰釉掛け 内面は白化粧土掛け後ハケ状釉剥ぎし、口縁部に銅緑釉流し掛け		—		肥前	1690 } 1750
土坑52 17図15	蓋	裾径(10.6) つまみ径1.6 器高4.0	陶器 暗黄灰色 軟質	天井部に白化粧土を掛け、ハケ状掻き取りした後、灰褐色の灰釉を上と内面天井部に掛ける		裏面は露胎		肥前か	17世紀後半
土坑52 17図16	蓋	裾径(9.2) つまみ径3.7 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	無文	つまみ上端釉剥ぎ	裾の1部分が打ちかかれて黒変している	肥前	1700 } 1740
土坑53 18図1	小碗	口径8.4 高台径3.4 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に若松文染付	畳付け釉剥ぎ	6割残存	肥前	1710 } 1750
土坑53 18図2	碗	口径(8.8) 高台径4.0 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に桐文コンニャク印判染付 口錆	畳付け釉剥ぎ	5割残存	肥前	1700 } 1740
土坑53 18図3	碗	口径(9.4) 高台径(3.6) 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に桐文コンニャク印判染付	畳付け釉剥ぎ	5割残存	波佐見	1680 } 1740
土坑53 18図4	碗	口径(9.3) 高台径3.8 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた若松文染付	畳付け釉剥ぎ	6割残存	波佐見	1680 } 1740

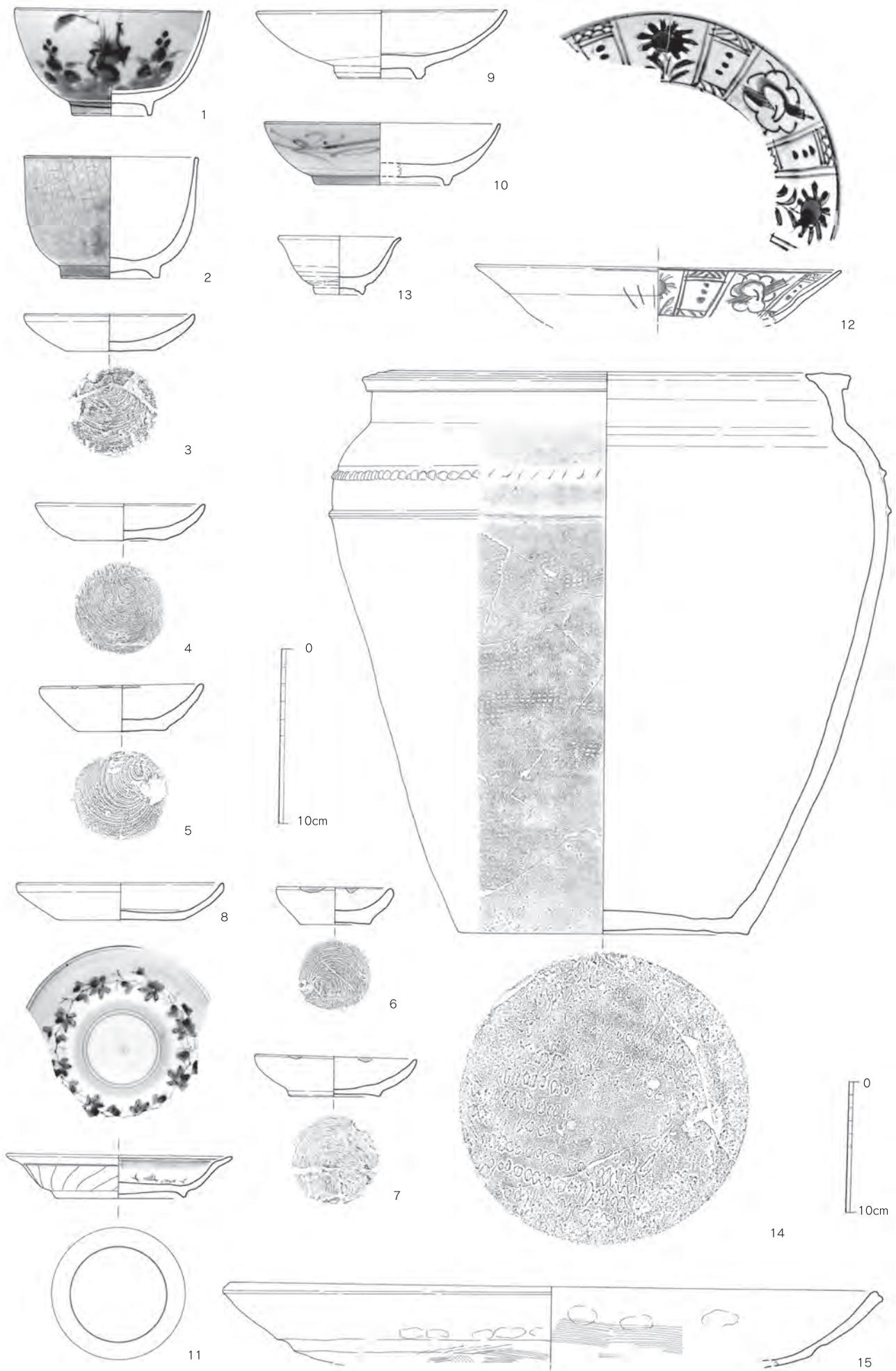
表 12 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 11



第20図 57・58・60～62号土坑出土土器・陶磁器実測図(16～18は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑53 18図5 図版2	碗	口径10.0 高台径4.2 器高5.6	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける 貫入あり	口鏝	畳付け釉剥ぎ	7割残存	肥前	1680) 1740
土坑53 18図6	蓋	裾径10.0 つまみ径4.2 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	無文	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	1700) 1740
土坑53 18図7	小皿青 5寸皿	口径11.5 高台径3.9 器高5.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面に花唐草と半菊文 見込みに5弁花文のコンニャク印判 裏銘は「大明年製」を染付け	畳付け釉剥ぎ	9割残存	肥前	1680) 1740
土坑53 18図8	小皿 くらわんか手 5寸皿	口径13.5 高台径8.1 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面に草花文染付 見込みに5弁花文コンニャク印判 裏銘は渦福	畳付け釉剥ぎ 砂目付	7割残存	波佐見	1680) 1740
土坑53 18図9	小皿 花卉口縁 5寸皿	口径(14.8) 高台径8.4 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面に蛸唐草 見込みにモチーフ不明の文様染付 裏銘は角福	畳付け釉剥ぎ	4割残存	肥前	1680) 1700
土坑53 18図10	小皿 花卉口縁 5寸皿	口径14.0 高台径8.4 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面は区画内に花樹文、山水文見込みに5弁文染付 裏銘は角福	畳付け釉剥ぎ	6割残存	肥前	1700) 1740
土坑53 18図11	蓋	裾径(13.2) 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	上面に花草文と蝶文、裏銘は角福に、内面口縁部は袈裟櫛文、天井裏は5弁花文染付	つまみ受け部 釉剥ぎ		肥前	1700) 1740
土坑53 18図12	片口鉢	口径(24.8) 高台径(11.2) 器高11.1	陶器 にぶい暗紫灰～ 暗灰色	外面白鉄漿を掛けた後、上半部白化粧土を掛けて櫛状掻き取り、その上に上半にのみオリブ色の灰釉掛け、内面は白化粧土のハケ目掛けの後、全体にオリブ色の灰釉 注口は手捏ね貼り付け	内面摺り目の単位不明	見込みに重ね焼き痕 高台釉剥ぎ部にアルミナ・砂目付着		肥前	1690) 1750
土坑53 18図13	摺鉢	口径(36.0)	陶器 暗紫灰色	鉄釉口縁部のみに掛かる	内面摺り目の単位不明	—		肥前	1650) 1690
土坑54 19図1	小碗 蛸手	口径(8.6) 底部径(3.2) 器高4.4	陶器 紫灰色	白化粧土を外側は円形、内面は吹きハケ目を施した後、内外透明釉全面		畳付け釉剥ぎ 砂目付	4割残存	現川焼	不明
土坑54 19図2	碗	高台径4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面2重、内面1重の網目文、見込みに菊花文、裏銘に崩れた渦福染付 畳付が尖る	畳付釉剥ぎ 砂目付	外面と内面で 呉須の発色が 違う	平戸焼か	1750) 1770
土坑54 19図3	碗	口径(9.0) 高台径3.4 器高5.6	陶器 灰白色	黄緑灰色の灰釉を高台以外に掛け、外面に鉄絵の山水文		底部露胎		肥前	18世紀後半
土坑54 19図4	小皿 5寸皿	口径11.4 高台径4.1 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉高台以外全面	内面に崩れた折れ松葉文染付け	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 重ね焼き痕あり 高台露胎	9割残存	肥前	1680) 1740
土坑54 19図5	小皿 5寸皿	口径(14.0) 高台径(8.0) 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に折れ松葉文、内面に竹笹文 見込みに5弁花文のコンニャク印判を染付け	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 畳付釉剥ぎ部に 砂目付 外底中央 にハリ目1つあり	4割残存	肥前	1680) 1740
土坑54 19図6	摺鉢	口径(31.0)	陶器 暗紫灰色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目の18本単位	—		肥前	1690) 1750
土坑54 19図7	摺鉢	—	陶器 にぶい灰橙褐色	内外鉄釉	内面摺り目の単位不明	—		小石原	1750) 1860
土坑55 19図8	変形小皿 8角皿	口径(9.8～10.5) 高台径(5.4) 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面・見込みは桜花と点充填文のコンニャク印判 裏銘は不明 染付	畳付釉剥ぎ	4割残存	肥前	不明
土坑55 19図9	小皿 5寸皿	口径13.2 高台径(8.1) 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面に竹笹文か 見込みに5弁花文のコンニャク印判 裏銘は「大明年製」を染付け	畳付釉剥ぎ 砂目付	4割残存	波佐見	1680) 1740
土坑55 19図10	小皿 5寸皿	口径9.2 高台径3.8 器高5.2	磁器 灰白色 軟質	発色不良で白濁した透明釉 全面	外面に二重網目文、内面に網目文、見込みに5弁花文のコンニャク印判 裏銘は「大明年製」を染付け	畳付釉剥ぎ 砂目付	6割残存 釉切れあり	波佐見	1680) 1740
土坑55 19図11	小皿 5寸皿	口径(13.8) 高台径(8.0) 器高4.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面に2重網目文とコンニャク印判の菊花文、見込みに5弁花文のコンニャク印判 裏銘は「大明年製」を染付け	畳付釉剥ぎ 砂目付	3割残存	波佐見	1680) 1740
土坑56 19図12	小皿	口径(21.4)	陶器 黄灰白色	暗黄灰色の灰釉 全面	無文	—		肥前	1650) 1690
土坑56 19図13	摺鉢	底径(11.2)	陶器 橙褐色	無釉	内面摺り目の12本単位 外底糸切り	外底と見込みに 欠損部を打ち 掻いている可 能性もある		肥前	1650) 1690
土坑57 20図1	碗	高台径4.0	陶器 黄灰白色	透明釉を高台以外に掛け、見込みに鉄絵の山水文		高台露胎		京焼風陶器 肥前	18世紀前半

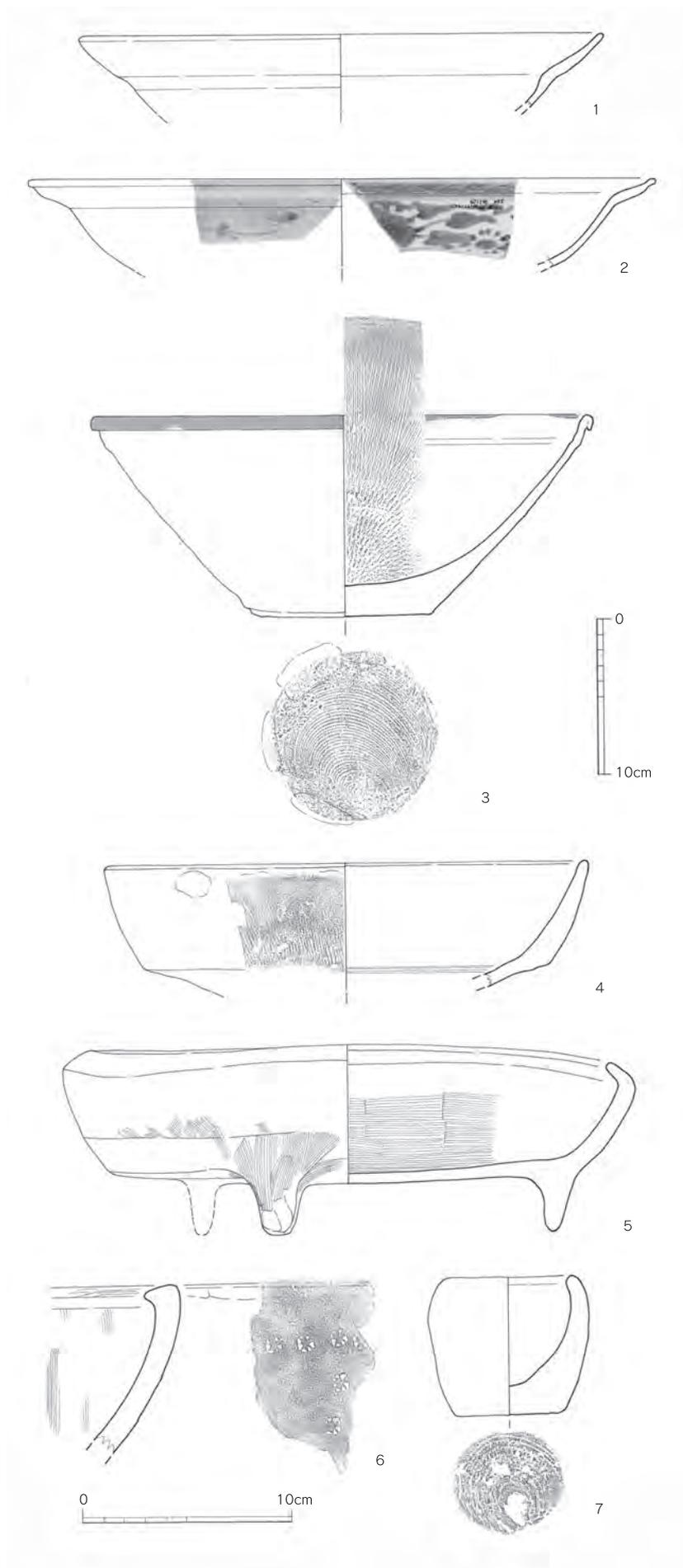
表 13 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 12



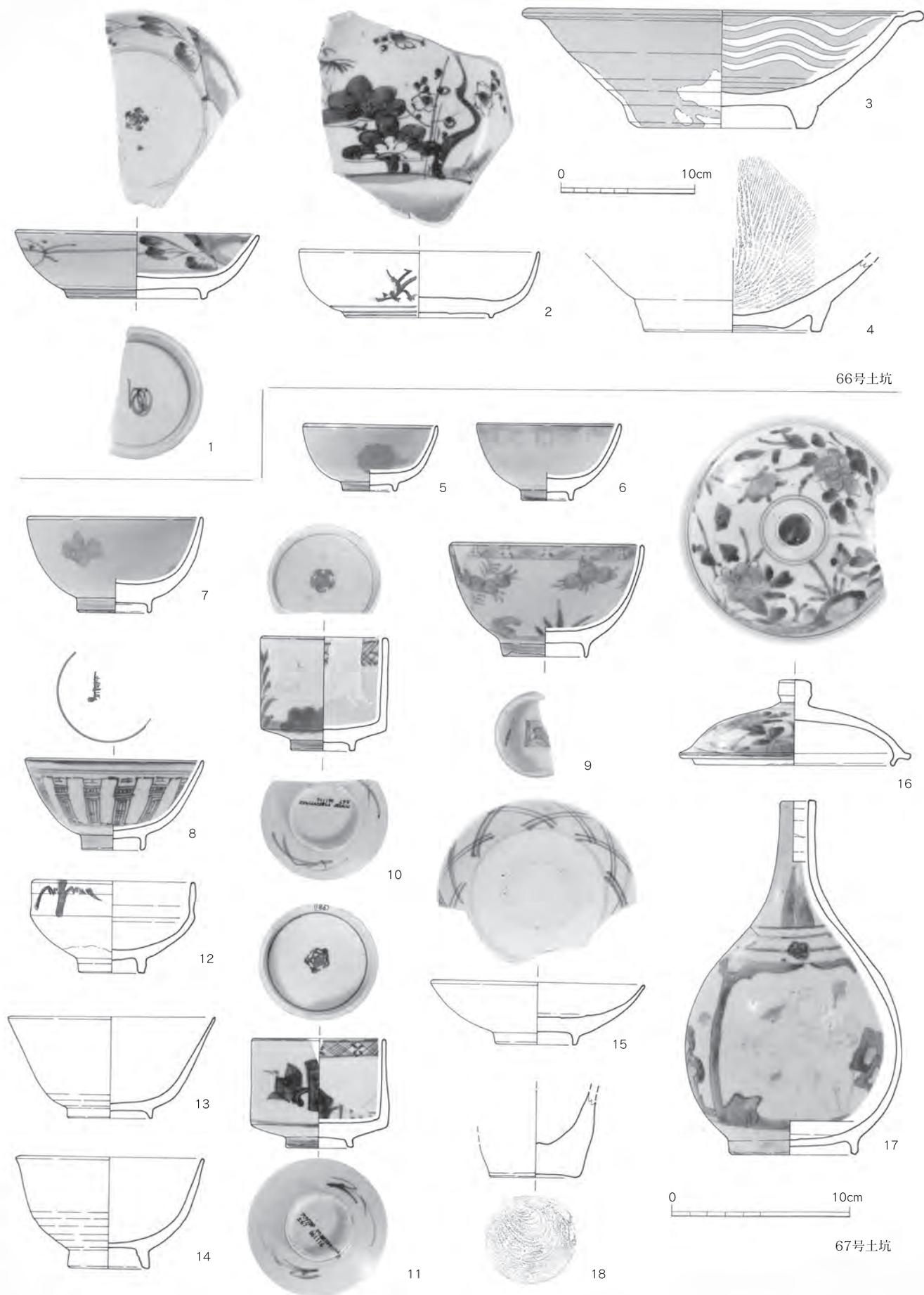
第21图 64号土坑出土土器・陶磁器实测图1(14・15は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑57 20図2	碗 腰折れ形	口径(9.8) 高台径(4.0) 器高5.0	陶器 黄灰白色	黄緑灰色の灰釉を高台以外に掛け、外面に鉄絵の山水文		高台露胎	3割残存	肥前	18世紀前半
土坑57 20図3	小皿 花卉口縁 5寸皿	口径(14.2) 高台径(9.0) 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面は区画内に花樹文、見込み5弁文、裏銘は角福を染付	豊付け釉剥ぎ	6割残存	肥前	1700 } 1740
土坑57 20図4	灯明受皿	受け部口径6.4 底径4.5 器高4.1	陶器 にぶい橙茶灰色	光沢のない鉄釉を上面に掛け	外底糸切り	受け部口縁にアルミナ附着 底部露胎 胎土目跡2つあり		肥前	不明
土坑58 20図5	小皿 5寸皿	口径(13.4) 高台径(8.0) 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面に2重網目文とコンニャク印判の菊花文、見込みに5弁花文のコンニャク印判の染付	豊付け釉剥ぎ 砂目付着	小片	波佐見	1680 } 1740
土坑58 20図6	小型片口鉢	口径(14.2)	陶器 暗紫灰色	外面上半は白化粧土の櫛状掻き取り後、胴下半に鉄釉掛け、暗緑灰色の灰釉を上半分に掛ける 内面は白化粧土のハケ状塗布の後、灰釉掛け		—		肥前	不明
土坑60 20図7	皿	口径(16.6)	陶器 灰色	緑灰色の灰釉を全面に掛ける	白化粧土の刷毛目文の上に灰釉をかけている	—		肥前	1690 } 1780
土坑60 20図8	小瓶	最大径(8.2)	磁器 灰白色	透明釉 外面は全面内面は口縁部のみ	外面雪ノ輪文の染付	—		肥前	1650 } 1750
土坑61 20図9	小碗 くわらんか手	口径(8.6) 高台径3.6 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面雨降り文の染付	豊付け釉剥ぎ 砂目付着	8割残存	波佐見	1680 } 1740
土坑61 20図10 図版2	碗 浅半球形	口径9.2 高台径3.4 器高4.3	磁器 灰白色	発色不良の透明釉	外面は草花文の染付け	豊付け釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1710 } 1750
土坑61 20図11	碗 浅半球形	口径(10.2) 高台径(4.0) 器高5.3	磁器 灰白色 軟質	発色不良の透明釉 貫入あり	外面は七宝繫ぎ文と永烈文の染付け	豊付け釉剥ぎ	5割残存	肥前	1710 } 1750
土坑61 20図12	碗 くわらんか手	口径9.2 高台径4.0 器高5.3	磁器 灰白色	発色不良の暗い透明釉	外面雪ノ輪文の染付 裏銘は崩れた「大明」	豊付け釉剥ぎ 砂目付着	8割残存	波佐見	1680 } 1740
土坑61 20図13	碗	高台径3.8	陶器 暗黄灰白色	黄灰色の灰釉を高台以外に掛け、見込みに鉄絵の山水文 貫入あり		高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀前半
土坑61 20図14	碗	高台径3.8	陶器 暗黄灰白色	黄灰色の灰釉を高台以外に掛け、見込みに鉄絵の山水文		高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀前半
土坑61 20図15	蕎麦猪口	口径(9.0)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に桐文のコンニャク印判染付	—		肥前	1700 } 1740
土坑61 20図16	摺鉢	口径(33.0)	陶器 暗茶褐色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目の10本単位	—		肥前	1690 } 1750
土坑61 20図17	摺鉢	口径(32.0)	陶器 暗紫灰色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目の11本単位	—		肥前	1750 } 1860
土坑61 20図18	摺鉢	口径(36.4)	陶器 暗茶褐色	鉄釉 全面	内面摺り目の15本単位	—		肥前	1750 } 1860
土坑61 20図19	瓶	最大径13.4 高台径7.7	陶器 にぶい黄灰~灰色	外面頸部以上は胎釉、体部は白化粧土のハケ掛けし、最後に肩部以下にオリープ色の灰釉掛け 内面は口縁部に胎釉が掛かるのみで、以下は露胎		豊付け釉剥ぎ 砂目付	9割残存	肥前	1650 } 1690
土坑62 20図20 図版2	碗	口径10.1 高台径4.6 器高5.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文、胴下位に界線、外底に角福を染付	豊付け釉剥ぎ 砂目付	9割残存	肥前	1700 } 1750
土坑64 21図1 図版2	碗	口径11.0 高台径4.5 器高5.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文と鳥文、胴下位と外底に界線、外底に角福を染付	豊付け釉剥ぎ	9割残存	肥前	1690 } 1720
土坑64 21図2 図版2	碗	口径10.0 高台径5.6 器高6.9	陶器 にぶい灰白色	透明釉を全面に掛ける	貫入を意匠している	豊付け釉剥ぎ 砂目付	9割残存	肥前	不明
土坑64 21図3	小皿	口径(9.7) 底径5.0 器高2.1	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外底糸切り 底部に焼成前の刺突あり	不明	欠損部に煤が付着していた可能性もあり	蒲池焼	不明
土坑64 21図4 図版2	小皿	口径9.6 底径5.2 器高2.1	土師質土器 淡赤橙~暗黄灰色	—	内外ナデ、外底糸切り	不明	ほぼ完形	蒲池焼	不明
土坑64 21図5 図版2	小皿 灯明皿	口径9.3 底径5.2 器高2.5	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外底糸切り	不明	ほぼ完形 口縁の一部に煤付着	蒲池焼	不明
土坑64 21図6	小皿 灯明皿	口径6.3 底径4.2 器高2.1	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外底糸切り	不明	ほぼ完形 口縁の一部に煤付着	蒲池焼	不明

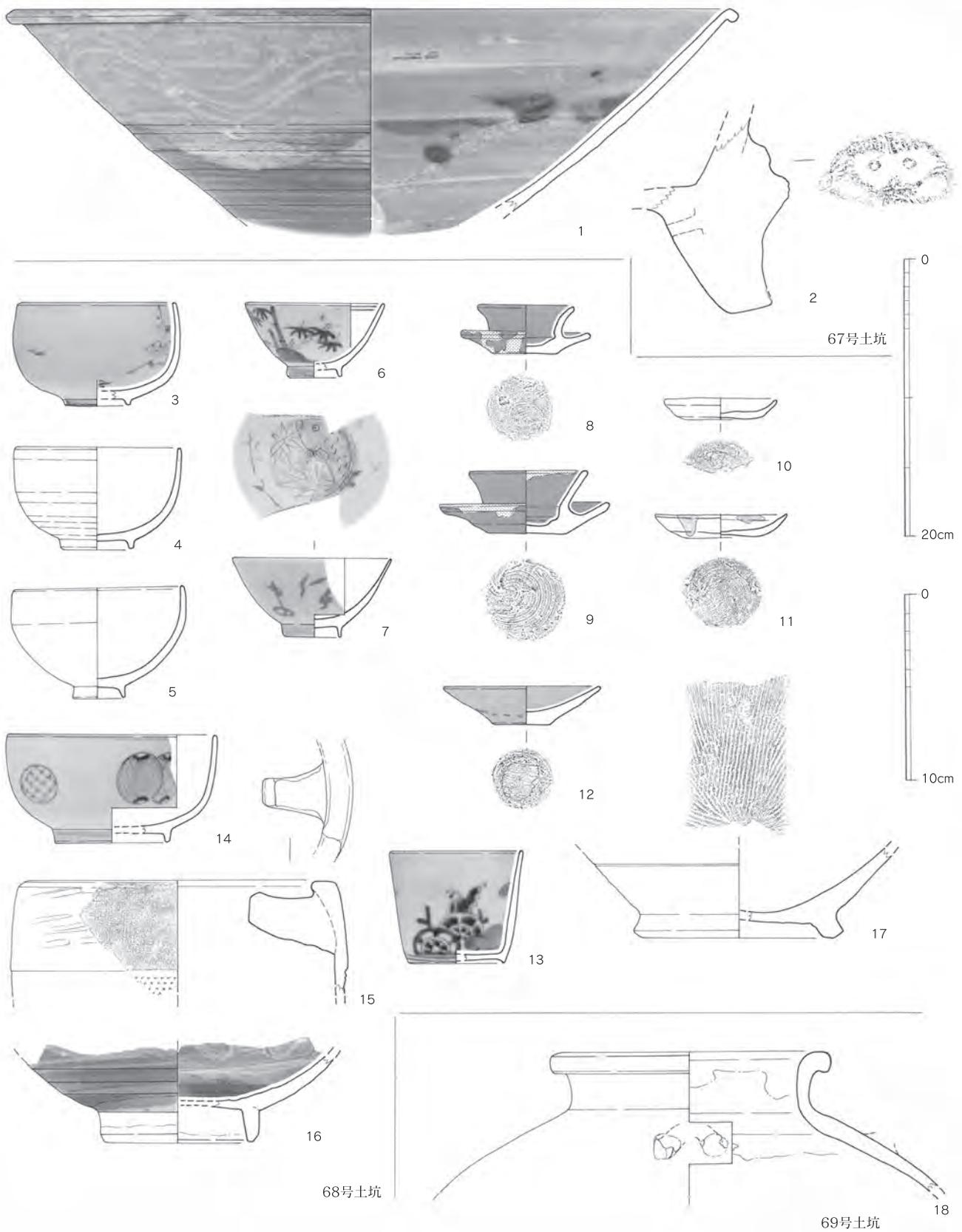
表 14 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 13



第22図 64号土坑出土土器・陶磁器実測図2(3・5・6は1/4、他は1/3)



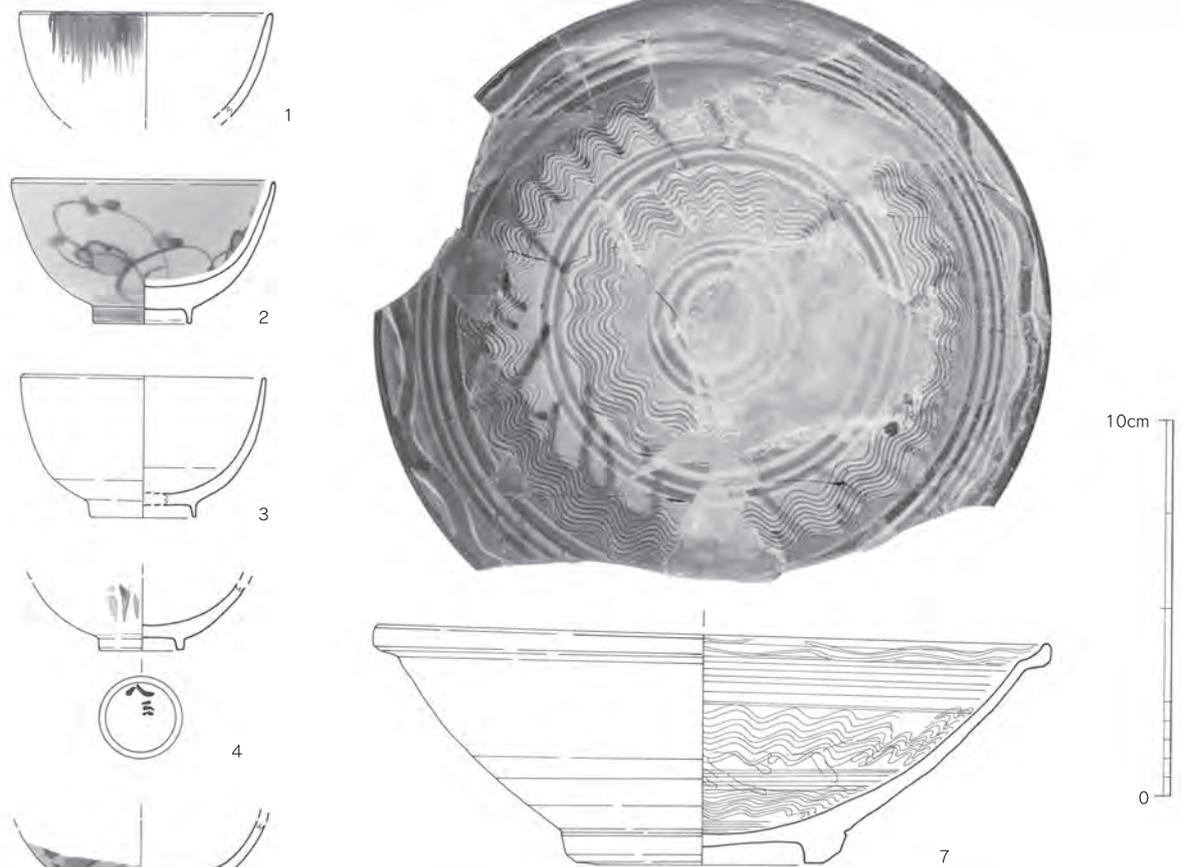
第23图 66・67号土坑出土土器・陶磁器实测图(4は1/4、他は1/3)



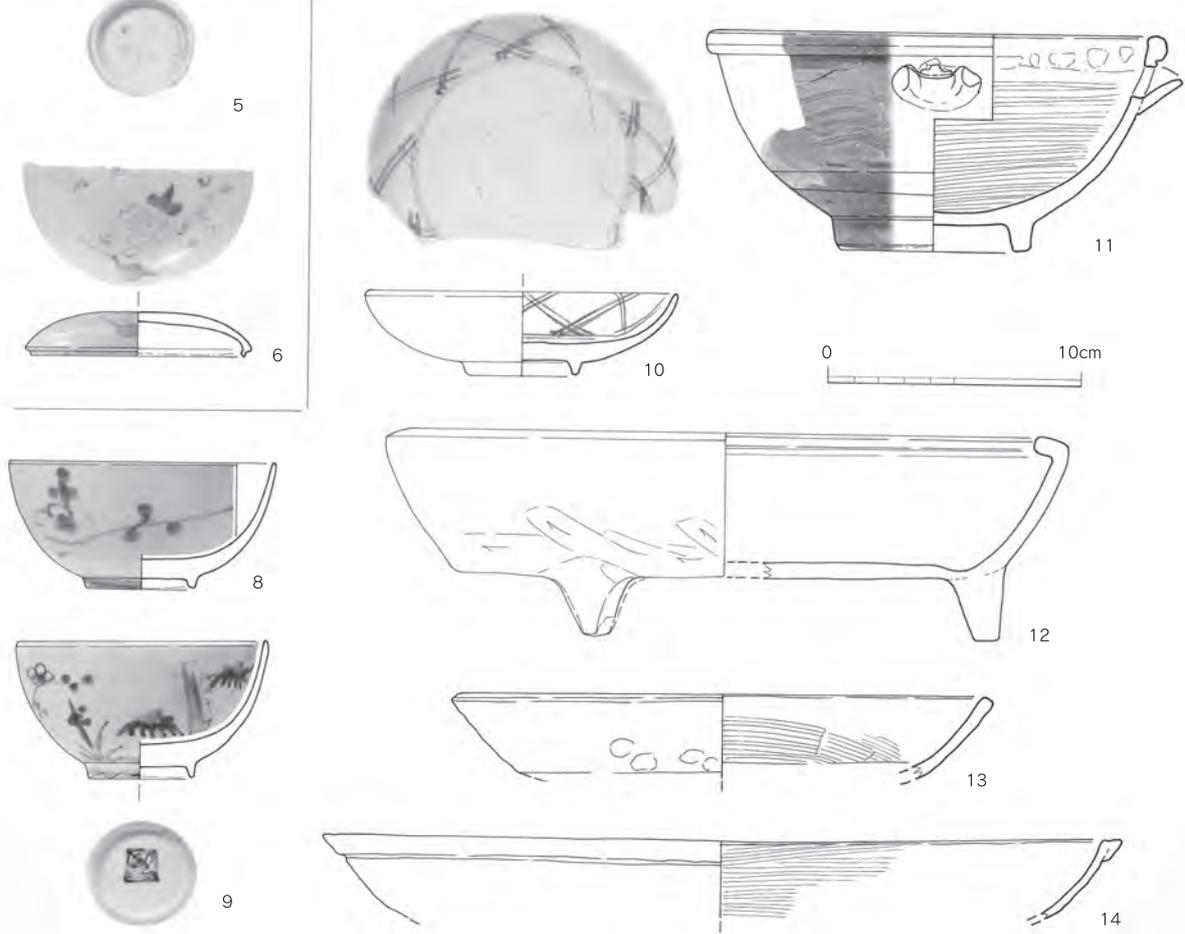
第24图 67~69号土坑出土土器・陶磁器实测图(1・15・17・18は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑64 21図7 図版2	小皿 灯明皿	口径8.0 底径4.2 器高1.9	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外底糸切り	不明	9割残存 口縁の一部に煤付着	蒲池焼	不明
土坑64 21図8	小皿	口径(11.8) 底径7.2 器高2.1	土師質土器 黒灰～暗灰白色	—	内外ナデ、外底ミガキ 底部に焼成前の刺突あり	不明	6割残存 変色なし	蒲池焼か	不明
土坑64 21図9 図版2	小皿 5寸皿	口径14.2 高台径4.9 器高3.9	陶器 灰白色	外面黄緑灰色の灰釉を高台以外に掛ける 緑釉掛け		高台露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1680) 1740
土坑64 21図10	小皿	口径(13.4) 高台径(7.6) 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉 全面 発色不良	外面唐草文、内面網目文とコンニャク印判の菊花文、見込みはコンニャク印判の5弁花文 裏銘は「大明年製」	豊付釉剥ぎ 砂目付	3割残存	波佐見	1680) 1740
土坑64 21図11	小皿	口径(7.0) 底径2.8 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型で、外面に斜めに鑄が入る 見込みに楓文、高台内に界線	豊付釉剥ぎ 砂目付		肥前	18世紀後半
土坑64 21図12	皿 芙蓉手	口径(20.8)	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	外面モチーフと内面区画文内の花文や宝文の染付モチーフは退化著しい	不明		肥前	18世紀後半
土坑64 21図13	杯	口径(7.0) 底径2.8 器高3.3	磁器 灰白色	白磁釉 高台以外全面	高台削り出し	高台露胎		肥前	17世紀後半
土坑64 21図14 図版2	中甕	口径(37.0) 底径(21.0) 器高42.7	陶器 断面の外半は橙褐色、内半は暗灰色	発色不良の鉄釉を外面のみ	外底に太い目の網物の痕跡あり 外面は格子面文タタキ痕をナデ消しているが一部残存 内面は同心円タタキ当て具痕	口唇部に外半分の釉剥ぎ部に貝目跡がつく	内面カルキ付着から便槽とわかる	肥前	17世紀後半
土坑64 21図15	焙烙	口径(50.0)	瓦質土器 暗灰白色	—	外面口縁部はオサエ後ナデ、体部はハケ、内面は丁寧なハケ	不明		在地	不明
土坑64 22図1	皿	口径(25.0)	陶器 暗黄灰白色	緑灰色の灰釉 全面 貫入あり	無文	不明		肥前	1690) 1780
土坑64 22図2	皿	口径(30.0)	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	外面に牡丹文、内面口縁部に唐草文、内面に花文	不明		肥前	不明
土坑64 22図3	摺鉢	口径32.1 底径11.4 器高12.8	陶器 暗紫灰褐色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目の12本単位 外底糸切り	外底と見込みに胎土目跡がつく		肥前	1690) 1750
土坑64 22図4	焙烙	口径(23.2)	瓦質土器 暗黄灰白色	—	外面口縁部はハケ、体部はケズリ、内面体部はナデ、底面はハケ	不明	内面底部は褐色に変色	在地	不明
土坑64 22図5 図版3	火鉢	—	瓦質土器 黒灰色	—	外面胴上半はナデ、下半はケズリのちハケ、外底と内面はハケ	不明	光沢なし 9割残存	在地	不明
土坑64 22図6	火鉢	—	瓦質土器 黒灰色	—	内外黒灰色 外面に花文のスタンプが入る 外面ナデ 内面ハケ状のナデが縦に入る	不明	光沢なし	在地	不明
土坑64 22図7 図版3	焼塩壺	口径6.0 最大径7.8 器高6.7	土師質土器 黄灰白色 金ノモがわずかに入る	—	内外ナデ、外底糸切り	不明	内面薄く赤化している	在地	不明
土坑66 23図1	小皿 5寸皿	口径(19.8) 高台径8.0 器高3.8	磁器 灰白色	青みのある透明釉 全面	内面に扇・葉文、見込みに5弁花文 裏銘は渦福の染付	豊付釉剥ぎ		波佐見	1680) 1740
土坑66 23図2	皿	口径(13.6) 高台径8.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	梅樹・松樹文の染付	外底蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1780) 1810
土坑66 23図3	鉢	口径(22.6) 高台径9.6 器高5.8	陶器 暗赤紫色	内面は白化粧土を掛けた後、櫛状の掻き取りし、胴部は波状に掻き取る その上に内面は全面、外面は上半に暗緑灰色の灰釉を薄くかける		見込みに砂目跡 下半は露胎		肥前	1680) 1750
土坑66 23図4	摺鉢	高台径(13.4)	陶器 暗赤茶褐色	内外鉄釉	摺り目16本以上単位	豊付釉剥ぎ 砂目付 見込みに重ね焼きの痕跡		肥前	1690) 1750
土坑67 23図5	小碗	口径7.6 高台径3.2 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉 全面 発色不良で暗青白色を呈す	外面に菊花文のコンニャク印判染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	9割残存	波佐見	1750) 1770
土坑67 23図6	小碗	口径8.4 高台径3.6 器高4.6	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面口縁部やや崩れた雨降り文	豊付釉剥ぎ 砂目付	5割残存	波佐見	1700) 1740
土坑67 23図7 図版3	碗 くらわんか手	口径9.8 高台径4.2 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良で暗青白色を呈す	外面に桐文のコンニャク印判染付	豊付釉剥ぎ 砂目付	口縁の一部に焼成時のひびがある 完形	波佐見	1750) 1770
土坑67 23図8	碗	口径(10.1) 高台径(3.6) 器高5.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面と見込みにデザイン化された寿字文染付け	豊付け釉剥ぎ	5割残存	肥前	19世紀初頭

表 15 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 14



70号土坑

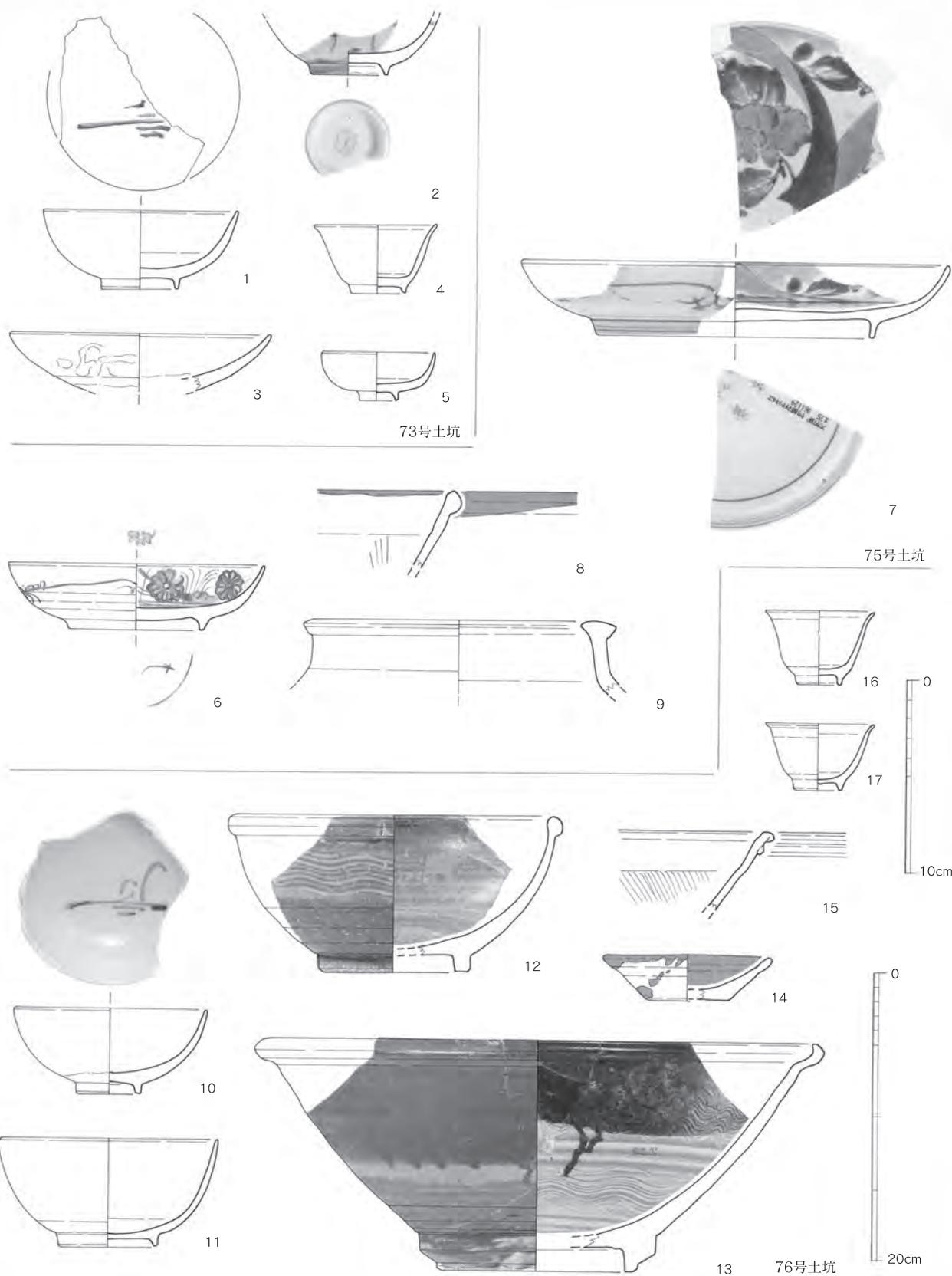


71号土坑

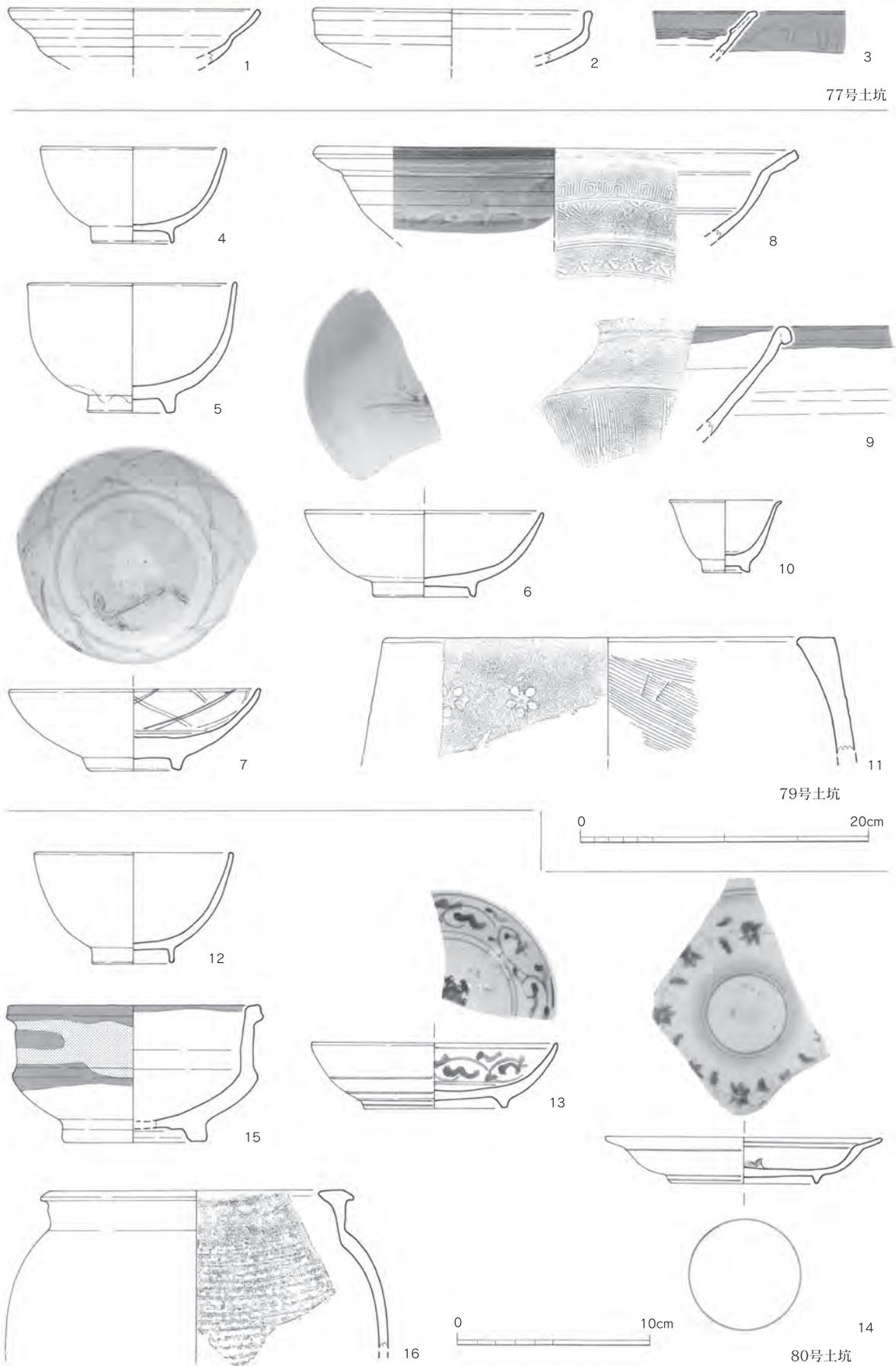
第25图 70・71号土坑出土土器・陶磁器実測図(7・11~14は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑67 23図9	碗	口径11.0 高台径4.8 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面口縁部に袈裟襷文、胴部に花草文、裏銘は角福染付け	畳付け釉剥ぎ	5割残存	肥前	1710 } 1740
土坑67 23図10	碗 筒形	口径(7.2) 高台径3.6 器高6.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面胴部草文、裏面折れ松葉文、内面口縁部袈裟襷文、見込み5弁花文染付け	畳付け釉剥ぎ 砂目付		肥前	1780 } 1810
土坑67 23図11	碗 筒形	口径(7.6) 高台径3.8 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面草紙文、裏面折れ松葉文、内面口縁部袈裟襷文、見込み5弁花文染付け	畳付け釉剥ぎ 砂目付		肥前	1780 } 1810
土坑67 23図12 図版3	碗 腰折形	口径9.2 高台径3.8 器高5.1	陶器 完形のため不明	透明釉を内面全面、外面胴部まで掛ける 発色不良で黄灰白色	施釉後、外面に竹笹文の鉄絵	高台露胎	完形	肥前	1750 } 1770
土坑67 23図13	碗 杉形	口径11.0 高台径4.8 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	無文	畳付け釉剥ぎ	5割残存	肥前	18世紀前半
土坑67 23図14	碗 端反形	口径(10.6) 高台径(4.6) 器高6.2	陶器 にぶい黄灰白色	内外鉄釉の上に天目釉を掛ける	高台削り出し	畳付けアルミナ附着	5割残存	小石原	不明
土坑67 23図15	碗	口径(12.0) 高台径4.6 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に二重網目文染付け	畳付け釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎで、重ね焼き痕あり	6割残存	波佐見	1680 } 1740
土坑67 23図16 図版3	蓋	裾径13.0 つまみ径1.8 器高4.8	磁器 灰白色	青みがかった透明釉 全面	外面牡丹文染付け つまみ天井部もダミ	受け部釉剥ぎ	9割残存	肥前	1650 } 1700
土坑67+出 土地不明 23図17	瓶	口径2.2 高台径7.2 器高19.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は染付で棒を描き、赤絵で牡丹を描く 頸部は染付と赤彩の花弁が交互に入る 胴下位は赤彩で輪郭を描き、緑彩で塗った花卉文	底部釉剥ぎ	赤彩は褪色 6割残存	肥前	1700 } 1750
土坑67 23図18	焼塩壺	底径5.2	土師質土器 黄白～赤紫白色 混入物なし		外底糸切り	不明	内面、外底、断面が赤紫白色	在地	不明
土坑67 24図1	鉢	口径(32.0)	陶器 茶橙褐色	外面胴上半に白化粧土を上面に掛けた後、櫛状掻き取り 胴下半は鉄釉掛け、上半分に白緑色の灰釉上掛け 内面は白化粧土をハケ掛けしたあと、薄いため黄褐色に発色した鉄絵と緑彩で文様を描く		—		肥前	1690 } 1750
土坑67 24図2	火鉢 獸脚	—	瓦質土器 灰白～灰色	—	脚の先端がつま先状に曲がる 型押し成型による獸面貼り付け 裏側から穿孔されている	不明	ミガキ 光沢なし	在地	不明
土坑68 24図3	碗	口径(8.6) 高台径(3.5) 器高5.5	磁器 暗灰白色 軟質	発色不良で白濁した透明釉 全面	外面に唐草文、内面に菊樹文、見込みにもなんらかのモチーフ染付け	底部釉剥ぎ		肥前	1780 } 1860
土坑68 24図4	碗	口径(8.8) 高台径(4.0) 器高5.6	陶器 黄灰白色	黄灰色の灰釉全面	無文	底部釉剥ぎ	5割残存	肥前	18世紀後半
土坑68 24図5	碗	口径(9.0) 高台径(2.8) 器高5.9	陶器 灰白色	透明釉 高台以外全面	無文	高台露胎	5割残存	肥前	18世紀後半
土坑68 24図6	杯	口径(7.4) 高台径(2.0) 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に竹文、見込みにもなんらかのモチーフ染付け	底部釉剥ぎ	5割残存	肥前	18世紀後半
土坑68 24図7	小碗	口径8.5 高台径3.1 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には「□いまる□折度」、内面には赤彩「めでたい」のうち「て」と「たい」が残っており、見込みに緑彩の笹の上に寄せられた鯛は赤彩	底部釉剥ぎ	6割残存	肥前 赤絵町	不明
土坑68 24図8 図版3	灯明受皿	受け部口径6.1 底径4.3 器高3.4	陶器 にぶい橙茶灰色	光沢のない鉄釉を上面に掛け	外底糸切り 粘土粒跡1つあり	底部露胎 口縁部にアルミナ掛け	ほぼ完形	肥前	不明
土坑68 24図9 図版3	灯明受皿	受け部口径6.1 底径4.3 器高3.4	陶器 にぶい橙茶灰色	光沢のない鉄釉を上面に掛け、口縁部にアルミナ掛け	外底糸切り 粘土粒跡1つあり	底部露胎 口縁部にアルミナ掛け	ほぼ完形	肥前	不明
土坑68 24図10	小皿	口径(6.0) 底径3.2 器高1.1	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外底糸切り	不明	内面が部分的に黒色している	蒲池焼	不明
土坑68 24図11	小皿	口径7.0 底径4.0 器高1.2	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外底糸切り	不明	黒色化は廃棄時のものか	蒲池焼	不明
土坑68 24図12 図版3	小皿	口径8.3 底径3.2 器高2.0	陶器 茶橙褐色	外底以外全面鉄釉	無文	底部露胎 胎土目跡あり 見込みに重ね焼き痕あり	ほぼ完形	肥前	不明

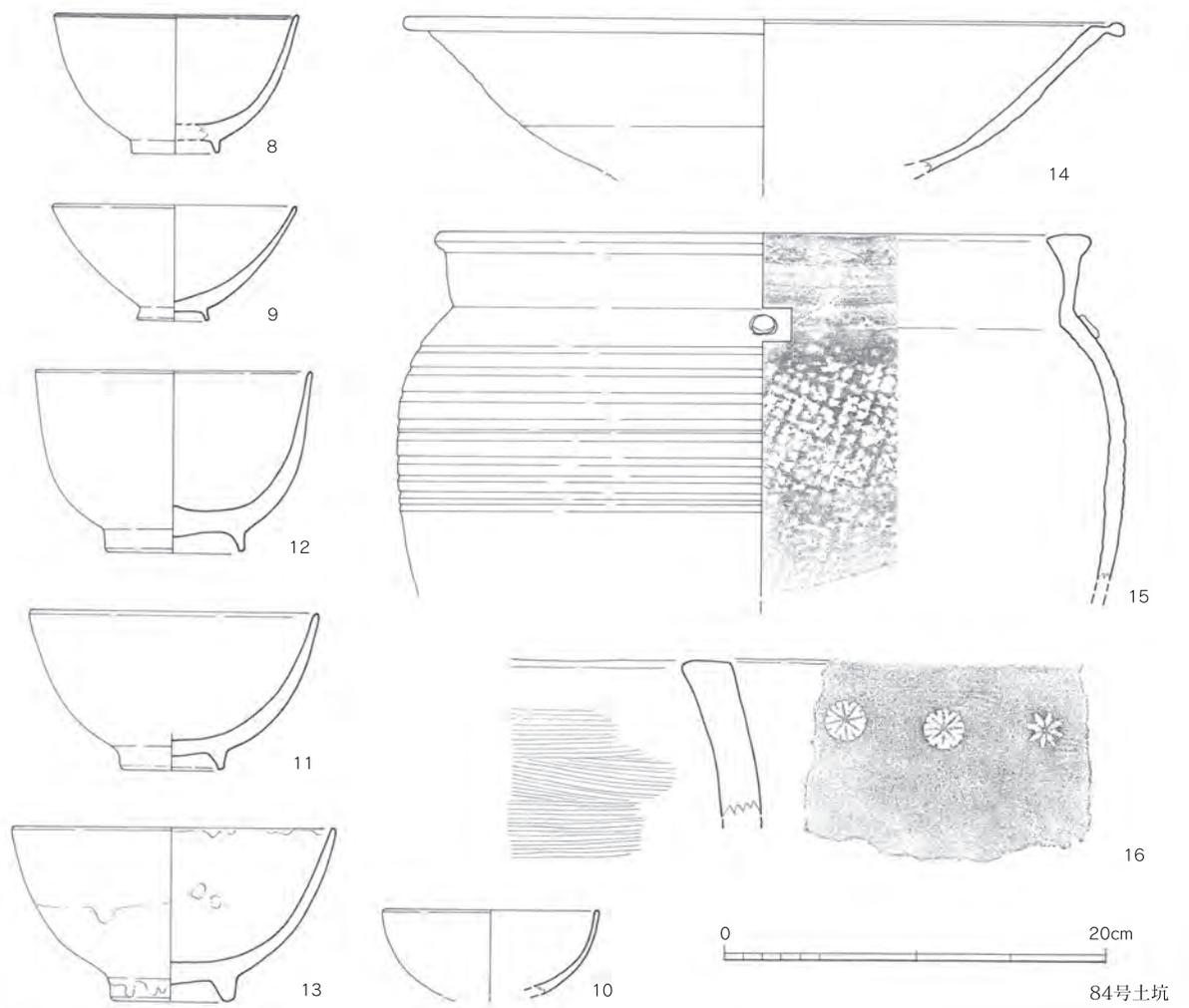
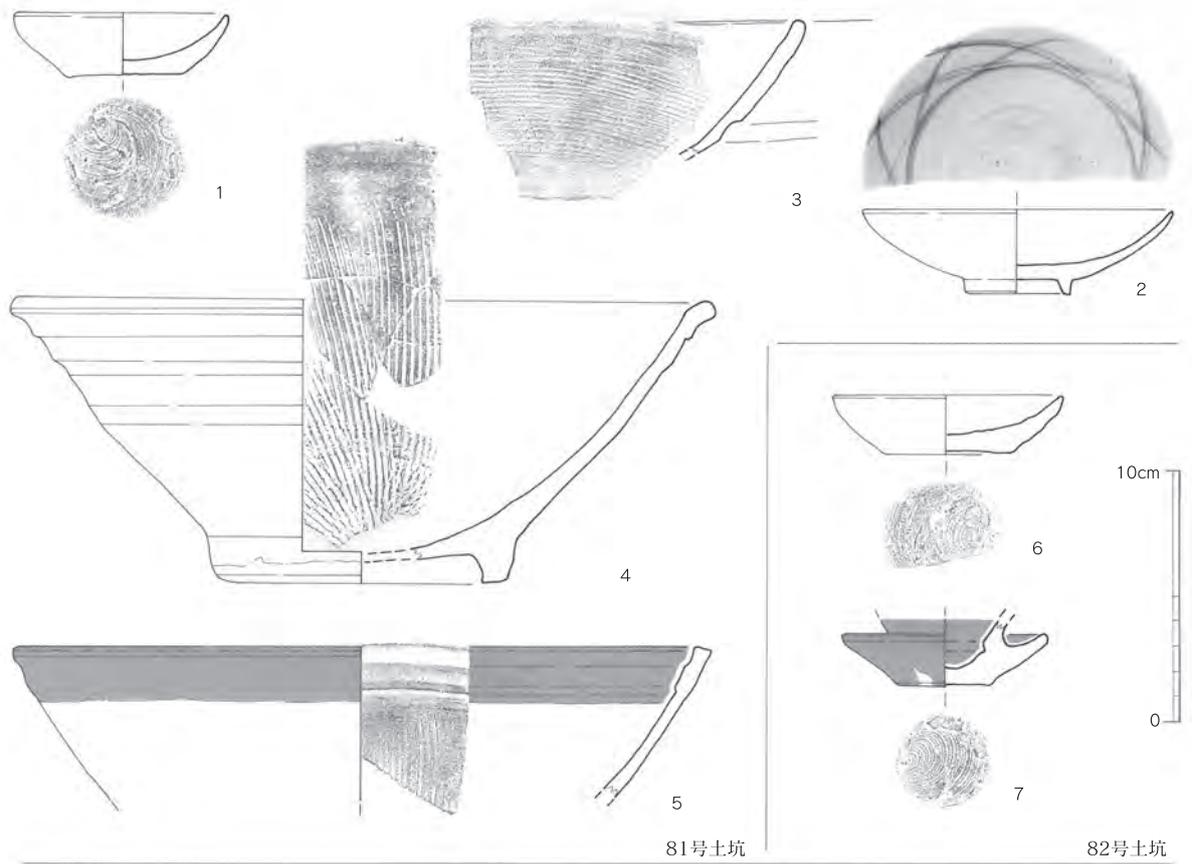
表 16 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 15



第26図 73・75・76号土坑出土土器・陶磁器実測図(8・12・13・15は1/4、他は1/3)



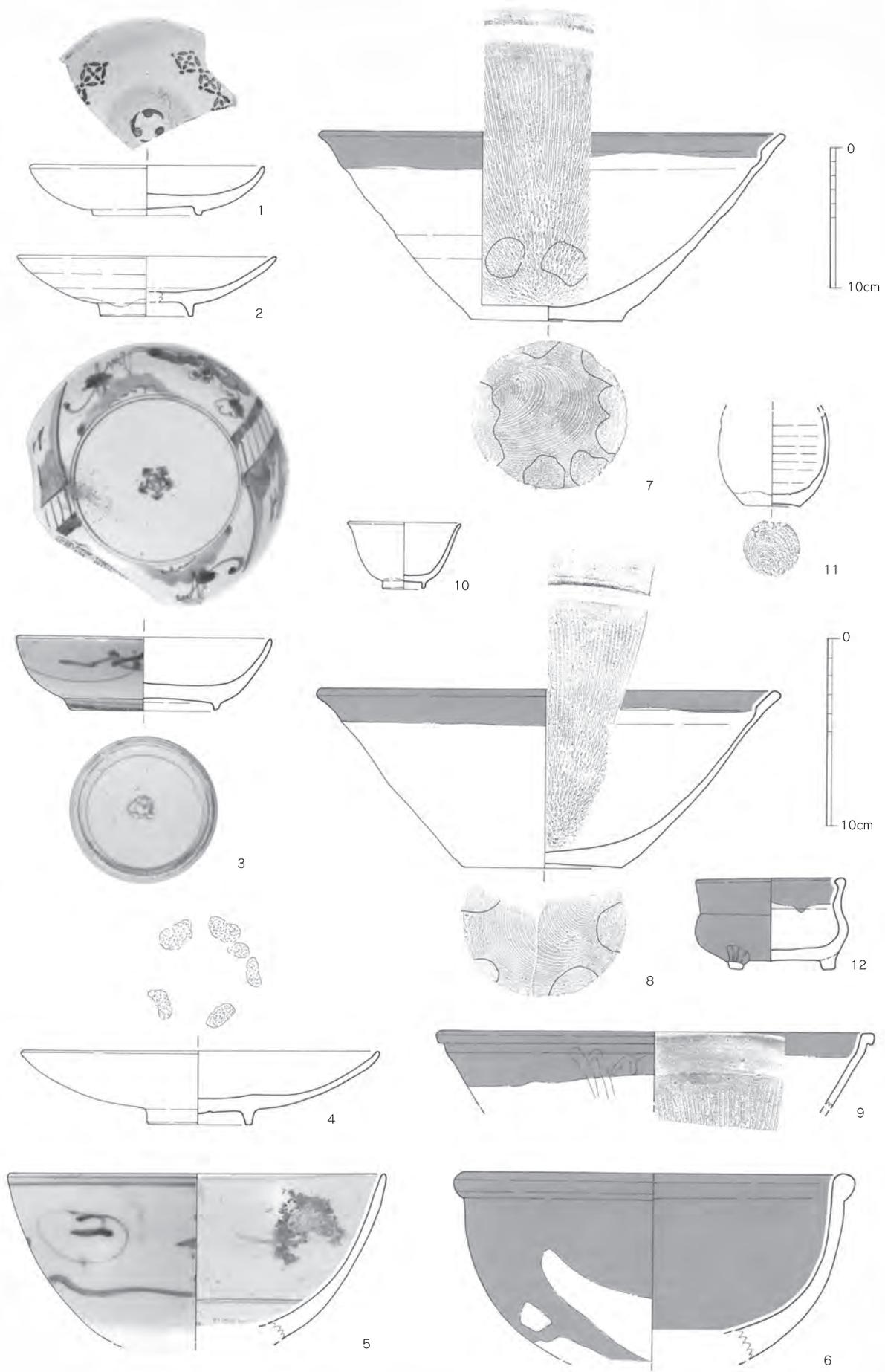
第27図 77・79・80号土坑出土土器・陶磁器実測図(3・8・9・11は1/4、他は1/3)



第28図 81・82・84号土坑出土土器・陶磁器実測図(3~5・14・15は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 図版番号	形状 通称名	()は復元値							
土坑68 24図13	蕎麦猪口	口径(7.2) 高台径(5.4) 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花文・松文染付	底部釉剥ぎ	5割残存	肥前	18世紀後半
土坑68 24図14	蓋物	口径(11.3) 高台径(6.4) 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面丸文染付	内面口縁部、 壘付釉剥ぎ		肥前	1780 } 1860
土坑68 24図15	焜炉	口径(22.4)	瓦質土器 黒色が灰白色にはさまれる	—	内面に突起手づくね後、貼り付け 外面に型押し珠文あり、ミガキは光沢あり 内面はハケとオサエ	不明		在地	不明
土坑68 24図16 983	鉢	高台径(8.6)	陶器 灰紫色	内面は白化粧土を掛けた後、柳状の掻き取りし、胴部は波状に掻き取る その上に内面は全面、外面は上半に暗緑灰色の灰釉を薄くかける				肥前	1780 } 1860
土坑68 24図17	摺鉢	高台径(15.0)	陶器 橙褐色 白色粒子混入	内外鉄釉	摺り目17本単位 外面に沈線1条	壘付け釉剥ぎ 見込みに重ね 焼き痕あり	高台内は発色不良	肥前	1750 } 1860
土坑69 24図18	甕	口径(20.0)	灰紫色	暗緑灰色の灰釉全面	肩部につまみの痕跡が残る	—	口唇部釉拭き取り	肥前	17世紀後半
土坑70 25図1	碗	口径(10.0)	磁器 灰白色 やや軟質	透明釉を全面に掛ける	外面口縁部雨降り文	壘付け釉剥ぎ		肥前	1700 } 1740
土坑70 25図2	碗 くらわんか手	口径(10.2) 高台径(3.8) 器高5.7	磁器 灰色	発色不良の暗い透明釉 全面	外面菊花樹文染付け	壘付け釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目 釉剥ぎ後、 アルミナ塗布		波佐見	1680 } 1740
土坑70 25図3	碗	口径(9.6) 高台径(4.2) 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	壘付け釉剥ぎ		肥前	1700 } 1740
土坑70 25図4	碗	高台径3.2	陶器 黄灰白色	黄緑灰色の灰釉 高台以外全面	外面に青彩で笹、緑彩で茎の竹文が描かれている 外底の墨書は「八三」か	壘付け釉剥ぎ		肥前	不明
土坑70 25図5	碗 くらわんか手	高台径4.0	磁器 灰色	発色不良の暗い透明釉 全面	外面花樹文染付け 裏銘は「大明年製」	壘付け釉剥ぎ		波佐見	1680 } 1740
土坑70 25図6	蓋	裾径8.3 器高1.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	赤・黒・緑彩色で花文の色絵	口縁部に砂目跡付着		肥前	1700 } 1820
土坑70+遺構 検出面下層 25図7 図版3	鉢	口径35.6 高台径13.1 器高12.6	陶器 暗紫灰色	外面口縁部に鉄釉を掛け、内面は口縁部から上半に鉄釉を掛けた後、白化粧土を掛けてハケ状掻き取りと柳状掻き取りし、その上に緑灰色の灰釉掛け		見込みと壘付に胎土目跡あり	8割残存	肥前	1690 } 1750
土坑71 25図8	碗 くらわんか手	口径(10.4) 高台径4.1 器高5.0	磁器 灰色	透明釉を全面に掛ける	外面雪ノ輪文染付け	壘付け釉剥ぎ見込みに蛇ノ目 釉剥ぎ後、砂目塗布	高台が低い	波佐見か	1680 } 1740
土坑71 25図9 図版3	碗	口径9.8 高台径3.9 器高5.4	磁器 灰白色	発色不良で白濁した透明釉 全面	外面菊花樹文・竹笹文染付け 裏銘角福	壘付け釉剥ぎ	高台が低い	肥前	1700 } 1750
土坑71 25図10	小皿 5寸皿	口径12.2 高台径4.2 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面2重網目文染付け	壘付け釉剥ぎ 見込みは蛇ノ目 釉剥ぎにアルミナ塗布 重ね焼き痕あり		波佐見	1750 } 1810
土坑71 25図11	片口鉢	口径(24.0) 高台径10.4 器高11.5	陶器 暗紫灰色	外面下半に鉄釉を掛け、上半に白化粧土を掛けたのち、ハケ状掻き取り、その上に上半にのみオリブ色の灰釉掛け、内面は白化粧土のハケ状掻き取りの後、オリブ色の灰釉を口縁下から掛ける		口唇部釉剥ぎ 壘付釉剥ぎ	高台内も釉剥ぎ	肥前	1690 } 1750
土坑71 25図12	火鉢	口径(36.0) 底径(29.0) 器高10.8	瓦質土器 にぶい灰白が青灰色を挟む 金雲母入る	—	内面はカキ目状のナデ、見込みと外底はハケ 外面スタンプなし、下位はケズリ	不明	ミガキ 光沢なし 内面口縁部までやや黒化	在地	不明
土坑71 25図13	焙烙	口径(28.4)	土師質土器 にぶい黄灰色 カクセン石入る	—	外面オサエ後ナデ、内面は丁寧なハケ	不明	内面胴部はにぶい灰色、外面は黒灰色	在地	不明
土坑71 25図14	焙烙	口径(42.0)	土師質土器 にぶい黄灰色 金雲母入る	—	外面口縁部はオサエ後ナデ、内面は丁寧なハケ	不明	内面胴部はにぶい黄灰色、外面は黒灰色	在地	不明

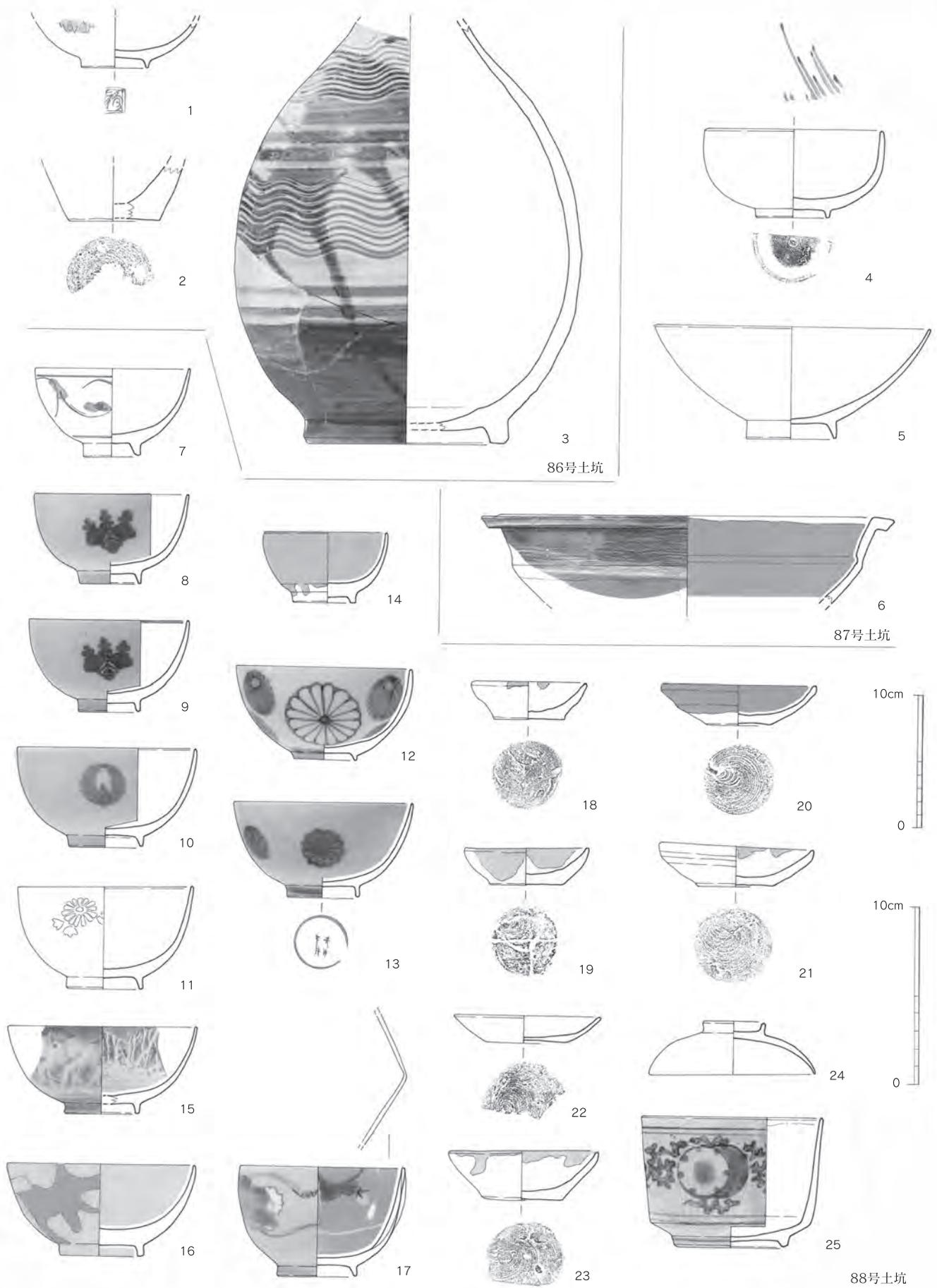
表 17 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 16



第29図 84号土坑出土土器・陶磁器実測図(7~9は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑73 26図1	碗	口径(10.0) 高台径3.8 器高4.1	陶器 黄白色	透明釉を内面と外面 胴下位まで掛ける 貫入あり	見込みに山水文の鉄絵	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1690 } 1780
土坑73 26図2	碗 くらわんか手	高台径3.8	磁器 灰色	透明釉 全面 貫 入あり	外面2重網目文に雪ノ輪文が加わったものと 菊花文、裏銘に渦福の染付	畳付け釉剥ぎ		波佐見	1680 } 1740
土坑73 26図3	小皿 5寸皿	口径(13.4)	陶器 灰色	灰緑白色の灰釉を外面 体部に施した後、内面に 濃黄緑色の銅緑釉 掛け		畳付け釉剥ぎ 見 込み蛇ノ目釉剥 ぎ部に重ねの痕 跡あり		肥前	1690 } 1780
土坑73 26図4	杯	口径(6.3) 高台径2.8 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける		畳付け釉剥ぎ 砂目跡付着		肥前	1710 } 1740
土坑73 26図5	杯	口径(5.8) 高台径2.0 器高2.5	磁器 灰白色 やや軟質	透明釉を全面に掛 ける		畳付け釉剥ぎ		肥前	不明
土坑75 26図6	小皿 5寸皿	口径(13.0) 高台径(7.0) 器高3.4	磁器 灰色	透明釉を全面に掛 ける	外面に唐草文、内面に2重網目文とコンニャ ク印判の菊花文、見込みに5弁花文のコン ニャク印判 裏銘は「大明年製」を染付け	畳付け釉剥ぎ 砂目付	4割残存	波佐見	1680 } 1740
土坑75 26図7	皿	口径(21.8) 高台径(14.1) 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に唐草文、内面に牡丹文、裏銘は「大明 成化年製」を染付け	畳付け釉剥ぎ 中央にハリ目 跡	2割残存	肥前	1700 } 1740
土坑75 26図8	摺鉢	—	陶器 紫褐色	鉄釉口縁部のみに 掛かる	摺り目単位不明	—		肥前	1650 } 1690
土坑75 26図9	壺	口径(16.0)	陶器 紫褐色	鉄釉全面	内外ナデ	—		肥前	17世紀後半
土坑76 26図10	碗	口径(9.8) 高台径3.1 器高4.4	陶器 黄白色	透明釉を内面と外面 胴下位まで掛ける	見込みに山水文の鉄絵	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1690 } 1780
土坑76 26図11	碗	口径(11.2) 高台径5.0 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文	畳付け釉剥ぎ	4割残存	肥前	1680 } 1710
土坑76 26図12	片口鉢	口径(23.0) 高台径(10.4) 器高10.8	陶器 淡暗紫灰色	外面は胴下位に鉄釉を 掛け、白化粧土を掛けた のちハケ状掻き取り、内 面はハケ掛けし、最後に オリーブ色の灰釉掛け		口唇部釉剥ぎ		肥前	1690 } 1750
土坑76 26図13	鉢	口径39.0 高台径16.4 器高16.0	陶器 暗赤紫色	外面胴下半は鉄釉ハケ 掛け、内面は白化粧土 塗布後、ハケ状掻き取 りと波状目掻き取りし、 その上に内外胴上半に 鉄釉を厚く掛ける		見込み胎土目 跡あり 高台 露胎 畳付け 胎土目付着		肥前	1690 } 1750
土坑76 26図14	小皿	口径(8.6) 底径(4.6) 器高2.3	陶器 紫赤褐色	鉄釉を内面から外面 口縁部まで掛ける		底部アルミナ 付着	3割残存	肥前	19世紀後半
土坑76 26図15	摺鉢	—	陶器 淡黄橙灰色 軟質	内外鉄釉	摺り目単位不明	—	焼成不良	肥前	1650 } 1690
土坑76 26図16	杯	口径5.6 高台径2.4 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文	畳付け釉剥ぎ 砂目跡付着		肥前	1680 } 1740
土坑76 26図17	杯	口径5.6 高台径2.5 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文	畳付け釉剥ぎ 砂目跡付着		肥前	1680 } 1740
土坑77 27図1	小皿 5寸皿	口径(13.0)	陶器 灰白色	灰緑白色の灰釉を 内外面に掛ける	無文	—		肥前	1690 } 1780
土坑77 27図2	瓶 仏花瓶 広口形	口径(14.4)	陶器 淡灰黄白色	オリーブ色の灰釉を 内外面に掛ける	無文	—		肥前	1690 } 1780
土坑77 27図3	摺鉢	—	陶器 暗紫灰～灰色	鉄釉口縁部のみに 掛かる	摺り目単位不明	—	焼成不良	肥前	1650 } 1690
土坑79 27図4	碗	口径(9.6) 高台径4.2 器高5.0	磁器 灰白色 やや軟質	暗い透明釉を全面 に掛ける 貫入あり	無文	畳付け釉剥ぎ 見込み灰被り		肥前	1700 } 1740
土坑79 27図5	碗	口径(10.8) 高台径4.4 器高6.8	陶器 灰黄白色 やや軟質	オリーブ色の灰釉を 高台以外の内外 面に掛ける 貫入 あり	無文	高台露胎 見込み灰被り		肥前	1700 } 1740

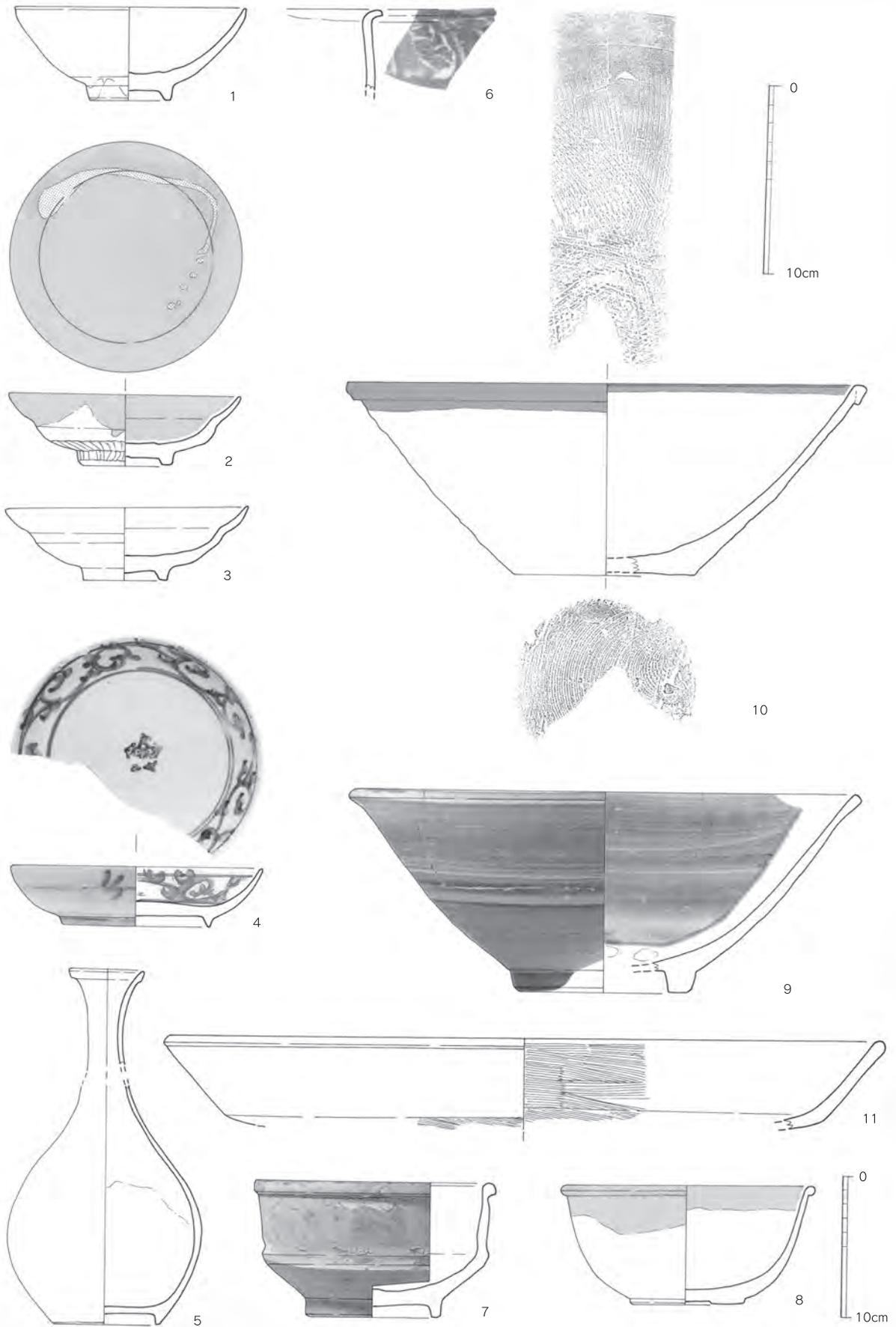
表 18 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 17



第30图 86~88号土坑出土土器・陶磁器实测图(3・6は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑79 27図6	小皿 5寸皿	口径(12.2) 高台径(5.1) 器高4.4	陶器 黄白色	透明釉を内面と外面 胴下位まで掛ける 貫入あり	見込みに山水文の鉄絵 高台中央に円の線刻あり	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1690) 1780
土坑79 27図7	小皿 5寸皿	口径(12.8) 高台径4.5 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	内面2重網目文	豊付釉剥ぎ 見込 み蛇ノ目釉剥ぎ後 アルミナ塗布		波佐見	1680) 1740
土坑79 27図8	鉢 三鳥手	口径(32.8)	陶器 橙茶褐色	外面下半に鉄漿を掛け、内面は白化粧土の象嵌後、内外口縁部に 緑灰白色の灰釉を掛ける		—		肥前	1690) 1750
土坑79 27図9	摺鉢	—	陶器 黒灰色	鉄釉口縁部だけに 掛かる	摺り目単位不明	—	焼成不良	肥前	1650) 1690
土坑79 27図10	杯	口径5.8 高台径2.5 器高4.7	磁器 灰白色 やや軟質	暗い透明釉を全面 に掛ける 貫入あり	高台が断面三角形	豊付釉剥ぎ	焼成不良	肥前	1650) 1680
土坑79 27図11	焜炉	口径(30.1)	瓦質土器 にぶい灰色	—	外面ナデで花文のスタンプが入る 内面ハ ケ	不明	内面灰褐色を 呈する	在地	不明
土坑80 27図12	碗	口径(10.2) 高台径4.2 器高5.8	磁器 灰白色 やや軟質	暗い透明釉を全面 に掛ける 貫入あり	無文	豊付け釉剥ぎ 見込み灰被り		肥前	1700) 1740
土坑80 27図13	小皿	口径(12.6) 高台径7.3 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉 全面 発色不良で白色が 斑に入る	内面に崩れた唐草文、見込みに5弁花文を染 付け			波佐見	1680) 1740
土坑80 27図14	小皿	口径(14.2) 底径7.6 器高2.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	見込みに花文を染付け	豊付け釉剥ぎ		肥前	17世紀後半
土坑80 27図15	鉢 火入れ	最大径(13.0) 高台径(7.2) 器高7.2	陶器 暗赤茶褐色	外面胴中位以上は白化粧土を掛け、緑灰色の灰釉を掛け流し 灰 釉は発色不良		胴下位露胎		肥前	不明
土坑80 27図16	小甕	口径(16.2)	陶器 黒灰色がにぶい 暗紫褐色を挟む	鉄釉 全面	外面はタタキ痕をナデ消し 内面肩部格子 目タタキ当て具痕後、ナデ	—	焼成不良	肥前	17世紀後半
土坑81 28図1 図版3	小皿	口径8.4 底径4.7 器高2.5	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕1つ	ほぼ完形 変色なし ゆがみあり	蒲池焼	不明
土坑81 28図2	小皿 5寸皿	口径(12.2) 高台径4.1 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	内面2重網目文	豊付釉剥ぎ 砂目付	5割残存	波佐見	1680) 1740
土坑81 28図3	焙烙	—	土師質土器 にぶい黄灰色 金雲母入る	—	外面口縁部はオサエ後ナデ、体部との接合 部には凹線が入る 内面は丁寧なハケ	不明	内面はにぶい 灰色、外面は 黒灰色	在地	不明
土坑81 28図4	摺鉢	口径(37.2) 高台径16.0 器高15.0	陶器 暗紫褐色 白色粒子混入	内外鉄釉を高い台 内以外にかける	摺り目単位不明	豊付釉剥ぎ 砂目付 見込 みに重ね焼き 痕あり		肥前	1750) 1860
土坑81 28図5	摺鉢	口径(36.8)	陶器 暗紫褐色 白色粒子混入	鉄釉口縁部だけに 掛かる	摺り目単位不明	—		肥前	1650) 1690
土坑82 28図6	小皿	口径(7.2) 底径(5.0) 器高2.3	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕1つ	5割残存 変色なし	在地	蒲池焼
土坑82 28図7	灯明受皿	最大径(8.0) 底径3.7	陶器 橙茶褐色	鉄釉を外底以外に かける	外底糸切り 粘土粒跡1つあり	外底に粘土粒 あり		肥前	不明
土坑84 28図8	碗	口径(9.6) 高台径1.9 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	口鏝	豊付釉剥ぎ 砂目付		肥前	不明
土坑84 28図9	小碗	口径(9.6) 高台径1.9 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文	豊付釉剥ぎ 砂目付		肥前	不明
土坑84 28図10	小碗	口径(8.6)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に二重網目文、内面無文	—		肥前	1710) 1740
土坑84 28図11	碗	口径(11.4) 高台径4.2 器高6.2	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面 に掛ける 貫入あり	外面花文の染付	豊付釉剥ぎ		肥前	1650) 1680
土坑84 28図12 図版3	碗	口径11.0 高台径5.6 器高7.2	陶器 淡橙灰白色	灰黄白色の灰釉全 面掛け 貫入あり	無文	底部露胎	口縁部に一部 歪みがある	肥前	1690) 1780

表 19 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 18



第31図 88号土坑出土土器・陶磁器実測図(5・9～11は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							挿入番号	形状	() は復元値
図版番号	通称名								
土坑84 28図13	碗	口径(12.8) 高台径(4.8) 器高5.7	陶器 にぶい灰白色	灰緑色の灰釉を内面に施した後、外面に濃黄緑色の銅緑釉掛け 外面口縁部に薬灰釉		底部露胎		肥前	1690 } 1780
土坑84 28図14	鉢	口径(38.0)	陶器 にぶい茶橙灰色 軟質粗放	内面から外面口縁部に灰褐色の灰釉を掛け、内面はその上に白化 粧土を掛けて櫛状掻き取り 最後に黄緑灰色の灰釉を流し掛け				肥前	1690 } 1750
土坑84 28図15	甕	口径(34.5)	陶器 暗紫灰色	鉄釉を内外にかける	肩部凹線の後、円形浮文貼り付け 内面肩部以下は格子目タタキ当て具痕が残る	口唇部の内面 側は釉剥ぎ		肥前	17世紀後半
土坑84 28図16	火鉢	—	瓦質土器 にぶい黄灰色 チョウ石多い	—	外面ナデ 内面ハケ 外面に2種類の花文のスタンプが入る	不明	ミガキ 光沢 なし	在地	不明
土坑84 29図1	小皿 5寸皿	口径(12.4) 高台径(5.8) 器高2.6	磁器 にぶい灰白色 軟質	発色不良の透明釉 全面	内面の花文、見込みの巴文は型紙刷り染付	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目 釉剥ぎ 砂目 付着		肥前か	17世紀後半
土坑84 29図2	小皿 5寸皿	口径(13.6) 高台径(5.0) 器高3.2	陶器 灰色	灰緑色の灰釉を内 面から外面体部に 掛ける 貫入あり	無文	底部露胎 見 込み蛇ノ目 釉剥ぎ 砂目 付着		肥前	1690 } 1780
土坑84 29図3	小皿 5寸皿 くらわんか手	口径13.4 高台径8.0 器高3.8	磁器 にぶい灰白色	発色不良の透明釉 全面	外面は唐草文、内面は扇形の窓に山と鳥文、 つると葉文、見込み5弁花文の染付 裏銘は 渦福	畳付釉剥ぎ 砂目付		波佐見	1680 } 1740
土坑84 29図4	皿	口径(19.0) 高台径5.6 器高3.8	陶器 灰白色	暗い透明釉を全面 に掛ける 貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ 胎土目跡4つあり 見込みには胎土 目跡5つあり		肥前	1610 } 1650
土坑84 29図5	鉢	口径(20.0)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面は鳳凰文、内面は魚か虫文の染付		口縁部に歪み	肥前	1650 } 1680
土坑84 29図6	片口鉢	口径(21.2)	陶器 淡灰紫色	内面と胴上半に鉄 釉掛け	外面下位はケズリの工具端がカキ目状に残 る	口唇部釉剥ぎ		肥前	17世紀後半
土坑84 29図7	摺鉢	口径(33.1)	陶器 暗紫褐色	鉄釉口縁部のみに 掛かる	摺り目13本単位 外底部糸切り	底部露胎 胎 土目痕が内外 底部にあり		肥前	1650 } 1690
土坑84 29図8	摺鉢	口径(32.7) 底径11.4 器高14.7	陶器 暗赤茶褐～暗紫 灰色 白色粒子混入	内外鉄釉を高い台 内以外にかける	外底部糸切り	底部露胎 胎 土目痕が内外 底部にあり		肥前	1650 } 1690
土坑84 29図9	摺鉢	口径(31.2)	陶器 黒灰色	鉄釉口縁部のみに 掛かる	摺り目単位不明	—		肥前	1650 } 1690
土坑84 29図10	杯	口径(6.0) 高台径2.2 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉 全面	無文	畳付釉剥ぎ 砂目付		肥前	1650 } 1680
土坑84 29図11	小瓶 茶入れ	底径3.0	陶器 淡灰色	鉛釉 外面胴下位 まで	外底部糸切り	底部露胎		肥前か	不明
土坑84 29図12	香炉	口径7.5 底径4.2 器高4.9	磁器 灰白色 焼成不良で、やや軟質	青磁釉を外面から 内面頸部まで掛け る	底部に型押し成型による脚3つ貼り付け	胴下位露胎 畳付アルミナ 付着	6割残存	肥前	不明
土坑86 30図1	碗	高台径3.8	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面に花文、裏銘に角福が染付けられてい る	畳付け釉剥ぎ		肥前か	1700 } 1740
土坑86 30図2	焼塩壺	底径5.0	土師質土器 黄灰白～淡赤橙色 混入物なし	—	外底糸切り	不明	器面の変色は ない 断面が赤 化している	在地	不明
土坑86+土 52 30図3	瓶	最大径(19.4) 高台径(11.0)	陶器 暗赤茶褐色	外面胴中位以上は白化粧土を掛け、櫛状掻き取りし、下位は鉄釉 のハケ掛け、最後に褐色の灰釉を掛け流し		高台露胎		肥前	1690 } 1780
土坑87 30図4	碗	口径(10.0) 高台径(4.2) 器高5.0	陶器 黄白色 軟質	透明釉を内面と外 面胴下位まで掛け る 貫入あり	見込みに山水文の鉄絵 外底に「清水」の刻印	底部露胎	京焼陶器	肥前	1650 } 1690
土坑87 30図5	大碗 嗽茶碗	口径(15.4) 高台径5.2 器高6.2	磁器 灰白色	透明釉 全面	無文	畳付け釉剥ぎ		肥前	不明

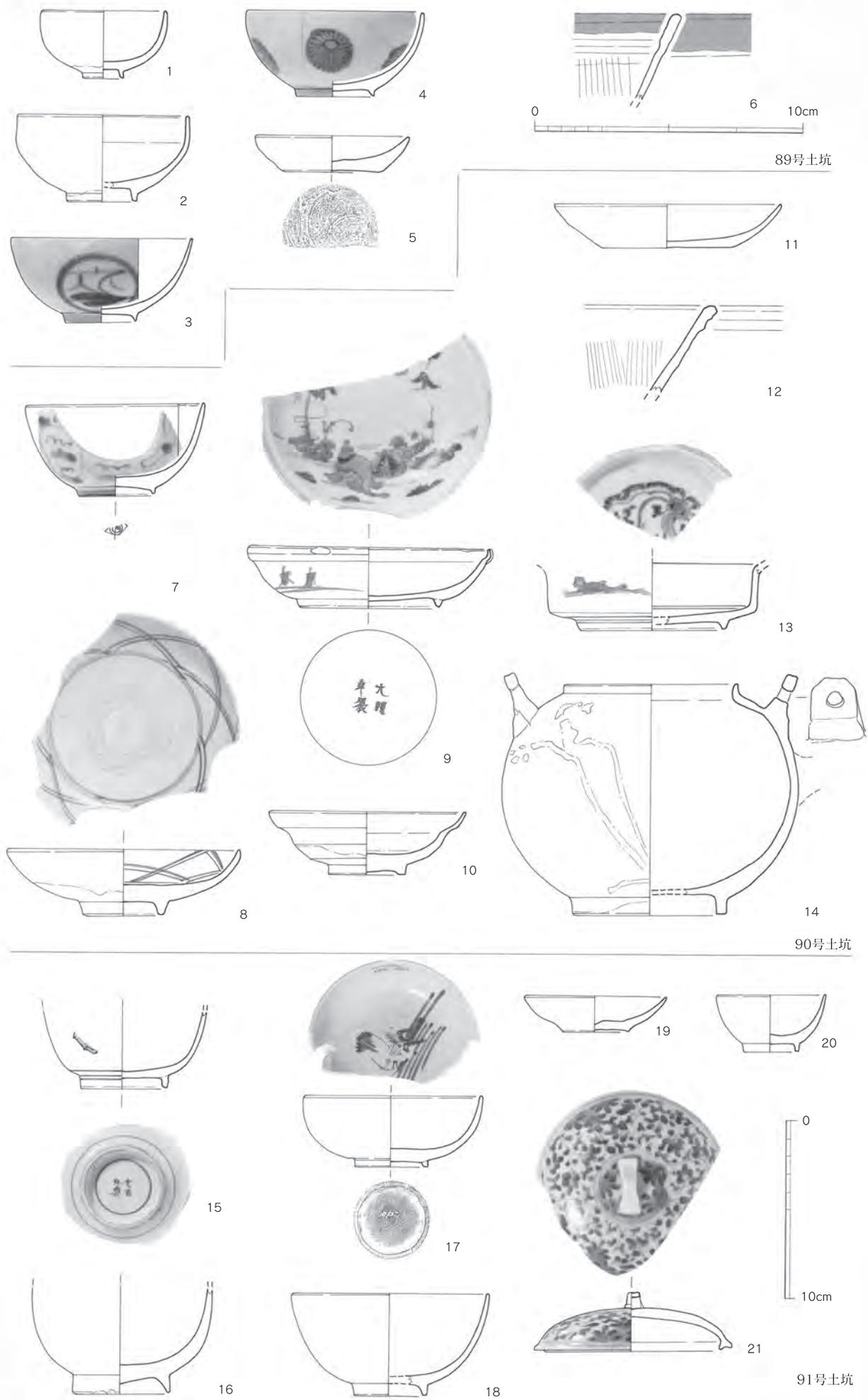
表20 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表19

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							挿図番号	形状	() は復元値
図版番号	通称名								
土坑87 30図6	鉢	口径(30.8)	陶器 暗紫褐色	内外鉄釉の上に口縁部に白化粧土を掛け、外面はハケ状掻き取りし、最後に褐色の灰釉を口縁部に掛ける				肥前	不明
土坑88 30図7	小碗	口径8.6 高台径3.2 器高4.9	磁器 灰色	透明釉 全面	外面唐草文染付	畳付け釉剥ぎ 砂目付き		肥前	1680 } 1740
土坑88 30図8	碗	口径(8.6) 高台径3.5 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉 全面	家紋モチーフの桐文のコンニャク印判染付 口鏝あり	畳付け釉剥ぎ	5割残存	肥前	1700 } 1740
土坑88 30図9	碗	口径9.9 高台径3.5 器高5.2	磁器 完形のため不明	透明釉 全面	家紋モチーフの桐文のコンニャク印判染付 口鏝あり	畳付け釉剥ぎ	完形	肥前	1700 } 1740
土坑88 30図10	碗 浅半球形	口径(10.1) 高台径4.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉 全面	家紋モチーフの藤文のコンニャク印判染付	畳付け釉剥ぎ		肥前	1700 } 1740
土坑88 30図11	碗	口径9.8 高台径4.3 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉 全面	型打ちのような陽刻の花文	畳付け釉剥ぎ	8割残存	肥前	1700 } 1740
土坑88 30図12 図版3	碗 浅半球形	口径9.9 高台径4.3 器高4.8	磁器 完形のため不明	暗い透明釉を全面に掛ける 貫入あり	細弁菊花文と菊花文と鎖文の染付	畳付け釉剥ぎ	9割残存	肥前	1700 } 1740
土坑88 30図13	碗	口径10.0 高台径4.1 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面コンニャク印判により菊花文と花文、裏銘「大明年製」の染付	畳付け釉剥ぎ		肥前	1700 } 1740
土坑88 30図14	小碗	口径7.1 高台径3.4 器高4.0	陶器 黄白色 軟質	胎釉を内面と外面胴下位まで掛ける		底部露胎		肥前	1690 } 1780
土坑88 30図15	碗	口径(10.6) 高台径4.2 器高4.2	陶器 にぶい淡赤灰～灰色	内外オリーブ色の灰釉の上に白化粧土を外面は打ちハケ目、内面は吹きハケ目に掛け、全面透明釉を掛ける		畳付け釉剥ぎ		現川焼	1690 } 1740
土坑88 30図16 図版3	碗	口径10.6 高台径4.8 器高5.2	陶器 完形のため不明	内外胎釉の上に胴上半まで鉄釉上掛け		畳付け釉剥ぎ	完形	小石原	不明
土坑88 30図17	小鉢 8角形	長軸(9.6) 高台径4.4 器高5.1	陶器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面に鉄線で輪郭線を引き、緑灰色の灰釉と白化粧土でつる系植物文、内面は大根文か	畳付け釉剥ぎ	京焼を意識した ものか	肥前	不明
土坑88 30図18	小皿	口径6.4 底径3.8 器高2.0	土師質土器 黄灰色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕2つ	8割残存 口縁部に油煙	蒲池焼	不明
土坑88 30図19 図版3	小皿	口径7.1 底径4.0 器高2.1	土師質土器 黄灰色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕1つ	8割残存 口縁部に油煙	蒲池焼	不明
土坑88 30図20	小皿	口径8.6 底径3.6 器高2.4	陶器 橙茶褐色	鉄釉内面から外面体部上半まで掛ける 外底糸切り		底部露胎		肥前	不明
土坑88 30図21	小皿	口径8.6 底径4.3 器高2.4	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕1つ	完形 口縁部に油煙	蒲池焼	不明
土坑88 30図22	小皿	口径(8.2) 底径4.2 器高2.6	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外底糸切り	外底は焼成不良 で黒灰化 外底 に粘土粒痕1つ	完形	蒲池焼	不明
土坑88 30図23	小皿	口径(8.4) 底径4.2 器高2.7	土師質土器 黄灰色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕2つ	8割残存 口縁部に油煙 見込みも変色	蒲池焼	不明
土坑88 30図24 図版3	蓋	裾径8.8 つまみ径0.9 器高1.5	磁器 灰白色	透明釉 全面	無文	つまみ端部釉 剥ぎ	8割残存	肥前	1700 } 1740
土坑88 30図25 図版3	鉢 蓋物	口径10.2 高台径6.3 器高7.3	磁器 にぶい灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面は崩れた唐草文と太鼓文の染付	畳付け釉剥ぎ 砂目付 内面 口縁部釉剥ぎ		波佐見	不明
土坑88 31図1	小皿	口径(12.2) 底径4.2 器高5.0	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉に近い緑灰色の灰釉を全面に掛ける 貫入あり		底部露胎 見込み蛇ノ目 剥ぎ砂目付着		肥前	1690 } 1780
土坑88 31図2 図版3	小皿	口径12.2 高台径4.7 器高3.8	陶器 黄灰白色 軟質	灰白色の灰釉を内面から外面体部上半に掛け、内面に緑灰白色の灰釉流し掛け 外面体部下位にカンナ痕		底部露胎 見込み蛇ノ目 剥ぎ砂目付着		肥前	1690 } 1780
土坑88 31図3 図版3	小皿	口径12.7 底径4.4 器高3.9	陶器 黄灰白色 軟質	灰緑白色の灰釉を内面から外面体部上半に掛け、内面に緑灰白色の灰釉流し掛け 外面体部下位にカンナ痕		底部露胎 畳付に 胎土目付着 見込 み蛇ノ目釉剥ぎ 砂目4つ付着		肥前	1690 } 1780

表21 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表20

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							挿入番号	図版番号	通称名
土坑88 31図4	小皿 5寸皿 くらわんか手	口径13.2 高台径7.7 器高3.2	磁器 にぶい灰色	発色不良の透明釉 全面 釉切れあり	外面は直線化した唐草文、内面は界線内に 唐草文、見込み5弁花文の染付	豊付釉剥ぎ 砂目付		波佐見	1680) 1740
土坑88 31図5	瓶	口径5.4 高台径7.4 器高(25.5)	陶器 灰色	黒釉 全面	無文	豊付け釉剥ぎ	口縁部と体部 は図上接合	肥前	1650) 1690
土坑88 31図6	鉢	—	陶器 にぶい暗紫灰色	内外オリーブ色の灰釉の上に白化粧土を内外打ちハケ目に掛け、 全面透明釉を掛ける		—		現川焼	1690) 1740
土坑88 31図7	鉢 火入れ	最大径12.7 高台径7.1 器高7.2	陶器 赤茶褐色	外面胴中位以上から内面口縁部は白化粧土を掛け、外面は櫛状掻 き取りの後、緑灰色の灰釉を掛け流し 灰釉は発色不良		胴下位露胎	口縁部は煤付 着	肥前	不明
土坑88 31図8	小型鉢	口径(13.4) 底径5.8 器高6.2	陶器 灰色	緑灰白色の灰釉口 縁部のみ		底部露胎 蛇ノ目高台	内面は焼成時 の変色	肥前	不明
土坑88 31図9	鉢	口径(36.0) 高台径(11.8) 器高14.2	陶器 赤茶褐色	外面胴中位以上から内面口縁部は白化粧土をハケ掛けし、その上 に緑灰色の灰釉を掛ける 外面下位は鉄釉のハケ掛け		豊付の外縁部 を釉剥ぎする とともに面取 り 見込みに 砂目跡あり		肥前	不明
土坑88 31図10 図版3	摺鉢	口径36.6 底径12.8 器高13.6	陶器 赤茶褐色	鉄釉口縁部の上に 掛かる	内面摺り目の14本単位 外底糸切り	底部露胎 内 外底面に胎土 目跡あり	内面は焼成時 の変色	肥前	1650) 1690
土坑88 31図11	焙烙	口径(51.0)	土師質土器 にぶい灰白色	—	外面口縁部はオサエ後ナデ、外面下位と内 面は丁寧なハケ	—	内面はにぶい 灰色、外面は 黒灰色	在地	不明
土坑89 32図1	碗	口径(7.0) 高台径(2.4) 器高3.8	陶器 黄白色 軟質	透明釉を内面と外 面胴下位まで掛 ける 貫入あり	無文	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1650) 1690
土坑89 32図2	碗 腰折形	口径(9.6) 高台径(4.8) 器高4.0	陶器 黄白色 軟質	透明釉を内面と外 面胴下位まで掛 ける 貫入あり	無文	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1650) 1690
土坑89 32図3	碗 浅半球形	口径(10.0) 高台径(4.0) 器高4.7	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面 に掛ける 貫入あり	外面に家紋文状の円に帆掛船文の染付	豊付け釉剥ぎ		肥前	1700) 1740
土坑89 32図4	碗	口径9.9 高台径4.3 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面に細弁菊花文と鎖文の染付	豊付け釉剥ぎ		肥前	1700) 1740
土坑89 32図5	小皿	口径(8.6) 底径(5.4) 器高2.0	土師質土器 黄灰色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕3つ	変色なし	在地	蒲池焼
土坑89 32図6	摺鉢	—	陶器 赤茶褐色	鉄釉口縁部の上に 掛かる	内面摺り目単位不明	—		肥前	1650) 1690
土坑90 32図7	碗	口径9.8 高台径4.2 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面は菊花文と崩れた唐草文、裏銘は渦福 の染付	豊付け釉剥ぎ		肥前	1700) 1750
土坑90 32図8	小皿 5寸皿	口径(12.8) 高台径(4.0) 器高3.6	磁器 灰色	透明釉 全面 発色不良	内面2重網目文染付	豊付釉剥ぎ 見込みは蛇目 釉剥ぎで、重 ね焼き痕あり		波佐見	1680) 1740
土坑90 32図9	小皿 変形皿	口径11.0 高台径4.2 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	口縁部を押して内側に曲げて、弁をつくる 外面帆掛船、見込み鳥と貝文 裏銘「大明 年製」の染付	豊付け釉剥ぎ		肥前	不明
土坑90 32図10	小皿 5寸皿	口径11.0 高台径4.2 器高3.6	陶器 灰白色	黄緑白色の灰釉を 外面上半と内面に 掛ける	外面胴下位にカンナ痕 高台内を削って、 豊付を削り出している	見込み蛇ノ目 釉剥ぎ、アル ミナ3箇所につ 着 底部露胎	小型	肥前	1690) 1780
土坑90 32図11	小皿	口径(12.6) 底径4.2 器高2.5	土師質土器 黄灰色 混入物なし	—	内外ナデ、外底静止ヘラケズリ		内外底面のみ 黒灰色に変色	蒲池焼	不明
土坑90 32図12	摺鉢	—	陶器 赤茶褐色	鉄釉全面	内面摺り目単位不明	—		肥前か	1690) 1750
土坑90 32図13	小鉢	高台径(7.8)	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面 に掛ける 貫入あ り	外面モチーフ不明 見込み環状花文 口唇 部モチーフ不明 裏銘は角福の染付	豊付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑90 32図14	土瓶	口径9.6 高台径8.6 器高12.9	陶器 紫灰色	外面に白化粧土を流し 掛けた後、オリーブ色の透明釉に近い灰 釉を外面に掛ける 把手は型押し成型		口唇部釉剥ぎ 豊付け釉剥ぎ 砂目付着		肥前	不明

表22 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表21



第32图 89~91号土坑出土土器・陶磁器实测图(1/4、他は1/3)

いるのは火を受けるためだろう。27図15は鉢で、外面は白化粧土を掛けただけで、搔き取りをしていない。

30図7は染付の小碗で、透明釉が薄く掛かっているのも、下地の器面の凹凸が残っている。30図8と9は染付の碗で、畳付の幅が広い特徴が同じことから、同じ窯の産であろう。30図11は磁器の碗で、型打ちによる陽刻の花文の上に色付けされていない。上絵付け前のものだろうか。30図22は土師質土器の小皿で、他の在地産小皿に比べて器壁が薄いのが特徴的である。

31図7は陶器の鉢で、火入れだろう。口唇部の白化粧土が剥がれているが、釉剥ぎなのか、使用で剥がれたのかは判別できない。

32図1・2は陶器の碗で、モチーフのある部分が欠損しているものと思われる。32図9は染付の変形小皿で、外面に帆掛船のモチーフを使うことと裏銘の文字が太いことがやや異質である。32図11は土師質土器の小皿で、蒲池焼に特有の均一な黄白色を呈するが、内外底面のみ黒灰色に変色しているのは、焼成時に接地した部分が焼成不良になったためだろう。32図15は染付碗で、裏銘の「大明年製」の字体が特徴的である。

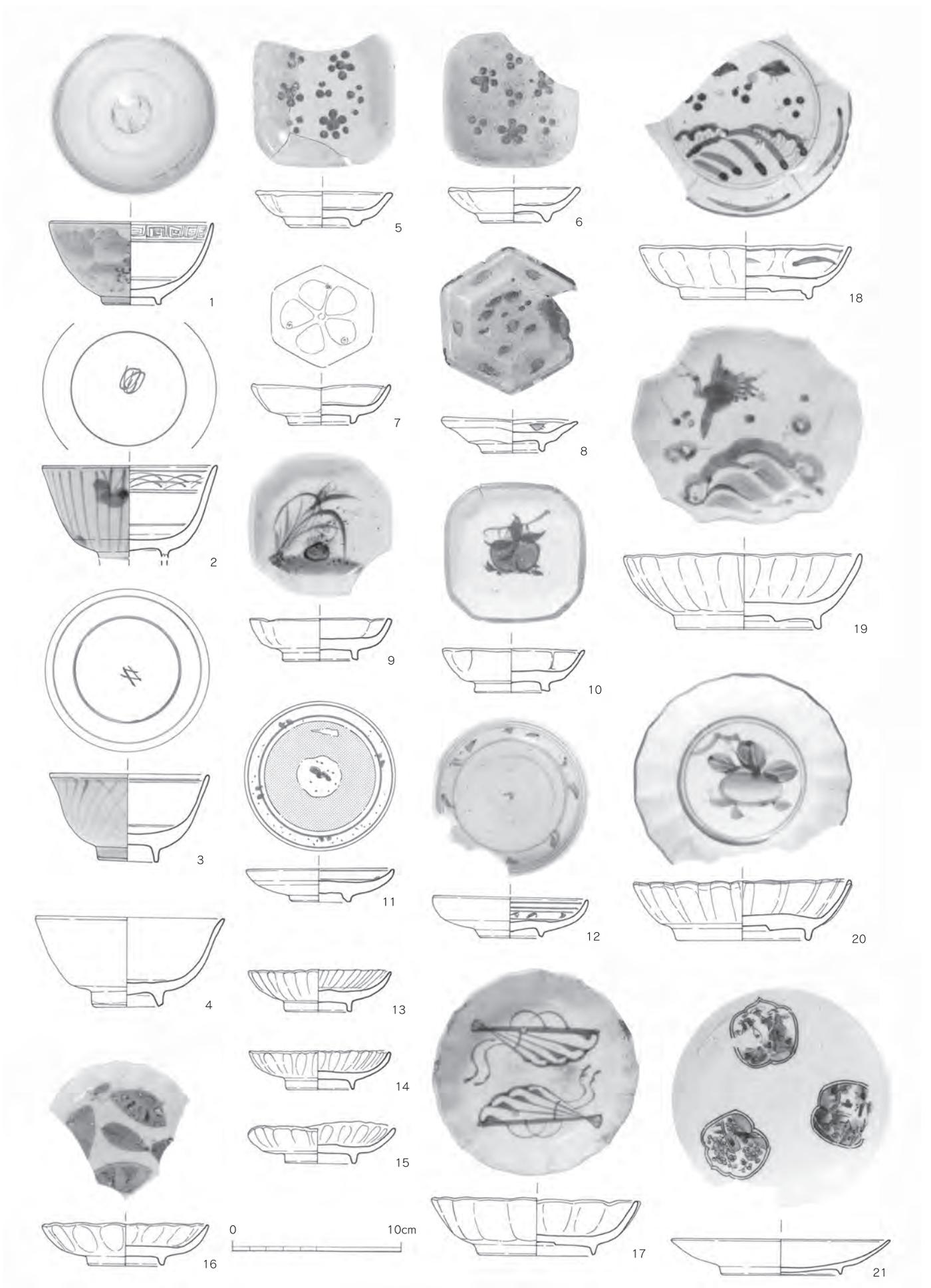
33図1は染付碗で、橋が遠近法を用いて描写されている。33図10は染付の方形小皿で、口縁の一部に焼成時のひびがある。33図11は染付の小皿で、口縁の一部が打ち欠かれて黒変しているのも、灯明皿として使用されている。

34図1は染付の皿で、外底部は砂目が焼き台の痕に付着し、焼き台部分が上げ底状に歪んでいる。34図7は土師質土器の火鉢で、胎土から蒲池焼と考えられる。外面から内面口縁部は単位幅の広いミガキで、椿葉のミガキだろうか。脚はあっただろうが、貼り付け痕は残存部がない。34図8は陶器の半胴甕で、完形のため胎が観察しにくい、釉調から小石原焼の可能性が高い。34図10は土鍋で、把手部は型押し成型でモチーフを陽刻しているが、文字にはなっていない。34図18は土師質土器の小皿で、中央に孔が斜めに開いているのは、灯明皿として使用する際に灯芯を入れるためか。

35図4は陶器の瓶で、見込みの透明釉が焼き台に接触した部分が剥がれている。35図11は、陶器の火鉢の把手片周縁を丸く打ち搔いた円盤形製品で、単なる円盤でなく獣面を持つことに意味が

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							挿図番号	形状	()は復元値
図版番号	通称名								
土坑91 32図15	碗	高台径4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面モチーフ不明 裏銘「大明年製」染付	畳付け釉剥ぎ		肥前	1680 } 1700
土坑91 32図16	碗 呉器手	口径(11.0) 高台径(4.0) 器高5.8	陶器 にぶい灰黄橙白 色	黄白色の灰釉を全面に掛ける 貫入あり	無文	畳付け釉剥ぎ		肥前	1690 } 1780
土坑91 32図17	碗	口径(9.8) 高台径4.1 器高4.0	陶器 黄白色 軟質	透明釉を内面と外面胴下位まで掛ける	見込みに山水文の鉄絵 外底に「清水」の刻印	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1650 } 1690
土坑91 32図18	碗	口径(11.0) 高台径(4.0) 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付け釉剥ぎ		肥前	1700 } 1740
土坑91 32図19	小皿	口径(8.0) 底径(4.0) 器高2.0	土師質土器 暗黄灰色 混入物なし	—	外底糸切り	不明	やや灰色に変色	蒲池焼	不明
土坑91 32図20	杯	口径(6.2) 高台径3.0 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	無文	畳付け釉剥ぎ		肥前	不明
土坑91 32図21	蓋	裾径(11.0) 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	天井部に葉文の染付 板状つまみは染付け後に貼り付けている	受け部は釉剥ぎ		肥前	1690 } 1780

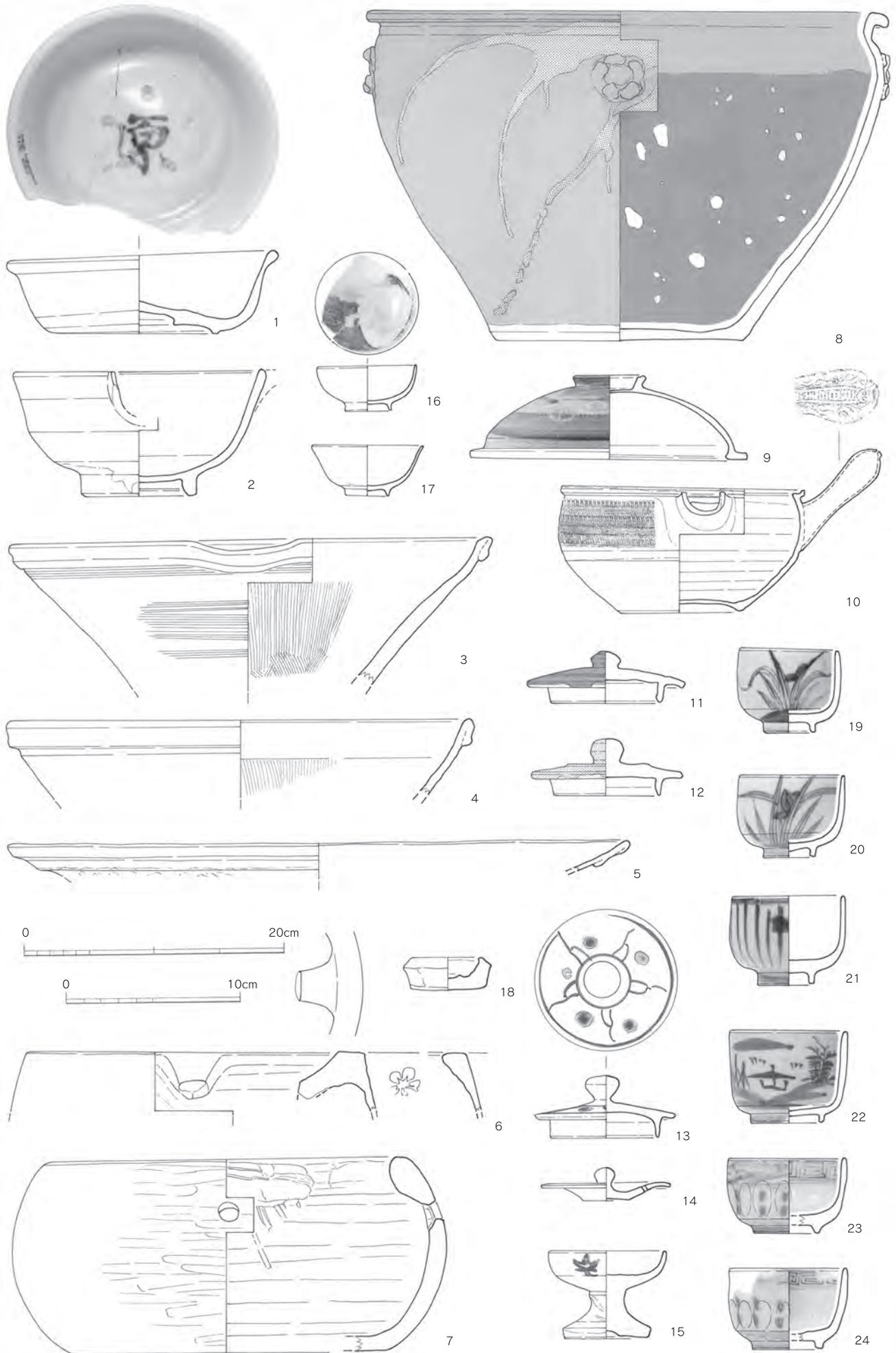
表 23 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表22



第33图 2号大土坑出土磁器实测图(1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大土坑2 33図1	碗	口径9.6 高台径3.3 器高5.0	磁器 灰白色	白濁した透明釉を 全面に掛ける	外面は橋や家の山水文、内面は口縁部雷文、 見込みは崩れた環状松竹梅文の染付け	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図2	碗 端反形	口径10.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面縦線文・蝶文 内面口縁部に偏網目文、 見込みは渦巻状のモチーフ染付		高台部だけ失 われている	瀬戸か	19世紀中葉
大土坑2 33図3 図版3	碗 端反形	口径9.4 高台径3.6 器高5.3	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面 に掛ける	外面に格子文、内面に界線、見込みに井の 染付	高台露胎	ほぼ完形	波佐見	19世紀中葉
大土坑2 33図4 図版3	碗 端反形	口径11.0～11.8 高台径4.2 器高5.4	磁器 灰白色	外面鉄釉の上に黄緑灰色の灰釉を胴部にハケ掛け、内面透明釉		高台露胎 見込み 蛇ノ目釉剥ぎ後、 アルミナ塗布 重 ね焼き痕あり	歪みあり ほぼ完形	肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図5	変形小皿 方形皿	口径8.1 高台径3.8 器高2.2	磁器 灰白色	白濁した透明釉を 全面に掛ける	型打ち成型で、見込みに梅鉢文の呉須イッ チン	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図6	変形小皿 方形皿	口径7.9 高台径3.8 器高2.1	磁器 灰白色	白濁した透明釉を 全面に掛ける	型打ち成型で、見込みに梅鉢文の呉須イッ チン	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図7	変形小皿 六角皿	口径8.6 高台径2.4 器高2.4	磁器 灰白色	緑がかった透明釉 を全面に掛ける	型打ち成型で、見込みに梅鉢の陽刻	畳付釉剥ぎ 見込みに3箇 所ハリ目跡	9割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図8	変形小皿 六角皿	口径8.0 高台径3.7 器高2.2	磁器 黒灰色	白濁した透明釉を 全面に掛ける	型打ち成型で、見込みに赤彩の鳥と、黒彩 で輪郭を描かれた緑彩の雲と岩、青の波頭 文の色絵	畳付釉剥ぎ	9割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図9	変形小皿 方形皿	口径8.4 高台径4.5 器高2.5	磁器 灰白色	青みがかった透明 釉を全面にかける	型打ち成型で、見込みに稲と田螺の染付	畳付釉剥ぎ	9割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図10	変形小皿 方形皿	口径11.0 高台径4.8 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	型打ち成型で、見込みに柿文のコバルト染 付け 口唇部はコバルトの口錆	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀後半
大土坑2 33図11 図版3	小皿	口径8.6 高台径3.7 器高2.1	磁器 完形のため不明	青みがかった透明 釉を全面にかける	内面に界線と葉文のコバルト染付 コバルトが内外に散る	畳付釉剥ぎ部にアルミ ナ付着、見込み蛇ノ目 釉剥ぎ後、アルミナ塗 布重ね焼き痕あり	完形 灯明皿として 使用か	肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図12	小皿	口径9.2 高台径3.9 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	内面に界線と葉文の染付	畳付釉剥ぎ 見込 み蛇ノ目釉剥ぎ後、 アルミナ塗布	8割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図13 図版3	変形小皿 花卉形	口径8.5 高台径3.8 器高2.5	磁器 灰白色	青みがかった透明 釉を全面にかける	型打ち成型で、無文	蛇ノ目高台内釉 剥ぎ 見込みに 3本のハリ目跡		瀬戸か	19世紀中葉
大土坑2 33図14 図版3	変形小皿 花卉形	口径8.4 高台径4.0 器高2.3	磁器 完形のため不明	青みがかった透明 釉を全面にかける	型打ち成型で、無文	蛇ノ目高台内釉 剥ぎ 見込みに 3本のハリ目跡		瀬戸か	19世紀中葉
大土坑2 33図15 図版4	変形小皿 花卉形	口径8.5 高台径3.8 器高2.5	磁器 灰白色	青みがかった透明 釉を全面にかける	型打ち成型で、無文	蛇ノ目高台内釉剥 ぎ 見込みに3本 のハリ目跡と融着	歪みあり	瀬戸か	19世紀中葉
大土坑2 33図16	小皿 5寸皿 花卉形	口径(10.0) 底径4.4 器高2.5	磁器 灰白色	青みがかった透明 釉を全面にかける	型打ち成型で、見込みに蛤文の染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図17 図版4	変形皿 花卉形	口径12.3 高台径6.8 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	型打ち成型で、見込みに扇文コバルト染 付け	蛇ノ目高台内 釉剥ぎ	灯明皿として 使用か	肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図18	変形皿 花卉形	口径(12.6) 高台径7.7 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	型打ち成型で、内面胴部にデザイン化され た樹文か 見込みに波濤文と千鳥文染付 口縁部に呉須で口錆	蛇ノ目高台内 釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図19	変形皿 花卉形	口径14.2 高台径8.7 器高4.5	磁器 灰白色	青みがかった透明 釉を全面にかける 貫入あり	型打ち成型で、見込みに波濤文と鶴文の呉 須染付け	蛇ノ目高台内 釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図20	変形皿 花卉形	口径11.0 高台径4.8 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	型打ち成型で、見込みに柿文のコバルト染 付け 口唇部はコバルトの口錆	畳付釉剥ぎ	口縁の一部に焼 成時のひびがあ るだけで完形	肥前	19世紀中葉
大土坑2 33図21	小皿 5寸皿	口径12.8 高台径7.1 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	内面に3つの窓文に梅樹と鳥、楼閣と人物と 橋、男女の人物の染付	畳付釉剥ぎ	器壁が薄い	肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図1	皿	口径15.0 高台径9.0 器高4.8	磁器 灰白色	青みがかった透明 釉を全面にかける	見込みに「原」の染付	蛇ノ目高台内釉剥 ぎ 砂目付着見込 みに5本のハリ目跡	歪み大きい	肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図2 図版4	片口鉢	口径14.4 高台径6.6 器高7.2	陶器 黄灰色	飴釉を外面部に、 内面は全面に掛 ける		高台露胎	9割残存	小石原	不明

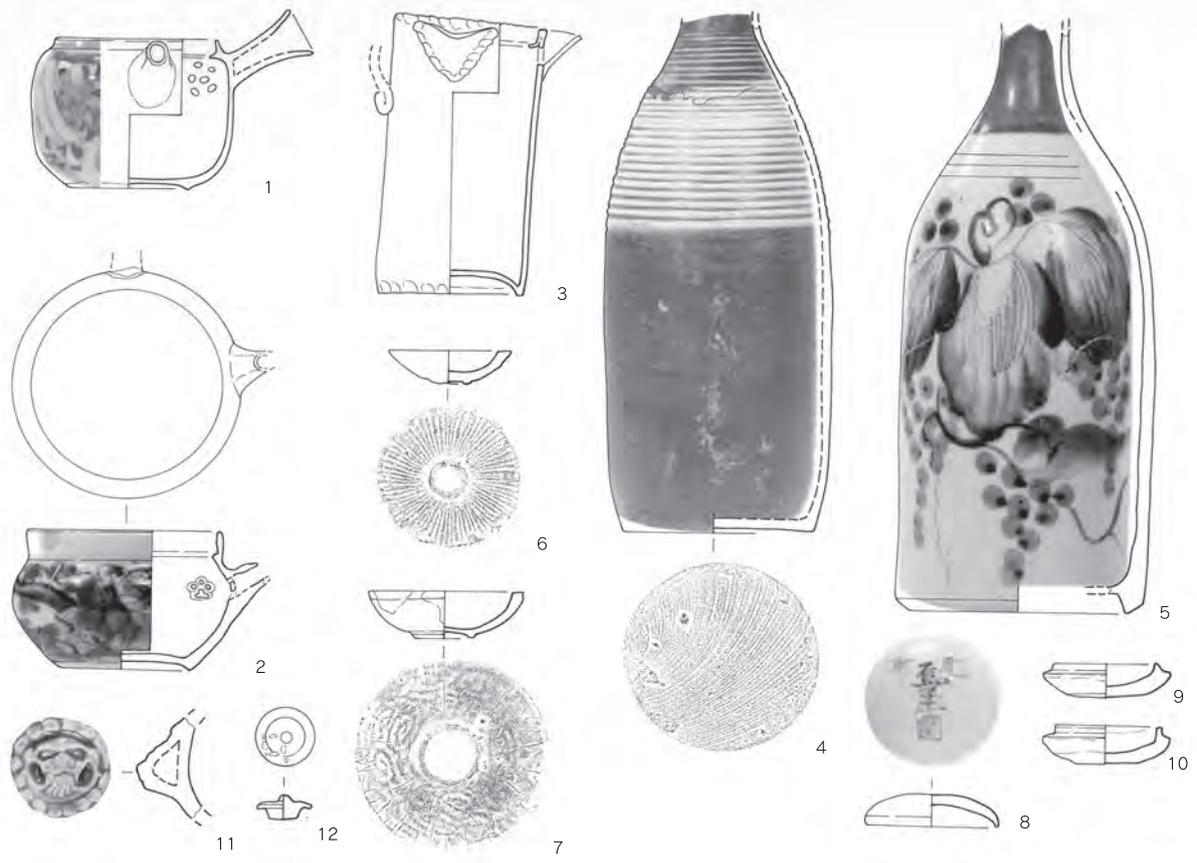
表24 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表23



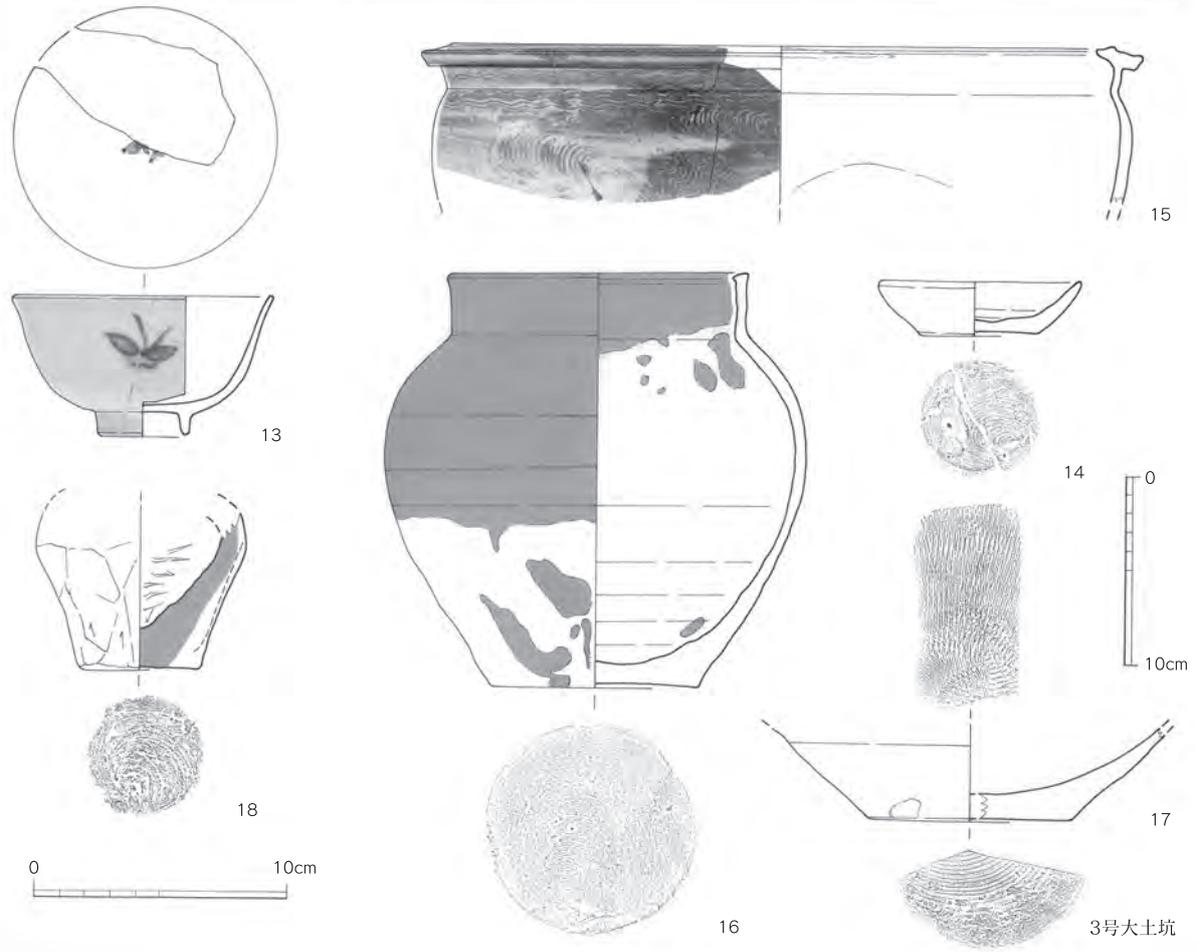
第34図 2号大土坑出土土器・陶磁器実測図(3~6・8は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大土坑2 34図3	摺鉢	口径(33.0)	陶器 明橙灰白色 軟質	透明釉を全面に掛ける	内面摺り目の14本単位 口縁部は折り曲げ 外面カキ目	—	片口あり	小石原	不明
大土坑2 34図4	摺鉢	口径(36.0)	陶器 明橙灰白色 軟質	鉄釉全面に薄く掛ける	内面摺り目の単位不明 口縁部は折り曲げ	—		小石原	不明
大土坑2 34図5	焙烙	口径(27.6)	土師質土器 にぶい黄灰色 金雲母入る	—	外面口縁部はオサエ後ナデ、内面は丁寧なハケ	不明	変色ないので未使用か	在地	不明
大土坑2 34図6	焜炉	口径(26.0)	土師質土器 にぶい黄灰色 金雲母入る	—	外面に花文をスタンプした後、赤色顔料を外面に塗布	不明	内面変色なし	在地	不明
大土坑2 34図7	火鉢	口径(11.0) 底径(18.0)	土師質土器 にぶい黄灰色 金雲母入る	肩部に穿孔 外面から内面口縁部は単位の幅広いミガキ、内面はケズリ		外面の口縁部の一部に黒斑あり	突起の貼り付け痕はある 内面変色少ない	蒲池焼	不明
大土坑2 34図8	鉢	口径40.1 底径19.2 器高24.5	陶器 淡橙白色	内面下位は鉄釉を掛け、その上の銅上半から外面には発色不良のにぶい淡緑灰色の灰鉄を掛ける 最後に薬灰釉を外面肩部に流し掛け指押さえて成型した5弁花浮文貼り付け		外底露胎で、円形の胎目跡がスタンプで環状配置で付着	ほぼ完形	小石原か	不明
大土坑2 34図9 図版4	土鍋蓋	裾径15.8 つまみ径4.1 器高4.8	低火度の施釉陶器 黄灰色 軟質	外面胎帯状に2段掛け、内面は明黄褐色の灰釉	外面は鉄釉を掛け上にイッチンと緑彩による草文 外面中位は飛鉈	裾部釉剥ぎ	9割残存	在地	不明
大土坑2 34図10 図版4	土鍋	口径18.8 底径8.9 器高9.8	低火度の施釉陶器 黄灰色	鉄釉外面体部上半、内面は茶褐色の灰釉	外面飛び鉈 把手は型押し成型の接合	受け部釉剥ぎ	外面煤付着 9割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図11 図版4	土瓶蓋	裾径9.2 つまみ径1.7 器高3.1	陶器 橙褐色	外面灰色の鉄釉を上面に掛ける		裾部釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図12	土瓶蓋	裾径8.6 つまみ径1.8 器高3.3	陶器 灰色	外面灰色の灰釉を上面に掛ける 灰を多く被る		裾部釉剥ぎ	9割残存	肥前か	19世紀中葉
大土坑2 34図13 図版4	土瓶蓋	裾径8.1 つまみ径1.8 器高3.6	陶器 完形のため不明	外面白化粧土を上面に掛けた後、鉄絵と緑彩で文様を描く		裾部釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図14	急須蓋	裾径7.2 つまみ径1.2 器高1.8	土師質土器 灰白色 軟質	—	底部糸切り	不明		蒲池焼か	不明
大土坑2 34図15 図版3	仏飯器	口径6.8 底径4.8 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉 裾部を除いて全面	コバルト手描き染付 外面楓文 鉢部と脚部の接合部は調整粗いので突帯状になる	底部露胎	ほぼ完形	瀬戸か	19世紀後半
大土坑2 34図16	杯	口径5.8 底径2.8 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉 高台内以外に掛ける	見込みに山と城がコバルトの吹絵、帆船と隅樽は金彩	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図17 図版4	杯	口径6.4 高台径2.5 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図18 図版4	小皿 灯明皿	口径4.0 底径4.2 器高1.9	土師質土器 完形のため不明	—	外底板状圧痕	不明	ほぼ完形 変色なし	在地	不明
大土坑2 34図19 図版4	小碗 湯飲み	口径5.8 高台径3.0 器高4.9	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける 発色不良	外面に蝶と菖蒲文の染付	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図20 図版4	小碗 湯飲み	口径6.1 高台径3.1 器高4.8	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける 発色不良	外面に蝶と菖蒲文の染付	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図21 図版4	小碗 湯飲み	口径6.5 高台径3.3 器高5.2	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける 発色不良	外面に縦線と蝶文の染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	波佐見	19世紀中葉
大土坑2 34図22 図版4	小碗 湯飲み	口径6.1 高台径3.1 器高4.8	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける 発色不良	外面に山水文の染付	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図23	小碗 筒丸形 湯飲み	口径6.6 高台径3.8 器高4.3	磁器	透明釉を全面に掛ける	外面2本単位の細線による波文、胴部はデザイン化した文字文様、下位は鎖文、内面口縁部雷文の染付	畳付釉剥ぎ	24と同一モチーフ	肥前	19世紀中葉
大土坑2 34図24	小碗 筒丸形 湯飲み	口径6.6 高台径3.8 器高4.0	磁器	透明釉を全面に掛ける	外面2本単位の細線による波文、胴部はデザイン化した文字文様、下位は鎖文、内面口縁部雷文の染付	畳付釉剥ぎ	23と同一モチーフ	肥前	19世紀中葉
大土坑2+土坑30 35図1 図版4	急須	口径6.6 底径4.6 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花文と蝶文、口縁部雷文のコバルト染付	外底部釉剥ぎ 受け部釉剥ぎ		瀬戸か	19世紀中葉
大土坑2 35図2	急須	口径7.6 底径5.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	文人風人物文のコバルト染付	胴下位釉剥ぎ 受け部釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉

表25 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表24



2号大土坑

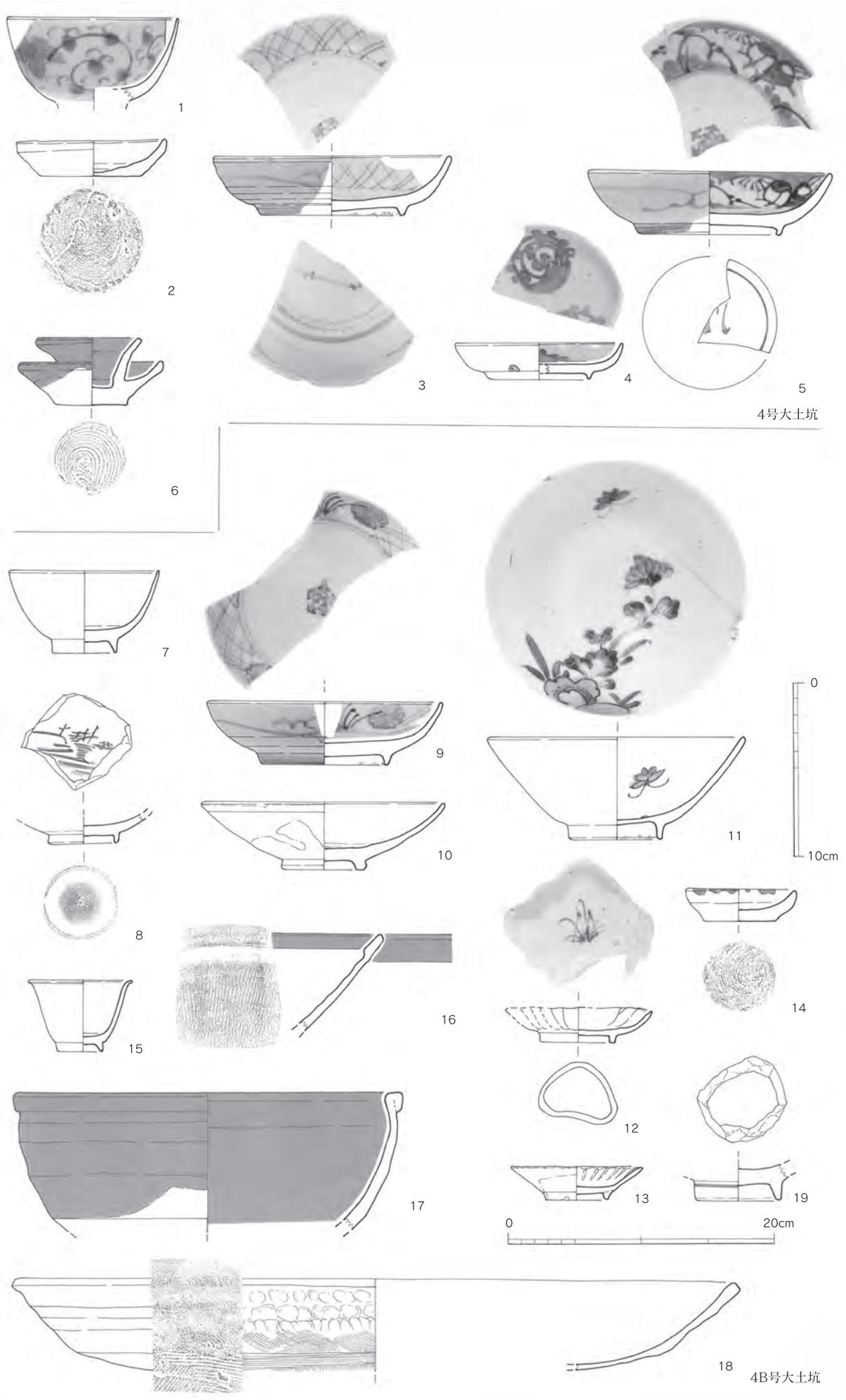


3号大土坑

第35図 2・3号大土坑出土土器・陶磁器実測図(15・17は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大土坑2 35図3 図版4	瓶 水差し	口径6.0 底径5.6 器高11.3	土師質土器 にぶい暗黄灰色 混入物なし	—	布状圧痕のつく粘土板を円筒形に丸めて体 部を成形し、他の部位を接合している	不明	把手部欠損 変色なし	在地	不明
大土坑2 35図4	瓶	底径8.0 最大径4.6	陶器		外面中位以下に鉄軸掛け、肩部に刷毛文状にイッチンを掛け、そ の上に頸部から肩部に鉛軸入れ 外底糸切り	蛇ノ目高台内 軸剥ぎ 見込 みの軸剥がれ	ほぼ完形	肥前	19世紀中葉
大土坑2 35図5	瓶	底径8.6 最大径9.8 器高23.1	磁器 灰白色	透明釉全面掛けの 後、頸部鉄軸	外面は牡丹花文の染付	畳付軸剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑2 35図6 図版4	紅猪口 紅皿	口径4.8 高台径1.3 器高1.3	磁器 完形のため不明	透明釉 内面から 外面口縁部	型押し成型で、外面菊花文	底部露胎	完形	肥前	不明
大土坑2 35図7 図版4	紅猪口 紅皿	口径6.1 高台径2.3 器高2.0	磁器 完形のため不明	透明釉 内面から 外面口縁部	型押し成型で、外面蜻唐草文	底部露胎	完形	肥前	不明
大土坑2 35図8	合子蓋	裾径5.2 器高1.2	磁器 灰白色	発色不良の透明釉 全面	天井部に「肥前 烏犀圓」と染付けされてい る	内面裾部軸剥 ぎ	完形	肥前	不明
大土坑2 35図9 図版4	合子身	口径4.0 底径3.0 器高1.3	磁器 完形のため不明	透明釉 内面から 外面体部中位	外底回転ヘラ切り	受け部軸剥ぎ	完形	肥前	不明
大土坑2 35図10 図版4	合子身	口径4.0 底径2.4 器高1.5	磁器 完形のため不明	透明釉 内面から 外面体部中位	外底回転ヘラ切り	受け部軸剥ぎ	完形	肥前	不明
大土坑2 35図11 図版4	瓦玉	径4.0 器高2.4	陶器 にぶい茶灰色	外面緑色の灰釉 内面鉄軸	型押し成型による把手部	—	瓦玉として完 形	肥前	不明
大土坑2 35図12 図版4	ミニチュア 土瓶蓋	裾径2.2 つまみ径0.2 器高1.0	磁器 灰白色	青みがかった透明 釉 上面	上面に型押しによる花文の陽刻	下半軸剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀中葉
大土坑3 35図13 図版4	碗 端反形	口径10.4 高台径(3.4) 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	コバルト手描き染付 外面葉・蝶文 見込み モチーフ不明	畳付軸剥ぎ		瀬戸か	19世紀後半
大土坑3 35図14 図版4	小皿	口径7.9 底径4.7 器高2.1	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外底糸切り	不明	ほぼ完形 変色なし	在地	不明
大土坑3 35図15	甕 半胴甕	口径(38.0)	陶器 暗青灰～暗橙色		外面から内面口縁部まで白化粧土を掛け、ハケによる掻き取りで 波状文など描き、口縁部内外に等間隔で鉄軸を細長く流し、最後 に口唇部外半から外面に緑灰色の灰釉を掛ける	—		肥前か	17世紀後半
大土坑3 35図16 図版4	壺	口径(11.8) 底径8.2 器高16.5	陶器 橙褐色 軟質	発色不良で灰紫褐色 の鉄軸が外面上半と 内面口縁部にかかる	外底糸切り	底部露胎		肥前	不明
大土坑3 35図17	摺鉢	底径10.6	陶器 暗紫灰色	—	内面摺り目の13本単位 外底糸切り	見込み重ね焼 き痕 底部に 胎土目跡		肥前	1620) 1690
大土坑3 35図18	小壺 焼塩壺	底径4.4 最大径(8.3)	土師質土器 にぶい黄灰色～ 黒灰色	—	外底糸切り 外面ケズリ	不明	外面はケズリ 後未調整	在地	不明
大土坑4 36図1	碗	口径(9.5)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面にコンニャク印判の三葉文と花唐草文 の染付	—	38図7と同モ チーフの別個 体	肥前	不明
大土坑4 B 36図2	小皿	口径8.4 底径5.6 器高2.1	土師質土器 にぶい暗黄灰色	—	外底糸切り	不明	8割残存 変色なし	在地	不明
大土坑4 36図3	小皿 5寸皿	口径(13.4) 高台径(8.0) 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける 発色不良	外面唐草文、内面雪ノ輪文、見込みに5弁花文のコパ ルト染付裏銘は「大明年製」 内面網目文とコンニャク 印判の菊花文、見込みはコンニャク印判の5弁花文	畳付軸剥ぎ		波佐見	1680) 1740
大土坑4 36図4	小皿	口径(9.2) 高台径(5.8) 器高2.0	磁器 灰色	透明釉 全面 発色不良で貫入あ り	内面コンニャク印判の環状の花唐草文の染 付	畳付軸剥ぎ		肥前か	1680) 1700
大土坑4 36図5	小皿 5寸皿	口径(13.6) 高台径(8.0) 器高3.5	磁器 灰色	透明釉を全面に掛 ける 発色不良	外面唐草文、内面雪ノ輪文、見込みに5弁花 文のコバルト染付 裏銘は「大明年製」	畳付軸剥ぎ		波佐見	1680) 1740
大土坑4 36図6	灯明受皿	受け部口径5.9 高台径4.1 器高3.8	陶器 橙褐色	光沢のない鉄釉を 上半分に薄掛け	外底糸切り	底部露胎		肥前	不明
大土坑4 B 36図7	碗	口径8.3 高台径4.6 器高4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文	畳付軸剥ぎ		肥前	1650) 1670
大土坑4 B 36図8	碗	底径3.8	陶器 黄白色	透明釉を内面と外 面胴下位まで掛け る	見込みに山水文の鉄絵 裏銘は、中央の円刻を鳥の胴にした鳥の刻 印	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1690) 1780

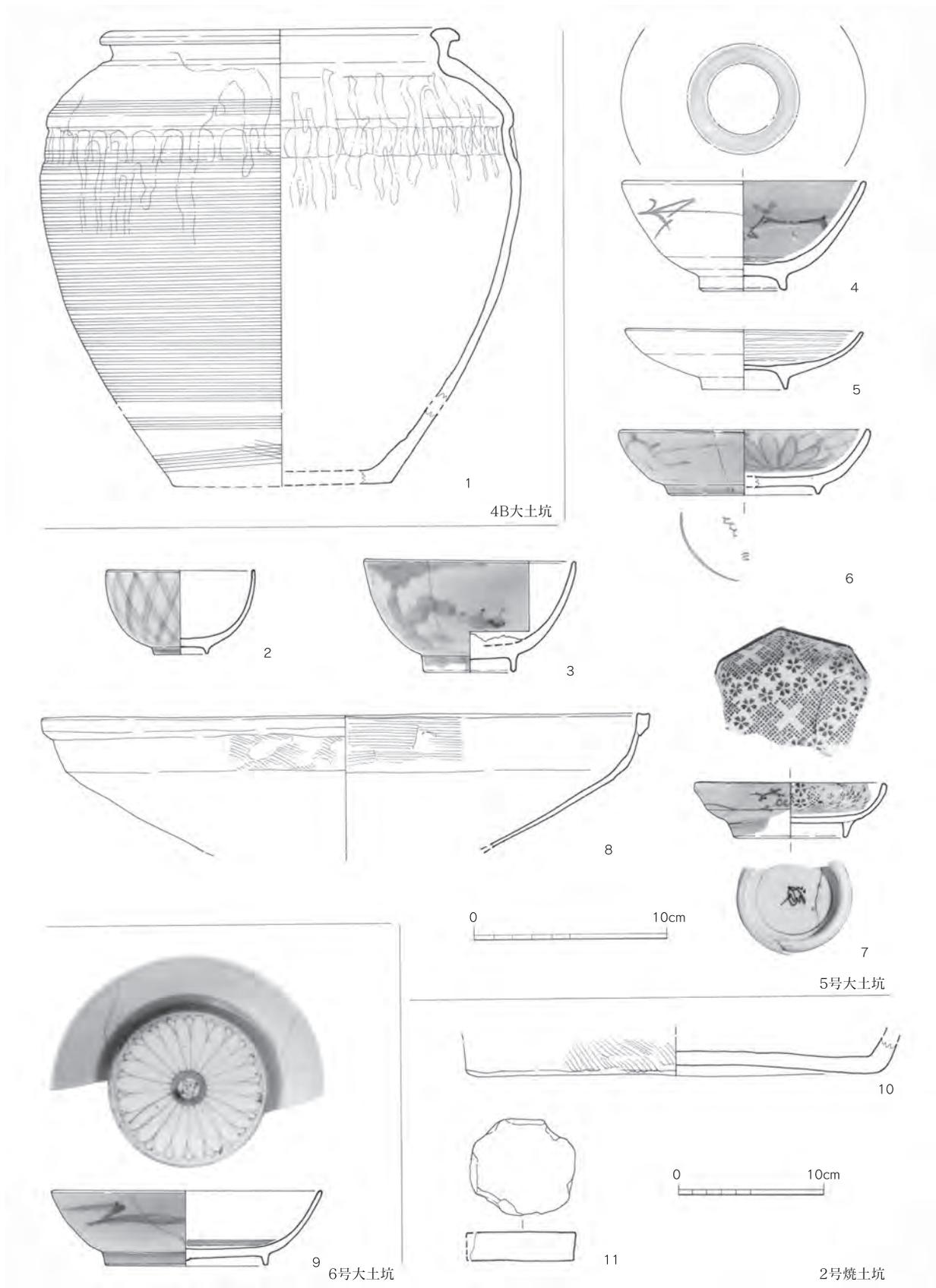
表26 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表25



第36图 4・4B号大土坑出土土器・陶磁器实测图(16・18は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
大土坑4B 36図9	小皿 5寸皿	口径(13.2) 高台径(7.2) 器高3.6	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良	外面唐草文、内面雪ノ輪文、見込みに5弁花文のコバルト染付 裏銘は「大明年製」	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680) 1740
大土坑4B 36図10	小皿 5寸皿	口径13.4 高台径3.8 器高3.8	陶器 黄灰色	灰白色の灰釉薬を外面体部に施した後、内面に濃黄緑色の銅緑釉掛け		畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ部に重ねの痕跡あり		肥前	1690) 1780
大土坑4B 36図11	大碗 嗽茶碗	口径14.3 高台径5.4 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良	内面花と蝶の染付け、外面界線のみ	畳付釉剥ぎ 砂目付着	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑4B 36図12	変形小皿 花変形	長軸(8.2) 高台長軸4.3 器高2.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良	糸切り成型 見込みに草文染付け	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑4B 36図13	小皿 菊花形	口径7.4 底径3.7 器高1.8	磁器 灰白色	透明釉 高台内以外に掛ける	型押し成型	畳付釉剥ぎ	高台接合後の調整粗い	肥前	1680) 1700
大土坑4B 36図14 図版4	小皿	口径6.3 底径4.0 器高1.8	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外底糸切り	不明	ほぼ完形 口縁の油煙から灯明皿	在地	不明
大土坑4B 36図15	杯	口径5.6 底径2.6 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉 高台内以外に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1650) 1680
大土坑4B 36図16	摺鉢	—	陶器 黒紫灰色	鉄釉口縁部だけに掛かる	内面摺り目の16本単位	—		肥前	1650) 1690
大土坑4B 36図17	片口鉢	口径(21.8)	陶器 赤茶褐色	鉄釉外面体部上半、内面は全面		口唇部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑4B 36図18	焙烙	口径54.6	瓦質土器 灰色	—	外面胴部オサエ、外底と内面は丁寧なハケ	不明	口縁は7割残存 外面は煤付着	在地	不明
大土坑4B 36図19	瓦玉	高台径4.8 長軸5.0 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面界線の染付 高台の周縁を打ち欠いて円形にしたもの	畳付釉剥ぎ	瓦玉として8割残存	肥前	不明
大土坑4B+ 土79 37図1	甕 半胴甕	口径(24.8) 最大径(33.2)	陶器 暗紫灰色	内面に格子目タキ当て具痕がナゲ消されている。外面カキメ、肩部は外面から帯状に塗ませた後、内面からオサエで押し出して凹凸を作っている。外面に緑灰色の灰釉を掛ける		—	底部は図上接合	肥前か	17世紀後半
大土坑5 37図2	碗 浅半球形	口径9.6 高台径2.9 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面3重格子文の染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1780) 1810
大土坑5 37図3 図版5	碗	口径11.0 高台径4.8 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面山と松樹文の染付	畳付釉剥ぎ	内面に漆状のものが付着	肥前	1680) 1700
大土坑5 37図4	碗	口径(12.6) 高台径4.6 器高5.7	陶器 黄灰色	内面に白化粧土をハケ状に施した後、全面黄灰色の灰釉掛け その後緑彩と赤彩で梅樹文を描く 見込みの蛇ノ目釉剥ぎ部は緑彩 外面は折れ松葉文の赤絵		畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ部に重ねの痕跡あり		肥前	不明
大土坑5 37図5	小皿 5寸皿	口径12.2 高台径4.4 器高3.2	陶器 緑青灰色	内面に白化粧土をハケ状に施した後、全面緑灰色の灰釉掛け		畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑5 37図6	小皿 5寸皿	口径(13.0) 高台径(7.8) 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良	外面唐草文、内面網目文に半菊花文、見込みに5弁花文のコバルト染付 裏銘は大明年製	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680) 1740
大土坑5 37図7	変形小皿 8角皿	長軸(10.0) 高台径5.6 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良	型打ち成型 外面は唐草文、内面は型紙刷りの点描と桜花文、裏銘は渦福の染付け 口唇部は口錆	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑5 37図8	焙烙	口径(42.0)	土師質土器 にぶい暗黄灰色	—	外面胴部オサエ、外底と内面は丁寧なハケ 底部と体部の接合はオサエのみ	不明	見込みはハケが摩耗している 外面は煤付着	在地	不明
大土坑6 37図9	小皿 5寸皿	口径(14.0) 高台径8.4 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面葉文、見込み菊花文に半菊花文の染付 裏銘は「大明年製」	畳付釉剥ぎ 中央にハリ目1あり		肥前	17世紀後半
焼土坑2 37図10	大甕	底径(29.0)	土師質土器 橙灰色	—	外底に粗いハケ後、未調整	不明	内面やや白色化	在地	不明
焼土坑2 37図11	瓦玉	長軸5.0 短軸5.4 厚さ1.5	土師質土器 橙灰色	—	厚さや湾曲が小さいことから大甕の破片だろう	不明	変色なし	在地	不明

表27 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表26



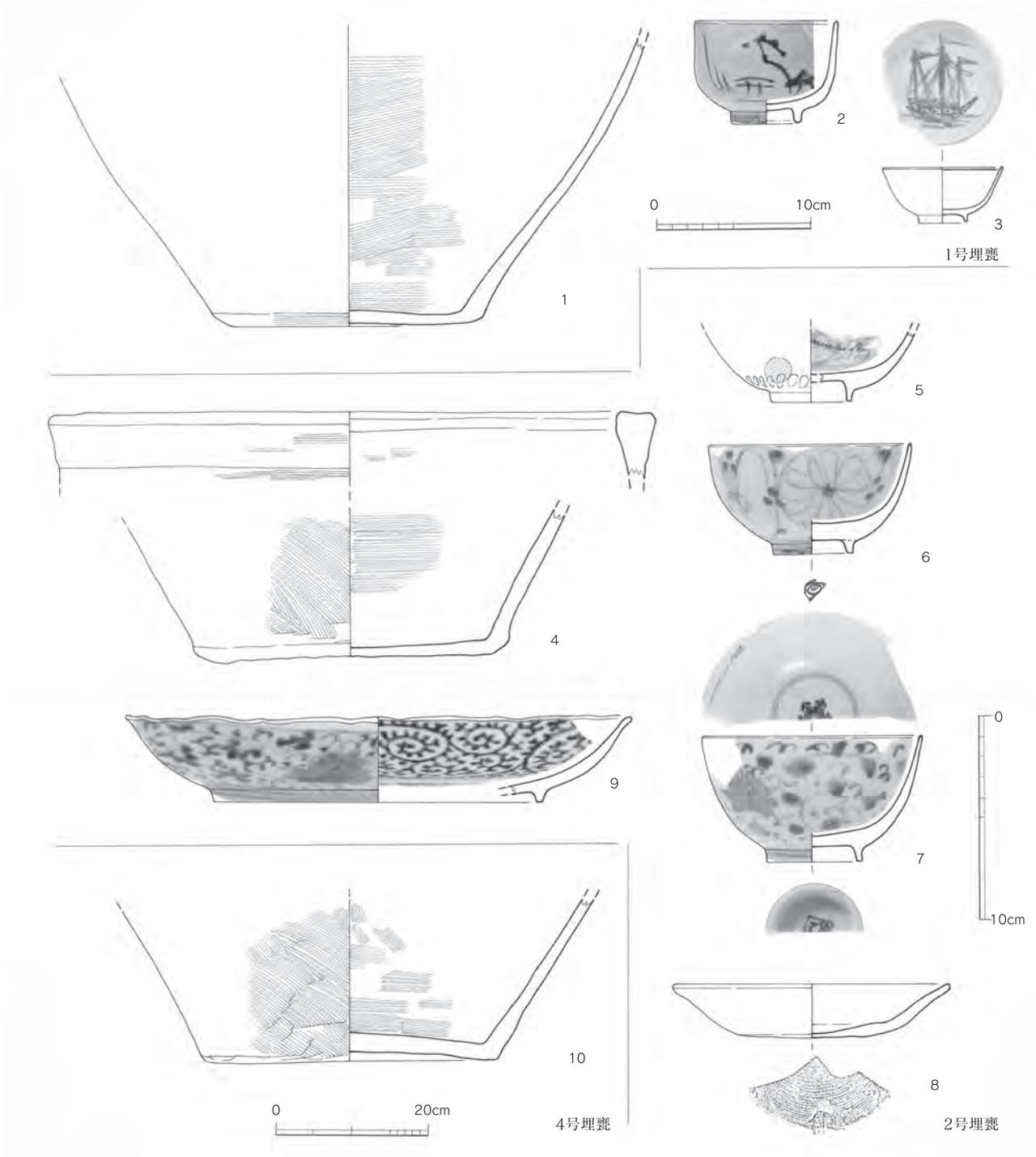
第37図 4B・5・6号大土坑・2号焼土坑出土土器・陶磁器実測図(1・8・10は1/4、他は1/3)

ある。35図17は陶器の摺鉢の底部で、肥前の胎で平底であるから、鉄釉が口縁部のみにかかるものと思われる。

36図3は染付小皿で、36図9とはモチーフが近似する別個体である。37図5は陶器の小皿で、胎の色調が緑灰色がかっているわりには焼成はよい。

38図4は2号埋甕である土師質土器の大甕で、破片の1と2は同一個体の可能性があるが、欠損部が大きく不確実である。38図10は4号埋甕である土師質土器の大甕で、器面が摩滅していないので強く施されたハケの凹みまで残っている。

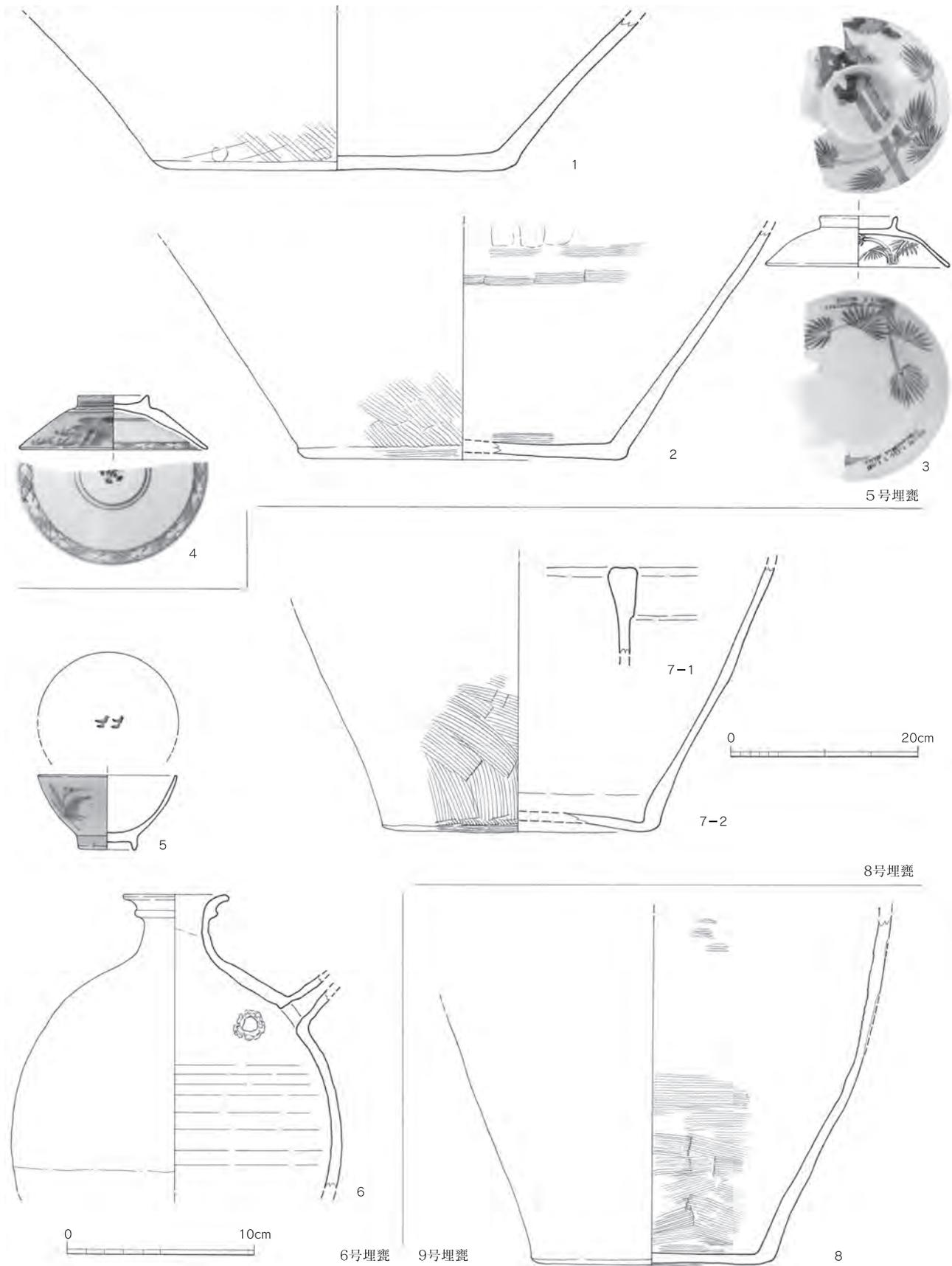
41図1は陶器の碗で、モチーフのある部分が欠損しているため無文の可能性はあるが、器形から



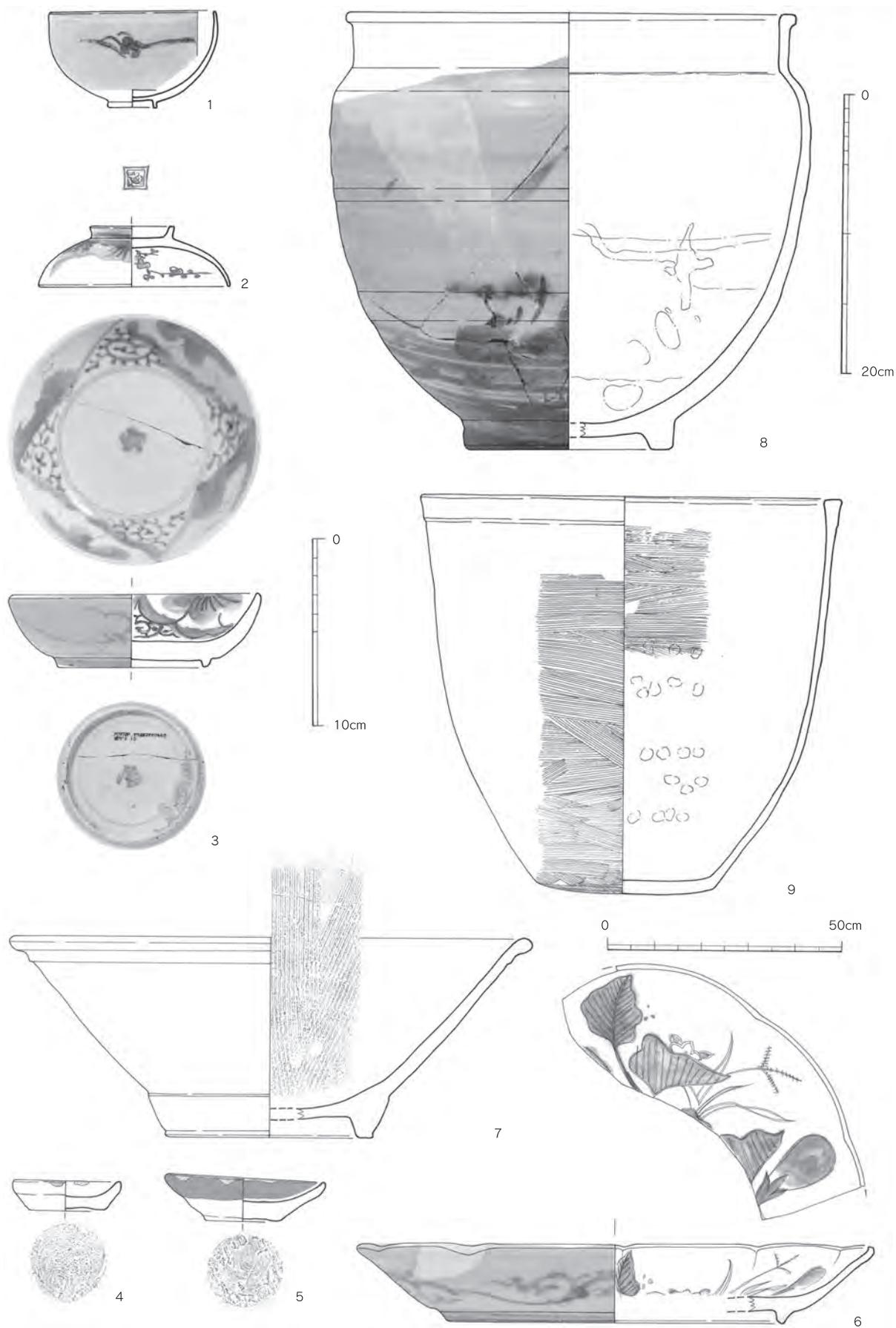
第38図 1・2・4号埋甕出土土器・陶磁器実測図(1は1/4、4・10は1/8、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
埋壘1 38図1	大甍	底径35.4	土師質土器 暗黒灰色	無釉	内面は摩滅しているがハケが残る 外面は器面剥落著しく観察できない	不明		在地	不明
埋壘1 38図2	碗 湯飲み	口径7.0 高台径3.4 器高5.0	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良	鳥居と松樹文染付け	なし	畳付に釉が残っている	肥前か	19世紀後半
埋壘1 38図3	杯	口径5.8 高台径2.4 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	中国船を吹絵で染付 口唇部に口鏽	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
埋壘2 38図4	大甍	口径(60.0)	土師質土器 黄灰-暗黄緑色チャウ 石、カクセン石 多く混入	—	内外ナデ、外底糸切り	不明		在地	不明
埋壘2 38図4	大甍	底径31.3	土師質土器 黄灰-暗黄緑色チャウ 石、カクセン石 多く混入	—	内外細かいハケ、外底粗いケズリケズリ後未調整で、摩滅もしていないので凹凸が残る	不明	内面がやや白っぽい色を呈する	在地	不明
埋壘2 38図5	碗	高台径(4.0)	陶器 赤紫褐色	外面は円形の白化粧土を掛け、内面は白化粧土を内外ハケ掛けした後透明釉全面掛け 外面体部下位にオサエ列		畳付釉剥ぎ		現川焼	1690 } 1740
埋壘2 38図6	碗	口径9.7 高台径3.9 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面菊花文と雪ノ輪文、裏銘に渦福染付け	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 } 1750
埋壘2 38図7	碗	口径10.7 高台径4.6 器高6.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花唐草文で花はコンニャク印判、裏銘に角福染付け	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 } 1740
埋壘2 38図8	小皿	口径(13.4) 底径(6.4) 器高2.6	土師質土器 暗黄灰色 金雲母入る	—	内外ナデ、外底糸切り	—	歪みあり	在地	不明
埋壘2 38図9	皿 花卉口縁	口径(24.6) 高台径(16.0) 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花唐草文、内面蜻唐草文の染付け	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 } 1740
埋壘4 38図10	大甍	底径29.3	土師質土器 黄灰-暗灰色 チャウ 石、カクセン石多く混入	—	内外細かいハケ、外面胴下位から外底は粗いハケ	不明	外底はハケ後未調整 全面暗黄緑灰色を呈する	在地	不明
埋壘5 39図1	大甍	底径36.0	土師質土器 黄灰-暗灰色 チャウ 石、カクセン石多く混入	—	外面粗いハケ、内面細かいハケ、外面胴下位から外底は粗いハケ	不明	外底はハケ後未調整 全面暗黄緑灰色を呈する	在地	不明
埋壘5 39図2	大甍	底径40.6	土師質土器 黄灰-暗灰色 チャウ 石、カクセン石多く混入	—	内外ハケ、外面胴下位から外底はハケで、指オサエがところどころ見られる	不明	外底はハケ後未調整 全面暗黄緑灰色を呈する	在地	不明
埋壘5 39図3	蓋	裾径9.8 つまみ径4.2 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内外面に芭蕉樹文の染付	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
埋壘5 39図4	蓋	裾径(9.6) つまみ径(4.1) 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に草本文、内面は口縁部に袈裟摺文帯、天井に五弁花文の染付	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
埋壘6 39図5	小碗	口径(7.6) 高台径3.2 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面紅葉と雪ノ輪文、見込みに変形した鳥文の染付け	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀前半
埋壘6 39図6	瓶 注口付	口径7.4 最大径23.8	陶器 にぶい黄灰白色	鉄釉を外面上半分と内面口縁部に掛ける	注口は肩部に穿孔した後、接合している	不明		小石原	不明
埋壘8 39図7-1	大甍 口縁部	—	土師質土器 暗黄橙褐-灰白色	無釉	内外ナデ カルキの付着なし	不明	反転復元できない小片	在地	不明
埋壘8 39図7-2	大甍 底部	底径33.4	土師質土器 暗黄橙褐-灰白色	無釉	内面はカルキが付着し、調整を観察できない 外面から底部は目幅の広いハケ、上位はナデ	不明		在地	不明
埋壘9 39図8	大甍	底径26.4	土師質土器 暗橙褐色	無釉	内面はカルキが付着し、剥離が著しいが、ハケが見られる 外面は器面剥落著しく観察できない	不明		在地	不明
埋壘10 40図1 図版5	碗 半球碗	口径8.8 高台径2.6 器高5.2	陶器 にぶい黄灰白色	外面体部に黄灰色の灰釉を掛けた後、外面に花文の鉄絵		底部露胎	ほぼ完形	肥前	18世紀後半
埋壘10 40図2	蓋	裾径(9.8) つまみ径4.5 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に樹文、天井部に角福、内面に梅樹文を染付	つまみ上端釉剥ぎ 砂目付		肥前	1700 } 1740
埋壘10 40図3 図版5	5寸皿 くらわんか手	口径13.1 高台径7.7 器高4.0	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面唐草文、裏銘渦福、内面崩れた若松文と蜻唐草文、見込みに5弁花文	底部露胎 砂目付着	ほぼ完形	波佐見	1680 } 1740
埋壘10 40図4	小皿	口径5.7 底径4.0 器高1.6	土師質土器 橙灰白色 混入物なし		外底糸切り	不明	ほぼ完形 口縁の一部に煤付着	在地	不明
埋壘10 40図5 図版5	小皿	底径4.2 器高2.5	土師質土器 紫褐色	発色の悪い鉄釉外面上半から内面に掛ける	外底糸切り	外底外縁に付着物あり	ほぼ完形 口縁に煤付着	在地	不明

表 28 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 27



第39图 5・6・8・9号埋甕出土土器・陶磁器実测图(1・2・7・8は1/6、他は1/3)



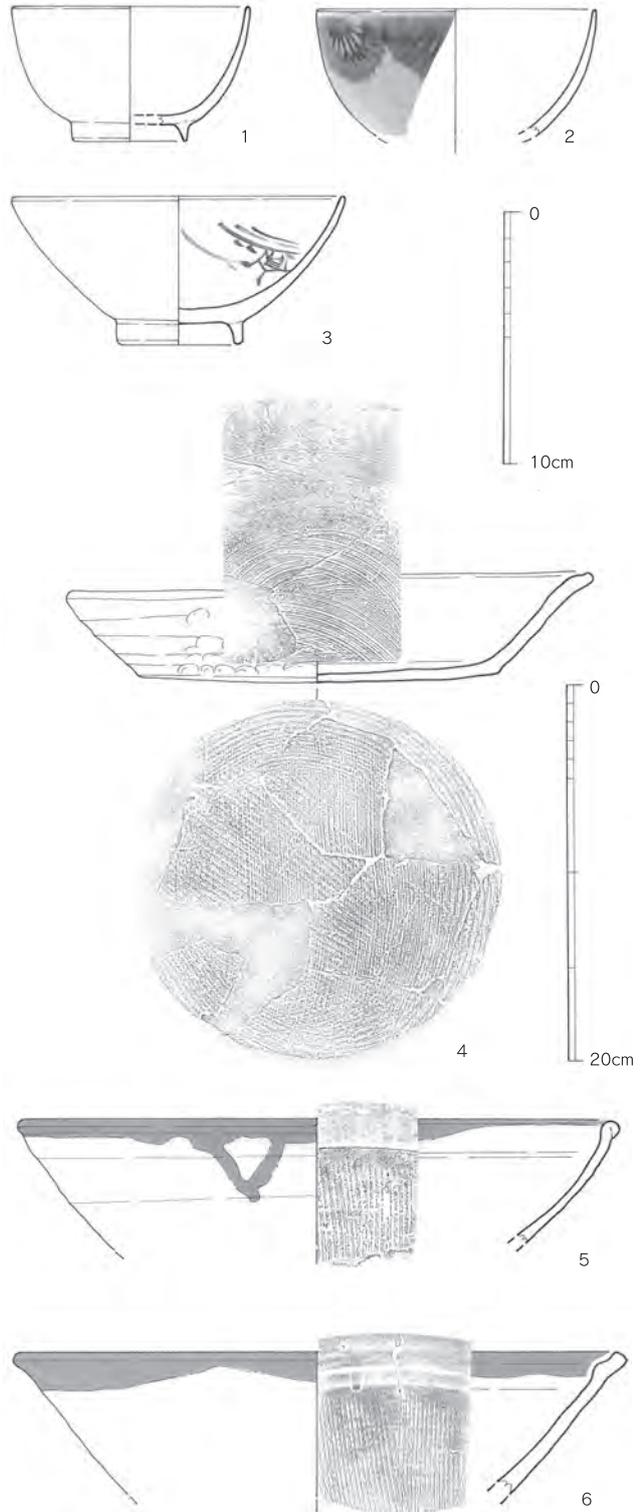
第40図 10号埋葬出土土器・陶磁器実測図(7・8は1/4、9は1/12、他は1/3)

みて、京焼風陶器ではないので、本来無文であっただろう。41図4は焙烙で、内外ともに灰色でやや硬質なので、土師質とは異なるものとして、瓦質土器とした。

42図3は染付碗で、裏銘に「朝」の染付が施されていることから、久留米市の陶磁器窯である朝妻焼とわかる。42図13は土師質土器の蓋で、大きさからミニチュア製品の可能性もあるが、陶磁器のどのような器形を模倣したものかわからないので、ここでは、実用品の蓋として掲載した。

43図4は陶器の半胴甕で、1号溝状遺構の出土破片と33・44号土坑と黄灰色包含層出土の破片が接合したものである。1号溝状遺構で胴部以下がまとまって出土しており、口縁部は33・44号土坑と黄灰色包含層からバラバラに出土している。1号溝状遺構が古いことから、それ以外の破片は1号溝状遺構を掘り込んだ際の破片が混入したものだろう。43図6は外面下半にアルミナが塗布されている。しかし、畳付に塗布していないことや、見込みに重ね焼きの痕跡がないことから見て、白化粧土の代わりに使用したものではなかろうか。

44図8は陶器の摺鉢の口縁部片で、注口と思われる歪みがあるが、残存部が小さいことから判別できない。注口にしては傾きが小さいものと思われ、口縁の歪みの可能性がある。肥前産の17世紀中葉から末のものだが、口縁形態からこの時期の中でも新しい段階のものといえよう。44図9は瓦質土器の火鉢の脚で、外面に花唐草文と「水田□」の刻印があり、刻印の位置と脚の大きさから、全部で3文字あったようだ。最後に来る文字は、欠損のため判別できなかったが、来年度報告する遺物のなかに「水田庄」の刻印のある瓦質土器の鉢があり、胎土や字体も類似していることから、この刻印も「水田庄」と推定できる。この刻印から、筑後市の水田焼の製品とわかるが、これまで



第41図 4号井戸出土土器・陶磁器実測図(4～6は1/4、
他は1/3)

知られている水田焼の製品にこの刻印があるものが見つかっていない。44図16は陶器の鉢で、見込みには砂目が付着しているが、畳付にはない。重ね焼き焼成する際に最下段だったものだろうか。

45図3は陶器の碗で、白化粧土塗布した後、刷毛状掻き取りし、その上に灰釉を薄くかけている。器形やモチーフは肥前のものと変わらないが、釉と胎土から小石原焼と推定した。45図4は陶器の碗で、口縁部に1箇所小さく瑠璃釉か呉須と思われる紫青色の釉がかかる。類例がないので偶発的なものではなかろうか。45図5は染付の5寸皿で、口縁部の3箇所の打ち掻き部と、内面に煤が付着していることから灯明皿として使用されたものである。45図10は陶器の小鉢で黄白色の胎土と透明釉が掛かること、高台内に円形の刻印が入ることから京焼風陶器と考えられる。外面に入る色絵のうち、橙色のものは褪色したもので、本来赤彩だったと想定した。45図21は陶器の壺で、胎土の特徴から小石原焼と推定した。口唇部に釉拭き取りがあることから、蓋がつくものと思われる。

46図1は陶器の土瓶の蓋で、下端が全て欠けているのは、焼成時に融着したためであろう。46図4は陶器の中型甕で、口縁形態は肥前のものと同じだが、黄橙灰色の胎土や内面に積み上げ痕が残る調整は肥前には見られないことから、小石原焼と想定した。46図5は土師質土器の大甕で、底部の穿孔は焼成後のものである。廃棄時に中身の液体を抜くために上から開けたものではなかろうか。

47図1・2は同じモチーフの染付の小皿で、重なって出土した。セットで購入し、廃棄したものであろう。47図11は土師質土器の焙烙で、使用により変色している。色調は、内面胴部はにぶい黄灰色、見込みは淡黒灰色、外面は煤が付着して黒灰色を呈する。47図19は土師質土器の焼塩壺で、反転復元できないほどの小片だが、スタンプがあることから掲載した。欠損が多く判読できる文字が少ない。「深草」と「兵衛」は読めるので、「深草砂川権兵衛」か。

48図2・3・6は表土剥ぎ中に検出された上層整地層出土の陶器の土瓶で、胞衣壺だろう。本来蓋とセットになっていたものと思われる。3の釉は、上半には光沢があり、下半には光沢がないのは使用によるものではなく、焼成の差であろう。48図5も表土剥ぎ中に検出された胞衣壺だろう。陶器の土瓶と蓋で、重なった状態で出土した。本来の身に対する蓋はこのタイプではないので、別の土瓶の蓋とセットにしたものである。48図8は軟質施釉陶器の急須の蓋と身だが、遺構面出面からセットで出土しているので、胞衣壺の可能性が高い。白化粧土を外面に掛けているが、下面は焼成不良である。変色の仕方が蓋と身とで異なるのは、身に重ねて焼成したためか。福岡県内産のものだろうか。

49図5は染付の変形小皿で、口縁の一部が片口状に歪んでいる。小皿に片口がつくことは通常ないが、意図的に曲げた可能性が高い。49図11は磁器の杯で、見込みに日の丸と旭日旗が金彩と赤彩で描かれ、その下に「歩兵四八」と描かれている。従軍記念杯で、「歩兵四八」とは久留米市に本営があった陸軍歩兵第48連隊である。49図14は染付の蓋で、2次調査出土の鉢(『矢加部町屋敷 I』31図10)と同じ、銃を交差させたモチーフがゴム印判で描かれている。径からみて同一個体のセットではないものの、同様の身とのセットになるものと思われる。

50図2は染付碗で、モチーフの特徴から須恵町の須恵焼の可能性がある。50図3は染付碗で、高台

の形状やモチーフが肥前に類例が見られず特徴的なので、肥前産か不明。

52図11は多色刷りのゴム印判染付磁器碗で、外面は3色で、旭日重光章・大勲位菊花章・金鶏章などの勲章文が染付されている。そのうちの1つは「従軍記章」だが、「紀」の字になっている。

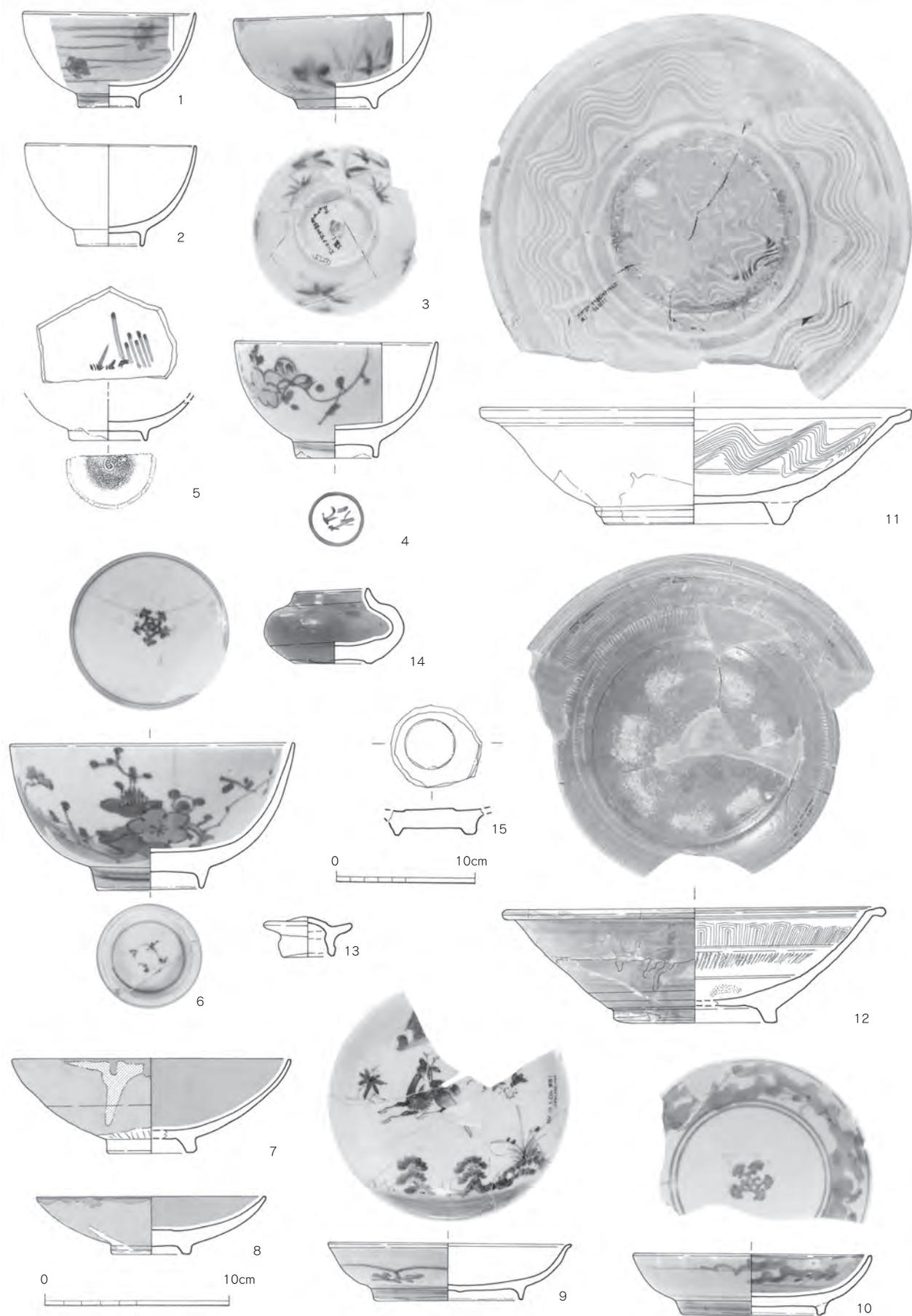
53・54図は瓦で、土師質の瓦や、瓦質ではあるものの器壁が薄く、焼成の弱いものは、筑後地域に独特な瓦である。53図1・54図1・2・3は土師質の平瓦で、表面にナデ調整前に瓢箪形のスタンプがランダムに入る。工具の痕跡かもしれない。

54図8は瓦質の平瓦で、棧瓦の一部ではない。器面摩滅の具合からみても古く、裏面に多条沈線による滑り止めもない。上面側縁に漆喰が付着しており、丸瓦と組み合わせていたがわかる。54図9は瓦質の平瓦で、表面のスタンプは、隅丸方形の枠内に横書きに「江崎」、その間に「○」に「元」の屋号と思われる記号が入る。横書きの下には縦書きで「筑後国山」「門郡川北」「村字柳川」と3行で印刷されている。54図10は瓦質の平瓦で、表面のスタンプは、隅丸方形の枠内に横書きで「江□□」と三文字あり、その下に「筑後国」「山門郡」「字□□」と3行に分かれて印刷がある。「江□□」は2文字目は「奇」まで判別できるので「江崎製」だろう。「字□□」は「字柳川」ではなかろうか。54図11と12は接合しないが同様のものである。

55図5は土人形の馬で、欠損部が多いが55図6とほぼ同じづくりなので、6と同じで背中に貼り付けしているのは鞍ではなく人物だろう。55図7も土人形の馬で、騎人は頭が平坦に表現されている。正面図では馬の頸に隠れてしまい、側面からも見えていないが、人物には鼻の表現もある。55図8は土人形の天神像で、胎土の特徴から蒲池焼ではなかろうか。55図10と11は大

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
埋裏10 40図6	皿	口径(37.4) 底径(18.0) 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面唐草文、内面崩れた茄子と茄子の花葉文 外形・葉脈は金彩	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
埋裏10 40図7	摺鉢	—	陶器 橙灰色	鉄釉全面	内面摺り目の21本単位	見込み重ね焼き痕 畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後半 } 19世紀中葉
埋裏10 40図8	鉢 半胴甕	口径(22.0) 底径(14.8) 器高31.3	陶器 暗赤紫色	外面体部から内面口縁部まで白化粧土を掛け、外面胴下位は釉掻き取り、内面口縁部はハケ状釉拭き取り 内外上半に暗緑白褐色の灰釉を掛けた後、外面上半は白化粧土の上に鉄絵で樹、緑色の灰釉で葉を描く 外面胴下位と内底は鉄釉を掛ける	見込みに胎土目痕 畳付に胎土目付着	4割残存だが、口縁部から底部まで残る	肥前	18世紀後半 } 19世紀中葉	
埋裏10 40図9 図版5	大甕	口径90.2 底径38.4 器高85.6	土師質土器 黄灰白色 灰色 粒子を多く含む	無釉	内外丁寧なハケで、タタキ痕を消している 底面は凸レンズ状でハケが入る	不明	口縁部の器面は摩滅著しい ほぼ完形	在地	不明
井戸4 41図1	碗	口径(9.4) 高台径(4.6) 器高5.3	陶器 黄灰白色	黄灰色の灰釉全面	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 } 1780
井戸4 41図2	碗	口径(11.0)	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面半菊花文のコンニャク印判染付	—		肥前	1650 } 1680
井戸4 41図3	碗	口径13.2 高台径8.9 器高5.8	陶器 黄灰白色	透明釉を高台以外に掛ける	見込みに鉄絵の山水文	畳付釉剥ぎ		不明	不明
井戸4 41図4 図版5	焙烙	口径13.2 高台径8.9 器高5.8	瓦質土器 にぶい黄灰白色	—	外面胴部オサエ、外底と内面は丁寧なハケ	不明	9割残存 口縁部に注口あり	在地	不明
井戸4 41図5	摺鉢	口径(31.8)	陶器 黒灰色	鉄釉を口縁部に掛ける	摺り目12本単位で沈線のような細さ	—	口縁部から胴部は全周残る	肥前	1650 } 1690
井戸4 41図6	摺鉢	口径(32.4)	陶器 黒紫灰色	鉄釉を口縁部に掛ける	摺り目17本単位で沈線のような細さ	—		肥前	1650 } 1690

表29 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表28



第42図 1号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(12は1/4、他は1/3)

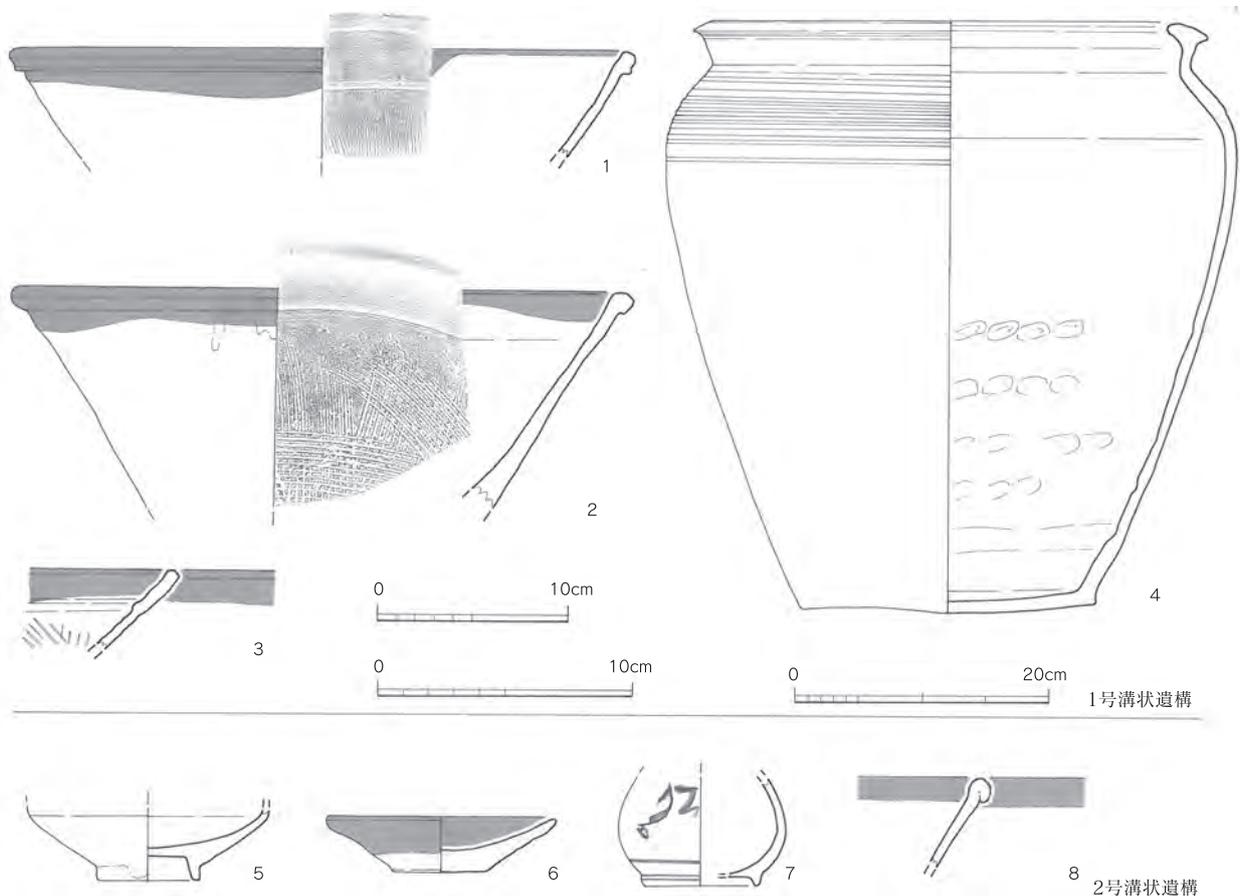
遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							挿図番号	形状	()は復元値
図版番号	通称名								
溝1裏込め 42図1	碗	口径9.3 高台径3.2 器高5.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面松葉文とコンニャク印判による5弁花文の染付	豊付釉剥ぎ 砂目付着		肥前	1650) 1670
溝1 42図2	碗	口径9.3 高台径3.6 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	豊付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1690) 1720
溝1 42図3	碗	口径10.7 高台径4.4 器高5.3	磁器 灰白色	青みのある透明釉を全面に掛ける	外面は草花と蝶文、裏銘は「朝」の染付	豊付釉剥ぎ	染付モチーフに滲みあり	朝妻焼	1690) 1720
溝1 42図4	碗	口径10.9 高台径4.3 器高6.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は梅樹と鳥文、裏銘は「大明年製」の染付	豊付釉剥ぎ		肥前	1690) 1720
溝1裏込め 42図5	碗	高台径(4.2)	陶器 黄灰白色	透明釉を高台以外に掛け、見込みに鉄絵の山水文 裏銘に「清水」の印刻		高台露胎	京焼風陶器	肥前	1650) 1690
溝1 42図6	鉢	口径15.2 高台径5.8 器高8.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は梅樹文、内面は見込みに界線と5弁花文、裏銘は「大明年製」の染付	豊付釉剥ぎ		肥前	17世紀後半) 18世紀前半
溝1裏込め 42図7	皿	口径20.2 高台径6.6 器高6.9	陶器 黄灰白色	外面体部に緑灰白色の灰釉を掛けた後、黄灰色の灰釉を掛けた、銅緑釉を内面に掛けている		底部露胎 豊付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1650) 1690
溝1 42図8 図版5	小皿 5寸皿	口径12.4 底径4.4 器高3.2	陶器 黄灰白色 混入物なし	緑灰色の灰釉全面掛けた後、内面のみ青緑色の銅緑釉上掛け		見込み蛇ノ目 釉剥ぎ 豊付 釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1690) 1780
溝1裏込め 42図9	小皿 5寸皿	口径13.2 高台径8.1 器高3.0	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、見込みに松樹、鹿、楓、草花文の染付	豊付釉剥ぎ 外底にハリ目 跡1つあり	歪みあり	肥前	1680) 1700
溝1裏込め 42図10	小皿 5寸皿	口径12.8 高台径7.8 器高3.3	磁器 灰色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面直線化した唐草文、内面簡略化した草花文、見込みにコンニャク印判の5弁花文染付	豊付釉剥ぎ 砂目付着		肥前	1680) 1700
溝1 42図11	鉢	口径23.2 高台径9.5 器高6.4	陶器 橙褐色	内面に鉄釉をハケ掛けした上に白化粧土を掛けて、ハケ状掻き取りで波状文を施し、最後に緑灰色の灰釉掛け		底部露胎	7割残存	肥前	17世紀後半) 18世紀前半
溝1裏込め+土20+ 土72+土79+土90 42図12	皿 三鳥手	口径(27.7) 高台径12.0 器高8.3	陶器 紫灰色	外面体部下位は鉄釉ハケ掛け、外面上半から内面は緑黄灰色の灰釉 内面は白化粧土を象徴した後に灰釉掛け		豊付釉剥ぎ	内面は発色不良	肥前	1690) 1750
溝1 42図13	蓋	裾径4.8 下部径2.8 器高2.2	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	手捏ねで指紋が多く残る 上面の裾の部分は、指を横に小刻みに押さえながら整形している	—	完形	蒲池焼	不明
溝1 42図14	小壺 二彩唐津	口径4.2 底径4.4 器高4.2	陶器 橙灰色	褐色の灰釉を底部を除いて全面掛けた後、鉄絵で葉唐草文 灰釉は発色不良 底部は削り出し		底部露胎	ほぼ完形	肥前	17世紀後半) 18世紀前半
溝1 42図15	瓦玉	底径4.4 長軸5.2 器高1.5	陶器 灰色	見込みに灰白緑色の灰釉が、蛇ノ目釉剥ぎにより円形に残っている皿の高台部を円形に打ち欠いたもの		皿としては底部露胎	瓦玉として完形	肥前	17世紀後半) 18世紀前半
溝1 43図1	摺鉢	口径(33.0)	陶器 灰黒色	内外口縁部のみ鉄釉	内面摺り目の単位不明	不明		肥前	1650) 1690
溝1 43図2	摺鉢	口径(28.0)	陶器 灰黒色	内外口縁部のみ鉄釉	内面摺り目の11本単位で、上端は丸く折り返している	不明		肥前	1690) 1750
溝1裏込め 43図3	摺鉢	—	陶器 灰黒色	内外口縁部のみ鉄釉	内面摺り目の単位不明	不明		肥前	1650) 1690
溝1+土44+ 土33+黄灰 色包含層 43図4	甕 半胴甕	口径20.2 最大径25.2 底径23.2	陶器 橙褐色	外底以外は鉄釉	外面肩部はカキメ、胴部はナデ内面に格子目タタキ当て具痕、見込みはハケ	—		肥前	17世紀後半
溝2 43図5	碗 腰折形	高台径4.0	陶器 暗黄灰白色	内外黄灰色の灰釉を高台以外に掛ける		高台露胎		肥前	不明
溝2 43図6	小皿	口径(9.0) 底径3.6 器高2.2	陶器 橙灰色	鉄釉内面から外面口縁部のみに掛かる	外底糸切り	外面下半にはアルミナ塗布		肥前	不明
溝2 43図7	小瓶	高台径(4.4) 最大径(6.7)	磁器 灰白色	透明釉を外面に掛ける 貫入あり	外面は唐草文と円文の染付か	豊付釉剥ぎ		肥前	1700) 1750
溝2 43図8	摺鉢		陶器 灰黒色	内外口縁部のみ鉄釉	内面摺り目の単位不明	不明		肥前	1650) 1690

表30 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表29

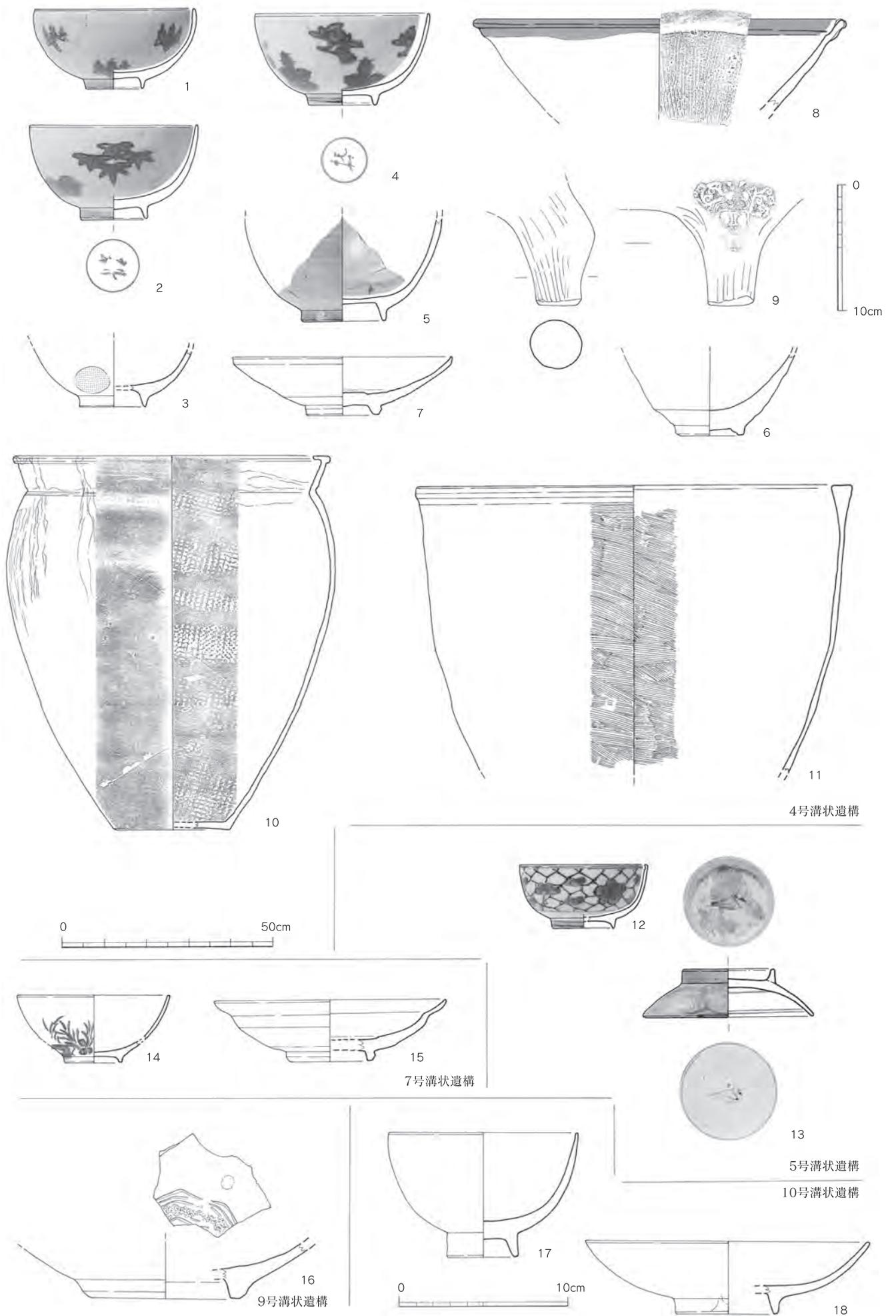
黒天像だが、11は下面に指による窪みがあり、他の像にも見られない製作技法であることと、胎土が異なることから、10が在地生産品で、11は搬入品であろう。55図13は土人形の着せ替え人形らしく、衣類の表現がない。13から15は同じタイプである。55図16と17はおぼこ人形で、両者をつくりが同じで、胎土も同じく金ウンモが入っていない。55図19は土人形の頭部で、当初鉄兜を被った兵隊の頭部と考えたが、鉄兜にしては横に沈線が入ることや、星のマークがないことから帽子と考えた。顔が短いことからみても子供と見られる。55図21は土人形の鼠で、描写が写実的で実物大ほどの大きさであることから、干支の縁起物ではなかろうか。

56図5の土鈴と56図7の鳩笛は、胎土の特徴から蒲池焼だろう。

57図5～16はるつぼで、内面に緑青が付着しているものがあるので、銅の鑄造に用いたことがわかる。57図17～19は外面は火を受けた変色がなく、内面だけが強く火を受ける土製品であることから、鑄型と推定した。内面に緑青は付着していないので、鑄造鉄製品のための鑄型であろう。19の上端が平坦であることや、内面の付着物が外面の上端より上に延びていることから、鑄型は製品を取り出しやすいように、輪状の部材からなっており、19の上に別の部材があったものと思われる。57図20・21は手捏ねの不明土製品で、断面略三角形を呈し、平坦面はあるものの調整されていない。窯道具の焼け方より弱く、道具ではなく粘土塊の可能性もある。57図24・25は他のフイゴの羽口と比べて、混入物の砂が非常に多い。57図29は棒状の土製品で、内面に孔らしい空間があるが、穿孔ではなく成型時に粘土を丸めた結果の空間だろう。したがって、これそのものが道具になるのではなく、真土として鑄型の中で使用されたのではないだろうか。ただ、



第43図 1・2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1～3・8は1/4、4は1/6、他は1/3)



第44図 4・5・7・9・10号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(8・16は1/4、10・12は1/12、他は1/3)

どの面も強い熱を受けた痕跡がない。57図30は土製の砥石と考えた。これは、大きさと形状の特徴が手持ち砥石と同じであり、側面を整形し、表裏面の使用面は平坦に研磨されていることからである。土師質土器の甕にしては、混入物がほとんどなく、表面が平滑なので、泥岩状の様相を呈している。

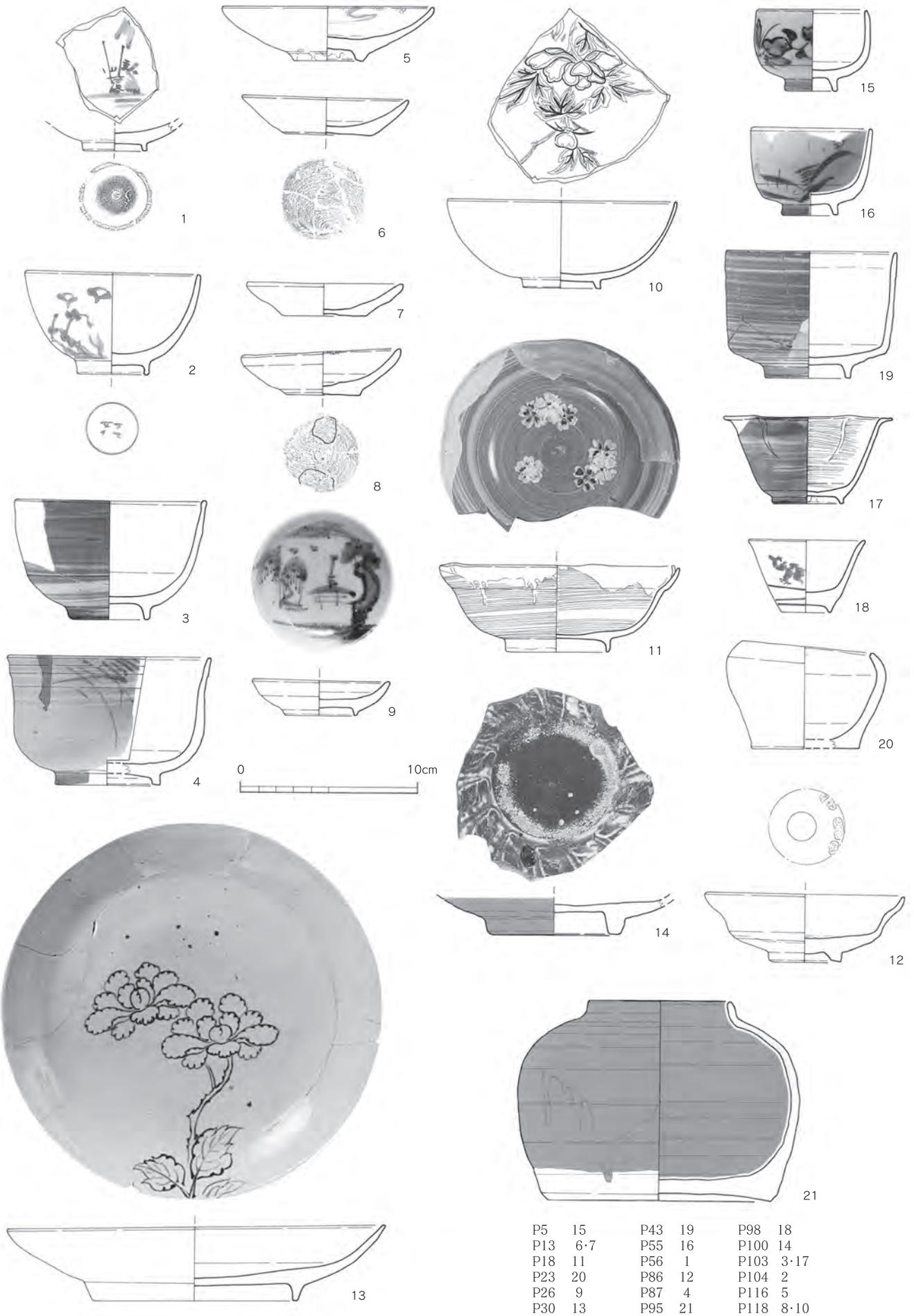
58図9と10は、不明土製品で、接合しないが同一個体だろう。58図13はピット1から出土した不明土製品の1つであるが、ここからはパンコン半箱分の不明土製品が出土している。欠損品が多

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							挿図番号	形状	()は復元値
図版番号	通称名								
溝4 上層 44図1 図版5	碗	口径9.4 高台径3.4 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に桐文のコンニャク印判染付	畳付釉剥ぎ	9割残存	肥前	1680 } 1700
溝4 上層 44図2	碗	口径10.1 高台径4.1 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に2連菊花文と竹笹文のコンニャク印判染付 裏銘に「大明年製」	畳付釉剥ぎ	7割残存	肥前	1680 } 1700
溝4 44図3	碗 蛸手	高台径(3.8)	陶器 紫灰色 陶器	内外透明釉全面掛けた後、白化粧土を外面は円形、内面は打ちハケ目に掛ける		畳付釉剥ぎ		現川焼	不明
溝4 上層 44図4	碗	口径10.4 高台径4.1 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に2種類の葉文のコンニャク印判染付 裏銘に「大明年製」	畳付釉剥ぎ	7割残存	肥前	1680 } 1700
溝4 上層 44図5	碗	口径(5.0)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1680 } 1710
溝4 44図6	碗	高台径4.0	陶器 黄灰白色 軟質	内外黄灰褐色の灰釉を外側胴中位まで、内面全面に掛ける		底部露胎		小石原か	不明
溝4 44図7	小皿 5寸皿	口径13.0 底径4.4 器高3.4	陶器 黄灰白色	外面体部に緑灰色の灰釉を掛けた後、銅緑釉を内面に掛け		見込み蛇ノ目釉剥ぎで重ね焼き痕あり 底部露胎	8割残存	肥前	1690 } 1780
溝4 44図8	摺鉢	口径(34.0)	陶器 暗紫色	内外口縁部のみ鉄釉	内面摺り目の14本単位	不明		肥前	1650 } 1690
溝4 44図9 599	火鉢脚	脚底径2.7 脚高さ6.0	瓦質土器 灰白～橙灰色	—	外面細かいミガキ 外面に花唐草文と「水田□」の刻印	不明	口縁は7割残存 外面は煤付着	水田焼	不明
溝4 + 溝4 上層+P80 44図10	大甕	口径(96.0) 底部径(28.0) 器高98.8	陶器 暗紫灰色	外面鉄釉 内面鉄釉ハケ掛け	内面は格子目タタキ当て具痕あり 外面はナデ消し	外底に胎土目跡あり	頸部と体部は図上接合	肥前	17世紀後半
溝4 44図11	大甕	口径(104.0)	土師質土器 暗黄橙灰～灰白色	無釉	内外丁寧なハケ調整で、タタキ痕を消している	不明		在地	不明
溝5 44図12	小鉢 蓋物	口径(7.4) 高台径(3.6) 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に間隔の広い水烈文に菊花文染付	内面口縁部釉剥ぎ	蓋がつく	肥前	不明
溝5 44図13 図版5	蓋	裾径9.8 つまみ径5.2 器高2.8	磁器 灰白色 軟質	発色不良で白濁した透明釉を全面にかける	外面に葉文、内面境界線、外面天井部に草と鳥、内面天井部に波濤文染付	つまみ部上端釉剥ぎ		肥前	1780 } 1810
溝7 44図14	碗	口径(9.0) 高台径3.4 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に葉文染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 } 1750
溝7 44図15	小皿 5寸皿	口径(13.8) 底径(4.8) 器高3.7	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を全面にかける	外面体部下位に鈎痕	底部露胎	8割残存	肥前	1690 } 1780
溝9 44図16	鉢	底径(11.8)	陶器 暗紫灰色	内面に白化粧土をハケ掛けし、見込みには御描き状に掻き取りした後、黄緑灰色の灰釉掛け		見込みに砂目付着		肥前	1690 } 1750
溝10 44図17	碗 兵器手	口径(11.2) 高台径4.2 器高7.4	陶器 黄灰白色	全面黒色の黒釉掛け	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 } 1780
溝10 44図18	小皿 5寸皿	口径(16.8) 底径(5.8) 器高4.4	陶器 黄灰白色 軟質	外面体部まで、内面全面天目釉掛け		高台露胎		小石原	1690 } 1780

表31 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表30

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
ピット56 45図1	碗	高台径3.7	陶器 黄灰白色 軟質粗放	灰釉が発色不良で 灰白色	見込みに鉄絵の山水文 裏銘に円と「清水」の刻印	不明		肥前	18世紀前半
ピット104 45図2	碗	口径10.0 高台径4.0 器高5.7	磁器 完形のため不明	透明釉 全面 発色不良で白濁し、 染付が見えない	外面草花文染付 裏銘「大明年製」か	豊付釉剥ぎ	完形	肥前	1700) 1740
ピット103 45図3	碗	口径(10.8) 高台径4.7 器高6.8	陶器 暗黄灰色 軟質	緑灰色の灰釉 全面	白化粧土の刷毛状掻き取りの上に灰釉を薄くかけている	豊付釉剥ぎ		小石原か	不明
ピット87 45図4	碗	口径(11.6) 高台径5.0 器高5.7	陶器 黄灰色 軟質	黄白色の灰釉 高台露胎	外面に鉄絵の樹文	高台露胎		肥前	不明
ピット116 45図5 図版5	小皿 5寸皿	口径12.0 底径3.9 器高3.0	磁器 完形のため不明	透明釉 高台露胎 発色不良で白濁し、 染付が見えない	内面に退化した折松葉文の染付	見込みに蛇の 目釉剥ぎ 豊付 釉剥ぎ	完形 内面と口 縁の3箇所 の打ち掻き部に煤付着	波佐見	18世紀後半
ピット13 45図6 図版5	小皿	口径9.3 底径4.6 器高1.9	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕2つ	9割残存 変色なし	在地	不明
ピット13 45図7	小皿	口径8.8 底径4.7 器高1.9	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外底糸切り	不明	6割残存 変色なし	在地	不明
ピット118 45図8 図版5	小皿	口径9.1 底径4.4 器高2.6	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕2つ	完形 内面と 口縁の一部に 煤付着	在地	不明
ピット26 45図9 図版5	小皿	口径7.8 高台径4.2 器高2.0	磁器 完形のため不明 黒色粒子が多い	透明釉 全面 発色は暗い	内面山水文染付	豊付釉剥ぎ	完形	波佐見か	19世紀
ピット118 45図10	小鉢	口径13.0 高台径4.5 器高5.0	陶器 黄灰色 軟質	透明釉 貫入あり	高台内に円刻 内面は灰釉の上に赤絵で、青彩で葉と外郭 線、金彩で葉脈や花の外郭線、褪せしてい るが赤彩で花弁を描く	不明	完形 口縁部 は図上接合 京焼風陶器	肥前	不明
ピット18 45図11	小型鉢 花卉口縁	口径13.8 高台径5.8 器高4.9	陶器 にぶい茶灰色	内外白化粧土の刷毛目文の後、口縁部の一部に白化粧土流し掛けし、見込みに桜花をイッチン掛けし、花卉内に鉄釉と貝須で色付けし、最後に全面黄灰褐色の灰釉掛け		豊付釉剥ぎ 見 込みにアルミナ の目跡3つあり	丁寧なつくり	肥前	不明
ピット86 45図12 図版5	小皿 5寸皿	口径11.4 底径4.2 器高3.9	陶器 完形のため不明	緑灰色の灰釉 外面体部下位以下露胎		見込み蛇ノ目 釉剥ぎに目跡、 豊付に目跡	完形 釉は光沢あり	肥前	1690) 1780
ピット30 45図13 図版5	中皿	口径21.2 高台径11.5 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉 内面のみ 発色不良で白濁し、 染付が見えない	内面牡丹花文染付	裏面露胎	ほぼ完形 線描きのみ	肥前か	不明
ピット100 45図14	鉢	高台径9.6	陶器 茶橙褐色	内面白化粧土の打ち刷毛目のちオリーブ色の灰釉かけ 外面と高台内は鉄釉の刷毛状掻き取り		豊付釉剥ぎ 見込みに砂目 付		肥前	不明
ピット5 45図15 図版5	小碗 筒丸形 湯飲み	口径6.4 高台径3.0 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉 全面 一部に釉切れ	外面花文を染付	豊付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀中葉) 後葉
ピット55 45図16	小碗 筒丸形 湯飲み	口径6.9 高台径3.4 器高5.1	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面竹笹・雀・花文、内面環珞文の型紙刷をコバルトで染付	豊付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀中葉) 後葉
ピット103 45図17	小型碗 花卉状口縁	口径(9.4) 高台径4.2 器高5.1	陶器 淡茶褐色	緑灰色の灰釉 全面	白化粧土の刷毛目文の上に灰釉を薄くかけているため、外面は釉薬の濃淡によって刷毛目文の発色の悪い部分がある	豊付釉剥ぎ		肥前	不明
ピット98 45図18	小杯	口径7.8 高台径3.2 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉 全面 発色不良で白濁し、 染付が一部見えない	外面染付モチーフ不明 体部下位に3条の界線	豊付釉剥ぎ 砂目付	ほぼ完形	肥前	17世紀後半) 18世紀代
ピット43 45図19	小型鉢 蓋物	口径9.4 高台径5.1 器高7.2	陶器 にぶい黄灰色 軟質粗放	灰褐色の灰釉の上に鉄釉と緑色の灰釉	外面白化粧土を刷毛状掻き取り後、灰釉掛け	豊付釉剥ぎ 口唇部から内面 口縁部は釉剥ぎ		小石原か	不明
ピット23 45図20 図版5	焼塩壺	口径7.2 最大径9.4 器高5.7	土師質土器 灰白色 混入物なし	—	外底静止ヘラ切り		変色なし	在地	不明
ピット95 45図21 図版5	壺	口径8.2 底径12.6 器高11.4	陶器 淡橙灰色 軟質精良	茶褐色の鉛釉を外 面体部と内面		外底露胎 外底中 央に焼き台痕 口 唇部釉拭き取り	ほぼ完形 外 面は光沢ある が、灰かぶり	小石原か	不明
ピット26 46図1	土瓶蓋	裾径6.7 最大径9.2 器高3.0	陶器 紫灰色 白色粒子の混入あり	緑褐色の灰釉 天井部のみ			完形	肥前	不明
ピット9 46図2-1	蓋	裾径9.4 つまみ径1.8 器高4.4	陶器 橙褐色	鉄釉を上面に掛ける		裏面は露胎 天井部に重ね 焼き痕	身とセットに なる	肥前	不明
ピット9 46図2-2	土瓶	口径9.3 底径4.6 器高1.9	陶器 橙褐色	鉄釉を外面と内面 肩部に掛ける	把手は型押し成型	口唇部釉剥ぎ	蓋とセットに なる	肥前	不明

表 32 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表31

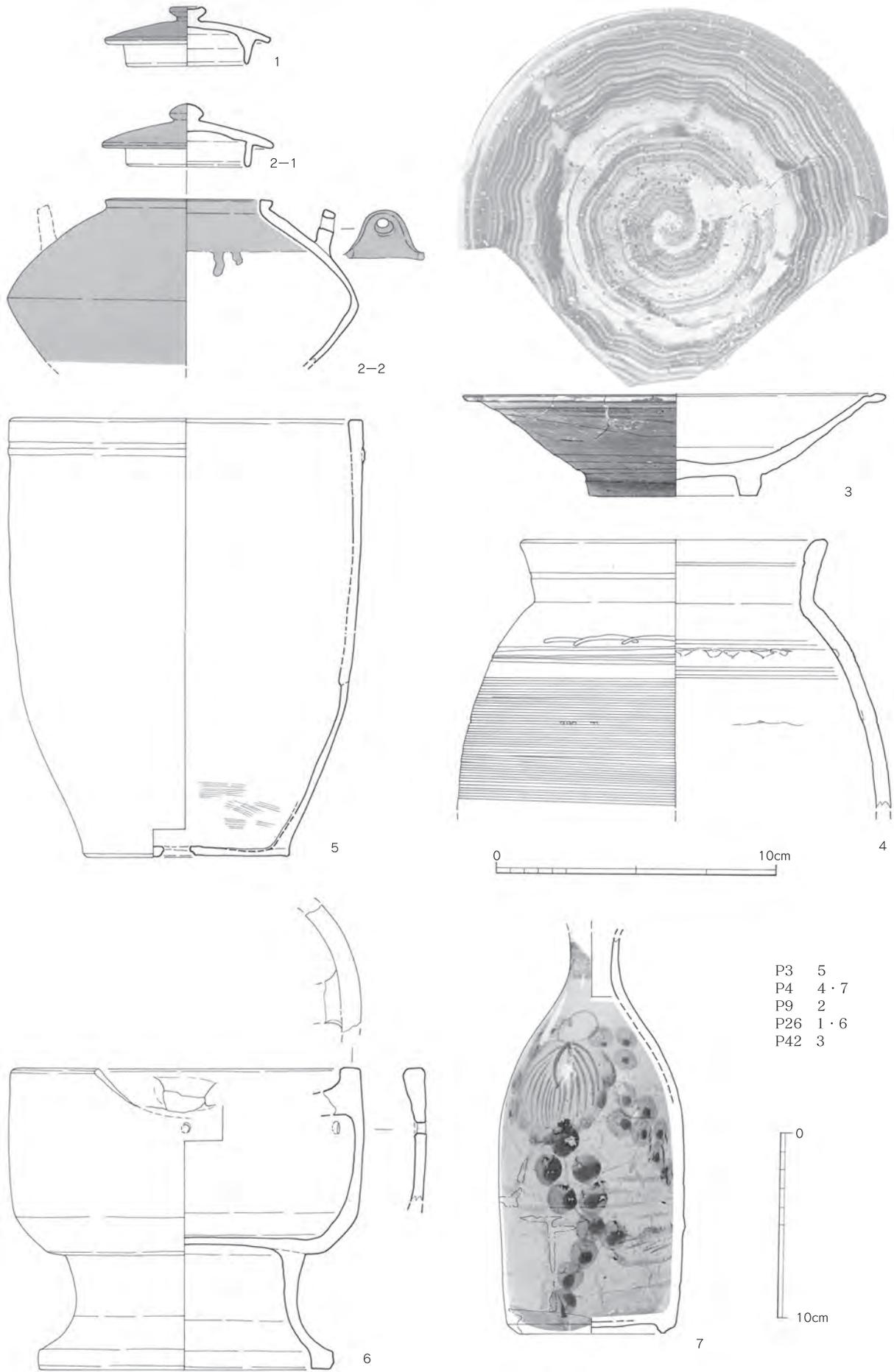


P5	15	P43	19	P98	18
P13	6·7	P55	16	P100	14
P18	11	P56	1	P103	3·17
P23	20	P86	12	P104	2
P26	9	P87	4	P116	5
P30	13	P95	21	P118	8·10

第45図 ピット出土土器・陶磁器実測図1(1/3)

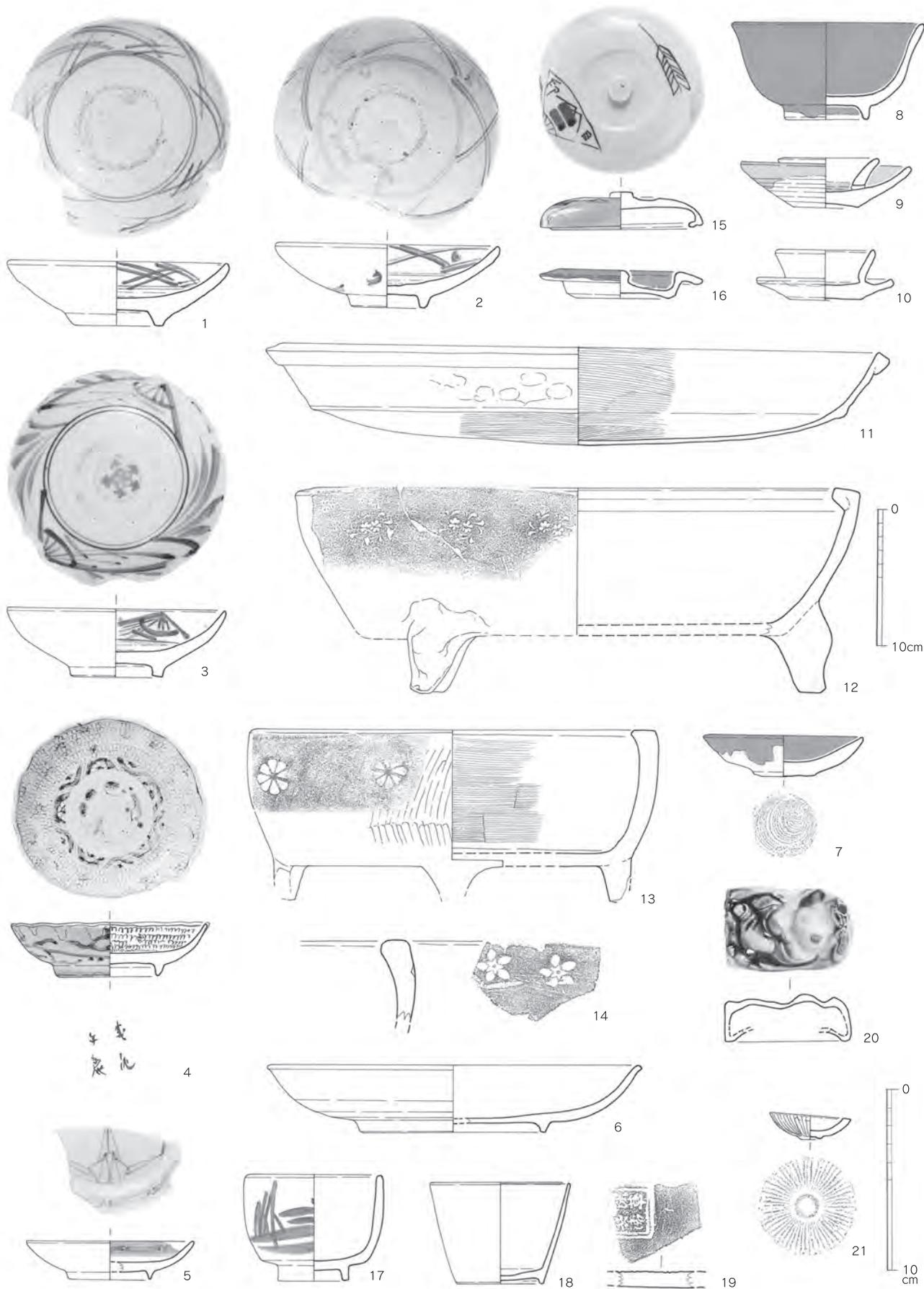
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
ピット42 46図3	中皿 蒲鉾状口縁	口径(22.2) 高台径8.8 器高5.6	陶器 紫灰色 硬質精良		内面白化粧土の刷毛状掻き取り後、口縁部から中位まで灰釉を薄くかけ、最後に鉄釉と緑色灰釉を流し掛け	口縁以外露胎 豊付に胎土目跡		肥前	17世紀後半 18世紀前半
ピット4 46図4	中型甕	口径(22.0) 最大径(31.0)	陶器 橙褐色～灰色	鉄釉全面	外面胴部カキ目 肩部の連弧文は凹線で弧文を重ねながら描く	不明	内面は積み上げ痕が残る	小石原か	
ピット3 46図5	大甕	口径(38.3) 底径22.5 器高47.9	土質質土器 黄橙灰色	—	内面はカルキが付着し、剥離が著しいが、一部でハケが見られる 外面は器面は暗く著しく観察できない	不明	底部穿孔あり 口縁部の摩滅が著しい	在地	不明
ピット26 46図6	火鉢	口径(25.0) 高台径(21.2) 器高21.7	土質質土器 混入物少ない 軟質 にぶい黄灰緑色	—	突起の下に穿孔が3つ三角形をなすように位置していたようだ 内外ナデ	不明	口縁部のみ暗黒色、内面は灰色に変色	在地	不明
ピット4 46図7	瓶	底径7.8 最大径9.1 器高(21.7)	磁器 灰白色 混入物なし	頸部に灰黄緑色の灰釉を掛け、花文を染付の上に体部外面に透明釉 発色は暗く白磁釉のよう		外底露胎で、中央に砂目付	袖切れ顕著	肥前	19世紀
遺構検出面 47図1	小皿 5寸皿	口径12.3 高台径4.2 器高3.6	磁器 灰白色 黒色粒子含む	透明釉を全面に掛ける	内面に二重格子文染付け	豊付釉剥ぎ 見込みの蛇ノ目 釉剥ぎの上にアルミナ塗布、その上に重ね焼き痕あり	9割残存	肥前	19世紀前半
遺構検出面 47図2	小皿 5寸皿	口径12.2 高台径4.8 器高3.6	磁器 灰白色 黒色粒子含む	透明釉を全面に掛ける	内面に二重格子文染付け	豊付釉剥ぎ 見込みの蛇ノ目 釉剥ぎの上にアルミナ塗布、その上に重ね焼き痕あり	9割残存 外面の具須は偶然についたもの	肥前	19世紀前半
遺構検出面 47図3	小皿 5寸皿	口径12.0 高台径5.2 器高3.7	磁器 灰白色	青みのある透明釉を全面に掛ける	内面に扇・葉文、見込みに5弁花文	豊付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目 釉剥ぎ 豊付砂目付	ほぼ完形	波佐見	1680 1740
遺構検出面 47図4	小皿 菊花形	口径10.8 高台径5.3 器高2.9	磁器 灰白色	発色の悪い透明釉全面	外面に、唐草文、内面に微塵唐草文、見込みに環状松竹梅文と半菊文帯、裏銘は「成化年製」染付け 型打ち成型	豊付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀前半
遺構検出面 47図5	蓋	裾径(9.2) つまみ径(4.6) 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は菱形が2つ重なったもの、天井部に裏銘の一部が見える。内面は雷文、見込みに折り紙の鶴文を染め付けている	つまみ上端露胎		肥前	不明
遺構検出面 47図6	皿	口径20.3 高台径10.2 器高3.7	陶器 にぶい緑灰白色 半磁器	透明釉 全面貫入あり	無文	豊付釉剥ぎ 豊付砂目付		肥前	不明
遺構検出面 47図7 図版5	小皿	口径8.6 底径3.4 器高2.4	陶器 にぶい橙褐色	鉄釉を内面から外面口縁部まで	外底は糸切り	底部露胎	9割残存	肥前	19世紀後半
遺構検出面 47図8 図版5	碗	口径10.6 高台径4.8 器高5.3	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	無文	高台露胎	完形 光沢あり	肥前	19世紀後半
遺構検出面 47図9 図版5	灯明受皿	受け部口径5.5 底径3.6 器高2.7	陶器 にぶい黄灰色	緑灰褐色の灰釉を上面の皿部にのみ掛け、受け部は内外露胎	外底糸切り	底部露胎		小石原	不明
遺構検出面 47図10 図版5	灯明受皿	受け部口径5.4 底径4.2 器高2.7	陶器 にぶい橙茶灰色	光沢のない鉄釉を上面に掛け	外底糸切り 粘土粒跡1つあり	底部露胎		肥前	不明
遺構検出面 47図11	焙烙	口径(45.3) 器高7.3	土質質土器 にぶい黄灰色 金雲母入る	—	外面口縁部はオサエ後ナデ、内面は丁寧なハケ	不明		在地	不明
遺構検出面 47図12	火鉢	口径(41.0) 底部径(15.4) 器高15.0	瓦質土器 灰白～灰色	—	口縁部折り曲げ肥厚 外面ナデ 内面カキ目状のナデ 外面に花文のスタンプが入るもので、2つの花で1つのモチーフだが、2種類ある	不明	ミガキ 光沢なし	在地	不明
遺構検出面 47図13	火鉢	口径(30.0) 底部径(26.0) 器高12.5	瓦質土器 黒灰色	—	内外黒灰色 外面タテ方向のミガキ ハケ 外面に花文のスタンプが入る	不明	光沢なし	在地	不明
遺構検出面 47図14	火鉢	—	瓦質土器 にぶい暗橙黒灰色 金雲母入る	—	内面口縁部黒化 外面に花文のスタンプが入る	不明	ミガキ 光沢なし	在地	不明
遺構検出面 47図15	蓋	裾径8.8 つまみ径1.4 器高2.0	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	コバルトの染付で、外面に矢と、屋号と目印を描いた扇文	胎土目が外面の側縁に2つ対面に付着 片方は歪む		肥前	1780 1860
遺構検出面 47図16 図版5	蓋 土瓶蓋	裾径8.8 つまみ径0.9 器高1.5	陶器 完形のため不明	黒釉を上面のみ	底面ヘラケズリ	裏面釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀後半
遺構検出面 47図17 図版6	碗 筒丸形 湯飲み	口径3.8 高台径5.8 器高5.8	磁器 完形のため不明	発色悪い透明釉全面	外面に山水文の染付け	豊付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀前半

表33 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表32

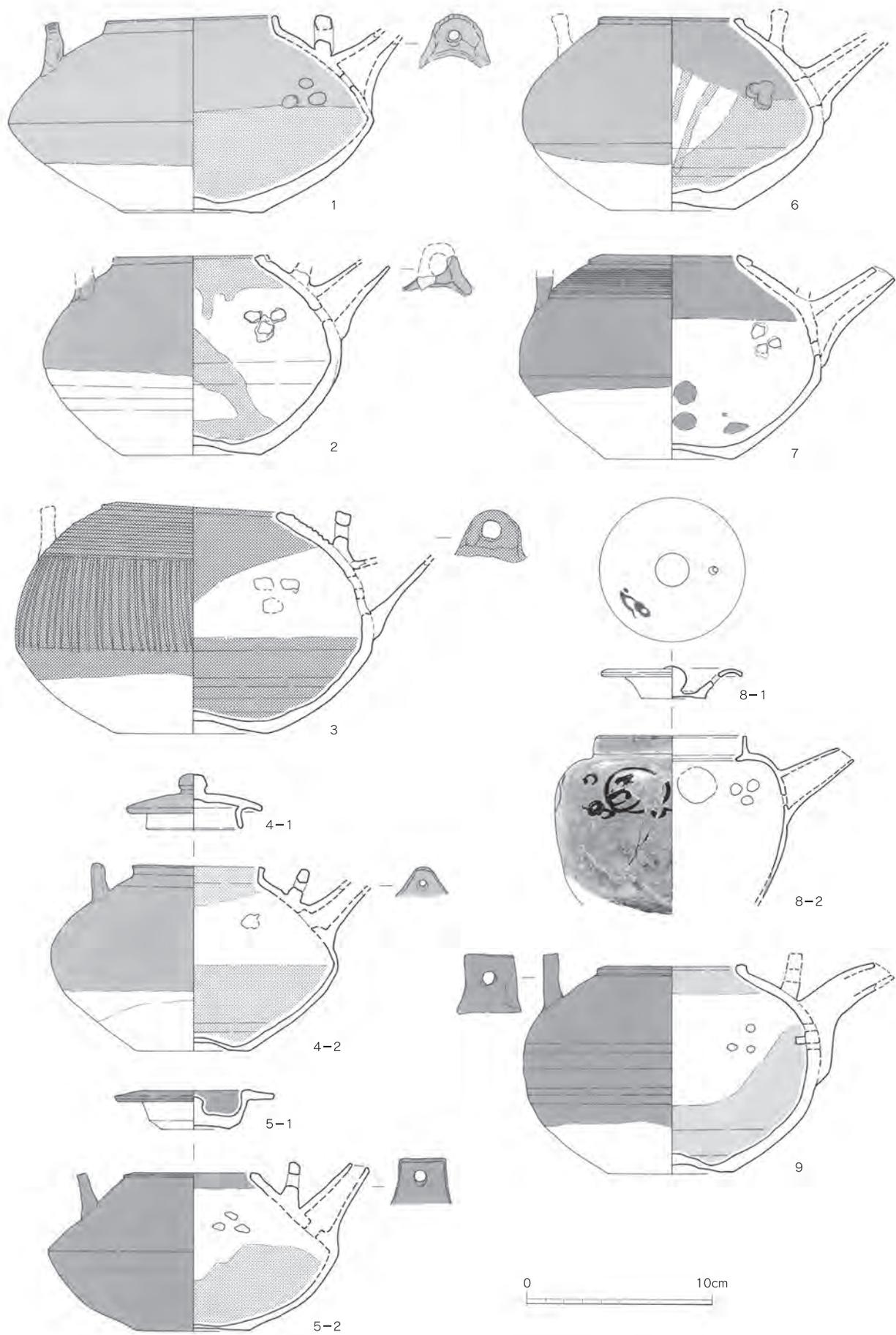


P3 5
P4 4・7
P9 2
P26 1・6
P42 3

第46図 ピット出土土器・陶磁器実測図2(4・6は1/4、5は1/6、他は1/3)



第47図 遺構検出面出土土器・陶磁器実測図(10~13は1/4、他は1/3)



第48図 上層整地層出土胞衣壺使用土瓶・急須実測図(1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
遺構検出面 47図18	猪口	口径7.6 高台径4.8 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉 全面	口縁部に口鏝状に呉須染付け	疊付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
遺構検出面 47図19	焼塩壺蓋	—	土師質土器 橙灰色	—	銘のスタンプがあり、「□深草」兵衛」と読めるので、「□深草砂川権兵衛」か	不明	小片	京都	不明
遺構検出面 47図20 図版6	水滴	長さ5.5 幅3.7 高さ4.5	磁器 灰白色	青みのある透明釉を 全面に掛ける	型押しで人物を陽刻し、裏面は網目が付着 する	不明	朱墨用らしく、 内面が赤く変色 している裏面のみ欠損	肥前	不明
遺構検出面 47図21	紅猪口 紅皿	口径4.3 高台径1.3 器高1.3	磁器 完形のため不明	透明釉 内面のみ	型押し成型で、外面菊花文	外面露胎	ほぼ完形	肥前	不明
上層整地層 48図1 図版6	土瓶	口径9.3 最大径19.5 器高10.6	陶器 黄灰色	緑灰色の灰釉を外面 胴中位以上と内面口縁部 から内面頸部まで、内面 胴中位から底部は灰釉	把手部は型作り	底部露胎 口唇部は釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
上層整地層 48図2 図版6	土瓶	口径7.9 最大径16.0 器高10.8	陶器 暗灰色	外面は白化粧土を全面 掛けた上に銅緑釉を厚 く掛ける 内面は口縁 部と中位以下は灰釉		底部露胎 口唇部は釉剥 ぎ	6割残存	肥前か	19世紀後半
上層整地層 48図3	土瓶	口径8.4 最大径19.2 器高12.6	陶器 橙褐色	鉄釉を胴中位まで、 内面は口縁部と底部 に鉄釉	把手部は型作り 外面は型打ち成型による沈線が印刻されて いる	底部露胎 口唇部は釉剥 ぎ	9割残存	肥前	19世紀後半
遺構検出面 48図4-1 図版6	蓋	裾径7.2 つまみ径1.5 器高3.0	陶器 灰色	銅緑釉を上面のみ	底面ヘラケズリ	裏面釉剥ぎ	9割残存 1201-2とセッ ト	肥前	19世紀後半
遺構検出面 48図4-2 図版6	土瓶	口径7.0 最大径15.4 底部10.1	陶器 灰色	銅緑釉胴中位まで、 口縁部から内面頸部 まで白化粧土、内面 底部に灰釉	把手部は型作り	底部露胎	ほぼ完形 1201-1とセッ ト	肥前	19世紀後半
遺構検出面 48図5-1 図版6	蓋	裾径8.4 つまみ径1.0 器高2.1	陶器 灰白色	黒釉を上面のみ	底面ヘラケズリ	つまみ上端露 胎	8割残存 1200-2とセッ ト	肥前	19世紀後半
遺構検出面 48図5-2 図版6	土瓶	口径6.2 最大径15.4 器高8.6	陶器 暗赤紫色	外面は黒釉胴中位ま で、内面は底部に灰 釉、口縁部に黒釉	把手部は型作り	底部露胎 口唇部は釉剥 ぎ	ほぼ完形 1200-1とセッ ト	肥前	19世紀後半
上層整地層 48図6 図版6	土瓶	口径7.9 最大径16.2 器高10.6	陶器 暗灰色	外面は白化粧土を中位 まで掛けた上に銅緑釉 を厚く掛ける 内面は 口縁部は銅緑釉が掛か り、中位以下は灰釉		底部露胎 口唇部は釉剥 ぎ	6割残存	肥前か	19世紀後半
上層整地層 48図7	土瓶	口径8.0 最大径17.2 器高10.4	陶器 茶橙褐色	焼成不良で緑灰黒茶 色に発色した鉄釉を 外面は胴中位以上、 内面は口縁部から内面 肩部まで	把手部は型作り	胴中位以下は 釉剥ぎ 口唇部は釉剥 ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
遺構検出面 48図8-1	蓋	裾径7.4 つまみ径1.5 器高1.7	軟質施釉陶器 黄灰色	白化粧土を外面に掛 けているが、下面は 焼成不良	白化粧土を上面に掛けた後、鉄絵	裾部釉剥ぎ	9割残存 1201-2とセッ ト	肥前	19世紀後半
遺構検出面 48図8-2	急須	口径8.0 最大径13.4	軟質施釉陶器 黄灰色	白化粧土を外面に掛 けた後、菊花文などの鉄絵 内面は肩部以下 に灰釉		底部露胎 内面は露胎	1201-1とセッ ト	不明	19世紀後半
上層整地層 48図9 図版6	土瓶	口径7.8 最大径16.5 器高11.3	陶器 暗橙褐色	鉄釉を胴中位まで、 内面は口縁部と底部 に鉄漿	把手部は型作り	底部露胎 口唇部は釉剥 ぎ	9割残存 上半は灰被り	肥前	19世紀後半
上層整地層 49図1	皿	口径18.5 高台径10.7 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	滲みのある染付で、外面は4文字の吉祥句が 入っているが「富」しか判読できない 内面 は花文、見込みに環状松竹梅文	ハリ目1つあり 疊付釉剥ぎ		肥前	不明
上層整地層 49図2	合子蓋	裾径5.2 器高0.9	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛 ける	天上部に「鳥犀圓」「肥後」「渡辺一巡入」とコ バルトで係れている	裾先釉剥ぎ	8割残存	肥前	不明
上層整地層 49図3	不明		土師質土器 黄白色 金雲母入る	—	スタンプの文字不明 外面丁寧なナデ、内面ケズリ状のナデ	不明	内外変色なし	在地	19世紀後半
上層整地層 49図4 図版6	杯	口径7.4 高台径3.0 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面に竹笹文染付	疊付け釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
上層包含層 49図5	変形小皿 花卉口縁	口径7.8 高台径4.3 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	型打ち成型で、内面に「寿」「福」の墨引き、 見込みに山水文の染付	疊付け釉剥ぎ	完形 口縁の一部が 片口状	肥前	19世紀中葉

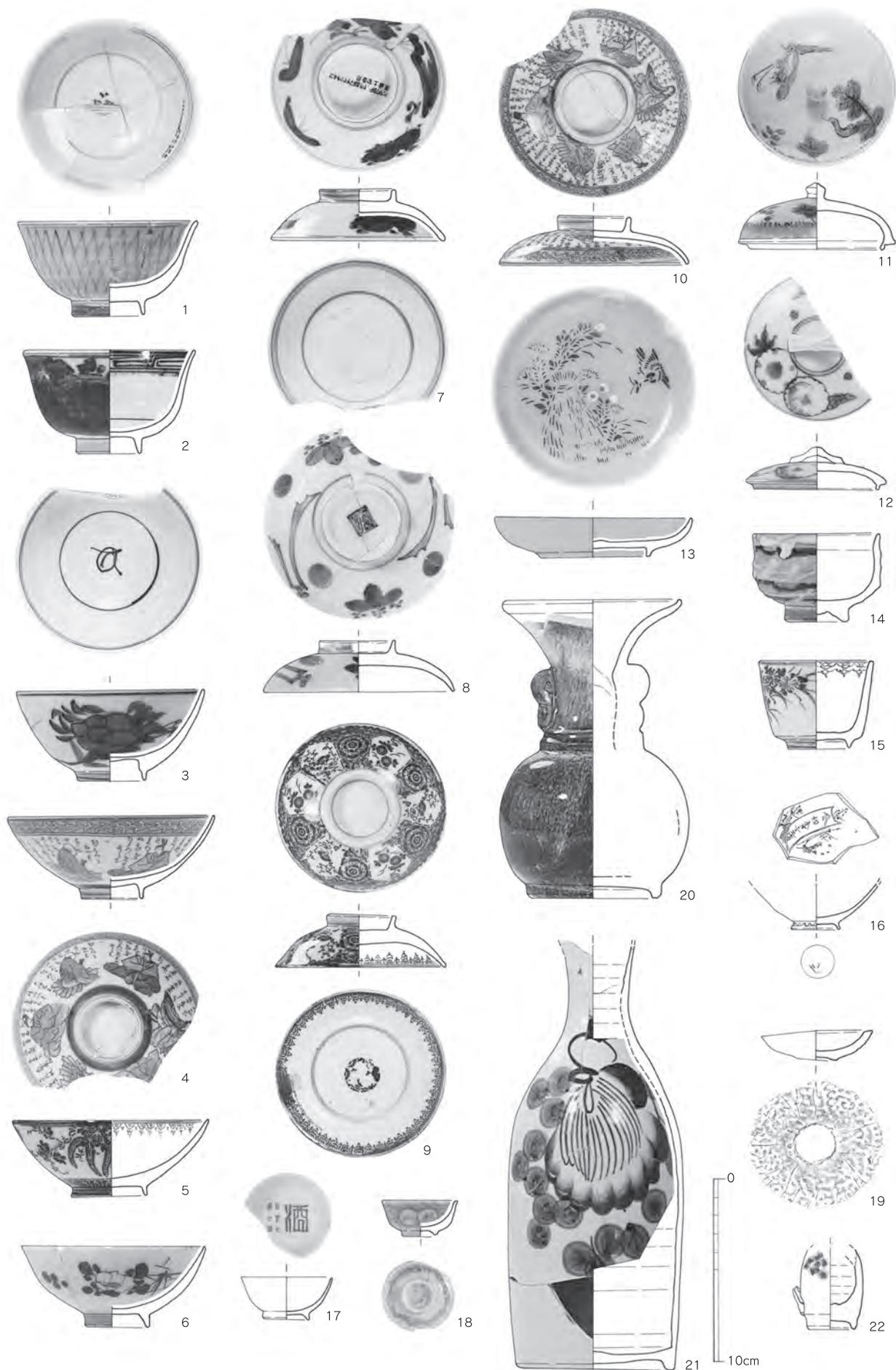
表34 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表33



第49図 上層整地層・上層包含層・客土層出土土器・陶磁器実測図(1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
上層包含層 49図6 図版6	小皿 菊花皿	口径10.2 高台径8.4 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台と壘付にアルミナ附着	ほぼ完形	瀬戸	19世紀後半 20世紀前葉
上層包含層 49図7	碗 湯飲み	口径5.4 高台径4.6 器高8.3	磁器 灰白色	外面竹笹文の回りに花文を充填して染付		壘付けと口縁部は釉剥ぎ		肥前	不明
上層包含層 49図8	小碗 湯飲み	口径6.6 高台径3.2 器高5.2	磁器 灰白色	青みのある透明釉を全面に掛ける	呉須による染付で、外面体部は草花文と源氏香文、口縁部は帯状に施文	砂目付 壘付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀中葉
上層包含層 49図9	蓋	裾径9.4 器高3.0 つまみ径4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良	外面は牡丹花文と芭蕉葉文、裏銘は□に青、内面は口縁部雷文帯 天井部に半牡丹花文と芭蕉葉文	つまみ上端釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀中葉
上層包含層 49図10 図版6	紅猪口 紅皿	口径4.8 高台径1.4 器高1.4	磁器 灰白色	透明釉 内面のみ	型押し成型で、外面菊花文	外面露胎	完形 光沢あり	肥前	不明
客土中 49図11	杯	口径(4.6) 高台径2.6 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	見込みに日の丸と旭日旗が金彩と赤彩で描かれ、その下に「歩兵四八」	壘付釉剥ぎ	3割残存	瀬戸	20世紀中葉
客土中 49図12	杯	口径(7.1) 高台径2.6 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	裏銘は○に「ハ」の刻印 見込みに青彩で「莫産問屋□□御旅館」金彩での文字はかすれて判読不能	壘付釉剥ぎ	7割残存	瀬戸	19世紀後半 20世紀前葉
客土中 49図13	瓶	口径6.5 高台径6.3 器高17.8	磁器 灰白色	透明釉 外面は全面 内面は口縁部のみ	コバルトの染付 外面花樹文	壘付釉剥ぎ		肥前	不明
客土中 49図14	蓋	裾径14.8 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	コバルトによるゴム印判染付 外面は銚を交差させた記号の文様と 漢字をモチーフ化したものが入る	つまみ上端釉剥ぎ	5割残存	肥前	20世紀前半
黒色土包含層 50図1	碗	口径9.6 高台径3.8 器高5.2	磁器 灰白色	透明釉 外面は全面 内面は口縁部のみ	外面網目文 内面界線、見込みに崩れた波濤文染付	壘付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉 19世紀後葉
黒色土包含層 50図2	碗	口径(9.6) 高台径3.6 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	コバルト手描き染付 外面花文、内面雷文、見込みに環状松竹梅文	つまみ上端釉剥ぎ	口縁部欠損	須恵焼か	不明
黒色土包含層 50図3	碗	口径10.2 高台径3.8 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	コバルト手描き染付 外面花文、内面界線、見込みに不明モチーフの染付け 外底を削り出し			肥前か	不明
黒色土包含層 50図4	碗	口径11.4 高台径3.4 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	ゴム印判刷り 外面六歌仙文	つまみ上端釉剥ぎ	口縁部欠損 1505とセットか	小石原	不明
黒色土包含層 50図5	碗	口径10.6 高台径3.8 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	コバルト手描き染付 外面藤・花文、内面雷文、内面に瓔珞文	壘付釉剥ぎ		肥前	19世紀後葉 20世紀前葉
黒色土包含層 50図6	碗	口径9.9 高台径3.6 器高4.4	磁器 灰白色	外面青磁釉、内面透明釉	クロム青磁の葉と鉄釉の花文の色絵付け	壘付釉剥ぎ		瀬戸	19世紀後葉 20世紀前葉
黒色土包含層 50図7	蓋	裾径9.4 つまみ径4.1 器高2.8	磁器	透明釉を全面に掛ける	外面は蝶と花文、内面界線染付け	つまみ上端釉剥ぎ 内面天井部蛇ノ目釉剥ぎしアルミナ塗布		肥前	19世紀中葉 19世紀後葉
黒色土包含層 50図8	蓋	裾径10.4 つまみ径4.1 器高2.8	磁器	透明釉を全面に掛ける	外面は桐文、丸文、琴柱文の染付け 裏銘は角福	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	1700 1740
黒色土包含層 50図9	蓋	裾径9.2 つまみ径3.8 器高2.9	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	コバルトの型紙刷り 外面梅・菊・牡丹花文 内面瓔珞文 内面天井部は崩れた環状松竹梅文	つまみ上端釉剥ぎ	完形 光沢あり	肥前	19世紀後半
黒色土包含層 50図10	蓋	裾径10.2 つまみ径4.0 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	ゴム印判刷り 外面六歌仙文	つまみ上端釉剥ぎ	ほぼ完形 50図4とセットか	肥前	20世紀前半
黒色土包含層 50図11 図版6	蓋	裾径7.2 つまみ径1.0 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	発色の悪い染付 外面は若松・草文・鶴文	つまみ上端釉剥ぎ	完形 口縁に歪みあり	肥前	19世紀中葉
黒色土包含層 50図12 図版6	蓋	裾径6.8 最大径7.6 器高2.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	天井部に花卉状丸文内にススキと5つの丸文、若松文の染付け後、型押し成型のリボン状のつまみ貼り付け	受け部釉剥ぎ	口縁に歪みあり	肥前	19世紀中葉
黒色土包含層 50図13	小皿 5寸皿	口径10.8 高台径6.0 器高2.1	磁器 灰白色	クロム青磁を高台内のほかに掛ける	見込みに薬束と草文と蝶文を緑、雀は茶色で型紙刷り、花はイチン	壘付釉剥ぎ	ほぼ完形	瀬戸	19世紀後半 20世紀前葉
黒色土包含層 50図14	杯 ピラ掛碗	口径6.8 高台径3.6 器高4.8	陶器 暗黄橙灰色	イッチンを網状に掛け、その上に鉄釉を3重に横に掛け、最後に内面から外面口縁部に長石釉を厚掛け		高台露胎		萩焼	不明
黒色土包含層 50図15	杯	口径6.3 高台径3.4 器高4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に草花文、内面口縁部は瓔珞文がコバルトで染付け	壘付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半 20世紀前葉

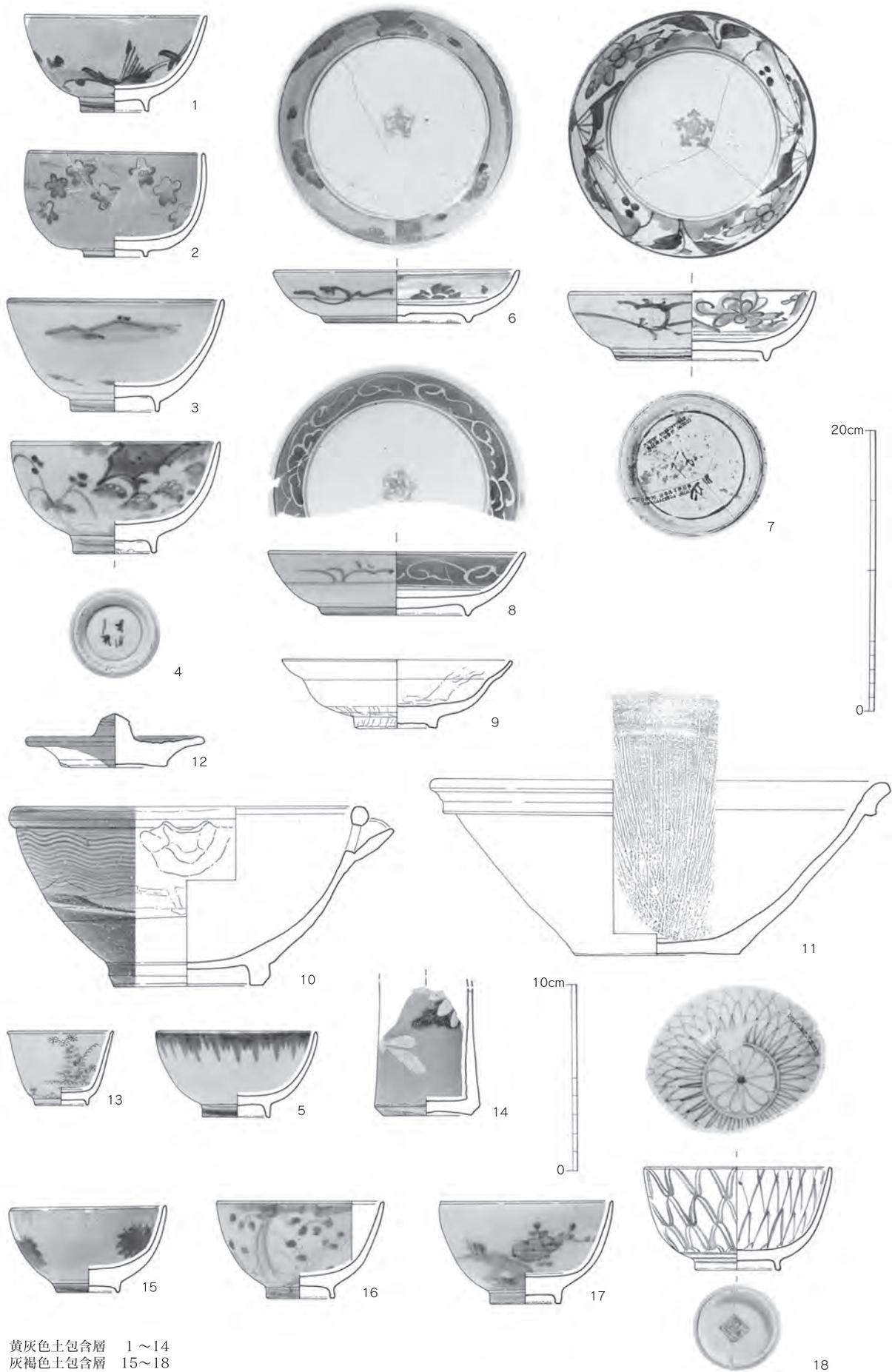
表 35 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 34



第50图 黑色土包含層出土陶磁器实测图(1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
黒色土包含層 50図16	杯	高台径2.8 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	見込みに短冊状の枠の中に、屋号と「松本オ二支店」が金彩で描かれ、梅樹文の花が赤彩で、枝が金彩で描かれている。裏銘はコバルトで「山形にハ」の屋号が描かれ、高台外面には凹凸文が入る	畳付釉剥ぎ	3割残存	瀬戸	19世紀後半 20世紀前葉
黒色土包含層 50図17	杯	口径4.8 高台径2.7 器高2.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	見込みにコバルトの吹絵で「酒」、その横に赤彩の手描きで「百葉之長也」と銘が描かれる	畳付釉剥ぎ	7割残存	瀬戸	19世紀後半 20世紀前葉
黒色土包含層 50図18	杯	口径4.1 高台径1.8 器高1.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	ゴム印判刷り 外面に唐草文と「紅清」都紅」が、裏銘は判読不能だがコバルトで染付	畳付釉剥ぎ	口縁部欠損 9割残存	瀬戸	19世紀後半 20世紀前葉
黒色土包含層 50図19 図版6	紅猪口 紅皿	口径6.0 高台径2.0 器高1.6	磁器 完形のため不明	白磁釉 内面のみ	型押し成型で、外面蛸唐草文	不明	完形	肥前	不明
黒色土包含層 50図20	瓶	口径9.7 高台径7.4 器高16.3	陶器 灰色	オリーブ色の灰釉を全面掛けた後、薬灰釉を流し掛け	耳は手握ね成形	畳付釉剥ぎ		小石原	不明
黒色土包含層 50図21	瓶	高台径8.7	磁器 灰白色	透明釉を外面から内面頸部まで掛ける	外面牡丹文コバルト染付け	畳付釉剥ぎ 砂目付		肥前	不明
黒色土包含層 50図22	ミニチュア 製品	高台径2.6 最大径3.4	磁器 灰白色	透明釉を外面から内面頸部まで掛ける	5弁花文染付 2重鋸歯文染付の破片が外面に軸着している			肥前	1780 19世紀中葉
黄灰色土包含層 51図1	碗	口径9.8 高台径3.7 器高5.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良	外面に花草・蝶文が染付けられている	畳付け釉剥ぎ	8割残存	波佐見	1680 1740
黄灰色土包含層 51図2	碗	口径9.4 高台径3.4 器高5.6	陶器 にぶい黄灰色	透明釉を全面に掛ける	灰釉下に鉄絵、上に青彩で花、緑彩で折れ松葉文	底部釉剥ぎ		京焼風陶器か	肥前か 不明
黄灰色土包含層 51図3	碗	口径8.4 高台径3.5 器高4.7	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面に口縁下に2重界線、その下に山・魚・雁、樹文が染付けられている	畳付け釉剥ぎ	7割残存	波佐見か	1650 1680
黄灰色土包含層 51図4 図版6	碗	口径11.2 高台径4.4 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に草花、折れ松葉と雪の輪文を混合させたモチーフが染付けられている 裏銘は「大明年製」	畳付け釉剥ぎ 砂目付着		ほぼ完形	肥前 1690 1720
黄灰色土包含層 51図5	碗	口径8.4 高台径3.6 器高4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面口縁部やや崩れた雨降り文	畳付け釉剥ぎ	7割残存	肥前	1700 1740
黄灰色土包含層 51図6 図版6	小皿 5寸皿	口径13.2 高台径8.2 器高3.6	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面直線化した唐草文、内面墨弾きによる輪郭で描かれた花文が、見込みに5弁花文のコンニャク印判で染付けられている	畳付け釉剥ぎ 砂目付着		ほぼ完形	波佐見 1680 1740
黄灰色土包含層 51図7 図版6	小皿 5寸皿	口径13.2 高台径8.2 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良	口唇部口鏝、外面唐草文、内面扇と花文が、見込みに5弁花文のコンニャク印判で染付けられている 裏銘は「大明年製」	畳付け釉剥ぎ 砂目付着		完形	波佐見 1680 1740
黄灰色土包含層 51図8	小皿 5寸皿	口径13.6 高台径7.8 器高3.4	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面に直線化した唐草文、内面に墨弾きの花唐草文が、見込みに5弁花文のコンニャク印判で染付けられている	畳付け釉剥ぎ 砂目付着	5割残存	波佐見	1650 1680
黄灰色土包含層 51図9 図版6	小皿 5寸皿	口径12.2 高台径4.5 器高3.6	陶器 灰白色	オリーブ色の灰釉を外底部以外に掛ける	外面胴下位にカンナ痕	見込み蛇ノ目釉剥ぎ、アルミナ3箇所が付着		ほぼ完形	肥前 1690 1780
黄灰色土包含層 51図10	片口鉢	口径25.7 高台径10.5 器高12.8	陶器 暗紫灰色	外面白化粧土を掛けたのち、ハケ状掻き取り、その上上半にのみオリーブ色の灰釉掛け、内面は白化粧土のハケ目の後、オリーブ色の灰釉		口唇部釉剥ぎ		肥前	1690 1750
黄灰色土包含層 51図11 図版6	摺鉢	口径32.7 高台径11.6 器高12.8	陶器 にぶい灰褐色 やや軟質	内外鉄釉	摺り目7本単位	外底軸拭き取り焼き台の痕跡らしいものが外底にある		やや焼成不良で、釉切れ多い	肥前 1690 1750
黄灰色土包含層 51図12	蓋	裾径5.8 最大径9.6 器高2.8	陶器 橙褐色	鉄釉上面から一部外面に掛ける	上面にハケ状沈線あり 底部意図切り	底部露胎		肥前	不明
黄灰色土包含層 51図13	杯	口径(5.6) 高台径(2.8) 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に赤彩で花と葉、緑彩で葉、黒彩で莖や輪郭が描かれている	畳付け釉剥ぎ	5割残存	肥前	1710 1740
黄灰色土包含層 51図14	線香立て	底径4.6	陶器 にぶい黄灰~灰色 軟質 混入物多い	透明釉を全面に掛ける	外面に鉄絵の上に白彩と赤彩による花文が描かれている	底部釉剥ぎ		京焼風陶器か	関西 不明
灰褐色土包含層 51図15	碗	口径8.4 高台径3.5 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にコンニャク印判による花文と界線1条が染付けられている	畳付け釉剥ぎ	7割残存	波佐見	1680 1740
灰褐色土包含層 51図16	碗	口径9.2 高台径3.8 器高5.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花樹文が染付けられている	畳付け釉剥ぎ		ほぼ完形	波佐見 1680 1740

表36 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表35

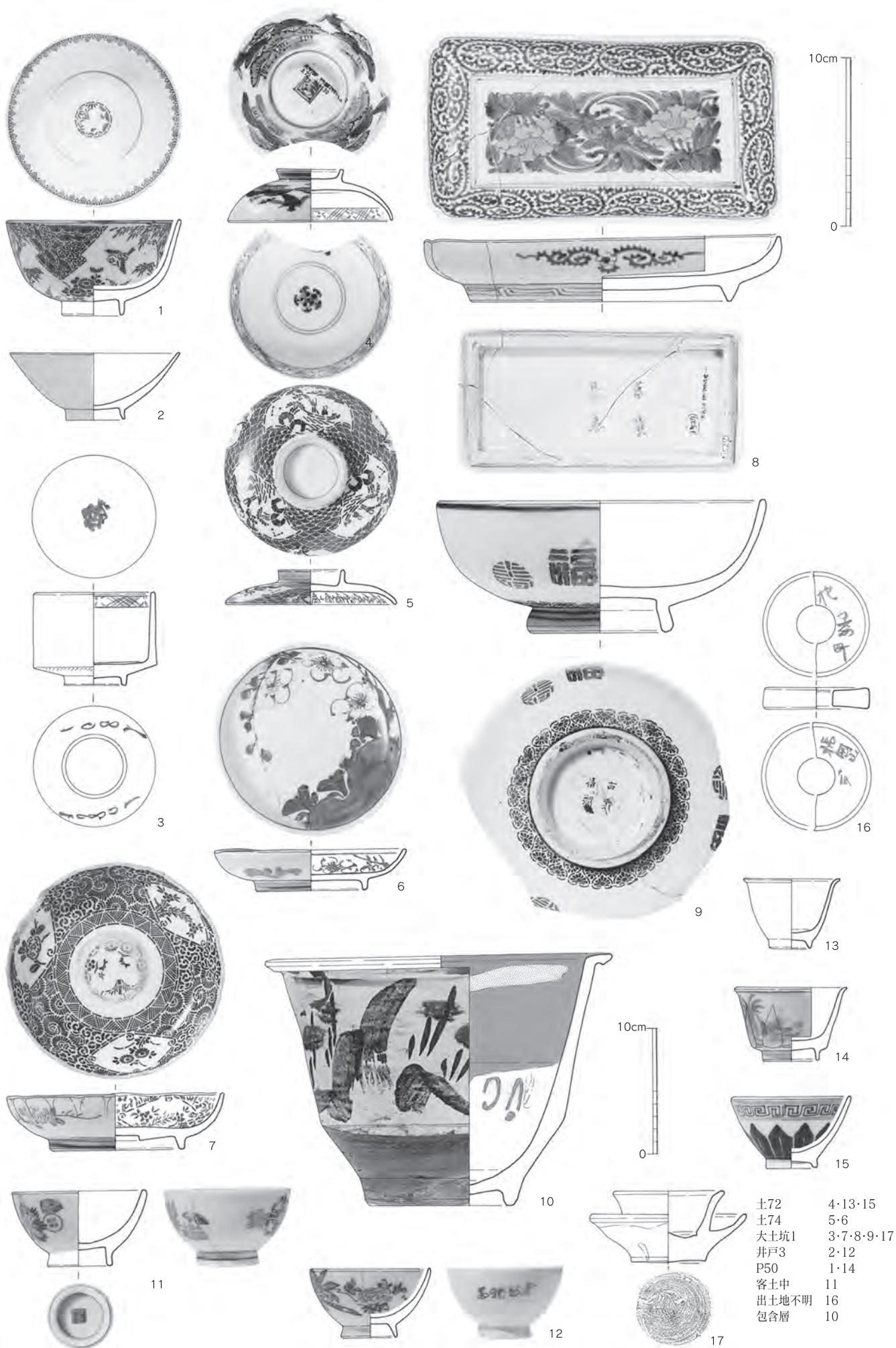


黄灰色土包含層 1~14
 灰褐色土包含層 15~18

第51図 黄灰色土・灰褐色土包含層出土土器・陶磁器実測図(10・11は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
灰褐色土包含層 51図17	碗	口径9.2 高台径3.8 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に菊花樹文・蝶文が染付けられている	豊付け釉剥ぎ 砂目付	ほぼ完形	波佐見	1680 ~ 1740
灰褐色土包含層 51図18	碗	口径9.2 高台径3.8 器高5.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に二重網目文、内面に網目文、見込みに菊花文、裏銘に角福が染付けられている	豊付け釉剥ぎ	6割残存	肥前	1710 ~ 1740
ピット50 52図1	碗	口径10.2 高台径3.7 器高5.6	磁器 暗白色	透明釉を全面に掛ける	外面花と竹と雀を描き、花文・唐草文で充填、内面は口縁部に環珞文コバルト型紙刷り染付	豊付け釉剥ぎ 砂目付	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
井戸3 52図2 図版6	碗	口径9.9 高台径3.9 器高3.5	磁器 暗白色	緑がかったクロム青磁釉		豊付け釉剥ぎ	完形	瀬戸	19世紀後半 ~ 20世紀前半
大土坑1 52図3	碗 腰折形	口径7.2 高台径3.7 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に半菊花文と格子文と星菱形、内面口縁部に袈裟襷文、見込みに5弁花文、外面底部に崩れたモチーフの染付	豊付け釉剥ぎ		肥前	18世紀後半
土72 52図4 図版6	蓋	裾径10.4 つまみ径3.8 器高2.1	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面に森と帆掛船、裏銘は角福、内面口縁部に袈裟襷文、見込みに5弁花文の染付	つまみ上端釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	18世紀後半
土坑74 52図5 図版6	蓋	裾径10.4 つまみ径3.8 器高2.1	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面3つの星から成る星座と松樹と船に乗る2人の人物のモチーフが3つ、内面は環珞文が型紙摺り染付されている	つまみ上端釉剥ぎ	完形 口縁の一部に焼成前の欠損あり	肥前か	19世紀後半
土坑74 52図6 図版6	小皿 5寸皿	口径6.6 高台径2.9 器高4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面星文・変形鳥文、内面界線1条、見込みに梅樹文のコバルト染付	豊付け釉剥ぎ	ほぼ完形 口縁の一部に歪みあり	肥前	19世紀後半
大土坑1 52図7 図版6	小皿 5寸皿	口径12.5 高台径7.5 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型 外面花唐草文、内面は窓無いに花文、周囲に花文を充填、見込みに多重線鋸文文の内部に環状松竹梅文がコバルト型紙刷り染付	蛇ノ目高台で釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大土坑1 52図8	角皿	長軸21.0 短軸10.4 器高4.1	磁器 灰白色	青みのある透明釉を全面に掛ける	型打ち成型 外面蜻蛉唐草文・高台に間伸びした雷文、外底に富貴長春の裏銘、内面は蜻蛉草、見込みに二重方形の中に牡丹文が染付けられている	外面露胎	ほぼ完形 やや歪みあり	肥前	18世紀後半
大土坑1 52図9	鉢	口径19.4 高台径8.6 器高7.8	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面に界線の染付、その上に緑と茶色の型紙刷りの寿・福字と花文 裏銘は古□精製	豊付け釉剥ぎ	焼成時の口縁部にひびあり	肥前	
包含層 52図10	鉢 半胴甕	口径27.1 底径11.4 器高19.7	陶器 暗赤紫色		外面から内面口縁部まで白化粧土、その上に鉄絵で樹、緑色の灰釉で葉を描く。内面は鉄釉を胴下位までかける	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台と豊付けにアルミナ付着	ほぼ完形	肥前	18世紀後半 ~ 19世紀中葉
客土 52図11	小碗	口径7.8 高台径3.8 器高4.5	磁器 完形のため不明	3色銅版刷り 青・黄・緑	裏銘は記号化されており不明 6つの勲章文が配置されている	豊付け釉剥ぎ	ほぼ完形	瀬戸	20世紀中葉
井戸3 52図12	小碗	口径7.1 高台径3.3 器高4.1	磁器 完形のため不明	2色銅版刷り 青・褐色	コバルトで水仙と薔薇の葉茎部、褐色で花を描く 反対面に「□州親花」と書かれている	豊付け釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半 ~ 20世紀前半
土坑72 52図13	杯	口径(5.6) 高台径2.4 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	豊付け釉剥ぎ		肥前	不明
ピット50 52図14	杯 面取り形	口径10.2 高台径3.7 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	ゴム印判刷り 外面鶏と花文	豊付け釉剥ぎ	ほぼ完形	瀬戸	20世紀前半
土坑72 52図15	杯	口径(5.6) 高台径2.4 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面口縁部雷文、体部下位は鎬連弁文のコバルト染付	豊付け釉剥ぎ	7割残存	肥前	不明
出土地不明 52図16	戸車	径6.2 孔径2.1 厚さ1.2	磁器 灰白色	透明釉 内外の側面のみ	切り離し後、ヘラケズリし、端部は面取り 表裏に墨書、1面には「□カ部町」、もう1面には「福岡□□」まで読み取れる			肥前	不明
大土坑1 52図17	灯明受皿	受け部口径6.6 高台径4.4 器高4.2	陶器 橙褐色	光沢のない鉄釉を上半分に薄掛け	外底糸切り	底部露胎		肥前	不明

表 37 4次調査西区出土土器・陶磁器観察表 36



第52図 出土地不明・攪乱出土陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3)

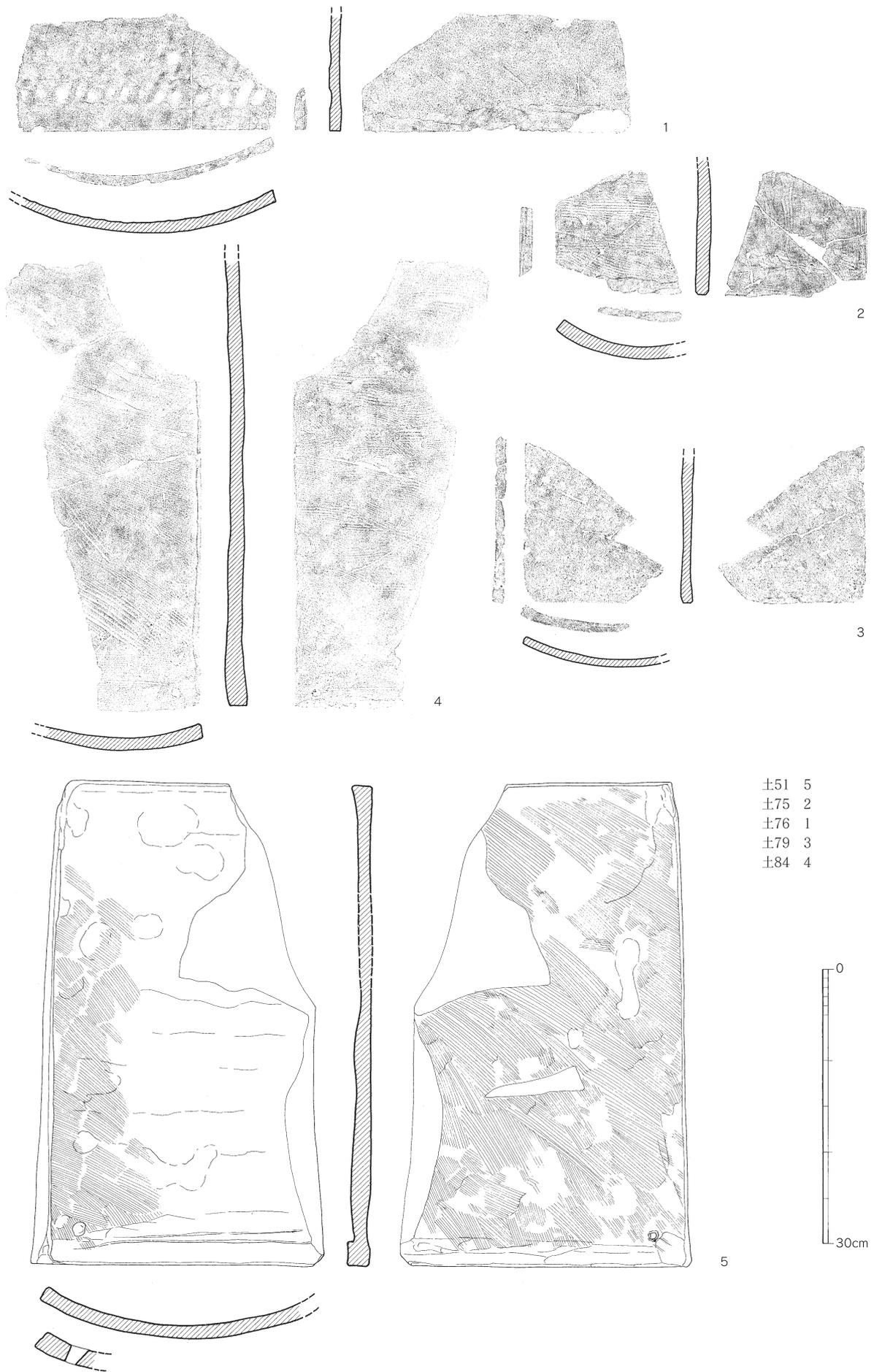
いので、残りの良いものを掲載した。

59図10はキセルの火皿部であり、金メッキがよく残っている。他の金メッキを施したものと残り方が異なるので、材質に差があるのかもしれない。

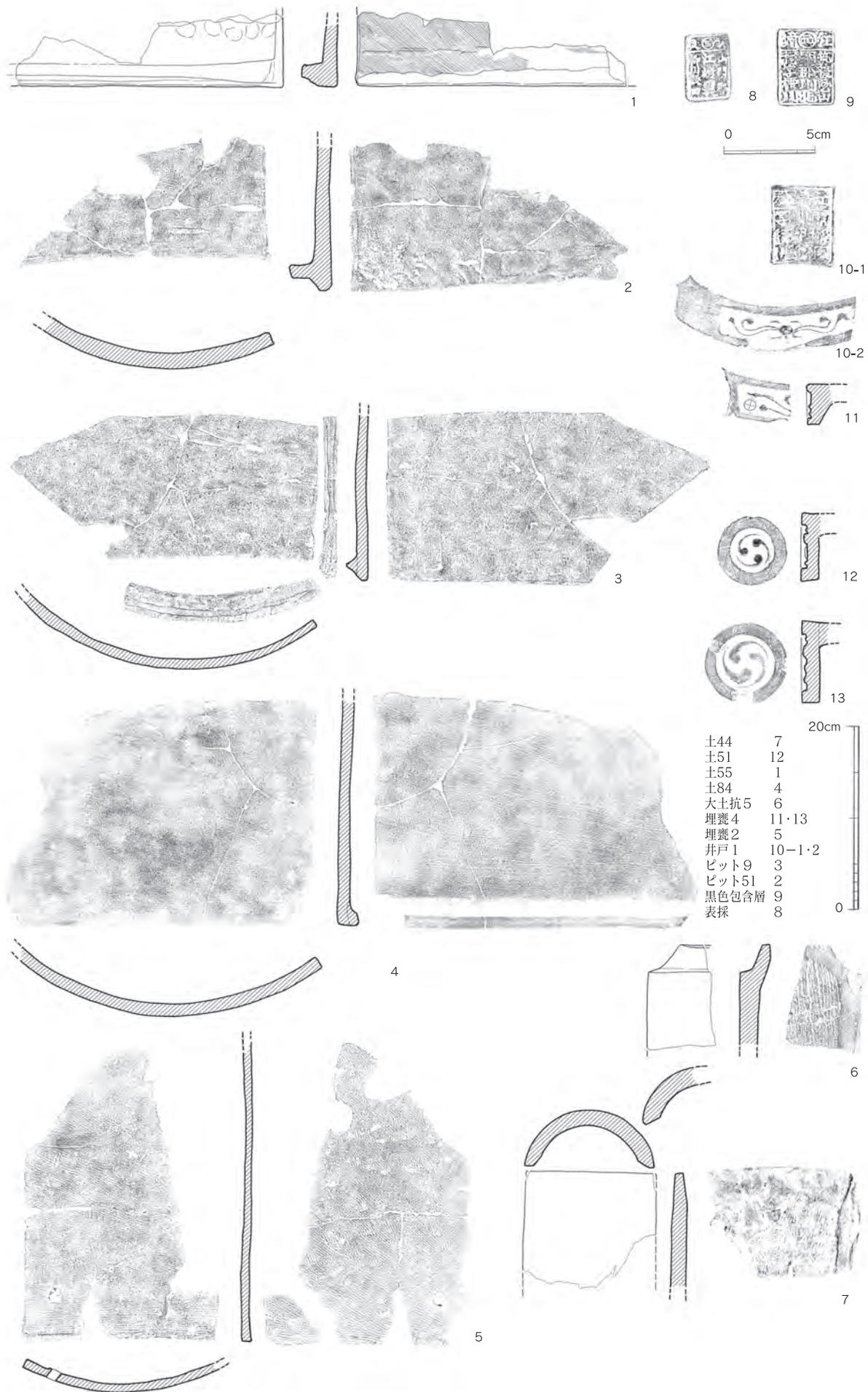
59図12・13はキセルの雁首で、12は灰落とすのために打ち付ける部位を平坦面にして肥厚させて強化したタイプである。13は火皿部分との接合部が押し潰されており、火皿部を捻じ切った痕跡がある。これは、火皿部を再利用したためのものか。59図19～21は簪で、19の上端部は耳搔き部になり、その下は2回振りが入る。亀形の飾り部に接合痕がないことから、鋳

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	色調	調整・整形・装飾技法				製作技法	所見		
					凹面	凸面	上下端面・瓦当	側端面		特記事項	推定産地	推定年代
土坑76 53図1	平瓦 樋瓦	長さ7.0 幅29.3 厚さ1.4	土師質土器 黄灰色	灰黄～灰黄褐色	オサエのちナデ オサエ痕跡残る	ケズリ状の ナデ	ケズリ	ケズリ	不明		在地	不明
土坑75 53図2	平瓦 樋瓦	長さ13.6 幅12.9 厚さ1.4	土師質土器 橙灰色	灰白～灰色	目の太いハ ケ	ケズリ状の ナデ	ケズリと面 取り	ケズリ	不明		在地	不明
土坑79 53図3	平瓦 雁振瓦	長さ16.0 幅15.2 厚さ1.3	瓦質土器 灰色	灰白～灰色	ハケ	ハケ	ケズリと面 取り	ケズリと面 取り	不明		在地	不明
土坑84 53図4	平瓦 樋瓦	長さ49.0 幅17.0 厚さ1.6	土師質土器 黄灰色	灰色	ナデ	ハケ タガは 貼り付け	ケズリ	カット後、 ケズリ	不明		在地	不明
土坑51 53図5 図版7	平瓦 樋瓦	長さ50.3 幅31.6 厚さ2.1	土師質土器 黄灰色	黄灰色	ハケ	ハケ タガは 貼り付け	下端角に穿 孔	ケズリと面 取り	不明		在地	不明
土坑55 54図1 図版7	平瓦 樋瓦	長さ8.2 幅29.0 厚さ4.0	土師質	灰～灰黒色	ハケ後ナデ	ハケ	下端面はナ デ	ケズリ	1枚作り		在地	不明
ピット51 54図2 図版7	平瓦 樋瓦	長さ16.0 幅25.2 厚さ1.8	土師質土器 青灰色 白色粒子を含む	凸面黄灰色 凹面灰色	ハケ後ナデ	ハケ	タガは貼り 付け ケズリ	カット後、 ケズリ	1枚作り		在地	不明
ピット9 54図3	平瓦 漏斗瓦	長さ18.8 幅32.0 厚さ1.3	土師質土器 黄橙色 褐色バミスを含む	灰橙褐色	表面ハケ	ハケ状工具に よるナデで工 具端が残る	タガは貼り 付け	下半分を カットして 折っている	1枚作り		在地	不明
土坑84 54図4	平瓦 雁振瓦	長さ25.2 幅32.5 厚さ1.3	土師質土器 黄橙色 褐色バミスを含む	灰色	目の細かい ハケ	目の細かい ハケ	タガは貼り 付け	ケズリと面 取り	1枚作り		在地	不明
埋壘2 54図5	平瓦 雁振瓦	長さ33.2 幅21.8 厚さ0.9	瓦質土器 灰色	薄い灰色	ハケ	ハケ	ケズリ	ケズリと面 取り	1枚作り	角に穿孔あ り	在地	不明
大土坑5 54図6	丸瓦	長さ11.6 幅7.5 厚さ2.0	瓦質 黒灰色が灰白色 に挟まれている	灰白～灰色	布目と模骨 痕				桶巻き	銀化してい ない	在地	不明
土坑44 54図7	丸瓦	長さ12.8 幅14.0 厚さ1.7	瓦質 黒灰色	灰色	布目と模骨 痕				桶巻き	銀化してい ない	在地	不明
表採 54図8	棧瓦	長さ29.8 最大幅26.0 厚さ2.0	瓦質 灰白色	灰色	スタンプの 痕跡がある がナデ消さ れている				1枚作り	8割残存	不明	19世紀後半 以降
土坑44 54図9	棧瓦	長さ29.8 最大幅26.3 厚さ1.6	瓦質	黒灰色 銀化		隅丸方形の 枠内に製作 工房の印刻 あり	角に切り取 りあり		1枚作り	8割残存	不明	19世紀後半 以降
井戸1 54図10	棧瓦	長さ30.2 最大幅21.4 厚さ1.6	瓦質 灰白色 燻し瓦	黒灰色 銀化	外面宝珠唐 草文	多条沈線に よる滑り止め と、隅丸方形 内に製作工房 の印刻あり	唐草宝珠文		1枚作り		不明	19世紀後半 以降
埋壘4 54図11	棧瓦 瓦当部	径7.6 厚さ2.0	瓦質土器 灰白色	灰～黒色	外面ナデ	宝珠唐草文 で隅に円に 十が陽刻さ れている	裏面の接合 部に格子の 凸線あり		不明		不明	不明
埋壘4 54図12	棧瓦 瓦当部	径9.0 厚さ2.0	瓦質土器 灰白色	灰～黒色	外面ナデ 巴文		裏面の接合 部に格子の 凸線あり		不明		不明	不明
土坑51 54図13	棧瓦 瓦当部	径7.6 厚さ0.9	瓦質土器 灰白色	灰～黒色	外面ナデ 巴文	裏面の接合 部			不明		在地	不明

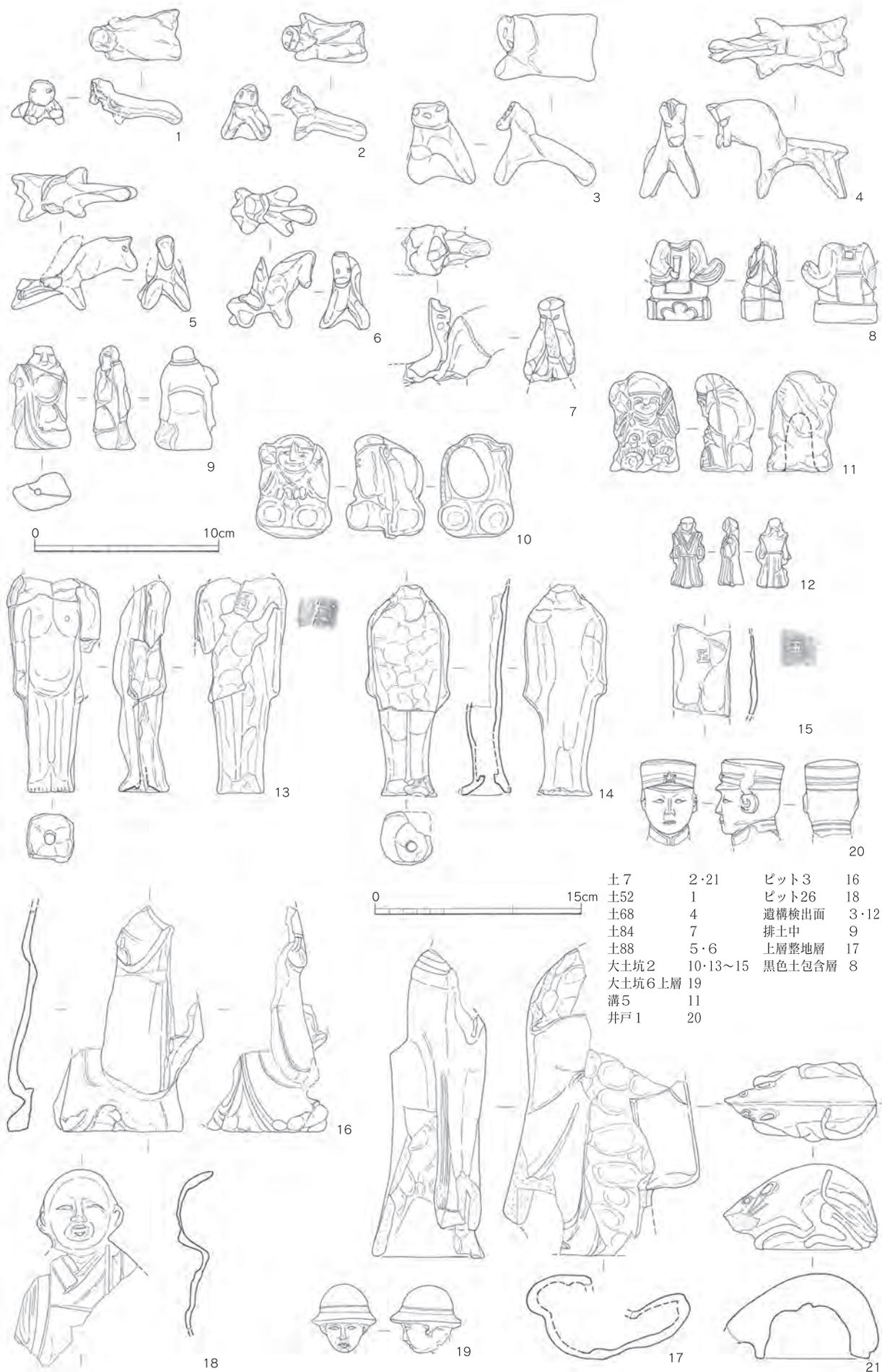
表 38 4次調査西区出土瓦観察表



第53図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土土師質瓦実測図(1/6)



第54図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土瓦実測図(8・9・10-1は1/3、他は1/6)



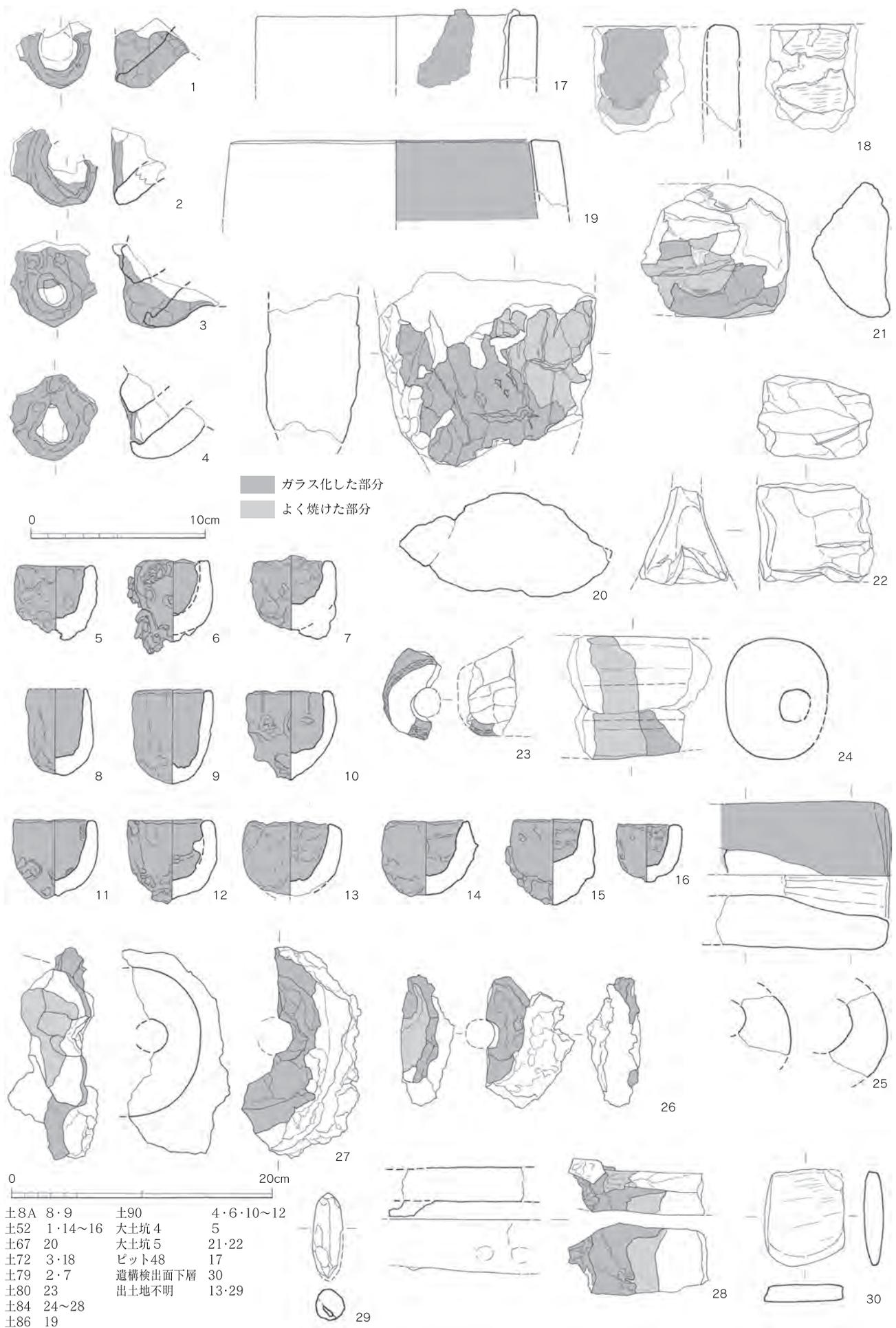
第55図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土土製品実測図(16・17は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所見		
						特記事項	推定産地	推定年代
土坑52 55図1 写真1・図版7	土人形 犬	長さ28 幅5.0 高さ2.5	土師質土器 黄灰色	オサエ痕あり	手捏ね	前脚欠損	在地	不明
土坑7 55図2 図版7	土人形 犬	長さ2.6 幅4.6 高さ3.0	土師質土器 黄灰色	上面に編み物の痕跡が付着している オサエ痕あり 下から押さえた時に付着したもので、敷物か	手捏ね	完形 土馬か	在地	不明
土坑7 55図3 図版7	土人形 犬	長さ3.6 幅5.5 高さ4.5	土師質土器 黄灰色	上面に編み物の痕跡が付着している オサエ痕あり 下から押さえた時に付着したもので、敷物か	手捏ね	完形 土馬か	在地	不明
土坑68 55図4 写真1・図版7	土人形 土馬	長さ3.4 幅7.6 高さ5.5	土師質土器 暗黄灰色	目・口の表現あり	手捏ね	完形	在地	不明
土坑88 55図5	土人形 土馬	長さ2.8 幅6.7 高さ(4.0)	土師質土器 黄灰色	騎人の表現あり	手捏ね		在地	不明
土坑88 55図6 図版7	土人形 土馬	長さ2.8 幅4.6 高さ4.2	土師質土器 黄灰色	騎人の表現あり	手捏ね	完形	在地	不明
土坑88 55図7 図版7	土人形 土馬	長さ2.8 幅4.6 高さ4.6	土師質土器 黄灰色	手捏ね 騎人は目・鼻・口の表現あり	手捏ね		在地	不明
黒色土包含層 55図8 図版7	土人形 天神像	長さ3.0 幅2.3 高さ4.4	土師質土器 黄灰白色	2つの型で成型したものを接合している	型合わせ成型	頭部欠損	在地	不明
排土中 55図9 図版7	土人形 僧侶人形	長さ2.2 幅3.1 高さ5.7	土師質土器 黄灰色	合わせ目をケズリ 底面に刺突穿孔	型合わせ成型	ほぼ完形	在地	不明
黒色土包含層 55図10 図版7	土人形 大黒天像	長さ4.1 幅4.3 高さ5.7	土師質土器 金雲母なし 暗黄灰色	2つの型で成型したものを接合している 下面に合わせ目が突起状に残る	型合わせ成型	摩滅	在地	不明
黒色土包含層 55図11 図版7	土人形 大黒天像	長さ3.8 幅3.3 高さ5.6	土師質土器 金雲母なし 黄灰色	2つの型で成型したものを接合している 下面に指による窪みあり 下面に接合痕は丁寧にナデ消し	型合わせ成型		不明	不明
黒色土包含層 55図12 図版7	土人形 男雛像か	長さ1.8 幅1.3 高さ3.9	土師質土器 黄灰色	2つの型で成型したものを接合している 下面に合わせ目が突起状に残る	型合わせ成型		在地	不明
大土坑2 55図13 図版7	土人形 着せ替え人形	長さ5.0 厚さ2.9 器高11.5	土師質土器 黄橙色	2つの型で成型したものを接合している 幼児体型の裸人形で、背中に「五」のスタンプあり 下面には穿孔あり 内面に型押し時の押さえ痕あり	型合わせ成型		在地	19世紀後半
大土坑2 55図14	土人形 着せ替え人形	長さ4.3 厚さ2.6 器高11.5	土師質土器 黄橙色	2つの型で成型したものを接合している 背中にスタンプなし 下面には穿孔あり 内面に型押し時の押さえ痕あり	型合わせ成型		在地	19世紀後半
大土坑2 55図15	土人形 着せ替え人形	長さ3.2 厚さ0.7 器高5.0	土師質土器 黄橙色	2つの型で成型したものを接合している 裸人形で、背中に「五」のスタンプあり 内面に型押し時の押さえ痕あり	型合わせ成型		在地	19世紀後半
ピット3 55図16 図版7	土人形 おぼこ人形	長さ8.8 厚さ7.8 器高16.6	土師質土器 黄橙色	2つの型で成型したものを接合している 内面に型押し時の押さえ痕あり	型合わせ成型		在地	不明
上層整地層 55図17	土人形 おぼこ人形	長さ14.3 厚さ8.2 器高22.6	土師質土器 黄白色	2つの型で成型したものを接合している 外面は丁寧に消されているが、内面には合わせ目あり	型合わせ成型		在地	19世紀後半
ピット26 55図18	土人形 おぼこ人形	長さ7.1 厚さ1.7 器高11.0	土師質土器 黄白色	2つの型で成型したものを接合している 外面は丁寧に消されているが、内面には合わせ目あり	型合わせ成型		在地	不明
上層整地層 55図19 図版7	土人形 幼児人形	長さ3.4 幅4.0 器高3.8	土師質土器 黄白色	2つの型で成型したものを接合している 帽子と髪型から男児か 合わせ目なし 中空	型合わせ成型		在地	20世紀前半か
井戸1 55図20 図版7	土人形 兵隊人形	長さ3.4 幅3.0 高さ4.7	土師質土器 黄灰色	2つの型で成型したものを接合している 合わせ目をケズリ	型合わせ成型	頭部は完形	在地	明治期
土坑7 55図21 写真1・図版7	土人形 鼠	長さ8.3 幅4.4 高さ4.7	土師質土器 黄灰色	2つの型で成型したものを接合している	型合わせ成型	ほぼ完形	在地	不明
大土坑4B 56図1	土鈴	長さ2.2 幅2.9 高さ3.7	土師質土器 黄灰色	型押し成型した2つの型で成型したものを合わせている 下に方形の穿孔があり	型合わせ成型		在地	不明
土坑61 56図2 図版7	土鈴	長さ2.8 幅2.8 高さ3.7	土師質土器 黄灰色	天井部にしほりあり 下に方形の穿孔があり、内部に球が入っている	型合わせ成型	完形	在地	不明
大土坑6 56図3	土鈴	長さ2.7 幅2.7 高さ3.9	土師質土器 黄灰色	天井部にしほりあり	型合わせ成型	完形	在地	不明
大土坑4B 56図4	土鈴	長さ2.5 幅2.8 高さ3.7	土師質土器 黄灰色	天井部にしほりあり 下に方形の穿孔があり	型合わせ成型		在地	不明

表39 4次調査西区出土土製品観察表1

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所見		
						特記事項	推定産地	推定年代
土坑84 56図5	土鈴	長さ3.2 幅3.3 高さ5.8	土師質土器 灰白色	天井部にしほりあり 下に方形の穿孔がある	型合わせ成型		在地	不明
土坑57 56図6	土鈴	長さ4.4 幅4.8 高さ4.5	土師質土器 黄灰色	天井部にしほりあり 下に方形の穿孔がある	型合わせ成型		在地	不明
溝1 青灰色土 56図7	鳩笛	長さ3.4 幅3.0 高さ4.7	土師質土器 灰白色 混入物なし	型合わせ成型 合わせ目を肥厚している 上面の穿孔は接合後	型合わせ成型	接合にずれあり 完形	在地	不明
大土坑2 56図8 図版7	鳩笛	長さ4.1 幅6.0 高さ7.2	土師質土器 黄褐色 金雲母あり	型合わせ成型 合わせ目を肥厚している 上面の穿孔は接合後	型合わせ成型		在地	不明
土坑41 56図9 図版7	ミニチュア土器 瓶	口径1.8 底径2.2 器高5.4	土師質土器 黄灰色	手握ね オサエ痕	—	完形	在地	不明
排土中 56図10 図版7	瓶 目薬瓶	口径1.6 底長軸4.1 器高6.5	ガラス コバルトブルー 気泡わずか	型合わせの合わせ痕を体部の角にしている 表面に「西海目薬」、裏面に「西海製剤」「合資会社」と陽刻されている	型合わせ成型	完形	不明	19世紀後半 20世紀前葉
大土坑6 56図11 図版7	瓶 目薬瓶	口径1.5 底長軸2.9 器高6.5	ガラス コバルトブルー 気泡わずか	型合わせの合わせ痕を体部の角にしている 表面に「九州目薬」、裏面に「九州製薬株式会社」と陽刻されている	型合わせ成型	完形	不明	19世紀後半 20世紀前葉
上層包含層 56図12 図版7	瓶 両口点眼式 目薬瓶	長さ7.8 幅2.2 厚さ1.8	ガラス コバルトブルー 気泡なし	表裏面中央に多条突線があるが、表面にのみ シールを貼る範囲がある 上部はゴムが残る	型合わせ成型	完形	不明	19世紀後半 20世紀前葉
埋甕5 56図13 図版7	瓶 目薬瓶	口径1.4 底長軸2.8 器高6.3	ガラス 透明 気泡なし	型合わせの合わせ痕を体部の角にしている 陽刻なし 口縁部は打ち欠きによる切り離し	型合わせ成型	完形	不明	19世紀後半 20世紀前葉
上層包含層 56図14 図版7	瓶 両口点眼式 目薬瓶	長さ7.6 幅2.0 厚さ1.5	ガラス コバルトブルー 気泡なし	表面に「EYE WATER ROHTO」と陽刻されて いる	型合わせ成型	ゴム部分を除いて 完形	不明	19世紀後半 20世紀前葉
上層包含層 56図15 図版7	瓶 両口点眼式 目薬瓶	長さ7.6 幅2.0 厚さ1.5	ガラス コバルトブルー 気泡なし	成型痕なし 体部は鑄状の稜あり 表面にのみ シールを貼る範囲がある 上下の蓋はねじ式で 蓋はプラスチック	型合わせ成型か	完形	不明	20世紀前葉
上層包含層 56図16	瓶 白髪染瓶	口径1.6 底径2.3 器高6.4	ガラス 透明 気泡あり	型合わせ成型 口縁部の対角線上に沈線あり 表面に「るり羽」、裏面に「一線」と「定量」と陽刻さ れている	型合わせ成型		不明	不明
遺構検出面 56図17 図版7	葉瓶 仁丹入れ	長さ8.4 幅3.0 厚さ1.9	ガラス グリーン 気泡多い	口は打ち欠きによる切り離し	型合わせ成型	9割残存	不明	19世紀後半 20世紀前葉
上層整地層 +井戸3 56図18	小皿	口径1.3 底径2.2 器高5.2	ガラス グリーン 気泡多い	陽刻は外面のみ	プレス成型		不明	不明
土坑1 56図19 図版7	おはじき	長さ2.4 幅2.2 厚さ0.5	ガラス 不透明の白	1面に線刻らしいものがあるが製作時のものかも	不明		不明	不明
客土 56図20	瓶 食塩瓶	口径4.4 底径5.4 器高9.5	ガラス 透明 気泡あり	型合わせ痕あり 外面に「衛生家日々必要」「食塩」「赤穂 宮崎元 治製」底面に「七瓶」と陽刻されている	型合わせ成型	ほぼ完形	不明	不明
土坑52 57図1 図版8	ファイゴの羽口	口径(3.6)	土師質土器 黄橙色	剥離面は平坦であることから、接合部である 全面ガラス化のため器面観察できない	手握ね		在地	不明
土坑79 57図2 図版8	ファイゴの羽口	口径(3.0)	土師質土器 黄橙色	口縁部に歪みあり	手握ね	外面と内面口縁 部ガラス化	在地	不明
土坑72 57図3 図版8	ファイゴの羽口	口径(3.5)	土師質土器 黄～黄橙色	口縁部に歪みあり 全面ガラス化のため器面観察できない	手握ね	全面ガラス化	在地	不明
土坑90 57図4 図版8	ファイゴの羽口	口径(5.4)	土師質土器 砂を多く含む 黄橙灰色	口縁部に歪みあり	手握ね	外面と内面口縁 部ガラス化	在地	不明
大土坑4B 57図5 図版8	るつぼ	口径4.6 器高4.7	土師質土器 完形のため胎土 不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手握ね か	手握ね	完形	在地	不明
土坑90 57図6 図版8	るつぼ	口径3.7 器高(4.3)	土師質土器 完形のため胎土 不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手握ね か	手握ね	完形 内面と外 面一部に銅付着	在地	不明
土坑79 57図7 図版8	るつぼ	口径4.6 器高(4.0)	土師質土器 完形のため胎土 不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手握ね か	手握ね	完形 口縁部に銅付着	在地	不明
土坑8A 57図8 図版8	るつぼ	口径(3.4) 器高4.9	土師質土器 にぶい灰色 砂分多い	全面ガラス化のため器面観察できないが手握ね か	手握ね	内面に銅付着	在地	不明

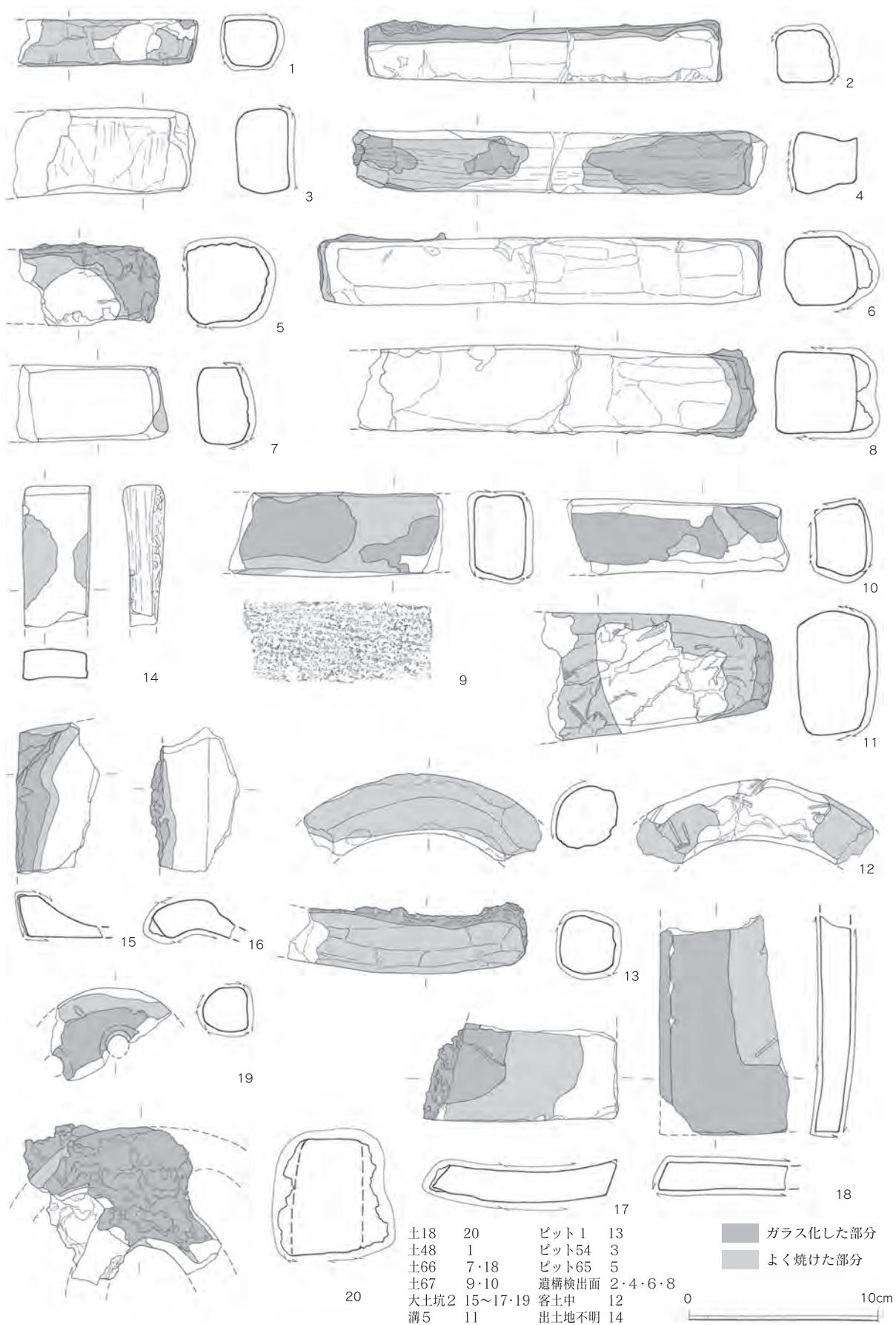
表40 4次調査西区出土土製品観察表2



第57図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土鑄造関係土製品実測図(24~29は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) () は復元値	胎の種類 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所 見		
						特記事項	推定産地	推定年代
土坑 8 A 57 図 9 図版 8	るつぼ	口径 4.6 器高 5.4	土師質土器 明灰色 砂分多い	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面に銅附着	在地	不明
土坑 90 57 図 10 図版 8	るつぼ	口径 4.8 器高 5.0	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形 内面と外面一部に銅附着	在地	不明
土坑 90 57 図 11 図版 8	るつぼ	口径 4.6 器高 4.3	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形 内面と外面一部に銅附着	在地	不明
土坑 90 57 図 12 図版 8	るつぼ	口径 4.9 器高 4.4	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形 内面と外面半分は銅附着	在地	不明
出土地不明 57 図 13 図版 8	るつぼ	口径 5.5 器高 4.2	土師質土器 完形のため胎土不明	内面ガラス化、外面ガラス化後の腐食のため器面観察できない	手捏ね	完形 内面に鉄錆附着	在地	不明
土坑 52 57 図 14 図版 8	るつぼ	口径 4.6 器高 4.2	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形 内外面に銅粒附着	在地	不明
土坑 52 57 図 15 図版 8	るつぼ	口径 4.4 器高 (4.0)	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか 附着物が多く、器高は不正確	手捏ね	完形 内面に銅附着	在地	不明
土坑 52 57 図 16 図版 8	るつぼ	口径 3.7 器高 (3.2)	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形 外面に銅粒、内面に銅附着	在地	不明
ビット 48 57 図 17 図版 8	鋳型か	口径 (16.0)	土師質土器 にぶい黄灰色	内面が高熱を受けて半ガラス化している 口唇部が平坦で、内面の附着物が上に延びていることから、上にもう1つ重ねていたことがわかる	不明	内面に銅粒附着	在地	不明
土坑 72 57 図 18 図版 8	鋳型か	—	土師質土器 混入物多い にぶい暗黄灰色	内面が高熱を受けて半ガラス化している	不明	径 20cm 前後と 考えられる	在地	不明
土坑 86 57 図 19	鋳型か	口径 (18.8)	土師質土器 にぶい黄灰色	内面が高熱を受けて半ガラス化している 口唇部が平坦で、内面の附着物が上に延びていることから、上にもう1つ重ねていたことがわかる	不明		在地	不明
土坑 67 57 図 20 図版 8	不明粘土塊	長さ 11.1 幅 12.4 厚さ 5.4	土師質土器 混入物少ない にぶい黄灰色	1面に火を受けた痕跡があり、裏面にはない 上下端は欠損 手捏ねで、調整して平坦面にしていない	手捏ね		在地	不明
大土坑 5 57 図 21 図版 8	不明粘土塊	長さ 7.4 幅 8.2 厚さ 4.5	土師質土器 混入物少ない にぶい黄灰色	1面に火を受けた痕跡があり、裏面にはない 手捏ねで、裏面は調整して平坦面にしていない	手捏ね		在地	不明
土坑 67 57 図 22	不明粘土塊	長さ 6.6 幅 4.3 高さ 5.5	土師質土器 混入物少ない 黄灰色	手捏ねで、火を受けた痕跡なし 脚や頭の欠損した土馬の可能性もある 表面はナデている	手捏ね		在地	不明
土坑 80 57 図 23	ファイゴの羽口	先端径 (4.3)	土師質土器 白色粒子を多く含む 暗黄橙灰色	外面と口縁部が半ガラス化	手捏ね		在地	不明
土坑 84 57 図 24 図版 8	ファイゴの羽口	長軸径 10.2 短軸径 7.9	土師質土器 白色粒子を多く含む にぶい灰白色	器面は剥落しているらしく、一部に煤が附着 楕円形で、孔も偏っている	手捏ね		在地	不明
土坑 84 57 図 25 図版 8	ファイゴの羽口	径 (12.4)	土師質土器 白色粒子を多く含む にぶい灰白色	赤化している方が先端部で、孔が広がっているのは竹を挿入するものだろう 不整形で、孔も偏っている	手捏ね		在地	不明
土坑 84 57 図 26 図版 8	ファイゴの羽口	先端径 (12.0)	土師質土器 白色粒子を多く含む にぶい灰白色	先端部片で、外面はガラス化している スラッグの附着が著しい 孔は偏っている	手捏ね		在地	不明
土坑 84 57 図 27 図版 8	ファイゴの羽口	先端径 (11.5)	土師質土器 白色粒子を多く含む にぶい灰白色	先端部片で、外面はガラス化している スラッグの附着が著しい 孔は偏っている	手捏ね		在地	不明
土坑 84 57 図 28 図版 8	ファイゴの羽口	径 (8.2)	土師質土器 混入物ほとんどない にぶい暗黄灰色	先端部に近い破片で外面はスラッグの附着あり	手捏ね		在地	不明
出土地不明 57 図 29	不明粘土塊	長さ 4.9 径 1.7	土師質土器 混入物少ない 黄灰色	手捏ねで、火を受けた痕跡なし 脚や頭の欠損した土馬の可能性もある 内面に孔らしい空間があるが、穿孔ではなく成粘土を丸めた結果の空間だろう	手捏ね		在地	不明
出土地不明 57 図 30 図版 8	土製砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ 5.5 幅 4.5 厚さ 1.1	土師質土器 混入物あり 黄灰色	土師質土器片の転用と思われる 両側面・下端面を成形し、表裏面を使用 下端は面をなさない	手捏ね		在地	不明
土坑 48 58 図 1	棒状土製品	長さ 9.2 幅 2.6 厚さ 2.9	土師質土器	2面が火を強く受け、残りの2面も火を受けている 赤化の弱い範囲がある	手捏ね		在地	不明
遺構検出面 58 図 2 図版 8	棒状土製品	長さ 18.7 幅 3.3 厚さ 3.1	土師質土器	下面が火を強く受け、上面はほとんど火を受けていない 赤化の範囲は少ない	手捏ね	完形	在地	不明
ビット 54 58 図 3	棒状土製品	長さ 9.6 幅 4.6 厚さ 2.9	土師質土器	下面が火を強く受け、上面は火を受けてない 赤化の範囲は少ない	手捏ね		在地	不明

表 41 4 次調査西区出土土製品観察表 3



第58図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土窯道具実測図(1/3)

折り返し整形であり、欠損部から断面を見る限り、内部は刀状に見える。断面形が扁平な蒲鋸形なので、刀子というより、打刀の刀装具としての小柄の可能性が高い。

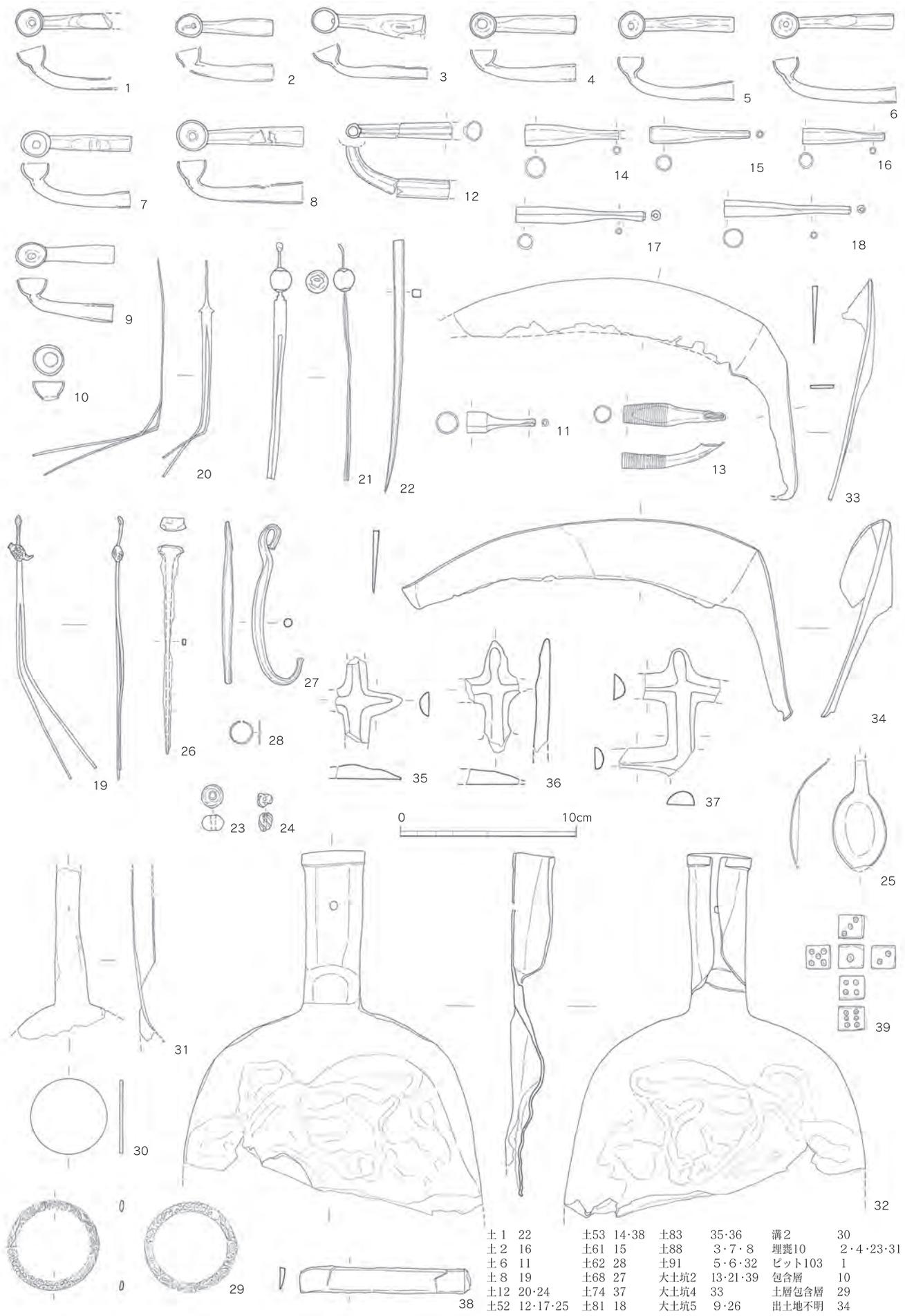
59図39はサイコロで、表面多孔質なので骨製の可能性もある。

60図12は寛永通宝で、径が小さいのは縁が摩耗したためである。60図34は2枚融着した寛永通宝で、表面側のものは裏面がわからないが字体から文銭と見られる。60図52の寛永通宝は錆が著しく分類できない。60図55は鉄銭が融着したもので、8枚から9枚が重なっている。

61図1・7・10・12、62図3～10・13～15、63図2・6・7は使用面が凸面になる手持ちの砥石で、63図

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所見		
						特記事項	推定産地	推定年代
遺構検出面 58図4 図版8	棒状土製品	長さ21.6 幅3.4 厚さ3.4	土師質土器	上面の両端が良く焼けており、中央部は赤化していない。その他の面も赤化していない。下面は整形時に下になっていたのか、平坦である。側面はオサエの窪みがある。	手捏ね	完形	在地	不明
ピット65 58図5	棒状土製品	長さ7.4 幅4.4 厚さ4.4	土師質土器	上面以外がよく焼けており、付着物多い。上面には赤化していない範囲がある。	手捏ね		在地	不明
遺構検出面 58図6 図版8	棒状土製品	長さ23.4 幅3.7 厚さ3.8	土師質土器	下面が火を強く受け、上面は火を受けてない。赤化の範囲は少ない。側面にナデによる平坦面あり。	手捏ね	完形	在地	不明
土坑66 58図7	棒状土製品	長さ7.9 幅4.0 厚さ2.9	土師質土器	下面が火を強く受け付着物あり、上面は火を受けてない。赤化の範囲は少ない。	手捏ね		在地	不明
遺構検出面 58図8 図版8	棒状土製品	長さ23.4 幅3.7 厚さ3.8	土師質土器	下面が火を強く受け付着物多い、上面は火を受けてない。赤化の範囲は少ない。側面にハケ状ナデあり。	手捏ね		在地	不明
土坑67 58図9	棒状土製品	長さ11.0 幅4.4 厚さ2.8	土師質土器	両端欠損。上下よく焼けている。上面・側面には成形時の窪みあり。下面は席のような痕跡がある。	手捏ね		在地	不明
土坑67 58図10	棒状土製品	長さ11.2 幅4.1 厚さ2.7	土師質土器	両端欠損。上下よく焼けている。上面・側面には成形時の窪みあり。下面は席のような痕跡がある。裏面に席のような痕跡がわずかにある。	手捏ね		在地	不明
溝5 58図11	棒状土製品	長さ12.0 幅6.6 厚さ4.0	土師質土器	下面が火を強く受け、上面も火を受けている。赤化していない範囲がある。	手捏ね		在地	不明
客土中 58図12	棒状土製品	長さ12.7 幅3.1 厚さ3.2	土師質土器	上面は赤化する程度で、下面は両端が赤化している。下面に平坦面があるが、成形時のものだろう。	手捏ね		在地	不明
ピット1 58図13	棒状土製品	長さ12.3 幅3.7 厚さ2.9	土師質土器	上面と1側面が赤化する程度で、下面と1側面は良く焼けている。	手捏ね		在地	不明
出土地不明 58図14	板状土製品	長さ7.6 幅3.6 厚さ2.3	土師質土器	土師質瓦片の転用で、瓦の側面が残っている。それと反対の側面は途中まで擦り切りし、残りを折断して、方形の板状を成している。下面がよく焼けており、側面と上面の端部が赤化している。	手捏ね		在地	不明
大土坑2 58図15	板状土製品	長さ7.8 幅4.3 厚さ2.3	土師質土器	土師質の焜炉口縁部片の転用で、口縁部分が火を強く受けている。	手捏ね		在地	不明
大土坑2 58図16 図版8	板状土製品	長さ7.5 幅4.6 厚さ1.8	土師質土器 金雲母多い	土師質の火入れ口縁部片の転用で、口縁部分が火を強く受けている。	手捏ね		在地	不明
大土坑2 58図17 図版8	板状土製品	長さ10.2 幅5.2 厚さ1.7	瓦質土器 精良	燻し瓦片の転用で、平瓦の側面部分が残っている。欠損面側がよくやけている。	手捏ね		在地	不明
土坑66 58図18	板状土製品	長さ11.6 幅6.8 厚さ1.5	土師質土器	土師質瓦片の転用で、上面の側縁が火を強く受け、被熱の弱い範囲との差が鮮明である。下面は赤化している。	手捏ね		在地	不明
大土坑2 58図19	サナ状土製品	長さ6.2 幅4.6 厚さ2.4	土師質土器	上下の平坦面が良く焼けている。孔の表面も赤化している。径10cm程度に復元できる。	手捏ね		在地	不明
土坑18 58図20 図版8	サナ状土製品	長さ8.6 幅8.3 厚さ(3.6)	土師質土器	表裏・側面が付着物がつくほど良く焼けており、孔表面は焼けが弱い。径14cm程度で中央に大きな孔があり、その周りに3つの孔が巡る形態に復元できる。	手捏ね		在地	不明

表42 4次調査西区出土窯道具観察表

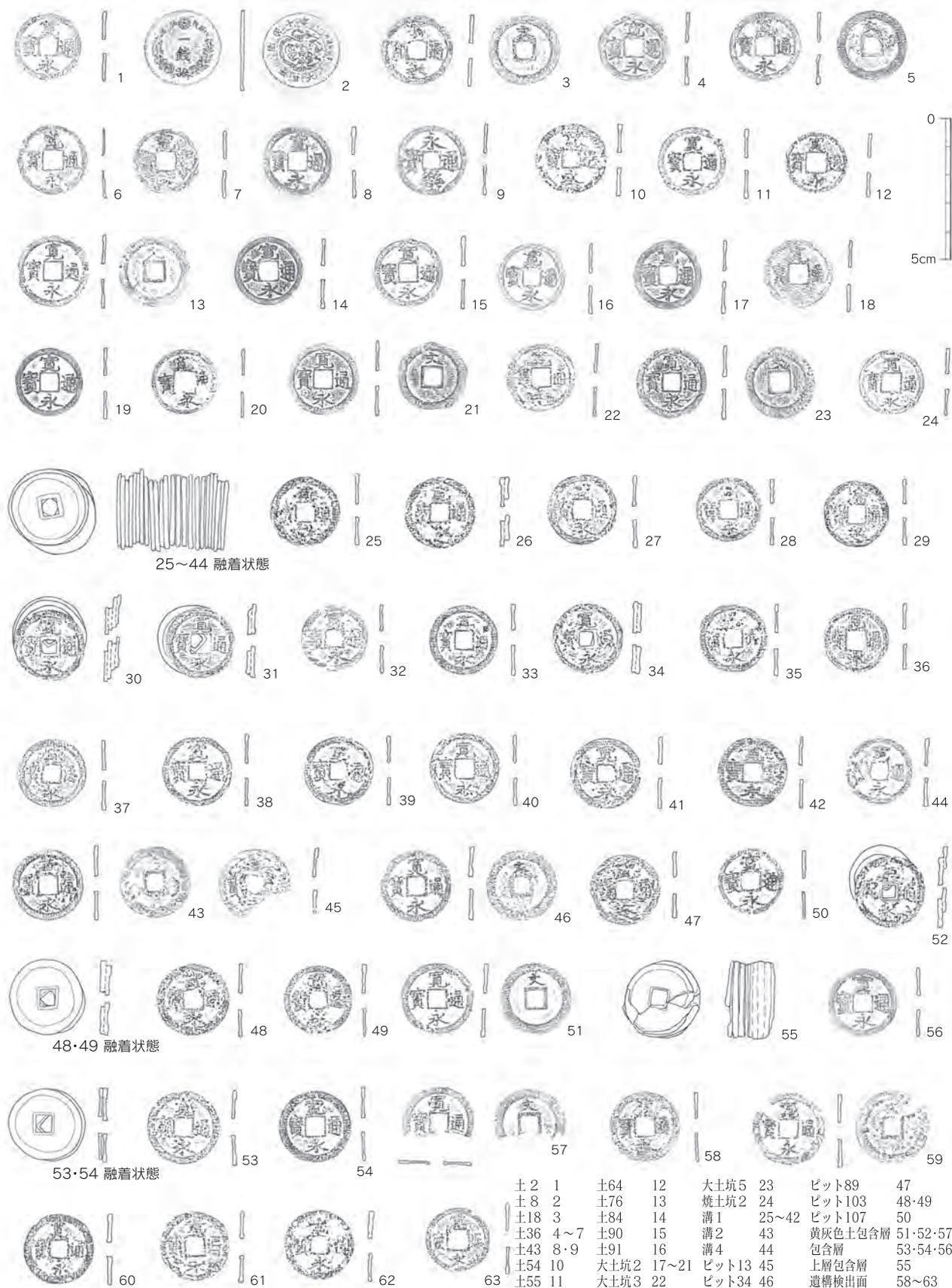


第59図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土金属器・骨角器実測図(1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元値	
図版番号	通称名		
ピット103 59図1 図版9	煙管雁首	長さ5.3 火皿径1.5 首部径0.8	銅製 錆が著しい
埋壘10 59図2 図版9	煙管雁首	長さ5.6 火皿径1.6 首部径0.8	銅製 首部下に打ち付けて開いた穴がある
土坑88 59図3	煙管雁首	長さ5.6 火皿径1.6 首部径0.8	真鍮製 金メッキ 首部は接合部で破損している
埋壘10 59図4 図版9	煙管雁首	長さ6.2 火皿径1.5 首部径1.0	真鍮製 側面に接合痕あり
土坑91 59図5 図版9	煙管雁首	長さ5.6 火皿径1.6 首部径0.8	真鍮製 金メッキ 首部に打ちつけた窪みあり
土坑91 59図6 図版9	煙管雁首	長さ7.0 火皿径1.6 首部径0.9	真鍮製 金メッキ 首部に打ちつけた窪みあり
土坑88 59図7 図版9	煙管雁首	長さ6.2 火皿径1.7 首部径0.8	銅製 首部に打ちつけた窪みあり
土坑88 59図8 図版9	煙管雁首	長さ5.6 火皿径1.6 首部径0.8	真鍮製 金メッキ 首部は打ちつけて破損している
大土坑5 59図9 図版9	煙管雁首	長さ6.0 火皿径1.9 首部径1.0	真鍮製 金メッキ 火皿内には煙草が残る
包含層 59図10 図版9	煙管雁首	長さ6.0 火皿径1.9 首部径1.0	真鍮製 金メッキが良く残っている
土坑6 59図11 図版9	煙管吸い口	長さ3.3 最大径1.2	真鍮製 金メッキあり 短いもの
土坑52 59図12	煙管雁首	長さ6.0 首部径1.1	銅製 火皿部欠損、首部上面に平坦面あり
大土坑2 59図13	煙管雁首	長さ5.9 首部径0.9	銅製 首部に多条沈線 火皿部はねじ切った痕跡
土坑53 59図14 図版9	煙管吸い口	長さ5.4 最大径1.4	銅製 先端部欠損
土坑61 59図15 図版9	煙管吸い口	長さ5.7 最大径1.0	真鍮製
土坑2 59図16 図版9	煙管吸い口	長さ4.9 最大径0.9	真鍮製 先端がやや開く
土坑52 59図17 図版9	煙管吸い口	長さ7.4 最大径0.9	真鍮製 先端が丸みをもって開く
土坑81 59図18 図版9	煙管吸い口	長さ7.2 最大径0.9	真鍮製 先端が丸みをもつ
土坑1 59図19 図版9	簪	長さ13.4 最大幅0.7 厚さ0.6	真鍮製 上端は耳掻きで、耳掻き部の飾りの間は 振っている 亀の飾り付き 金メッキ
土坑12 59図20 図版9	簪	長さ(13.3) 最大幅0.8 厚さ0.1	銅製 錆が著しい 珠があったと思われる

遺構名	器種	法量(cm)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元値	
図版番号	通称名		
大土坑2 59図21 図版9	簪	長さ13.8 最大幅0.7 厚さ0.1	銅製 上端は耳掻き 珠は龜甲で、穿孔部で銅板 が被せられている
土坑1 59図22	簪	長さ13.4 最大幅0.7 厚さ0.6	鹿角製 断面方形
埋壘10 59図23	簪の珠	径1.2 厚さ0.9	ガラス製か
土坑12 59図24	簪の珠	長さ1.0 幅0.9	緑色のガラスを振っている 59図20につくも のか
土坑52 59図25 図版9	匙	長さ6.3 幅3.0 厚さ0.1	銅製 鋳造品か 柄部欠損
大土坑5 59図26	釘	長さ12.0 最大幅1.5 厚さ0.7	頭部は折り曲げて叩いて広くしている
土坑68 59図27	自在鉤	長さ9.2 最大幅2.5 厚さ0.8	真鍮製 両端が同じ形態で中央部が太いので、本 来は引き出しの把手金具であったが、1端を丸め て鉤形にしたものか
土坑2 59図28	金輪	径1.3 太さ0.01	鉄製の非常に細い針金を正円に丸めている 用途 不明
上層包含層 59図29 図版9	金輪	径5.2 厚さ2.0	鉄製の環状の板で、表裏面に松竹梅文を陽刻した 鋳造品 一部を切断しているので、火鉢の把手だ らう
溝2 59図30	円板	径2.8 厚さ0.1	鉄製の円盤で表裏無文 用途不明
埋壘10 59図31	十能	把手部径1.1	銅製の板を丸くして柄に装着して上部の穿孔で釘 固定するもの
土坑91 59図32	十能	把手部長軸径 3.5 短軸径2.2	銅製の板を丸くして柄に装着して上部の穿孔で釘 固定するもの
大土坑4 59図33 図版9	鎌	長さ18.7 刃部長15.0 刃部幅3.3	鉄製で、先端と刃部を欠損している
出土地不明 59図34 図版9	鎌	長さ22.2 刃部長17.4 刃部幅4.3	鉄製で、先端は方形で尖っていない
土坑83 59図35	不明鉄製品	長さ4.7 幅3.7 厚さ0.7	鉄製の鋳造品で、格子状 断面蒲鉾状
土坑83 59図36 図版9	不明鉄製品	長さ6.3 幅3.2 厚さ0.8	鉄製の鋳造品で、格子状 断面蒲鉾状
土坑74 59図37 図版9	不明鉄製品	長さ7.2 幅4.3 厚さ0.8	鉄製の鋳造品で、格子状 断面蒲鉾状
土坑53 59図38	刀装具	長さ9.4 幅1.4 厚さ0.4	銅製 断面細長い三角形なので、小柄か 上面は 丸みがあり、下面は平坦 欠損部に鉄材があるの で、これが刃になるものだろう
大土坑2 59図39 図版9	サイコロ	長さ1.5 幅1.5 厚さ1.5	鹿角製 完形

表 43 4次調査西区出土金属製品・ガラス・鹿角製品観察表



第60図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土銭実測図(1/2)

遺構名 挿図番号	銭名 分類名	法量(cm)		特 徴
		径	孔径	
土坑2 60図1 図版9	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		「宝」のハが反っているのが吉田銭(1637年初鑄)か
土坑8 60図2	1銭銅貨	2.3 —		明治10(1896)年銘
土坑18 60図3	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		1668年初鑄
土坑36 60図4 図版9	寛永通宝 古寛永	2.5 0.6		「宝」のハが反っているのが吉田銭(1637年初鑄)か
土坑36 60図5 図版9	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		1668年初鑄
土坑36 60図6 図版9	寛永通宝 新寛永 マ「通」銭	2.4 0.7		1726年初鑄 摩耗していて孔もあく
土坑36 60図7	寛永通宝	2.2 0.6		鑄が著しく詳細不明
土坑43 60図8	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		表面はやや摩減、裏は摩減 「永」の字体から竹田銭か
土坑43 60図9 図版9	永楽通宝	2.4 0.6		
土坑54 60図10	寛永通宝 古寛永	2.5 0.5		「永」の字体から松本銭(1637年初鑄)か
土坑55 60図11	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		「通」の字が縁から離れていることから岡山銭 (1637年初鑄)か
土坑64 60図12	寛永通宝 新寛永	2.1 0.7		外縁摩耗 「永」・「通」の字体から亀戸(四ツ宝)銭 (1708年初鑄)
土坑76 60図13 図版9	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		摩耗なし 1668年初鑄
土坑84 60図14 図版9	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		「永」の字体から鳥越銭(1656年初鑄)か
土坑90 60図15	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		「永」の字体から竹田銭か
土坑91 60図16	寛永通宝 古寛永	2.3 0.5		「通」の字体から草橋場(御蔵)銭(1636年初鑄)
大土坑2 60図17	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		「永」・「通」の字体から鳥越銭(1656年初鑄)か
大土坑2 60図18	寛永通宝 新寛永 マ「通」銭	2.4 0.6		1726年初鑄
大土坑2 60図19	寛永通宝 古寛永	2.3 0.6		「永」・「宝」のハの字体から水戸銭(1637年初鑄)か
大土坑2 60図20	寛永通宝 新寛永	2.4 0.7		文字が孔に対して左に傾いている 鑄上がりが悪い 孔が大きい
大土坑2 60図21	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		裏面に范傷らしいものあり 1668年初鑄
大土坑3 60図22	寛永通宝 新寛永 マ「通」銭	2.4 0.6		文字が全体に左にずれている 1726年初鑄
大土坑5 60図23 図版9	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		1668年初鑄
焼土坑2 60図24	寛永通宝 新寛永	2.3 0.6		「寛」の足の跳ね上げ方が異なるが、「永」の字体から 萩原銭(1700年初鑄)
溝1 No.1 60図25	寛永通宝 新寛永 マ「通」銭	2.4 0.6		1726年初鑄

遺構名 挿図番号	銭名 分類名	法量(cm)		特 徴
		径	孔径	
溝1 No.2・3 60図26	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		2枚融着で、もう1枚は文字面側が張り付いている ので不明 少なくとも文銭ではない
溝1 No.4 60図27	寛永通宝 新寛永	2.4 0.6		1726年初鑄
溝1 No.5 60図28	寛永通宝 新寛永	2.3 0.6		鑄が著しいが元文期亀戸銭(1737年初鑄)か
溝1 No.6 60図29	寛永通宝 新寛永	2.3 0.6		鑄が著しく詳細不明
溝1 No.7～10 60図30表	寛永通宝 古寛永	2.5 0.5		「通」の字体から草橋場(御蔵)銭(1636年初鑄)
溝1 No.7～10 60図30裏	寛永通宝 不明	2.5 0.4		裏面が露出しているため、詳細不明
溝1 No.11 60図31表	寛永通宝 新寛永	2.4 0.5		2枚融着で、もう1枚は文字面側が張り付いている ので不明 加鳥銭(1738年初鑄)か
溝1 No.12 60図31裏	寛永通宝 不明	2.7 0.4		裏面が露出しているため、詳細不明
溝1 No.13 60図32	寛永通宝 古寛永	2.3 0.5		「永」の字体から三河吉田銭(1637年初鑄)か
溝1 No.14 60図33	寛永通宝 新寛永 マ「通」銭	2.4 0.6		1726年初鑄
溝1 No.15 60図34表	寛永通宝 文銭	2.5 0.5		1668年初鑄 2枚融着で、もう1枚は文字面側が 張り付いているため不明 少なくとも文銭ではない
溝1 No.16 60図34裏	寛永通宝 不明	2.5 0.5		裏面が露出しているため、詳細不明
溝1 No.17 60図35	寛永通宝 新寛永 マ「通」銭	2.4 0.6		1726年初鑄
溝1 No.18 60図36	寛永通宝 新寛永	2.3 0.7		外縁摩耗 「永」・「通」の字体から亀戸(四ツ宝)銭 (1708年初鑄)
溝1 No.19 60図37	寛永通宝 新寛永	2.4 0.6		「永」・「通」の字体から京七条(萩原)銭(1700年初鑄)
溝1 No.20 60図38	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		「永」・「宝」の字体から松本銭(1637年初鑄)
溝1 No.21 60図39	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		「宝」のハが反っているのが吉田銭(1637年初鑄)か
溝1 No.22 60図40	寛永通宝 新寛永 マ「通」銭	2.5 0.6		1726年初鑄
溝1 No.23 60図41	寛永通宝 古寛永	2.5 0.6		「寛」の足の字体から萩藩所鑄銭(1637年初鑄)か
溝1 60図42	寛永通宝 古寛永	2.5 0.6		「寛」の足の字体から萩藩所鑄銭(1637年初鑄)か
溝2 60図43	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		1668年初鑄
溝4 60図44	寛永通宝 古寛永	2.3 0.6		「永」・「通」の字体から鳥越銭(1656年初鑄)か
ビット13 60図45	寛永通宝 古寛永	2.3 0.6		鑄が著しく詳細不明
ビット34 60図46	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		1668年初鑄
ビット89 60図47	寛永通宝	2.5 0.6		表面が摩減している 鑄が著しく詳細不明

表 44 4次調査西区出土銭観察表1



第61図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土石製品実測図1(1/3)

2・6は先端部分が2面に別れている。使用面が凸面なのは凹面の対象物に使用するからだろう。したがって、刃を研ぐためのものではなく、曲面を磨く研磨具なのではなかろうか。2面に分かれるものは凸面の1部だけを集中して使用した結果であろう。本遺跡からは円形の鋳型片が出土していることから、こうした鋳型から取り出した茶釜などの製品の内面を磨くためのものではないだろうか。63図6は一見すると板状鉄斧を模倣した磨製石斧に見えるが、意図的に先端部を体部幅より狭くしており、軟質の砂岩製であることからこれも手持ち砥石と判断した。63図13も同じような手持ち砥石の可能性があるが、片刃と見られることと、先端に欠損があることから石斧とした。

63図9は滑石製の魚網錘の鋳型である。型合わせ鋳型の1枚で、錘の穿孔部分には孔を形成するための真土をおく沈線がある。上面には湯口があり、そこから表面の上位部分が熱のため赤変している。表面の左右両端に刺突があるが、これは型合わせ時のズレを防ぐための軸受け孔ではないだろうか。表面には緑青も鉄錆も付着していないことから、鋳出した製品は真鍮製であろう。下面にはガス抜き孔がある。裏面や側面には紐掛かりの沈線はないが、緊縛のため摩滅して角が窪む部分がある。

64図4・5は柱状の石製品で、どの面にも文字などの印刻がない。下部は欠損しているので、本来はもっと長かったのではないだろうか。1次調査で同様な大きさの石柱片が出土したが、それには梵字が掘られていた。この2点には文字はなく、墓石の可能性は低い。欠損部に臍孔があれば旗を立てる際の支柱や、標識としての機能が想定される。大川市小保地区の藩境石にも似ている。本遺跡には藩境木があるので、藩境木間を埋めるように何本も並べて建てられていたものだったのかもしれない。

65図1は小型の漆椀で、立ち上がりが急なので、蓋の可能性もあるが、柶文から身とした。65図5・17は高台が外されて底面中央が穿孔されているので、再利用されたものであるが、用途はわからない。

造構名 挿図番号 図版番号	銭名 分類名	法量(cm)		特 徴
		径	孔径	
ビット103No.3 60図48	寛永通宝	2.5 0.6		49と融着 錆が著しく詳細不明
ビット103No.4 60図49	寛永通宝 古寛永	2.5 0.6		48と融着 錆が著しく詳細不明
ビット107 60図50	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		「宝」の足が「入」であるから沓谷銭(1656年初鑄) 裏面は摩滅している
黄灰色土包含層 60図51	寛永通宝 文銭	2.6 0.6		1668年初鑄
黄灰色土包含層 60図52表	寛永通宝 古寛永	2.6 0.6		2枚融着で、もう1枚は文字面側が張り付いているので不明 少なくとも文銭ではない
黄灰色土包含層 60図52裏 図版9	寛永通宝 不明	2.4 0.6		裏面が露出しているので、詳細不明
包含層 60図53	寛永通宝 新寛永	2.5 0.6		やや反る 54と融着 「永」「通」の字体から亀戸銭(1714年初鑄)
包含層 60図54	寛永通宝 古寛永	2.5 0.6		53と融着 黒地が残る 「永」の字体から京建仁寺銭(1636年初鑄)
上層包含層 60図55 図版9	寛永通宝 8~9枚融着 鉄銭	2.4 0.5		1739年初鑄 錆が著しく詳細不明

造構名 挿図番号 図版番号	銭名 分類名	法量(cm)		特 徴
		径	孔径	
包含層 60図56	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6		「宝」のハが反っているので吉田銭(1633年初鑄)か
黄灰色土包含層 60図57	寛永通宝 文銭	2.6 0.6		鑄上り良い 銅質良い 1668年初鑄
遺構検出面 60図58	寛永通宝 新寛永	2.5 0.7		1726年初鑄 裏面の孔の周りが摩滅している 銅質良い
遺構検出面 60図59	寛永通宝 文銭	2.5 0.6		1668年初鑄
遺構検出面 60図60 図版9	寛永通宝 古寛永 分類不明	2.5 0.6		「通」のコが右にずれ、寛の足が左にずれている 「永」の点が長い
遺構検出面No.1 60図61	寛永通宝 古寛永	2.5 0.6		No.2と融着して出土 「永」の字体から京建仁寺銭(1636年初鑄)
遺構検出面No.2 60図62 図版9	寛永通宝 古寛永	2.5 0.6		No.1と融着して出土 「永」の字体から竹田銭(1637年初鑄)か
遺構検出面 60図63	寛永通宝 古寛永	2.2 0.7		「永」の字体から竹田銭(1637年初鑄)か

表 45 4次調査西区出土銅銭観察表2



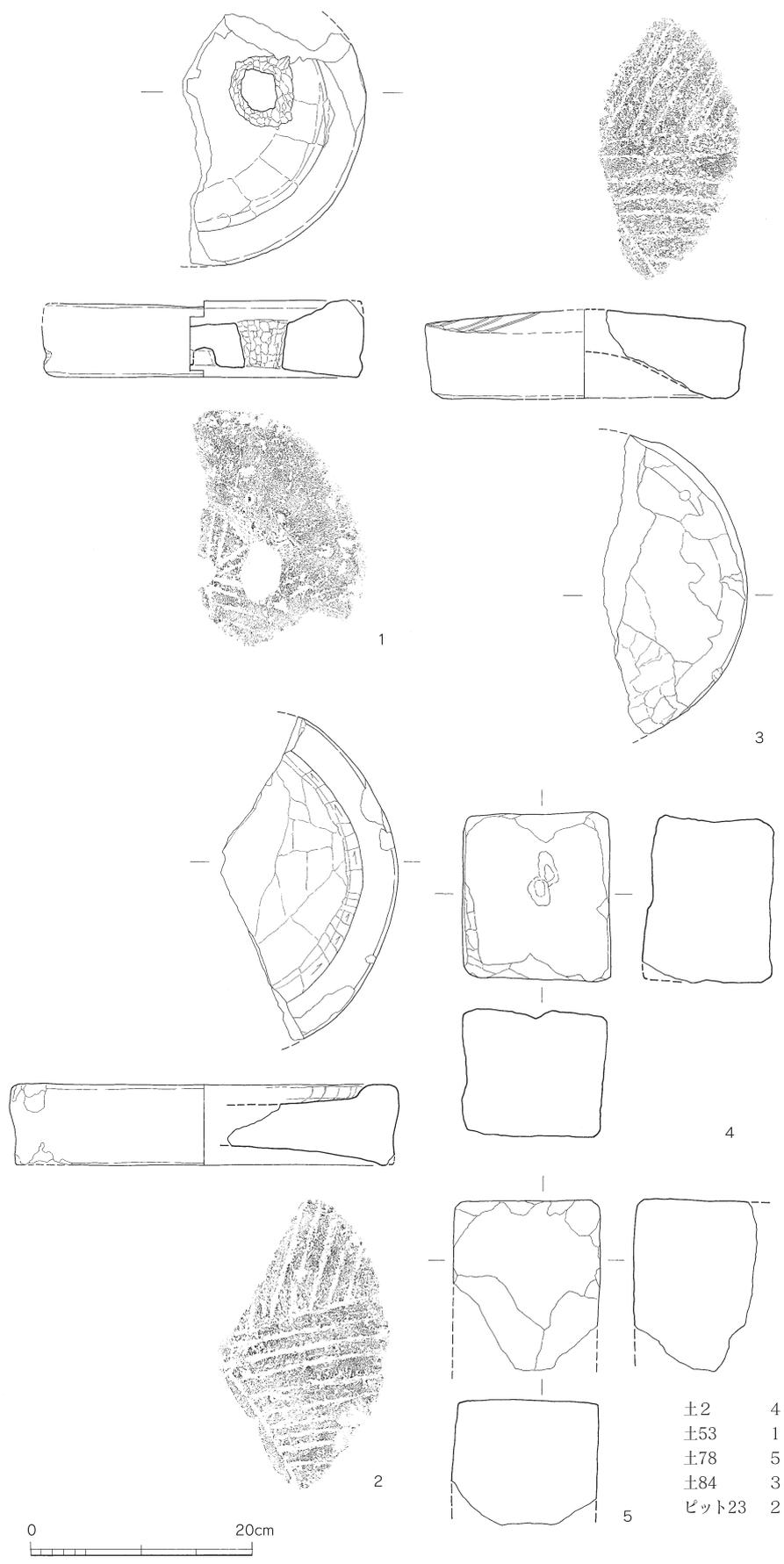
第62図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土石製品実測図2(1/3)

66図14は両端が突出するように中央部を削ったものである。中央部の幅が均一であり、削り痕を残していることから、打ち込みの留め具の可能性はある。66図16は筭であろう。上端はヘラ状に丸く薄く加工しており、先端はケズリ面が少ないが、尖らせている。先端に付着物はない。17は柄だが、柄内の挿し込み孔の形状がわからないため、図化していない。孔が片側に寄っているので、包丁か小刀の柄だろう。

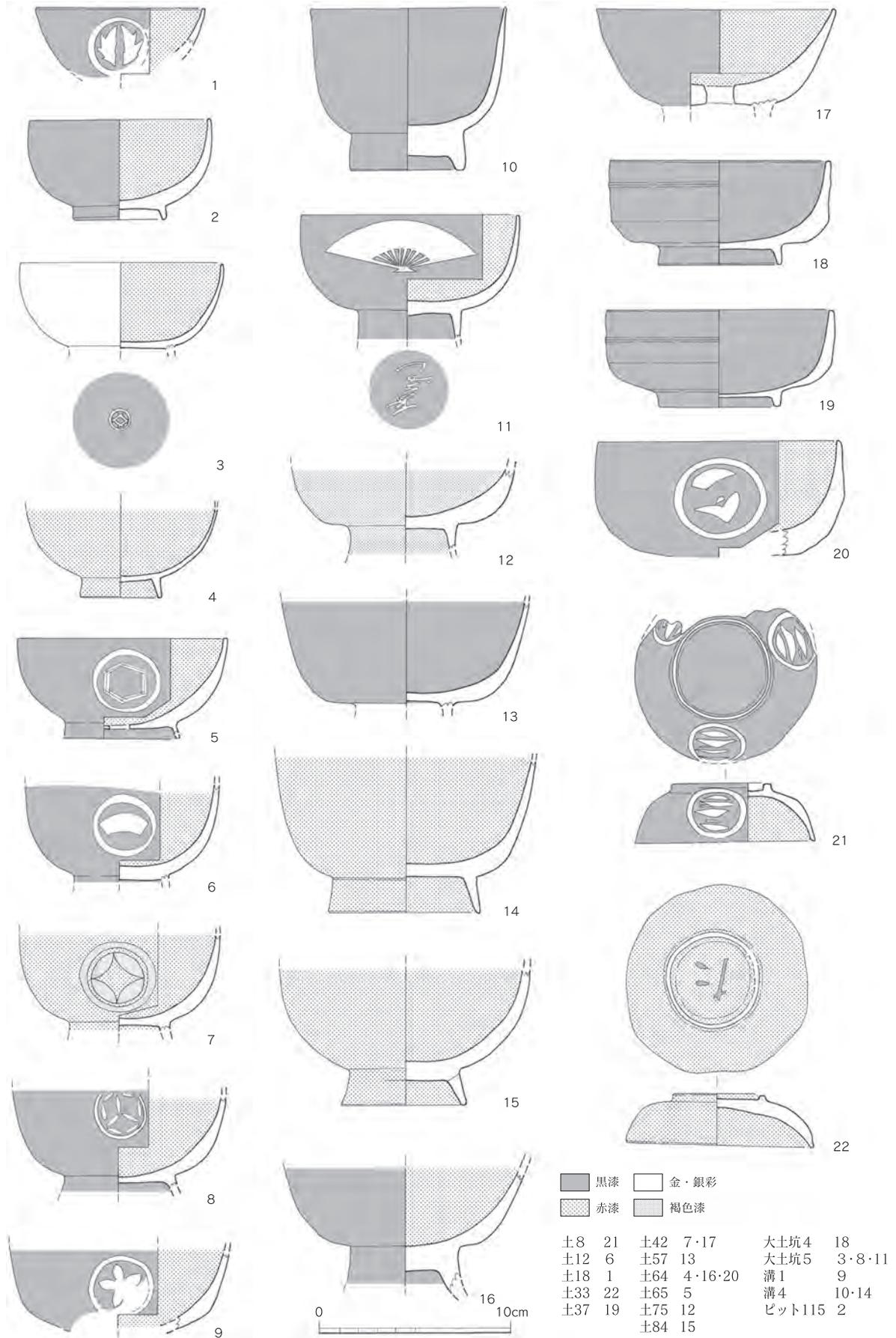
68図2の板材の下端に入る短い斜めの傷の連続は、箱型に組み合わせた板材が斜めの方向に剥がれた時に付いたものだろう。68図7は偏六角形の板材ではないだろうか。木釘孔が、縁に廻らないことやその位置からみて、その上には4つの板材が方柱状に組まれていた可能性がある。



第 63 図 矢加部町屋敷遺跡 4 次調査西区出土石製品実測図 3 (1/3)



第64図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土石製品実測図4(1/6)



第65図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図1(1/3)

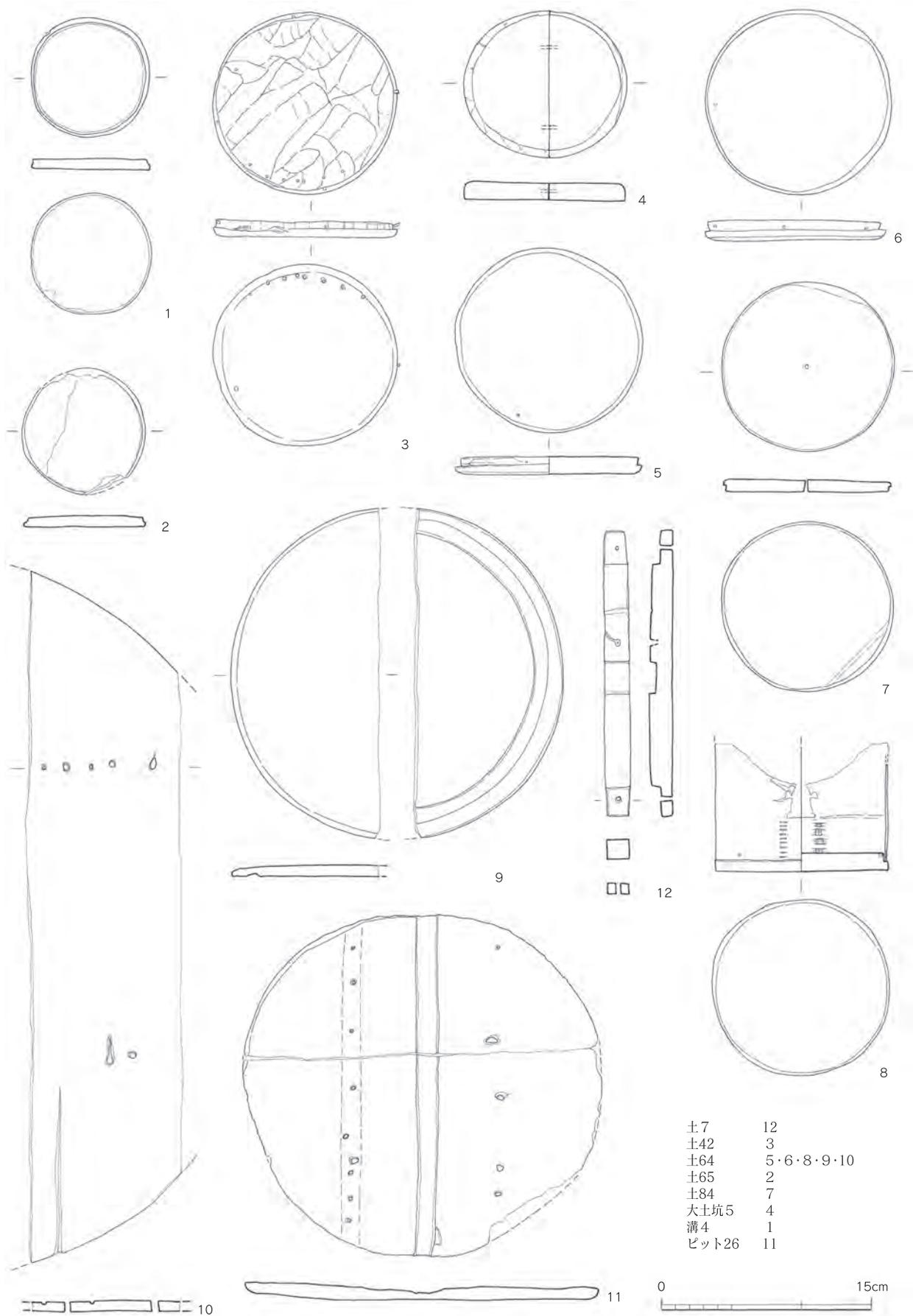


第66図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図2(1/3)

遺構名	器種	法量 (cm・g)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元値	
図版番号	通称名		
土坑 6 61図1 図版10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ6.3 幅3.8 厚さ36重さ110.0	天草石 使用面はほぼ平坦
土坑30 61図2 図版10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ7.8 幅4.6 厚さ33重さ151.7	天草石 使用面にやや窪みあり
土坑51 61図3 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ4.3 幅3.6 厚さ0.9重さ21.4	頁岩 使用面はほぼ平坦 61図9とは別個体
土坑51 61図4 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ4.0 幅4.2 厚さ1.5重さ43.5	天草石 使用面はほぼ平坦
土坑51 61図5 図版10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ7.5 幅7.1 厚さ4.9重さ412.1	天草石 表面にやや窪みあり
土坑52 61図6 図版10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ6.8 幅6.9 厚さ2.2重さ113.6	天草石 表裏面にやや窪みあり
土坑53 61図7 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ8.3 幅5.8 厚さ5.4重さ329.9	天草石 使用面にやや丸みあり ほぼ完形
土坑52 61図8 図版10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ13.9 幅6.8 厚さ2.8重さ354.1	天草石 表面にやや窪みあり
土坑63 61図9 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ9.0 幅5.0 厚さ0.9重さ82.1	頁岩 使用面は平坦 61図3とは別個体
土坑68 61図10 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.0 幅6.1 厚さ1.5重さ122.3	頁岩 使用面は平坦
土坑81 61図11 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.0 幅4.2 厚さ3.8重さ165.0	天草石 表面の2面の使用面はそれぞれ平坦
土坑81 61図12 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ12.1 幅7.1 厚さ4.0重さ481.7	天草石 使用面にやや丸みあり ほぼ完形
土坑88 61図13 図版10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ8.0 幅6.5 厚さ5.3重さ470.1	天草石 表面の使用による窪みは再利用後のもの
大土坑5 62図1 図版10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ7.2 幅6.7 厚さ2.5重さ150.9	天草石 表面にやや窪みあり
大土坑5 62図2 図版10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ10.2 幅6.2 厚さ7.4重さ628.9	天草石 表面にやや窪みあり
大土坑6 62図3 図版10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ7.2 幅6.7 厚さ2.5重さ224.0	天草石 ほぼ完形 使用面にやや丸みあり
大土坑6 62図4 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ6.0 幅4.7 厚さ1.7重さ91.3	頁岩 使用面にやや丸みあり
埋壘10 62図5 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ3.2 幅2.1 厚さ2.1重さ18.6	天草石 表面にのみ丸みあり
埋壘10 62図6 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ5.0 幅4.8 厚さ1.5重さ57.6	頁岩 使用面に丸みあり 緑灰色
埋壘10 62図7 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ6.8 幅4.2 厚さ1.8重さ68.5	天草石 使用面に丸みあり ほぼ完形
埋壘10 62図8 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ4.7 幅5.2 厚さ1.6重さ57.4	天草石 使用面に丸みあり ほぼ完形
埋壘10 62図9 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ5.8 幅5.4 厚さ2.8重さ125.5	天草石 使用面に丸みあり
埋壘10 62図10 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ8.8 幅5.1 厚さ3.3重さ167.2	天草石 使用面に丸みあり ほぼ完形
井戸4 62図11 図版10	砥石 粗砥 置き砥石	長さ7.3 幅9.5 厚さ5.4重さ459.0	砂石 表面の使用による窪みは再利用後のもの
溝7 62図12 図版10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ12.3 幅6.5 厚さ3.8重さ442.0	頁岩 完形 表面の使用による窪みは再利用後のもの 緑灰色
ピット13 62図13 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ5.8 幅4.5 厚さ1.7重さ73.9	頁岩 表面の使用による窪みは再利用後のもの

遺構名	器種	法量 (cm・g)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元値	
図版番号	通称名		
ピット23 62図14 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ6.2 幅3.1 厚さ1.5重さ36.4	天草石 使用面に丸みあり ほぼ完形
ピット26 62図15 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ4.5 幅2.5 厚さ1.7重さ25.2	天草石 使用面に丸みあり
ピット70 62図16 図版10	砥石 粗砥 置き砥石	長さ8.6 幅5.9 厚さ4.8重さ427.0	砂石 使用面に窪みあり 下半欠損後整形して再利用
ピット93 62図17 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ9.3 幅6.0 厚さ2.0重さ127.1	天草石 使用面に丸みあり 欠損した置き砥石を整形して再利用
ピット107 62図18 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ9.3 幅6.0 厚さ2.0重さ220.3	天草石 使用面に丸みあり ほぼ完形 上橋面は整形面
落ち込み1 63図1 図版11	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ10.1 幅7.0 厚さ7.0重さ644.3	天草石 完形 表面の使用による窪みは再利用後のもの
攪乱 63図2 図版11	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ9.4 幅4.6 厚さ1.7重さ73.1	天草石 上面は2つの平坦面がある
攪乱 63図3 図版11	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ6.8 幅5.9 厚さ1.7重さ117.6	天草石
遺構検出面 63図4 図版11	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ5.7 幅4.2 厚さ1.3重さ50.1	頁岩 灰色 表面は使用により2つの平坦面をもつ
黄灰色土包含層 63図5 図版11	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ8.1 幅4.9 厚さ1.4重さ83.6	頁岩 灰色 表面の使用による窪みは再利用後のもの
黄灰色土包含層 63図6 図版11	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ8.1 幅4.9 厚さ1.4重さ318.1	砂石 使用面に丸みあり ほぼ完形
出土地不明 63図7 図版11	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ6.0 幅6.4 厚さ2.7重さ144.3	天草石 表面に窪み、裏面に丸みあり
出土地不明 63図8 図版11	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ10.0 幅5.2 厚さ4.1重さ336.8	天草石 面取りした柱状をなす
上層包含層 63図9 図版11	鋳型	長さ14.5 幅7.0 厚さ4.1重さ816.3	滑石 ほぼ完形 湯口に変色があることから使用したことがわかる
土坑12B 63図10 図版11	紡錘車	径3.9 厚さ0.8 重さ14.5	滑石 ほぼ完形
土坑90 63図11 図版11	石庖丁	長さ10.0 幅7.5 厚さ0.8重さ73.6	片岩
土坑19 63図12 図版11	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ11.1 幅3.4 厚さ1.9重さ87.9	頁岩 暗灰色
土坑49 63図13 図版11	扁平片刃石斧	長さ13.0 幅4.3 厚さ(2.8)重さ120.2	片岩
土坑53 64図1	上白	径(29.0) 高さ7.0 重さ2920	凝灰岩質 摺目は摩滅 多孔質
ピット23 64図2	上白	径(35.0) 高さ7.4 重さ3680	凝灰岩質 多孔質
土坑84 64図3	下白	径(29.0) 高さ(8.0) 重さ2880	凝灰岩質 摩滅少ない 白灰色
土坑2 64図4 図版11	不明石製品	長さ15.1 幅13.1 高さ11.5重さ492.0	凝灰岩質 下端面は欠損でないか にぶい暗灰色に変色
土坑78 64図5 図版11	不明石製品	長さ15.3 幅13.1 高さ(15.3)重さ335.0	凝灰岩質 にぶい暗灰色に変色 下端面は欠損 側面に線刻があるようだが不明
土坑18 65図1	小椀	径(8.9)	外面黒漆 内面赤漆 歪み大きく、復元径には難あり 柘葉文の家紋文銀彩
ピット115 65図2	椀	口径(9.4) 高台径(5.0) 器高5.3	外面黒漆 内面赤漆 無文

表 46 4次調査西区出土石・木製品観察表



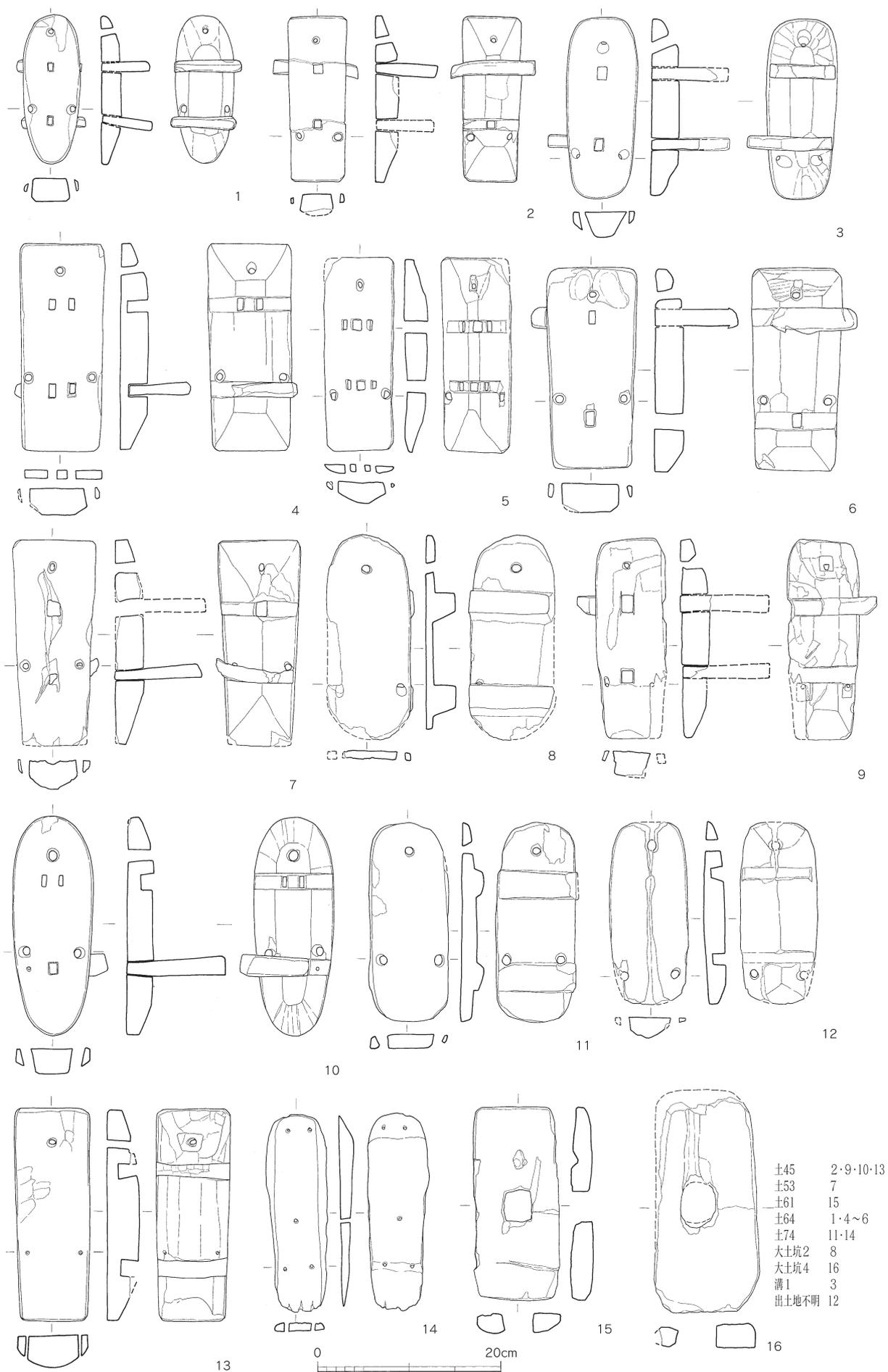
- 土7 12
- 土42 3
- 土64 5・6・8・9・10
- 土65 2
- 土84 7
- 大土坑5 4
- 溝4 1
- ピット26 11

第67図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図3(1/4)

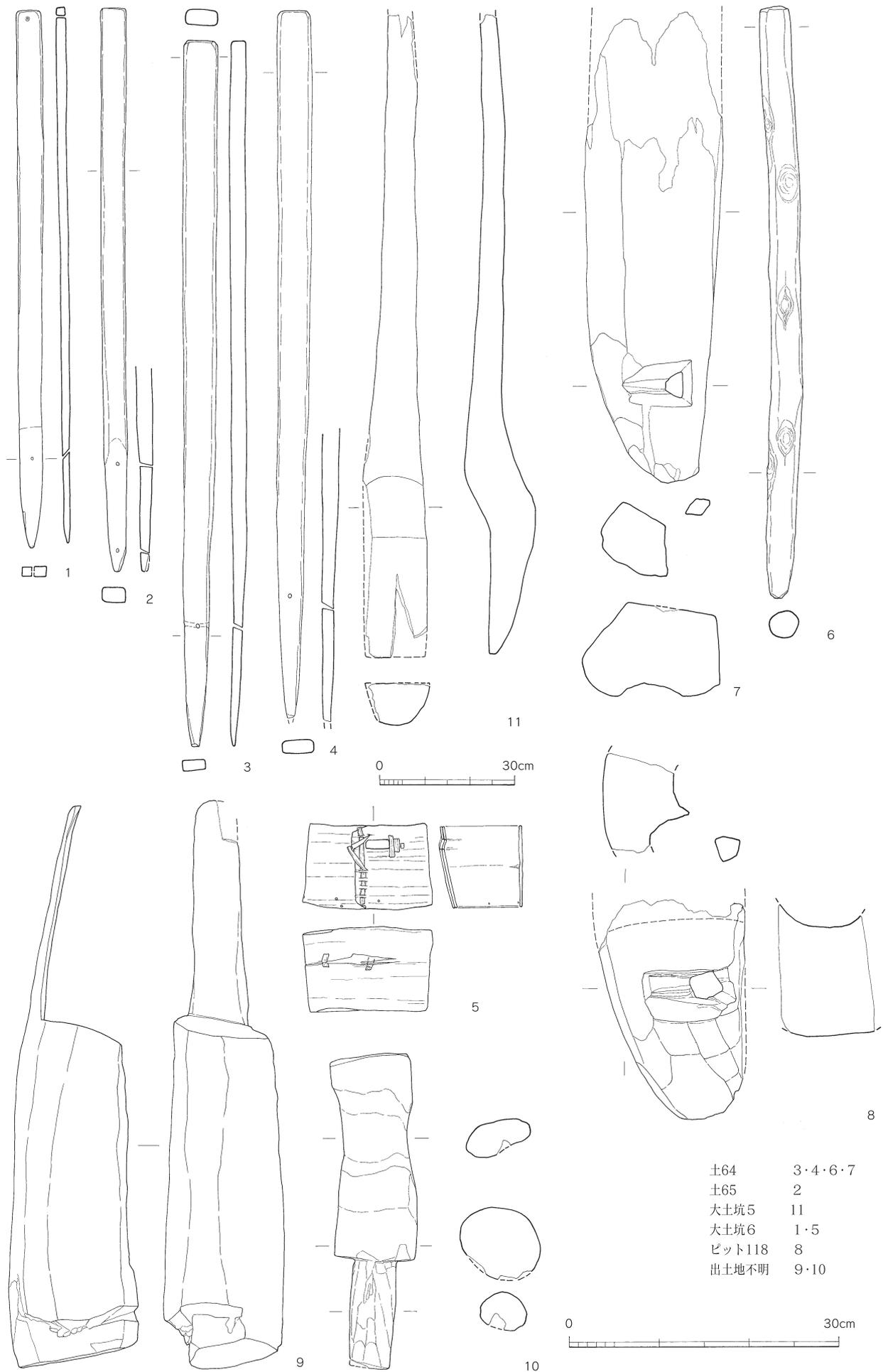
遺構名	器種	法量 (cm)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元値	
図版番号	通称名		
大土坑5 65図3	椀 腰丸形	口径(10.6)	外面暗褐色漆 内面赤漆 歪み大きく、復元径には難あり 裏銘に赤漆の菱形文
土坑64 65図4	椀 腰丸形	高台径4.2	内外赤漆 径の3/4残っており、歪みも少ない
土坑65 65図5	椀 腰丸形	口径(10.6)	外面黒漆、内面赤漆で、外面は金彩で円の中に6 角文 高台部は平たく削られており、底部に穿孔 している
土坑12 65図6	椀 腰丸形	最大径(10.2)	外面黒漆、内面赤漆で、外面は銀彩で円の中に弧 形の帯文
土坑42 65図7	椀 腰丸形	最大径(10.4)	内外赤漆 外面は、金彩で2重円の中に星形文
大土坑5 65図8	椀 腰丸形	最大径(11.2)	外面黒漆 内面赤漆 外面は、金彩で環状の葉文の中に三つ葉文
溝1 65図9	椀 腰丸形	最大径(11.6)	外面黒漆 内面赤漆 外面は金彩で円の中に5弁花文
溝4 65図10	椀 壺形	最大径(11.6)	内外黒漆 無文
大土坑5 65図11	椀 腰丸形	口径(11.6) 高台径5.8	外面黒漆 内面赤漆 外面は銀彩で扇文 裏銘に赤漆で、「竹口虫」
土坑75 65図12	椀 腰丸形	最大径(11.8)	内外赤漆 無文 やや歪みあり
土坑57 65図13	椀 腰丸形	最大径(12.9)	内外黒漆 無文 高台が取り外されて平坦になっているが穿孔はない
溝4 65図14	椀 腰丸形	最大径(11.8) 高台径5.8	内外赤漆 無文 高台と体部の間に沈線状に成型痕が残る
土坑84 65図15	椀 腰丸形	最大径(11.9) 高台径6.7	内外赤漆 無文 乾燥による歪みがあるため、復元して実測している
土坑64 65図16	椀 壺形	最大径(12.3)	外面黒漆 内面赤漆 無文 口縁部の歪み大きく、傾きは復元
土坑42 65図17 図版11	椀 腰丸形	口径13.2	外面黒漆 内面赤漆 無文 高台が取り外されて平坦になっているが穿孔はない
土坑37 65図18	椀 壺形	口径(11.6) 高台径(6.4) 器高5.5	内外黒漆 無文 歪みのため一部復元して実測
大土坑4 65図19	椀 平形	口径(11.6) 高台径(6.4) 器高5.5	木製 内外黒漆 無文 歪みのため一部復元して実測
土坑64 65図20	椀 壺形	口径(11.6)	外面黒漆 内面赤漆 内面は漆膜の剥落が著しい 外面は金彩で、円に不明モチーフ
土坑8 65図21	蓋 腰丸形	裾径9.4 つまみ径5.2 器高3.3	外面黒漆 内面赤漆 外面は、金彩で円に不明モチーフ 歪みは少ない
土坑33 65図22	蓋 腰丸形	裾径9.4 つまみ径5.2 器高3.3	内外赤漆 外面天井部に黒漆で「た」 歪みは少ない
土坑11 66図1	小椀蓋 壺形	つまみ部径(4.7)	内外黒漆 無文 歪みなし 径が小さいので蓋にしたが、小型の身 の可能性もある
土坑57 66図2	椀蓋 文字腰椀	つまみ部径5.9 器高5.0 裾部径11.2	内外黒漆 無文 歪み小さい ほぼ完形
土坑4 66図3	椀蓋 平椀か端反形	つまみ部径(5.4)	内外赤漆 無文
土坑90 66図4	椀蓋 腰丸形	つまみ部径5.8 器高5.2 裾部径11.9	内外赤漆 無文 高台が低いので蓋にしたが、身の可能性もある
出土地不明 66図5	椀蓋 腰丸硬い	つまみ部径(5.6)	外面黒漆 内面赤漆 外面に、金彩で円に三つ葉に草の家紋文
土坑68 66図6	椀蓋 文字腰形	つまみ部径5.4	内外黒漆 無文 歪みなし

遺構名	器種	法量 (cm)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元値	
図版番号	通称名		
土坑64 66図7	椀蓋 端反形	つまみ部径4.5 器高5.0 裾部径11.5	内外赤漆 無文
土坑75 66図8	椀蓋 端反形	—	内外面褐色の漆 無文
土坑84 66図9	椀蓋 端反形	つまみ部径(5.8) 器高(5.4) 裾部径(14.0)	内外赤漆 歪みで傾き不鮮明
土坑64 66図10	小椀蓋 壺椀	最大径(12.0)	内外赤漆 外面天井部に黒漆で「の」が入る
土坑53 66図11	杯	高台径3.2	内外赤漆 内面に金・銀彩と褐色の漆で神社と帆 掛船を描く
土坑64 66図12	杯	口径(11.2) 高台径(4.4) 器高2.5	内外赤漆 内面に金彩の輪郭の中を黒彩塗る草葉 文
土坑84 66図13	杯	口径(14.2) 高台径(4.8) 器高4.0	内外赤漆 内面に金彩で流水文と花文
出土地不明 66図14	不明木製品	長さ17.4 幅4.1 厚さ4.3	木製 完形 中央は粗いケズリ痕が残る 留め具の可能性もある
土坑61 66図15	しゃもじ	長さ17.9 幅6.3 厚さ0.5	木製 ほぼ完形 乾燥して収縮しているが変形はしてない
土坑84 66図16	筭か	長さ17.1 幅0.9 厚さ0.4	ほぼ完形 先端は粗く削って尖らせており、上端 はヘラ状になっている
土坑88 66図17	柄	長さ12.6 幅3.4 厚さ3.0	木製 挿し込み孔が片側に寄っているので包丁の柄か
土坑36 66図18	樹皮	長さ2.6 幅2.0 厚さ0.8	桜皮だろう 曲げ物の留め具が剥がれたものか
土坑64 66図19	ヘラ	長さ24.4 幅3.4 厚さ0.8	ほぼ完形 左側に弧状に刃部がつき、両刃 右側 縁は片刃で直線的で、使用面か不明 基部は細く 丸く削られている
土坑90 66図20	ヘラ	長さ20.0 幅3.5 厚さ0.4	左側に弧状に刃部がつき、両刃 右側縁は片刃で 直線的で平坦面 基部が板状なので、握る部分は 欠損している
大土坑4 66図21	栓	長さ3.2 幅3.2 厚さ2.6	木製 ほぼ完形 上面は平滑で下面はやや丸みがある 側面は粗く面取りしている
大土坑5 66図22	栓	長さ5.1 幅3.3 厚さ3.4	木製 完形 上面は平滑で斜めにカットした面がある 側面は丁寧に面取りしている
土坑64 66図23	栓	長さ5.4 幅2.8 厚さ2.8	木製 完形 上面は平滑で下面は斜めになっている 側面は平滑に整形されている
大土坑4B 66図24	栓	長さ8.8 幅3.5 厚さ3.4	木製 完形 上下面は平滑で側縁は丸みをもつ 側面は平滑に整形されている
土坑64 66図25	栓	長さ5.5 幅3.8 厚さ3.9	木製 完形 上下面は平滑で上面の側縁には丸みをもつ 側面は平滑に整形されているが一部にケ ズリ痕が残る
土坑84 66図26	栓	長さ7.8 幅3.4 厚さ3.3	木製 完形 上面は平滑で上面は斜めになっている 側面は平滑に整形されている
土坑84 66図27	栓	長さ7.4 幅4.8 厚さ4.0	木製 完形 上面は平滑で穿孔あり 下面はやや 斜め 側面は粗く面取りしている
溝4 66図28	独楽	長さ5.2 幅3.0 厚さ2.3	木製 保存状態が悪く収縮した 鉄芯あり
大土坑5 66図29	小杭か	長さ27.3 幅2.8 厚さ2.5	木製 枝を面取りして先端を削っている 基部は平坦にされている
大土坑1 66図30	櫛	長さ5.8 幅3.2 厚さ1.0	木製 櫛歯はほとんど欠損した 漆なし
大土坑1 66図31	櫛	長さ7.3 幅5.3 厚さ1.0	木製 櫛歯はほとんど欠損した 漆なし

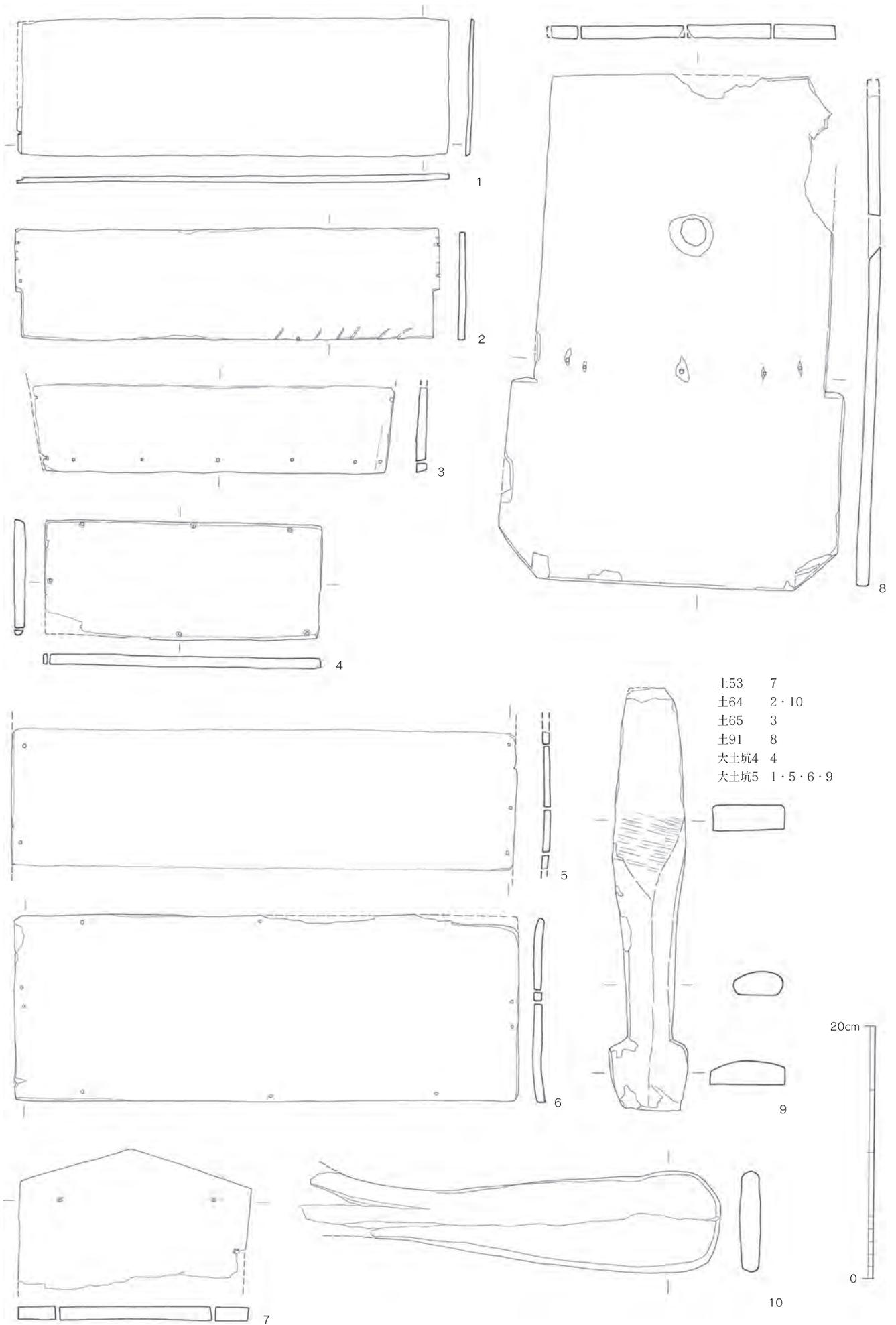
表47 4次調査西区出土木製品観察表1



第 68 图 矢加部町屋敷遺跡 4 次調査西区出土木製品実測图 4 (1/6)



第69図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図5(11は1/2、他は1/6)

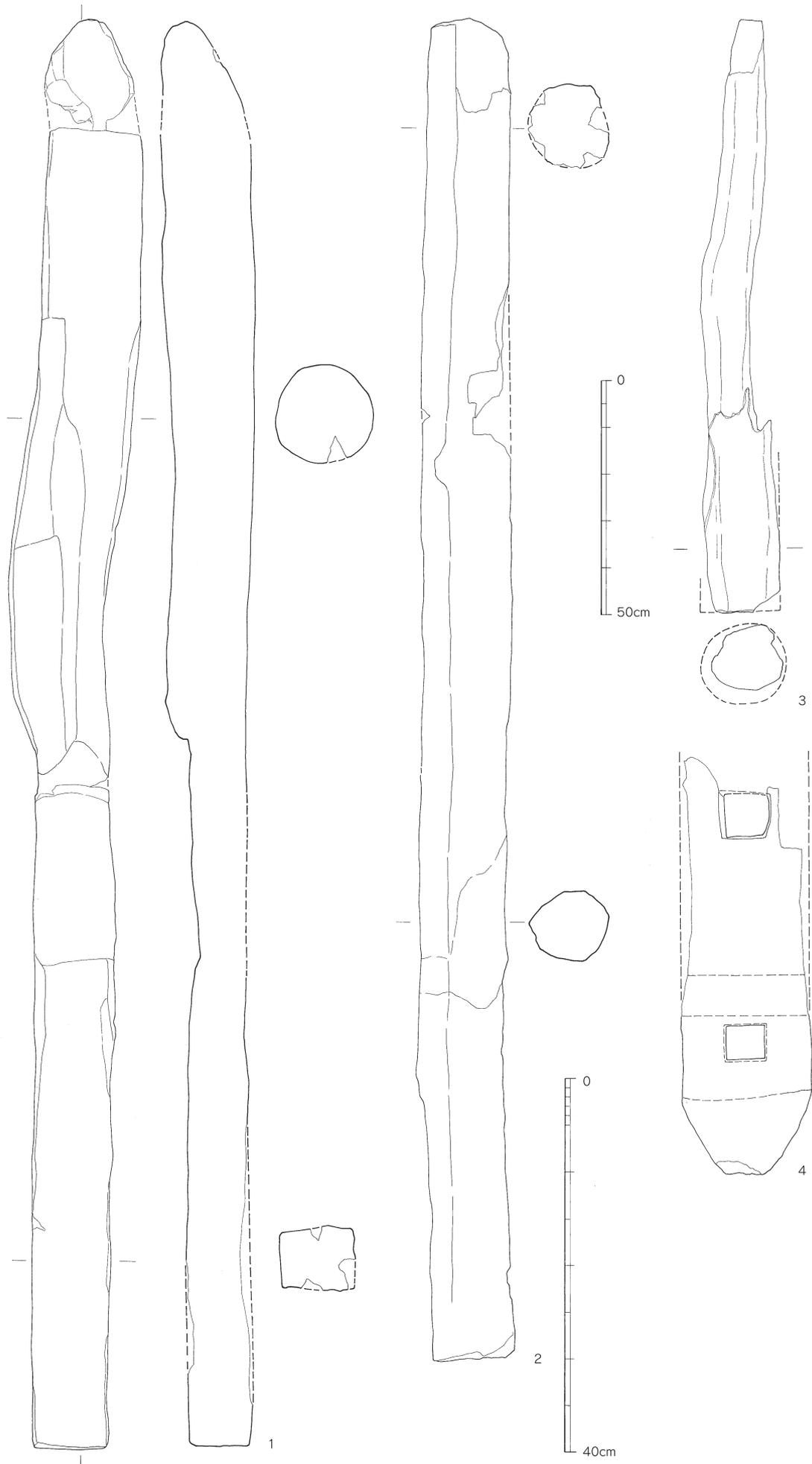


第70図 矢加部町屋敷遺跡4次調査西区出土木製品実測図6(1/4)

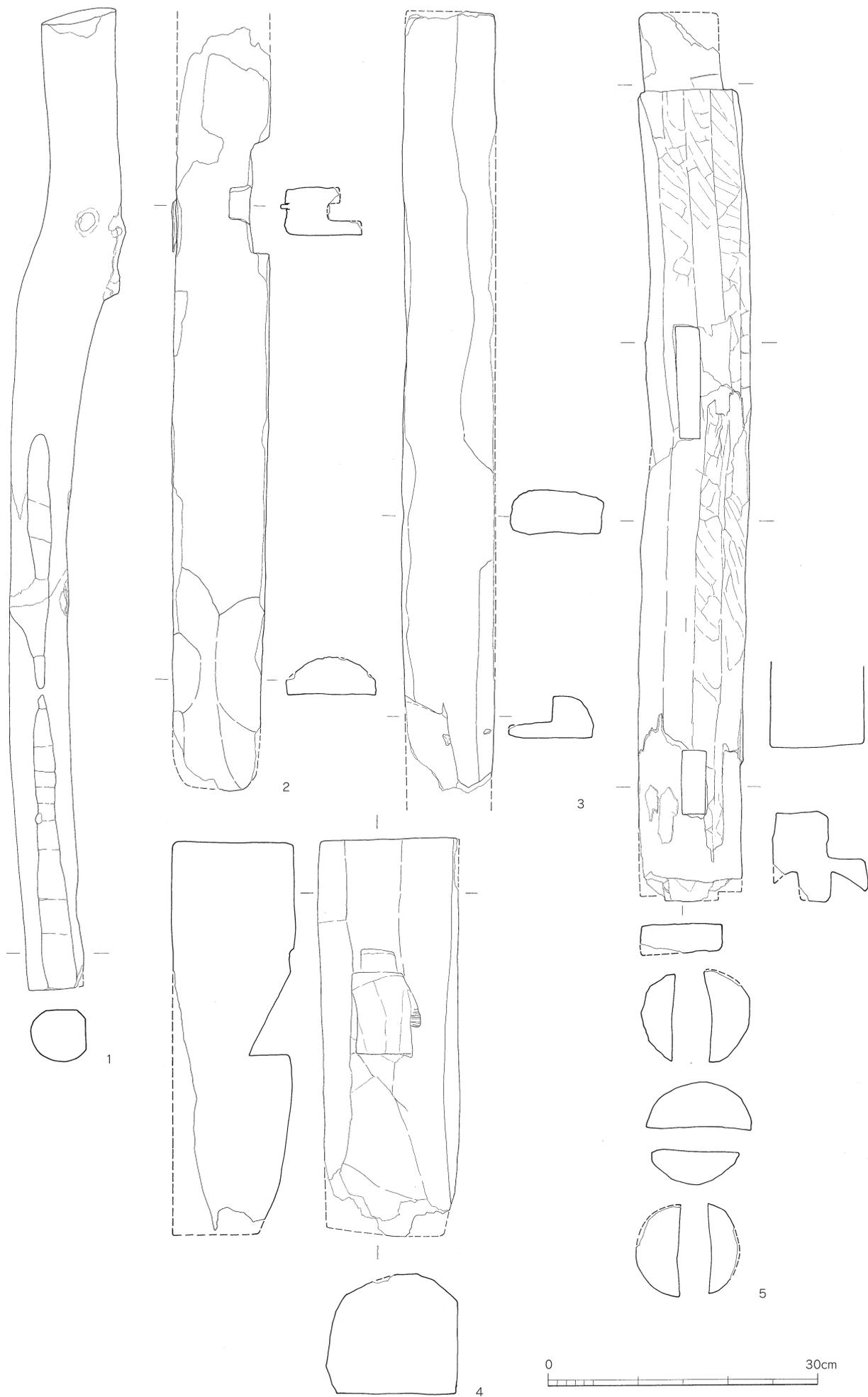
遺構名	器種	法量(cm)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元値	
図版番号	通称名		
溝 4 67 図 1	曲げ物底板	径8.5 厚さ0.8	木製 平坦に整形されており、ノミ痕も残っていない 周縁に段が設けられているが、穿孔はない
土坑65 67 図 2	曲げ物底板	径8.8 厚さ0.8	木製 平坦に整形されており、ノミ痕も残っていない 周縁に段が設けられているが、穿孔はない
土坑42 67 図 3	曲げ物底板	径13.0 厚さ1.5	外面側は平坦に整形されており、内面側にノミ痕がある 周縁に段が設けられており、穿孔は側面と上面の一部にあるので、柄杓だろう
大土坑5 67 図 4	底板	径12.6 厚さ1.4	木製 平坦に整形されており、ノミ痕も残っていない 周縁は斜めに段が設けられている 穿孔はない
土坑64上位 67 図 5	曲げ物底板	径13.4 厚さ1.4	周縁は斜めに段が設けられている 木釘孔があるので柄杓の底板 平坦に整形されており、ノミ痕なし
土坑64 67 図 6	曲げ物	径12.4 器高9.3	底板は周縁に段が設けられており、側面に木釘穴あり
土坑84 67 図 7	曲げ物蓋	径11.9 厚さ1.0	平坦に整形されており、ノミ痕も残っていない 周縁に段が設けられているが、平坦面中央に穿孔があるので、蓋である
土坑64 67 図 8	曲げ物	底板径12.4 底板厚さ1.3 側板厚さ0.1	底板はノミ痕なし 周縁に段が設けられており、穿孔あり 側板は下位のみ樹皮で留められているので、柄杓か
ピット26 67 図 9 図版11	曲げ物	底板径11.6 底板厚さ0.9	木製 平坦に整形されており、ノミ痕も残っていない 内面側の周縁に受け部が設けられている
土坑64 67 図 10	曲げ物蓋	径25.6 厚さ1.1	木製 孔列が2列あり、その間に溝があることから、中央に突起をもつ板材と柱状の板材2つをつまみとする蓋だろう
土坑7 67 図 11	桶蓋	径(54.0) 厚さ1.0	木製 孔列が2列あることから、柱状の板材をつまみとする蓋だろう
土坑7 67 図 12 図版11	曲げ物蓋つまみ	長さ21.7 幅1.9 厚さ1.6	木製 中央と両端に段があり、穿孔も両端にあるので、2つで構成される蓋のつまみの1つだろう
土坑64 68 図 1 図版12	下駄 差歯 露卯下駄	長さ15.2 台板最大幅5.5 台板最大厚2.2	後の歯はやや開いてついている
土坑45 68 図 2	下駄 差歯 露卯下駄	長さ15.2 台板最大幅5.5 台板最大厚2.2	後壺孔は右が大きい
溝 1 68 図 3	下駄 差歯 露卯下駄	長さ20.0 台板最大幅7.8 台板最大厚3.0	後壺孔は右の方が角度が大きい
土坑64 68 図 4	下駄 差歯 露卯下駄	長さ22.9 台板最大幅8.7 台板最大厚3.0	後壺孔は右の方が端に寄っている
土坑64 68 図 5	下駄 差歯 露卯下駄	長さ21.3 台板最大幅7.5 台板最大厚2.3	後壺孔は左の方が端に寄っている 前壺孔は裏面は方形
土坑64 68 図 6	下駄 差歯 露卯下駄	長さ22.0 台板最大幅9.9 台板最大厚3.2	後壺孔は右の方が端に寄っている 前壺孔は裏面は方形 足の指の部分が窪んでいる
土坑53 68 図 7	下駄 差歯 露卯下駄	長さ22.7 台板最大幅9.0 台板最大厚3.0	前壺孔が小さい 歯の湾曲は変形によるもの
大土坑2 68 図 8	下駄 連歯下駄	長さ22.6 台板最大幅9.1 台板最大厚0.9	歯の磨り減りはほとんどない
土坑45 68 図 9	下駄 差歯 露卯下駄	長さ22.0 台板最大幅7.7 台板最大厚3.1	前壺孔も後壺孔も裏面は方形
土坑45 68 図 10 図版12	下駄 差歯 露卯下駄	長さ24.2 台板最大幅8.4 台板最大厚3.0	丁寧な整形で、楕円形を呈する
土坑74 68 図 11 図版12	下駄 連歯下駄	長さ22.0 台板最大幅8.7 台板最大厚1.4	後の歯が磨り減っている
出土地不明 68 図 12	下駄 差歯 陰卯下駄	長さ20.3 台板最大幅8.3 台板最大厚2.1	中央で割れて出土しており、廃棄の原因であっただろう
土坑45 68 図 13 図版12	下駄 差歯 陰卯下駄	長さ22.6 台板最大幅8.2 台板最大厚3.5	後壺孔が非常に小さい

遺構名	器種	法量(cm)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元値	
図版番号	通称名		
土坑74 68 図 14 図版12	草履下駄 無歯	長さ21.5 台板最大幅6.6 台板最大厚1.8	木釘孔に木釘は残っていない 踵側が摩擦減して薄くなっている
土坑61 68 図 15	不明木製品	長さ21.3 幅9.5 厚さ2.5	裏面は側縁端部に丸みがあり、表面は平坦面
大土坑4 68 図 16	不明木製品	長さ23.4 幅11.3 厚さ2.7	上面の中央孔から長軸方向に窪みがある 使用の際の傷だらうか
大土坑6 69 図 1 図版11	柄杓の柄	長さ60.5 幅2.8 厚さ1.3	基部に穿孔
土坑65 69 図 2	柄杓の柄	長さ62.5 幅2.8 厚さ1.8	先端の尖りが小さいのは欠損のためではない
土坑64 69 図 3	長柄杓の柄	長さ79.2 幅3.7 厚さ1.5	先端を細長く加工する部分が高い
出土地不明 69 図 4	長柄杓の柄	長さ78.5 幅3.8 厚さ1.6	基部に丸みあり
土坑64 69 図 5 図版11	柄杓の器部	長さ13.5 幅9.3 高さ9.5	平面円形が楕円形に歪んでおり、本来は径11cmほどの円形だろう 柄の先端を留める部材は残っていない
土坑64 69 図 6	杭か	長さ66.3 径3.6	表面は面取りしていない 先端の尖りは小さく、杭ではなく、柄かもしれない
土坑64 69 図 7	柱材	長さ52.5 幅15.1 厚さ10.5	下端に牽引のための紐通し孔あり 先端を断面扇形に加工し、平面方形の孔を削り込んでいる
ピット118 69 図 8	柱材	長さ52.5 幅15.1 厚さ10.5	下端に牽引のための平面方形の紐通し孔あり 先端を断面扇形に加工しているが、欠損している 上部は丸太材と組み合う臍孔の一部
出土地不明 69 図 9	柱材	長さ63.5 最大径14.2	下端に切り込みがあるが、紐掛かりなど意図的なものか 上部は切断する途中で止めたのではないか
出土地不明 69 図 10 図版11	槌	長さ35.7 最大径8.9 把手部最大径5.1	中央部が大きく窪んでいることから、薬打ち用柄杓は丁寧に削られている
大土坑5 69 図 11	鋤	長さ144.3 幅3.7 厚さ1.5	乾燥して変形しているため、復元実測している 1本の木から削り出している 身部も基部も断面逆台形
大土坑5 70 図 1	板材	長さ10.9 幅38.8 厚さ0.7	木製 上下端面は斜めに加工されている 左側面薄い臍になっているので、組み合わせる部材
土坑64上位 70 図 2	板材	長さ8.8 幅33.2 厚さ0.6	木製 裏面は透漆か 両側面は半分カットして臍にし、そこに木釘孔あり
土坑65 70 図 3	板材	長さ6.7 幅28.2 厚さ0.9	木製 下端面は斜めなので桁形になる 下端に木釘孔あり入る右側端は装着した際の傷が残る
大土坑4 70 図 4 図版11	板材	長さ9.2 幅21.5 厚さ0.9	木製 端面に丸みがあり、裏面は平坦 木釘孔の間隔は広く、右端にのみ釘穴が
大土坑5 70 図 5	板材	長さ11.0 幅39.6 厚さ0.8	木製 上下端面に木釘孔があり、接ぎ板の中段の部位 左右端に木釘穴あり 右端は組み合わせ痕あり
大土坑5 70 図 6	板材	長さ39.4 幅14.7 厚さ0.7	木製 各端には木釘穴があるが、側端の間隔が不均一
土坑53 70 図 7 図版11	板材	長さ(11.1) 幅18.2 厚さ1.1	木製 側端面は平坦 木釘穴があるが、組み合わせ部には線から離れすぎている 器種不明
土坑21 70 図 8	板材	長さ11.0 幅5.6 厚さ1.7	木製 左下を切り落としたもので、右側は欠損ではないようだ 器種不明
土坑91 70 図 9 図版11	金隠し	長さ40.5 幅26.3 厚さ1.0	木製 中央に横に並ぶ木釘孔列は把手との接合部 大きな穿孔は節が脱落したもの
大土坑5 70 図 10 図版11	手桶の柄	長さ33.5 幅6.2 厚さ2.0	木製 上位は断面長方形、下位は断面逆ホームベース形で、断面形の変化点に組み合わせた痕跡が残る
土坑64 70 図 11	不明木製品	長さ33.0 幅8.1 厚さ1.7	木製 図面左側は乾燥して歪んでいる 右側の側面は丸みを持っており、上下面は平坦面

表 48 4次調査西区出土木製品観察表2



第71図 46号土坑出土貫材・柱実測図(3・4は1/12、他は1/6)



第72図 46号土坑出土貫材・建築材、64号土坑出土建築材実測図(1/6)

69図1・5は接合した状態で出土した柄杓だが、整理作業の過程で、外れたものである。69図15・16は中央に穿孔のある板材で、大きさが等しいので同じ道具と思われる。中央の孔は棒状のものを差し込める大きさであり、面や端部を丁寧に整形していないので、泥返しのような農器具の一部であろうか。69図7・8は柱材の先端部分で、断面扇形に削った後、2つの平面に牽引用の平面方形の孔が開けられている。臍孔の反対面は曲面に削られている。8の上端は丸い臍孔部分で欠損している。69図9は柱材で、下端の切り込みは切断する途中の鋸痕であり、上端面は臍孔の周囲が剥落したものであろう。

71図・72図1は藩境木の下部構造の部材であり、各部の位置関係については『矢加部町屋敷Ⅱ』第28図を参照していただきたい。71図3・4の中央の柱に、71図1・2と72図1の貫材が側面から差し込まれていた。71図1・72図1は丸太材の片側半分を断面方形に面取りしたもので、加工部分のみを差し込んで、残り半分は丸太のままである。この貫材を押さえるのが建築材の再用品で、加工痕は建築材として使用した際のものである。71図4は表面に方形の削り込みがあるのみで、何に使われたのかわからない。また、本書に掲載していないが、建築材と同様に、重しとして用いられた木の幹が両端をカットした状態で3個、石代わりに重しとして入れられていた。周辺に山がなく、石材が採れない柳川市域ならではの工夫といえよう。これらは遺物として取り上げて保管している。藩境木の柱・部材は保管状態が悪く、変形したものがほとんどで、図面は変形を修正しているため、推定による部分が多い。

72図2～4は建築材で、いずれも藩境木の貫材の重しに再使用されたものである。2は断面方形の建築材の下端を断面逆ホームベース形に削っているが、建築材の臍としては不自然であることから、再利用のための加工と思われるが、重石として必要とされたにすれば、加工の仕方が丁寧で、単に切断するだけでない理由は不明である。72図3は下端が欠損しているが、削り込みがあったようだ。これも建築材の組み合わせにしては不自然である。4は丸太材の2側面と上端面だけ平坦にし、その他は表面の丸みを残したもので、原材は15cm程の丸太であったことが推定される。上面中央に方形の鑿で穿ったような斜めの削り込みが入り、下端は斜めに加工されているが、何のための削り込みと加工なのかは不明である。72図5は建築材で、上下端面は臍だが、下端面の臍の根元の部分は凹面になっており、丸太材の表面に組み合わせることがわかる。

表50は、写真のみ掲載したものの観察表である。図版12-6～9は歯ブラシで、6は鹿角製である。7・8の基部のビスは、「舌しごき」を留める金具といわれている。

遺構名	器種	法量(cm)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元	
図版番号	通称名	値	
土坑46貫材1 71図1	建築材	長さ152.5 最大径10.5	上端に牽引用紐通し孔がある 反りのある材を利用しており、半分だけ断面方形に面取りし、残りは自然面を残している 藩境木の下部構造の貫材
土坑46貫材2 71図2	建築材	長さ143.2 最大径9.1	表面は面取りしているが、方形にはなっていない 臍孔などはなく、再利用かは不明
土坑46柱-1 71図3	柱	長さ(98.2) 最大径(15.2)	乾燥が著しく収縮している 図面・数値は復元 表面は面取りしていたが、現在は観察できない 1が2の上につく
土坑46柱-2 71図4	柱	長さ(82.5) 最大径(18.0)	乾燥が著しく収縮している 図面・数値は復元 表面は面取りしていたが、現在は観察できない 2が1の下につく

遺構名	器種	法量(cm)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元	
図版番号	通称名	値	
土坑46貫材3 72図1 図版19	建築材	長さ110.3 最大径9.0	反りのある丸木を利用しており、半分だけ断面方形に面取りし、残りは自然面を残している 藩境木の下部構造の貫材
土坑46建築材1 72図2	建築材	長さ85.9 幅10.5 厚さ5.5	扁平な断面方形の建築材で、下端は断面三角形に面取りしているがこれは杭に転用するためのもの 側面に釘があるが、臍孔まで達していない
土坑46建築材3 72図3	建築材	長さ87.8 幅10.3 厚さ4.8	扁平な断面方形の建築材で、上端面には窪みがある 下端は欠損しているが渡頭の木組構造があったようだ
土坑46建築材2 72図4	建築材	長さ44.5 幅16.2 厚さ13.7	材の表面の一部を丸く残し、2面は平坦に削る 丸みの残る面に斜り込みを入れている
建築材 72図5	建築材	長さ99.9 最大径11.5	表面は縦に面取りしており、ノミ痕跡が残る 上下は臍、表面に2つの臍孔、側面中央にも臍孔がある

表 49 4次調査西区出土木製品観察表3

遺構名	器種	法量(cm)	特 徴
挿図番号	材質	()は復元	
図版番号	通称名	値	
土坑72 図版12-1	瓶 透明ガラス	口径1.2 底径1.3 器高5.7	刻印なし 気泡入る 型合わせ
土坑72 図版12-2	瓶 緑ガラス	口径1.4 底径2.3 器高5.2	口縁部は打ち欠き外しで、曲がっている 型合わせ 気泡多い
井戸2 図版12-3	瓶 透明ガラス 薬瓶	口径1.4 底径2.7 器高7.0	側面に型合わせの接合痕あり 口縁部は接合部が バリ状に張り出している 裏銘なし 目盛りの陽 刻あり
土坑72 図版12-4	瓶 緑ガラス ニッキ瓶	口径1.0 底径1.7 器高10.8	口縁部は打ち欠き外し 型合わせ 上底 緑ガラスだが色が薄い
大土坑1黒色土 図版12-5	瓶 緑ガラス 瓶	口径1.0 底径1.7 器高10.7	口縁部の一端に窪みあり 吹きガラス 上底

遺構名	器種	法量(cm)	特 徴
挿図番号	材質	()は復元	
図版番号	通称名	値	
黒色土包含層 図版12-6	歯ブラシ 鹿角製	長さ14.6 柄部最大幅1.3 柄部最大厚0.6	柄は基部は薄く広く、力のかかり細くなる部分が 厚くなっている
攪乱井戸 図版12-7	歯ブラシ プラスチック製	長さ13.7 柄部最大幅0.7 柄部最大厚0.5	柄が湾曲し、基部の幅が広い 厚さはほぼ均一 赤橙色で、柄表面に「特製」の刻印 基部に金属の ビスが入る
攪乱井戸 図版12-8	歯ブラシ プラスチック製	長さ14.2 柄部最大幅1.0 柄部最大厚0.4	柄は反り、基部の幅が広い 厚さはほぼ均一 黄白色で、柄表面に刻印があるが不鮮明で、 「Galito SupOmeuro」か 基部に金属のビス が入る
攪乱井戸 図版12-9	歯ブラシ プラスチック製	長さ13.6 柄部最大幅0.8 柄部最大厚0.3	全体に平坦で、湾曲なし 柄は幅も厚さも均一 赤橙色で、刻印はない 基部に金属のビスが入る
排出土中 図版12-10	表札	長さ15.5 幅5.1 厚さ1.8	木の板に銅板を被せて側面で釘留めしている 表面は「野田正」の文字を周辺を叩いて浮き出させて いる

表 50 4次調査西区出土ガラス製品観察表

3. 4次調査東区の調査

4次調査東区は柳川市大字矢加部669-1・700-1・701-2・713-23番地の一部と701-1番地の440㎡で実施した。平成19(2007)年2月5日、家屋が近接しているため振動・騒音を軽減するため、0.4のバックホーを入れて表土剥ぎを開始し、排土は翌日から4トンダンプと0.25バックホーを入れて搬出した。近代の整地面が何枚も見られ、近世の整地面がわかりにくいため慎重に掘り下げた。また、包含層からは多数の陶磁器が出土したので、これを回収しながら掘り下げねばならず、表土剥ぎに多くの時間を費やした。7日から作業員を投入。8日には近世の遺構面と思われる面に到達するが、遺構プランは不鮮明だった。遺物が多いので、手掘りで遺構面を精査した。21日に西側調査区の東端にある昭和前半代の溝をバックホーで掘り崩すことにしたが、完形品が多いので遺物を掘り上げて現地で選別した。3月2日、西側調査区の東壁が崩落したのでコンパネで土留した。

3月9日、攪乱溝の下に遺物量の多い大型の土坑があることがわかったが、上面は明治期の堆積層だったので、これを掘り下げなければならなかったが、土量が多かったのでバックホーで除去した。

3月16日、先日の雨で土留めした東壁がさらに崩落した。復旧できなかったので、その外側にもう1重土留めした。3月22日空中写真撮影。3月26日、前日の雨で東壁の一部と土留め部が崩落し、竹柵が一部崩壊した。バックホーを入れて竹柵の杭を抜き取り、埋め戻し開始、機材搬出。28日に埋め戻しを完了し、調査を終了した。

1)遺構

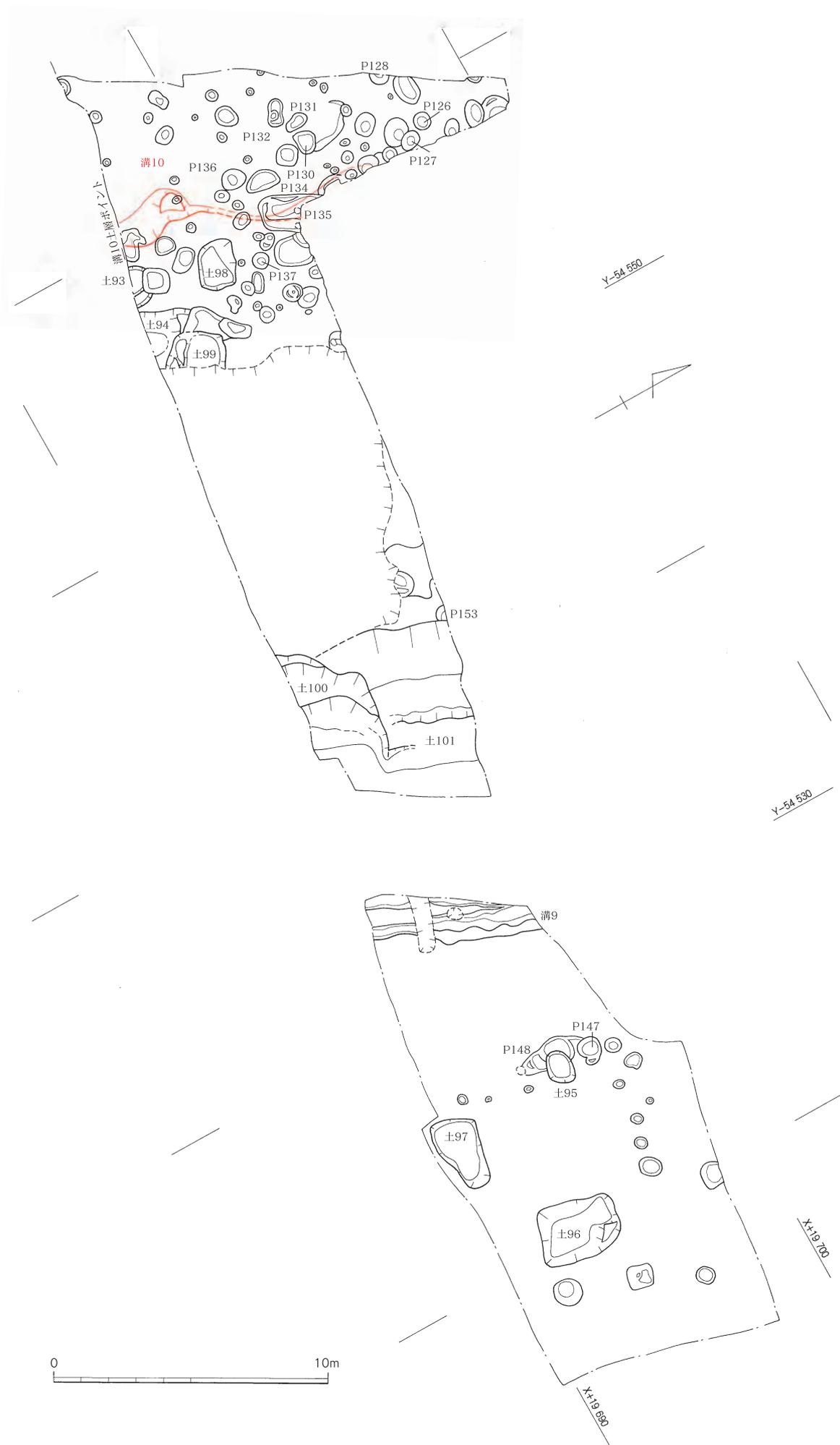
矢加部町屋敷遺跡4次調査東区は県道23号線に沿う部分と、水路を挟んで東側の低地部分に分かれている。前者は旧状宅地だが、後者は水田で基盤層自体が低く、遺構数も少ない。全体で土坑9基、溝状遺構2条などを検出した。土坑9基のうち2基は大土坑としてもよい規模のものだが、混乱を避けるため調査時の遺構名をそのまま使用した。調査区中央部に大きな攪乱が入っていたため、4次調査西区や5次調査に比べて遺構数が格段に少ない。遺構面自体も大きく削平されており、包含層や整地層がほとんどなく、遺構の残りもよくなかった。

a)土坑

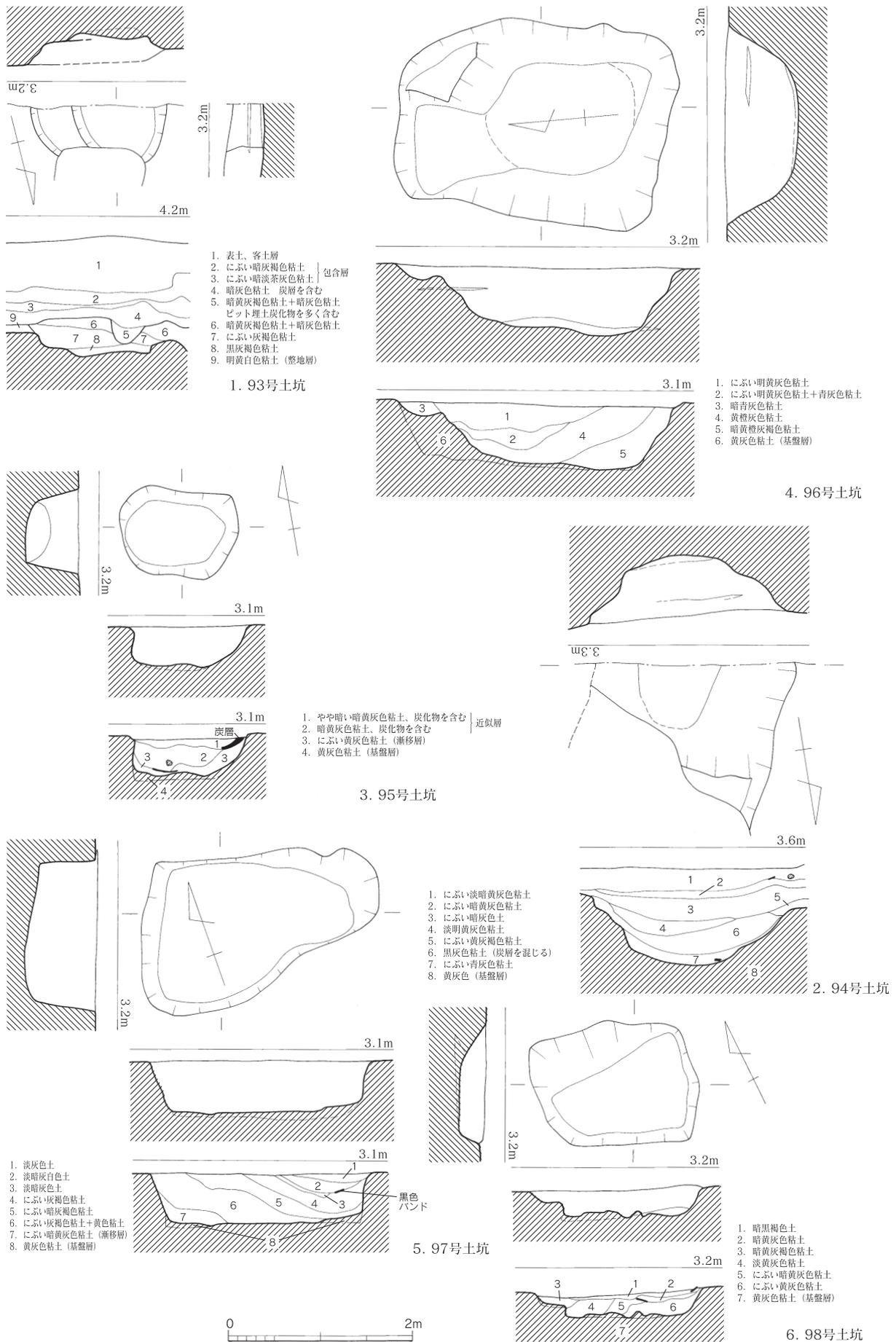
93号土坑(図版14、第75図)

調査区南西端に位置する楕円形の小型の土坑である。北部をピットに切られ、南側は5次調査区4・5号土坑に繋がる。検出範囲が狭かったので、調査時に2つの土坑の切り合いを検出できなかったため、1つの遺構として記録している。現存で長軸146cm、短軸で62cm、深さ40cm程度を測る。主軸方向はN-14°30'-Eで、現在で長軸146cm、短軸で62cm、深さ40cm程度を測る。

5次調査4・5号土坑と同一遺構で、出土遺物から18世紀中葉と推定される。



第74図 矢加部町屋敷遺跡4次調査東区遺構配置図(1/200)



第75図 93～98号土坑実測図(1/60)

94号土坑 (図版14、第753図)

調査区南西側に位置する。94号土坑に北側を切られ、南は調査区外に延びて、5次調査6号土坑と繋がる。略方形プランの土坑で、現存長軸178cm、短軸218cmである。77cmほどの深さがある。主軸方向はN-9° 30' - Eである。

出土遺物はわずかで、5次調査6号土坑と同一遺構であることと、出土遺物から18世紀前半に属する。

95号土坑 (図版14、第75図)

調査区東部に位置する平面略方形の小型の土坑である。長軸は現存で131cm、短軸で100cmを測る。床面はほぼ平坦で60cm程である。埋土は一挙に埋め戻している。主軸方向はN-78° 30' - Wをとる。

出土遺物はわずかで、小片が多く不確定だが、年代は18世紀中葉であろう。

96号土坑 (図版14、第75図)

調査区東端に位置する平面略方形の土坑である。長軸320cm、短軸226cmを測る。北側を床面を掘りすぎており、本来は床面もほぼ平坦で略方形である。深さは最深部で76cmを測る。主軸方向はN-4° 30' - Eをとる。

出土遺物はわずかで、時期を特定できない。

97号土坑 (図版14、第75図)

調査区南東部に位置する平面不整形プランで、長軸が256cm、短軸169cm、深さ60cm程で床面はほぼ平坦である。埋土は東から堆積しているので、9号溝状遺構に向かって傾斜していたことがわかる。主軸方向はN-71° - Wをとる。

出土遺物がわずかのため確実でないが、17世紀後半から18世紀前半の遺構だろうか。

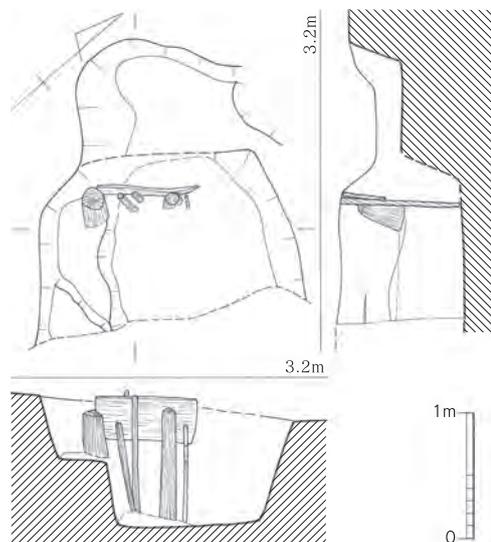
98号土坑 (図版14、第75図)

調査区中央部西部に位置し、平面略方形プランの土坑である。床面にはやや凹凸がある。北西部から斜めに堆積しており、県道側が高かったとわかる。現存で長軸が164cm、短軸140cm。床面には凹凸があり、30cm程の深さを測る。主軸方向はN-65° - Wをとる。

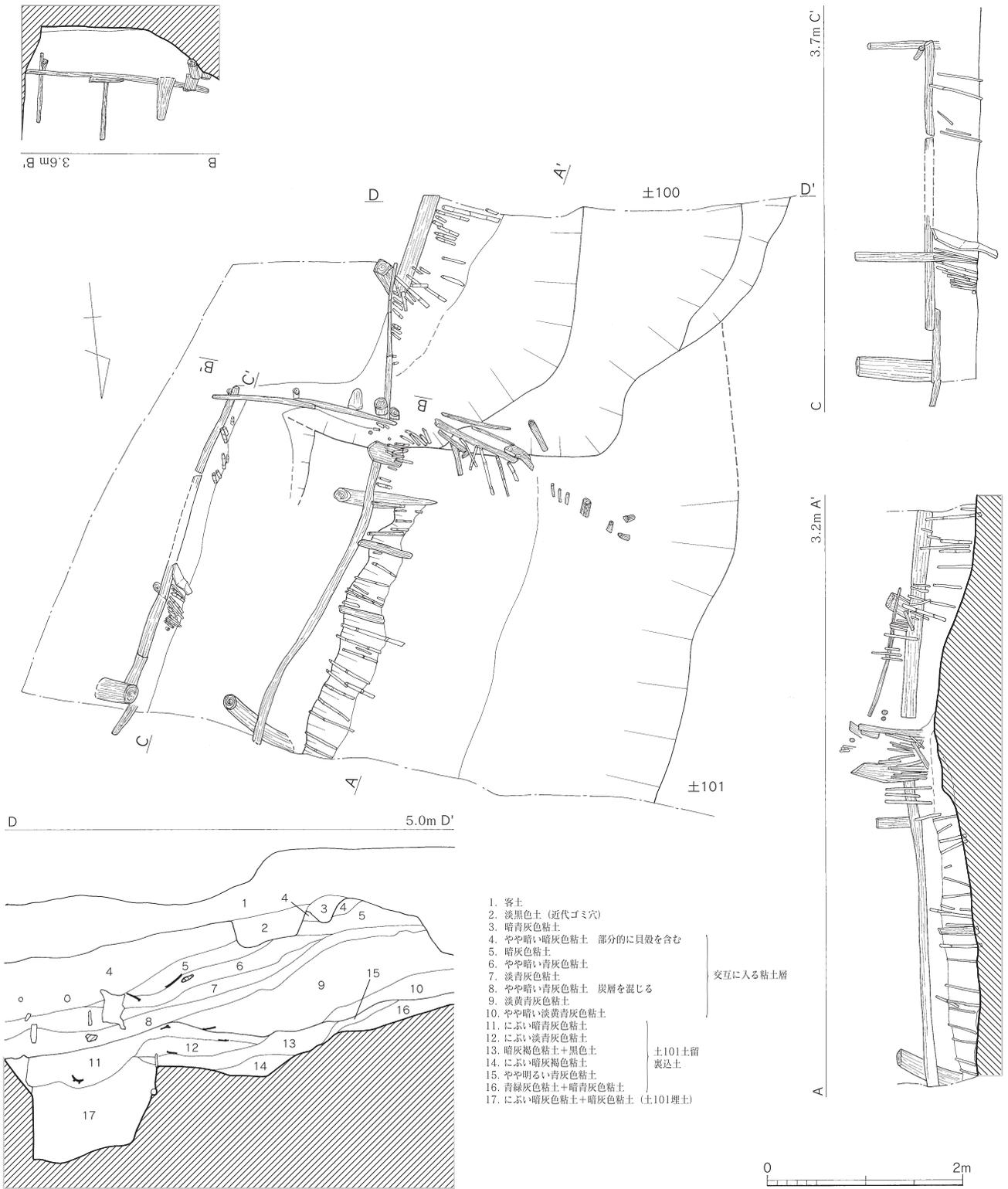
出土遺物はわずかで不確定だが、年代は18世紀中葉から19世紀中葉であろう。

99号土坑 (図版15、第76図)

調査区中央部西部に位置し、東部は攪乱に切られる。北西部に張り出しがあるため不整形プランに見えるが、張り出し部を除いた本体部分は略方形である。現存で長軸が208cm、短軸は201cm、張り出し部



第76図 99号土坑実測図 (1/60)



第77図 100・101号土坑実測図(1/60)

と本体部分の間に土留遺構があるが短辺の半分だけしか残っていない。竹も使っているが竹柵ではなく、木杭と板で構成されている。張り出し部は浅く40cm程の深さがあり、土留遺構の裏込め部分だろう。本体部分は100cm程の深さがある。主軸方向はN-48°40'-Wをとる。

出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は不確定だが、5次調査の6号土坑に切られ、94号土坑と1号溝状遺構を切ることから、19世紀初頭から前葉の遺構である。

100号土坑 (図版15、第77図)

調査区東端に位置する大型の土坑で、南は5次調査の1号大土坑につながり、北は101号土坑に切られる。東は調査区外に出るため、平面プランは不明だが、主軸方向はN-24°40'-Wをとる。現存で長軸が420cm前後、短軸は270cm前後で、西壁は緩斜面になっていて、最深部で160cm程ある。西の斜面下面に南北方向に走る竹柵があるが、これは東側に傾斜にしている原位置を保っていない。土層に地滑りの痕跡が見られたことから、そのために竹柵は横倒しになっていたものと思われる。この土層状況については雨により壁面が崩落して凶化することができなかった。南北方向の竹柵の北端は東西方向に走る竹柵と接している。南北方向と接する位置から東は横木が残り、竹は残っていない。

出土遺物から18世紀初頭から前葉の遺構である。

101号土坑 (図版15・16、第77図)

調査区東端に位置する大型の土坑で、南は100号土坑に切られる。東は調査区外に出るため、平面プランは不明は不明だが、主軸方向はN-24°40'-Wをとる。現存で長軸が630cm前後、短軸は550cm前後で、西壁は緩斜面になっていて、最深部で90cm程ある。西の斜面下に南北方向に走る竹柵があるが、これは東側に傾斜にしている原位置を保っていない。横木は竹柵から遊離している。東端には南北方向の竹柵があり、南端は東西方向に走る竹柵の横木と交差している。

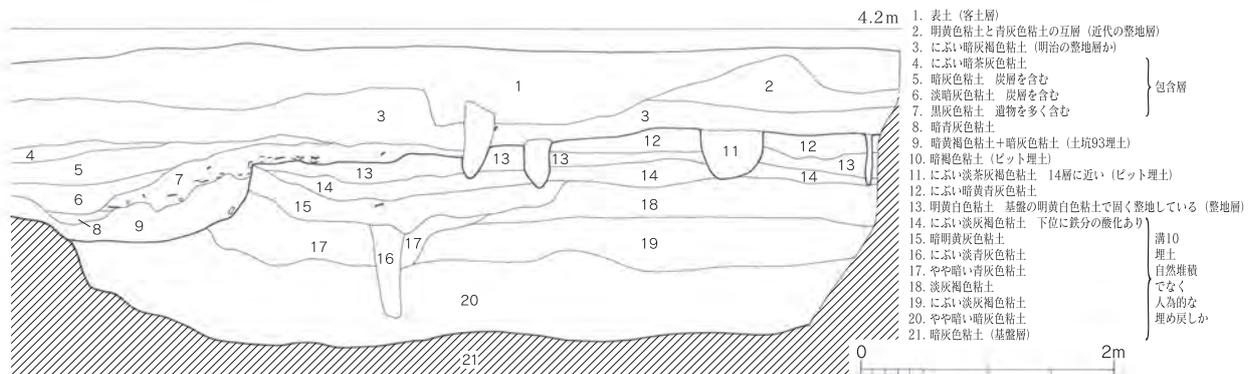
出土遺物から18世紀初頭から前葉に属する。

b) 溝状遺構

東区からは2条の溝状遺構を検出した。

9号溝状遺構 (図版13、第74図)

調査区中央東部に位置し、南西から北東方向に走る。深さは5~12cmと浅く、中央部から



第78図 10号溝状遺構土層断面実測図(1/60)

次第に幅が広がり、段落ち状になる。幅は狭いところで34cm、広い所で105cmある。3号溝状遺構を切り、2号溝状遺構は垂直方向に走るが、切り合いは不鮮明だった。調査区を挟んで西にある100・101号土坑の東側の掘り方ではなく、別の遺構である。

遺物は少なく時期を特定できない。

10号溝状遺構（図版13・16、第74・78図）

調査区の西端に位置し、南西から北東方向に走る大溝で、南は5次調査の3号溝状遺構に繋がる。県道23号線と併走していることから、久留米柳川往還道の東側溝と考えられる。上面は整地層なので、掘り方の検出が難しかった。幅は450cmほど、深さは170cm前後になる。土師皿が3枚重なって出土した(92図12～14)。黒釉の陶器碗もセットで出土しているので(92図4～7・9)、まとめて廃棄したものだろう。

出土遺物から17世紀後半代の可能性が高い。

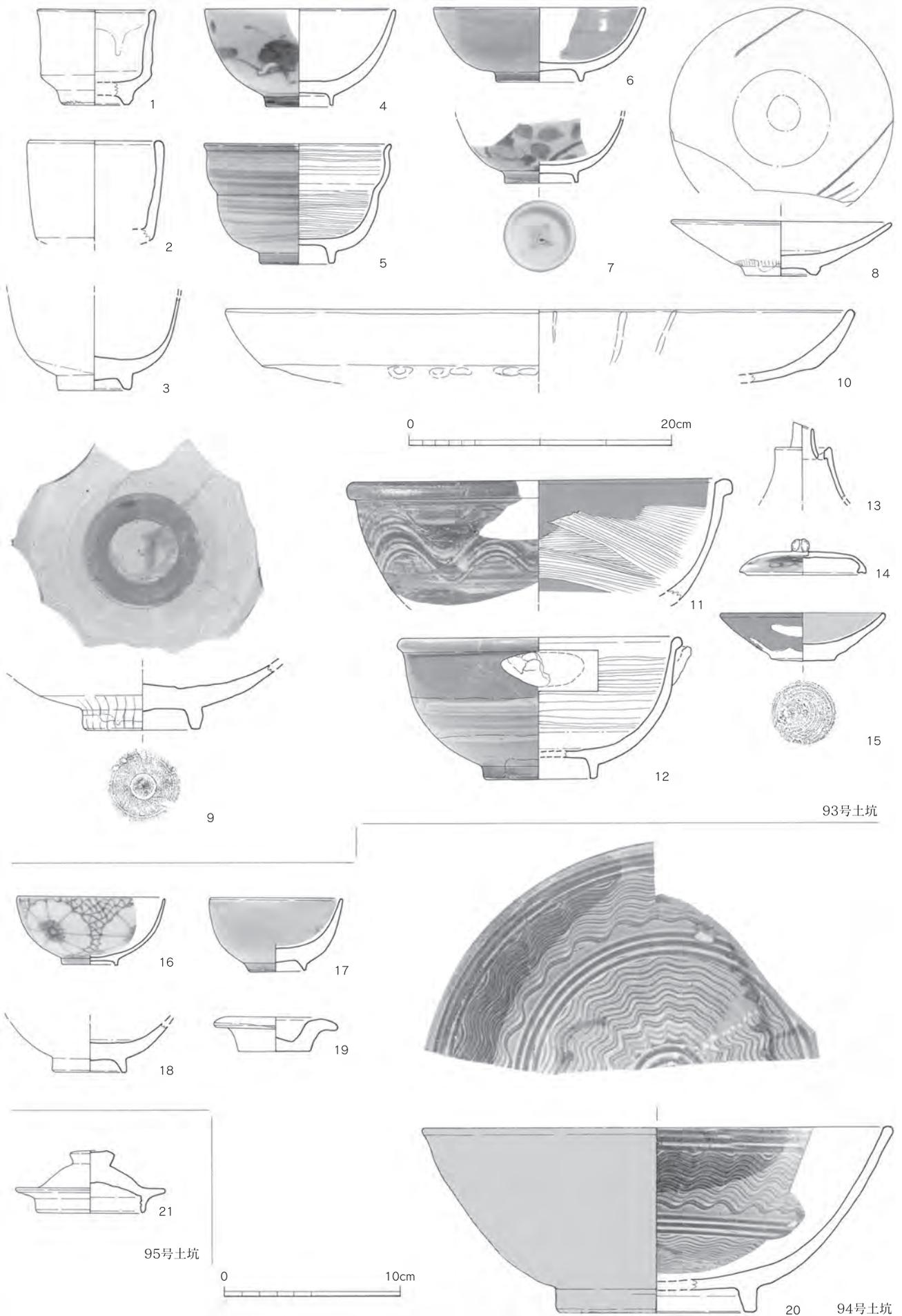
2) 遺物

出土遺物については観察表を掲載しているので、ここでは付記すべき事柄についてのみ記述する。

79図6は陶器の碗で、畳付に小さな剥離が全周巡っている。これは焼台から外す際に欠損したものと思われる。79図9は陶器の皿で見込み中央が盛り上がっている。高台の外面にはカナナ痕が残る。外底の円刻は京焼風陶器の碗と共通するものである。見込みの蛇ノ目釉剥ぎ部に鉄漿を塗布している。79図10は土師質土器の焙烙で、内面口縁部に縦方向の凹線があるが、意図的に施されたものではなく、製作時の傷ではないだろうか。79図14は染付の蓋で、天井部には球が2つ繋がった大豆形のつまみがつく。

80図4は陶器の摺鉢の体部片で、口縁部は残っていないが、肥前の胎土で、内外無釉であることから、口縁部のみ鉄釉を掛けるタイプだろう。80図5は陶器の鉢で、口縁部外面の肥厚部の下に格子目タタキ当て具痕があることから、タタキの後に肥厚させたことがわかる。80図6は陶器の摺鉢で、見込みに胎土目跡が3つあり、現存するものの間隔から本来は5つであったと考えられる。外底の胎土目跡は5つあり、現存するものの間隔から本来は6つであっただろう。

81図8と9は、端反形の染付碗で、モチーフが同じであるだけでなく、体部下面に釉切れのあることや、青味のある透明釉や呉須の発色が近いことから、同じ窯で近い時期に焼かれたものをセットで購入したものだろう。8は口縁部が欠損しているが、体部の湾曲と高台が外に開くことと、9とモチーフが同じことから、端反形になるだろう。81図15の皿の見込みにはハリ目5つが3ヶ所に配置されており、1ヶ所に2つずつあるところを2ヶ所設けて均等に配置している。

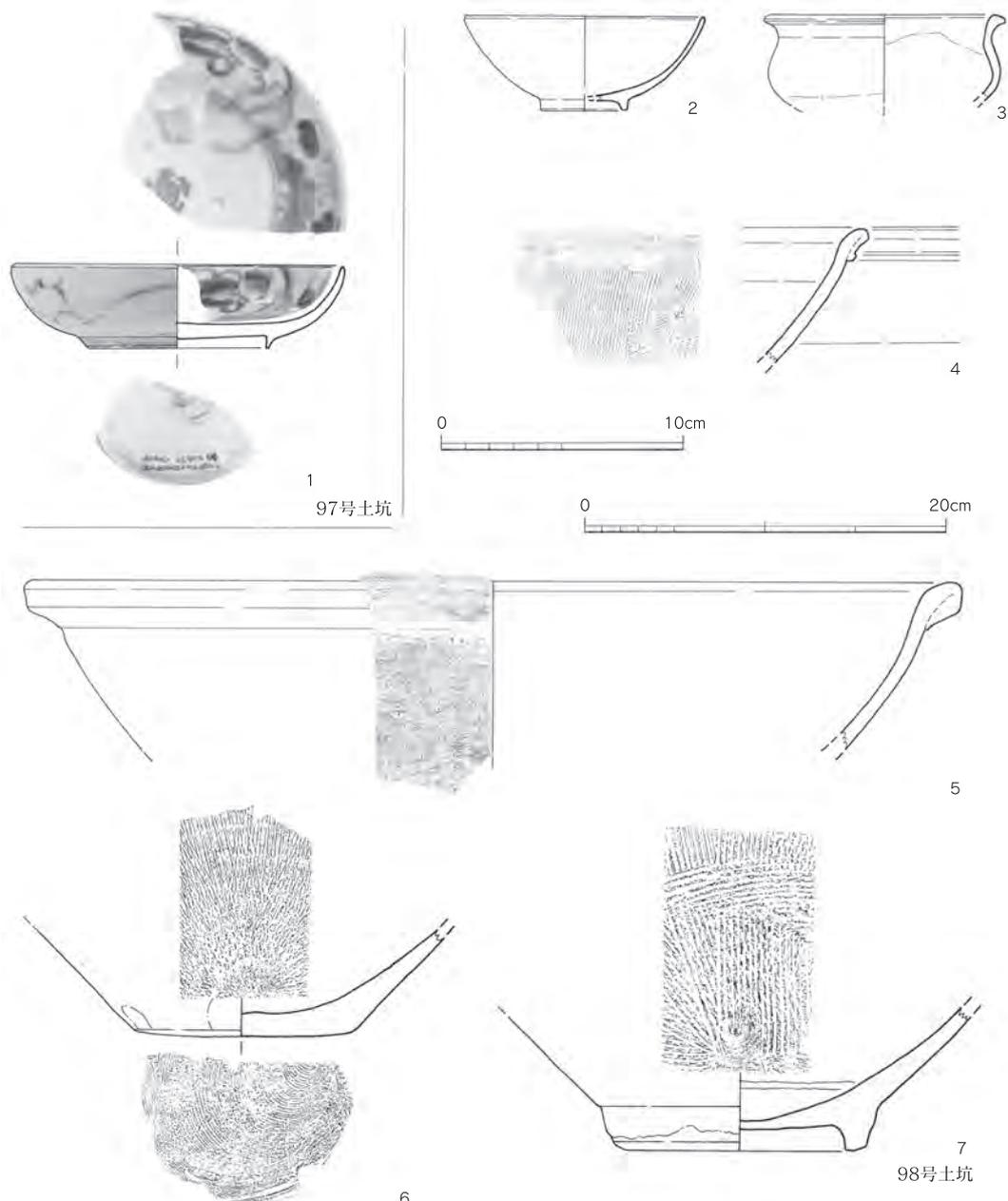


第79图 93～95号土坑出土陶磁器实测图(10は1/4、他は1/3)

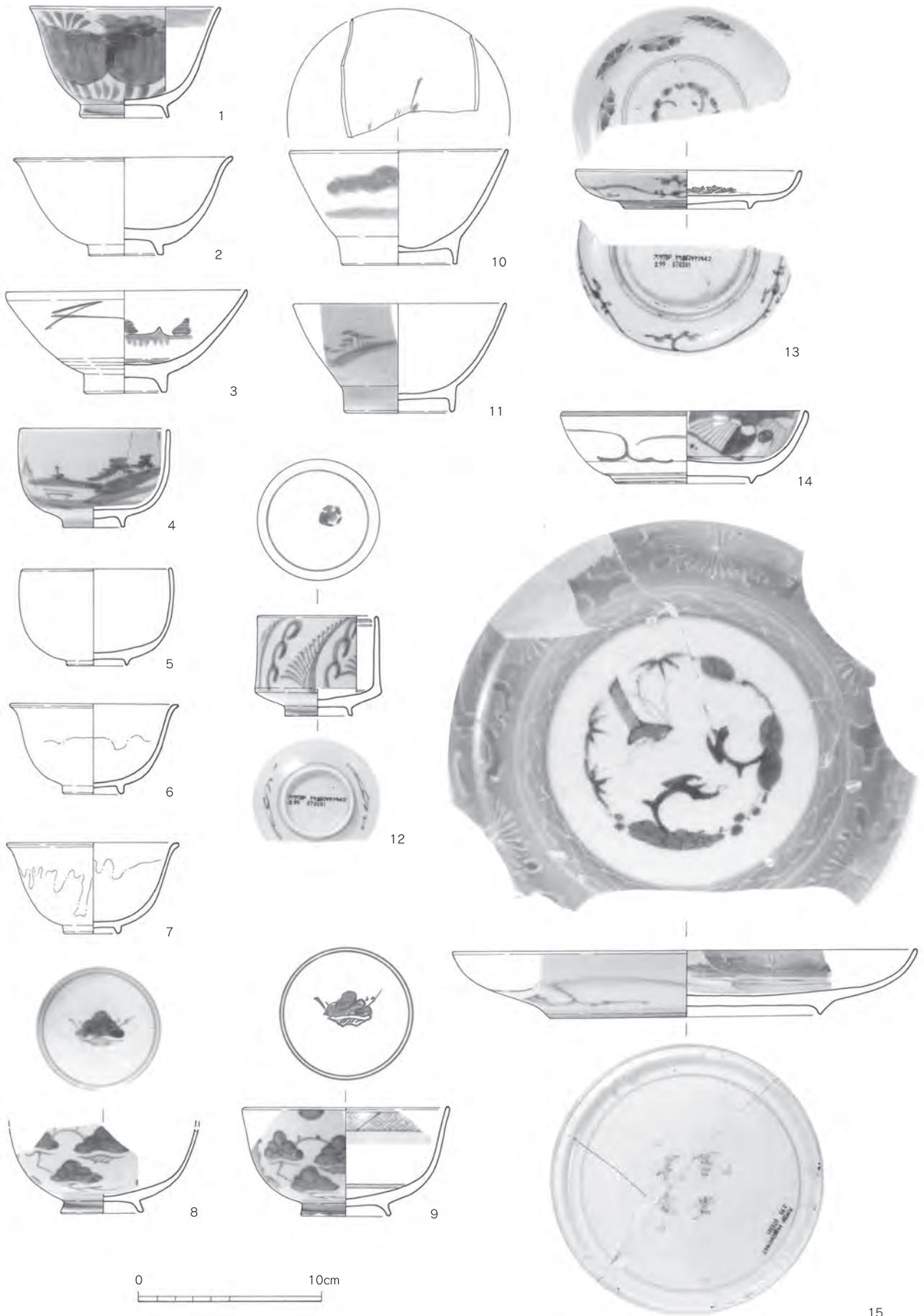
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	量尺(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑93 79図1	小香炉	口径(6.8) 高台径(4.0) 器高5.5	磁器 灰白色	青磁釉 全面		不明		肥前	不明
土坑93 79図2	小香炉	口径(7.8)	磁器 灰白色	青磁釉 外面から 内面口縁部		不明		肥前	不明
土坑93 79図3	碗	高台径4.2	陶器 灰色	緑灰色の灰釉 内 面から高台以外の 外面	外底削り出し	高台露胎		肥前	不明
土坑93 79図4	碗	口径(10.8) 高台径3.9 器高5.6	磁器 暗灰白色	透明釉 全面 釉 切れあり	外面は菊花・雪ノ輪文を染付	畳付釉剥ぎ 高 台に砂目付着 見込みに蛇ノ目 釉剥ぎ後、アル ミナ塗布		波佐見	1680) 1740
土坑93 79図5	碗 折湾形	口径(10.6) 高台径4.3 器高6.9	陶器 黄橙灰色 軟質	内外白化粧土のハケ掛けの上に透明釉		畳付釉剥ぎ		小石原	不明
土坑93 79図6	碗	口径(12.0) 高台径(5.0) 器高4.3	陶器 にぶい暗緑黄灰色	内外白化粧土の櫛掛けの上に内外オリーブ色の灰釉		畳付砂目付着		肥前	不明
土坑93 79図7	碗	高台径4.1	磁器 暗灰白色	青味がかった透明 釉を全面	外面は草花・蝶文、裏銘は角福を染付	畳付釉剥ぎ	モチーフの線 が細かい	伊万里	1700) 1750
土坑93 79図8	小皿 5寸皿	口径12.6 高台径4.1 器高3.1	磁器 暗灰白色	透明釉高台以外全 面	内面に崩れた折れ松葉文染付け 高台にろく ろ痕残る	見込み蛇ノ目 釉剥ぎ 高台 露胎	5割残存	波佐見	1680) 1740
土坑93 79図9	皿	高台径6.6	陶器 黄灰白色 精良	内面に白化粧土を刷毛掛けし、それを櫛状掻き取りして、最後に 内面から外面下位まで透明釉掛け 高台外面はノミ痕目立つ		高台露胎 見込みの 蛇ノ目釉剥ぎ部 に鉄漿塗布、4箇所 の砂目跡あり	外底中央に沈 線の円あり		1690) 1780
土坑93 79図10	焙烙	口径(48.0)	土師質土器 黄灰白色が灰白 色をはさむ	—	外面口縁部はナデ、体部の接合部はオサエ、 内面はカキ目状のナデ	不明	外面は煤が付着 し、灰黒化して いるが、内面は 変色なし	在地	不明
土坑93 79図11	片口鉢	口径(22.0)	陶器 赤橙褐色	内外鉄釉の上に白化粧土の刷毛掛け、外面はその上に白化粧土の 櫛状掻き取りの上に内外オリーブ色の透明釉		口唇部は釉拭 き取り	片口部は残存 していない	肥前	不明
土坑93 79図12	片口鉢	口径(16.2) 高台径(6.5) 器高8.0	陶器 黄灰色	内外胴部中に白化粧土の刷毛掛け その上に内外オリーブ色の 灰釉		畳付釉剥ぎ 見込みの蛇ノ 目釉剥ぎ部は アルミナ塗布		肥前	不明
土坑93 79図13	德利 油德利	注口径2.1 上部径4.4	陶器 赤橙褐色	鉄釉 外面 光沢あり	上面に穿孔あり 把手部は欠損	不明		肥前	不明
土坑93 79図14	蓋	裾径(7.2) つまみ径0.9 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面は七宝文を染付 つまみは大豆形	受け部釉剥ぎ		伊万里	18世紀後半) 19世紀中葉
土坑93 79図15	小皿	口径(9.2) 底径3.8 器高2.8	陶器 黄橙灰色	鉄釉 内面から外 面上半	外底糸切り	底部露胎 見込みに砂目 跡あり	外底胎土目痕 不明	肥前	不明
土坑94 79図16	碗 浅半球形	口径(8.4) 高台径3.2 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面は水裂文地に菊花文を染付 具須の滲 みあり	畳付釉剥ぎ	4割残存	伊万里	1710) 1750
土坑94 79図17	小碗	口径(7.6) 高台径3.3 器高4.3	磁器 暗灰白色	透明釉 全面 釉 切れあり	外面は鳥文を染付	畳付釉剥ぎ	高台内に目土 付着 半分残存	波佐見	1780) 1810
土坑94 79図18	小碗	高台径4.2	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を全面に掛 ける	外面の上絵は欠損のため見られない、内面 はわずかに赤彩の花文が一部だけ残る 見 込みの蛇ノ目釉剥ぎ部は緑彩	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑94 79図19 図版17	土瓶蓋	裾径7.0 底径4.1 器高2.0	陶器 淡黄褐色 混入物の ためややざらつく	鉄釉 光沢あり	外底糸切り	不明	完形	小石原か	不明
土坑94 79図20	鉢	口径(26.8) 高台径11.4 器高10.6	陶器 灰～暗橙灰色	内面白化粧土の櫛状掻き取りの上に鉛釉と緑色の灰釉を口縁部に 交互に掛け流し 外面は畳付から高台内以外に鉄釉を掛ける		底部露胎		肥前	1690) 1750
土坑95 79図21	瓶蓋	裾径8.6 つまみ径2.6 器高3.5	陶器 淡黄灰～黄橙色	鉄釉 外面のみ 光沢あり		下面露胎	ほぼ完形	肥前	不明
土坑97 80図1	皿 5寸皿	口径(13.8) 高台径7.6 器高3.5	磁器 灰白色	青みのある透明釉 全面	内面草花文、見込みに5弁花文、外面に唐草 文、裏銘は渦福染付	畳付釉剥ぎ 砂目付着		波佐見	1680) 1740
土坑98 80図2	小碗	口径(10.0) 高台径(3.6) 器高4.0	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を全面に掛 ける	鉄絵は一部しか見られない	畳付釉剥ぎ 砂目付着	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉

表51 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表1

82図1と2は八角形染付鉢で、口縁部の角が二股に分かれる。両者とも蛇ノ目高台の釉剥ぎ部に戸車形焼き台らしい環状の痕跡がある。82図6は瓦質土器の焙烙で内面口縁部に縦方向の凹線があるが、意図的に施されたものではなく、製作時の傷ではないだろうか。82図9は陶器の壺か瓶の胴部片で、内面に肩部と胴部の接合痕が明瞭に観察できる。82図10は陶器の仏花瓶で、外面に施釉された黒釉は飴釉にも近い色調である。82図11は染付蓋で、内面口縁部の打ち搔き部に煤が付着していることから、灯明皿として転用したものと思われる。82図12は外面に鉄釉を掛けた後、楕円形に釉剥ぎし、そこにオリーブ色の灰釉を掛け、外面頸部にのみオリーブ色の灰釉をかける特徴的なモチーフであるので、知見がなく、産地不明。82図13は土師質土器の甕で、口縁部に穿孔があり、そこだけ口縁部が高くなって孔を補強している。在地の胎土ではあるが、器形に類例がない。



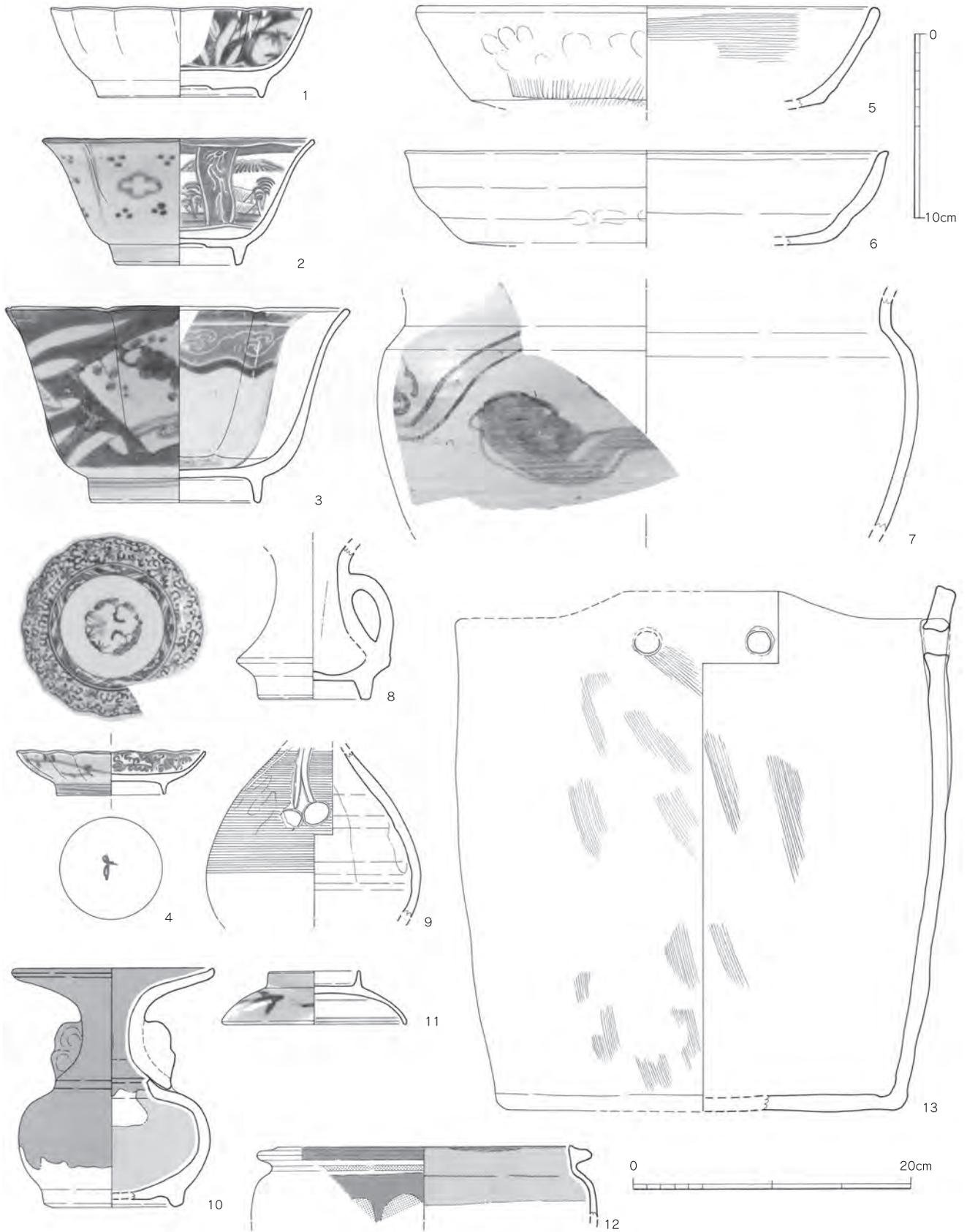
第80図 97・98号土坑出土陶磁器実測図(4～7は1/4、他は1/3)



第81图 99号土坑出土磁器实测图(1/3)

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							挿記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 図版番号	形状 通称名	()は復元値							
土坑98 80図3	香炉	口径(10.0)	陶器 橙白色	外面中位から内面 口縁部緑灰褐色の 灰釉掛け		—	変色なし 外面の発色不良	肥前	不明
土坑98 80図4	摺鉢	—	陶器 橙褐色	内外鉄釉	摺り目16本単位	—	外面中位の器 面は荒れている	肥前	1750) 1860
土坑98 80図5	鉢	口径(52.0)	陶器 淡橙褐色	外面内外鉄釉掛け	胴部のタタキの上に肥厚口縁部が貼り付けている 内面はタタキナデ消し	口縁部に焼成 不良の部分がある貝目跡か		肥前	1690) 1750
土坑98 80図6	摺鉢	底径8.7	陶器 赤褐色		摺り目11本単位 外底糸切り	見込みに胎土目 跡3つ、外底胎 土目跡5つ		肥前	1620) 1690
土坑98 80図7	摺鉢	底径14.1	陶器 橙灰褐色	内外鉄釉	摺り目16本単位	畳付釉剥ぎ 高台内面に環状 の砂目跡付着	外面中位の器 面は荒れている	肥前	1750) 1860
土坑99 81図1	碗 端反形	口径11.6 高台径4.8 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉 全面 釉切れあり	外面は不明花文 内面口縁部にダミ帯、見 込みに岩波文染付	畳付釉剥ぎ 高台内に砂目 付着		波佐見	1820) 1860
土坑99 81図2	碗 端反形	口径12.0 高台径4.0 器高5.4	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文	畳付釉剥ぎ 高台内に砂目 付着		肥前	1820) 1860
土坑99 81図3	碗	口径(13.2) 高台径4.6 器高5.6	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を全面に掛 ける	外面の上絵は赤彩の折れ松葉か、内面は緑・ 黒彩の松文か 見込みの蛇ノ目釉剥ぎ部は 緑彩	畳付釉剥ぎで、 胎土目跡4つ あり		肥前	不明
土坑99 81図4	碗 腰張形	口径8.2 高台径3.4 器高5.5	磁器 灰白色	発色悪く、暗い透 明釉 全面	外面は山水文、見込みに岩波文を染付	畳付釉剥ぎ		伊万里	1780) 1810
土坑99 81図5	碗 腰張形	口径(8.3) 高台径3.4 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	無文	畳付釉剥ぎ		伊万里	1780) 1810
土坑99 81図6	小碗 端反形	口径9.2 高台径3.4 器高5.0	陶器 黄灰白色	発色の悪い透明釉を全面掛けした後、口縁部全周に緑色の灰釉を流 し掛け		底部釉剥ぎ		肥前	1820) 1860
土坑99 81図7	小碗 端反形	口径9.4 高台径3.2 器高5.0	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛けした後、口縁部全周に緑色の灰釉を流し掛け		底部釉剥ぎ		肥前	1820) 1860
土坑99 81図8	碗 端反形か	高台径4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面は松文 見込みに松文染付	畳付釉剥ぎ 高台内面に砂 目土付着		波佐見	1820) 1860
土坑99 81図9	碗 端反形	口径(11.3) 高台径5.0 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面は松文 内面口縁部に袈裟襷文帯、見 込みに松文染付	畳付釉剥ぎ 高台内に砂目 付着		伊万里	1780) 1810
土坑99 81図10	碗 広東形	口径(12.0) 高台径6.4 器高6.3	磁器 灰白色	発色の悪い透明釉 全面	外面は山水文と思われる雲か波文、見込 みに岩波か波濤文を染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ 目1ヶ所		伊万里	1780) 1810
土坑99 81図11	碗 広東形	口径(11.7) 高台径6.1 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉 全面 釉切れあり	外面は山水文を染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ 目3ヶ所		伊万里	1780) 1810
土坑99 81図12	小碗 筒形	口径6.6 高台径3.7 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面はデザイン化した植物文 外面胴下位 は松葉文、内面見込みに5弁花文を染付け	畳付釉剥ぎ 高台内に砂目 付着		伊万里	1780) 1810
土坑99 81図13	小皿	口径(12.4) 高台径(7.0) 器高2.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面唐草文、内面扇文、見込みに環状松竹 梅文を染付け	畳付釉剥ぎ		伊万里	1740) 1780
土坑99 81図14	小皿 5寸皿	口径(13.6) 高台径(7.5) 器高4.0	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面唐草文、内面墨引きの不明モチーフ、 見込みに5弁花文、裏銘に渦福の染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ 目5つあり		波佐見	1820) 1860
土坑99 81図15	皿	口径(25.3) 高台径14.8 器高3.6	磁器 灰白色	青みのある透明釉 全面	内面墨引きによる菊花・雲文、見込みに環状 松竹梅文、外面に唐草文、裏銘に「富貴長春」 染付	畳付釉剥ぎ ハリ 目跡が見込みに5 つ、外底に4つ	内面のハリ目 跡は2個単位	肥前	1740) 1780
土坑99 82図1	鉢 8角形	口径(14.2) 高台径9.0 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面モチーフ不明、内面は見込みに8角の星形 区画文の中に墨引きの鷲、体部に墨引きで窓文 を描き、その中に樹文を描いている 染付	蛇ノ目高台に 釉剥ぎ		伊万里	1780) 1820
土坑99 82図2	鉢 8角形	口径(18.5) 高台径9.0 器高10.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面三曜文4つの内部に、格子菱形に星のつくも のと雲文を迎ごとに交互に入れ、内面は墨引きの 鳳凰の帯区画内に山水文、見込みに水鳥の染付け	蛇ノ目高台で、 釉剥ぎ		伊万里	1780) 1820
土坑99 82図3	鉢 8角形	口径10.2 高台径5.8 器高2.4	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛 ける	外面墨引きによる白鷺と扇窓が交互に入り、窓の 1つには梅樹と川のモチーフがある。内面は口縁 下に墨引きによる雲文、見込みに瓢箪文染付	畳付釉剥ぎ	歪みあり	伊万里	不明
土坑99 82図4	小皿 花卉形	口径10.2 高台径5.8 器高2.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面唐草文、内面花唐草、見込みに半菊文 帯に環状松竹梅文染付け、裏銘は寿か染付	畳付釉剥ぎ		伊万里	1680) 1710

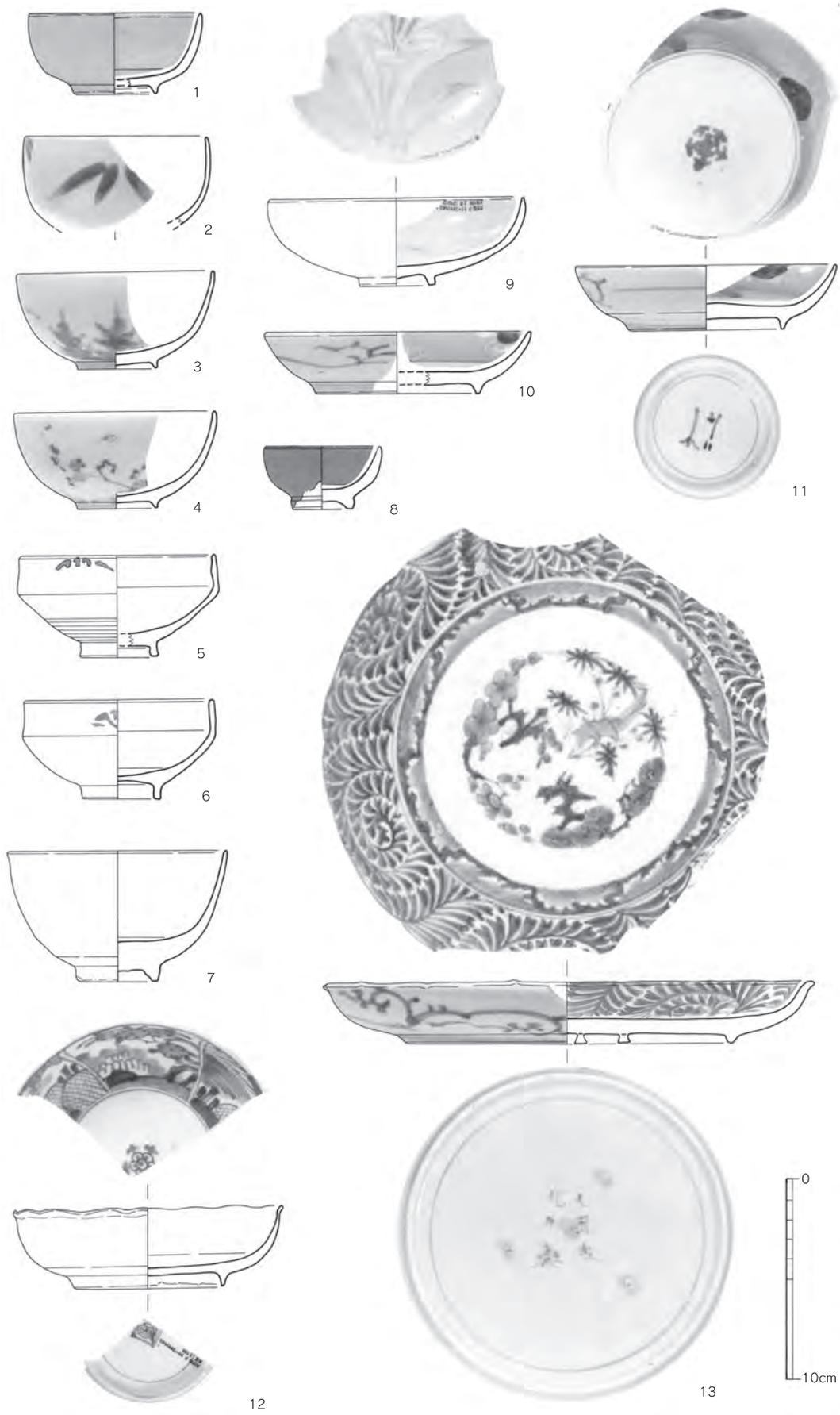
表 52 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表2



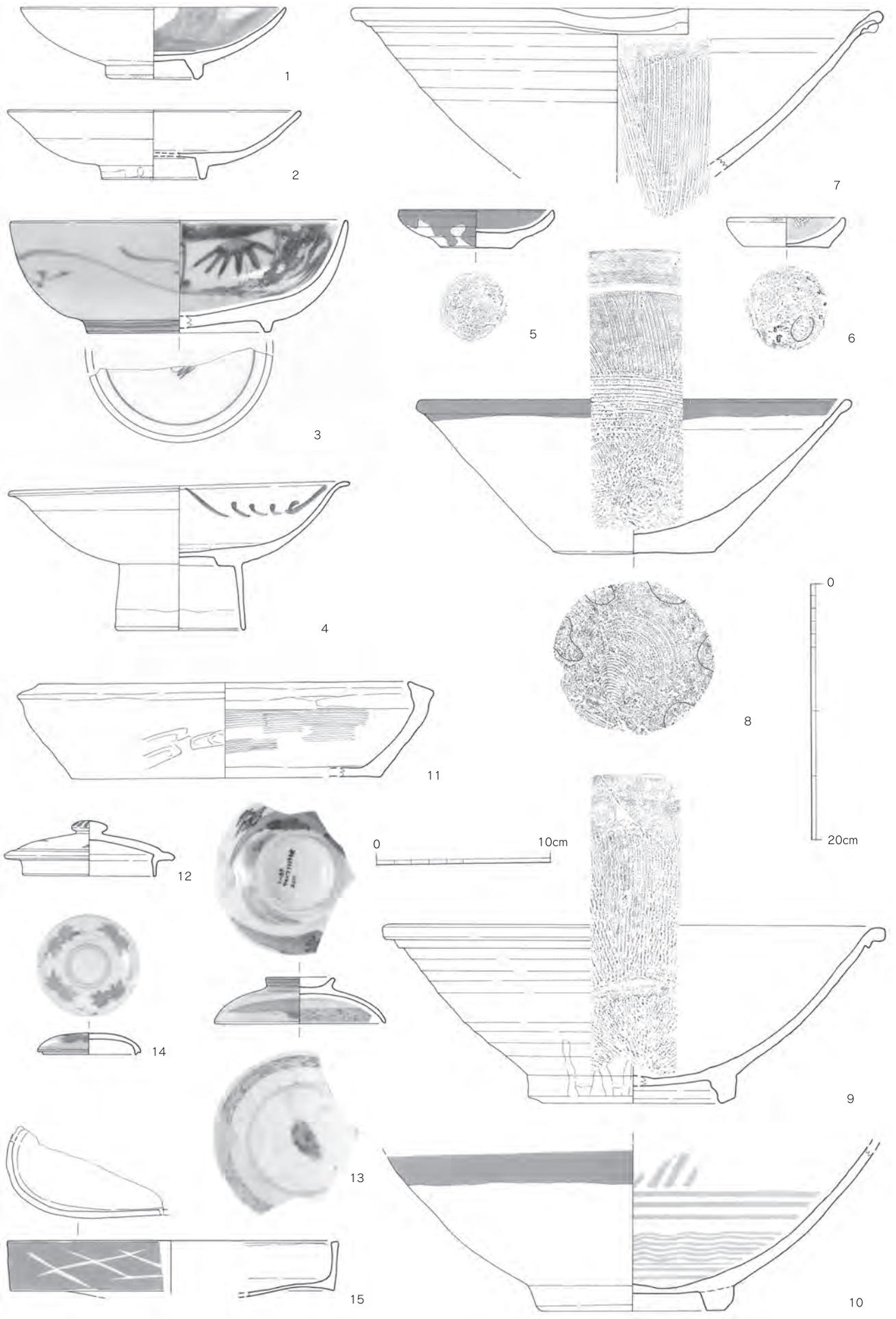
第82図 99号土坑出土土器・陶磁器実測図(7・13は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑99 82図5	焙烙	口径(25.0) 底部径(19.0)	土師質土器 黄橙灰色	—	外面タテハケの上に上半分オサエ、外底はハケ、内面ハケ状のナデ	不明	外面は灰黒化しているが、内面は変色なし	在地	不明
土坑99 82図6	焙烙	口径(26.0) 底径(19.4)	瓦質土器 緑灰白色 白色 粒子を多く混入	—	口縁部は内外カキ目状のヨコナデ、体部の接合部はオサエのちナデ	不明	外面は煤付着で灰黒化、内面は底部が強く変色	在地	不明
土坑99 82図7	甕 半胴甕	肩部径(37.8)	陶器 にぶい黄灰色 軟質	外面から内面口縁部まで白化粧土刷毛掛け、外面は鉄絵と緑彩で樹文を施し、その上に内外面に緑灰色の灰釉をかける	—	—	—	肥前	不明
土坑99 82図8	柔燭 手付き瓶形か	高台径6.2 最大径8.2	陶器 赤褐色	外面鉄釉	—	—	—	肥前	不明
土坑99 82図9	壺か瓶	胴部径11.4	陶器 黄白色 精良	外面カキ目で、紐状の浮文貼り付け、外面は鉄釉の上に上半に鉛釉を上掛けし、さらに灰白色の薬灰釉を掛けている	—	—	—	肥前か	不明
土坑99 82図10	仏花瓶 盤口形	口径(10.9) 高台径7.5 器高12.9	陶器 暗灰色 白色粒子を含む	外面から内面上半は光沢のある暗褐色の灰釉、内面下部は緑灰色の灰釉 型押し成形の耳を対面に貼り付け	—	—	—	肥前	不明
土坑99 82図11	蓋	裾径8.0 器高2.9 つまみ径5.0	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面は雁文とススキ文、内面天井部は不明モチーフ、天井部にススキ文染付	つまみ上端釉剥ぎ	内面口縁部の打ち掻きに煤が付着	伊万里	1780) 1810
土坑99 82図12	小甕	口径(18.0)	低火度の施釉陶器 橙黄白色	外面鉄釉後、楕円形に釉割し、そこにオリーブ色の灰釉掛け、外面頸部にのみオリーブ色の灰釉がかかる 内面光沢のある鉛釉	—	—	—	不明	不明
土坑99 82図13	焙烙	口径(35.6) 底部径(29.8) 器高38.1	土師質土器 にぶい黄橙灰色 がにぶい暗黄灰色 をはさむ 粗放	—	内面丁寧なハケ 口縁部は穿孔のある部分が高くなっている	不明	内外器面灰黒化だが、付着物はない	在地	不明
土坑100 83図1	鉢 蓋物	口径(8.5) 高台径(4.2) 器高4.0	磁器 灰白色	青磁釉 全面	—	—	—	伊万里	不明
土坑100 83図2	碗 半球形	口径(9.2)	陶器 黄灰色	透明釉の上に花を赤彩、竹笹文を緑彩で上絵付け	—	高台部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀後半) 19世紀中葉
土坑100 83図3	碗 浅半球形	口径(9.8) 高台径3.9 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は若松文を対面に染付	—	—	伊万里	1710) 1750
土坑100 83図4	碗 浅半球形	口径(10.0) 高台径4.0 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は椿・松・菊樹文を染付 残存度からもう1つモチーフがあるはず	—	—	伊万里	1710) 1750
土坑100 83図5	碗 腰折れ形	口径(9.5) 高台径3.8 器高5.1	陶器 灰白色	外面に鉄絵の竹笹文を入れた後、黄灰色の灰釉を内面から外面下位に掛ける 高台削り出し	—	高台部露胎	—	肥前	18世紀前葉) 18世紀中葉
土坑100 83図6	碗 腰折れ形	口径9.2 高台径3.8 器高4.9	陶器 黄灰白色	外面に鉄絵の竹笹文を入れた後、黄灰色の灰釉を内面から外面下位に掛ける 高台削り出し	—	高台部露胎	—	肥前	18世紀前葉) 18世紀中葉
土坑100 83図7	碗 半球形	口径(10.8) 高台径4.0 器高6.5	陶器 灰白色	透明釉 壘付と外底以外に掛ける	高台削り出し	—	—	肥前	不明
土坑100 83図8	小碗	口径(5.6) 高台径3.1 器高3.1	陶器 黄灰白色	内面から外面下位まで鉄釉掛け	—	高台露胎	—	肥前	1690) 1780
土坑100上層 83図9	小皿 5寸皿	口径(12.5) 高台径3.8 器高4.4	陶器 黄白色	透明釉 外底以外全面 貫入あり	見込みに緑・赤・白彩で描かれた水仙を上絵付け 外底に円形の沈線入る	—	—	肥前	不明
土坑100 83図10	小皿 5寸皿	口径(14.2) 高台径(10.2) 器高3.1	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面墨引きの半菊文染付、見込みと裏銘は欠損のため存在不明	—	—	波佐見	1680) 1740
土坑100 83図11	小皿 5寸皿	口径(12.9) 高台径7.8 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉 全面 釉切れあり	外面唐草文、内面墨引きの半菊文、見込みに5弁花文型紙摺り、裏銘に「大明年製」の染付	—	—	波佐見	1680) 1740
土坑100 83図12	皿 花卉口縁	口径(13.4) 高台径(7.4) 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面区画内に花文、見込みに5弁花文、裏銘角福染付	—	—	伊万里	1700) 1740
土坑100 83図13	皿 花卉口縁	口径(24.3) 高台径16.1 器高3.1	磁器 灰白色	青味のある透明釉 全面	外面唐草文、内面葉唐草文、雲文帯、見込みに環状松竹梅文、裏銘「大明成化年製」染付	—	—	伊万里	1700) 1740
土坑100 84図1	小皿 5寸皿	口径(15.3) 高台径5.6 器高4.2	陶器 にぶい黄白灰色	内面白化粧土の打ち刷毛目、内面から外面下位にオリーブ色の灰釉	—	—	—	肥前	不明
土坑100 84図2	小皿 5寸皿	口径(16.6) 高台径6.1 器高4.0	陶器 緑黄灰白色	内面に白化粧土刷毛掛けし、内面から外面高台以外にオリーブ色の灰釉掛け 外底ヘラ削りにより、高台を削り出す	—	—	見込みの蛇ノ目釉剥ぎ部内面に重ね焼き痕あり	肥前	不明

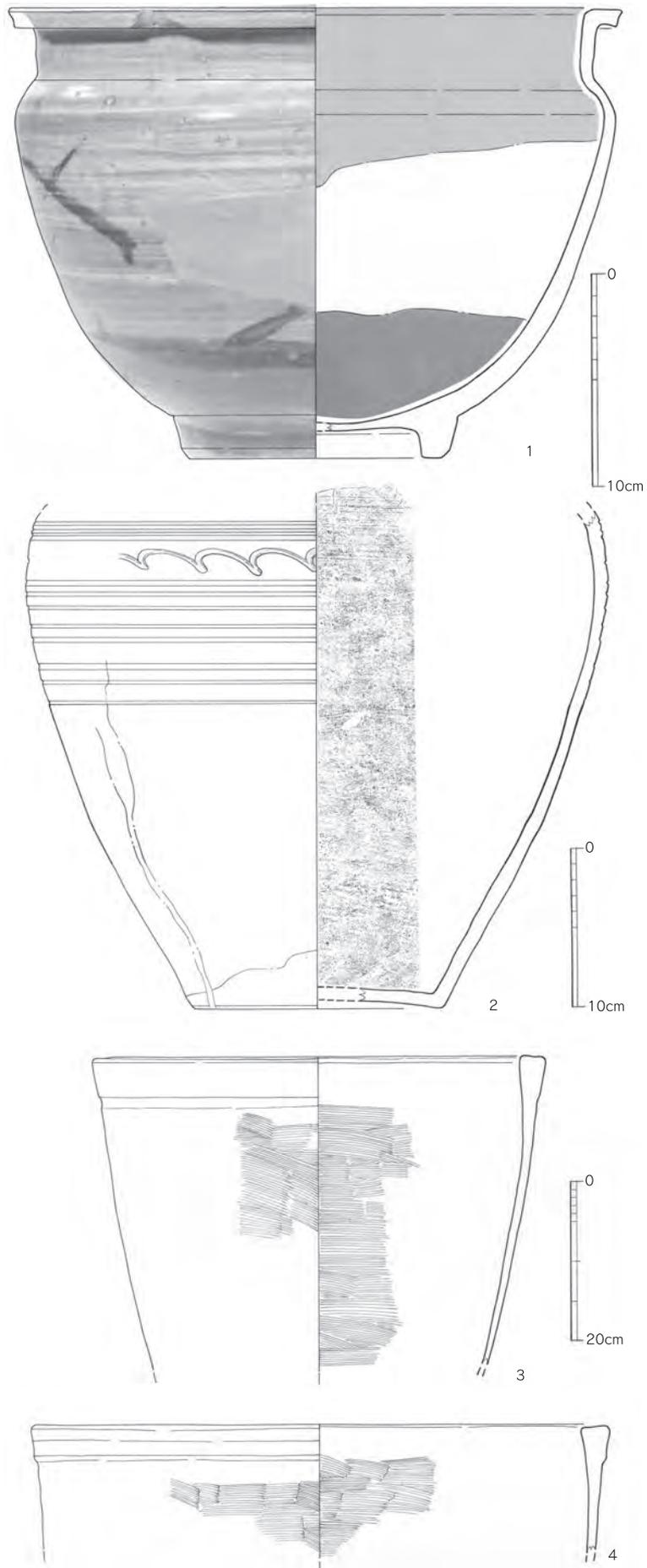
表 53 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表3



第83图 100号土坑出土陶磁器实测图(1/3)



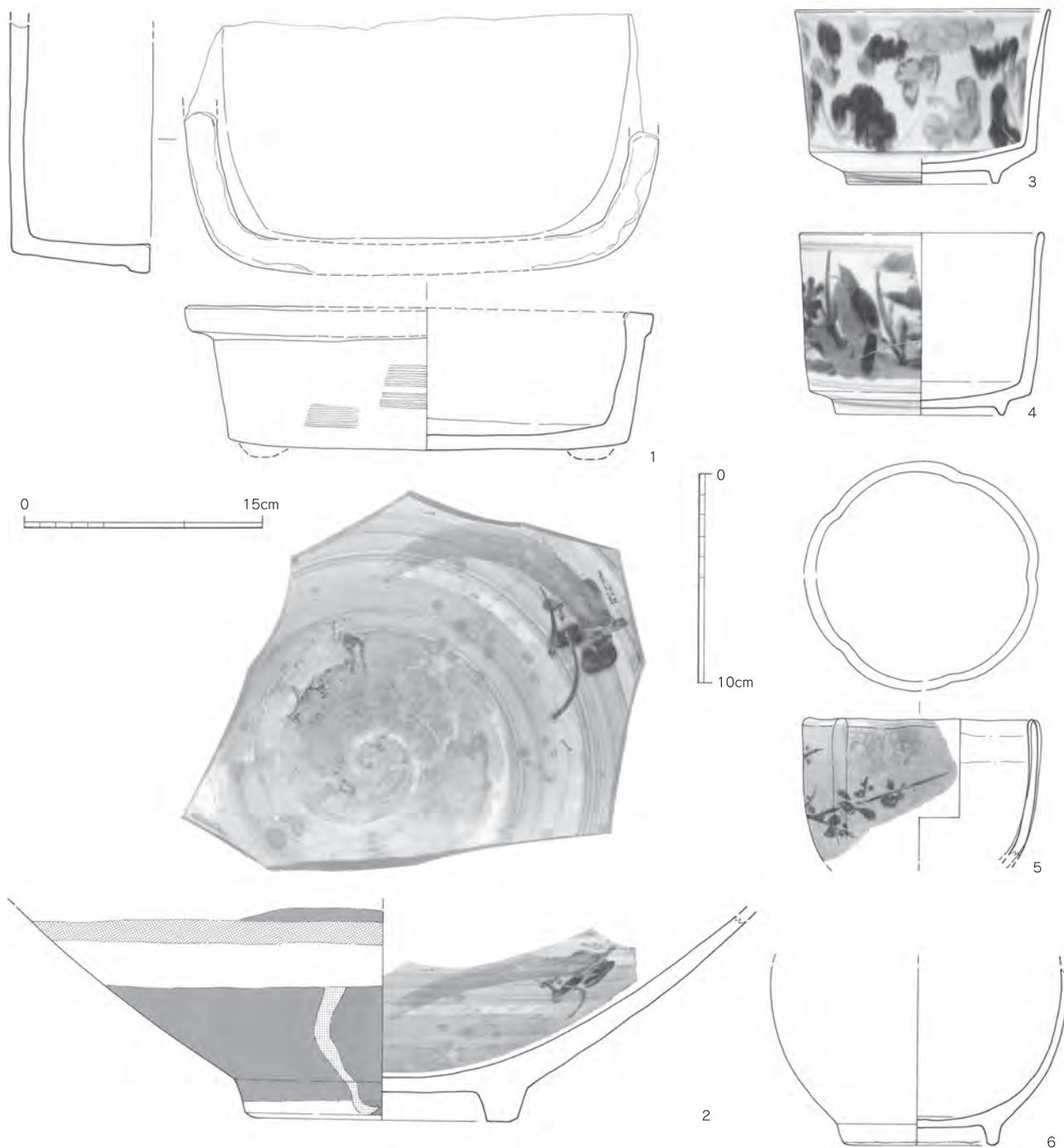
第84図 100号土坑出土土器・陶磁器実測図1(7～10は1/4、他は1/3)



第85図 100号土坑出土土器・陶器実測図(2は1/4、3・4は1/8、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑100 84図3	皿	口径(19.6) 高台径(10.6) 器高6.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面複数の区画に竹笹文等、見込み5弁花文、裏銘渦福染付	豊付釉剥ぎ		伊万里	1700) 1740
土坑100 84図4	台付皿	口径19.4 高台径7.2 器高8.7	陶器 暗黄灰色	内面に鉄絵の竹笹文を入れた後、黄灰色の灰釉を全面に掛ける 高台は別作り		高台下位釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目 釉剥ぎ部		肥前	18世紀前葉) 18世紀中葉
土坑100 84図5	杯	口径(8.8) 高台径4.1 器高2.2	陶器 橙褐色	内面から外面中位 まで鉄釉掛け	外底糸切り	外底縁に粘土 粒痕1つ	外底に煤付着 口縁部歪みあり	肥前	1690) 1750
土坑100 84図6 図版17	小皿 5寸皿	口径6.8 底径5.0 器高1.7	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕1つ	完形 内面煤 付着	在地	不明
土坑100 84図7	摺鉢	口径(40.1)	陶器 橙褐色 白色粒子混入	内外鉄釉	摺り目18本単位	—	外面中位の器 面は荒れている	肥前	1750) 1860
土坑100 84図8	摺鉢	口径(33.4)	陶器 橙褐色 白色粒子混入	内外口縁部のみ鉄 釉	内面摺り目の18本単位で、上端は湾曲して いる 外底糸切り	外底に胎土目 跡あり		肥前	1650) 1690
土坑100 84図9	摺鉢	口径(38.6)	陶器 底部は橙褐色、 胴以上は灰黒色	内外鉄釉 茶褐色を呈する	摺り目24本単位	見込みに環状の 器面剥落あり 豊付砂目付着	外面中位の器 面は荒れている	肥前	1750) 1860
土坑100 84図10	鉢	高台径14.7	陶器 橙褐色	外面上部は鉄釉、内面に白化粧土を掛け、櫛状描き取りした後、 黄緑灰色の灰釉を上掛け		見込みに胎土目 跡の痕跡が8つ、 豊付に8つある		肥前	1690) 1750
土坑100 84図11	火鉢	口径(32.0) 底径11.9 器高7.4	土師質土器 灰暗褐色に黒灰 色が挟まれる	—	外面器面摩滅で調整不明 内面ハケ 口縁 部は丁寧なナデ、外底は未調整	不明	内面から口縁 部に煤付着	在地	不明
土坑100 84図12	蓋物蓋	裾径(7.8) 最大径(9.8) 器高3.3	陶器 黄灰白色	外面透明釉掛けの上に、緑彩で竹笹文を、つまみには菊花文の上 絵を描く		受け部釉剥ぎ	京焼風陶器	肥前	不明
土坑100 84図13	蓋	裾径(9.8) つまみ径4.0 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	外面は風水文、内面口縁部袈裟襷文帯、見 込みに岩波文を染付	つまみ上端釉 剥ぎ		伊万里	不明
土坑100 84図14 図版17	合子蓋	裾径5.9 器高1.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面は楓文と折れ松葉文を染付	受け部釉剥ぎ	ほぼ完形	伊万里	不明
土坑100 84図15	鉢 餌入れ	長軸不明 短軸(6.5) 器高2.9	磁器 灰白色	外面鉄釉、内面白 磁釉	外面は格子文を鉄釉を掻き取って施文	底部露胎 口唇部釉剥ぎ	型作りで歪み 大きい	肥前	不明
土坑100 85図1	甕 半胴甕	肩部径(28.6) 高台径(12.6) 器高21.1	陶器 にぶい赤紫灰色	内外面下位に鉄釉刷毛掛けし、外面中位から内面口縁部まで白化 粧土刷毛掛け、鉄絵を施し、その上に外面下位から内面口縁部下 まで緑灰色の灰釉をかける		見込みに胎土 目状の砂目付 着 豊付釉剥ぎ	8割残存	肥前	不明
土坑100 85図2	甕 半胴甕	最大径(36.3) 底部径(15.9)	陶器 赤橙色と紫灰色 のマーブル	外面カキ目が胴中位まで水平、下位は斜めに施され 外面肩部に 波文と多条沈線は入る 内面は格子目タタキ当て具痕が入り、胴 中位以上はナデ消し 見込みはタタキが放射状に入る 内外鉄釉 薄掛けし、外面に白化粧土掛け流し		外底釉剥ぎ		肥前	18世紀か
土坑100 85図3	大甕	口径(56.6)	土師質土器 にぶい灰~灰黒色 白色粒子多い 粗放	—	内外細かい目のハケ後、口縁部はナデ	不明	外面から内面口 縁下まで器面剥 落が著しい	在地	不明
土坑100 85図4	大甕	口径(72.0)	土師質土器 にぶい灰~灰黒色 白色粒子多い 粗放	—	内外細かい目のハケ後、口縁部はナデ	不明	内面変色や器 面の剥落なし	在地	不明
土坑100 86図1 1602	火鉢 方形	器高9.2	土師質土器 灰橙褐色に青灰 色が挟まれる	—	外面はハケ、口縁部は丁寧なナデ、内面はナデ、 見込みはハケ状のナデ 外底はケズリで、端部 のみナデ 角に脚が付いていた痕跡あり	不明	煤はないが、内 面が暗褐色に変 色している	在地	不明
土坑100 86図2	鉢	高台径17.3	陶器 橙褐色	外面下半は鉄釉を刷毛掛け、上位は白化粧土の帯状掻き取りの上 にオリブ色の灰釉を掛け、内面は白化粧土を掛け、櫛状描き取 りした後、黄緑灰色の灰釉と鉄絵で上絵を描く		見込みに胎土 目跡の痕跡が 8つ、豊付に8 つある		肥前	1690) 1750
土坑100 86図3	鉢 蓋物	口径12.1 高台径7.2 器高8.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面は牡丹花唐草文を染付 呉須の滲みあり	豊付釉剥ぎ	8割残存	伊万里	不明
土坑100 86図4	鉢 蓋物	口径(11.6) 高台径(8.0) 器高8.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面は花文を染付	豊付釉剥ぎ 高台内面に砂 目付着	4割残存	伊万里	不明
土坑100上層 86図5	鉢	口径(11.3)	陶器 紫灰~暗黄灰褐色 白色粒子の混入あり	外面オリブ色の 灰釉 貫入あり	外底ヘラ削りにより、高台を削り出す 胴部は花卉状	—	変色なし	京焼か	不明
土坑100 86図6	瓶	高台径7.3	陶器 にぶい紫灰褐色	白化粧土を外底以 外に掛けた後、透 明釉を全面掛け		豊付釉剥ぎ 高台内面に砂 目付着		肥前	不明
土坑100東竹棚 87図1	皿	口径(21.2)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面無文、内面区画文染付、緑・赤・紫・金 彩で花入れの左に花文、右に牡丹文を上絵 付けしている			伊万里	不明

表54 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表4



第86図 100号土坑出土土器・陶磁器実測図2
 (1・2は1/4、他は1/3)

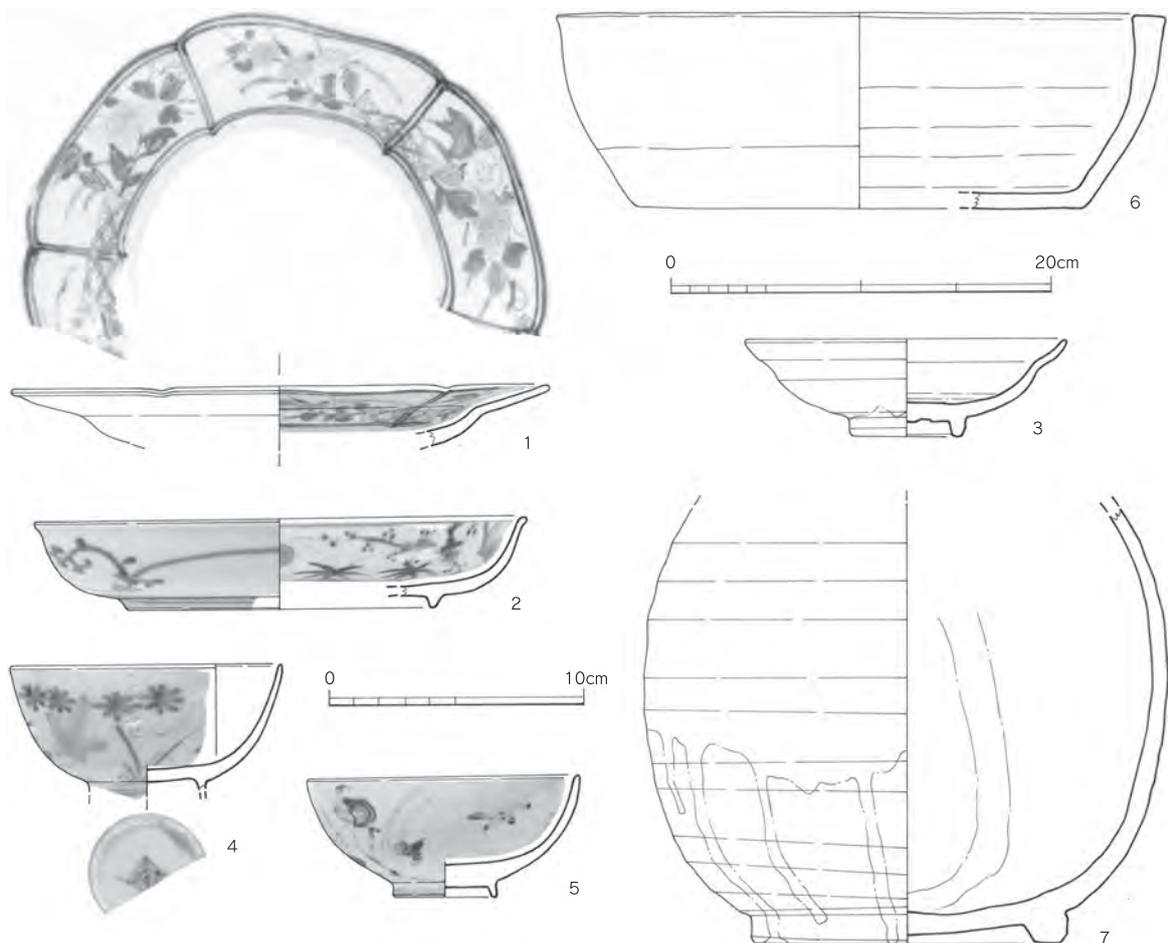
83図9は器形やモチーフが異なるが、外底に円刻があることから、京焼風陶器か。83図10・11は染付の5寸皿で、モチーフや透明釉の釉調が同じことから、同じ窯で焼かれてセットで購入したものである。

84図3は染付皿で、ハリ目跡は均等に配置されていないものが残っている。84図4は陶器の台付皿で、見込みの蛇ノ目釉剥ぎ部に同じ高台裾部径の重ね焼き痕がある。84図6は土師器小皿の完形品で、内面の全面に煤が付着しており、口縁部の1部分が特に黒化しているので、灯明皿として使用しているとわかる。84図7は陶器の摺鉢で、口縁部幅の広い所と狭い所とあり、断面図は短い部分をとっている。84図15は磁器の餌入れで、外面は鉄釉を掛けたあと、それを沈線で削って格子目のモチーフにしている。

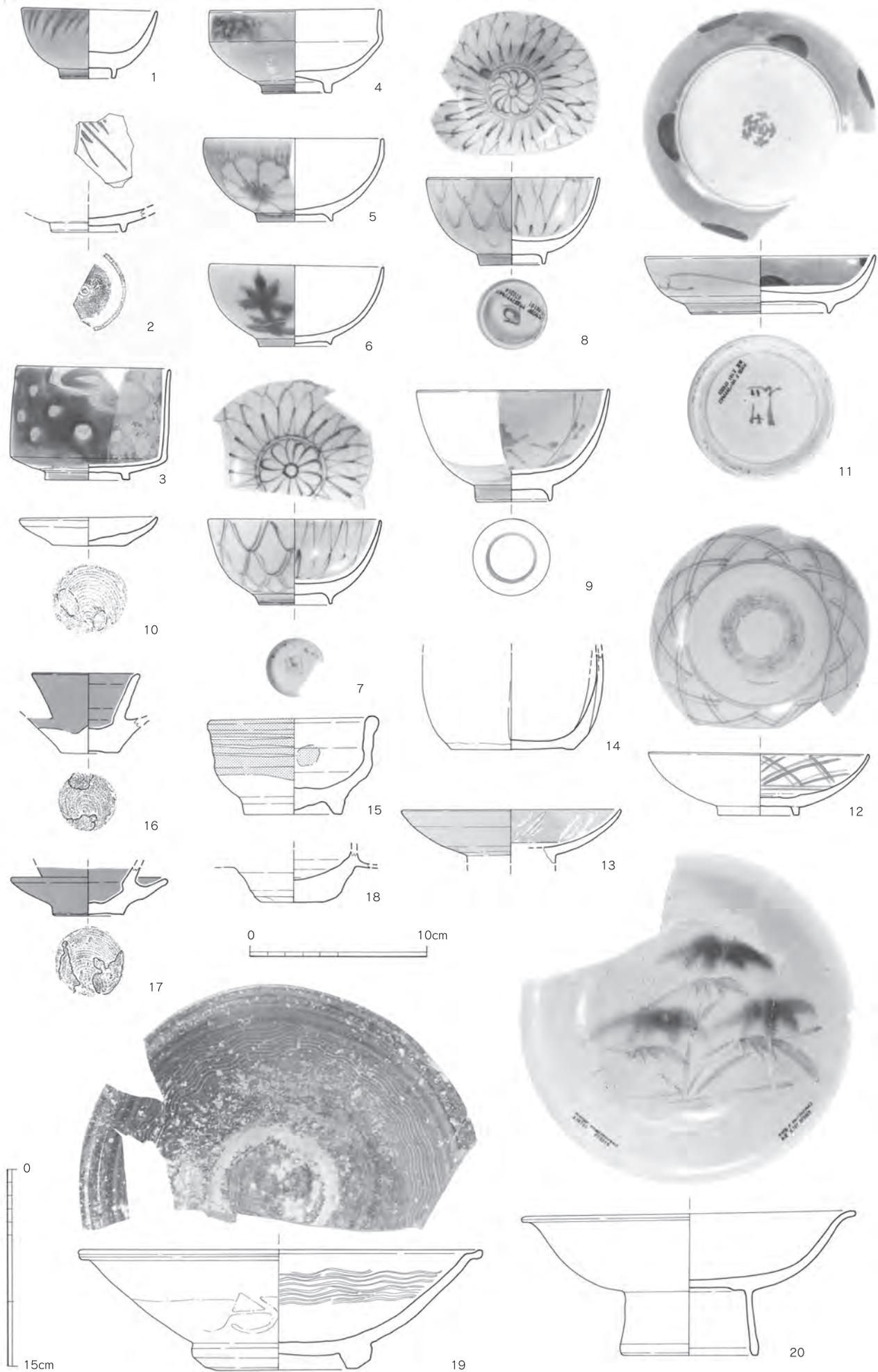
85図3は土師質土器の大甕で、外面から内面口縁下まで器面剥落が著しいことから、埋甕だろう。

86図1は土師質土器の火鉢で、平面方形になる。口縁端部の小さな欠損が著しいが、これは使用痕跡と思われる。86図4は染付の蓋物の鉢で下地に白化粧土を掛けているので、黄色の発色が良い。

87図1は、内面の染付の区画文な中に緑・赤・紫・金彩の4色で上絵付けされた染錦皿であり、このうち緑彩は変色して黄色になっている。87図7は瓶で、胎土は赤紫褐色だが、部分的に焼成不良で、内面側が黄橙色で外面側が黒灰色に発色している。



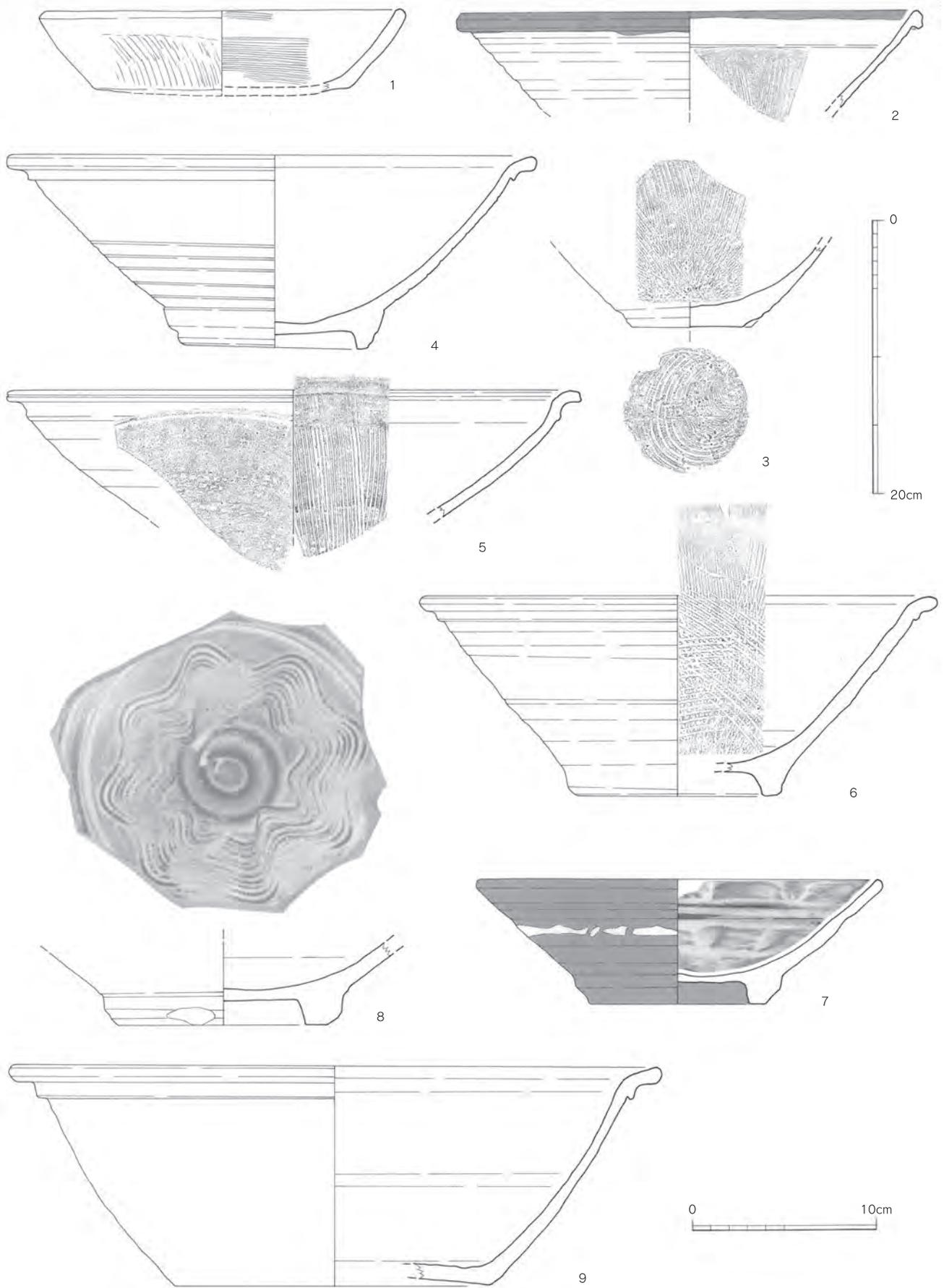
第87図 100号土坑東竹柵出土土器・陶磁器実測図(6は1/4、他は1/3)



第88図 101号土坑出土土器・陶磁器実測図1(19は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑100東竹棚 87図2	皿	口径(19.4) 高台径(12.2) 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面唐草文、内面梅樹文竹筵文等染付、見込みと裏銘は欠損のため存在不明	豊付釉剥ぎ		伊万里	1700) 1740
土坑100東竹棚 87図3	小皿 5寸皿	口径(12.5) 高台径7.5 器高3.8	陶器 緑黄灰白色	内面から外面高台以外に緑灰色の灰釉	外底ヘラ削りにより、高台を削り出す	見込みに蛇ノ目釉剥ぎし、その内端に重ね焼き痕		肥前	不明
土坑100東竹棚 87図4	碗 半球形	口径(10.6) 高台径5.6 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉 全面 発色悪く褐色がかかる	菊花と5葉文のコンニャク印判、裏銘は角福染付	豊付け釉剥ぎ 高台内面に砂目付着		肥前	1750) 1770
土坑100東竹棚 87図5 図版17	碗 浅半球形	口径10.7 高台径4.1 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉 全面 発色不良	外面は牡丹・蝶文を染付	豊付釉剥ぎ	ほぼ完形	伊万里	1710) 1750
土坑100東竹棚 87図6	火鉢	口径(32.0) 底径24.0 器高10.4	土師質土器 灰茶褐色に青灰色が挟まれる	—	外面下半は横ナデ、上半は斜めナデ、内面はナデ、見込みはハケ 口縁部は丁寧なナデ、外底はケズリで、端部のみナデ	不明	内面から口縁部に煤付着	在地	不明
土坑100東竹棚 87図7	瓶	高台径12.0 最大径20.6	陶器 赤紫褐色	外面下位に鉄釉掛け		高台露胎		肥前	不明
土坑101 88図1	小碗	口径7.7 高台径3.1 器高4.0	磁器 やや暗い灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は雨降文を染付	豊付釉剥ぎ	半分残存	波佐見	1780) 1810
土坑101 88図2	碗	高台径(4.3)	陶器 灰白色	内面鉄絵の上に内外透明釉 裏銘に線刻で「小柳」		外底は釉剥ぎ	京焼風陶器	肥前	不明
土坑101 88図3	碗 筒形	口径8.8 高台径4.8 器高6.5	陶器 黄灰色 混入物でざらつく	内面から外面下位まで透明釉の上に緑地に墨引き状に円と雲形を設け、円の中は赤彩で3つの点を、雲形には青・黄・赤で雲の輪郭を描く 口唇部は口鏝		高台部露胎	8割残存	京焼か	18世紀後半) 19世紀中葉
土坑101 88図4	碗 腰折れ形	口径(9.8) 高台径3.8 器高4.8	陶器 黄灰白色	外面に鉄絵の竹筵文を入れた後、緑色の灰釉で竹筵文を上絵付けし、最後に黄灰色の灰釉を内面から外面下位に掛ける 高台削り出し		高台部露胎		肥前	18世紀前葉) 18世紀中葉
土坑101 88図5	碗 浅半球形	口径(10.2) 高台径4.3 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は水裂文地に菊花文を染付 呉須のしみあり	豊付釉剥ぎ		伊万里	1710) 1750
土坑101 88図6	碗 浅半球形	口径(9.9) 高台径4.1 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は若松文を対面に染付 配置から4ヵ所にあったはず	豊付釉剥ぎ	半分残存	伊万里	1710) 1750
土坑101 88図7	碗	口径(9.8) 高台径4.0 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面2重、内面1重の網目文、見込みに菊花文、裏銘に崩れた渦福染付	豊付釉剥ぎ		波佐見	1750) 1770
土坑101 88図8	碗	口径(9.8) 高台径3.8 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面2重、内面1重の網目文、見込みに菊花文、裏銘に崩れた渦福染付	豊付釉剥ぎ		波佐見	1750) 1770
土坑101 88図9	碗	口径10.9 高台径4.4 器高6.4	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は菊花・雪ノ輪文を染付	豊付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	豊付に砂目付着	波佐見	1680) 1740
土坑101 88図10	小皿	口径(7.9) 底径4.1 器高1.5	土師質土器 明黄灰色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に粘土粒痕1つ	完形 内面に赤変あり	在地	不明
土坑101 88図11	小皿 5寸皿	口径13.2 高台径7.9 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面ダミの半菊文、見込みに5弁花文型紙摺り、裏銘に「大明年製」の染付	豊付釉剥ぎ		波佐見	1680) 1740
土坑101 88図12	小皿 5寸皿	口径12.6 高台径4.5 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面2重網目文	豊付釉剥ぎ 砂目付着 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		波佐見	1750) 1810
土坑101 88図13	小皿	口径(12.3)	陶器 灰色	内面白化粧土の吹刷毛目の上に内外茶褐色の灰釉		見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	不明
土坑101 88図14	鉢	底径(7.0)	陶器 紫灰～暗黄灰褐色 白色粒子混入あり	外面オリーブ色の灰釉 貫入あり	外底ヘラ削りにより、高台を削り出す 胴部は花卉状		変色なし	京焼か	不明
土坑101 88図15 図版17	鉢 火入れ	口径9.6 高台径5.5 器高5.5	陶器 橙褐色	口縁部から外面胴上半に白化粧土掛け、櫛状釉剥ぎ		胴下半露胎	内面変色なし	肥前	不明
土坑101 88図16	灯明受皿	口径6.1 底径3.3	陶器 橙褐色	鉄釉 内面から外面下位まで 発色不良	外底糸切り 口縁部1部打ち掻き	外底に粘土粒痕1つ		肥前	不明
土坑101 88図17	灯明受皿	最大径(9.0) 底径4.0	陶器 橙褐色	鉄釉 内面から外面下位まで	外底糸切り	外底に粘土粒痕1つ		肥前	不明
土坑101 88図18	土瓶蓋	—	土師質土器 灰白色 精良	—	底部ヘラケズリ	不明		蒲池焼	不明

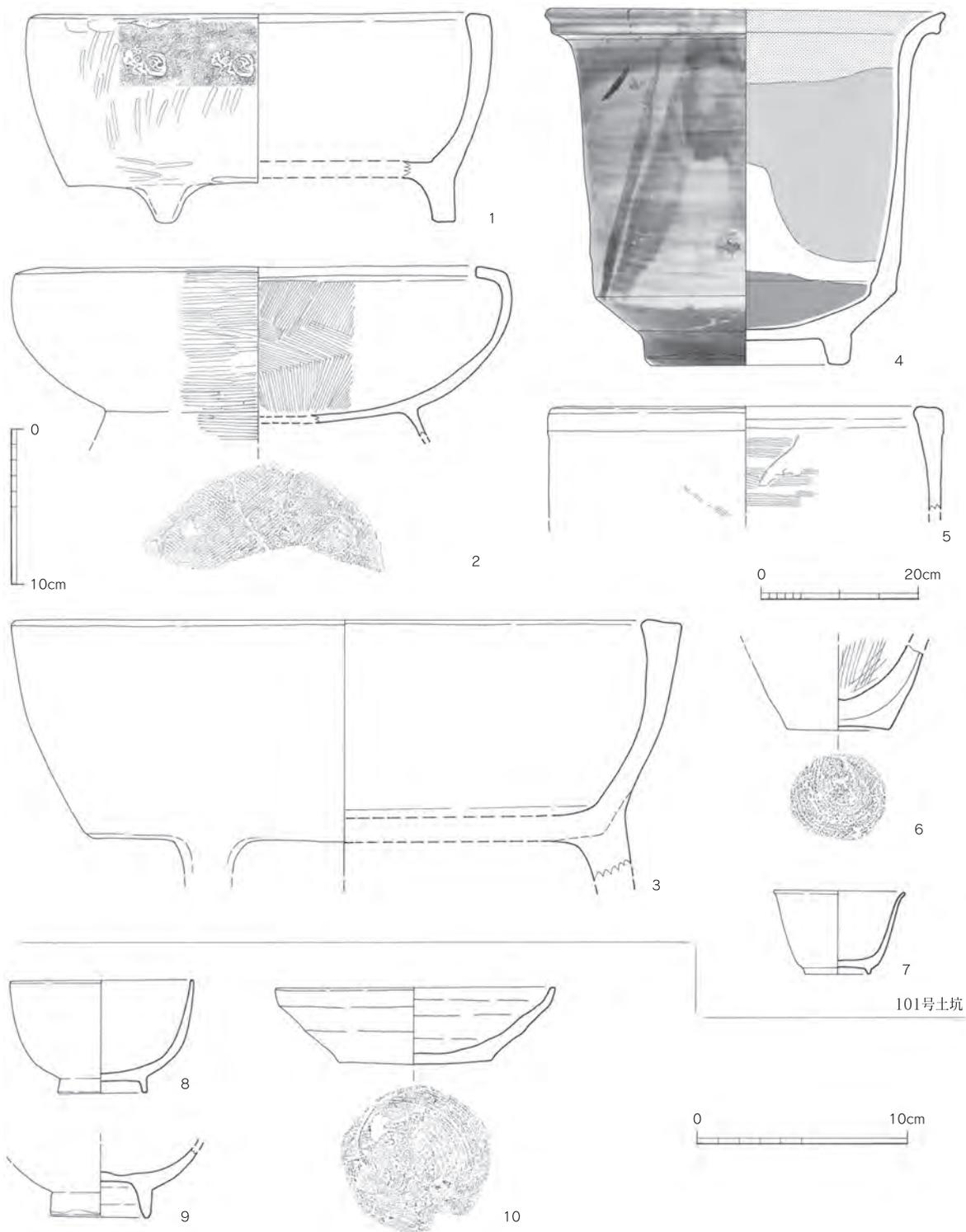
表55 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表4



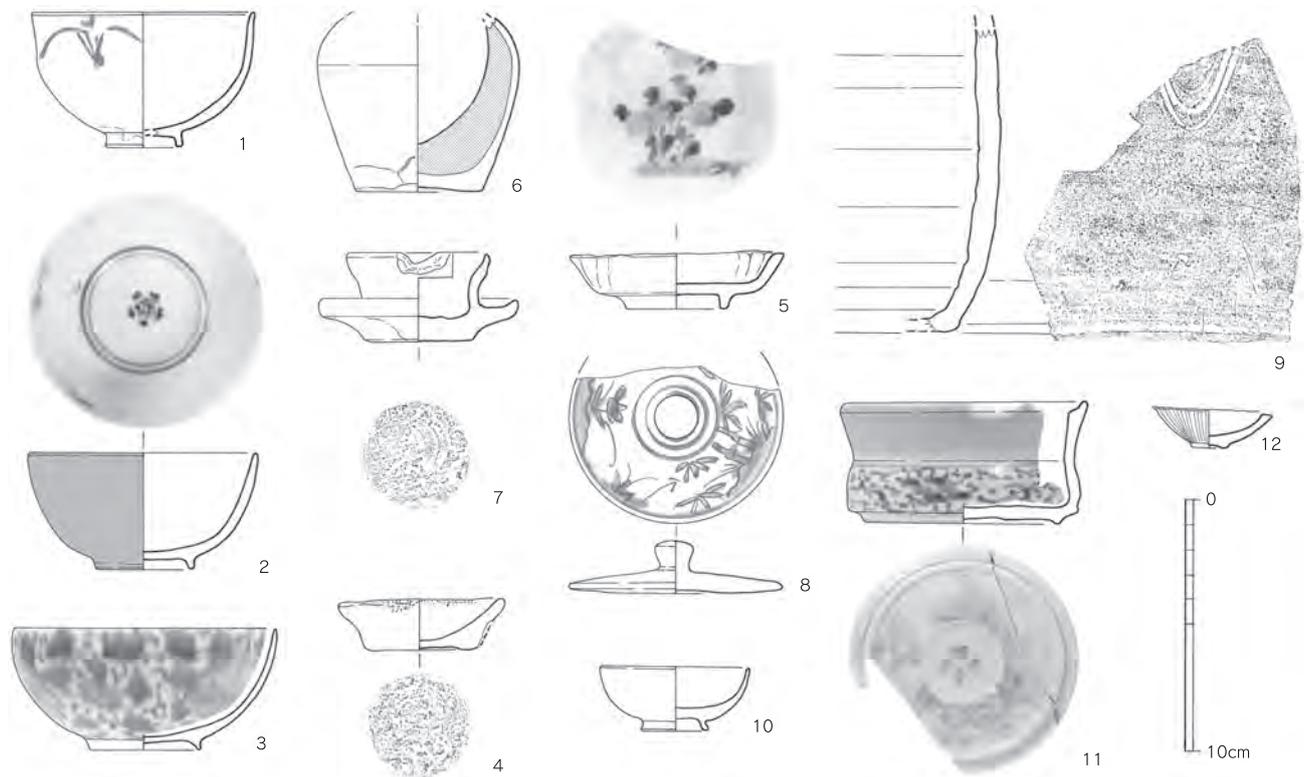
第89图 101号土坑出土土器・陶磁器实测图(2(2~6・9は1/4、他は1/3))

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見			
							挿入番号	形状	()は復元値	特記事項
図版番号	通称名									
土坑101 88図19	鉢	口径(30.7) 高台径13.7 器高9.2	陶器 灰～紫灰色	内面白化粧土の櫛状掻き取りの上に内外オリーブ色の灰釉 外面は口縁部のみ施釉		豊付アルミナ付着 見込みは蛇ノ目状にアルミナ釉剥ぎ	半分残存	肥前	1690 } 1750	
土坑101 88図20	台付皿	口径18.9 高台径7.8 器高8.2	陶器 黄灰色	内面に鉄絵の竹笹文を入れ、緑色の灰釉で竹笹文を上絵付けした後、黄灰色の灰釉を全面に掛ける 高台は別作り		高台下位釉剥ぎ		肥前	18世紀前葉 } 18世紀中葉	
土坑101 89図1	鉢	口径(20.0) 底径(14.0)	土師質 暗黄茶褐色 金雲母多い	—	外面タテハケ、内面カキ目、口縁部ナデ	不明		在地	不明	
土坑101 89図2	摺鉢	口径(34.0)	陶器 赤紫色	鉄釉が口縁部だけに掛かる	摺り目単位不明	—		肥前	1650 } 1690	
土坑101 89図3	摺鉢	底径8.7	陶器 灰紫色		摺り目12本単位 外底糸切り	見込み胎土目跡5つ 外底胎土目跡4つあり		不明	不明	
土坑101 89図4	摺鉢	口径(38.7) 高台径13.8 器高14.1	陶器 にぶい黄橙～暗黄灰色	内外鉄釉	摺り目16本単位 外面ケズリ端部が沈線状に見える	見込み胎土目跡6つあり 豊付釉拭き取りか 豊付砂目付着	片口部の一部が残る	肥前	1750 } 1860	
土坑101 89図5	摺鉢	口径(42.0)	陶器 にぶい黄橙～暗黄灰色	内外鉄釉	摺り目16本単位 外面ケズリ端部が沈線状に見える	見込み胎土目跡6つあり 豊付釉拭き取りか 豊付砂目付着	片口部の一部が残る	小石原	1750 } 1860	
土坑101 89図6	摺鉢	口径(37.6) 高台径15.5 器高14.8	陶器 赤橙褐色	内外鉄釉	摺り目12本単位 外面格子目タタキをナデ消し 内面にも格子目タタキが残る	—	破片により摩滅に差異あり	肥前	1750 } 1860	
土坑101 89図7	皿	口径(22.0) 高台径9.5 器高6.9	陶器 紫灰色	内面白化粧土の打ち刷毛目、外面下位・外底に鉄釉のハケ掛け 最後に内面から外面上半にオリーブ色の灰釉		豊付釉剥ぎ部に砂目付着 見込みに輪状に砂目付着	内外同じ位置に灰釉の釉切れがあるので、施釉時に保持した場所か	肥前	1780 } 1860	
土坑101 89図8	鉢	高台径11.3	陶器 灰黄橙色	内面白化粧土の櫛状掻き取りの上に透明釉に近い灰釉		見込みに砂目跡7つあり		肥前	1690 } 1750	
土坑101 89図9	鉢	口径47.5 底径(23.0) 器高16.2	陶器 紫茶褐色	内外鉄釉全面	内外ナデでタタキの痕跡なし 外底ケズリ	内面口縁部に胎土目跡あり	破片により摩滅の差異あり	肥前	1690 } 1750	
土坑101 90図1	火鉢	口径(29.3)	土師質土器 黄橙色が灰色を はさむ	—	外面はミガキ 内面ナデ 外面口縁下に㊦と唐草文のスタンプ	不明	内面上半に煤付着	在地	不明	
土坑101 90図2	火鉢	口径(27.5)	瓦質土器 灰色が黒灰色を はさむ	—	外底・内面丁寧なハケ、外面はミガキ 脚部が1つしか残存していないが、位置から3つあるはず	不明	内面上半に煤付着	不明	不明	
土坑101 90図3	火鉢	口径(32.0)	土師質土器 橙褐色が灰白色を はさむ 混入物多い	—	内外ナデ	不明	内面に煤付着	在地	不明	
土坑101 90図4	甕 半胴甕	口径20.0 高台径9.8 器高17.2	陶器 赤紫褐色	外面下位に鉄釉刷毛掛けし、外面中位から内面口縁部まで白化粧土刷毛掛け、その上に外面下位から内面口縁部下まで緑灰色の灰釉をかける		高台内面に砂目付着し、見込みに輪状の砂目付着 豊付釉剥ぎ	8割残存	肥前	不明	
土坑101 90図5	大甕	口径(50.6)	土師質土器 にぶい灰褐色～灰黒色 白色粒子多い 粗放	—	内面にハケ、外面は器面剥落のため調整不明	不明	内外灰色に変色	在地	不明	
土坑101 90図6	焼塩壺	底径(4.8)	土師質土器 暗黄灰色 混入物なし 軟質	—	外底糸切り 内面はハケか傷か不明	不明	内面に赤変あり	在地	不明	
土坑101 90図7 図版17	杯	口径6.2 高台径3.1 器高4.0	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	無文	豊付釉剥ぎ	完形	肥前	不明	
土坑101竹柵 90図8	碗	口径(8.7) 高台径4.2 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	豊付釉剥ぎ	口鏝なし	伊万里	1700 } 1740	
土坑101竹柵 90図9	碗	高台径4.2	陶器 暗紫灰色	黒釉を内外面		豊付釉剥ぎ 砂目付着		肥前	不明	
土坑101竹柵 90図10	小皿	口径(13.3) 底径7.2 器高3.7	瓦質土器 にぶい暗灰黄褐色 金雲母多い	—	外底糸切り	外底に粘土粒痕1つ	焼成不良のため色調が暗い 土師質土器の可能性もある	在地	不明	
土坑100-101 91図1	碗 端反形	口径(8.6) 高台径(3.0) 器高5.3	陶器 灰白色 半磁器	透明釉を豊付と外底以外に施釉 貫入あり	外面に鉄絵の水仙か	豊付釉剥ぎ	8割残存	肥前か	1820 } 1860	
土坑100-101 91図2 図版17	小碗 半球形	口径9.0 高台径3.9 器高4.6	磁器 灰白色	外面青磁釉 内面透明釉 発色不良	見込みに界線と5弁花文を染付	豊付釉剥ぎ	ほぼ完形	伊万里	1760 } 1780	
土坑100-101 91図3	碗 浅半球形	口径10.3 高台径4.3 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は牡丹花唐草文を染付	豊付釉剥ぎ	8割残存	伊万里	1710 } 1750	

表 56 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表5



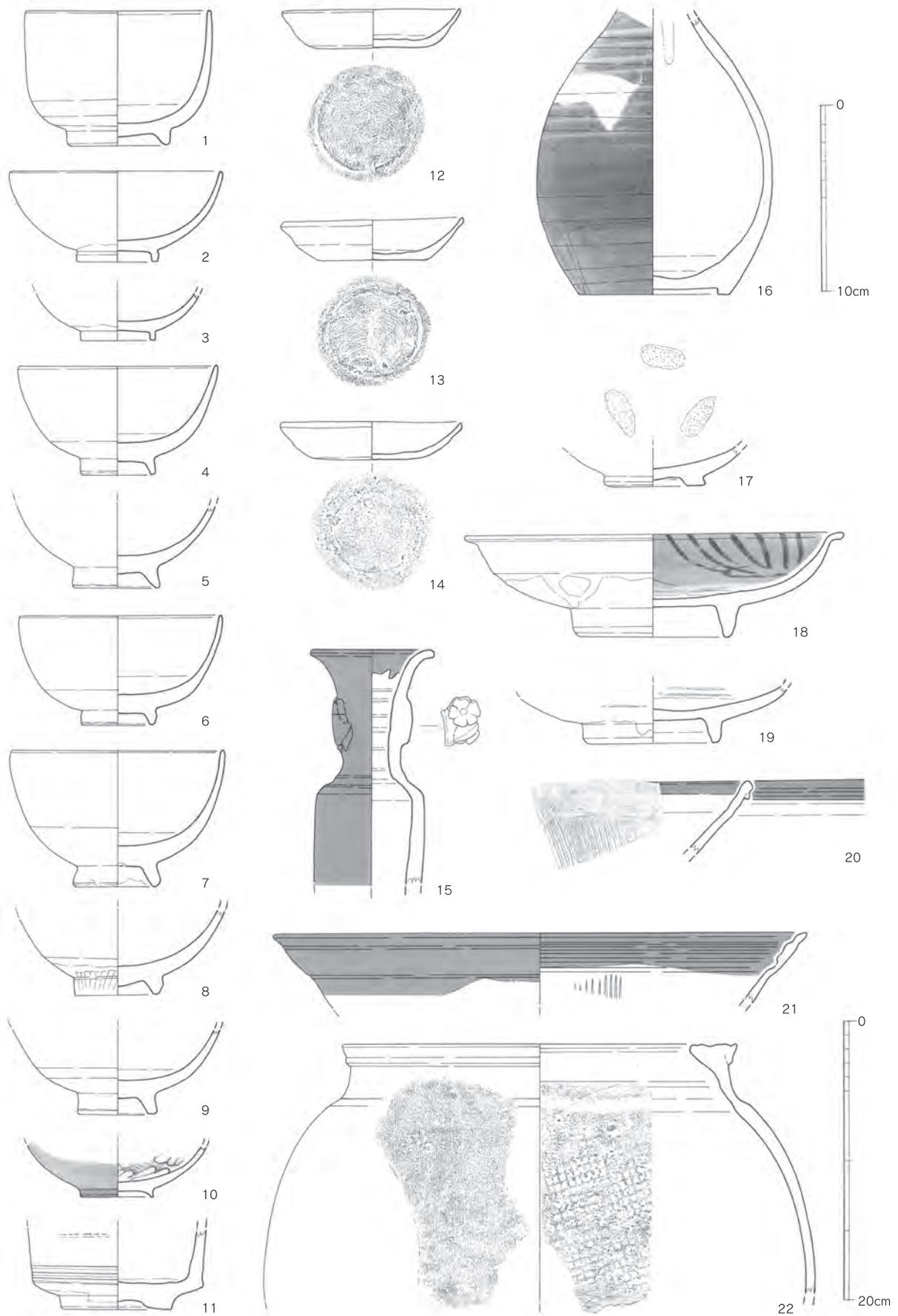
第90図 101号土坑出土土器・陶磁器実測図3(1・2は1/4、5は1/8、他は1/3)



第91図 100・101号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
土坑100-101 91図4	小皿	口径6.3 底径4.4 器高2.0	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外底糸切り	外底に粘土粒 痕あり	ほぼ完形 内面前面灰褐色 化し、底面 にも煤附着	在地	不明
土坑100-101 91図5	小皿	口径8.4 底径4.0 器高2.0	磁器 灰白色	青味がかかった透明 釉 貫入あり	見込みに草花文を染付	豊付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑100-101 91図6	焼塩壺	底部径(5.1)	土師質土器 断面は内面側が 赤化	—	外底糸切り 内外面ナデ	不明	変色なし	在地	不明
土坑100-101 91図7 図版17	灯明受皿	口径5.6 最大径7.7 器高4.1	陶器 橙褐色	鉄釉	外底糸切り 口縁部1部打ち掻き	外底に粘土粒 痕1つ	ほぼ完形 打ち掻き部が 黒化している	肥前	不明
土坑100-101 91図8 図版17	急須蓋	裾径8.3 つまみ径1.6 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛 ける	外面は竹笹文と草花文を染付	裾端部釉剥ぎ	穿孔は欠損部 にあるのだろう	伊万里	不明
土坑100-101 91図9	火入れ	最大径21.6	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外面はナデ、内面は積み上げ痕が残っている 外面中位に波状櫛描文	不明	内面黒化	在地	不明
土坑100-101 91図10 図版17	杯	口径6.0 高台径2.6 器高1.5	磁器 灰白色 ガラス 質	透明釉を全面に掛 ける	無文	豊付釉剥ぎ	ほぼ完形	瀬戸	19世紀 後半以降
土坑100-101 91図11	鉢 蓋物	口径9.5 高台径6.6 器高4.9	磁器 灰白色	口縁部は緑釉、そ れ以外は透明釉	外面は宝散らし文、裏銘は「富貴長春」を染 付	蛇ノ目高台の底 部と受け部釉剥 ぎ 高台内面に 砂目附着		伊万里	不明
土坑100-101 91図12 図版17	紅猪口 紅皿	口径4.8 底径1.4 器高1.6	磁器 完形のため不明	透明釉 内面～外 面上位	型押し成型で、外面菊花文	外面下位露胎	完形	肥前	不明

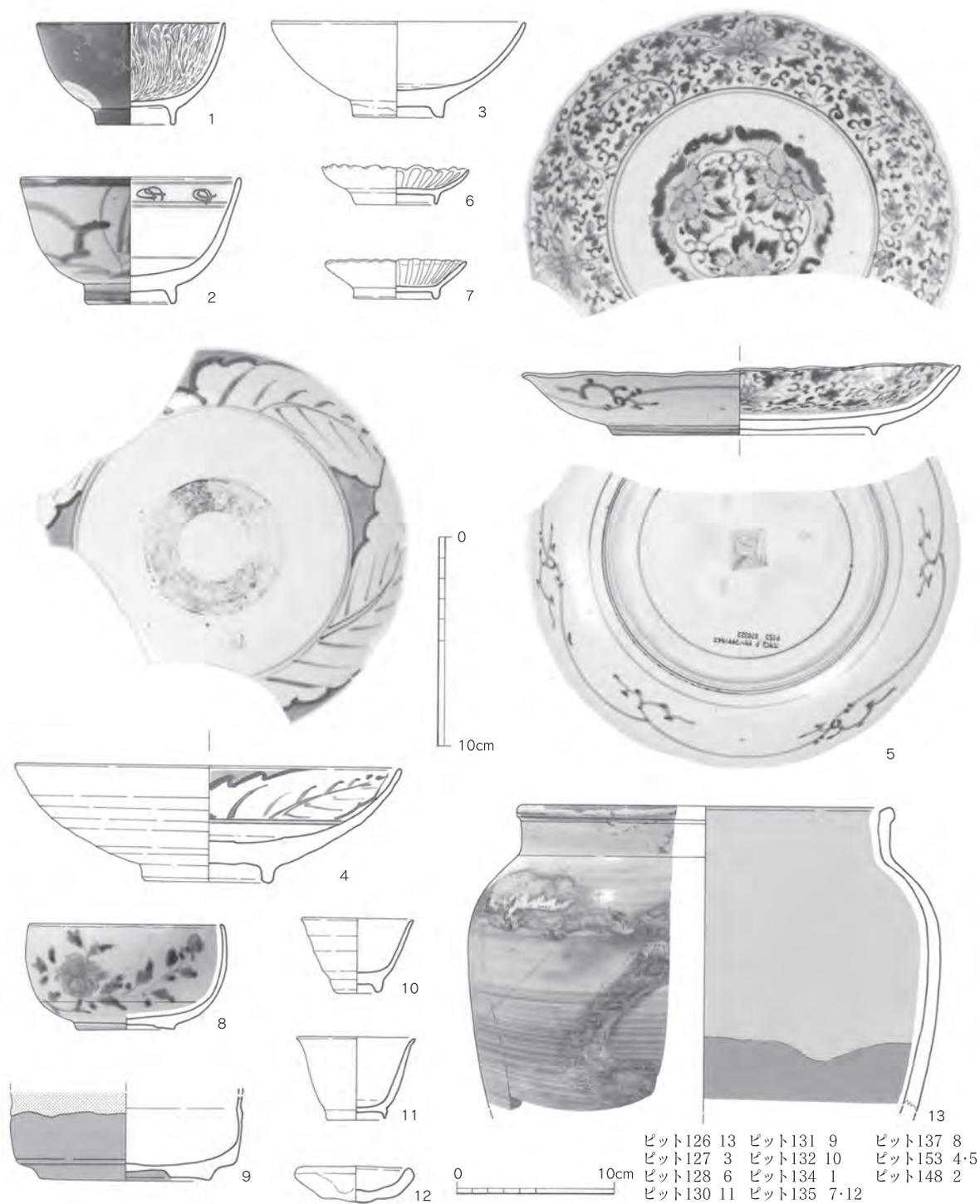
表 57 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表6



第92図 10号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(20・21は1/4、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
溝10 92図1	碗	口径(10.0) 高台径5.4 器高7.3	陶器 にぶい黄灰～淡 黄橙色	透明釉 全面 貫入あり		豊付釉剥ぎ		肥前	不明
溝10・7層 92図2	碗	口径11.4 高台径4.3 器高4.8	陶器 黄白色	透明釉を内面と外 面胴下位まで掛ける 貫入あり	見込みに山水文の鉄絵 外底中央に円形の窪みあり	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1690 } 1780
溝10・7層 92図3	碗	高台径4.0	陶器 黄白色	透明釉を内面と外 面胴下位まで掛ける 貫入あり	見込みに山水文の鉄絵 外底中央に円形の窪みあり	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1690 } 1780
溝10・7層 92図4	碗	口径(10.6) 高台径4.0 器高5.8	陶器 黄灰白色	黒釉 全面	高台内ケズリ出し	豊付釉剥ぎ 高台内に砂目 跡付着		肥前	不明
溝10・7層 92図5	碗	高台径4.7	陶器 黄灰白色	黒釉 全面	高台内ケズリ出し	豊付釉剥ぎ		肥前	不明
溝10・7層 92図6	碗	口径(10.8) 高台径4.0 器高6.7	陶器 黄灰白色	黒釉 全面	高台内ケズリ出し	豊付釉剥ぎ 高台内に砂目 跡付着		肥前	不明
溝10・7層 92図7	碗	口径(11.4) 高台径4.6 器高7.3	陶器 黄灰白色	黒釉 全面	高台内ケズリ出し	豊付釉剥ぎ		肥前	不明
溝10 92図8	碗	高台径4.5	陶器 灰白色	銅緑釉 内面から 外面胴下位まで 貫入あり		高台露胎		肥前	1650 } 1690
溝10・7層 92図9	碗	高台径4.2	陶器 灰色	黒釉 全面 発色不良で鉄釉状 になっている	高台内ケズリ出し	豊付釉剥ぎ 高台内に砂目 跡付着		肥前	不明
溝10 92図10	碗 浅半球形	高台径4.0	磁器 灰白色 焼成不良で軟質	透明釉 全面	外面に氷裂文地に菊花文の染付	豊付釉剥ぎ		伊万里	1710 } 1750
溝10 92図11	火入れ	高台径6.0	磁器 灰白色	青磁釉 透明感のある暗緑色 貫入あり	外面に片切り彫状の界線あり 高台内ケズリ出し	高台露胎	釉調は龍泉窯 のもの 見込 みは自然釉か	不明	不明
溝10 92図12	小皿	口径9.4 底径5.8 器高2.1	土師質土器 黄白色 金雲母入る	—	外底糸切り	外底に円形の 粘土痕あり	9割残存 変色なし	蒲池焼	不明
溝10 92図13	小皿	口径9.7 底径5.7 器高2.3	土師質土器 黄白色 混入物なし	—	外底糸切り	外底に円形の 粘土痕あり	変色なし	蒲池焼	不明
溝10 92図14 図版17	小皿	口径9.6 底径6.0 器高2.0	土師質土器 黄灰白色 金雲母入る	—	外底糸切り	不明	ほぼ完形	蒲池焼	不明
溝10 92図15	瓶 花瓶	口径6.6	磁器 灰白色	青磁釉を外面から 内面口縁部に掛ける 貫入あり	頸部に型押し成形した花の浮文を対面に貼 り付け	—	下半欠損	肥前	不明
溝10 92図16	瓶	高台径8.0	陶器 にぶい灰色	白化粧土の帯状掻き取り、その後外面にオリーブ色の灰釉		下半露胎 豊 付に砂目跡4 つ付着		肥前か	不明
溝10 92図17	小皿	高台径5.4	陶器 にぶい黄灰色	内面から外面胴部 にオリーブ色の灰 釉	高台内ケズリ出し	高台露胎 見込みに胎土目 跡の3つあり		肥前	1690 } 1780
溝10・7層 92図18	皿	口径20.1 底径8.0 器高5.7	陶器 黄橙色	内面に白化粧土のハケ状掻き取り、その後鉄絵で松文を描き、内 面から外面胴中にオリーブ色の灰釉		高台露胎 見込 みの蛇ノ目釉剥ぎに 重ね焼き痕あり		肥前か	1690 } 1780
溝10 92図19	皿	高台径5.4	陶器 にぶい黄灰色	内面中に白化粧土の櫛状掻き取り、その後内面から外面胴部に 透明に近いオリーブ色の灰釉		高台露胎 見込 みの蛇ノ目釉剥ぎに 重ね焼き痕あり		肥前	不明
溝10・7層 92図20	摺鉢	—	陶器 黒灰色	鉄釉が外面口縁部 のみに掛かる 内 面は鉄漿か	摺り目11本	—		肥前	1650 } 1690
溝10・7層 92図21	摺鉢	—	陶器 紫黒色	鉄釉が口縁部の みに掛かる 内面 は鉄漿か	摺り目単位不明	—		肥前か	1650 } 1690
溝10 92図22	甕 半胴甕	口径(21.0)	陶器 外半は赤紫褐 色、内面側は黒 灰色	内外面に鉄釉を掛け、口唇部は釉剥ぎ 内外面に格子目タタキが あり、外面と内面頸部以上はナデ消し		口唇部の目跡 はないが、欠 損部に存在し た可能性あり	口唇部の色調 の違いは重ね 焼き時の発色 不良のため	肥前	17世紀後半

表 58 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表7



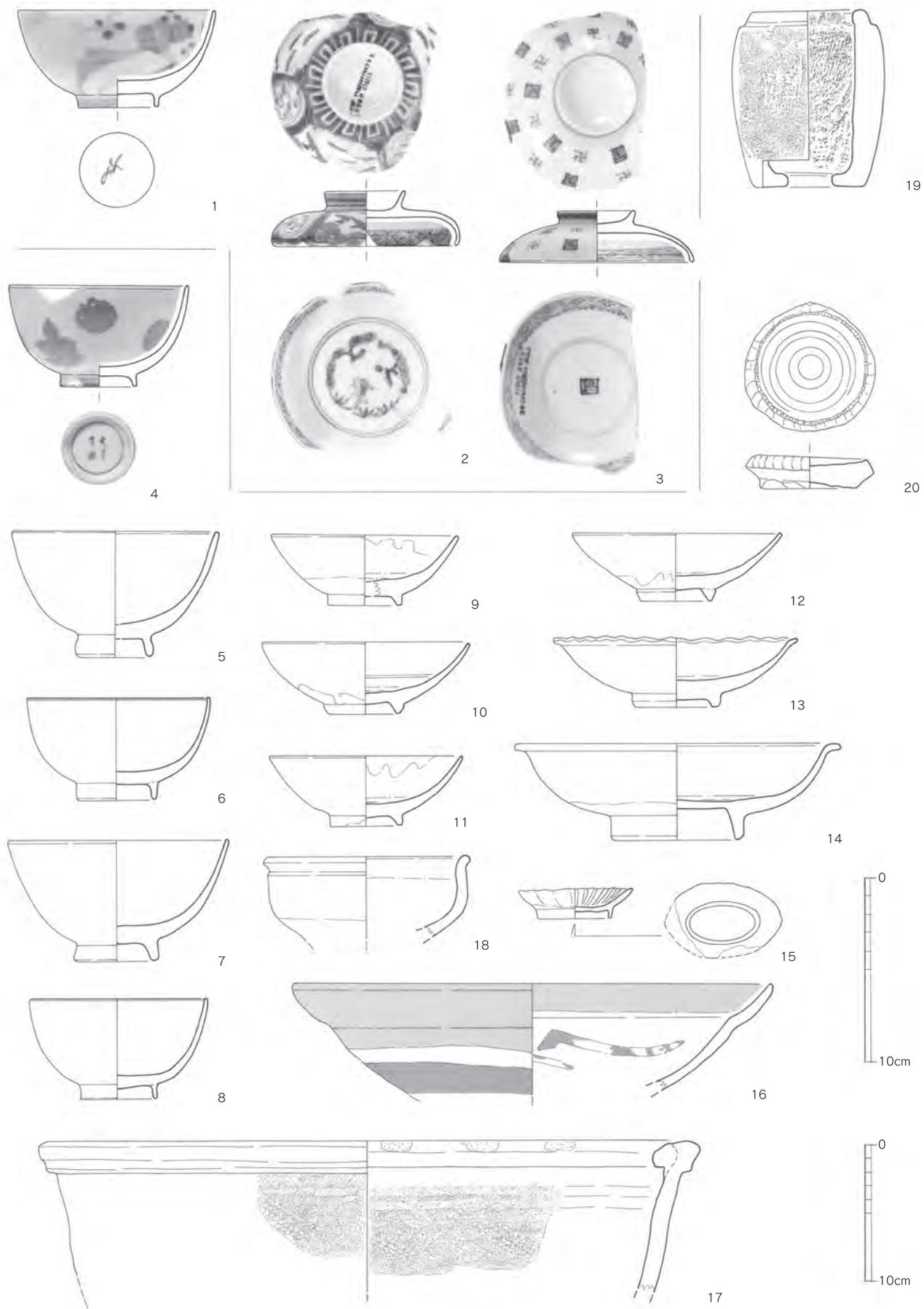
第93図 ピット出土土器・陶磁器実測図(5・13は1/4、他は1/3)

88図3は陶器の筒形碗で、胎は粒子が粗くざらつくことから、京焼の可能性はある。外面のモチーフも、京焼を模倣した肥前陶器には知見がない。88図4は陶器碗で、緑彩は竹笹形のようにだが乱れて、鉄絵に被ってしまっている。88図11は染付の5寸皿で、83図11とはモチーフばかりでなく、裏銘の「大明年製」の字体まで同じなので、同じ窯の製品だろう。88図13は、染付碗でモチーフは現川焼だが、胎が肥前のものなので、現川焼を模倣した肥前産陶器であろう。88図14は染付鉢で本来上絵がつくものと思われる。86図5と同じモチーフだが同一個体ではない。弁の大きさが若干異なっている。

89図3は陶器の摺鉢の底部片で、胎土は肥前らしくなく、知見がないので産地不明とした。89図5は陶器の摺鉢で、胎の特徴と外面格子目多キ痕から小石原焼と推定した。89図7は陶器の皿で、外面胴中央に帯状に釉切れが入るが、これは重ね焼きのためだろうか。

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
ピット134 93図1	小碗 蛭手	口径8.8 底部径3.5 器高4.9	陶器 紫灰色	白化粧土を外面は円形、内面は吹きハケ目を施した後、内外透明釉全面掛け		豊付釉剥ぎ	6割残存	現川焼	1690 } 1740
ピット148 93図2	碗 端反形	口径10.2 高台径4.2 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は口縁下に呉須による口筋、その下に草葉文、内面口縁部と見込みは2重の細長い輪文	豊付釉剥ぎ	豊付の欠損は焼き台から外す際のものか	肥前	1820 } 1860
ピット127 93図3	碗	口径(12.0) 高台径4.2 器高4.6	陶器 黄灰色	透明釉を内面から外面胴下位まで	無文 外底に円形の沈線あるが、完結していないので意図的なものではない	外底露胎 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	不明
ピット153 93図4	中皿	口径18.3 底径6.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉 貫入あり	葉文を染付	見込み蛇ノ目・豊付釉剥ぎ	見込みの釉の剥がれはハリ目ではない	肥前	不明
ピット153 93図5	中皿 花卉口縁	口径20.7 高台径12.4 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉 全面	外面は唐草文と裏銘は角福、内面は花唐草文、見込みは牡丹文を環状に配置している	豊付釉剥ぎ		肥前	1680 } 1700
ピット128 93図6	杯 菊花形	口径7.4 高台径3.8 器高1.8	磁器 灰白色	白磁釉 内面から外面胴部まで	型押し成形	底部露胎		肥前	18世紀
ピット135 93図7	杯 菊花形	口径6.6 高台径4.0 器高1.8	磁器 灰白色	白磁釉 内面から外面胴部まで	型押し成形	底部露胎		肥前	18世紀
ピット137 93図8	鉢 蓋物	口径9.0 高台径4.5 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は牡丹花文を染付	内面口縁部・豊付釉剥ぎ	9割残存	伊万里	不明
ピット131 93図9	鉢 香炉	高台径8.2	磁器 灰白色	蛇ノ目高台で、外面は発色不良の釉を掛け、その上に口縁部に長石釉を上掛けしている 内面は露胎		豊付釉剥ぎ		肥前	不明
ピット132 93図10	杯	口径5.4 高台径2.2 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	無文	豊付釉剥ぎ		肥前	17世紀後半 } 18世紀代
ピット130 93図11	杯	口径5.6 高台径2.8 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉 全面 貫入あり	無文	豊付釉剥ぎ		肥前	17世紀後半 } 18世紀代
ピット135 93図12	ミニチュア小皿 楕円形	長軸7.2 短軸(4.0) 器高1.7	土師質土器 黄橙～黄橙灰色	—	手握ねで、内面はオサエのみ	不明	部分的に煤が付着している	在地	不明
ピット126 93図13	甕 半胴甕	口径(24.0)	陶器 外半は赤紫褐色		外面は白化粧土を刷毛掛けした上に透明釉を掛け、その上に葉を緑、樹を茶色で上絵付けしている。内面は下位に鉄釉を刷毛掛けの後、口縁部に白化粧土を刷毛掛けし、オリーブ色の灰釉を上掛け	口唇部釉拭き取り	内面中位の灰釉の色調差は発色不良のためか	肥前	不明

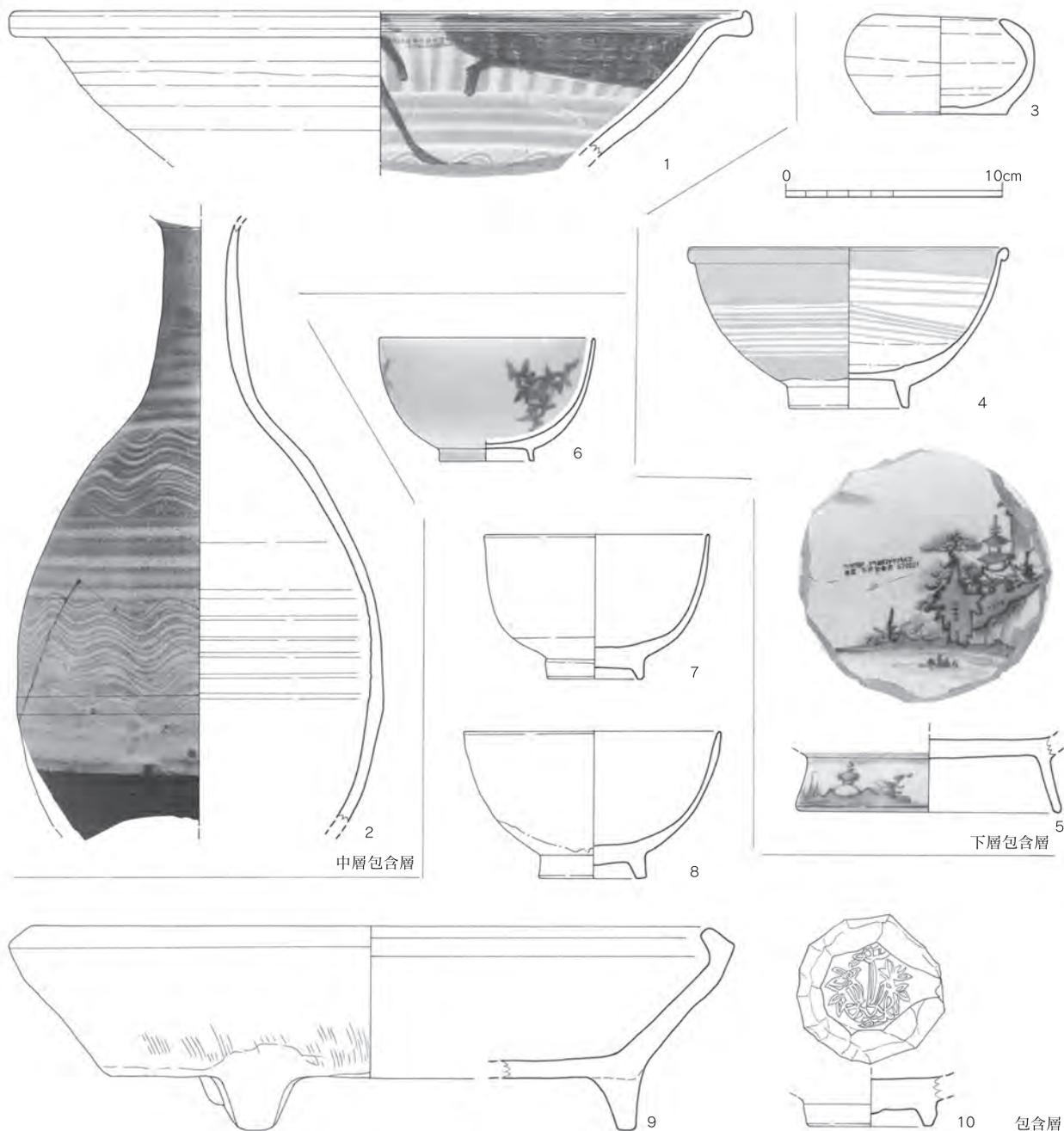
表 59 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表 8



第94図 上・中層包含層出土土器・陶磁器実測図(19は1/4、他は1/3)

遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
挿図番号 94図1	碗 半球形	口径10.2 高台径(4.3) 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉 全面	梅樹文と折れ松葉文、裏銘は「大明年製」染付	豊付け釉剥ぎ 高台内面に砂目付着		波佐見	1750) 1770
挿図番号 94図2	蓋	裾径(10.4) つまみ径4.2 器高2.8	磁器 灰白色 錦手	外面は区画文、内面は口縁部袈裟襷文、天井部環状松竹梅文を染付、透明釉の上に外面のみ赤・緑・黒・金で松・龍文などを上絵付け		つまみ部上端 釉剥ぎ	裾の一部に歪みあり	肥前	1740) 1780
挿図番号 94図3	蓋	裾径(10.2) つまみ径4.4 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に福と卍文、内面口縁部袈裟襷文線、内面天井部に福染付	つまみ部上端 釉剥ぎ	裾の一部に歪みあり	肥前	1740) 1780
挿図番号 94図4	碗 半球形	口径(9.5) 高台径4.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉 全面 発色悪く褐色がかかる	菊花と5葉文のコンニャク印判、裏銘は「大明年製」染付	豊付け釉剥ぎ 高台内面に砂目付着		波佐見	1750) 1770
挿図番号 94図5	碗	口径(11.2) 高台径(4.2) 器高6.8	陶器 青灰白~黄灰白色	鉛釉を内面から外面胴部まで掛け、内外口縁部に緑色に発色した薬灰釉上掛け		高台露胎		小石原	不明
挿図番号 94図6	碗 半球形	口径(9.8) 高台径4.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	口鏝	豊付け釉剥ぎ 高台内面に砂目付着		肥前	18世紀前半
挿図番号 94図7	碗	口径(11.9) 高台径4.6 器高6.5	陶器 暗紫灰白色	黒釉を内外面 発色悪く茶褐色		—		肥前	不明
挿図番号 94図8	碗 半球形	口径(9.6) 高台径4.1 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	口鏝	豊付け釉剥ぎ		肥前	18世紀前半
挿図番号 94図9	小皿	口径(10.1) 高台径3.9 器高3.8	陶器 黄灰白色	内面から外面高台以外にオリーブ色の灰釉	無文	見込みの蛇ノ目 釉剥ぎの内端に 重ね焼き痕あり		肥前	1690) 1780
挿図番号 94図10	小皿 5寸皿	口径11.3 高台径4.0 器高3.9	磁器 灰白色	白磁釉 内面から 外面胴部まで	無文	底部露胎 胎土 目跡あり 見込 みの蛇ノ目釉剥 ぎには砂目付着		波佐見	1750) 1810
挿図番号 94図11	小皿	口径10.4 高台径4.0 器高3.8	陶器 黄灰白色	内面から外面下位 までオリーブ色の 灰釉	無文	見込みの蛇ノ目 釉剥ぎ内端に重 ね焼き痕あり		肥前	1690) 1780
挿図番号 94図12	小皿 5寸皿	口径(11.4) 高台径3.9 器高4.7	磁器 灰白色	白磁釉 内面から 外面胴部まで	無文	底部露胎 見込 みの蛇ノ目釉剥 ぎには砂目付着		波佐見	1750) 1810
挿図番号 94図13	小皿 花卉口縁	口径(14.2) 高台径4.5 器高3.7	陶器 暗灰白色	鉛釉を内面から外面胴部まで掛け		高台露胎 見込 みの蛇ノ目釉剥 ぎには砂目付着		肥前か	不明
挿図番号 94図14	小皿 5寸皿	口径(17.6) 高台径6.2 器高5.2	陶器 緑黄灰白色	内面から外面上半 にオリーブ色の灰 釉	外底ヘラ削りにより、高台を削り出す	見込みの蛇ノ目 釉剥ぎ内端に重 ね焼き痕あり		肥前	不明
挿図番号 94図15	ミニチュア小皿 楕円形の菊花形	長軸(6.8) 短軸4.4 器高1.6	磁器 灰白色	白磁釉 内面から 外面胴部まで	無文 型押し成形	底部露胎 胎土 目跡あり		波佐見	不明
挿図番号 94図16	皿	口径(26.0)	陶器 黄灰白色 軟質	外面胴下位に鉄釉刷毛掛けし、鉄絵を描き、外面口縁下から内面口縁部まで鉄釉掛けした上に内面中位に白化粧土を刷毛掛け		見込みの蛇ノ目 釉剥ぎ内端に重 ね焼き痕あり	5次調査土坑5 出土片と接合 した	肥前か	1690) 1780
挿図番号 94図17	大甕	口径(47.6)	陶器 黄白色と黄橙色 のマーブル	内外鉄釉 光沢なし	タタキ当て具痕はナデ消しているが、内外面は格子目	不明	胎土のマーブルは焼成不良だろう	肥前	17世紀後半
挿図番号 94図18	鉢 火入れ	口径(11.0)	陶器 橙褐色	外面上半口から内面口縁部下に鉄釉掛け		胴下半露胎	内面変色なし	肥前	不明
挿図番号 94図19	焼塩壺	口径(6.0) 底部径(6.0) 器高9.2	土師質土器 橙茶褐色で褐色 パミスを多い	—	内面布目匠痕 外面ナデの上に「御塩壺師」堦湊伊織のスタンプ	不明	変色なし	大阪 堺	17世紀後葉
挿図番号 94図20	灯明受皿転用円盤状製品	径6.9 高台径5.1 器高2.0	陶器 橙褐色	上面に鉄釉掛けし、外面に煤が一部付着		外面露胎		肥前	1690) 1780
挿図番号 95図1	鉢	口径(34.2)	陶器 赤紫色	内面白化粧土の帯状掻き取りの上に鉄釉を口縁部に掛け流し 外面は口縁部のみオリーブ色の灰釉		豊付アルミナ付 着 見込みの蛇ノ 目状にアルミナ		肥前	1690) 1750
挿図番号 95図2	瓶	最大径(16.8)	陶器 橙褐色	外面胴下位に鉄釉刷毛掛けし、頸部から胴中位に白化粧土を掛け、帯状と櫛状に釉剥ぎし、胴中位下まで灰緑褐色の灰釉掛け 内面露胎		—		肥前	1690) 1780
挿図番号 95図3 図版17	鉢	口径5.8 底径6.1 器高4.7	土師質土器 暗灰白色 精良	—	底部静止ヘラケズリ	不明	完形 内面口縁部に 煤付着	蒲池焼	不明

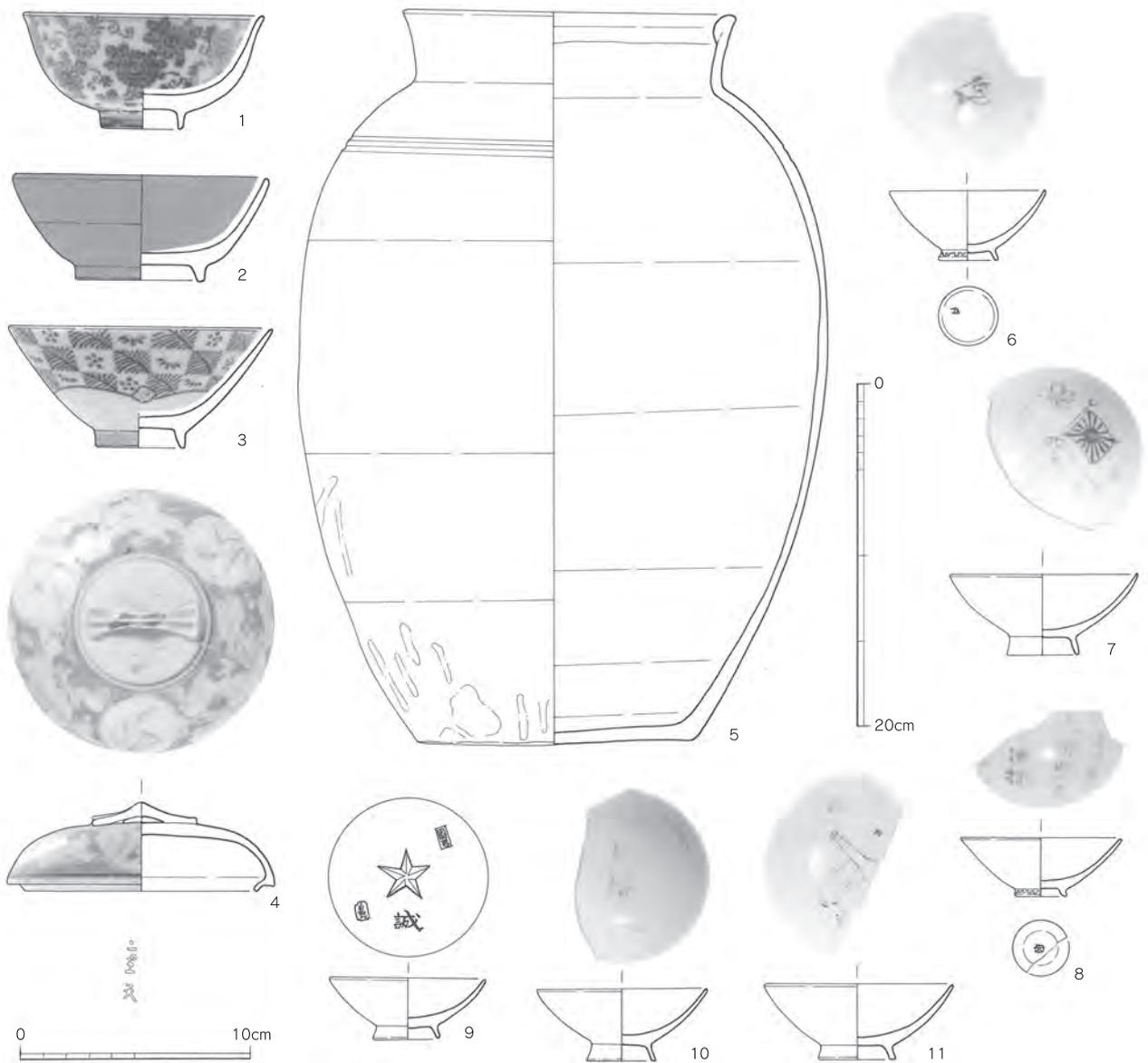
表 60 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表9



第95図 中・下層包含層出土土器・陶磁器実測図(1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
下層包含層 95図4	片口鉢	口径(15.0) 高台径(5.6) 器高7.5	陶器 黄灰色	外面胴部中位、内面口縁以外に白化粧土の刷毛状掻き取りの上に内外オリーブ色の灰釉	外底露胎 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ 重ね焼き痕あり		肥前	不明	
下層包含層 95図5	器種不明	高台径12.4	陶器 陶胎染付 暗灰色	白化粧土の上に青みの強い透明釉貫入あり	外面と見込みに山水文染付け	豊付釉剥ぎだが、白化粧土は残る	波佐見	不明	
下層包含層 95図6	碗	口径(10.0) 底部径(4.4) 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は火炎巴文を型紙刷り染付 配置から4カ所にあつたはず	豊付釉剥ぎ 見込みにハリ目3ヶ所	伊万里	1700 ~ 1740	
包含層 95図7	碗	口径(10.4) 高台径4.6 器高6.7	陶器 黄灰白色 半磁器	透明釉を内面から外面胴下位まで		不明	肥前	1690 ~ 1780	
包含層 95図8	碗	口径(12.0) 高台径5.0 器高6.8	陶器 黄灰白色	鉄釉を内面から外面胴下位まで		不明	肥前	1690 ~ 1780	
包含層 95図9	火鉢	口径(31.2) 器高9.5 底部径(24.4)	瓦質土器 灰白色が黒灰色をはさむ	—	外面・外底は丁寧なハケ、内面はナデ 脚部が1つしか残存していないが、位置から3つあるはず	不明	外地以外の外面のみ器面摩滅	不明	
包含層 95図10	青磁碗転用円盤型製品	径6.6 高台径5.8 器高2.3	磁器 青灰色	青磁釉を内面と外面高台内と豊付以外	見込みに花文が片切り彫りされている	豊付け釉剥ぎ	円盤形製品としては完形	龍泉窯	12世紀後半 ~ 13世紀前葉

表61 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表10



第96図 攪乱溝出土陶磁器実測図(5は1/4、他は1/3)

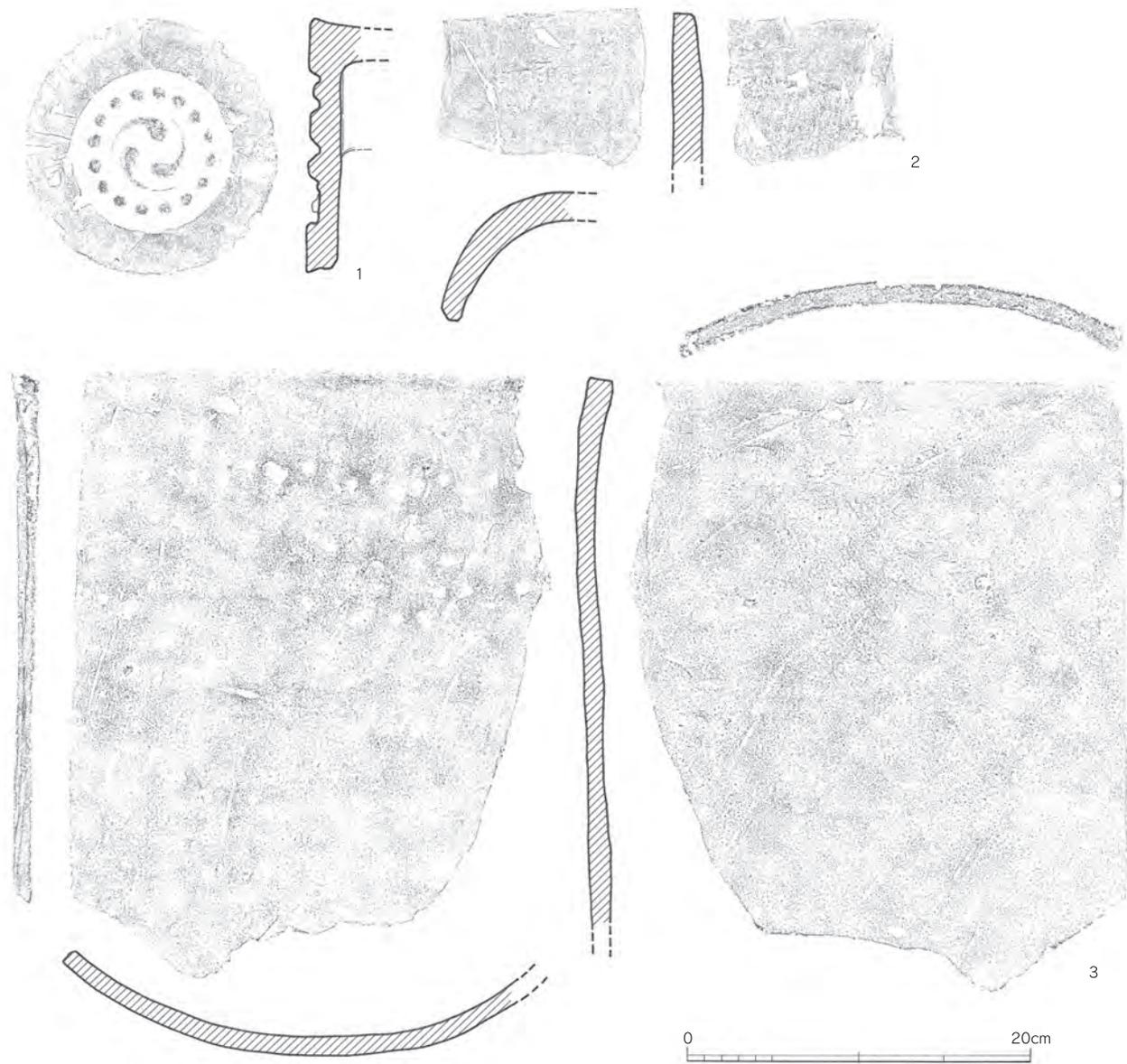
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
							特記事項	推定産地	推定年代
攪乱溝 96図1 図版17	碗 端反形	口径10.5 高台径3.7 器高5.0	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面は菊花唐草文を型紙刷りコバルト染付	豊付釉剥ぎ	完形	瀬戸か	19世紀後半 20世紀前葉
攪乱溝 96図2 図版17	碗	口径9.2 高台径5.7 器高4.6	磁器 完形のため不明	鉄釉 厚掛け 光沢あり	無文	豊付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀 後半以降
攪乱溝 96図3 図版17	碗 平形	口径11.4 高台径3.9 器高5.2	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面は芭蕉葉と桜花・竹笹・梅花文をゴム印刷コバルト染付	豊付釉剥ぎ	完形	瀬戸か	20世紀前半
攪乱溝 96図4 図版17	蓋物蓋	裾径11.6 つまみ長軸4.5 器高3.8	磁器 灰白色	外面界線のみ		返り部釉剥ぎ	修復により完形	伊万里	不明
攪乱溝 96図5	小型甕	口径(19.2) 底部径16.0 器高43.0	陶器 暗紫灰色	鉄釉が発色不良で 灰白色	内外面格子目タタキナデ消し 内底面は放射状に格子目タタキ 肩部外面に2条沈線	外底に目土跡 ほぼ全面に付着	底部にやや膨らみあり 使用痕跡なし	肥前	19世紀 後半以降
攪乱溝 96図6	杯 記念杯	口径(7.0) 高台径2.2 器高2.6	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	外面に凹凸線、裏銘あり 見込みに金彩で左から「□亮買」「亀仲買商」「□津□」と描いている			瀬戸か	20世紀前半
攪乱溝 96図7	杯 従軍記念杯	口径8.0 高台径2.1 器高3.6	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに金彩で大砲2本を交差させ、その上に「重砲」、下にも文字を描いている			瀬戸か	20世紀前半
攪乱溝 96図8	杯 記念杯	口径(7.0) 高台径2.2 器高2.6	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	外面に凹凸線、裏銘あり 見込みに金彩で菱形に「ヤ」、丸に「イ」と屋号を描き、口縁部に2つの山形文を文字の間に置いて、「□むえびすまぢや」と描く			瀬戸か	20世紀前半
攪乱溝 96図9 図版17	杯	口径6.7 高台径2.9 器高2.6	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに星と「誠」、札状の窓の中に「国恩?」と「真菊?」	豊付釉剥ぎ	完形	瀬戸	20世紀前半
攪乱溝 96図10	杯 記念杯	口径6.8 高台径2.6 器高3.0	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに金彩で「上棟式」、口縁部に2つのハイフンを文字の間に置いて6文字あるようだが判読できない			瀬戸か	20世紀前半
攪乱溝 96図11	杯 従軍記念杯	口径8.0 高台径2.1 器高3.6	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに桜花を中心に日章旗となんらかの旗を描き、その下に「新佐」とある。金彩で描き、桜花はピンク、日章旗は赤で上絵付けしている			瀬戸か	20世紀前半

表 62 4次調査東区出土土器・陶磁器観察表 11

90図2は瓦質土器の火鉢で、高台が付く器形と外面の丁寧なミガキ調整や内面の丁寧なハケは類例がなく、搬入品の可能性が高い。

91図1は端反形の半磁器の陶器碗で、外面の鉄絵と、灰白色の胎土に透明釉が掛かることから京焼風陶器の流れを汲むものであろう。91図4は非常に小さい土師質小皿で、口縁部に油煙が付着しており、灯明皿として使用している。91図6は焼塩壺で、本遺跡から出土したものの中では比較的上位まで残る個体で、口縁部付近は内湾し、窄まる器形であることがわかる。外面にはスタンプなし。91図7は陶器の灯明受け皿で、受け部の口縁部の打ち掻き部が黒く変色しているので、ここに芯を置いて灯明皿として使用されたものとわかる。91図8は染付の蓋で、裾には受け部がなく、欠損しているわけでもない。釉剥ぎしており、11のような蓋物とセットになるのだろう。

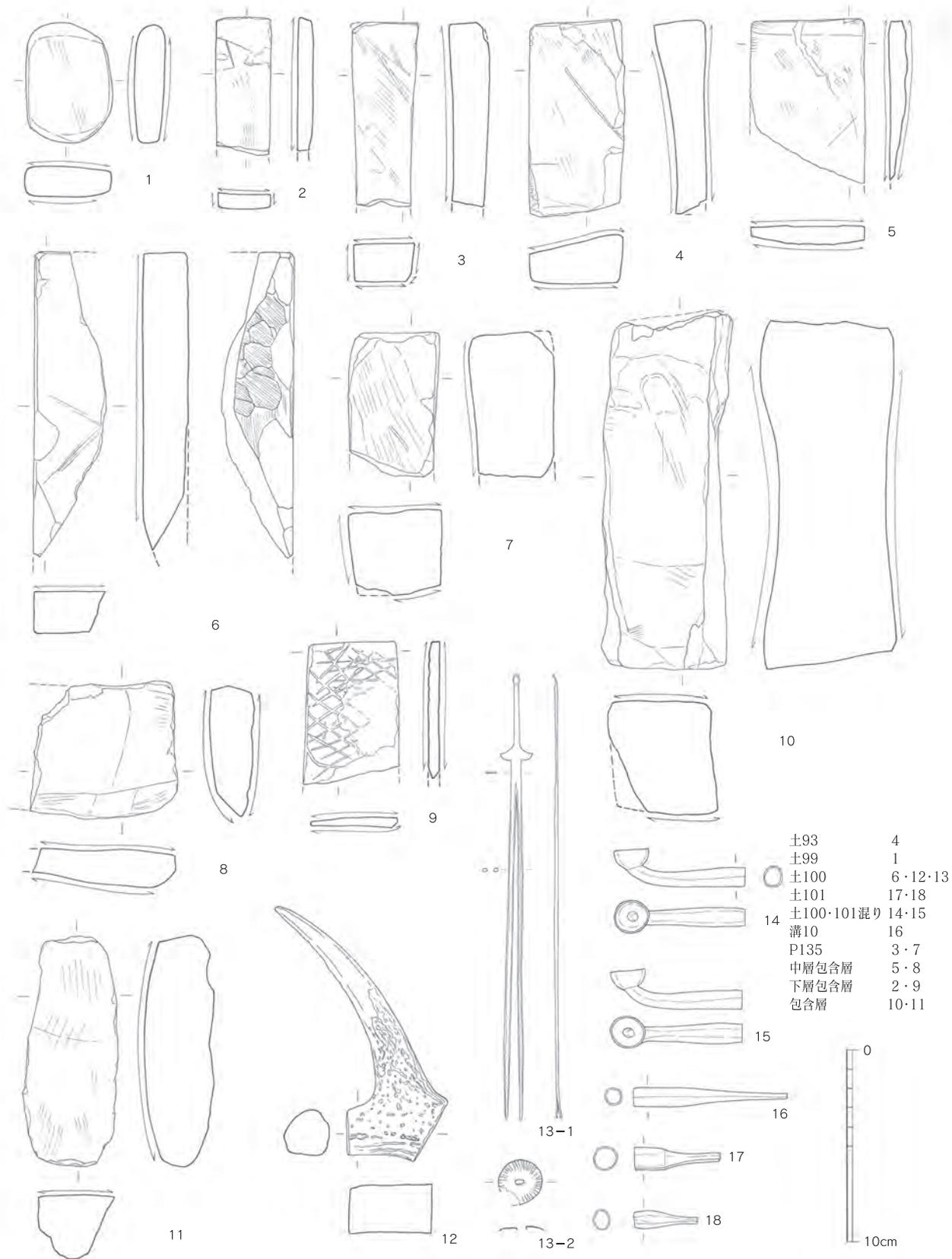
92図15は釉調や胎の色調が龍泉窯に近く、器形も近世のものとは異なるので中世の混入品か伝世品の可能性が高い。92図16は陶器の瓶で、胎も施文も特徴的で、肥前の産かはわからない。92図21は陶器の摺鉢で、肥厚する口縁部内面の幅が、同型の通常のものより口径に比べて広いのが特徴的である。口縁部のみ鉄釉を施すことや、釉調や胎からみて肥前産であろう。



第97図 矢加部町屋敷遺跡4次調査東区出土瓦実測図(1/4)

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は復元値	胎の種類 胎の特徴	色調	調整・整形・装飾技法				製作技法	所見		
					凹面	凸面	上下端面・瓦当	側端面		特記事項	推定産地	推定年代
土坑100-101上層 97図1	軒丸瓦 瓦当部	径7.5 厚さ2.0	瓦質土器 灰白色	灰黒色	—	—	裏面の接合部に格子の凸線あり	—	不明		不明	不明
溝10 97図2	丸瓦	長さ9.4 幅7.9 厚さ1.7	瓦質 黒灰色が灰白色に挟まれている	暗灰黄色	布目と模骨痕				1枚作り	銀化していない 焼成不良	在地	不明
攪乱溝 97図3 図版17	平瓦 漏斗瓦	長さ32.5 幅26.8 厚さ1.2	土師質土器 黄灰色	灰黄橙～黄橙色	オサエのちナデ	ケズリ状のナデ	ケズリ		1枚作り		在地	不明

表63 4次調査東区出土瓦観察表



第98図 矢加部町屋敷遺跡4次調査東区出土石・角・金属製品実測図(1/3)

93図12は土師質土器の小杯で手捏ね成型であることから、実用品でなくミニチュア製品とみることもできる。

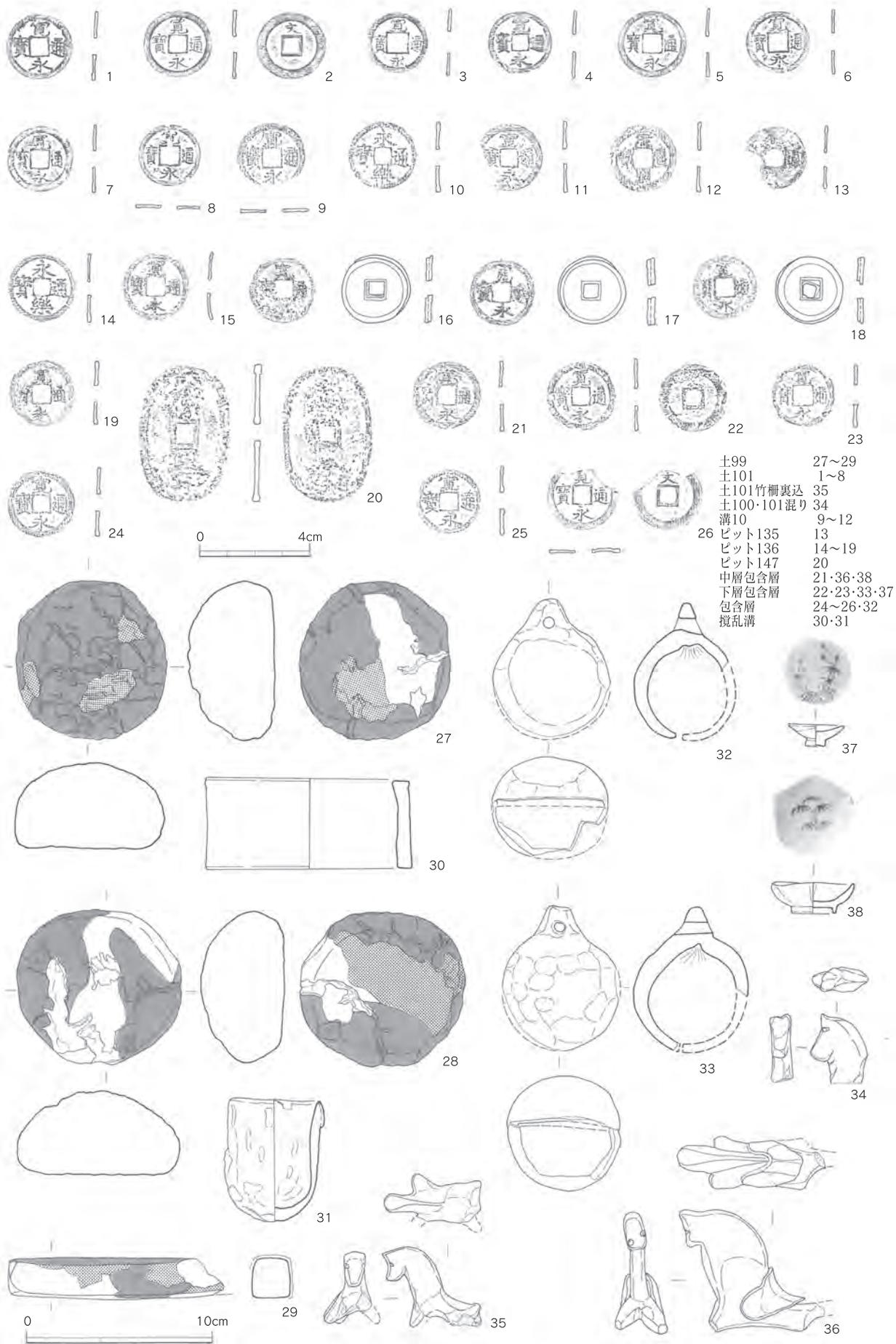
94図16は陶器の皿で、確かに鉄絵の上に白化粧土がかかっている。これは白化粧土を透明釉の代わりに上掛けしたものと思われる。94図19は焼塩壺で、在地の黄灰白色の胎土をもつものとは胎土も器形も異なっている。外面のスタンプは摩滅して判読しにくい、類例から「御壺塩師」「堺湊伊織」が2行に縦書きされたものである。これは藤左衛門系の壺塩屋の製品とされており、「天下一」が入っていないことから、天和二(1682)年の天下一の号の禁令以降のものとなる。また、肩部に丸みを持ち、口縁部が短くなっている器形から、18世紀前葉段階のものである。94図17は陶器の大甕で、口唇部に胎土目跡が3つ付着しているのを口縁部を倒立させた個体と重ねて焼いたものか。

95図3は土師質土器の鉢で、内面口縁部に煤が付着していることから、火入れであろう。器形は焼塩壺にも近いが、胎土から蒲池焼と考えられる。95図5は底部の欠損部を打ち欠いている。他の円盤形製品と比べると、高台をそのまま残しているの、むしろ上下逆にして器として再利用したものかもしれない。

遺構名	器種	法量(cm・g)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元	
図版番号	通称名	値	
土坑99 98図1 図版18	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ6.3 幅4.3 厚さ1.6重さ75.4	完形 砂岩 上・下面は使用面、側面と上下端面は整形面 使用面は丸みあり
下層包含層 98図2	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.2 幅2.8 厚さ0.8重さ30.0	頁岩 上面の使用面にやや窪みあり 両側面も使用面、上端面は整形面
ピット135 98図3	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ9.6 幅3.1 厚さ2.0重さ107.3	頁岩 上面に使用による窪みあり、下面・側面も使用 側面と下面の角に面取り状の使用面あり 上端面は整形面
土坑93 98図4	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ9.8 幅4.8 厚さ2.6重さ180.2	頁岩 上・下面は使用面、上面に使用による窪みあり 側面と上下端面は整形面
中層包含層 98図5	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ8.6 幅5.8 厚さ1.2重さ57.9	頁岩 上・下面は使用面で、上面はほぼ平坦、下面は剥離後の部分的な使用 両側面・上端面は整形面 上・下面の上位は面取り状
土坑100 98図6	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ15.6 幅3.6 厚さ2.2重さ174.4	片岩 上面が使用、下面・側面・上端面は整形面、 下面はノミ痕が残る
ピット135 98図7	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ7.5 幅4.6 厚さ4.5重さ233.7	天草石 上・下面と左側面は使用面、右側面・上端面は整形面
中層包含層 98図8 図版18	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.0 幅7.6 厚さ2.3重さ156.4	天草石 上・下面と左側面は使用面、上端面・側面は整形面 下端は斜めの使用面 上面に丸みあり
下層包含層 98図9 図版18	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.4 幅4.8 厚さ0.5重さ37.2	頁岩 上・下面は使用面で、上面は斜格子に使用痕あり、 両側面・上端面は整形面
包含層 98図10	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ18.2 幅6.2 厚さ6.8重さ1211.8	天草石 上・下面は使用面で、使用のため窪んでいる 下端面・側面は整形面

遺構名	器種	法量(cm・g)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元	
図版番号	通称名	値	
土坑99 98図11 図版18	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ11.8 幅4.8 厚さ3.6重さ222.6	天草石 上面が使用面、両側面は整形面 断面三角形で手に持ちやすい構造になっている 使用面に丸みあり
土坑100 98図12 図版18	鹿角製未製品	最大径3.6	鹿角製 使用部材を切り出した状態のものであろう 切断面は加工していない
土坑100 98図13-1 図版18	簪	長さ23.1 最大幅1.6 厚さ0.1	真鍮製 金メッキが1部だけ残っている 13-1の孔に挿し込み部が入った状態で出土したことから、羽状の装飾の下に装着したものであろう
土坑100 98図13-2 図版18	飾り金具	径2.4 厚さ0.1	端部は沈線列がタガネ状工具で施されている 本来下に接合するものがあり、碁石状だったのではないか
土坑100・101 98図14 図版18	煙管雁首	長さ6.8 火皿径1.9 首部径1.0	真鍮製 金メッキが1部だけ残っている 完形
土坑100・101 98図15 図版18	煙管雁首	長さ6.8 火皿径1.8 首部径1.1	真鍮製 金メッキが1部だけ残っている 完形
溝10 98図16 図版18	煙管吸い口	長さ8.0 最大径1.0	真鍮製 ほぼ完形
土坑101 98図17 図版18	煙管吸い口	長さ4.5 最大径1.1	真鍮製 金メッキが1部だけ残っている 完形
土坑101 98図18 図版18	煙管吸い口	長さ3.3 最大径1.0	真鍮製 金メッキが1部だけ残っている 完形 個体のため、接合部を窪ませている

表64 4次調査東区出土石器・鹿角製品・金属器観察表



第99図 矢加部町屋敷遺跡4次調査東区出土銅銭・土製品・ミニチュア製品実測図(1~26は1/2、他は1/3)

遺構名 挿図番号 図版番号	銭名 分類名	法量 (cm)		特 徴
		径	孔径	
土坑 101 99 図 1 図版 18	寛永通宝	2.3	「永」の字体から鳥越銭(1656年初鑄)か	
	古寛永	0.6		
土坑 101 99 図 2 図版 18	寛永通宝	2.5	1668年初鑄	
	文銭	0.6		
土坑 101 99 図 3 図版 18	寛永通宝	2.1	外縁摩耗 「永」・「通」の字体から亀戸(四ツ宝)銭(1708年初鑄)	
	新寛永	0.7		
土坑 101 99 図 4 図版 18	寛永通宝	2.3	「宝」のハが反っているので吉田銭(1637年初鑄)か	
	古寛永	0.6		
土坑 101 99 図 5 図版 18	寛永通宝	2.4	1668年初鑄	
	文銭	0.7		
土坑 101 99 図 6 図版 18	寛永通宝	2.3	1726年初鑄 摩耗していて孔もあく	
	新寛永 マ「通」銭	0.7		
土坑 101 99 図 7 図版 18	寛永通宝	2.2	1726年初鑄 不旧手	
	新寛永 マ「通」銭	0.7		
土坑 101 99 図 8 図版 18	寛永通宝	2.2	外縁摩耗 「永」・「通」の字体から亀戸(四ツ宝)銭(1708年初鑄)	
	新寛永	0.7		
溝 10 99 図 9	寛永通宝	2.4	「永」の字体から建仁寺銭(1636年初鑄)	
	古寛永	0.7		
溝 10 99 図 10 図版 18	永楽通宝	2.4		
	文銭	0.6		
溝 10 99 図 11	寛永通宝	2.4	「通」の字が縁から離れていることから岡山銭(1637年初鑄)か	
	古寛永	0.6		
溝 10 99 図 12	元豊通宝	2.4	1078年初鑄	
	宋銭	0.7		
ビット 135 99 図 13	寛永通宝	2.3	摩耗のため詳細不明	
	新寛永	0.6		
ビット 136 99 図 14	永楽通宝	2.4		
	文銭	0.6		
ビット 136 99 図 15	寛永通宝	2.4	「永」の字体から竹田銭(1637年初鑄) やや湾曲している	
	古寛永	0.7		

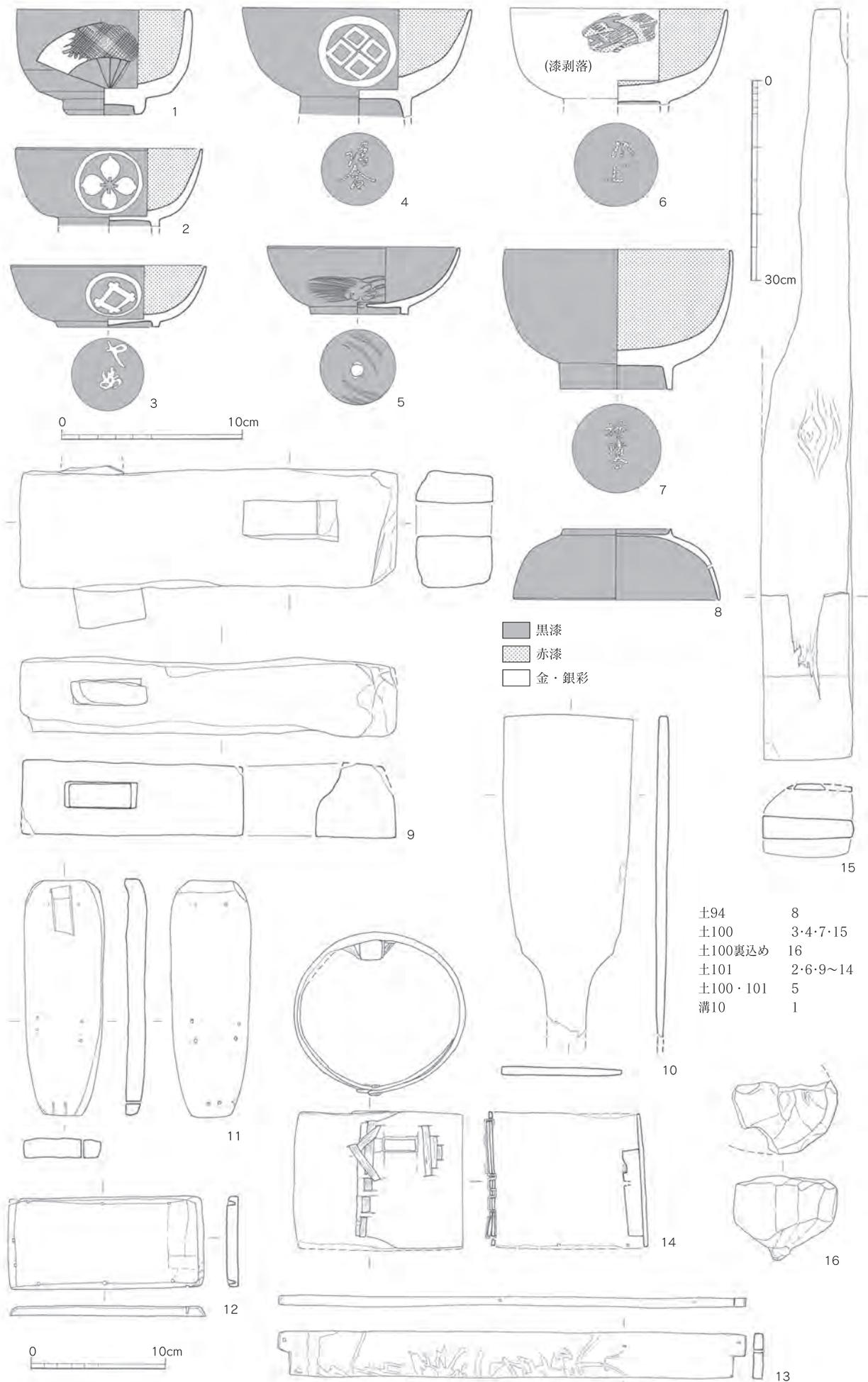
表 65 4次調査東区出土銅銭観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	銭名 分類名	法量 (cm)		特 徴
		径	孔径	
ビット 136 99 図 16 表	寛永通宝	2.4	1726年初鑄 不旧手	
	新寛永 マ「通」銭	0.6		
ビット 136 99 図 16 裏	寛永通宝	2.4	2枚融着の文字面側が張り付いているので詳細不明 文銭ではない	
	新寛永	0.6		
ビット 136 99 図 17 表	寛永通宝	2.4	錆が著しいが元文期亀戸銭(1737年初鑄)か	
	新寛永	0.7		
ビット 136 99 図 17 裏	寛永通宝	2.5	錆が著しく詳細不明	
	新寛永	0.5		
ビット 136 99 図 18 表	寛永通宝	2.2	外縁摩耗 「永」・「通」の字体から亀戸(四ツ宝)銭(1708年初鑄)	
	新寛永	0.7		
ビット 136 99 図 18 裏	寛永通宝	2.5	裏面が露出しているため、詳細不明	
	不明	0.4		
ビット 136 99 図 19	寛永通宝	2.3	1726年初鑄 不旧手	
	新寛永 マ「通」銭	0.7		
ビット 147 99 図 20 図版 18	天保通宝	長軸 4.8 短軸 3.2 0.7	2枚融着で、もう1枚は文字面側が張り付いているので不明 加島銭(1738年初鑄)か	
中層包含層 99 図 21	寛永通宝	2.3	1726年初鑄 不旧手	
	新寛永 マ「通」銭	0.7		
下層包含層 99 図 22	寛永通宝	2.4	1668年初鑄	
	文銭	0.6		
下層包含層 99 図 23	寛永通宝	2.2	外縁摩耗 「永」・「通」の字体から亀戸(四ツ宝)銭(1708年初鑄)	
	新寛永	0.7		
包含層 99 図 24	寛永通宝	2.4	「永」の字体から芝網縄手銭(1636年初鑄)か	
	古寛永	0.6		
包含層 99 図 25	寛永通宝	2.4	1726年初鑄	
	新寛永 マ「通」銭	0.6		
包含層 99 図 26	寛永通宝	2.5	1668年初鑄	
	文銭	0.6		

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm)		特 徴
		()は復元 値	値	
土坑 99 99 図 27 図版 18	饅頭形土製品	径 8.8	土師質で、上面がよく焼けており、平坦面は焼けてない範囲がある	
		厚さ 4.7		
土坑 99 99 図 28 図版 18	饅頭形土製品	径 8.8	土師質で、上面がよく焼けており、平坦面は焼けてない範囲がある	
		厚さ 4.5		
土坑 99 99 図 29 図版 18	棒状土製品	長さ 11.6	土師質で、下面は平坦面で、成形時に床に着いた部分だろう	
		幅 2.2 厚さ 2.3		

表 66 4次調査東区出土土製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm)		特 徴
		()は復元 値	値	
攪乱溝 99 図 30	窯道具	径 11.2	陶器 金雲母混入 下端面はケズリ、上端面はナデで、砂目などの付着はない 上端側がやや厚い上側が焼けている	
		器高 5.0		
攪乱溝 99 図 31	るつぼ	口径 4.9	土師質土器 ほぼ完形 外面ガラス化 胴部の外面の器面剥落で薄くなる 口縁部に部分的に銅付着	
		器高 6.6		



第100図 矢加部町屋敷遺跡4次調査東区出土木製品実測図1(8~12は1/4、15は1/8、他は1/3)

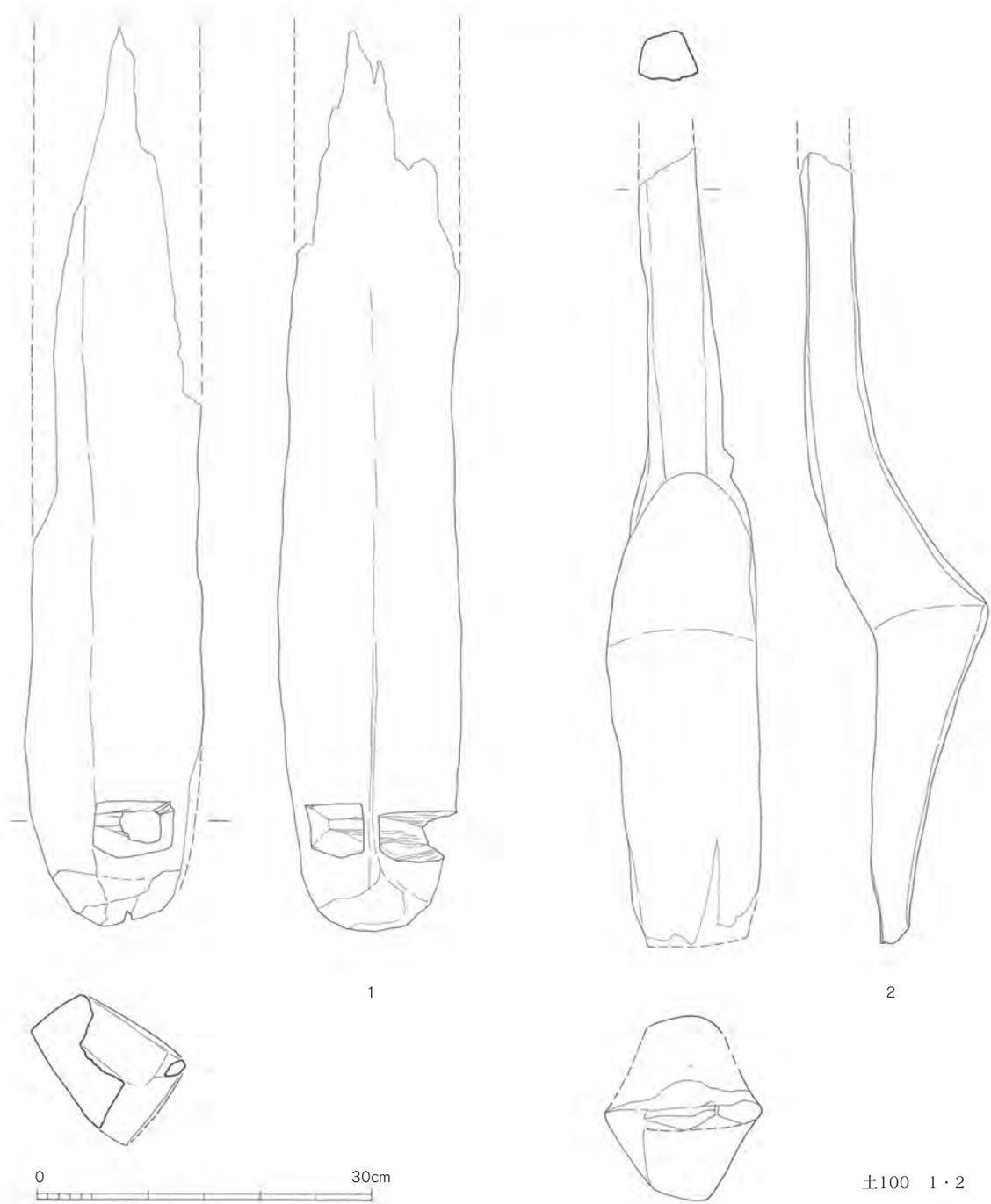
遺構名	器種	法量 (cm)	胎の種類	調整・整形・装飾技法	製作技法	所 見		
						挿図番号	形状	()は復元値
図版番号	通称名							
包含層 99図32	土鈴	長さ4.3 幅(3.8) 高さ5.1	土師質土器 黄灰色	型押し成型した2つの型で成型したものを合わせている 下に方形の穿孔があり	型合わせ成型		在地	不明
下層包含層 99図33	土鈴	長さ4.2 幅4.2 高さ(5.3)	土師質土器 黄灰色	型押し成型した2つの型で成型したものを合わせている 下に方形の穿孔があり	型合わせ成型		在地	不明
土坑100・101 99図34	土人形 土馬	長さ0.8 幅2.1 高さ2.5	土師質土器 黄灰色	オサエ痕あり	手握ね	前脚欠損	在地	不明
土坑100裏込め 99図35 図版18	土人形 土馬	長さ1.7 幅3.5 高さ2.8	土師質土器 黄灰色	オサエ痕あり 鞍の表現あり	手握ね	前脚欠損	在地	不明
中層包含層 99図36 図版18	土人形 土馬	長さ1.3 幅4.2 高さ4.5	土師質土器 暗黄灰色	目・口の表現あり	手握ね	完形	在地	不明
下層包含層 99図37	ミニチュア製品 皿	口径3.1 器高1.2 高台径1.1	磁器 完形のため不明	内面に緑彩と赤彩の色絵あり	ろくろ成型		肥前	不明
中層包含層 99図38 図版17	ミニチュア製品 6角皿	口径3.1 器高1.6 高台径2.3	磁器 灰白色	見込みに竹笹文の染付	型打ち成型		肥前	不明

表 67 4次調査東区出土土製品・ミニチュア製品観察表

遺構名	器種	法量 (cm)	特 徴
図版番号	通称名		
溝10 100図1	椀 壺椀	径(9.7) 高台径(4.0) 器高5.9	漆の剥落激しい 外面黒漆の上に銀の扇文、内面は赤漆
土坑101 100図2 図版18	椀 腰丸椀	径(10.4) 高台径(5.6) 器高4.4	外面黒漆の上に金彩の葉巻文、内面は赤漆
土坑100 100図3	椀 腰丸椀	径(10.8) 高台径(5.6) 器高3.6	外面黒漆の上に金彩の井桁文、内面は赤漆 裏銘に赤漆で「3文字あり」や「□□」
土坑101 100図4 図版18	椀 腰丸椀	径(12.4) 高台径(6.2) 器高6.0	外面黒漆の上に金彩の井桁文、内面は赤漆 裏銘に赤漆で「請合」と書く
土坑100・101 100図5	椀 腰丸椀	径(10.6) 高台径(5.4) 器高3.7	外面黒漆の上に金彩の不明のモチーフあり、内面黒漆 裏銘に金彩で外面モチーフに対応したなんらかのモチーフがある
土坑101 100図6	椀 腰丸椀	径(12.0)	外面赤漆の上に黒漆のなんらかのモチーフがあるが剥落激しく詳細不明、内面は赤漆 裏銘の赤漆は「駅ノ上」か
土坑100 100図7 図版18	椀 文字腰椀	径12.4 高台径6.2 器高7.8	外面黒漆で無文、内面は赤漆 裏銘は赤漆で「極請合」 ほぼ完形
土坑94 100図8 図版18	碗蓋	つまみ部径(6.0) 器高4.0 裾部径(11.4)	内外黒漆 無文
土坑101 100図9	農機具の一部か	長さ28.0 幅8.8 厚さ5.7	上面と側面に互い違いに方形の罅孔があり、側面には板材が挿入されている

遺構名	器種	法量 (cm)	特 徴
図版番号	通称名		
土坑101 100図10 図版18	羽子板	長さ24.0 幅14.3 厚さ0.7	側面の柄との境界には湾曲がある 中央部が厚く、面は丁寧に整形されている
土坑101 100図11 図版18	草履下駄 無歯	長さ17.6 幅6.1 厚さ1.4	穿孔は小さく、木釘孔であろう 上面の端部が反っている
土坑101 100図12	板材	長さ6.8 幅14.3 厚さ0.8	周縁は斜めに整えられ、面は丁寧に整形されている 裏面は平坦で、周囲の穿孔は釘孔であることから、貼り付ける部材だろう
土坑101 100図13	板材	長さ6.8 幅14.3 厚さ0.8	上端面は釘穴があるので、接合して上に延びる 下面は接合面ではないだろう 側面の段から組み合わせる部材
土坑101 100図14 図版18	曲げ物側板	径(12.4) 高さ10.5 側板厚さ0.3	柄先端の留め具が残っている 側板の外面側の先端は角がカットされている
土坑100 100図15	建築材	長さ74.0 幅13.0 厚さ11.0	上面は木材の外面の湾曲が残る 下位には罅孔と渡頭がある
土坑100裏込め 100図16	独楽	径(6.0) 高さ4.8	1/4残存 鉄芯が入っている
土坑100 101図1	柱	長さ80.4 幅13.9 厚さ8.9	乾燥のため変形しており、実測図と計測地は復元 断面扇に加工された部分に、平面方形の牽引のための紐通し孔がある
土坑100 No.1 101図2	鋤	長さ(89.8) 幅10.6 厚さ(12.0)	乾燥のため変形しており、実測図と計測地は復元

表 68 4次調査東区出土木製品観察表



第101図 矢加部町屋敷遺跡4次調査東区出土木製品実測図2(1/6)

95図10は龍泉窯の青磁碗の底部を円盤形に加工した再利用品だが、再利用が中世なのか近世なのかわからない。

96図4は赤絵の蓋で、2つに割れたものを漆で補修している。内面天井部には赤絵で「二星天」か「二王天」と書かれている。96図6から11は磁器杯で、金彩と赤絵で上絵付けされている。6・8は屋号や店名が記載されているので、商店などの記念杯であろう。7・9・11は従軍記念杯である。11は大砲が交差するモチーフが描かれている。7は片側の旗が消えてしまっているが、類例から日の丸が描かれていたであろう。10は「上棟式」とあるので、家屋や店舗の上棟式の記念杯である。6と8の外底には裏銘があるが、小さく、呉須でつぶれてしまって判読できない。

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量 (cm) ()は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所 見		
							特記事項	推定産地	推定年代
攪乱溝 図版19-1	杯	口径5.8 高台径2.5 器高3.2	磁器 暗灰白色	透明釉全面	口鏝 内面は緑彩と金彩の色絵があるが、褪色して不明 イッチンだけが残っている	畳付釉剥ぎ	完形 口縁部がやや欠け胎が独特	不明	大正 昭和前期
攪乱溝 図版19-2	小碗	口径8.2 高台径3.4 器高4.5	磁器	高台内と畳付以外全面クロム青磁釉	外面飛びカンナ 高台は削り出しで、外底は渦底	畳付釉剥ぎ	クロム青磁釉は不均一で、透明感と粒子がある	瀬戸	昭和前期
攪乱溝 図版19-3	小碗	口径7.6 高台径3.3 器高4.5	磁器 完形のため不明	透明釉全面	外面と裏銘は緑、バラの花はピンクの2色ゴム印刷刷 裏銘はかすれているため判読不能	畳付釉剥ぎ	完形	瀬戸か	大正 昭和前期
攪乱溝 図版19-4	小碗	口径7.9 高台径3.6 器高4.6	磁器 灰白色 ガラス質	高台内と畳付以外全面クロム青磁釉	高台は蛇ノ目状に削り出し 口縁部にコバルトを3箇所掛け、外面高台には界線2条コバルト染め付けた上に青磁釉掛け	畳付釉剥ぎ	クロム青磁釉は不均一で、透明感がある	瀬戸	昭和前期
攪乱溝 図版19-5	小碗	口径6.8 高台径3.4 器高4.0	磁器 完形のため不明	透明釉 厚く掛ける	貫入を意匠	畳付釉剥ぎし、鉄繫掛けか	完形	不明	大正 昭和前期
攪乱溝 図版19-6	変形皿 方形	1辺8.1 高台径3.5 器高2.3	磁器 灰白色	透明釉の発色悪く乳白色	見込みに山水文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前か	昭和前期
攪乱溝 図版19-7	小皿	口径10.8 高台径4.2 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉全面	型紙刷の菊花文をコバルト染付	見込みは蛇ノ目釉剥ぎ部にアルミナ塗布 畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前か	大正 昭和前期
攪乱溝 図版19-8	小皿 5寸皿	口径6.8 高台径3.4 器高4.0	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉全面	靈芝文を外区に草花文を内区に、中央に菊花文を型紙刷のコバルト染付 コバルトが口鏝状に入る	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	瀬戸	大正 昭和前期
攪乱溝 図版19-9	小皿 角皿	1辺8.1 高台径3.5 器高2.3	磁器 完形のため不明	透明釉全面	外面は蝶文を各辺の中央に、内面は型紙刷の波文を地文とし、窓の中の千鳥・草葉名文を口縁部に、見込みの外縁と中央に芭蕉葉文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ	完形	肥前か	大正 昭和前期
攪乱溝 図版19-10	小皿 5寸皿	口径12.8 高台径7.7 器高2.6	磁器 完形のため不明	透明釉全面	内面にコバルトの銅板刷で、窓内に唐獅子文・鶴文・菊花流水文があり、各窓中央と見込みに船形文が入る 口鏝があるが、劣化している	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	瀬戸	大正 昭和前期
攪乱溝 図版19-11	小皿 5寸皿	口径12.8 高台径8.8 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉の発色悪く乳白色	内面は型紙刷りで、菊文地に窓内に花文、見込みに鋸歯文帯とそこに環状松竹梅文 外面は手描きの草文をコバルト染付	見込みにハリ目跡4つ 外底は蛇ノ目高台で台部は釉剥ぎ		肥前	1930年代
攪乱溝 図版20-1	小皿 卸皿	口径12.0 高台径5.8 器高2.4	陶器 灰色	透明釉内面から外面口縁部 貫入あり	見込みに指突列を2つ対に施して、10列にして卸目している	外面露胎	ほぼ完形	肥前	大正 昭和前期
攪乱溝 図版20-2	汽車茶瓶	口径3.9 底径6.7 器高8.1	低火度の軟質陶器	外面は黄灰色の灰釉を胴下位まで 内面は鉄釉全面	型合わせ成型で、対角線上に合わせ目がある 外面に「お茶」と二重線内に菊花か太陽のモチーフが型押しで陽刻されている	口唇部釉剥ぎ 外底から胴下位に焼成不良の場所2つ対面にあり	外面の灰釉は斑で均一でない 内面の鉄釉は透明感がある	不明	1930年代
攪乱溝 図版20-3	乗燭	口径12.8 高台径7.7 器高2.6	磁器 完形のため不明	白磁釉外底以外	外底糸切り	畳付露胎	完形	肥前か	1930年代

表 69 4次調査東区出土攪乱溝出土遺物観察表

97図1・2は瓦で、3は土師質瓦である。2は焼成不良なだけで、厚さや成型技法から見て通常の燻し瓦である。3は上端面は丁寧に面が調整されているが、側面は面取りの削りが粗く、多くの段ができています。裏面にはナデの工具痕が多く残る。

98図1は手持ち砥石で、側縁を丸く整形しているのが平面小判形になっている。親指・人指し指・中指で持つのに適した形と大きさである。98図8は手持ち砥石で、下端は斜めに短い使用面がある。下部が尖っているので扁平片刃石斧のようにも見えるが、刃は形成されていない。石材も石斧には使用しない砂岩であることから、本遺跡でよく見られる特殊な手持ち砥石と考えた。9は手持ち砥石で表面の格子目は単なる使用痕ではなく意図的につけられたものだろう。装飾や何らかの機能があったとも考えにくい。11は置き砥石の欠損品の再利用と思われる。側面の欠損面を斜めに整形することで、掌に持ちやすい形になっているので手持ち砥石と考えられる。12は鹿角の一部で、2箇所切断したのみのものである。切断面は未加工で、残した先端部を利用して製品を作るのだろう。98図13は飾り金具である13-1の孔に挿し込み部が入った状態で出土したことから、羽状の装飾の下に飾り金具を装着したのだろう。この飾り金具の端部は沈線列がタガネ状工具で施されており、先端が尖っているので、別の部材と接合していたものと推察される。簪に多い珠が付くには金具が大きすぎるので、下にもう1枚同じような部材が接合して、円盤形になるのではないだろうか。

遺構名	器種	法量(cm)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元	
図版番号	通称名	値	
東区攪乱溝	土人形 土製	長さ3.5 幅2.3 厚さ2.9	型合わせで、接合部はケズリ 変色なし 諸葛孔明の頭部か 在地産
図版20-4			
東区攪乱溝	土人形 磁器	長さ3.5 幅2.3 厚さ2.9	型合わせ 般若像か 肥前産 外底に刺突あり
図版20-5			
東区攪乱溝	ミニチュア皿 透明ガラス	口径4.0 底径2.3 器高1.3	プレス成型で、バリを取っていないため口縁部が 上に尖っている
図版20-6			
東区攪乱溝	ミニチュア皿 透明ガラス	口径4.0 底径2.3 器高1.3	プレス成型後、口縁部は波状に切っている 気泡入る
図版20-7			
東区攪乱溝	瓶 磁器	口径3.5 底径4.2 器高3.8	円柱状 白ガラス 裏銘に三角形の中に桜の陽刻がある
図版20-8			
東区攪乱溝	瓶 磁器	口径4.5 底径5.2 器高4.2	円柱状 白ガラス 裏銘に菱形に「KKK」の陽刻がある 中央の「K」はデザイン化された文字
図版20-9			
東区攪乱溝	瓶 磁器	口径3.8 底一辺4.0 器高4.8	方柱状 白ガラス 裏銘に「レート」と陽刻されている
図版20-10			
東区攪乱溝	瓶 磁器	口径4.2 底径4.6 器高6.5	肩の張る甕形 白ガラス 型合わせ 裏銘にウテナの文字をデザイン化した三つ葉の陽 刻がある 昭和4(1929)年発売
図版20-11			
東区攪乱溝	瓶 透明ガラス	口径1.3 底径2.5 器高5.8	口縁部は打ち欠き外し 裏銘の陽刻のモチーフがあるが不明
図版20-12			
東区攪乱溝	瓶 透明ガラス	口径2.7 底径2.6 器高6.2	側面に型合わせの接合痕あり 側面に「DR.WILLIAMS」と「IKK ILLS FOR ALE EPOLE」IN GLASS FOR EXPORT と大きな「P」が陽刻されている
図版20-13			
東区攪乱溝	瓶 透明ガラス	口径1.4 底径2.7 器高7.1	側面に型合わせの接合痕あり 裏銘に屋号の山形の下に「ト」と「14」、側面に横線 の下に「定量」が陽刻されている
図版20-14			

遺構名	器種	法量(cm)	特 徴
挿図番号	形状	()は復元	
図版番号	通称名	値	
東区攪乱溝	瓶 透明ガラス	口径2.2 底径3.9 器高10.3	側面に型合わせの接合痕あり 裏銘なし 側面にシールを貼る楕円形の範囲の印 刻と、「30」と目盛りの陽刻から、葉瓶
図版20-15			
東区攪乱溝	瓶 透明ガラス	口径2.2 底径3.9 器高10.3	長方柱状で、斜めに型合わせの接合痕あり 裏銘の桃にとまるトンボの陽刻から、桃谷順天館 発売の化粧水の瓶
図版20-16			
東区攪乱溝	瓶 透明ガラス	口径2.2 底径3.9 器高10.3	裏銘の桃にとまるトンボの陽刻から、明治35 (1902)年桃谷順天館発売の「美顔水」の瓶
図版20-17			
東区攪乱溝	瓶 透明ガラス	口径1.0 底径1.6 器高4.7	外底に方形の窪みがあるが、不鮮明で裏銘か不明 型合わせ 上底
図版20-18			
東区攪乱溝	瓶 緑ガラス	口径1.0 底径1.7 器高10.8	口縁部は打ち欠き外し 型合わせ 上底
図版20-19			
東区攪乱溝	瓶 黄緑ガラス	口径1.0 底径1.7 器高10.5	口縁部は打ち欠き外し 型合わせ 上底
図版20-20			
東区攪乱溝	瓶 緑ガラス	口径1.0 底径1.7 器高10.5	口縁部は打ち欠き外し 型合わせ 側面に製作時の傷あり 上底
図版20-21			
東区攪乱溝	瓶 緑ガラス	口径1.0 底径1.7 器高10.7	口縁部は打ち欠き外し 型合わせ 側面に製作時の弧状傷あり 上底
図版20-22			
東区攪乱溝	瓶 緑ガラス	口径2.5 底径5.1 器高18.5	横書きで肩部に「WORCESTERS HIRE SAUCE」、 底部付近に「MASUDA & CO.」、縦書きで「HATA SAUCE」とあり、横に縦書きで「M S」、胴中央に 旗にMとSを組み合わせた商標を陽刻している 側面に型合わせの接合痕あり 上底が偏っている
図版20-23			
東区攪乱溝	瓶 緑ガラス	口径2.7 底径4.9 器高19.8	側面に「九州ラムネサイダー会社」「登録」「商標」 「ラムネ」、胴中央に巴文の商標を陽刻している 側面に型合わせの接合痕あり 上底
図版20-24			

表70 4次調査東区出土攪乱溝出土遺物観察表

99図1～26は銅銭で、このうち10・12・14・20以外は寛永通宝である。14から19はピット136から出土したもので、本来繋がって出土していたものと思われる。16・17・18は2枚融着しており、崩壊する可能性があるため剥がさない状態で掲載した。寛永通宝は古寛永・新寛永・文銭のほかに、字体によって分類しており、主に「永」の字の差異から分けている。この字体から見て、18は裏面が融着しているが、文銭とわかる。99図27は饅頭形の土製品で、棒状土製品と同じような焼け方をしている。下面の平坦面側には同じ99号土坑から出土した棒状土製品と同じ幅の焼けていない範囲があり、棒状土製品と組み合わせて使用していたと考えられる。

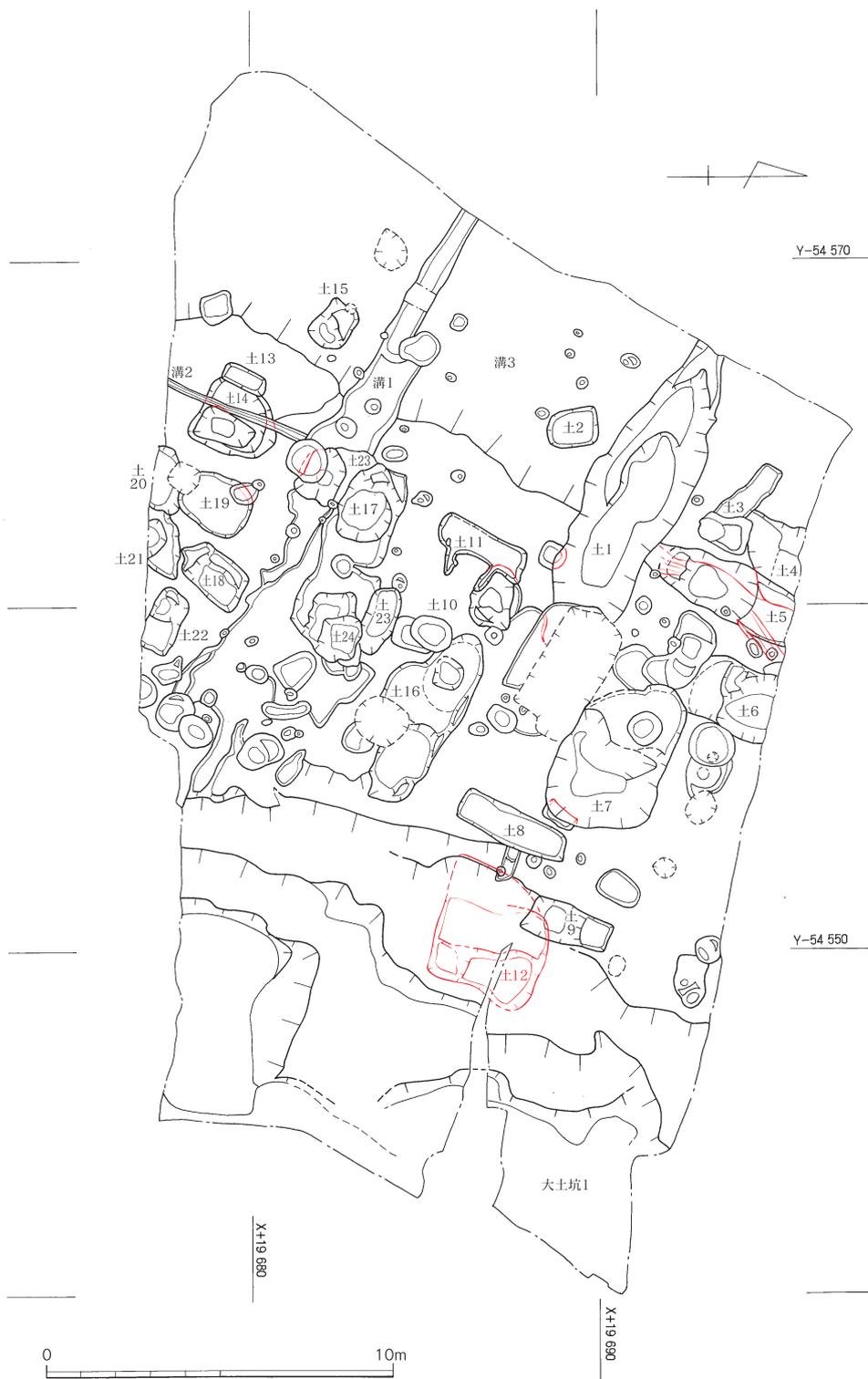
100図1～26は木製の漆碗で、4の裏銘は「請合」で、11の裏銘が「極請合」である。100図9は竹柵の杭として再利用されたもので、上端は方形の穿孔がある部材で、農機具の一部かもしれない。100図10は羽子板であり、丁寧に整形されている。くびれ部分に湾曲する抉りが入るだけで彩色や絵・墨書などはない。100図11は草履下駄で、上位中央に方形の削り込みがある。木釘孔は鼻緒のある位置に2つずつ3箇所あり、2つは下端にある。孔は貫通しておらず、留め具を挿し込んだものと思われる。100図13は側縁に削り込みをもつ板材で、組み合わせ容器の部材だろう。左端の表面には繋がった板材が剥がれた痕跡が残っていた。上端面には目釘孔があるので、上に延びるが、下端面にはない。下に板が延びないことから、墨書のある板材を転用したものと考えられる。中央から左半分がないため、文字が判読できない。100図14は曲げ物の側板で、柄杓の身であろう。柄を挿し込む方形孔が開けられ、その対面に柄先端の留め具が残っている。側板の外面側の先端は角がカットされている。

101図1は柱材で、牽引する際の紐通し穴が開けられている。紐通し孔は方形で、断面扇形の直線部分の端部に開けられ、扇形の円弧の部分にあたる部分は丸く整形されている。101図2は鋤で、乾燥して変形したため、図面は推定を含めて書いている。基部は欠損している。穿孔はなく、他の部材とどのように組み合わせたのかはわからない。先端に鉄部をつけるために先端を方形にして薄くしているので、袋状の基部に挿し込むものと思われる。

図版19・20は近代に属する溝からまともって出土したものである。完形品かほぼ完形品が多く良好なセットだったので、写真のみ掲載しておきたい。図版19-2・3はクロム青磁の碗で、濃緑でなく、薄く透明釉に近い。図版19-8は、コバルト型紙刷染付の小皿で、紙面の都合上掲載していないが、もう1枚同じモチーフのほぼ完形品がある。図版20-2は汽車茶瓶で、通常「汽車土瓶」といわれる、駅で販売される使い捨てのお茶の容器だが、器形は土瓶でないので、茶瓶と称した。本遺跡の2次調査1号溝状遺構でも同じ形態のものが出土している。([矢加部町屋敷I]第23図32)文様と「お茶」と書くことが一致しており、同じ窯の製品だろう。異なるのは把手孔で、これには実用可能に作られているのに対して、2次調査の出土品はつまみ状になっており、同じ窯の製品だろう。異なるのは把手孔で、これには実用可能に作られているのに対して、2次調査の出土品はつまみ状になっており、孔がなくなっていることである。戦時下の金属節約のため、把手自体が失われたことから、退化してつまみ形になったものである。2次調査出土品には釉もかかっていないが、これも資源の節約のためだろうか。図版20-9～11は瓶ガラス代用磁器である。図版20-10は裏銘に「レート」と陽刻されているので、大正5(1916)年に平尾賛平商会から発売された「レートポマード」の瓶とわかる。図版20-11はポマード瓶で、

裏銘にウテナの文字をデザイン化した三つ葉の陽刻があるので、昭和4(1929年)に発売された久保政吉商店の「ウテナクリーム」とわかる。図版20-12・16・17は裏銘に桃にとまるトンボの陽刻があるので、桃谷順天館の化粧瓶である。このうち17は瓶の形から、明治35(1902)年に桃谷順天館から発売された「美顔水」である。図版20-14は「元禄」の陽刻から、水野甘苦堂から大正10(1923)年に発売された白髪染である。「白髪染」とは書いてないが、器形と定量などの陽刻の類例から白髪染め用の瓶とわかる。図版20-13は円柱状の瓶で、外底に鋳出されているT字は線は細く、裏銘ではないかもしれない。インクのカートリッジ状の容器だろうか。図版20-18～22はニッキ瓶で、同じ版型だが、口縁部を打ち欠いて離す際の打ち搔きの大きさと器高が若干異なる。紙面上掲載していないが、ニッキ瓶の完形のものがある。

これらの遺物のうち、販売開始年代がわかるもののなかで最も新しいものは1929年であるから、1930年代以降のものだろう。1941年に始まるとされる陶磁器の統制番号の記入がないことと、ガラス代用磁器があることから、30年代でも後半段階のものではないだろうか。



第 102 図 矢加部町屋敷遺跡 5 次調査遺構配置図(1/200)

4. 5次調査

5次調査区は県道の東側調査区の中央に位置し、北を4次調査東区、南を1次調査に接し、調査面積は210㎡である。

5次調査は平成19(2007)年6月5日に重機による表土剥ぎを開始し、翌6日にリース機材を搬入し、7日の午後から作業員を投入した。1号土坑、5号土坑上面に2基と6号土坑南西隅上面に胞衣壺の底部が検出された。明治以降の面からの掘り込みなので、記録なしに取り上げた。6月27日、夏日になり、現場に遮光ネットをかける。7月23日、梅雨が明け、これ以降猛暑日が続く。7月24日、バルーンによる空中写真の撮影。7月26日、作業ヤードを移設し、27日から反転作業を開始。7月31日には南側の調査区を表土剥ぎにかかる。8月3日には台風通過。9月14日に最後の実測図作成を終了し、9月18日に機材を搬出し、9月25日に重機による埋め戻しを完了した。

梅雨から夏季にかけての調査で、猛暑とにわか雨に悩まされた。また、基盤層だけでなく埋土も強粘土質であり、遺物量や木製品・竹柵遺構もあったので調査は遅々として進まず、調査面積や遺構の残り具合に比して、多くの時間と労力を費やした。

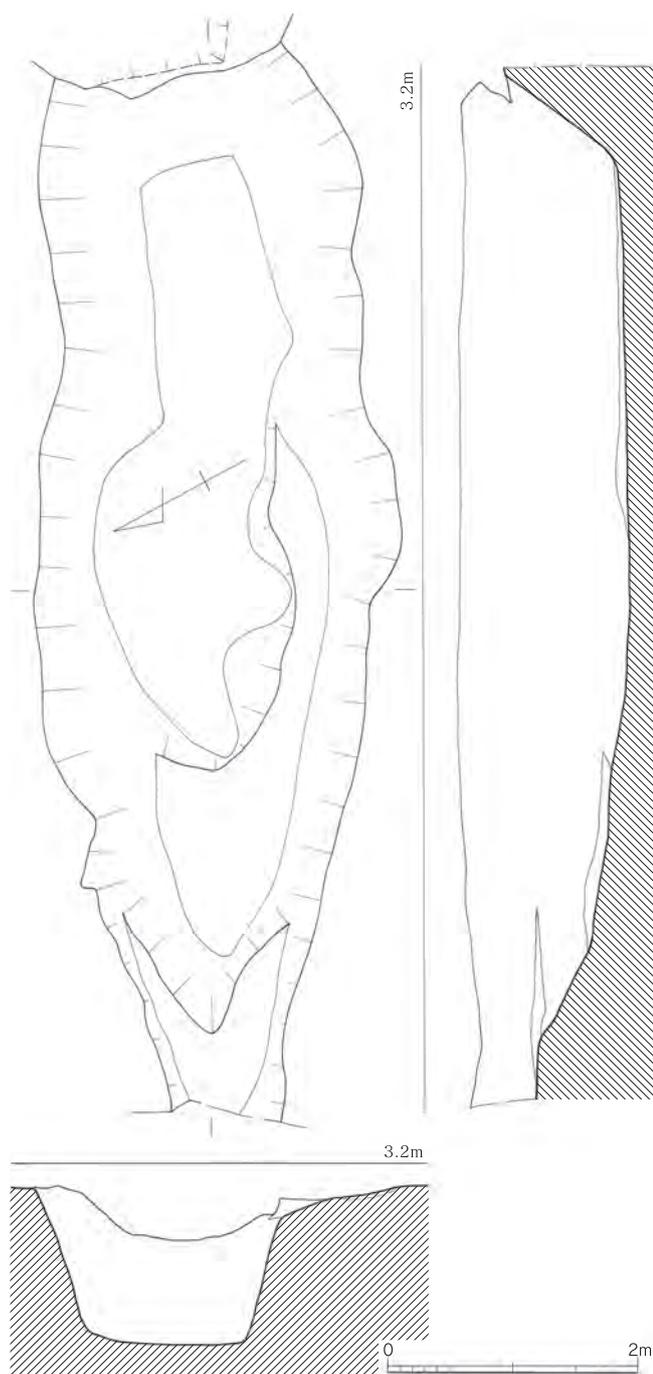
1) 遺構

矢加部町屋敷遺跡5次調査では、土坑25基、大土坑1基、溝状遺構3条などを検出した。

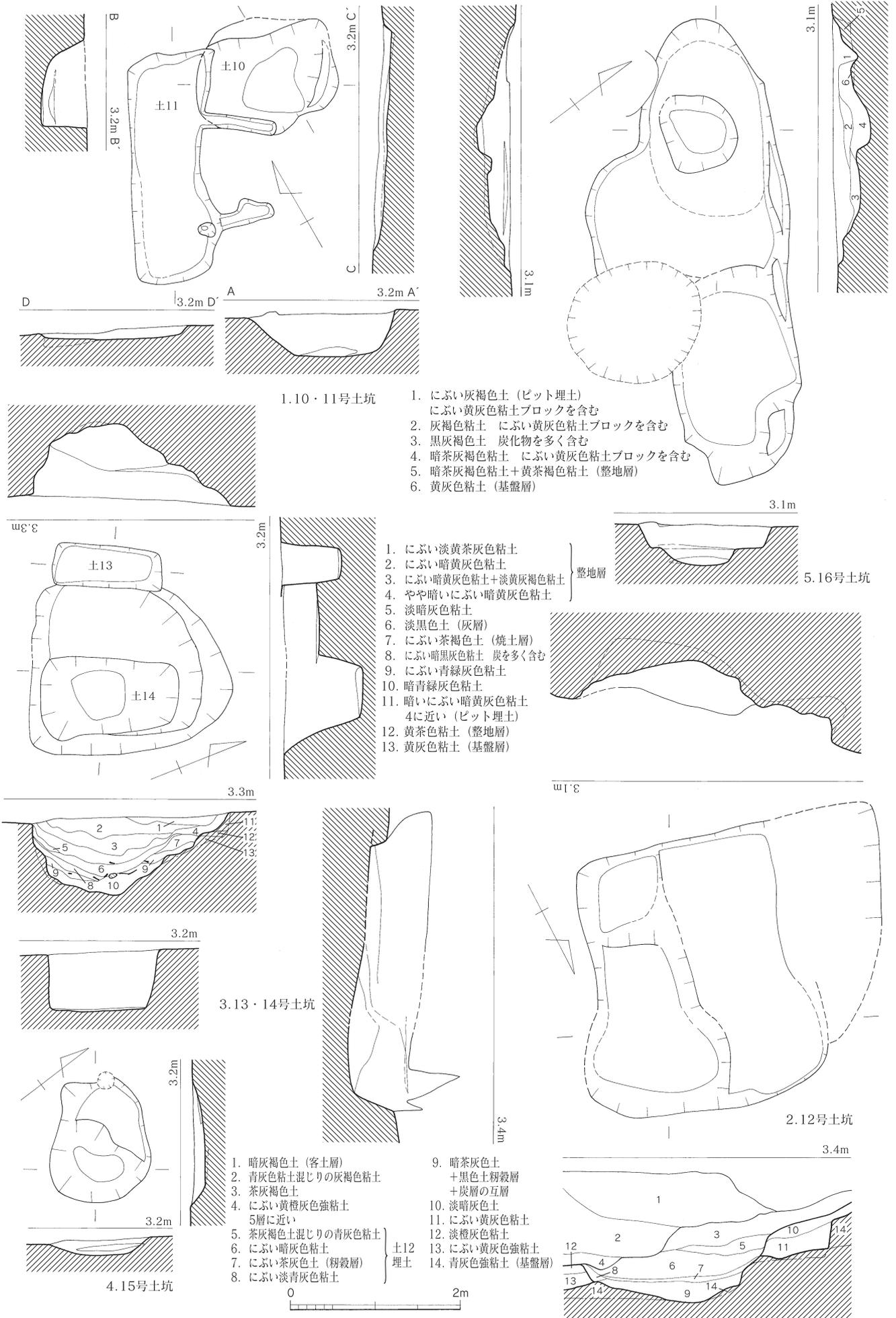
a) 土坑・大土坑

1号土坑(図版22、第103図)

調査区西側に位置する略長方形の大型の土坑である。南東部を攪乱に切られ、北西部は調査区外に延びる。現存で長軸866cm、短軸で290cm、南東部に最深部があり、126cm程度を測る。



第103図 1号土坑実測図(1/60)



第105図 10～16号土坑実測図(1/60)

主軸方向はN - 31° - Wで、往還道に垂直方向であることから、道路に沿った建物の横に設けられたものだろう。中央部が最も深くなるので、溝ではない。埋土に藁状の有機質含む。

せんじ碗と広東碗があるので18世紀後半から19世紀初頭である。

2号土坑（図版22、第104図）

調査区西側に位置する方形の小型の土坑である。長軸150cm、短軸109cmで、床面はほぼ平坦で、15cmほどの深さしかない。主軸方向はN - 8° 20' - W。

出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は特定できない。

3号土坑（図版22、第104図）

調査区北西端に位置する平面長方形の土坑である。4号土坑を切り、ピットに南東部を切られており、長軸は現存で208cm、短軸で78cmを測る。床面はほぼ平坦で、15cm程である。主軸方向はN - 45° 50' - Wをとる。

出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は半球形の無文磁器碗が出土していることから18世紀前葉から中葉である。

4号土坑（図版22、第104図）

調査区北西端に位置する平面不整形の土坑である。3号土坑とピットに南部を切られ、東部を5号土坑に切られる。北側は4次調査東区に延び、4次調査の93号土坑に繋がる。93号土坑の検出範囲が狭かったため、4次調査の段階では1つの遺構と認識してしまった。現存で長軸が約249cm、短軸は191cm。南側を掘りすぎているが、中央に細長い床面をもつことから、掘削の際に形態を意図していないとわかる。深さは最深部で55cmを測る。主軸方向はN - 17° 40' - Eをとる。

出土遺物が少ないが、身の深い赤絵の腰丸碗が出土しているので18世紀中葉だろう。

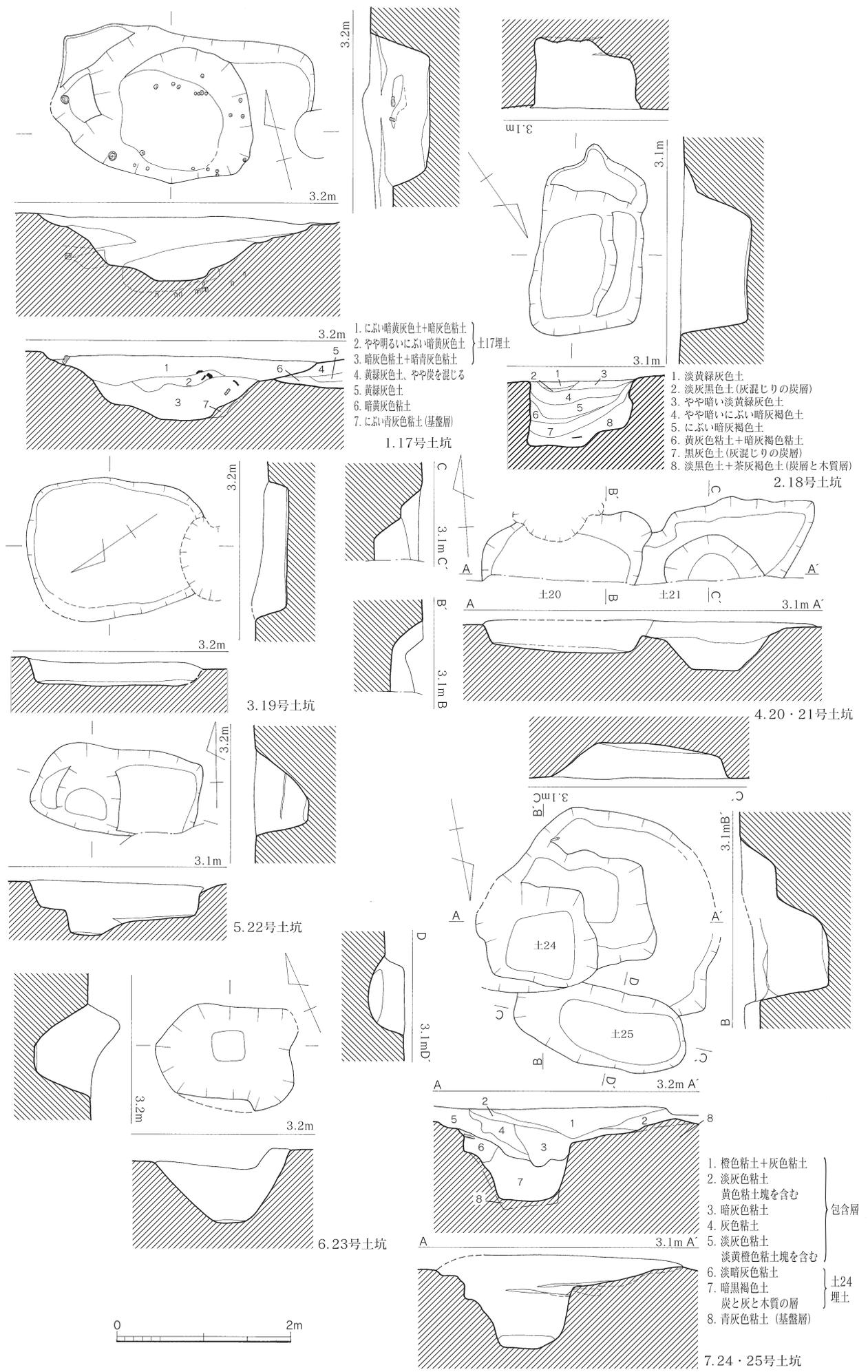
5号土坑（図版22、第104図）

調査区北西端に位置する平面長方形の土坑で、北側が調査区外にかかり、4次調査の93号土坑に繋がる。93号土坑の検出範囲が狭かったため、4次調査の段階では1つの遺構と認識してしまった。南部を1号土坑に切られている。検出された範囲では長軸が247cm、短軸87cm、深さは最深部で76cmを測る。床面は中央部がやや窪む。中央に籾殻層が入る。主軸方向はN - 29° 40' - Eをとる。

出土遺物はわずかだが、4号土坑を切ることと、氷裂文を地文とする菊花文染付から18世紀中葉だろう。

6号土坑（第104図）

調査区中央北端に位置し、南東隅を7号土坑に切られる。平面隅方形プランで、北側は4次調査東区に延びており、4次調査94号土坑と繋がる。現存で長軸が252cm、短軸202cm。床面



第106図 17～25号土坑実測図(1/60)

には凹凸があり、62cm程の深さを測る。主軸方向はN - 23° 30' - Eをとる。

出土遺物はわずかだが、出土した三島手の象嵌入り陶器鉢の口縁部形態から、年代は18世紀前半だろう。

7号土坑 (図版22、第104図)

調査区中央部に位置し、6号土坑を切る大型の不整形プランで、長軸が498cm、短軸は316cmであろう。東側が深く、93cmの深さがある。中央部に埋土の高まりがあるが、崩落土だろう。主軸方向はN - 71° 50' - Wをとる。

出土遺物はわずかで、小片が多い。1・6号土坑に切られ1号溝状遺構を切ることから、18世紀中葉から19世紀中葉の間である。

8号土坑 (図版23、第104図)

調査区中央部に位置する平面長方形の土坑である。長軸が332cm、短軸は102cm。最深部で30cm程しか残っていない。主軸方向はN - 75° 10' - Eで、県道23号線と同一方向なので、往還道に沿う建物に付随する施設だろう。

出土遺物はわずかで、小片が多い。小型甕の口縁部形態から17世紀後半から18世紀代だろう。

9号土坑 (図版23、第104図)

調査区中央部に位置し、12号土坑を切る長方形の土坑である。長軸253cm、短軸118cmだが、北側は浅いテラスになっており、実際としては長軸172cmの方形を呈する。深さは81cmほど残っており、床面はほぼ平坦。主軸方向はN - 17° 10' - Eで、県道23号線と同一方向なので、往還道に沿う建物に付随する施設だろう。

遺物がほとんど残っていなかったので時期を特定できない。

10号土坑 (図版23、第105図)

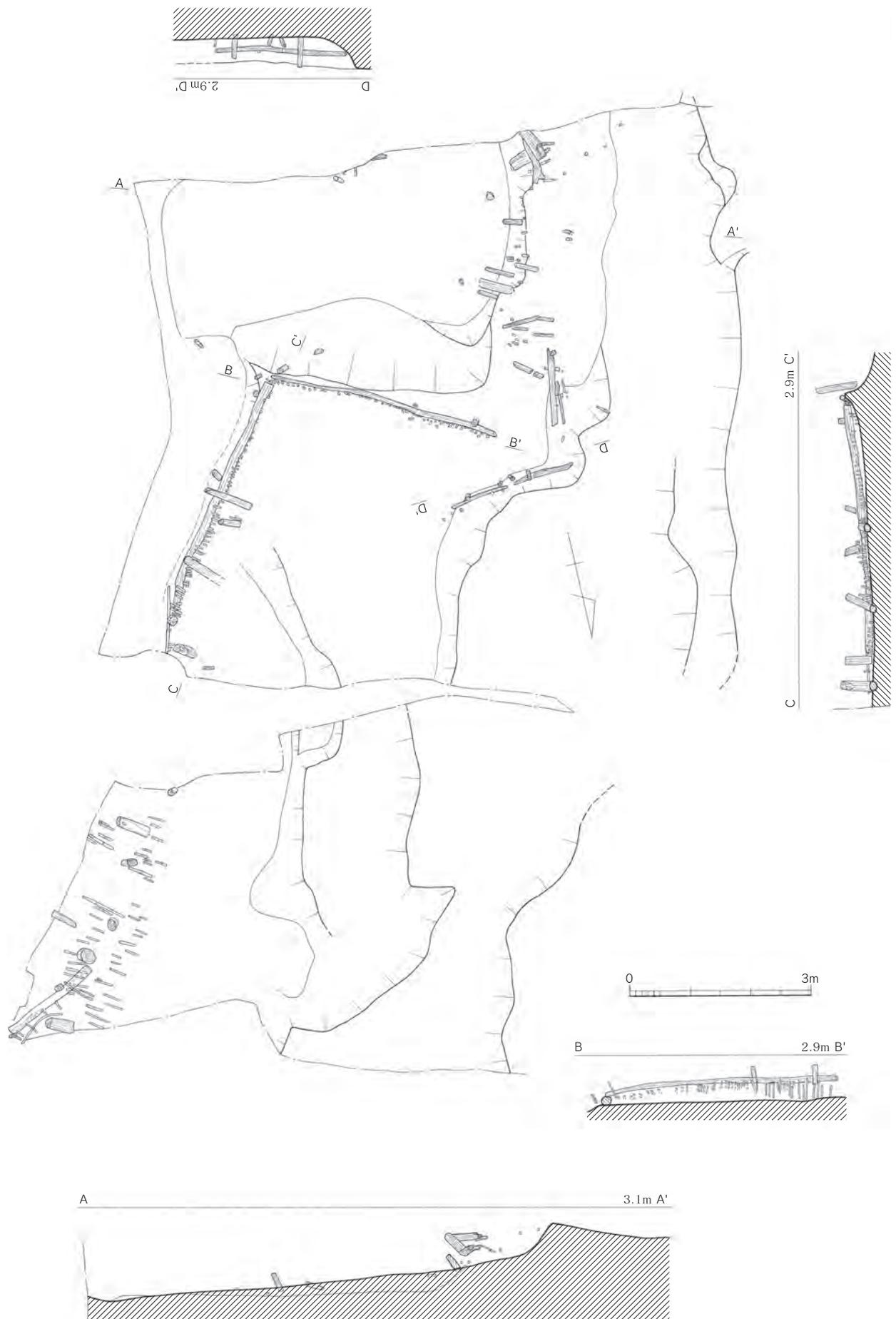
調査区中央東側に位置し、11号土坑に西端を切られていた。平面略方形で、主軸方向はN - 78° 50' - W。長軸167cm、短軸130cm、深さは50cmほどを測る。

遺物がほとんど残っていなかったので確実性が弱いだが19世紀代か。

11号土坑 (図版23、第105図)

調査区中央東側に位置し、10号土坑を切る長方形プランで、東辺に2か所の細長い溝状の張り出しがある。この2本の溝状遺構は10cmほどの浅いもので、土坑本体との関係は不明である。長軸271cm、短軸95cm、深さは52cmほどを測る。主軸方向はN - 29° 50' - Eで、県道23号線と同一方向なので、往還道に沿う建物に付随する施設だろう。

無文で、壁が直線的に緩やかに立ち上がる磁器碗が出土していることから、18世紀代に属する可能性がある。



第 107 图 1 号大土坑实测图(1/90)

12号土坑 (図版23、第105図)

調査区中央東側に位置し、1号大土坑を切る大型の略方形プランで、反転時に中央部を掘り残したため図面が繋がっていないが、長軸358cm、短軸324cm、東が深くなり、深さ108cmを測る。9号土坑に北西隅を切られる。初殻や炭層の互層がある。主軸方向はN-25° - Eである。

縞文の染付が入る蓋物が出土していることから18世紀後半か。

13号土坑 (図版24、第105図)

調査区中央南側に位置する小型の長方形土坑で、14号土坑を切る。長軸130cm、短軸50cm、深さは74cmで、壁は直立する。主軸方向はN-25° 30' - Eで、県道23線と同一方向なので、道路に沿った建物の横に設けられたものだろう。

型紙刷の端反碗染付が出土しているので19世紀中葉である。

14号土坑 (図版24、第105図)

調査区中央南側に位置する略方形プランで、13号土坑・2号溝状遺構に切られる。長軸238cm、短軸202cm、東側が深くなっており、この部分が方形で本体部分だろう。90cmを測る。下面層は炭を多く含むことから廃棄土坑だろう。主軸方向はN-22° 10' - Eである。

口縁下に突帯が付く摺鉢や京焼風陶器が出土していることや、内面口縁の肥厚が退化していることから18世紀前葉である。

15号土坑 (図版24、第105図)

調査区中央西側に位置する、平面不整形プランの小型土坑で、長軸149cm、短軸117cmを測る。主軸方向はN-52° 50' - Wである。

出土遺物はわずかで小片が多く、年代が特定できない。

16号土坑 (図版24、第105図)

調査区中央に位置する平面不整形の大型の土坑である。長軸553cm、短軸239cmで、深さが最深部で44cm程度である。南東部は別の土坑かもしれない。主軸方向はN-53° 10' - Wで、埋土は炭化物を多く含む暗黒灰色の単層であった。

出土遺物はわずかで小片が多いが、内面口縁部に袈裟襷文の入る筒形碗があるので18世紀後半だろう。

17号土坑 (図版24、第106図)

調査区中央西側に位置し、1号溝状遺構に近接しているが、切り合いは不明確だった。略方形プランで、南東部はプランが不明瞭だった。竹と杭が壁を巡っているが、竹柵状遺構のように直線的な配列ではない。横木と思われるものがこの竹柵から遊離して出土しており、本来土留めとしての竹柵遺構であったのではないだろうか。主軸方向はN-76° 50' - Wで、長軸

303cm、短軸276cmで、深さが最深部で70cm程度を測る。

年代は外面口縁部下に突帯が付くタイプと外面口縁部が肥厚するタイプの摺鉢が出土していることから、18世紀中葉である。

18号土坑（図版24、第106図）

調査区中央南部に位置する略方形の土坑である。東隅が最も深く、床面も方形を呈するので、この部分が本体だろう。南東の壁が直立しており、なんらかの施設であった可能性が高い。主軸方向はN - 35° 30' - Eで、長軸221cm、短軸127cm、深さは80cmを測る。

口縁部が玉縁状の摺鉢があり、せんじ碗が出土していることから18世紀初頭だろう。

19号土坑（図版24、第106図）

調査区中央南部に位置する略方形の土坑である。北西隅をピットに切られ、南側を現代の井戸に切られており、主軸方向はN - 36° - Eで、現存で長軸208cm、短軸166cm、深さ約40cmほどしかない。

鉄釉を内外に掛ける小型碗が出土しているので、17世紀末から18世紀後葉。

20号土坑（図版24・25、第106図）

調査区中央南部に位置する略方形の土坑である。南側を現代の井戸に切られており、21号土坑を切る。南側が1次調査区に延びるため、主軸方向はN - 19° 20' - Eになる。現存で長軸180cm、短軸86cmを測る。当初16号土坑と同じ遺構と見られたが、掘り下げていく過程で2つに分けられた。

年代は台付皿から18世紀初頭から後葉である。

21号土坑（図版25、第106図）

調査区中央南部に位置する略方形の土坑である。西側を20号土坑に切られており、南側が1次調査区に延びるため、主軸方向はN - 20° 6' - Eになる。29号土坑と同一遺構である。現存で長軸191cm、短軸96cmを測る。

径の小さい平底の摺鉢が出土しているので、17世紀後半の遺構である。

22号土坑（図版25、第106図）

調査区中央南部に位置する長方形の土坑である。長軸182cm、短軸100cm深さは60cmほど残っており、主軸方向はN - 73° 20' - W。中央部が深い。

遺物もほとんど残っていなかったが、18世紀中葉か。

23号土坑（図版25、第106図）

調査区中央に位置する平面略方形の小型の土坑である。ピット15に切られ、主軸方向はN - 25° 20' - Eで、長軸167cm、短軸121cm、深さ85cmを測る。

18世紀中葉から19世紀中葉に属する口縁外面肥厚で、高台の付く摺鉢が出土しており、せんじ碗があることから18世紀中葉だろう。

24号土坑 (図版25、第106図)

調査区中央に位置する不整形の土坑だが、西側が浅く、北東側が平面方形に深くなるので、本来は小型の土坑であろう。25号土坑との切り合いは不確実だった。土層から見ると6・7層を埋土とする最深部と上位は別の遺構の可能性もあるが、上位層は埋まる過程に水平堆積しなかっただけで、掘り直しや別遺構ではないと判断した。主軸方向はN-79° 50' - Wで、長軸153cm、短軸125cm、深さは62cmを測る。竹の網籠片が出土していたが、小片であったので取り上げなかった。

口縁部が長い玉縁形に肥厚する摺鉢が出土していることから、17世紀後半代だろう。

25号土坑 (図版25、第106図)

調査区中央に位置する平面不整形の大型の土坑である。当初24号土坑と一緒に掘り下げており、その途中で別遺構とわかったため、切り合いは不確実である。主軸方向はN-67° - Wで、長軸203cm、短軸47cm、深さは40cm。床面はやや窪みを持つ。

年代は特定できない。

1号大土坑 (図版26、第107図)

調査区南東端に位置し、4次調査東区100・101号土坑に繋がる。12号土坑に切られており、東端部は調査区外の現代の溝内に収まるらしく、竹柵遺構が縦横に設置されているので溝ではない。したがって、平面不整形の土坑とした。主軸方向は不明確だがN-31° 40' - Eとする。

竹柵の設置の仕方から時期差があると思われるが、検出時には確認できなかった。西側は緩やかな斜面で、南西部の竹柵はこの斜面に沿っている。東側の竹柵遺構は、東壁に沿って設置されたものと思われる。南北方向に走るこの2つの竹柵遺構は東に倒れており、ほとんど原位置を保っていない。中央部の横木の残っている部位の残りがよく、等間隔に丸太杭を入れ、その間は竹柵を入れている。東西方向に走るものはこの横木と端部が接していることから、本来一体のものと思われるが、この柵を最高所として両側が下がっているので、内部を分割していたのかもしれない。深さは南側で60cmほど、北側で150cmほどになる。木杭はほとんどが丸太材だが、建築材や鋤の再利用も見られた。南部には黒色土が厚く堆積しておりこれを南部上層として取り上げたが18世紀中葉から後葉の遺物の中に燻し瓦が見られた。この黒色土には炭化物が入っているが、粒子が大きくザラザラしている。

出土遺物には18世紀前葉から中葉のものが多く出土しているので、この時期に属する遺構である。19世紀中葉の遺物も一定量あるが、上層出土である。大正10年銘1銭銅貨は検出段階に上位にあったコンクリート基礎の掘り込み時の混入品だろう。

b) 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版21・25、第102・108図)

調査区南東部に位置し、北西から南東方向に走って、1号大土坑に達する。深さは10～15cmと浅く、中央部から次第に幅が広がり、段落ち状になる。幅は狭いところで50cm、広い所で280cmある。3号溝状遺構を切り、2号溝状遺構は垂直方向に走るが、切り合いは不鮮明だった。

17・23・24・25号土坑に切られていることと、染付の草花文のモチーフから17世紀後葉から18世紀初頭のものと考えられる。

2号溝状遺構 (図版21、第102図)

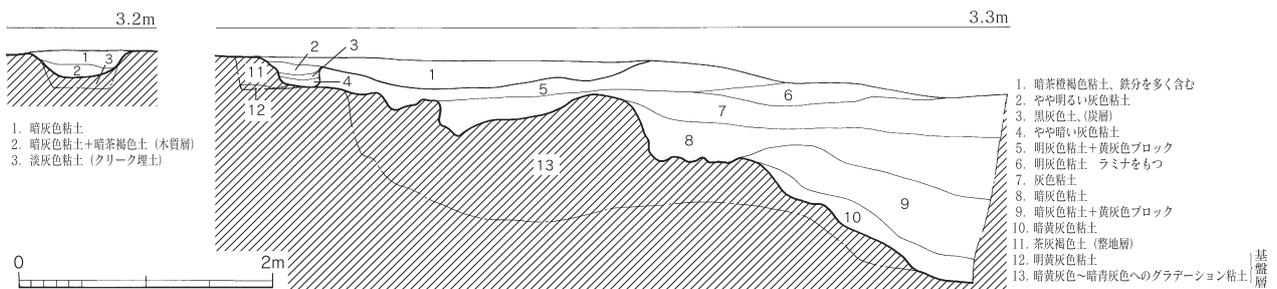
調査区の南西部に位置し、南西から北東方向に走る狭い溝で、幅は14～30cmほどで、深さは5cm前後、北端は1号溝状遺構に達しており、排水溝であったようだ。

14号土坑を切ることから、18世紀後半代の可能性が高い。

3号溝状遺構 (図版21、第102・108図)

調査区の西端を直線的に県道と併走して走る溝で、4次調査東区の10号溝状遺構に繋がる。2・15号土坑、1号溝状遺構に切られている。西端が検出されていないが、幅5.9m、深さ1.75mを測る。

大振の草花文碗や崩れた雨振り文碗が出土しており、17世紀後葉から18世紀初頭の1号溝状遺構に切られるので、17世紀後葉から末には完全に埋没している。



第108図 1・3号溝状遺構土層断面実測図(1/60)

IV. まとめ

今回遺構を報告した4次調査東区と5次調査から、県道23号線東側の北半部の様相が判明した。この章ではこの結果を踏まえて、調査区の県道東側北部の様相についてまとめるとともに、4次調査西・東区から出土した遺物の中で、注目されるものについて述べたい。

1. 4次調査東区・5次調査の遺構

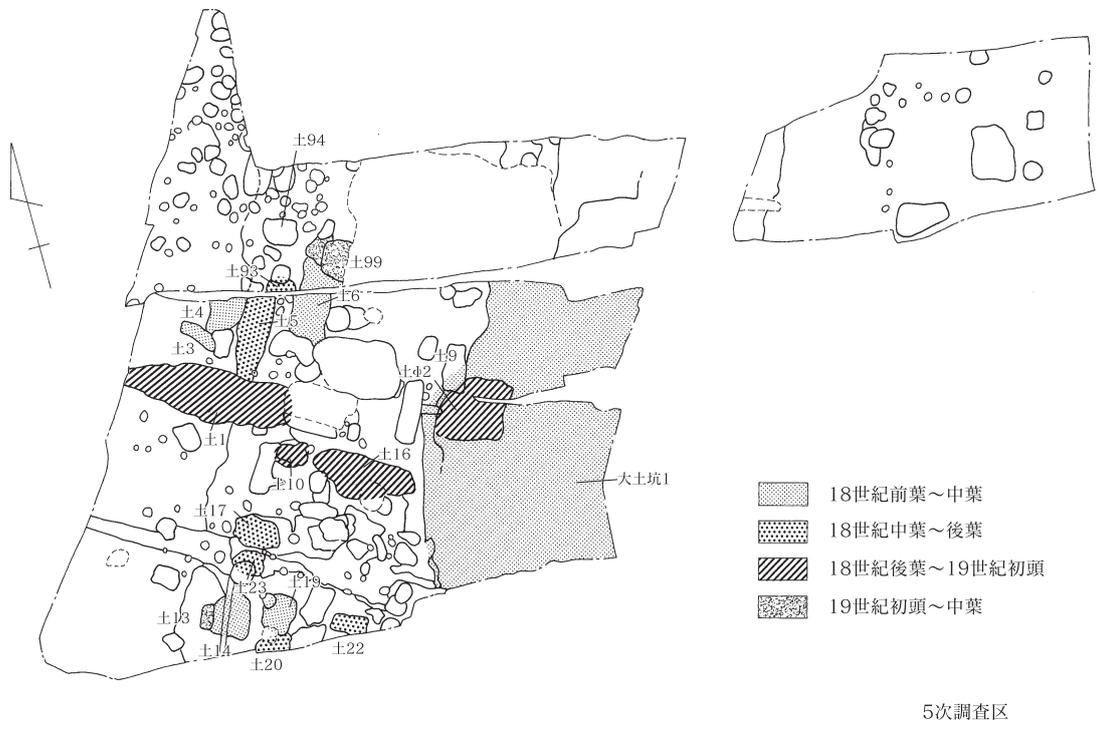
遺構の時期別配置から、変遷について考察してみる。今回の調査で最も古い時期の遺構は、県道23号に沿って走る、4次調査東区の10号溝状遺構と5次調査の3号溝状遺構である。両者は久留米柳川往還の東側溝と考えられる。この東側溝側は溝の半分ほどが検出されている。一方、西側調査区の4号溝状遺構は掘り方しか検出されなかった。つまり、東西の側溝の中央に位置する久留米柳川往還は現道下の中央から東側に存在していることがわかった。

出土遺物からみると、東側溝は17世紀後葉には埋まり始めており、このことは4次調査西区で検出された西側溝の埋没時期とも一致する。上位に遺構が掘り込まれているので18世紀初頭には完全に埋没していたと思われる。調査区内には往還道側溝が機能していた17世紀に属する明確な遺構はなく、4次調査100・101号土坑、5次調査1号大土坑からは17世紀に属する遺物が少量出土しているが、大型土坑であるため混入品の可能性が高い。17世紀末から18世紀初頭の遺構も少なく、往還道の東側に集落が展開するのは、西側よりもやや遅れ、遺物量が増加する18世紀初頭からであろう。

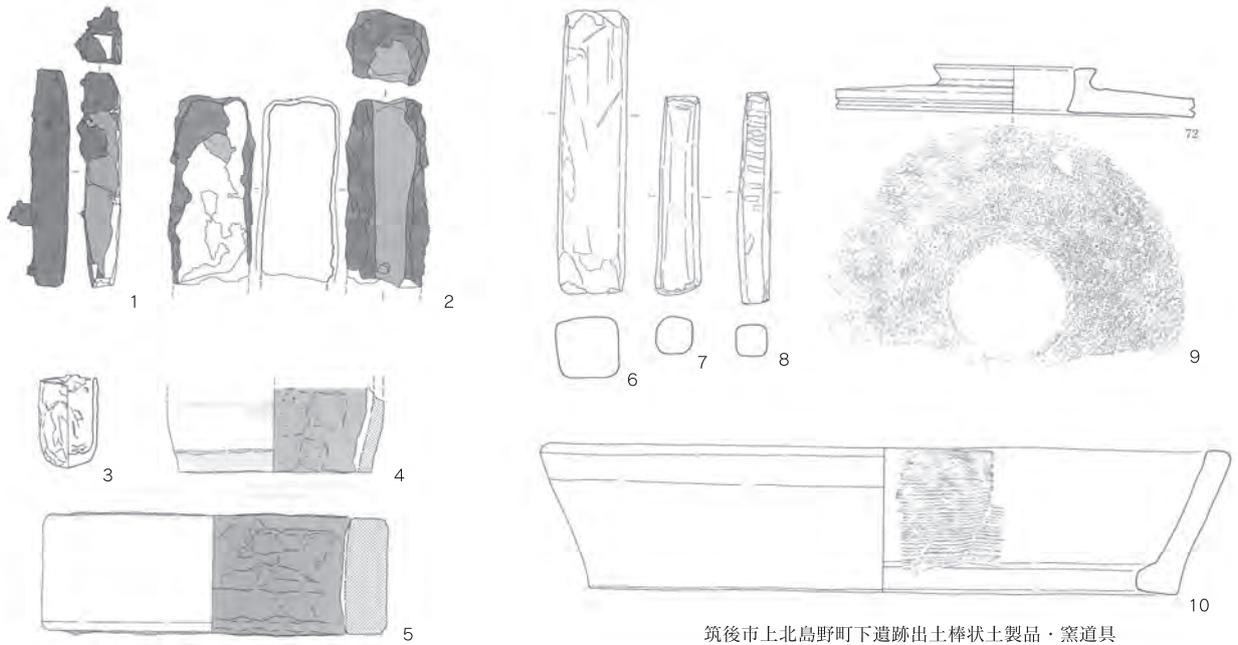
18世紀前葉から中葉段階には中・下層包含層が存在しており、この包含層を整地層としていたものと思われる。5次調査1号溝状遺構が往還道に対して垂直方向に掘られており、その水落とし場に、4次調査100・101号土坑、5次調査1号大土坑の大型土坑を設けている。4次調査西区でも1号溝状遺構と同じ方向に走る溝があり、集落形成時の区割りラインになったのだろう。建物復元の根拠とするには柱穴が不足するが、建物の存在する範囲を想定してみよう。4次調査100・101号土坑と5次調査1号大土坑は埋没が明治までかかる大型の遺構なので、利用できる面積は西側に比べてそれほど広くない。4次調査の93・94号土坑、5次調査の4・5・6号土坑が直線的に並ぶので、その並びと5次調査14・19号土坑と1号溝状遺構に囲まれる範囲に建物があったのではないだろうか。18世紀中葉から後葉になると土坑が多くなる。特に大型の1・16号土坑が存在することからは、この時期には建物が失われていたことを示している。

18世紀後葉から19世紀初頭段階では、大型の5次調査1号大土坑の南北で区画が別れると見るべきだろう。上層包含層は18世紀後葉のものが多いので、これを整地層としていたようだ。南側では5次調査2号溝状遺構が掘られており、1号溝状遺構と囲まれた区画が想定できる。

19世紀初頭から中葉の遺構は少なく、小型のものが多いので前代の建物を避けて作ったことが想定できる、前代の建物が存続したのではないだろうか。胞衣埋納はバックホーによる整地層掘削時に出土しており、遺構として記録していないが、位置的には1号溝の北側で集中的に見つかっている。土坑の空白地帯でもあることから、屋内に埋められたのであろう。

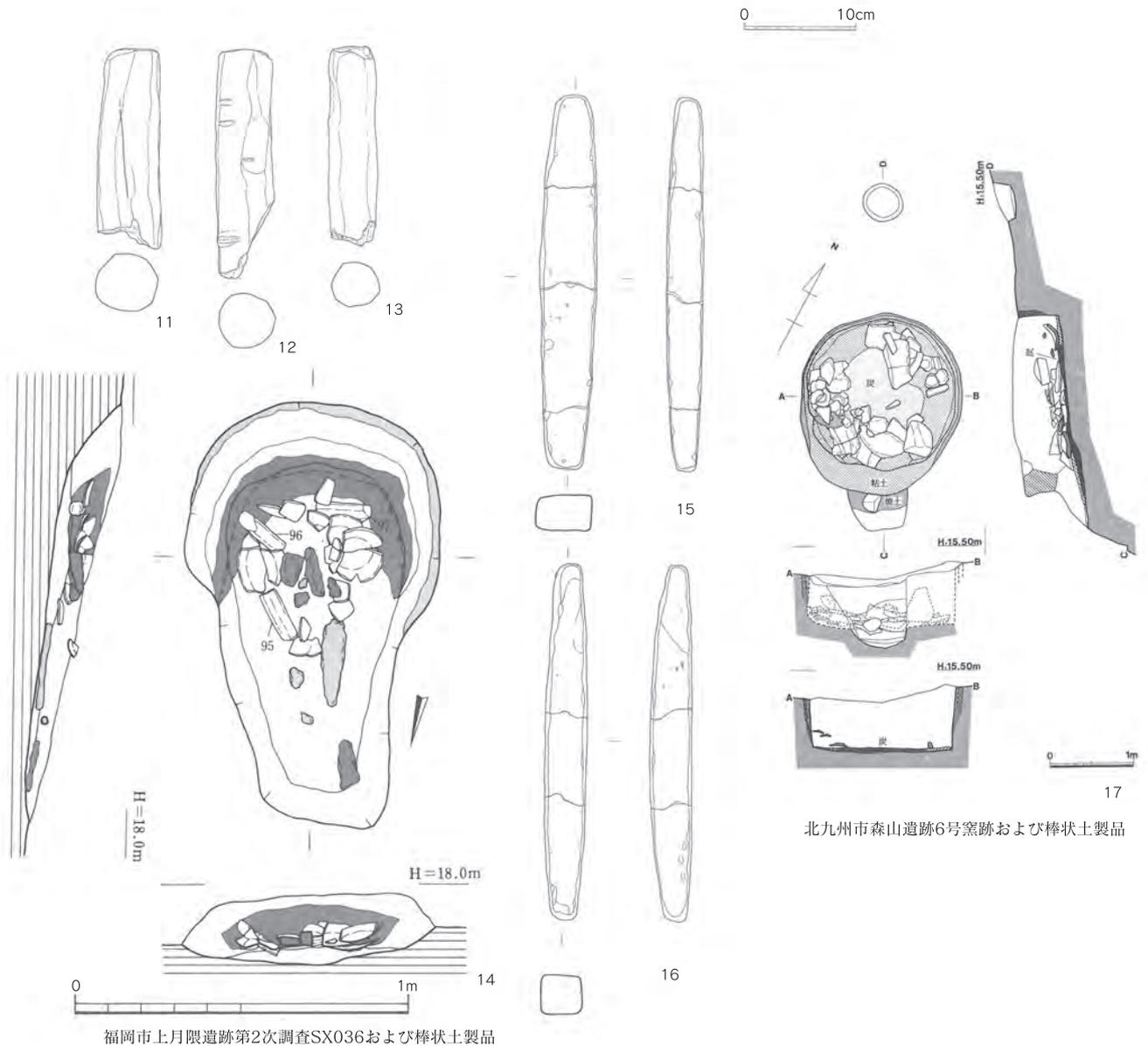


第109図 矢加部町屋敷遺跡4次調査東区・5次調査遺構変遷図(1/400)



筑後市上北島野町下遺跡出土棒状土製品・窯道具

矢加部町屋敷遺跡出土棒状土製品・铸造関係土製品



北九州市森山遺跡6号窯跡および棒状土製品

福岡市上月隈遺跡第2次調査SX036および棒状土製品

第110図 棒状土製品関係資料(14は1/20、17は1/80、他は1/6)

今回報告した4次調査東区と5次調査は面積が狭く、攪乱が多かったので、5次調査区側の時期別の建物の想定については、南側に隣接する1次調査区の成果を踏まえて再検討する必要がある。

2. 窯道具について

これまでの調査で不明棒状土製品として報告してきたものを、今回は窯道具として報告した。これは、筑後市上北島野町下遺跡(注1)で、同様の棒状土製品が明らかな窯道具とともに出土していたためである。同遺跡は窯跡遺跡ではないが、野町集落に点在する野町窯跡群に近接しており、窯跡の廃棄物が混入した可能性が高い。

本遺跡においてはどうか。柳川市北部の蒲池地区には近世の土師質土器の窯である蒲池焼窯があったが、本遺跡からは約800m離れている。(第3図)記録に残らない窯跡が点在していたにしては、本遺跡では棒状土製品に伴う明らかな窯道具が出土していない。そのため火を強く受ける道具であることはわかるものの、窯道具としての確証がなかったため、これまでは不明土製品としてきた。

今回、4次調査西区から多くの鑄造関係の土製品や魚網錘の鑄型が出土したことで、鑄造工房があったことが明らかになった。窯場と鑄造工房が隣接しているとは考えにくく、鑄造工房に鑄型やるつぼなどの土製品を焼く小規模な窯が付随していたのではないかと考えた。鑄型は鑄物師自らが作るであろうから、るつぼなど小型のものも含めて鑄造に必要な土製品は窯元に発注するのではなく、自作していたと見るべきだろう。

本遺跡出土の棒状土製品はサイズがばらばらで、1cm角の小型品から、5cm角の大型品まであるが、これは杯サイズのるつぼから、来年度報告予定の1次調査で出土した径約30cmの湯釜の鑄型まで、いろいろな大きさの鑄造用土製品を焼成したためだろう。(第110図)

棒状土製品は古代から中世の土師器焼成窯で発見されることがあり、使用方法は不明だが窯道具と推定されている。本遺跡出土の棒状土製品との差は、焼け方が弱いことである。胎土内の混和材の差の可能性もあるが、変色の仕方から見ても焼成温度に差があったと見るべきだろう。これは窯構造が半地下式から地上式に変わったことで、焼成温度が高まったためであろう。

以上のことから、棒状土製品を窯道具としたが、他の地域の近世土師質土器の生産遺跡や近世の鑄造遺跡でも出土するのか検討する必要がある。現在のところ、筑後市域でしか見られないので、土師質土器窯が集中する筑後・柳川地域に特有の技法なのかもしれない。

3. 土師質瓦について

『矢加部町遺跡Ⅰ』のまとめの中で、本遺跡から多量に出土する土師質瓦について考察したが、この中で述べた「樋瓦」のうち、端部突帯が表裏逆につくものについて新たな知見があったので記載しておきたい。「樋瓦」とした土師質瓦のほとんどのものは、53図5のように返りが凹面につくが、54図4のように凸面側につくものがある。これらはいずれも薄手で瓦質のものが多い。これについては、茅葺屋根の棟の頂部に乗せる「雁振瓦」と考えたい。『矢加部町遺跡Ⅰ』では32図8・10・11、33図9、67図5～9、68図4、69図5・6がこれにあたり、6は端部につくものだろう。

注

1 福岡県教育委員会「上北島野町下遺跡」『上北島野町下遺跡 上北島川原田遺跡 常用前野遺跡 津島餅町遺跡3次調査』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第13集

参考文献

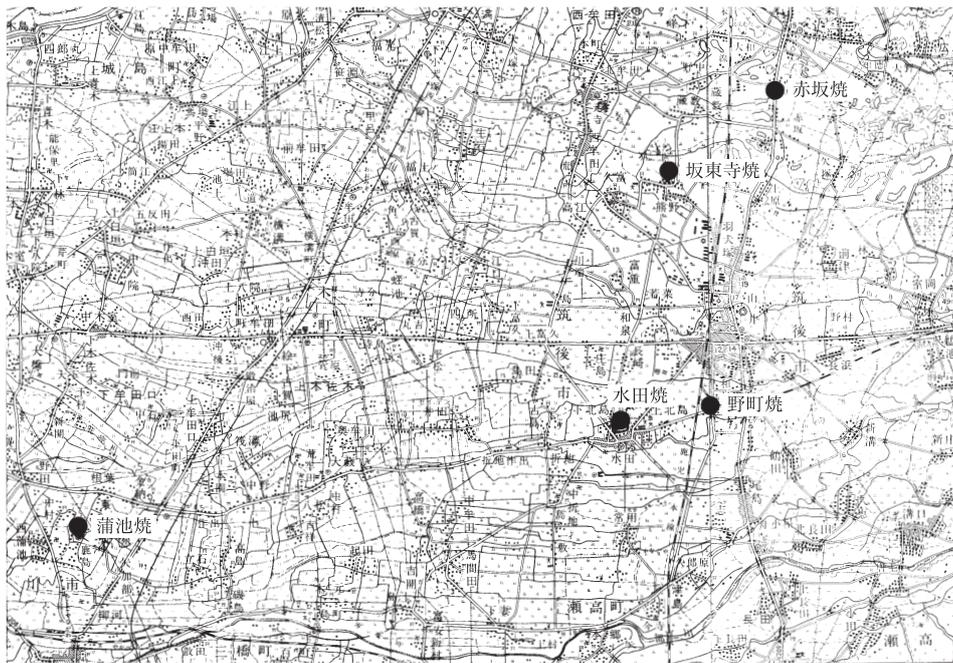
北九州教育文化事業団1994『森山遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第154集

福岡市教育委員会2000『上月隈遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第633集

福岡県教育委員会2007『矢加部町屋敷遺跡I』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集

渡辺 誠 1992「焼塩壺」『江戸の食文化』吉川弘文館

小川 望 1992「大名屋敷出土の焼塩壺」『江戸の食文化』吉川弘文館



第111図 筑後地域の土師質土器窯分布図(1/100,000)

圖 版



5图5



5图8



5图10



5图12



5图17



6图3



6图5



6图12



6图14



6图15



6图9



7图4



7图18



8图8



9图19



10图22



11图1



6图1



12图6



12图7



14图13



18图5



14图14



20图10



12图13



14图18



20图20



13图9



14图26



21图1



15图3



21图2



14图1



15图10



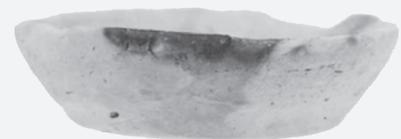
14图2



21图4



21图9



14图7



21图5



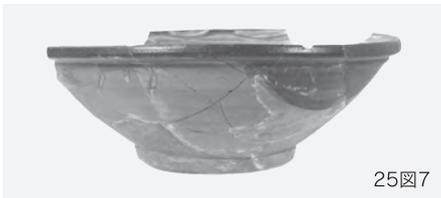
21图7



21图14



22图5



25图7



24图12



22图7



28图1



31图3



23图7



28图12



31图10



23图12



30图12



33图4



23图16



30图19



33图11



24图8



30图24



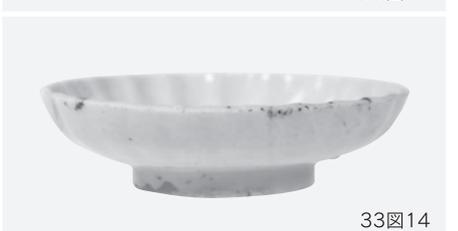
33图13



24图9



30图25



33图14



25图9



31图2



34图15



33图15



33图17



34图2



34图9



34图10



34图11



34图13



34图17



34图18



34图19



34图20



34图21



34图22



35图1



35图3



35图6



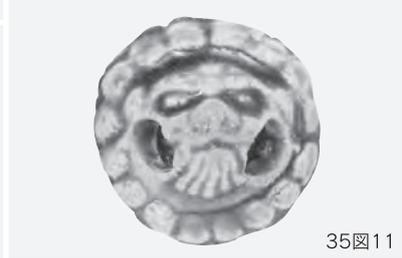
35图7



35图9



35图10



35图11



35图12



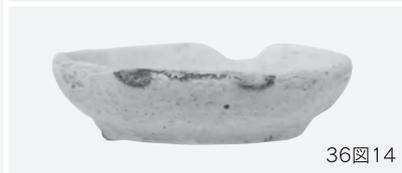
35图13



35图14



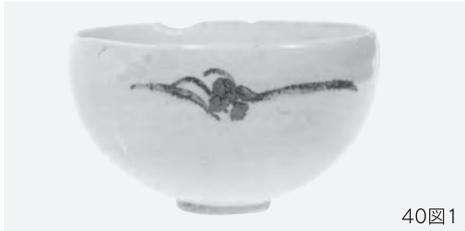
35图16



36图14



37图3



40图1



40图3



40图5



40图9



41图4



42图8



44图1



44图13



45图5



45图6



45图8



45图9



45图12



45图13



45图15



45图20



45图21



47图7



47图8



47图9



47图10



47图16



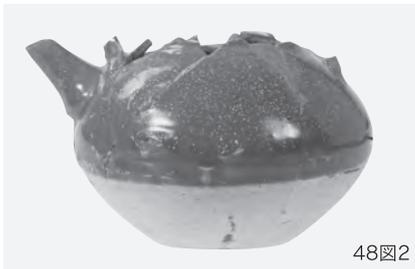
48图1



48图9



47图17



48图2



49图4



47图20



48图3



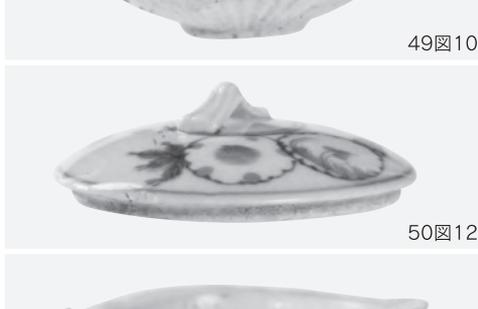
49图6



50图11



48图4



49图10



51图4



48图5



50图12



52图2



48图6



50图19



52图4



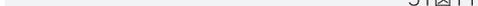
48图7



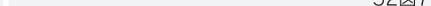
51图7



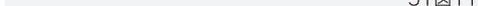
52图5



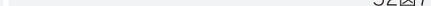
51图9



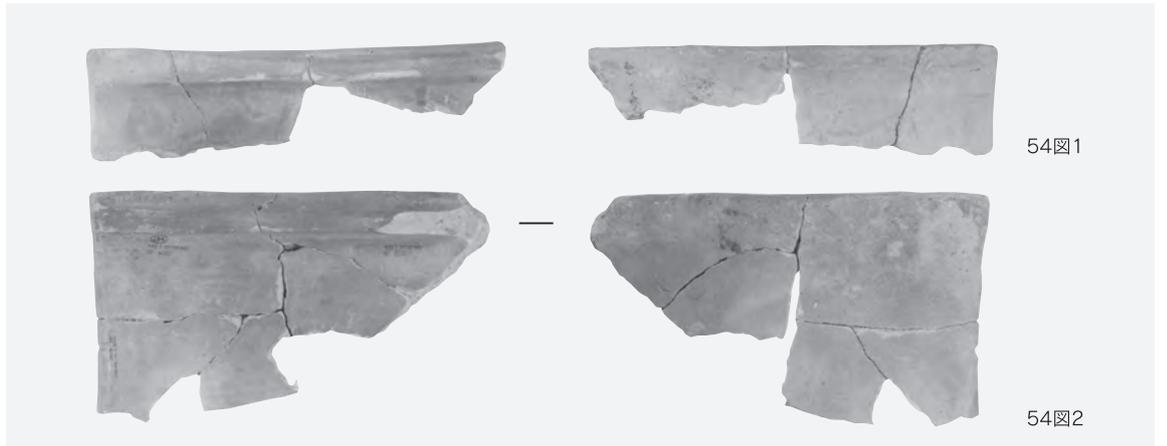
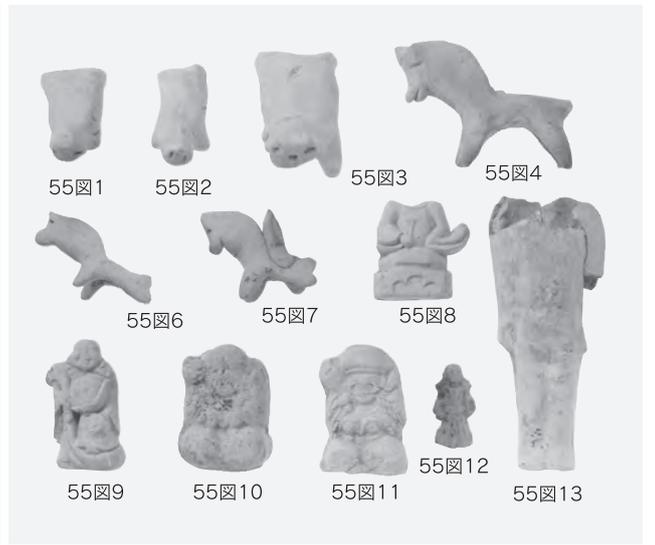
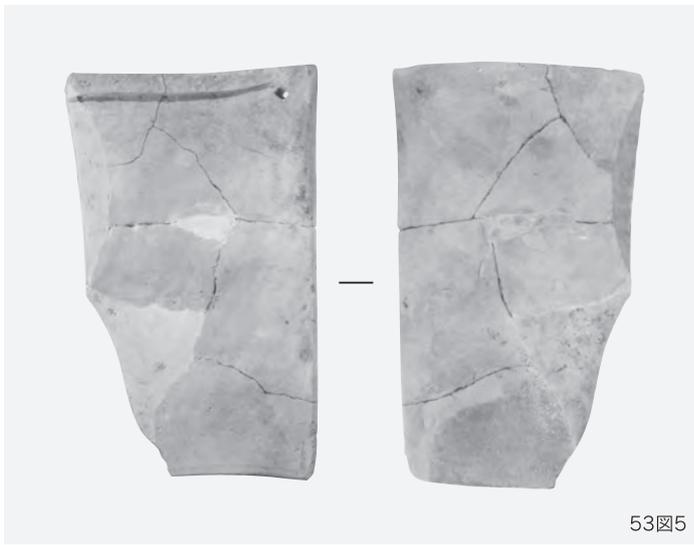
52图6



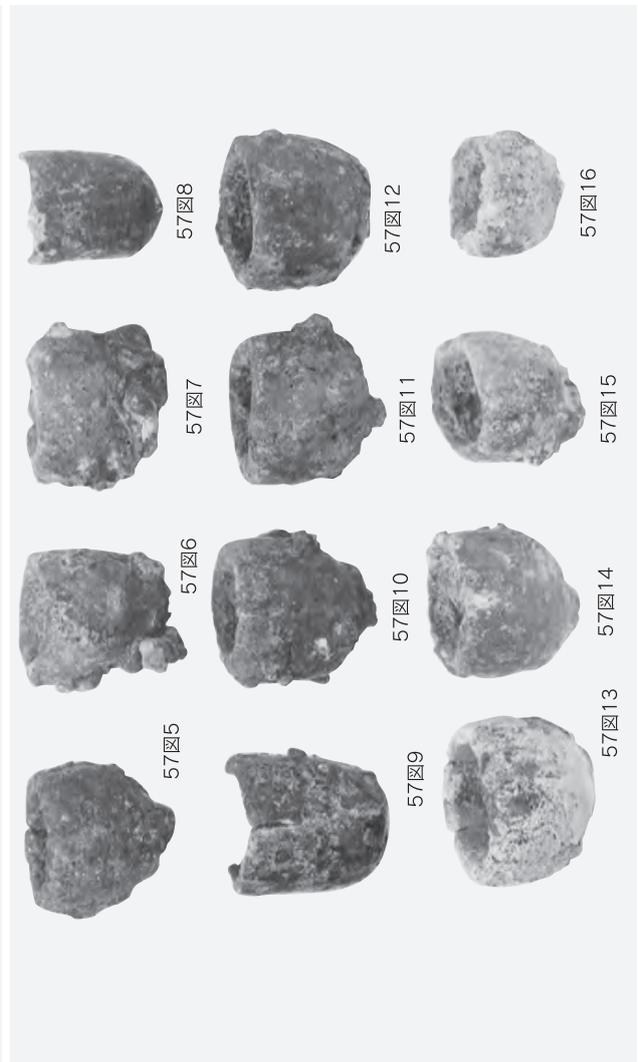
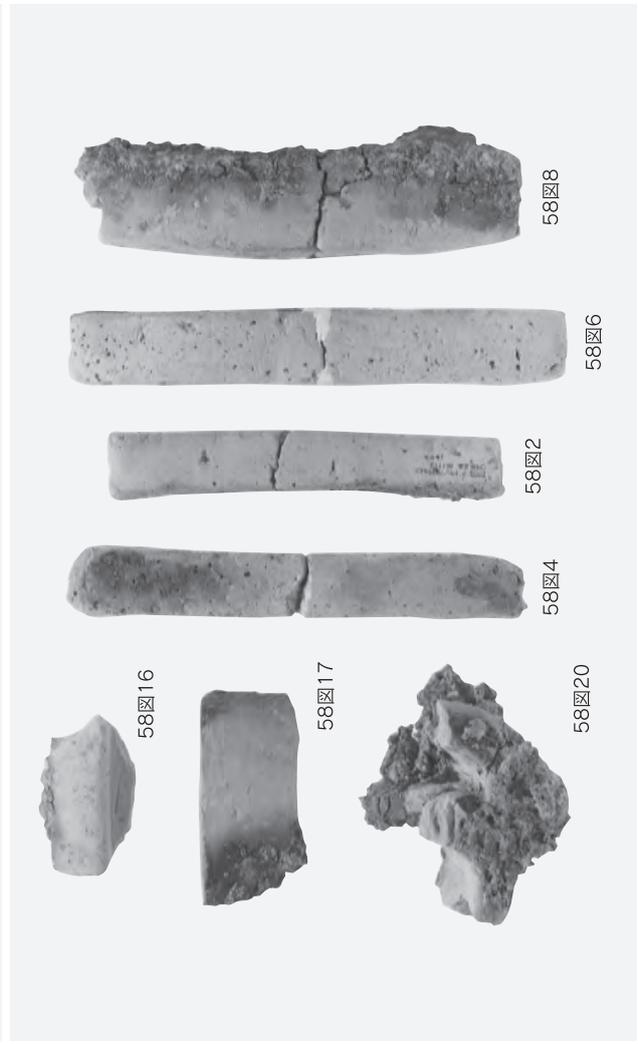
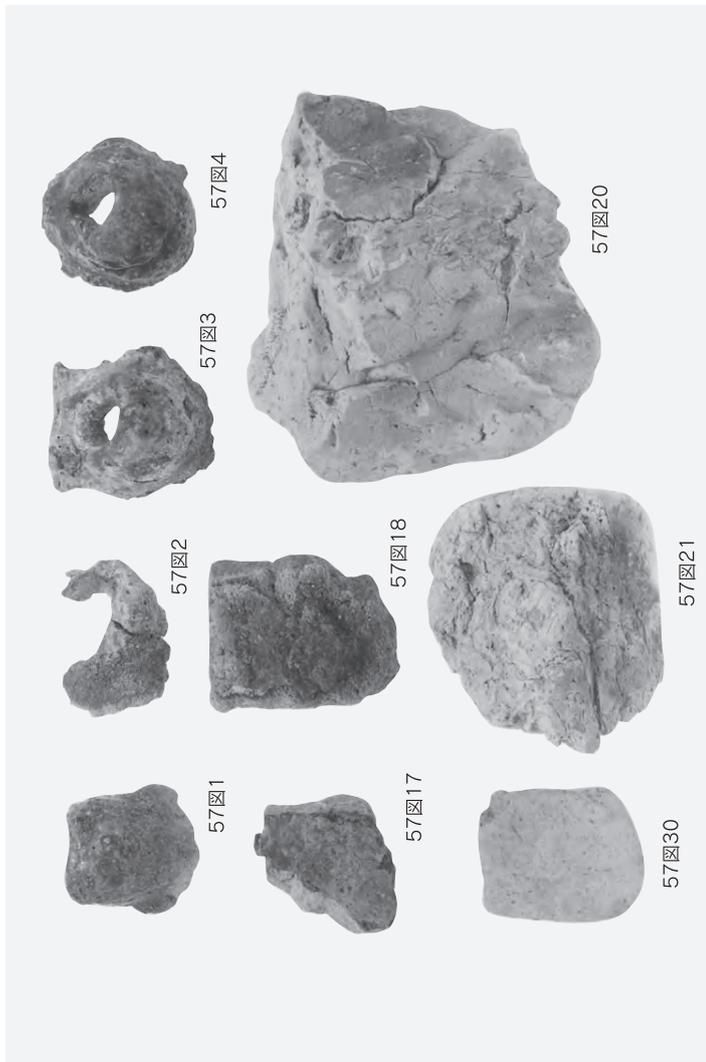
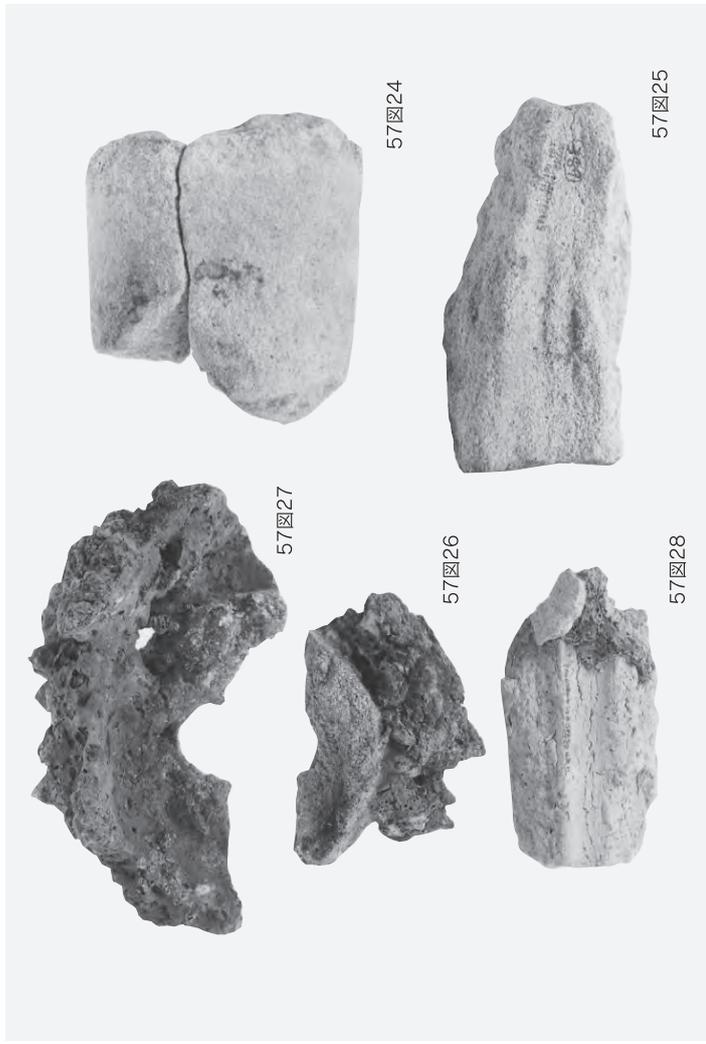
51图11

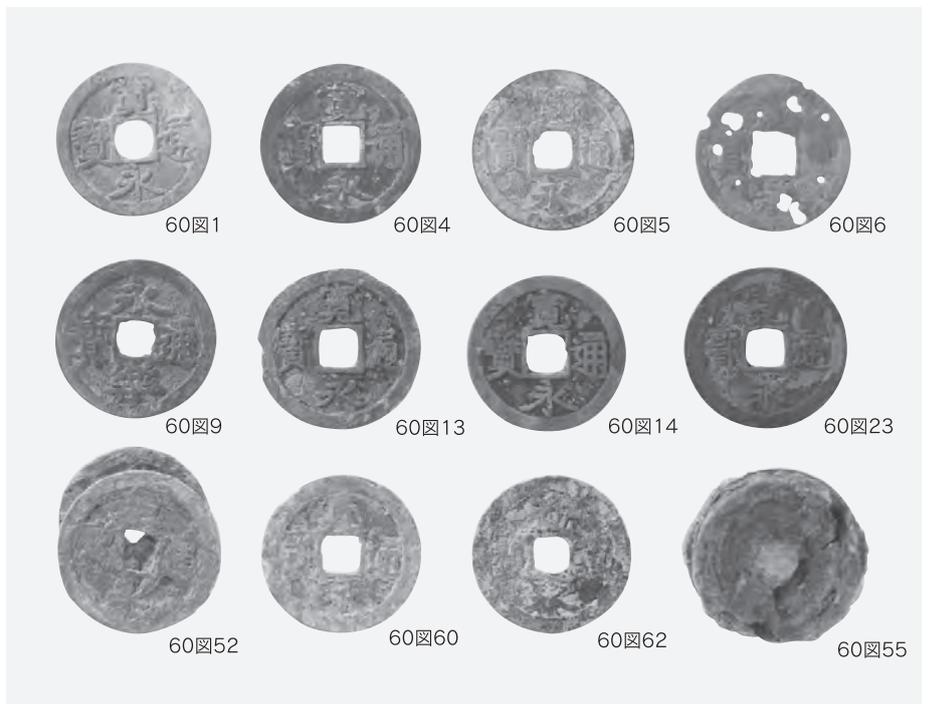
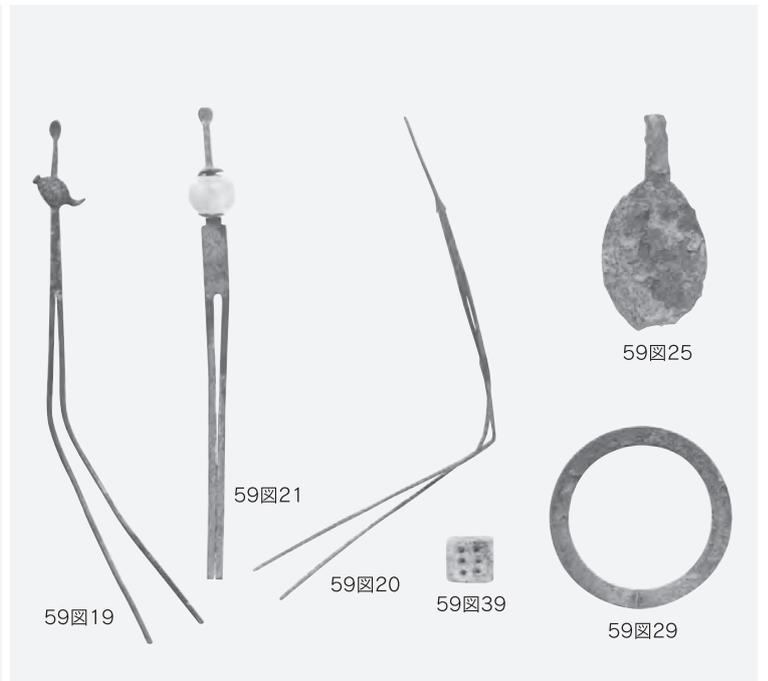
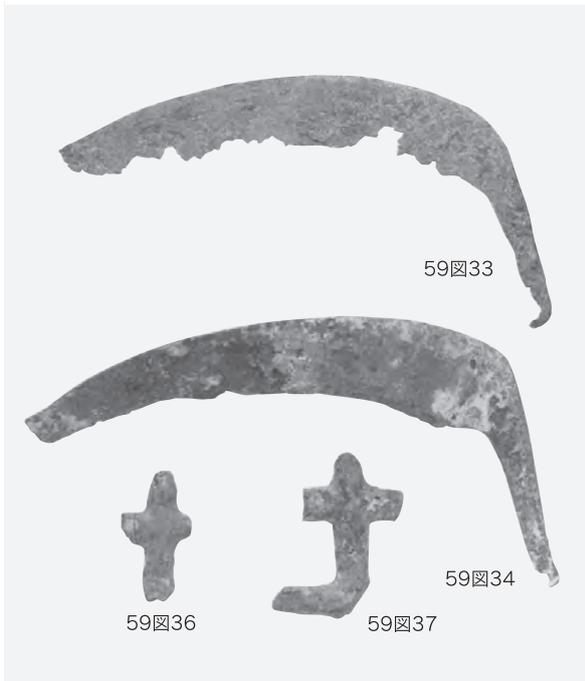
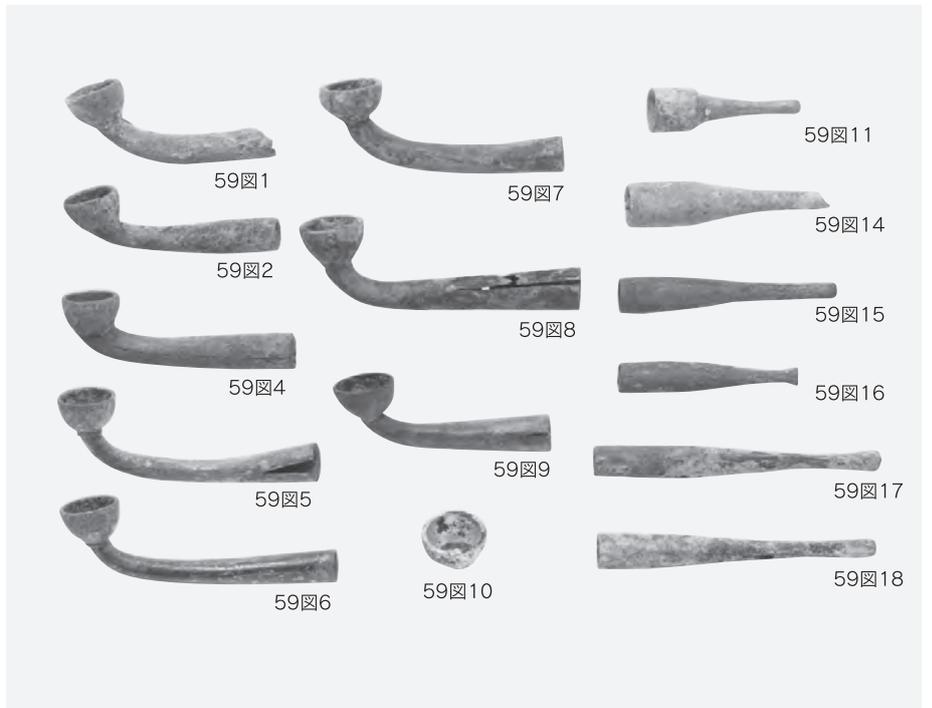


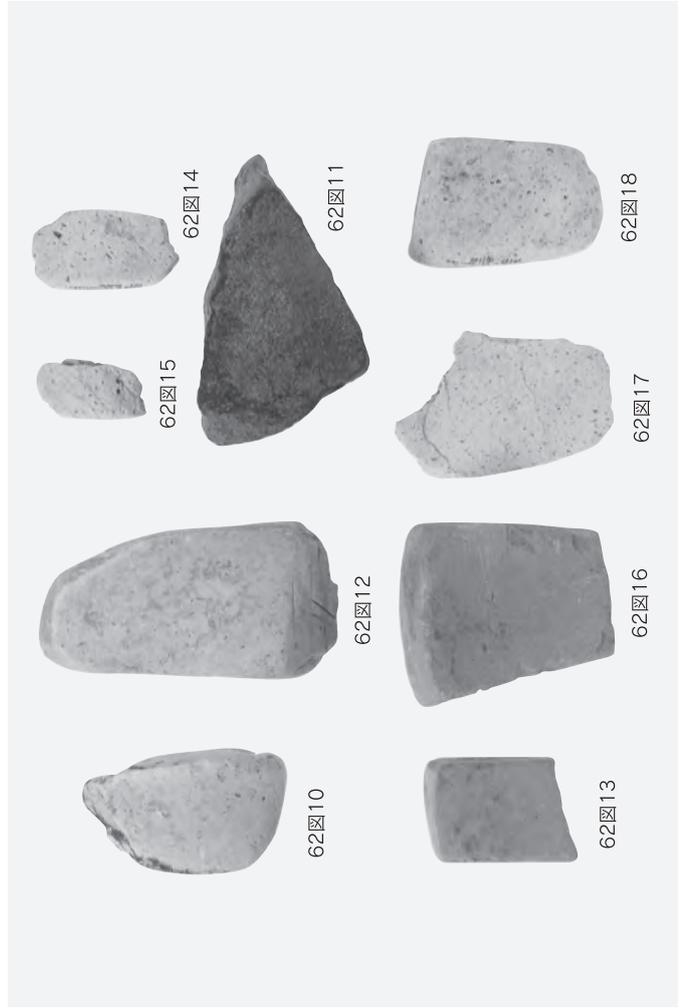
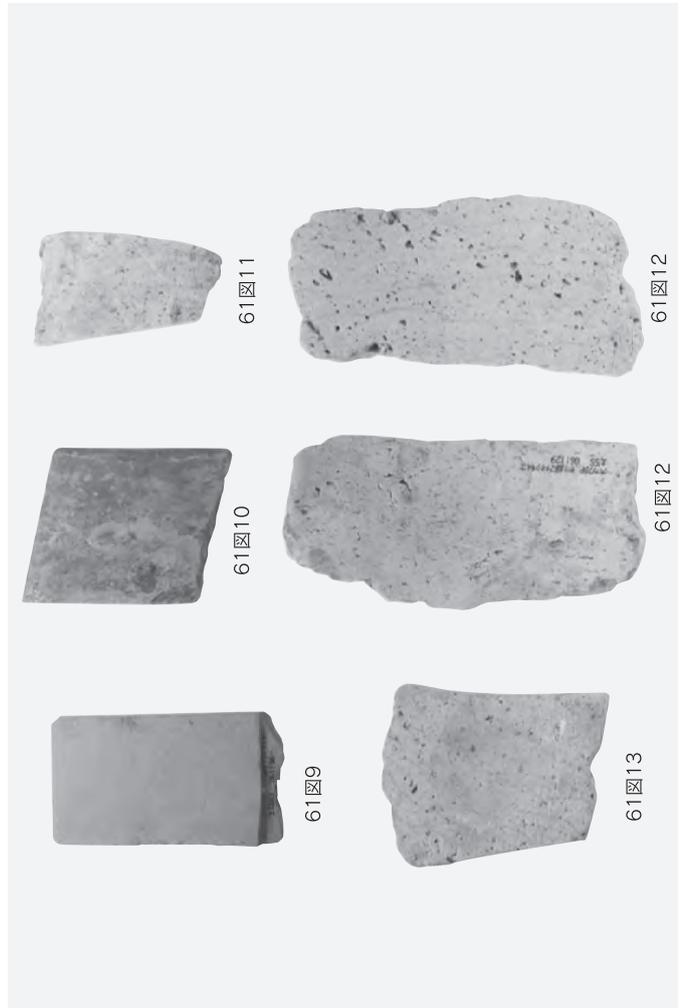
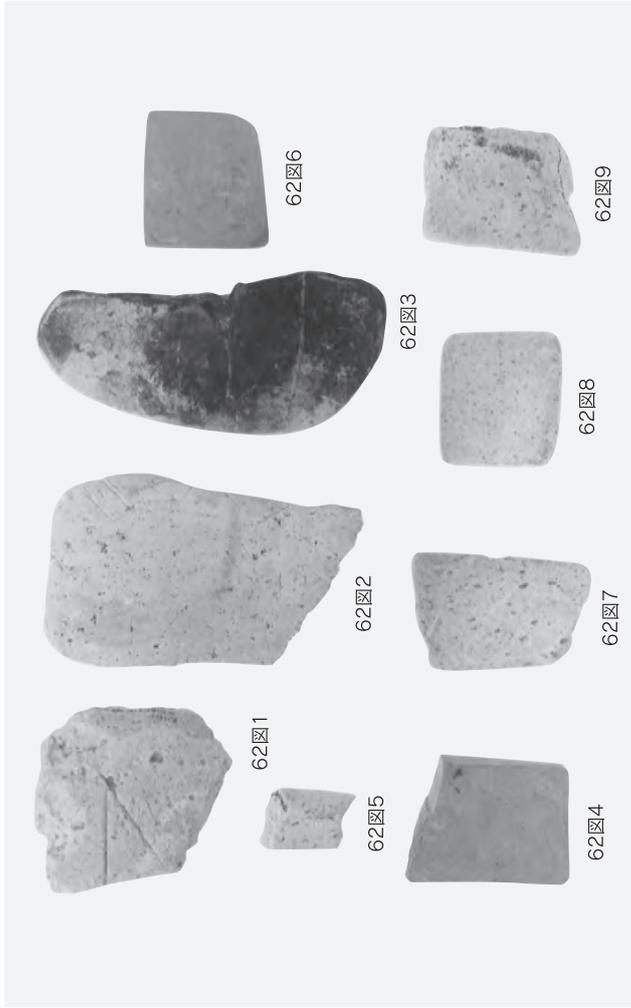
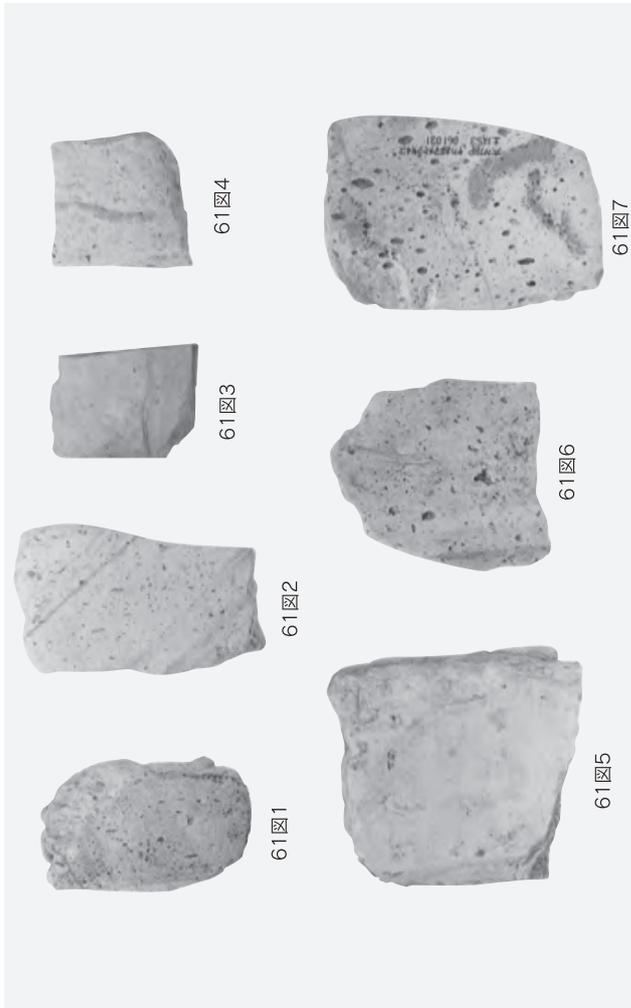
52图7

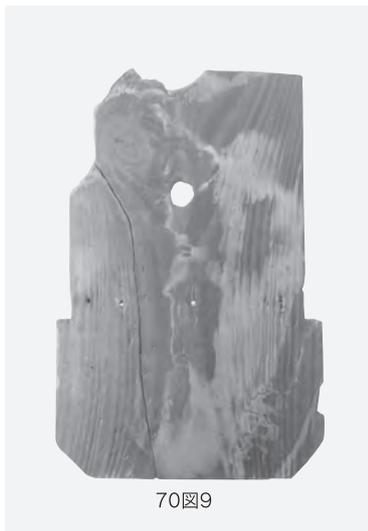
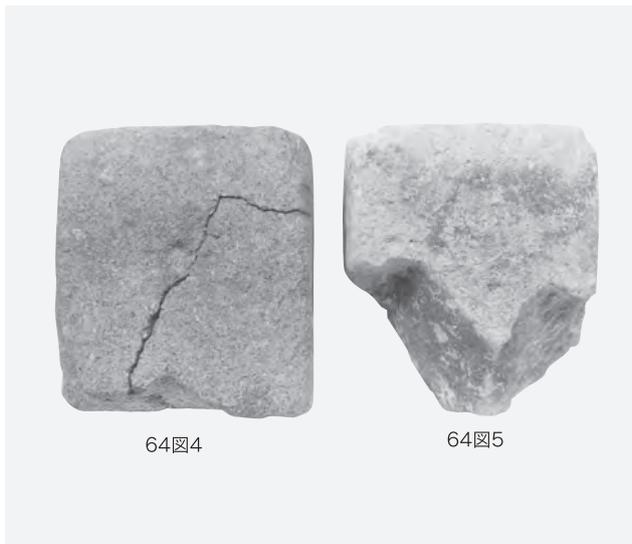
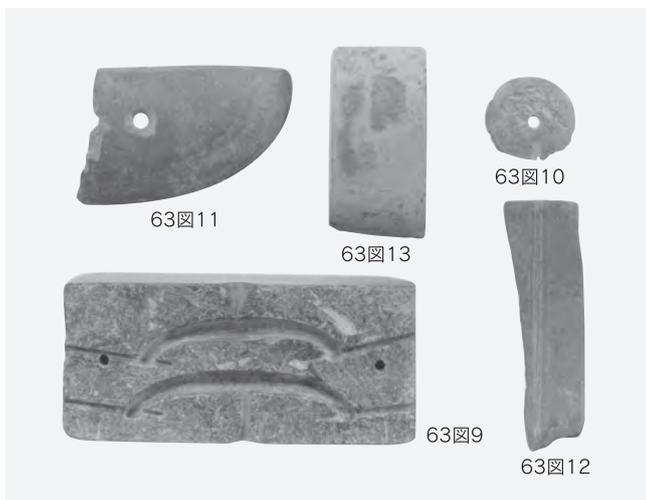
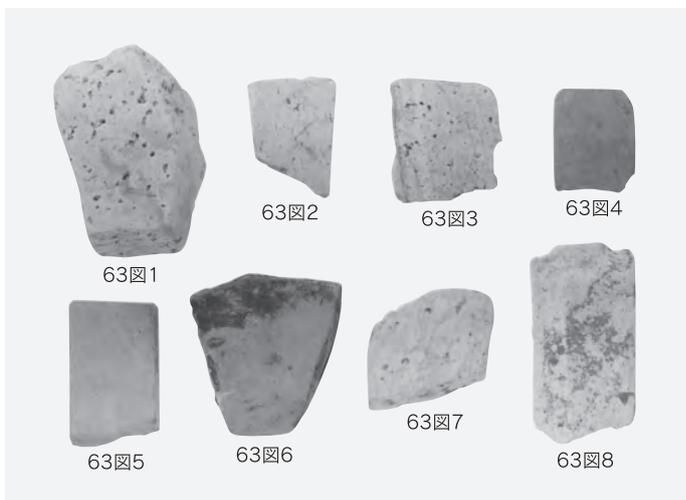


4次調査西区出土瓦・土製品・ガラス製品







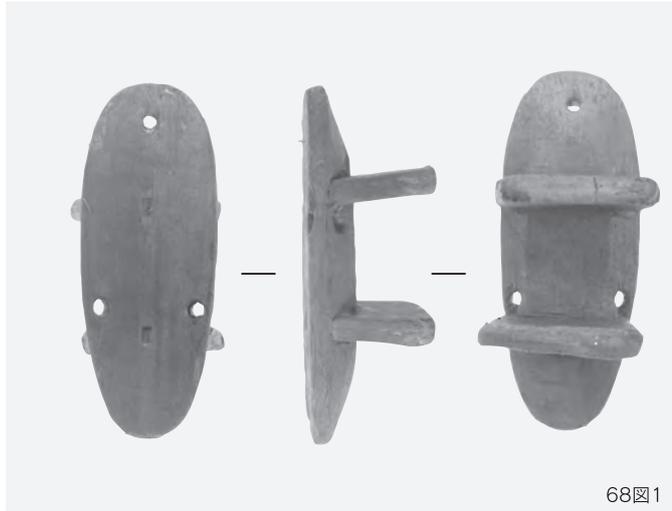




表



裏





1. 矢加部町屋敷遺跡 4次東区全景 (上空から)



2. 同上西部 (上空から)



1. 94号土坑 (南から)



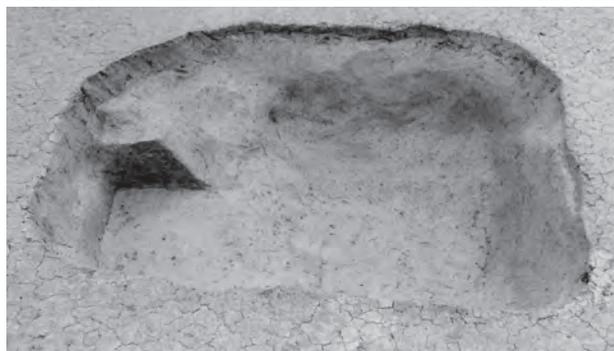
2. 94号土坑土層断面 (南から)



3. 95号土坑 (南から)



4. 95号土坑土層断面 (南から)



5. 96号土坑 (西から)



6. 96号土坑土層断面 (南から)



9. 98号土坑 (南西から)



10. 同上土層断面 (南から)





1. 99号土坑（東から）



2. 100・101号土坑（上空から）



3. 101号土坑竹柵出土状況
（東から）



1. 101号土坑木組遺構出土状況（西から）



2. 同左（北から）



3. 101号土坑土層断面（南から）



4. 10号溝状遺構土層断面（北から）



79图19



91图7



91图8



84图6



91图10



96图2



84图14



91图12



96图3



87图5



92图14



88图15



95图3



96图4



90图7



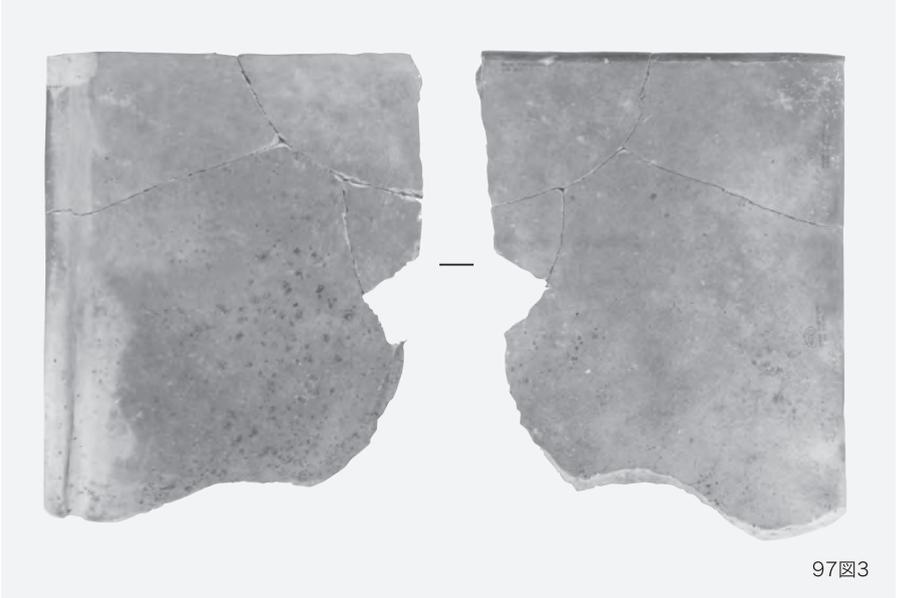
96图1



96图9



91图2



97图3



99图38



100图2



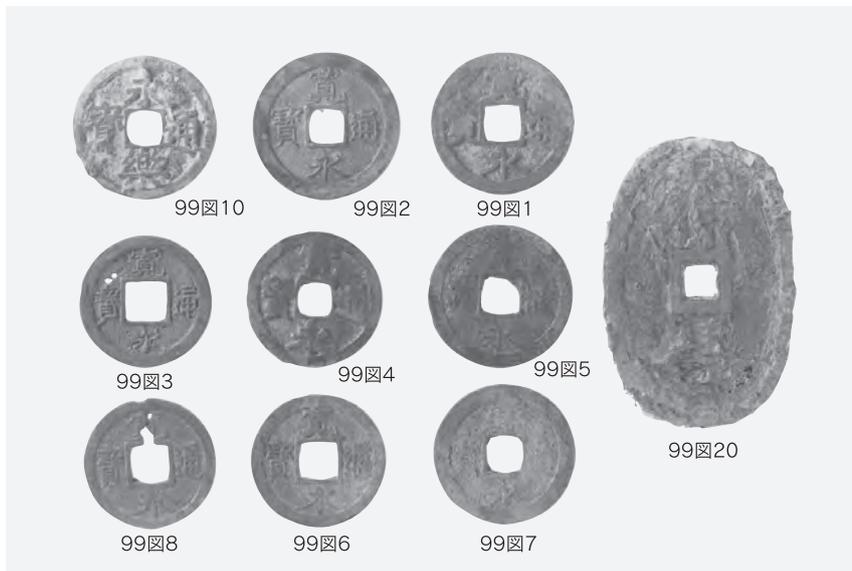
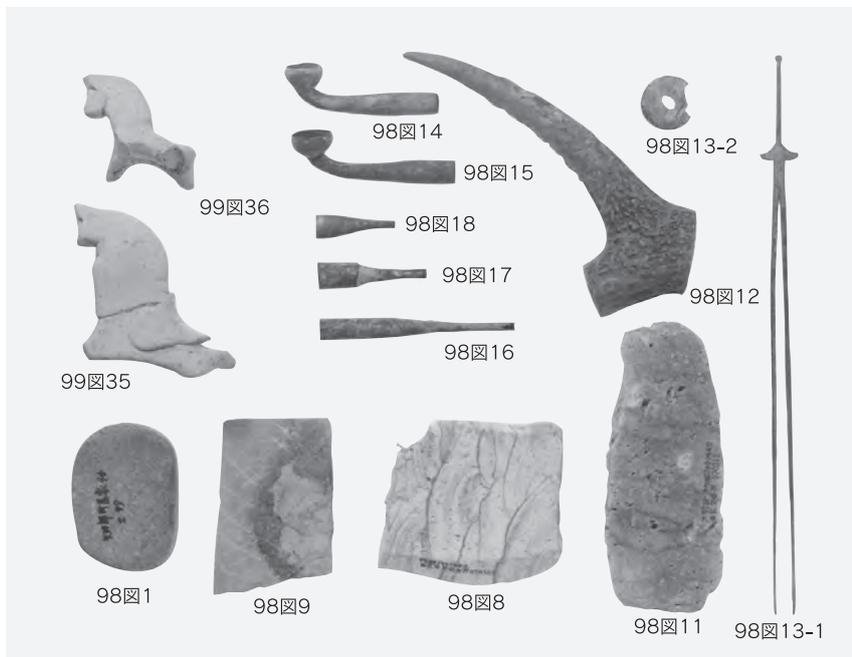
100图4



100图7



100图8

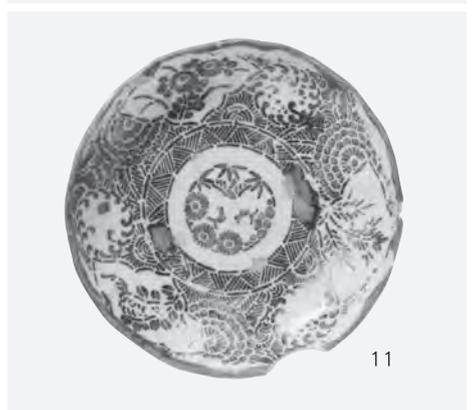
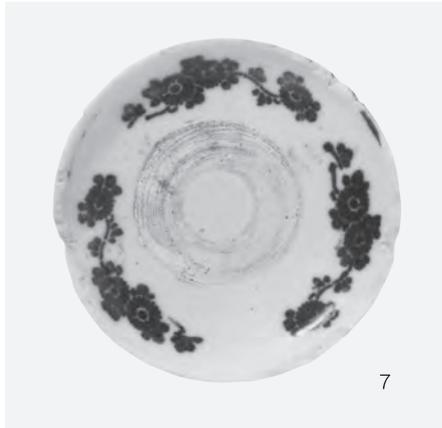


100图14



100图10

100图11





1. 矢加部町屋敷遺跡
5次調査北半全景
(上空から)



2. 同上南半全景
(上空から)



3. 同上西部 (上空から)





1. 1号土坑 (上空から)



2. 2号土坑 (東から)



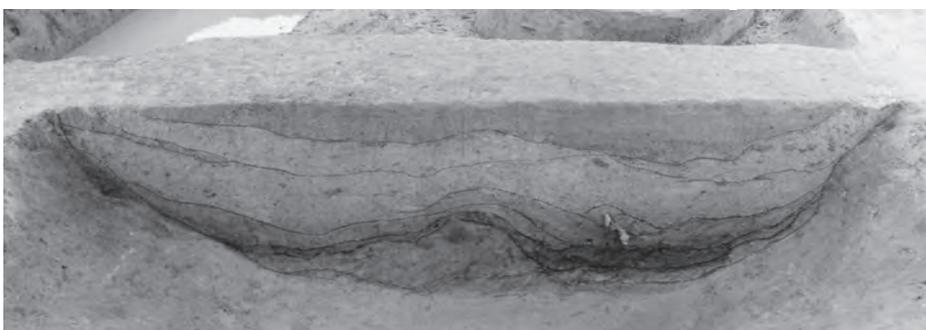
3. 3号土坑 (北東から)



5. 7号土坑 (上空から)



4. 5号土坑 (北西から)



6. 7号土坑土層断面
(東から)



1. 8号土坑 (南西から)



2. 9号土坑 (西から)



3. 10号土坑 (南西から)



5. 12号土坑北東部 (西から)



4. 11号土坑 (南東から)



7. 13号土坑 (北西から)

6. 12号土坑土層断面
(北東から)





1. 14号土坑（南東から）



4. 16号土坑北西部（北東部）



2. 14号土坑土層断面（南東から）



5. 16号土坑土層断面（北東から）



3. 15号土坑（南東から）



6. 17号土坑（南から）



7. 17号土坑土層断面（南から）



9. 19・20号土坑（北東から）



8. 18号土坑（北西から）



1. 20号土坑 (北から)



2. 21号土坑 (北から)



3. 22号土坑 (北から)



4. 23号土坑 (北東から)



5. 24号土坑 (東から)



7. 25号土坑 (南東から)



6. 24号土坑土層断面 (北から)



8. 1号溝状遺構土層断面 (東から)



1. 1号大土坑（上空から）



同上（北西から）

報告書抄録

ふりがな	やかべまちやしきいせき
書名	矢加部町屋敷遺跡Ⅲ
副書名	
巻次	
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第11集
編著者名	秦 憲二
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号
発行年月日	西暦2011年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
やかべ 矢加部 まちやしきいせき 町屋敷遺跡 4・5次調査	ふくおかけんやながわし 福岡県柳川市 おおあざやかべあざ 大字矢加部字 まちやしき 町屋敷	402079	140392	33° 10' 46"	130° 24' 47"	2007.2.5～ 2007.3.28 2007.6.5～ 2007.9.25	650㎡	国道 バイパス

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
矢加部町 屋敷遺跡 4・5次調査	集落	江戸 明治 大正 昭和	土坑 34 大土坑 1 溝状遺構 5	土師器 瓦質土器 陶磁器瓦 窯道具 建築材	ガラス製品 銅銭 木製品 下駄 藩境木部材	キセル るつぼ 土人形 鋳型 藩境木部材	藩境木の部材 近世の鋳造関係遺物・鋳型

遺跡の概要

本遺跡は江戸時代の町屋跡の端部にあたり、17世紀中葉から現代にいたる遺構・遺物が見られ、連続と集落が営まれていたことが分かった。町屋の中心部分は今次調査区の東側の久留米柳川街道沿いであり、その通りに面して並ぶ建物群の裏手にあたる。

18世紀中葉から飛躍的に遺物が増加し、多くの土器・陶磁器類が出土したが、なかでも鋳造関係の遺物が注目される。また、近世の筑後地方に見られる土師質の瓦や窯道具も多量に出土している。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 22	登録番号 5

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第11集

矢加部町屋敷遺跡Ⅲ

平成23年(2011年)3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 マツオ印刷株式会社
福岡県嘉麻市上山田407番地